

石上優はやり直す

石神

3年生を送り出す卒業式も無事終わり、春休みを控えたある日の帰り道……石上優は伊井野ミコを暴走車から庇い、その生涯に幕を下ろした……が！次の瞬間意識は再覚醒！時は中学時代、あの忌まわしい事件が起こる半年前！石上は過去をやり直す事が出来るのか!?

※大仏こばち編完結

※龍珠桃編完結

※伊井野ミコ編完結

※藤原千花編完結

※柏木渚編完結

※早坂愛編完結

目次

中等部編

石上優は幕を下ろす	1
石上優は決意する	5
石上優は動き出す	10
石上優は思い出す	16
大仏こぼちは救われる	20
伊井野ミコは突き止めたい	27
石上優は手伝いたい	41
石上優は出会いたい	48
石上優は出会えない	54
石上優は思い付く	61

伊井野ミコは聞き出したい	67
石上優はダラけたい	73
石上優は夢を見る	82
見上げる夜空は変わらない（前編）	87
見上げる夜空は変わらない（後編）	94
石上優は呼び出す	101
石上優は断罪する	106
石上優は忘れない	113
風紀委員は逃げ出したい	119
荻野コウは逃げられない	126
小野寺麗は探りたい	136
風紀委員は確かめたい	143
石上優は見つけない	152

石上優は逃れたい	158
石上優は準備する	165
文化祭を楽しみたい	169
石上優は眠りたい	178
小野寺麗は聞いてみたい	184
奉心祭は終わらない（前編）	192
奉心祭は終わらない（後編）	198

高等部編

高等部入学式	205
生徒会は見極めたい	211
石上優は受からせたい（番外編）	217
早坂愛は調査する	228
龍珠桃は告げられない	234

龍珠桃は無二を得る	239
生徒会は集結する	247
四条眞妃は相談したい	258
石上優は行きたくない	264
バレンタインを贈りたい① (番外編)	269
バレンタインを贈りたい② (番外編)	275
生徒会はまだしてない	282
四宮かぐやは絆されない①	289
四宮かぐやは絆されない②	297
柏木渚は話したい	303
柏木渚から逃げたくない	311
藤原千花はわからせたい①	322
藤原千花はわからせたい②	329

伊井野ミコは取り締まれない	336
勘違いは止まらない	346
四宮かぐやは絆される	355
マスメディア部員は騒がしい	363
偶には雨に感謝したい	375
四宮かぐやは相談したい	384
生徒会は出掛けたい	395
それぞれの夏休み①	404
それぞれの夏休み②	413
それぞれの夏休み③	424
白銀御行は気が気じゃない(番外編)	436
√A・仏の小鉢編	443
二期突入	443

大仏こばちは気になる	457
四条眞妃は惚氣たい	466
生徒会は終わらない	474
小野寺麗は応援したい	482
伊井野ミコは入りたい	490
大仏こばちは近付きたい	502
四宮かぐやは防ぎたい	512
生徒会は話したい	520
石上優は参加したい	530
石上優は確かめたい	540
秀知院体育祭！	551
伊井野ミコは癒されたい	562
合コン遊戯に興じたい	574

生徒会は勉強したい	584
石上優は攻めたい	593
恋する少女は話したい	601
大仏こばちは攻めてみたい	609
文実委員は煮詰めたい	621
祭りの準備は慌ただしい	631
石上優は誘いたい	643
大仏こばちは仮面を被る	654
奉心祭①	664
奉心祭②	674
大仏こばちは間に合わない	681
大仏こばちは帰りたくない	689
奉心祭の夜に	699

想い想われ、呼び呼ばれ……………

石上優は策を講ずる……………

石上優は伝えたい……………

大仏こばちを守りたい……………

石と小鉢のエピローグ……………

仏の小鉢after①……………

仏の小鉢after②……………

仏の小鉢after③……………

√B・龍と黒白の珠編

龍珠ルート突入……………

星天の霹靂……………

極道少女と妄想乙女……………

龍珠桃は阻止したい……………

ゲームセンターで遊びたい	824
石上優は渡したい	833
生徒会と取材と〇〇と	842
2度目の再会	850
龍の眠りと燕の問い	857
龍の嫉妬と独占欲	864
そして少女は踏み出した	872
石上優は相談したい	882
石上優は捕まえない	890
想いの吐露	900
彼女の誘いと体育祭	910
龍珠家訪問	919
不幸な勘違い	935

悪意の矛先と踏む地雷……………

聞き込み調査とアドバイス……………

無言の帰り道……………

石上優の自己満足……………

たったひとつの馬鹿なやりかた……………

龍の許しは頂けない……………

石と龍のエピローグ……………

龍と黒白の珠after①……………

龍と黒白の珠after②……………

龍と黒白の珠after③……………

√C・皇女の御心編

伊井野ミコは勝ち取りたい……………

伊井野ミコを嗤わせない……………

伊井野ミコを馴染ませたい……………

マスメディア部員は確かめたい……………

伊井野ミコは測りたい……………

後輩達を焚き付けたい……………

藤原千花は証明したい……………

ハロウィンを楽しみたい……………

石上優は誤魔化したい……………

大友京子はアピラせたい……………

藤原千花は関わりたい……………

伊井野ミコは気付かない……………

伊井野ミコは離れたい……………

石上優は傍に居たい……………

風邪の功名……………

ミコの御心……………

石と皇女のエピローグ……………

皇女の御心 after ①……………

皇女の御心 after ②……………

皇女の御心 after ③……………

遙か遠き理想像(番外編)……………

√ F・藤の千花編

藤原千花は主張したい(番外編)……………

藤原千花は贈りたい……………

藤原千花は問い詰めたい……………

藤原千花は塞ぎたい……………

解散、打ち上げ、再始動……………

藤原千花は認めない……………

藤原千花は救いたい……………

ラブ探偵は連れ回したい……………

藤原萌葉は確かめたい……………

藤原千花は調べたい……………

四宮かぐやは探りたい……………

石上優は起きれない……………

石上優は考えたい……………

藤原千花は誘いたい……………

北高文化祭を回りたい……………

石と藤のエピローグ・・・・・・・・・・・・・・・・

藤の千花 after ①・・・・・・・・・・・・・・・・

藤の千花 after ②・・・・・・・・・・・・・・・・

藤の千花 after ③・・・・・・・・・・・・・・・・

○ ○ √ after ?・・・・・・・・・・・・・・・・

√ X・柏鬼の角折り編

石上優は逃げられない・・・・・・・・・・・・・・・・

石上優は拒否出来ない・・・・・・・・・・・・・・・・

四条帝は知りたくない・・・・・・・・・・・・・・・・

柏木渚は教えたい・・・・・・・・・・・・・・・・

柏木渚は見逃さない・・・・・・・・・・・・・・・・

柏木渚はイジメたい・・・・・・・・・・・・・・・・

柏木渚は問い詰めたい……………

柏木渚は威嚇したい……………

柏木渚は誓いたい……………

柏木渚は認めない……………

柏木渚は耐えられない……………

そして柏木渚は目を閉じた……………

四条真妃は戒めたい……………

石と柏のエピログ……………

柏鬼の角折りafter①……………

柏鬼の角折りafter②……………

柏鬼の角折りafter③……………

○○√プロログ……………

√ I・愛の真影編

早坂愛は食べさせたい……………

早坂愛は語りたい……………

早坂愛は探りたい……………

早坂愛は話したい……………

石上優は聞けない……………

早坂愛は解消したい……………

早坂愛は撮りたい……………

早坂愛は逆らえない……………

早坂愛は守りたい……………

早坂愛は捨て去りたい……………

石上優は捨てさせない……………

早坂愛は戯りたい……………

藤原千花は応援したい……………

早坂愛は叫びたい……………

早坂愛は気付かれない……………

早坂愛はわからない……………

早坂愛は気付かない……………

早坂愛は耐えられない……………

早坂愛は実現したい……………

早坂愛は謝りたい……………

石上優は仕掛けたい①……………

石上優は仕掛けたい②……………

早坂愛は頑張りたい・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2095

早坂愛は見せ付きたい・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2109

石上優は回りたい・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2124

早坂愛は受け入れたい・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2138

石と愛のエピローグ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2154

愛の真影 after ①・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2173

愛の真影 after ②・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2194

愛の真影 after ③・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2210

中等部編

石上優は幕を下ろす

視界が真っ赤に染まっている……

伊井野が泣きながら何か言っているみたいだけど、何も聞こえない……

一瞬……なんでこんな状況になっているのかわからなくなったが、直ぐに理解する。

生徒会の仕事帰り、伊井野を送って行く途中の横断歩道で車が猛スピードで此方に向かって来るのが見えた。

伊井野は僕に対する小言に夢中で気付いていない。

声を出すよりも早く体が動いていた……僕は伊井野を向かって来る車の直線上から突き飛ばした。

……別に死ぬつもりで助けた訳ではなかった。

伊井野を突き飛ばした後に避けるつもりだった。

だが、僕の体は次の瞬間凄まじい衝撃を感じ宙を舞った。痛みを感じなかったのは不幸中の幸いだろうか……いや、仮に痛みを感じていても僕の体を駆け巡るのは別のモノだろう。

……今僕の体を駆け巡っているのは、どうしようもない程の後悔だった。

僕を暗い闇の中から救い出してくれた会長……

だらしがなく自分に甘い僕に匙を投げず、勉強を教えてくれた四宮先輩……

僕みたいな口が過ぎる後輩に遠慮なく言いたい事を言い、やりたい放題して対等に渡り合ってきた藤原先輩……

悪い噂のあった僕にも分け隔てなく接してくれたつばめ先輩……

思い出せばキリがないと言える程、僕の脳内を後悔が駆け巡って行く……

眞妃先輩が、翼先輩が……

団長が、大仏が、小野寺が……

そして何より、目の前で此方に向かって必死に叫んでいる少女の事が……

その小さな体には不釣り合いな正義感と責任感がある。

彼女は確実にこの出来事を気に病むだろう。体は動かないが口さえ動けば良い……この体に最後の仕事をさせよう。そう決意し、僕は最後のチカラを振り絞った。

「いっ…伊井……野っ……！」

「っ!? いっ……石上!? ご、ごめんなさい!! わ、わたっ……私っ!!」

「ぐうっ!? お、お前はっ…悪く……ない！」

「っ!!!?」

言った、なんとか言い切れた……まるで言い終わるのを待っていたように途端に
瞼が重くなる。

徐々に小さくなる視界に最後まで映っていたのは、子供の様に泣きじゃくる……
伊井野の姿だった。

「ん……あれ？」

意識が覚醒すると、始めに感じたのは違和感だった。

さっきまで僕は道路に倒れていた筈だけど……体の何処にも痛みを感じないし、
そもそも此処は……教室？

では、先程までの出来事は全て夢だったのか？
しかし、未だ妙な違和感は拭えない……

「……！」

教室を見渡すと、その違和感の正体に気付いた。

此処は……高等部の教室じゃない!?

この場所は……

「石上君、もう皆帰っちゃったよ？」

トントンと肩を叩かれ、声の主に視線を向ける。

「ッ!?! お、大友っ!?!」

もう会う筈がない……もう向けられる筈がない、その笑顔に確信する。

間違いない……中学の時に戻ってる!!

石上優は決意する

感想ありがとうございます。((ァ ァ)).

僕の様子に？マークを浮かべる大友をなんとか躲し、逃げるように自室に逃げ込んだ。

なんなんだコレは!? 事故って過去に戻るとか……ラノベかよ!!

いや、そりゃ逆行モノのラノベとかも読んでたし、少しはいいなあと思ったよ？ 思ったけど!!

……まさか自分が直に体験するとは思わなかった。

自室を見渡すと当たり前の様に高校の制服は無く、部屋に置いてある漫画やゲームのラインナップも中学時代のモノだった。

今更過去に戻った事を疑いはしない……僕が死んだのが夢で、それ以外が壮大なドッキリだったとしても……大友が僕に笑いかけたという事実がソレを否定する。

過去に戻ったのは間違いない……

壁に掛けられたカレンダーに目をやると4月と表示されている。

ポケットに手を入れ、スマホを取り出し確認する。

中学だから少し型の古い機種だ……入学式から1週間経った頃か。

「ふうー……」

息を吐きながら思い出す。

自分を暗闇から引っ張り出してくれた会長の言葉と自分の思考が交互に浮かんで来る。

正しい正しくないを論じるつもりはない

今はあの事件の半年前……

もっとスマートなやり方があったのは事実だ

もしかしたら、やり直す事が……出来るかもしれない？

頑張ったな石上……

……違う、やり直すんだ。

よく耐えたな

会長は言ってくれた……

お前はおかしくなんてない！

やり直すんだ、大友を荻野から救う！

もし、あの事件がなければ会長達と僕との接点は消えるだろう……

生徒会役員が生徒会長の指名制である以上、高等部に進学しても僕が再度生徒会に入れる保証はない。

……まあもし生徒会に入れなくても、さり気なく会長と四宮先輩のフォローをしよう。

今思えば……あの2人は僕が生徒会に入った頃から既にお互いを意識していた様な気がする。

巻き戻ったこの人生では、あの言葉を会長から言われる事はないだろう……だからといって会長や……皆に対する恩がなくなる訳じゃない！

「すう、はあー……」

深呼吸をしてこれからやるべき事を頭の中でまとめる。

先ずは僕自身が変わる事。

荻野の件にどう関わるにしても、僕自身が周りから信用されないんじゃないかと結末にしかない。

信用されるには実績が必要だ。先ずは7月の期末テストの成績で上位……出来ればトップ10入りする。

部活動も、陸上部に入り直して最後の大会で結果を出す！

それ以外でも色々やろう。

……不意に、目が覚める直前まで目の前に居た少女を思い出す。

伊井野には悪い事したな……お前は悪くないとは言ったけど、伊井野の性格上絶対気にするよなあ……

「罪滅ぼしじゃないけど、アイツにも何か……」

無意識に呟いた言葉は夕陽に染まった部屋に吸い込まれるように消えていった。

石上優は動き出す

感想ありがとうございます（；∀；）

決意してから石上の行動は早かった。

翌日には陸上部顧問に入部届けを提出した。

顧問は始め、3年で陸上部に入部する事に難色を示す。

既に3年最後の大会まで2ヶ月を切っていたからだ。

しかし、石上の……

「僕が大会に出る実力がないと先生が判断されたら退部します！」

という言葉に溜息を吐きながら……

「そこまで言うならやってみろ」

と許可を出した。

日中は真面目に授業を受け、放課後は陸上部の練習、家に帰ると片付けた部屋で

勉強に打ち込んだ。

二学期期末テストの目から血が噴き出る程の悔しい結果により、石上はそれ以降毎日5時間を勉強に注いでいた。

中学時代最後の半年と高等部最初の数ヶ月は真面目に勉強に励んでいなかった石上だが、それ以降は子安つばめに並び立つ男になる為、そして自分を後押しして支えてくれた四宮かぐやに報いる為、懸命な努力を続けていた。

その結果、三学期期末テストでは念願の50位以内に入るという目標を達成。失敗ばかりで成功例のなかった石上が初めて自信を持つ結果となった。

「……！」

（僕ならやれる！きつと大丈夫だ！）

時間が戻り、その事実が消えても石上が忘れない限りこの自信が消える事はないだろう。

そして突如、部活に入り直し、勉強に励む石上に家族は戸惑った。

今までゲームや漫画を優先し、勉強には力を入れてこなかった息子の変わり様に嬉しいやら驚くやらで動揺する両親。

しかし、石上の発言とそれによる結果により、それどころではなくなった。

「これからのゲームは、携帯ゲームとスマホアプリが主流になると思うよ。例えば……」

そう、この男何を隠そう現在から約2年先のゲーム事情を熟知している！

故にこれからヒットするであろうゲームや玩具の傾向がわかってる!!

まるで見てきたように発言する息子の言葉に父親は生唾を飲み込み聞き入った!!!!

父親は息子の話を聞き終わると、一目散に自室へと走り〈新商品計画書〉と表示された紙に一心不乱にペンを走らせる。

書き込まれた計画書を見下ろし確信する……

コレは当たると。

その後、売り出した商品がヒットし、会社が潤いまくるのは数ヶ月後の話である。軽い気持ちで父親にヒット商品の話をした石上は、もはや逆行前の習慣となった勉強を始める。

それはひとえに周囲からの信用と実績を獲得し、大友京子を荻野の手から守る

為……

しかし……石上のこの努力は数ヶ月後、予想外の方向に裏切られる事を彼はまだ知らない……

そして……2ヶ月後。

石上は期末テスト結果の貼り出された掲示板の前にいた。

中等部も高等部同様、上位50名は名前が貼り出される為、結果を見ようとする生徒でごった返している。

「……」

（相変わらず凄いな……）

一位 伊井野ミコ（490）

馴染みのある名前を目にしフツと笑みが零れる。

「……」

（でも、コレは……予想外だったな）

一位 石上優（490）

伊井野ミコと石上優の同率一位である！

「マジかあ……」

（まさか、僕が一位なんて……）

しかし、この結果は当然である！ 高等部の勉強で上位に入る為には、先ず中部で習った基礎が出来ていなければ到底不可能である！ 逆に言えば高等部の三学期期末テストで36位を獲得した石上は、中学で習う基礎はほぼ完璧だという事を意味する！ もう一度言おう、この結果は当然である！！！！

「ま、とりあえず……」

（コレで少しは僕の評価も上がると良いけど……）

少しどころでは無い。この男……2ヶ月という短い期間だが真面目に部活動に取り組み、なんと都大会入賞を果たした。その2ヶ月間の石上の頑張りとは、同じ陸上部の部員や顧問の教師から他の生徒や教師へと拡散……部活以外でも面倒な雑用を率先して熟し、徐々に周囲の人間から認められるようになっていた。石上本人

はその性格上気付いていないが、周囲の人間は既に尊敬の念を抱き始めていた。

石上優は思い出す

感想ありがとうございます（――）

作者も書いて一位はやり過ぎ感がありましたが、高一の三学期期末テストで36位（441点）取れるなら、中学3年の一学期期末テストなら一位イケるやろと勢いで書きました。

※タグにご都合主義を追加しました。

「一位だって石上君！おめでとう！」

背中から掛けられた声に、振り返りながら答える。

「ああ、ありがとうございます。」

最近になり、石上の様子が激変した事はクラスメイトは勿論、大友京子も認識していた。クラスメイトはつい先日まで陰キャだった石上の様子が180度変わった

事に対して、殆どの人間が困惑していたが……元々それほど石上に関心もなかった為すぐに興味を失った。

しかし、一部の人間は……

今更いい子ちゃんぶってどうするの？

石上の分際で生意気……

無駄な努力

と心無い言葉を吐く者もいた。

しかし、大友京子は……

「……っー」*フッ*

（石上君、なんかわかんないけど頑張ってるし応援しよう！）

と緩い感じに石上の頑張りを認め、応援していた。

「石上君、これから部活？ 頑張ってるね、バイバイ！」

能天気な笑顔を向けて、ブンブンと手を振る大友京子に石上も……

「ああ、大友も気をつけて帰れよ。」

フツと微笑み手を振り返す。

一見良い感じの男女の様に見えるが、お互いの心の中に相手に対する恋慕の情や恋愛という言葉は存在しなかった。

石上は大友に対してあくまでも、クラスメイトで偶に挨拶をする程度の友人。

大友もクラスメイトが頑張っていれば応援するのは当然という能天気さで、その行動に恋愛という言葉が入り込む隙間は存在しなかった。

何処までいっても石上優と大友京子は、友人という枠組みからはみ出す事はないのである……

大友に言葉を返し視線を向けると、隣に口をポカンと開け此方を凝視する女子生徒と目が合う……と言っても、その瞳は分厚いレンズに遮られ見通す事が出来ない。

「なんだよ大仏、そんなに信じられないか？」

僕はイタズラが成功した気分を味わいながら問い掛けた。……当然だ、2ヶ月前までドベの成績だった人間が学期末テストで一位を取ったのだから。特に大仏は……伊井野ミコという常に学年一位を取り続ける人間の頑張りを見てきたのだから、その驚きも他の人間より凄まじいものがあるのだろう。

「あ、違って……凄いな石上。うん……ビックリした。ミコちゃん以外の方が一位

の隣に名前があるの初めて見たし。」

「まあ僕自身も結構驚いてるんだけどな……」

「そうなの？ その割に凄く落ち着いてるね？」

「そういう風に見えるだけだよ。」

「……ふーん。」

……こんな風は大仏と話すような関係になるとは思わなかった。しかし、決して嫌じゃない。大仏には逆行前、伊井野にステラの花を贈った所を見ていたと告げられた日の夜は、ベッドの上で悶えまくった事もあったけど……

私も君の事、ちゃんと見てたよ

その掛けられた言葉に、僕は何とも言えない気持ちになった。中学時代の……石上優という人間をちゃんと見てくれていた人が確かに居たんだと。だからだろうが……無意識に廊下ですれ違った大仏を目で追い、あの場面に出会したのは……

大仏こぼちは救われる

感想ありがとうございます(。ω。)

「人の彼氏に色目使ってんじゃねえよ！」

ドンと名前も知らない女子に突き飛ばされる。色目なんて使っていないし、そもそもこの子の彼氏という人に関しても心当たりが全くなかった。

「私は何も……」

肩に鈍い痛みを感じながら弁明を試みる。

「ウソついてんじゃないわよ!!」

……またか、と昔から一定数起こっていた目の前の出来事に嫌気が差す。幼少期に子役をやっていた事や母親譲りのこの顔が起因して、私は昔から嫌がらせや陰湿なイジメを受けていた。その内容の殆どが女子からで、女子に嫌われる女子……それが私に与えられたカテゴリーだ。

気に入らない、調子に乗ってる、子役だからチャホヤされてプライドが高い、人の彼氏に色目を使ってる……陰口も挙げていけばキリがない。でも、親の不倫スキャンダルがニュースで報道された次の日からは……今までの比じゃなかった。

燃え続ける火にガソリンを投下したように、陰口やイジメは加速度的に増えていった。親が親なら子も子だ、よく学校来れるよな、ざまあみろ、いい気味、マジウケる……

「なあ大仏い？ オレとも不倫しようぜー？」

女子に唆された男子からも、そんな言葉を投げかけられる。ミコちゃんと一緒にいる時はイジメも鳴りを潜めるけど、ずっと一緒にいるなんて到底無理だ……1人の時は容赦なく悪意の言葉に晒される。

昔から言われ続けてるから慣れた……なんて言葉は強がりでしかない。どれだけ時間が経とうと、名前も知らない人から言われ様と……別になんとも思わない訳じゃないんだよ……

キツイし、辛いし……1人でイジメに立ち向かえる程、私は強くない。1人は、怖いんだよ……

「何とか言えよ！」

「……っ！」ヤッ

また……いつもの様に、相手が満足するまで耐えるしか無い……そう思っていた時に、その人は来た。

「うるせえ、ばーか。」

その声に俯いていた顔を上げると……1人の男子が私を庇う様に佇んでいた。

「い、石上……君？」

ミコちゃんと風紀委員の活動中、彼が携帯ゲーム機を隠れてやっている所を何度か目撃して注意した事がある。そういえば……最近はそんな場面に遭遇する事も無くなっていた。噂では、彼は引退を目前にした3年生であるにも関わらず、陸上部に再入部したらしい。どうしてかはわからないけど、彼が風紀違反をしている所を見掛けなくなったのはソレが原因なのかな……

「はぁ!? 誰がバカよ!? アンタには関係ないでしょ!!」

……その通りだ、石上には関係ない。

「話は途中からだけど、聞かせてもらったよ。」

「っ!?!……ハッ! 盗み聞きとかキモッ!!」

「まあ……それは否定しない。」

否定しないんだ……

「つうか、文句なら彼氏に言えよな。大仏関係ないじゃん、自分が彼氏を繋ぎ止める魅力がないのを棚上げしてよくもまあぬけぬけとホザけるよな。完全に逆恨みじゃんか、モラルってもんがないの? 大体その彼氏だって、そんな面倒くさい女が嫌だから適当な事言ってるだけなんじゃないの?」

そこからは凄かった。彼は捲し立てるように言葉を吐き続けるがその内容は全て正論で……何も言えなくなった女子は、目に涙を浮かべ泣き叫びながら去って行った。

……当然の結果である。この石上優という男、あの藤原千花に苦汁を舐めさせる事が出来る数少ない存在である。彼女曰く……

正論で殴るDV男

心が狭くてすぐに揚げ足を取る

暴言の銃口が常に私を捉えている

奴が付ける傷はやけに治りが遅い

あの四宮かぐやの敵意と憎悪の籠った眼で見つめられても気が付かない様な能天気さを持つ藤原千花に、ここまで言わせ何度も泣かせた経歴を持つ。普通の女子中学生が耐えられる筈がないのである。

「い、石上……君。」

「石上でいいよ、僕も大仏って呼び捨ててるし。」

「……石上、あんな事言って大丈夫なの？」

「問題ないよ。」

石上はなんでもなしに首を振りながら答える。

「でも、先生にチクられたりしたら……」

「なんて言ってチクるんだよ？」

「……え？」

「私は何もしていない女子に逆恨みで暴力と暴言を吐いている所を関係のない男子生徒に止められましたって？ 僕の事をチクるなら自分がしていた事にも説明義務が生じる……彼女には何も出来ないよ。」

「そっか、そうだよ。うん……ねえ石上？」

「ん？」

「……どうして助けてくれたの？ 石上は、こういう目立つ事するようなタイプじゃないと思ってた……それに、私って良い話聞かないでしょ？ 親のスキャンダルの事とか、他の事も色々……」

「……確かに僕は目立つのが好きじゃないよ。でもあんな場面に遭遇して見て見ぬ振りをするような人間にはなりたくないんだ。」

「そっか、強いね石上は……私とは大違い。」

「……大仏の噂は僕も聞いてるよ。でも親のスキャンダルとか他人が悪意を込めて吹聴する話よりも、僕は自分が見たモノを信じたい。」

「石上……」

「大仏は大仏だ。お前が噂通りの人間じゃないって事は知ってるつもり……」

私も君の事、ちゃんと見てたよ

不意に……大仏に言われた言葉が頭を過ぎった。

「……僕は僕は大仏の事、ちゃんと見てたよ。」

「……ッ!？」

人は……他人の些細な行動に心から救われる事がある。

或いは……細やかな思い遣りに。

或いは……目の前の男子から発せられた何気無い言葉に。

「……石上。」

「ん？」

「……ありがとう。」

「ああ、どういたしまして。」

石上が主人公ムーヴ過ぎる(ゝ・ω・(ㄿ)

伊井野ミコは突き止めた

感想ありがとうございます（・∀・）

「嘘……」

（そ、そんな……石上が一位!?）

徐々に掲示板の前から人が消えて行く中、微動だにせず立ち竦む女子生徒がいた。

「な、なんで……」

（私と同じ490点!? あ、有り得ない!）

伊井野ミコ! テストの成績は常に一位! 中学1年の頃から……いや、それ以前からテストで一位を取り続けていた絶対王者は動揺していた!

（もし一問でも間違えてたら、私が二位で石上が一位!? ど、どうして急に石上がそんなっ……もし負けてたらっ!?）

「……………」

動揺どころの話ではなかった。この女、過呼吸起こす寸前レベルに精神的ダメージを受けている。何故なら、自分が風紀委員として違反者に強く出る事が出来るのは、ひとえに成績一位という武器が有ったのこと。もし一位から転落すれば、誰も自分の話に耳を傾けてくれないのではないかと？伊井野ミコは常にその不安を抱えていた。そして、自分の地位を脅かす存在が現れた……その男は数ヶ月前までは、貼り出される掲示板に名前が載る事など唯の一度もなかった存在。

「……！」ヤッ

伊井野ミコとて、別に石上を見下していた訳ではない。他人を気にしても結局は自分との闘いだと理解しているからだ。だが！突如現れたダークホース的存在にすっかり冷静さを失っていた。

「私、あんまり勉強得意じゃないからさ、石上……今度勉強教えてよ。」

「ああ、僕で良かったら教えるよ。」

「じゃあ今度連絡するね。」

「っ!？」

しかも！なんか自分が知らない間に親友が石上と親交を深めている事実に、失

神寸前であつた！

「ううー……」ヤッ

（石上、私がアンタの本性暴いてやる！）

本性も何も……テスト結果は完全な実力制であり（石上には逆行というアドバンテージこそ有るが）秀知院でのカンニング行為は、即退学の為その可能性は皆無。伊井野ミコの思考の暴走は、テスト結果による動揺と親友が石上に取られるかもしれないという子供の様な危機感が縋い交ぜになった結果である。つまり、伊井野ミコの気持ちを無駄を省いて書き出すと……

一番は私のなの！

こばちゃん取らないで！
である。

「……ちゃん、ミコちゃん！」

「ハッ……え、こぼちゃん!？」

「どうしたの？ ボーっとして。」

「な、なんでもない……」

「伊井野、気分でも悪いのか？」

「……」

「……伊井野？」

「見てなさいよ石上！ アンタの化けの皮剥いでやるんだから!!」

伊井野は言うだけ言うと言を返し去っていった。

「どういう事だよ……」

「ミコちゃん、思い込み激しいトコあるから……」

……

「……!」「ぐ——」

（絶対おかしい！ あれだけ頑張って勉強した私と同じなんて！ 絶対何か秘密があるはず……）

「……」

（伊井野が滅茶苦茶見て来る……まいったなあ、大仏は大仏で……）

まあ、ミコちゃんも面食らって奇行に走ってるだけだから……その内やめると思うよ？

「はあ……」

（とか言うし……ってあれ？）

周りを見渡すと先程まで隠れて（バレバレ）此方を伺っていた伊井野の姿がない。

「……諦めて帰ったか。」

帰り支度を済ませ、妙に凝った肩を回しながら廊下を歩く。

「あつ、石上。ミコちゃん見なかった？」

「さっきまで隠れてこつちを監視してたよ……」

「あれ？今日は風紀委員の見回りがあるのに……何処行っただろ？」

「先に始めてるとかじゃないのか？」

「ううん、風紀委員の見回りは、原則２人一組って決まってるの。１人だと言ひ

逃れられたり逆ギレして暴力振るって来たりするから……」

「それは……思いの外危ないな。」

「まあそんな相手は滅多にいないけど……」

「……！」

「……！」

この瞬間、2人の思考が重なった。伊井野ミコは、確かにルールを守る……だが目の前に違反者がいれば、2人一組というルールよりも其方を優先するのではないか？ という思考が。

「……石上。」

「ああ、伊井野を探すぞ。」

僕は太仏を連れ伊井野を探し始めた。

（石上、さっさと尻尾を出っ……アレはっ！）

石上の監視中、私は男子生徒3人が談笑しながら中庭へ入って行く所を目撃した。

「んでそんな時によお……」サ、ハッ

「っ！」

（ポイ捨て！）

それを見た瞬間、私の頭から石上の事は消え去り、直ぐに男子達を追い掛ける。

「その後アイツが……」

「ちよっと貴方！ 今ポイ捨てしたでしょ！ クラスと名前を言いなさい！！」

「あ？ なんだお前？」

「げっ……コイツ風紀委員の伊井野だ！」

「伊井野？ ああ、学年一位の奴か……メンドクセ奴に見つかったな。」

「早くクラスと名前を言いなさい！」

「……あれ？ そういえばコイツって、今回のテストで……一位……石……」サ、ハッ
ンサ、ハッ

ポイ捨て男は友人に何やら耳打ちされると、意地の悪い笑みを浮かべて私を見た。

「……へえ、なるほどな。あーあ、石上の言う事なら聞いてやっても良かったのになあ！」

「え……?」

「そーそ！ やっぱ同じ学年一位なら、男の方が発言に重みがあるよなあ？」

その言葉に……ギュッと心臓を鷲掴みにされるような感覚が、私の体に襲い掛かった。

「か、関係ありません！ 私は風紀委員です！ 違反者を注意する権利が……」

私は風紀委員と刺繍された腕章を取り出し、腕に当て……

「はい、ゲットー！」

「な!? か、返しなさい！」

「へいパース！」

「ナイスパース！」

「このっ！ か、返しなさい！」

懸命にジャンプをして手を伸ばしても、私の小さい体では掠りもしない。

「ほらほらあ、取り返してみろよ。」

「か、返し……」

「よっと、パース。」

「……っ！」

（なんで、皆わかってくれないの？ 私はまだ……）

「ほらほら、そんなんじゃないや取り返せねえぜ？」

「返し……て……」

「だーかーらー！ 石上の言う事なら聞いてやるって言ってんだろお？」 いざいざ
ニヤニヤと笑いながら、私を見下ろす3人に恐怖で体が震え始める……

「う……」

（皆に……ちゃんとして欲しいだけなのに……）

「おい、伊井野の腕章を返せ。」

「……は？ 何お前？」

「……石上？」

（……なんで？）

「僕の言う事なら聞いてくれるんだろ？」

「お前が石上か……」

「さっさと腕章を返せ。」

「チツ、カツコつけやがって……お前はウザくねえのかよ？ 小せえ事で揚げ足取ってグチグチ言ってる風紀委員がよお!？」

「まあ……僕も隠れてゲームしてる所見つかって、注意されたりゲーム機を没収されたのは一度や二度じゃないけどさ……」

「だったらっ!」

「……でも、ムカつくんだよ。」

「あ?」

「頑張ってる奴が笑われるのは。」

「!!」

（い、石上……）

「いい度胸してんじゃねえか、こっちは3人……」

「コラァア! 何をやっとするかああ……!」

全員が声のした方に視線を向けると、三階の窓から身を乗り出し雄叫びを上げる教師が目に入った。

「ヤッベ!?! 生徒指導の先公だ!」

「チッ……こっち来る前に逃げるぞ！」

「お、おう！」

3人は持っていた腕章を放り投げると、走って逃げに行った。

「……投げるなよ。全く……ほら伊井野。」

石上は腕章を軽く手で払って埃を落とすと、私へと差し出した。

「あ……そ、その……えと……」

「はあはあ……石上ありがとう！ミコちゃん大丈夫!?」ゼンゼ

息を切らせて走って来たこぼちゃんは、特に問題が無いとわかると安堵の息を洩らした。

「はあ……ミコちゃん、顔赤いけど大丈夫?」

「へっ!？」

こぼちゃんに指摘され、反射的に頬を触り確かめる……熱い。先程の3人に見下ろされていた時は、不安で、怖くて、身体が凍えそうな寒気を感じていたのに……

「伊井野、大丈夫か？」

「だ、大丈夫。うん、大丈夫……」

石上が来て、助けてくれた瞬間から……さっきまで感じていた寒気は消え去り、私の身体はポカポカとした暖かさに包まれていた。

「伊井野……保健室行くか？」

「ほっ……保健室!？」

（わ、私とっ!？）

「気分が悪いならベッドで横にでも……」

「ベッド!？」

（そ、そんなっ、いきなり!？）

「不安なら大仏も一緒に……」

「さ、3ぴっ……!？」

「ストップミコちゃん、それ以上は本気で後悔するから言わない方がいいよ。」

「……ホントに大丈夫か？」

「そ、その……」

「あー、ミコちゃんは私が連れて行くから。石上、今日はありがとね……ほらミコちゃんも。」

「あ、うん。その……石上、ありがとう。」

「気にするな、じゃあ僕は帰るよ。」

「うん、また明日ね。」

「ま、また明日……」

「またな。」

帰っていく石上の背中が小さくなった頃……

「じゃあミコちゃん、何があったか洗いざらい喋ってね？ 主に……石上が来てからの事を。」

「え、ええええ……」

伊井野ミコの災難は終わらない。

長くなってしまった。・。(ノД㌔)・。。

大仏に続き伊井野でも石上が主人公ムーヴを……

まあ精神年齢17歳の石上からしたら、イキッた中3とか怖くないんでしょうけどね……

石上優は手伝いたい

感想ありがとうございます（・ω・）

期末テスト発表から数日後……

夏休みまで2週間を切ったある日の午後、石上優は風紀委員会が使用する空き教室を訪ねていた。

「失礼します、ウチのクラスのアンケート用紙持って来ました。」

「はい、用紙はその机に……って石上!?! な、なんでアンタが……」

「担当の奴が体調不良で早退したから代わりに持って来たんだよ。」

「ふ、ふーんそうなんだ……」サザミ

「伊井野1人か？」

「こばちゃんがもうすぐ来るわよ。」

「ごめんミコちゃん、お待たせ。」カウ

「よう。」

「あれ？ 石上どうしたの？」

「アンケート用紙持って来ただけだよ。」

大仏の問いに、ひらひらと紙を振りながら答える。

「あーなるほど。ごめんね、お茶くらい出してあげたいんだけど……」

「別にいいよ、それより忙しいのか？」

「忙しいなんてもんじゃないわよ。今日は先生も会議だし、他の風紀委員も用事で居ないから私とこぼちゃん2人でやらなきゃいけないのよ。」

「ホントにねえ、今日中にこのアンケート結果をパソコンにまとめなきゃいけないし……」

「僕、手伝おうか？」

「「え？」」

僕の提案に2人は目を見開いた。

「あー……なんか手伝いを催促したみたいになっちゃったかな？ その提案は嬉し

いけど……流石にそれは石上に悪いよ。」

「そ、そうよ！ それに風紀委員でもない石上に余計な負担が……」

「でも期限は今日中なんだろ？ 僕こういうの少し得意だから役に立つと思うけど？」

「うっ、でもそれは……」

「……ミコちゃん、せっかく石上がここまで言ってくれるんだからお願いしようよ。」

「……こばちゃんが言うなら。」

「じゃあ決まりだな、早速始めよう。」

大仏からアンケート用紙を受け取ると、早速仕事に取り掛かる。

「……」カタカタ

「……」カカカ

「……」カタカタ

少しの間、キーボードを打つ音とペンを走らせる音が教室に充滿する。

「ねえこばちゃん、此処って……」

「……よし、終わったぞ。」

「え？」

「ええっ!? う、嘘でしょ!? そんなに早く終わるわけが……」

「……ミコちゃん見て、ちゃんと終わってる。」

「嘘おっ!？」

マジである。この男、逆行前は秀知院学園高等部の生徒会を影で支えていた情報処理のエキスパート！ 質実剛健、聡明叡智と謳われる生徒会長、白銀御行からも……

石上が居なくなれば生徒会の仕事は破綻する

とまで言わしめ絶大な信頼を得ていた男。中学の委員会程度の書類処理ならば朝飯前なのである。

「……石上凄いな。こういうのが得意って言うだけあるね。」

「役に立てたように良かったよ。」

「ふふ、本当助かったよ。ね、ミコちゃん？」

「くうっ、私よりわかりやすい……悔しい！」

「もう、ミコちゃんは……」

「なあ……この書類この後どうするんだ？」

「コピー取って高等部の生徒会に持って行く事になってるわよ。」

「高等部の生徒会……？」

「何よ？ 流石にそこまで石上にやらせたりはしないわよ？」

伊井野の言葉を聞き流す石上の頭の中に、かつての生徒会メンバーの姿が浮かぶ。

「……なあ伊井野、その出来上がった書類僕が届けちゃダメかな？」

都合良く会えるとは限らない。だけど、もしかしたら会えるかもしれない……その思考が、伊井野への言葉を繋げる。

「え、なんで？ 石上にそこまでさせる訳には……」

「いや僕がしたいんだ、頼む。」

「うーん、私達はやってくれると助かるけど……ミコちゃんどうする？」

「まあ……いいけど。」

「じゃあ早速持って行くよ、2人共お疲れ。」

僕は書類をまとめ終わると、足早に教室を出て行った。

「変なの、関係ないのに態々自分から書類持って行くなんて……それにあんなに急がなくなつて……」

「……ミコちゃん寂しいの？」

「はっ、はあっ!? そ、そんな訳ないでしょ!」

「本当? あわよくば2人っきりの教室で……」

ねえ石上、この前のお礼……何がいい?

お礼か……お礼ならコレがいいな……

少年は少女の唇を軽くなぞり顔を近付けると……

「そんな事する訳ないでしょおお!!? なんてお礼でキスする羽目になつて
るのよ!」

「私的には結構熱いシチュなんだけど……」
※。

「あなたの趣味は知らないけれど!」

僕は教室を出ると、無意識のうちに歩く速度は徐々に早くなって行く……

「……」

（確か、会長は１年の時は庶務として生徒会に居たって言ってた……もしかしたら会えるかもしれない！）

少しの不安と大きな期待を胸に、石上は高等部へと走って行った。

誤字脱字指摘ありがとうございますm(∩_∩)m

秀知院学園高等部は、中部部から僅か徒歩5分の距離にある。期末テストも終わり、夏休みを目前に控えた高等部は活気に満ち溢れていた。

「ふう……」

（たった3ヶ月しか離れてなかったのに、随分久しぶりな気がする……）

夏の日差しをその身に受け石上は……

⋮

（とりあえず……木陰で休もう。）

日和った！この男、書類を受け取り勢いよく教室を飛び出して来たにも関わらず、此処に来て心臓バクバクであった！何故ならば、逆行して記憶がある自分は白銀御行等親交のあった人間を知っているが、向こうは自分の事など存在自体知ら

ないのである。前回の高等部生活において石上と親交のあった人物の殆どが上級生！つまりは現1年と2年である。もし、見掛けた際に自分が妙な事を口走り、気味悪がられたりしたら……と考えただけで心臓がビートを刻んでいた！

「ゴッ……ゴッ……」

石上は自販機でミネラルウォーターを購入すると、中庭にそびえ立つ木にもたれ掛かり口へと流し込む。

「ふー……」

（少しは落ち着いたかな。コレ飲み終わったら……）

「ッ……くっ……この！」カチャカチャ

石上は背後からの声に視線を向ける。先程まではテンパっていて気付いていなかったが、どうやら自分がもたれ掛かっている木の裏側に人がいたようだ。

「……？？」

（この音……ゲームかな？）

自身の趣味であるゲームを背後の人間がしている事に興味を持ち石上は覗き込む。カチャカチャとゲームをしている人物の正体は、帽子を被った女子生徒だっ

た。その女子は胡座をかいて背を此方に向けており、ゲーム好きな石上は無意識にゲーム画面を覗き込む。

「あ……すげえ、ギガティラスソロ狩りしてる。僕も苦勞したなあ……」

そんな言葉が口から洩れた事に、石上がしまったと口を抑えるのと……女子が振り向いたのは同時だった。

「お前、今なんて言った？」

そう言いながら眼光鋭く睨み付ける目の前の女子に石上は焦る。

「あ、いえ、その……すいません。木陰で休んでたらゲームの音がしてつい……」

「別に怒ってる訳じゃねえよ……それより、さっきなんて言った？」

「え？ ええと、ギガティラスソロ狩りしてるなんて凄いなあと……」

「違う、その後だ。」

「……僕も苦勞したなあ？」

「お前……」

女生徒は立ち上がり石上の服を掴むと……

「コイツ倒せるのか!？」

暫し思考が止まるも、ゲームに関しては一家言を持つ石上である。すぐに……

「は、はい……倒せます。」

と答えた。

「……だったらコイツ倒してみろ、出来たら覗き見た事は許してやる。」

「え、さっき怒ってないって……」

「あ？」

「やります！ やらせて頂きます!!」

弱い……この石上優という男、出会った当初は四宮かぐやの圧力と殺気の籠もった眼に暫し戦々恐々とし、自身の命の危機を感じとっていた過去を持つ。その後は接触を繰り返すうちに段々と平気になり、最後には四宮かぐやを姉のように慕うようになる。しかしながら、ソレは四宮かぐやに対して耐性が出来ただけであり、他者に対しても同じように耐性があるわけではなかった。

「……」

（メツチャ睨んで来る……）

一言で言うならば、目の前の眼光鋭い女子に普通にびびっていた！

「じゃあ、ほらさっさと倒せ。」

ゲーム機を受け取り石上はゲームオーバーと表示された画面からコンティニューを選択し、ゲームを始める。ムービーシーンが挿入され、湖から出現したモンスターにスタン系のアイテムを投げつける。

「おい、ソイツに電撃系は……」

アイテムが当たったモンスターは動きを止め、その隙に石上は攻撃を叩き込んで行った。

「は？　なんで……」

「ああコイツ、エンカウントした最初の3秒間だけスタン系のアイテムが効くんすよ。その後は動けなくなった隙に攻撃しまくれば……ほら、倒せました。」

「おおー！　やるじゃねえか！　その制服中等部だよな？　お前名前は？」

「3年の石上優です。ええと……先輩は？」

「なんだ、一個下か……私の名前は龍珠桃。石上、次コイツ倒そうぜ！」

そう言うと龍珠先輩はゲーム画面を此方に向けてニヤリと笑った。

……龍珠桃？　うーん、どこかで聞いたような……見たような……？

まさかの龍珠桃登場（。A。）

誤字脱字指摘ありがとうございます（「A」）

石上優は出会えない

感想ありがとうございます(。ω。)

誤字脱字報告ありがとうございます(´A`)ゝ

石上は木陰で出会った1学年先輩である龍珠桃と、暫しのハンティングに興じていた。

「こんな遣り方があったとは知らなかったわ、お前すげえな。」

「いやいや、僕なんて全然ですよ。」

嘘である。この男、逆行前のゲーム三昧した記憶を利用し、新発売のゲームが出る度に掲示板へボス情報や隠し要素を書き込み……

「攻略遅すぎ。く、さ、は、え、る……っ」と。

とマウントを取っている！ 勉強に励み部活に精を出し、周りから尊敬の目で見られ始めていても石上優の本質は変わらない。陰ダークサイドキヤなのである！

そう……ネット上では、マウントを取られたほうが負けなのである!!

「そういえばお前、高等部に何しに来たんだ?」

「あ……」

石上ここにきて自身の目的を思い出す。ゲームの話が盛り上がり、石上のゲオオタ魂に火がついた結果である。

「そうだった、僕はこの書類を生徒会に提出しに来たんです!」

「書類? ふーん……」

パシッと石上の手から書類を掠め取ると、龍珠は視線を落とす。

「……お前風紀委員?」

「いえ、代理で来ただけです。」

「じゃあいいや、案内してやるからついて来いよ。」

「いいんですか? ありがとうございます。」

歩き出した龍珠の後を追い石上も歩き出す。

「……」 ヽㄾㄾ

（1年の頃の会長か、なんか変な感じだなあ。間違えて会長呼びしないように気

をつけないと。」

気持ちが逸るのを抑えながら石上は、校舎内を懐かしみながら歩いて行く。

「ここが生徒会室だ。」*サザミ*

「し、失礼します。」

「まあ折角来たんだ、茶くらい淹れてやるよ。」

「龍珠先輩、あの……勝手にやっていいんですか？」

「は？……ああ、そういえば言っていなかったな。私、生徒会の会計だから。」

「え……」

ここで石上に生徒会参入当初の記憶が蘇る。

……

「今日から君も生徒会の一員だ、よろしく頼む。」

「僕で役に立てるのなら……」

「うむ、ならばコレを渡しておこう。」

石上は白銀から〈石上優〉と表示されたプレートを受け取る。

「コレは……」

「役職に就く者はそのプレートを彼処の壁に掛けるんだ。石上は会計の欄に掛けておいてくれ。」

「はい、あの……コレは？」

「ああそれは、前任者のモノだな。外し忘れたんだろう……アイツは不精な所があるからな。」

「前任者……」

（龍珠桃……女子生徒か。）

「それは俺が預かっておこう……では、まずは簡単な書類整理から始めようか。」
……

「……」

（あー……どっかで見聞きしたような気がしたのはコレか。）

「ほらよ。」コト

過去を思い出した石上の目の前に、お茶で満たされたコップが置かれた。

「あ、ありがとうございます。」

「ああ、しかし誰もいやがらねえ。」

「あの、他の人は？」

「さあな、何処で道草食ってんだか……」

「……」

（いや、貴女は道草どころかゲームしてましたけどね……）

「あ？ なんだよ？」

「……なんでもないっす。」

「や……まったく、何処に……」

突如スマホの着信音が生徒会室に鳴り響いた。

「はい……は？ 今生徒会室だけど……はあ？ マジかよ面倒くせえ……や、わかったよ。」

龍珠はスマホを耳から離すと……

「悪い石上……急用が出来た。書類は机の上に置いといてくれ。」

「急用ですか……」

「ああ、他の生徒会の奴もそっちに集まってらしくてな。まったく、面倒くせえ。」
「じゃあ僕はコレで……」

「ああ、じゃあな。」

「はい。龍珠先輩、ありがとうございました。」

石上はそれだけ言うとし徒会を出て行った。

「はあ、もうちょいゲームしてたかったな……」

石上が出て行くのを目で追いながら、龍珠は無意識に呟いた。

その後、生徒会室……

「……いきなり呼び出してすまなかったね、龍珠会計。」

「ホントだよ会長、私も忙しいんだけど？」

「……その手に持っているゲーム機は何かな？」

「ふんっ……」

「おや？ そのコップ……誰か来てたのかい？」

「中等部の奴が書類を届けに来てたんだよ。」

「え……龍珠が対応したのか？」

「なんだよ白銀……なんか文句でもあんのか？」

「いや、文句とかじゃなくて……」

「ふふ、白銀庶務は驚いてるんだよ。だって会長である僕にも敬語を使わないような君が、態々お茶を出して来客をもてなすなんて事をしたんだからね。そもその話……龍珠会計が僕達にお茶を出した事があったかな？」

「ふん、なんで私がアンタらに茶を出さなきゃいけないんだよ。」

「ヤレヤレ、君が態々お茶を出した人物にも興味があるけど……書類が溜まってると、先ずはコレを片付けよう。」

「はい。」

「サ、面倒くせえ……」

石上優は思い付く

感想ありがとうございます（・v・）

石上が高等部の生徒会を訪ねてから、1週間が経過した……その間、石上は頻繁に風紀委員会の仕事を手伝うようになっていた。先月末に部活動も無事引退し、空いた時間を風紀委員会に費やす石上……元々風紀委員は人手が足りなかった事、更に石上の書類処理能力の高さも一役買い、他の風紀委員からの信頼も厚く助っ人枠として自由に風紀委員の教室を出入りする許可が出たのである。今日も資料片手に書類処理をしていると、伊井野ミコの……

「今日の会議内容は3ヶ月後に迫った体育祭の備品確認の振り分けを行います。」
という発言に顔を上げる。

「……伊井野、そういうのって実行委員の仕事じゃないのか？」

「ああ、石上は知らないみたいね。実行委員はあくまで体育祭の準備担当で、備品

の確認は風紀委員がやってるのよ。」

「風紀委員が……？」

石上の困惑も当然である。何故ならば、自分が高等部1年の時は体育祭の備品確認は生徒会が担当したからだ。

（そういえば、備品確認の翌日から何故か伊井野の会長を見る目がキツかった記憶があるけど……なんだったんだアレ？）

い、伊井野さんっ……わ、私怖かったあ！

こ、この……クズめ！

チキショウ！ 反論出来ねえ……

こんな事があったなど石上は知る由もない。

「まあ石上が変に思うのもわかるよ、こういうのって本来生徒会の仕事だから。」

「あ、やっぱりそうなのか……じゃあなんで？」

大仏の言葉に石上が疑問をぶつける。

「まあ要は、忙しいのを理由に生徒会が仕事を押し付けてきたって感じかな……」

「それはまた……」

石上の知っている生徒会は、自身も所属していたあの白銀御行率いる生徒会だけである。真摯に生徒と向き合い、学校行事にも手を抜かず真剣に取り組む男の背中を見続けて来た石上からすれば、中等部の生徒会は1つ、2つ格の落ちる存在であつた。

「じゃあ僕も手伝うよ。」

石上の発言に教室が沸く。

「石上君マジでいいの？」

「石上先輩助かります！」

「い、石上本当にいいの？」

沸き立つ他の風紀委員とは違い、伊井野は申し訳無さそうな顔をして訊ねて来る。

「ああ、大丈夫。男手は必要だろ？」

「そう、だけど……」

「ミコちゃん、石上がこう言ってくれてるんだからお願いしようよ。」

「……うん、では石上を含めたメンバーで振り分けを行います。」

メンバーの振り分けが終わると各班はそれぞれの持ち場へと向かった。

石上は体育倉庫の担当で他のメンバーは、伊井野ミコ、大仏こぼち、2年の男子風紀委員となった。

「けほっ、埃が凄いわね……」

伊井野はハンカチを口に当て顔を顰める

「仕方ないよミコちゃん、ココって体育祭の備品しか置いてないから殆ど物置扱いだし……」

「マスクでも持ってくればよかったな。」

「仕方ないっすよ、先輩達さっさと確認して出ましょう。」

後輩に促され各々が備品確認に取り組む。

「……ん？ なぁ大仏、コレってなんだ？」

「え？……ああ、それは体育祭のアナウンスで使う持ち運び出来るバッテリーだよ。」

「こんな所にそんなの置いてて大丈夫なのか？」

「まあ大して埃被ってないし大丈夫じゃない？ 充電すればまだ使えるみたいだけど、それは後で要確認で。」

「了解、持ち運び出来るバッテリーね……」

「石上どうしたの？」

「いや、なんでもない。さっさと終わらせよう。」

30分程で残りの備品確認を終わらせると、一同はやっと倉庫から解放された。

「ふう……意外とそのまま使える備品ばかりで助かったねミコちゃん？」

「うん、こっちの備品は新しく申請する必要はなさそうだから助かったわ。」

「じゃあ今日は現地解散って事で！先輩方おつかれさんでした！」

後輩男子はそれだけ言うのと走って行った。

「もう、全くあの子は……」

「まあまあミコちゃん。石上も……今日はありがとね？」

「ああいや、少しは役に立てたようで良かったよ。収穫もあったし……」

「ん？何？」

「いや、なんでもないよ。じゃ、2人共お疲れ。」

「うん、お疲れ様。」

「お、お疲れ様。」

石上は2人に背を向けて歩き出す。

「……」

（バッテリーか。じゃあ、後は……）

石上の思い付きが形を成すのは夏休み明けである。

伊井野ミコは聞き出したい

感想ありがとうございます(。ω。)

この世には、エメットの法則というモノがある。仕事を先延ばしにする事は、仕事を片付ける事よりも倍の時間とエネルギーを要するという法則である。夏休みまで残り数日と迫った今日、此処に1人……エメットの法則に翻弄される少女がいた。

「……！」

(もうすぐ夏休み……夏休みに入る前に、石上と連絡先の交換をしないと！)

伊井野ミコ！ あの中庭の一件をキツカケに何かと石上優と関わるようになった中等部3年風紀委員である！ 精励恪勤、品行方正を地でいく優等生であり、普段から言いたいことはハッキリと口にする伊井野だが……

「……」

（ど、どうやって聞けばいいの？）

男子に自分から連絡先を聞くという行為は全くの未経験！何故ならば、伊井野は自身の持つ正義感と責任感から他者に厳しく、そして何より自分に厳しくして生きてきた。そんな伊井野に男の友人は唯の1人もいなかった！それどころか女友達も小等部からの付き合いである大仏こばち唯一人！故に、石上に連絡先を聞く事を今の今まで先送りしていたのである！同年代の人間に対するコミュニケーション能力の欠如……その皺寄せが今！正に！！伊井野ミコへ襲い掛かっていた！

（どうすれば……ハッ！）

伊井野はスマホを取り出すと、ポチポチと検索画面へ文字を走らせる……

（……異性への連絡先の聞き方で検索っと、コレで大丈夫なはず！）

マジである。この女、スマホの検索能力を過信する余り、普通の人間が自力で到達出来る結論を検索機能に頼るこの体たらく。そんな事を検索しても……

（普通に聞きましょう……ってそんな当たり前の事が知りたい訳じゃないのよ！）
そんな検索結果しか出ないのは当然なのである。

「ミコちゃん、さっきからどうしたの？」

「こ、こばちゃん……」

「うん？……あー、なるほどね。石上の連絡先が知りたいんだ？」

スマホ画面を覗き見した大仏は全てを察する。

「べ、別にそういう訳じゃ……」

「違うの？」

「違っ……わないけど……」

「ミコちゃん……いい？ そんなしょうもない事で悩んだりしたら、無駄に時間だけ浪費して後悔する事になるんだよ？」

……時空を超えてどこかの誰かに刺さりそうな言葉である。

「う、うん……わかってるんだけど……」

「石上なら聞けばすぐ教えてくれると思うよ？」

「うん。そうなんだろうけど、でもお……」

「はあ……」

（ミコちゃんはホント、こういう所はザコちゃんなんだよね……）

「うー……」

「夏休みが始まってからじゃ遅いんだから、聞くな。今からじゃないとダメだよ？」

「うう、はい……」

「そうと決まれば今すぐ行くよ。ザコちゃん！」

「え？」

「……じゃなかった、ミコちゃん！」

「こぼちゃん今なんて……」

「ほらっ、はやく行くよ。」^{グッ}

「あああ、こぼちゃん待ってえ!!」

……

「石上、ちょっといい？」

「大仏？ 何か用か？」

「用があるのは私じゃなくてミコちゃんね。」

「伊井野が？」

「い、石上……その、れ、れ……」

「……………」

（ミコちゃん頑張って！）

「れ、連絡先！お、教えて……ほ、ほら勉強の事とか委員会の事とかで連絡するかもしれないし！」

「ああいいぞ、コレが僕の番号とIDな。」

「う、うん。」

「でも態々僕に聞きに来なくても、大仏に聞けば良かったのに。」

「あ……」

マジである。この女、異性に連絡先を聞くという非日常イベントに冷静に物事を考えることが出来なくなっていた。本来なら大仏と会った時点で解決出来ていた問題である。

「こ、こぼちゃん……」

「……どうしたの？」
「……」

故意である。この女、その事実に気づいていたにも関わらず、その解決法を意図的に秘匿！親友である伊井野ミコの成長を願う……というのは建前！親友が何

の苦勞も無く、石上の連絡先を手に入れる事に若干の抵抗を覚えるお年頃である！
「こ、こばちやああん!？」

何はともあれ伊井野ミコ、石上優の連絡先ゲット。

石上優はダラけたい

夏休み！それは学生達のオアシス！毎日の勉強や部活動、早起きからの登校など、日々の抑圧された欲望を全開で解放出来る期間。ある一定以上の仲の良い男女であれば、この期間の内に関係を一步進める事も可能である。そんな解放と発展を秘めた夏休みに石上は……

「あー……」

ダラけていた！本来この石上優という男、陰キャ界の申し子と言って差し支えない男である。逆行してからの3ヶ月、勉強に励み部活動に精を出し、風紀委員の助っ人としてデータ処理から雑用と多忙を極めていた。故に……

「うー……」

反動でこの様な状態になるのは自明の理であった。とは言え、石上にとって毎日の勉強は最早習慣となっており、キツチリと勉強の時間は取っていた。現在も午前の勉強を済ませてダラけていただけである。

（うーん、中3の夏休みって何して過ごしてたっけ……ネットとゲームしてた記

憶しかないな。」

本来なら中学3年の夏休み、冬休みは受験に向け勉強に精を出す時期である。しかし！秀知院学園は内部進学者数を増やす為、秀知院高等部への進学試験は比較的緩く設定されている。対して外部進学する者にはまるで当て付けと感じるかの如く、その期間にイベントを盛り込んでいる。体育祭、クラスマッチ、文化祭等……高等部程露骨ではないが中等部に関してもそういった事が行われていた。

（……そういえば最近新作ゲームが発売されてたな、予約してないけどあったら買おうかな。）

石上は外着に着替えると、最近はご無沙汰していたゲームショップへ向け歩み始めた。

……………

〈ゲームショップ〉

自動ドアを抜けると全身を覆う冷気に、先程まで体を纏っていた熱気が吹き飛んだ。

「ふう……」

（あー、生き返る……）

僕は新作ゲームが陳列された棚の前に陣取ると、目当ての商品を探し始める。

「うーん……ああ、あったあった。」

「……石上？」

「え？……あ、龍珠先輩、どもっす。」

「ん、石上そのゲーム買うのか？」

「はい、暇を持て余してまして……先輩も何か買いに来たんですか？」

「いや、ぶらぶらしてただけ。それよりも石上……私もそのゲームやってんだよ、協力プレイしようぜ。」

「あ、いいっすね……でも、僕始めるの今日からですよ？」

「別にいいよ。あっちに長居しても文句言われない喫茶店があってさ、そこ行こうぜ。」

「はい、じゃあすぐ買って来ますね。」

「おう。」

僕は会計を済ますと、喫茶店へと向かう龍珠先輩の背中を追った。

……

「ミコちゃん、暑くて溶ける……何処か涼めるトコ入ろうよ。」

「うん、じゃあ喫茶店見つけたら入ろっか。」

「……ん？アレ、石上じゃない？」

「えっ、嘘!? どこ!?」

「ミコちゃん、慌て過ぎだよ。あの喫茶店に入って行ったよ。」

「ふ、ふーん……元々喫茶店に入るつもりだったし、丁度良いよね？」

「素直じゃないなあ……」

「え、何？」

「んーん、なんでも。」

伊井野と太仏の2人は、降り注ぐ熱気から逃げる様に喫茶店へと入って行った……
……

カランカランと来客を告げる鐘の音に迎えられ、石上と龍珠は向かい合う形で席へと着く。注文を取りに来た店員にドリンクを注文し、懷からゲーム機を取り出す。
「じゃ、とりあえずキャラメイクしますね。」

「おう、あんま待たせるなよ。」

「僕、結構凝るタイプなんですけどね。」

「ふーん、キャラメイクねえ……」

「居た！ 石上、女の人と一緒にいる!？」

「ミコちゃん、とりあえず隣の席に行こ。仕切りがあるから、私達の事は見えないはずだし。」

伊井野と大仏は店員に注文を告げると、バレない様に素早く席へ着く。

「石上ってどういうタイプが好みなんだ？」

（っ!?!）

龍珠の発言に、伊井野と大仏に衝撃が走る。

「そうですねえ、やっぱり女性（タイプ）選んじやいますね。」

「ふーん、やっぱりな。」

「石上は男なんだから当たり前でしょ!!」

「ミコちゃん、それは偏見だよ。男×男も今の時代では、全然珍しい事じゃないんだよ?」

「今その話はいいでしょ!？」

「そりやそうですね、色んな服（装備）を着せる楽しみもありますからね。」

「コスプレ!？」

「男子ってそういうの好きそうだよね……ミコちゃんはコスプレするなら何が良い？」

「うーん、するならバニーとか……ってしないよ!？」

「ふーん、私はあんまり服（装備）は重視してないんだよ。最悪無くてもいいし、とりあえず強力な武器持ったら良いって感じ。」

「いや、服は着てないとダメでしょ！ 何その恋愛観!？」

「まあ、そこらへんは人それぞれだから……」

「それも有りですね。」

「有りなの!？」

「……ん？ なんか違和感が？」

「男は腰に布でも大丈夫でしょうけど、女（キャラ）だとそれだけじゃダメですかね。」

「いや当たり前でしょ！ っていうか男だって腰布だけは、倫理的にアウトよ!？」

「うーん……?？」

「まあ出来てバニーとか、水着着せるくらいですねー。」

「へ、変態!! こばちゃん、石上が変態!」

「ミコちゃんもさっきバニーコスプレしたいって……」

「別にしたいとは言っていない!! ああもう! 石上がこんな変態だったなんて……」

「ねえミコちゃん、多分この話の内容って……」

「……よし、準備出来ました。龍珠先輩、早速やりましょう。」

「おう、随分待たせやがって……よし行くぞ。」

カチカチとボタンを連打する音が仕切り板の向こう側から2人の耳に届いた。

「ゲームの話だと思うよ?」

「……へ?」

3 時間後……

「ふう……結構やったな、石上も始めたばっかなのに中々やるじゃねえか。」

「アハハ、それ程でもないっす。」

（前回やり込みまくってたし……）

「またやろうぜ、コレ私の連絡先な。ゲームの情報交換とかオンラインで待ち合わせとかし易いし、ちゃんと登録しとけよ。」

「うっす。じゃあ、なんか良い裏テクとかあったら教えますね。」

「おう、またな。」

「はい、また。」

カランカランと鐘の音を残し、龍珠は店を出ていった。

「……！」

（……僕にゲーム友達が！）

石上優、龍珠桃^{ゲーム友達}の連絡先ゲット。

……

「……」

「……」

「ミコちゃんてさ……」

「言わなくていいからっ……」

「結構頻繁に恥ずかしい勘違いするよね。」

「うああん！言わなくていいって言ったのに！こばちゃんのイジワル！」

こういうネタ難しいA:(、

E」

ノ):

石上優は夢を見る

感想ありがとうございます（・∀・）

「いいですか、石上君？ 貴方も直に2年生へ進級し、人を従える立場になる人間です。」

「人を従えるって……四宮先輩じゃないんですから、僕にはそんなの無理ですよ。」
「私だって、別に常々人を従えている訳ではありません。ただ……何かを成し遂げたり目的を達成する為には、人という存在は必要不可欠です。ここまではいいですね？」

強い意志が宿った、その瞳に気圧される。

「それは、まあ……でも、僕に人を従えるなんて出来る筈無いですよ。」

「貴方の場合、従えるというよりは利用すると言った方が良かったかしら。」

「人を……利用する……そんなの僕には無理です。どうやればいいのかも思い浮か

びません。」

「……本当に？」

「え……？」

「貴方はその方法を目の前で見ているでしょう？……さあ思い出して。」

四宮先輩は僕に近寄ると、暗示をかける様に耳元で囁いた……

「あの時の……荻野コウの立ち回りを。」

「っ!？」

四宮先輩のその言葉に……いつまでも忘れられない、嫌な記憶がフラッシュバックする。

石上君、暴力じゃ愛は勝ち取れないんだ！

黙っていたら大友京子に手は出さないでやる。

……おかしいのはアンタの方よ。

「……僕に荻野みたいになれと、そう言いたいんですかっ!？」

四宮先輩の言葉に引き出された嫌な記憶に……思わず声を荒げて問い掛ける。

「……いいえ、勘違いしないで。貴方のその真っ直ぐな正義感は美点よ。出来る事

ならそのままで居なさい。」

「だったらなんで……」

「良い悪いは別にして、荻野コウの立ち回りは周囲の人間と自分の置かれていた立場を巧く利用していたわ。咄嗟の判断力で自分を守る……マジョリティという鎧を創り出した。」

「……マジョリティ？」

「多数派という意味よ。あの場面で貴方に自分を殴らせ、それを複数の人間に目撃させ、演劇部で培った演技力で周囲の人間の印象をコントロールし見事味方に付けた……中々の小悪党ね。」

「……」

「……石上君、もしかた似たような場面に直面したら……貴方はどうするの？」

「それは……」

「……嫌な事を言ってごめんなさい。でもね、石上君……もし、また貴方がそんな場面に直面する時が来たら……逆を利用しなさい。」

「え……？」

「自分の立場を利用しなさい。自分の置かれた環境を利用しなさい。相手の人間性を利用しなさい。そして何より……周囲の人間を利用しなさい……貴方が辛い目に遭わない為にね？」

「四宮……先輩……」

「あの頃と比べると、貴方はとても強くなったわ。今後萩野の様な人間と対峙しても負けないくらいに……だから石上君。」

「……はい。」

「次は負けちゃダメよ。」

その言葉で……先程まで見えていた景色が自室の天井に切り替わった。

……

「夢……」

夢の中でも、変わらず後輩思いな四宮先輩の姿にフッと笑みが零れる。

「……」

次は負けちゃダメよ。

「はい、絶対負けません。」

僕の脳内に明確なビジョンが浮かんだのはこの時だった。

誤字脱字報告ありがとうございます。(。ω。)

見上げる夜空は変わらない（前編）

感想ありがとうございます（・v・）

夏休み終了まで残り1週間で切ったある日の午後……夏休みの課題を片付けていた僕は、着信音を鳴らすスマホを覗き込む。着信画面には大仏の名字が表示されていた為、課題を中断し画面をタップする。

「もしもし、どうしたんだ大仏？」

「石上さ……今忙しい？」

「いや、大丈夫。何か用か？」

「あのね、今日花火大会あるでしょ？……一緒に行かない？」

「……僕と？」

「あ、勿論ミコちゃんも一緒だよ。都合悪い？」

「いや、問題ないよ。あんまり夏らしい事してなかったから、正直有り難いくら

い。」

へふふ、そうなんだ。じゃあ……7時に待ち合わせで、ミコちゃんにもそう言つとくね。」

「ああ、わかった。それじゃ……」

電話を切ると軽く伸びをする。

「んーっ……さて甚平どこだっけ？」

……

甚平に着替え、待ち合わせ時間に間に合う様に家を出る。花火大会が行われる河川敷に辿り着くと、会場は熱気に包まれていた。様々な売り物をしている屋台、その屋台に集まる人の流れを目の当たりにし、柄にも無くテンションが上がる。

「……」

（そういえば……夏祭りなんて、会長達と行ったのが最後か……懐かしいな。）

かつての仲間達と、タクシーから見た花火が脳裏を過った。

「……さて、いつまでも突っ立っててもしょうがないな。伊井野と大仏を探さないと……」

石上は人混みを掻き分けながら歩き出した。

.....

「ねーってば、俺と一緒に回ろうよ？」

「すいません、友人と待ち合わせをしているので……」

「そうです！そもそもナンパなんて軽薄な行いをする人なんて論外です！」

「えー、そんな事言わずにさあ。可愛い子が居たらナンパすんの当たり前じゃん！

」

「か、可愛い……？」「どッ」

「……ミコちゃん？」

「可愛い！マジ可愛い！待ち合わせしてる友達が来るまでいいからさ……ね？」

「そ、それくらいなら……」「んぐーぐ」

「痛あああっ!？」

「あ、石上。」

「すいません、この2人は僕の連れなんで他当たって下さい。」

「ちえー、しゃーねーかあ……あ！そこのお姉さん、今1人い？」タタタ

「やれやれ、おい伊井野……」

「こぼちゃん、石上が叩いた！ クズだよっ！」

「叩かれる様な事しなきゃいいのに……」

「伊井野、お前1人でナンパされそうな所には行くなよ。あと、変なスカウトとかにも気をつけろよ。」

「それは大丈夫。ミコちゃんがそういう場所行く時は、ちゃんと私もいるから。」

「なら安心か……」

「ちよっと!? なんで私が1人じゃダメな感じで話すの!?」

「ナンパする奴は論外って言った5秒後にお前なんて言った？」

「ミコちゃん、褒められるとすぐ許しちゃうから……」

「……まあ無事合流出来たし、適当に見て回るか。」

「そうだね、ミコちゃんは何がしたい？」

「うーん、先ずはたこ焼き食べたい！」

1時間後……

「……凄いな。」

「うん、凄いな。ミコちゃん、さっきから休みなく食べてるもんね……」

「胸焼けしてきた……」

「私も……」

「あれ？ 2人共どうしたの？」

「「……なんでもない。」」

「ふーん……あっ！ りんご飴！ りんご飴あるよ、こばちゃん！」

「わ、私は大丈夫だから……ミコちゃん行つてきなよ。」

「美味しいのに……」

伊井野は口を尖らせ呟くと、りんご飴を売っている屋台へと小走りで向かって行った。

「……そういえば石上、私達と花火大会なんて来て良かったの？」

「ん？ どういう意味？」

「少し前に、喫茶店で女の人と一緒に居るトコ見たからさ……彼女とかじゃないの？」

「喫茶店……あ、あの人は違うよ、ゲーム友達。」

「ゲーム友達？ ふーん……石上にそんなの居たんだね。」

「ああ、この前風紀委員の書類を高等部に届けた日に知り合ってさ……意外か？」
「意外と言えば意外かなあ……石上って人と距離を置きがちじゃない？ 2年の時は石上が特定の人と一緒にのトコなんて見た事なかったし。3年になってからは……勉強とか部活も頑張ってる、風紀委員の助っ人もしてたり……知ってる？ 最近、石上の評価上がってるらしいよ？」

「へえ、そうなのか……」

（いざって時の為に打算で始めた事でも、評価されるのは嬉しいもんだな。）
「私もミコちゃんも……石上には助けてもらったしね。」

「別に恩を感じる必要は無いよ、僕が勝手にやった事なんだから。」

「うん、石上ならそう言うよね。」

僕は大仏の事、ちゃんと見てたよ。

（でも、あのセリフはズルいよね……）

「流れで聞いちゃうけどさ……石上って好きな人とか居ないの？」

「……」

「……石上？」

「……居ないよ。」

（僕に好きな人は……もう居ない。あの卒業式の日、僕の初恋は成就する事なく終わりを迎えたのだから。）

あの日と思い出すように空を見上げると……変わらない夜空が僕達を見下ろしていた。

石×つば派の人すいません（；▽；）

見上げる夜空は変わらない（後編）

つばめ先輩が秀知院を去る卒業式当日……不思議と僕の心は穏やかだった。つばめ先輩に振り向いてもらう為、そして釣り合う男になる為に自身の研鑽に明け暮れた日々……三学期の期末テストでは、目標にしていた50位内に入る事が出来た。やれる事はやった……残るは卒業式の後、つばめ先輩に告白するだけだと自分を鼓舞した。だけど、結果的に僕の初恋は成就する事はなかった。つばめ先輩は……いつも優しい笑みを浮かべていたその瞳から、大粒の涙を流して僕に言ったのだ。

ごめんなさい

優君は悪くない

私が臆病だから

涙ながらにそう話す彼女を見て僕は、振られた事よりも……いつも太陽の様な笑顔を浮かべていた彼女を泣かせてしまった事が、何よりもショックだった。両手で目をこすり、それでも溢れる涙を止められない彼女を僕は……只々見ている事しか出来なかった。

3月の事故から2年前の4月に逆行しても……その事に関してどうこうする気持ちは少しも湧かなかった。大泣きする程……不安で、悩んで、苦しんで、罪悪感を感じて、その全てを一身に受け止めた……つばめ先輩が伝えてくれた告白の返事を無かった事にする様な行動を取る事は……どうしても出来なかった。それでも、つばめ先輩と別れる寸前……1つだけ言えた事がある。

それは、心からの本心……つばめ先輩を好きになって良かった。

その言葉を聞いて更に号泣する彼女を慰めながら、不意に見上げた夜空は……いつもと変わらずに僕達を見下ろしていた。

……

「……上、石上！ 大丈夫？」

「ん、ああ悪い……ボーツとしてた。」

「何処かで休憩する？」

「いや、大丈夫。」

「でも……」

「こばちゃん、こばちゃん！ 見て、りんご飴アタリだからってもう一本もらっ

ちゃった！」

「りんご飴で……」

「アタリ棒？」

走って来た伊井野の発言に僕と大仏は困惑する。

「うん、買ってすぐ食べたら棒にアタリって書いててね。もらったの！」

「すぐ食べたのか……」

「よくあの短時間で食べられたね、ミコちゃん。」

「人をそんな食いしん坊みたいに言わないで！」

（いや、そんな可愛らしい言い方じゃなかっただろ。）

（ミコちゃんは、食いしん坊よりは大食漢って言った方がしっくりくるかなあ……）

「石上……はい。」

「え？」

「は、早く受け取りなさいよ。」

「ミコちゃんが人に……」

「食べ物を渡すなんて……」

「ちょっと！ 2人共何よそれ！」

「だって……なあ？」

「うん、ミコちゃん一体どうしたの？」

「……お礼。」

「え？ 伊井野なんて？」

「だからっ！ お礼！ 風紀委員の事とか、中庭の時とか……」

「……そっか、じゃあ有り難く頂くよ。」

「ん。」

伊井野は顔を伏せたまま、りんご飴を差し出す。落とさないように気をつけながら受け取り、そのまま一口食べてみる。カリッという音と共に、口の中に甘みが広がった。

「甘いな……」

「当然でしょ、りんご飴なんだから。」ニコー

伊井野の言葉に被せる様に、頭上から破裂音が響いた。

「あっ……」

「花火……」

「もうそんな時間になってたのか。」

1つ目の花火を追いかけのように、次々と花火が打ち上がる。まるで……真っ黒なキャンバスに大輪の花を描く様な幻想的な光景に僕達は只々空を見上げていた。30分もしないうちに最後の花火が舞い上がり、パラパラと火花が落ちる音が聞こえる。全ての花火が散り終える……それは帰路に着く合図だ。

「そろそろ帰るか、伊井野食べ残したモノとかないな？」

「なんで食べ物限定なのよ！もう無いわよ！」

「そりゃ、あれだけ食べたらね……」

「こぼちゃんまで！まだ腹八分目くらいだもん！」

「えー……」

「うわぁ……」

「何よもう！」

軽口を伊井野や大仏と言い合いながら帰路に着く。あの時に見上げた夜空も……今日の夜空も変わらないけれど、僕はアレから色々と変わる事が出来たと思う。巻

き戻った時間を生きて、少しずつ自分を変えて、心残りを少しずつ無くして、未来に待つ悲劇を無くしたくて僕は……

「石上、ボーッとし過ぎ。」

「どうしたの？」

前に行く2人の呼び掛けに答える。

「なんでもないよ、帰ろうか。」

もうすぐ夏休みが終わる……新学期が始まれば、荻野の件に決着をつける時が来る。その為の準備も、策も用意した。足りないモノは、ほんの少しの勇氣だけ……お前はおかしくなんてない

次は負けちゃダメよ

会長と四宮先輩の言葉を思い出した僕に、足りないモノは無い。

石上優は呼び出す

誤字脱字報告ありがとうございます（「A」）

夏休みが明けて1週間が過ぎた頃……僕は逆行する前と今回で、明確に違う点がある事に気が付いた。それは……

「おはよ！ 石上君。」

「ああ、おはよう大友。」

大友は僕に朝の挨拶を済ませると、友人達の集まる席に歩いて行き会話に加わる。

「はあ、彼氏欲しいなあ……」

「京子ったら、また言ってる。」

「もう私達で独り身同盟作る？」

「それはいやあ！」

面白おかしく話す女子グループの会話が聞こえて来る……どうやら、大友は荻野

と付き合っていないらしい。前回の今頃は、既に放課後の教室で逢引をしていたはずだ。でも付き合っていないのなら、それは僕にとっては好都合だ。荻野がどうなろうと、恋人じゃないのなら大友が傷付く事はないだろう……不意に昔、四宮先輩に言われた事を思い出した。

……

「石上君、確かに貴方の取った行動は並大抵の人間には出来ない事です。大友京子の笑顔を守りたいという貴方の想いはとても尊いモノ。でもね、石上君……貴方は大友京子を守ったと同時に、彼女の成長する機会を奪ったとも言えるのよ？」

「成長する機会……？」

「そうよ。貴方が荻野の事をあの場で公表すれば、彼女の心は少なからず傷付いたでしょうね。もしかしたら男性に対して恐怖を感じる様になるかもしれない……でも、荻野の様な男に騙される可能性は低くなる。」

「それは……」

「彼女はこれから高校、大学と色々な人間と出逢うでしょう。もしかしたら、また荻野の様な人間に出逢うかもしれない。石上君、貴方……その度に自分を犠牲に

して助けるつもり？」

「それは……確かに四宮先輩の言う通りだと思います。でも荻野はっ！」

「黙っていれば危害は加えない……そう脅されたと言いたいのか？」

「……………」

四宮先輩の言葉に、僕は何も言えなくなってしまった……

「はあっ……………どうして貴方が守ってあげないのよ。」

「え？」

「彼女に危害が及ぶなら危険がなくなるまで貴方が守る、それで良かったんじゃないのか？」

「でも、僕なんかじゃ……」

「……………自分に自信がないのは貴方の悪い所よ。私は言っただけよ、頑張っただけよ、良い男になりなさいと……………いい？ 良い男というのは常に自分に自信を持ち、他者への気遣いを欠かさず、勉強に打ち込み……………鋭い眼光を放ち……………路地裏で隠れて泣いている女の子を見つけ出す事が出来る……………そういう人が……………」
ぎぎぎ

「……………ん？ もしかして会長の事言ってます？」

「んんー!? ま、まあ客観的に見てね? 主観じゃなくてあくまで客観的に見た話ね!?」とにかく! もっと自分に自信を持ちなさい、わかったわね?」

四宮先輩はそう言うのと僕の頭をポンポンと叩いた。

「……っス。今すぐは無理ですけど、頑張ってみます。」

「ふふ、それでいいのよ。」

……

四宮先輩……それでも、やっぱり僕は大友が傷付かないで済むのならそうしたい。僕は準備していた封筒を隙を見て荻野のロッカーへと投入した。

〈明日の昼休みに放送室で待つ〉

シンプルな文だけど、証拠も一緒に同封したから荻野は来るだろう。

「……」

いよいよだ……あの時は何も言えなかったし、何も出来なかった……だけど、いつまでも引きずってなんていられないんだ。

くそッ！いつからバレていた!?

いや、そもそも一体誰が……こんな事でコケる訳にはいかないっ……

明日の昼休みに放送室で待つ、か……警戒するに越した事はないな……

石上優は断罪する

感想ありがとうございますm(Ȧ:Ȧ)m

次の日、昼休みまでの授業は心を落ち着かせる事に費やした。昼休みを告げるチャイムの音が鳴り響き、僕は一目散に放送室へと向かい放送室の中に入ると機材に凭れ掛かり萩野を待つ。

「……」カチャッ

ドアノブが回され扉が開くと、室内を覗き込む1人の男子生徒……萩野と視線がぶつかった。

「アレ？ 確か、石上君……だったよね？ 一学期の期末で一位取った……どうして此処に？」

「猫被らなくてもいいぞ……お前を呼び出したのは僕なんだから。」

「へえ……そう。それで何の用？ あんなモノまで寄越して。」

「単刀直入に言う、あんな事はもうやめろ。」

「……大事にするつもりはないって事？」

「それはお前次第だ。」

僕の発言に付け入る隙があると判断したのか、荻野の顔を期待と安心の色が彩った。

「ふーん、そっかそっか。でもこっちにも付き合ってもんがあるんだよね。急に女の子の供給が出来なくなるのも困るんだよ。なあ石上、お前にも女回してやるからさ……黙っててくれない？」

荻野は……あの時と同じ様に、厭らしい笑みを浮かべてそう提案してきた。

「お前は、人をなんだと思ってるんだっ……」

「そんなに怒るなよ。なんだったら、特別にお前好みの女の子を仕入れてやって……」

「そんなモノは要らない……荻野、本当にやめるつもりはないんだな？」

「……石上、お前の狙いはわかってんだよ。」

「……狙い？」

「しらばっくれるな、態々放送室に呼び出したんだ……警戒するのは当たり前だろ。お前この会話を校内放送で流すつもりだったんだろ？」

荻野の問いには答えず、続きを促す。

「……それで？」

「ハハハッ！ 残念だけど、此処に来る前に放送室のブレーカーは落として来た。お前の思惑は失敗したって訳！ でも此処から出た後にバラされたんじゃ堪らないな、誤魔化すのも手間が掛かる……なあ石上、最近お前……風紀委員の2人と仲が良いみたいだな？」

荻野のその言葉に思わず体が硬直する。

「風紀委員……しかも校内の嫌われ者2人と仲が良い変わり者、石上くん？ もしお前がこの事をバラせばあの2人……どうなるかわかんないよ？」

僕が思っていた以上に、荻野はクズだった。関係の無い女子を平気で巻き込める程の。だけど……

「知ってるよ、お前が……臆病だって事は。」

「は？」

「良くある話だろ？放送設備のある場所で暴露話をしたらスイッチが入って筒抜けって事が……だから態々此処に呼び出したんだ。荻野、お前はクズな行いをする割に臆病で警戒心は薄い。僕に簡単に尻尾を掴まれたのがイイ証拠だ。そして、後ろ暗い事をしている人間が放送室に呼び出された……まず間違いない会話が校内放送される事を警戒する。」

「……それがどうした、当然だろ!？」

「だから、お前がその事実に関心した事が……僕の狙いだったんだよ。お前は此処に来る前にブレーカーを落とした。だから油断して本音で喋るし、平気な顔して僕を脅迫までする……」

「……何が言いたい？」

「……お前を此処に呼び出した理由は、この部屋が校内唯一の防音設備のある部屋だからだ。」

「……は？」

意味がわからないと表情が告げる荻野に続ける。

「だから……お前に好き勝手喋ってもらうのが僕の狙いだったんだよ。外からの音

に惑わされずに、自分の口で……荻野コウという人間がどういう奴なのか……」

僕は隠してあった持ち運び型バッテリーを持ち上げた。放送機材とバッテリーは二本のコードによって繋がっている。

「な、なんだよそれっ!？」

自身の頭に浮かんだ考えを振り払う様に、荻野は声を荒げた。

「この機材は少しだけイジってあってね……電源が落ちると、こっちのバッテリーに自動で電力供給が切り替わるようになってるんだ。」

「で、電源が落ちるとって……お、お前……」

「だから、お前がブレーカーを落としてもこの機材は普通に使える……さっきまでの会話は筒抜けって事なんだよ。」

……………

へや、やりやがったなあああああっ!!??>

荻野の叫びが校内に響き渡った。

「え、これマジなの？」

「荻野って演劇部のヤツだよな？」

「うわっ、荻野君ってこんな奴なんだ、最低。」

クラス中が校内放送で流れて来る2人の会話を騒つき出した。

「ミコちゃん、これ……」

「石上……」

……

荻野はその端正な顔を歪め、此方を睨みつける。

「ぐううっ、石上お前！ よくも……あの2人がどうなってもいいって事かよっ!？」

「……」

「友達を見捨てるって訳？ へえ、大した正義感だな……」

「僕が守るよ。」

「……あ？」

「2人に危険が及ばなくなるまで、僕が……2人を守る。」

「このっ……!」

その直後……荻野との会話は、放送室になだれ込んで来た教師陣により止められた。最初、一部の教師から学園の評判の為に荻野の件は学内で片付けるべきという

意見も出たが、放送により全校生徒が聞いていた事と荻野の行いに事件性があった為、警察への通報を余儀なくされた。荻野が教師に両脇を抱えられ連れて行かれる所を見送ると、はーっと深く息を吐いた。

「……」

お前はおかしくなんてない

次は負けちゃダメよ

（会長、四宮先輩……全部終わりました。ずっと変わりたい、弱い自分から抜け出したいと思っていました。僕は、少しは変われたと思います。2人の言葉があったから頑張る事が出来ました。支えてくれて……本当にありがとうございました。）

僕は残っていた教師に職員室へと連れていかれた。意図的に問題を大きくし、バツテリーの無断使用、恐らくは何らかの処分が下るだろう……だけど、僕の心は満たされていた。

石上優は忘れたい

感想ありがとうございます（・∀・）

あの後……職員室に連れて行かれた僕は、事の詳細を学年主任の教師に話した。教師に一切の相談をしなかった事とバッテリーの無断使用についての叱責を受けたが、それ以外について咎められる事は無かった。僕には反省文の提出が課され、萩野については緊急会議の後、警察署に連れて行くらしい。

「失礼しました。」

「待て。」

職員室を出て教室に戻ろうとすると、学年主任に呼び止められた。

「石上、今はやめておけ。多分お前が教室に戻ると授業にならん。とりあえず、今日は終業時間まで保健室に居てくれ。」

その言葉に確かにそうだと思ひ直す。

「確かにそうですね……あ、鞆が教室に置いたままなんですけど……」

「そうか、後で誰かに持って行くように言っておこう。とりあえず、授業が始まったら保健室へ向かってくれ。」

「わかりました。」

授業開始のチャイムが鳴るのを待って保健室へと向かう。保健室に入ると保健医も居なかった為、勝手にベッドに横たわる。ベッドに横になると眠気に襲われ、少しずつ瞼が下がり始めた。

（……眠い。そういうえば、最近ちょっと……寝不足、だったっけ……）

荻野の件が終わり気が抜けた為か、僕の意識はアッサリと沈んで行った……

……

「……君、石上君！」

パチリッと目を開けると、此方を見下ろす大友と目が合った。

「……大友？」

「石上君、鞆持って来たよ。」

「大友が持ってきてくれたのか、ありがとう。」

「ううん、気にしないで。それより……凄い事になってるよ？ 私達のクラスもだけど、他のクラスも荻野君の話題で持ち切り。」

「そりゃ、そうだろうな……」

「うん……はぁー、荻野君があんな人だったなんて……付き合わなくて良かったよ。」

「……え？大友、今なんて？」

大友のその言葉に思わず聞き返す。

「えーと……私ね、ちょっと前に荻野君に告白されたんだ。」

「そ、そうだったのか？」

「うん、意外？」

「意外っていうか……なんで断ったんだ？」

「別に荻野君のしてた事を知ってたとかじゃないよ？ 今日初めて知ったし……」

「それはそうだろうけど……」

「……なんかね、違うなあって思ったの。」

「違う……？」

「うん、石上君はさ……3年生になってから凄い頑張ってたよね？部活も勉強も頑張って、クラスの雑用とか……風紀委員の手伝いもしてたでしょ？そういうのを見てたらね、荻野君の笑った顔とか言葉が……凄く嘘っぽく見えちゃって……」だから振っちゃった……そう洩らす大友に、僕は言葉を失った。

「だから……私が荻野君と付き合わずに済んだのは、石上君のお陰って事になるのかな？石上君が頑張ってるの見てたから、私は荻野君の告白を受けずに済んだ訳だし……だから石上君、ありがとう！」

「そうか、僕が……頑張ったから……」

大友のその言葉を聞いて僕は……涙を堪える事が出来なかった。

「え!?石上君、大丈夫!?どこか痛い!?」

「違う、違うんだ大友……なんでもないんだ……!」

慌てる大友を見てふと思う……別に見返りが欲しかった訳じゃないし、感謝して欲しかった訳でもない。でも、もしかしたら僕は……大友に見てもらいたかっただけなのかもしれない。過去に戻って……頑張って、変わった僕の事を。

「そろそろ授業始まるし、私は教室戻るね？」

「ああ、鞆ありがとな。」

「うん、また明日ね！」

「……また明日。」

大友が出て行った扉を見つめ、閉まるのを確認すると……

「……………」↑先程までの自分を思い出し中

(……ああああああああ……？ 恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい……！！？

大友の前で泣いてしまったあああ……！！？)

黒歴史!! 年頃の男子が女子の前で涙を流す……それは男子にとって耐えがたい恥辱である！ 女子が近くにいれば例え、小指をタンスの角にぶつけようが、脛を強かに打ち付けようが、ウルシゴキブリを目の前にしようが歯を食いしばりなんでもないような顔をするのが男子という生き物である！ 故に……

「むごおおお……？ うごおおお……！」*ハッハッハッ*

枕に顔を埋めて悶絶するのは、必然的行動であった……何はともあれ石上優、過去との決別完了。

風紀委員は逃げ出したい

感想ありがとうございます（「A」）ゞ

とりあえず自己満でまだ続ける予定なのでこれからもよろしく願います（—

—；）

石上優が職員室で事件の詳細を教師に伝えている頃……伊井野ミコ、大仏こばちが所属するクラスで2人は……

「あ、あのバカっ……」

「くうう……」

恥ずかしさのあまり、居た堪れなくなっていた！

理由は先程の校内放送による、石上と荻野の会話の中で出たこの発言!!

僕が守るよ

2人に危険が及ばなくなるまで

僕が……2人を守る

Presented by
Yu Ishigami

思春期の女子が最近、好意的に見ている男子からのこの発言！ このクラスのみ

荻野の件よりも石上の発言で場は騒然としていた!! 女子の黄色い声や男子の口笛が乱舞する教室で2人が取った選択は……

「……ミコちゃん顔真っ赤だよ?」

「……こぼちゃんも耳、赤くなってるよ?」

立場の押し付け合い! 普段はお互いに助け合う親友同士……だがあまりの恥ずかしさに両者、相手に自分以上に恥ずかしがってもらいクラスメイトの好奇の目から逃れる方法を取る! しかし……

「くううっ……」

共倒れになっただけであった。

……

〈保健室〉

「ふー、なんとか耐えられた……」

なんとこの男、放課後まで悶え苦しむ事凡そ2時間! 只々己の心を喰らう羞恥心と闘っていた!

「女子の、しかも大友の前で泣くななんて……あ、思い出したらまた……ペーニー」

「——！ふう、まああんな恥ずかしい思いするなんて一回限りだろうし。」

石上は余計なフラグを立てた。

「……そろそろ行くか。」

……

〈風紀委員室〉

「やっと終わった……」

「とりあえず逃げて来たけど、誰もいなくて良かったねミコちゃん……」

「ホントにね……石上の所為でとんでもない目に遭ったわ。」

「私1ヶ月くらい学校休みたくなっちゃった。」

「サボりは良くないけど、私もちょっとだけ。」

「失礼します。あ、やっぱり此処だったか。」

「い、石上!？」

「ん？ どうした、なんかあったのか？」

アンタの所為でしょうが！

「くうっ……な、なんでもない！」

とは言えない伊井野ミコであった。

「石上、その……教室に戻ってないみたいだったけど、大丈夫だった？」

「ああ問題ないよ。教室に戻ったら授業にならないからって言われて、ずっと保健室に居たんだ。罰も反省文だけで済んだ。」

「そっか、なら良かった……」

「……2人には怖い思いをさせて悪かった。まさか、荻野の奴が2人に危害を加えるなんて言うとは思わなかったんだ。」

「「ンンン……」？」

石上、まさかの自身の恥ずかしいセリフを吐く羽目になった話題を自ら振る！

（嘘でしょ!? 自分からその話題振るの!?）

（石上、正気なの……?）

「だ、大丈夫！ 石上が気にする事じゃないし！」

「そ、そうそうミコちゃんの言う通り……気にしないで！」

「……ありがとう。でも、暫くは僕が2人を家まで送るよ。」

「「っ!?」」

「で、でもそんな迷惑掛けられないし……」

「そ、そうだよ、石上に余計な負担が掛かる事になっちゃうし……」

「それでもし何かあったらどうするんだよ。言ったら、僕が守るって。」

マジである。この男、自分の発言の異常性に気付いていない！ かつて四宮かぐやに恋愛相談を持ち掛けた際も、告白やデートプラン、果てはプレゼントにまでその常軌を逸した価値観を反映し、四宮かぐやをドン引きさせた過去を持つ!! 鋭い観察眼を持ち他者に関する事ならば些細な事にも気付く石上だが、自身にはその効果が全く発揮されなかった!! 詰まる所この男、自身の発言に関して全く恥ずかしいと思っていないのである!

(も、もう……)

(お、お願いだから……)

(勘弁してええ!!)

思春期の女子にはなんとも酷な状況であった。

64話、158話とか読む限り石上はクサイ台詞に抵抗がないと判断しました。……抵抗がないというか、そもそもクサイと思っていない可能性すらありますね……

荻野コウは逃げられない

感想ありがとうございます（・∀・）

修正しました。☒（ω☒）

季節は夏から秋へと移り変わり、暦は10月へと進んだ。荻野の事件から1週間は、色々と言問攻めにされたり遠巻きに眺められたりしたけれど、特に問題なく過ごす事が出来た。そして事件の当事者である荻野は、数日で秀知院を去った。退学処分か転校かはわからない。どういう訳か、教師に聞いても知らぬ存ぜぬの一点張りで詳細不明なのだ。まるで、誰かの圧力で箝口令が敷かれたように……最早習慣となりつつある伊井野と大仏の送迎を済ませると、最近中等部に現れた噂を思い出す。かつて荻野の仲間だった奴等が……次々と警察署に自首をしているという噂を。

10月某日、秀知院学園高等部生徒会室……

「会長、お聞きになりました？ 先月、中等部で起きた事件について。」

「ああ、妹から聞いたよ。なんでも……女子生徒を他校の男子に斡旋していた生徒の悪行を校内放送で暴露したそうじゃないか。」

「ええ、当時は昼休みで生徒は勿論、教師達も聴いていて中々の騒ぎになったそうですよ。」

「確か名前は、石上……」

「石上優、中等部の3年生ですね。……少々興味深い経歴の持ち主です。」

「珍しいな、四宮が他人に興味を持つなんて。」

「会長もきつと興味を持ちますよ。石上優……彼は2年の終わりまで成績は下の中、良くて下の上程度の人間でした。しかし、3年になると最後の大会が迫った陸上部へ再入部し、都大会入賞を果たします。次いで学期末テストで一位を獲得、それ以降は所属もしていない委員会の手伝いをしたりと人が変わった様だと一部の

人間から噂されています。」

「……3年に進学したのを機に、自身の行いを改めたとは考えられないか？」

「人はそこまで急激に変わる事など不可能です。」

「だが……」

「ええ、事実変わっているもので有り得ない事ではないでしょう。私が興味を持ったのは、実はそこではありません。」

「む？ では一体何処に……」

「話は戻りますが、事件の当事者は荻野コウという生徒らしいのですが……消息不明なんです。」

「何……？」

「調べてみましたが、詳しい事情を知っていると思われる教師には箝口令が敷かれています。そして最近……荻野コウの悪友達が全員警察署へ自首をしたそうです。」

「……何者かが裏で動いていると？」

「ふふ……誰か聞いたら会長、驚きますよ？」

「四宮は知っているのか？」

「少々苦勞しましたが、四宮家の情報網に掛からないモノはありません。」

「一体誰が……」

「……龍珠組ですよ。まさか彼女がこの様な動きを見せるとは思いませんでした。」

「龍珠が？ 一体何故……」

「さあそこまでは……必要なら調べてみますが？」

「……いや必要ない。アイツがそういう行動を取るのなら、それなりの理由があるんだろう。あまり深追いするべきじゃない。」

「……そうですね。そういうえば、再来月の奉心祭の予算の件ですが……」

〈喫茶店〉

「遅い。」

「ええー、急な呼び出ししといてそれですか龍珠先輩。」

いつもの様に伊井野と大仏の2人を送り届け帰ろうとした直後、龍珠先輩から……
〈いつもの喫茶店〉というシンプル極まりないメッセージで僕は呼び出された。

「いいから座れ、時間は待っちゃくれねえぞ。」

「まさか先輩……期間限定イベント手伝わせるつもりですね？」

「わかってるんだったら、早くログインしろ。」

「態々喫茶店で待ち合わせなくても……」

「バカ、こういう協力イベントは集まってするもんだろ。」

「まあ……一理ありますね。」

「ほら、早くしねえと出遅れるぞ。」

「……目当てのアイテム手に入らなくても、拗ねないで下さいよ。」

「……私がいつ拗ねた？」サギ

「……」

（割と頻繁に……とは言えない。）

龍珠先輩の此方を睨む視線を受け流しながらゲームを開始する。

「っし！やるぞ石上。」

「うっす。」

ゲーム友達との夜は更けていく……

10月某日某所……

「……………」

（なんでっ、なんで俺がこんな目になっ………！）

あの日、石上に嵌められた俺は教師に付き添われ警察署に連行された。取調室では黙秘を貫いた。既に親には連絡が入っているだろうから、揉み消してくれるまで耐えればいい……そう思っていた。だが、予想に反してその日のうちに俺は警察署から解放された。親が速攻で揉み消しをしてくれたと、気分良く警察署を出て真っ直ぐ家に帰る。こういう時くらいはすぐに帰らないとな………と何の警戒もせず、家のドアを掴もうとした瞬間、背後から何者かに羽交い締めになれ、車に放り込まれた。車の中で目隠しをされ、両手を縛られて、ガムテープで口を塞がれる。何がな

んだかわからない、何故俺がこんな目に遭うんだと必死で叫ぶが濁音の付いた音に
しかならない。暫くすると、車が止まり担がれて移動させられる。

「オラよっとー!」^{アッギ}

「ぐうっ!」

床に落とされると、目隠しとガムテープを剥がされてやっと周囲の状況が把握で
きた。

「痛っ…な、何がっ……!」

目の前には、明らかにその筋の人間と確信出来る容姿の大人達が此方を見下ろし
ていた。

「な、なんなんだよアンタ達は!? ……コレは犯罪だぞ!」

「ボウズに言われたかねえな。」

「お嬢からダチが困ってたら助けるように言われてたが……中坊にしちゃ中々の手
際だった。流石、お嬢がダチと認めた奴だ。」

「お、お嬢って誰だよ!? 僕にそんな友達は……」

「お前じゃねえよ。」

ドスの効いた声に息が詰まる。

「まさか、石上……？」

「おう、石上のボウズはお嬢のダチでな……中坊がこんな問題に関わるたあ思わなかったが……」

「そ、それでアンタ達は一体……」

誰だと聞こうとした時、目の前の男が着ているスーツに小さく刺繍された部分が見えた。

〈龍珠組〉

「り、龍珠組っ!？」

「やっとなついたか……」

なんで……なんで龍珠組が出てくるんだよ!？石上にこんな後ろ盾があったなんて……

「言っておくが、石上のボウズは俺らの事は知らん。お嬢に言われて勝手に動いただけや。」

龍珠組、お嬢……まさか……秀知院で絶対に敵対してはいけない要注意人物の1

人……龍珠桃？

「ア…アッ……」ガクガク

その事実に行き当たると、ガクガクと体が震え出した……

「ご、ごめんなさい……もうこんな事はしません！ だからっ!!」

「じゃ、誠意ucciゅうもん見せてもらおうか？」

「せ、誠意？」

「お前の胸糞悪い遊びに関わった人間、1人残らず言え……1人残らずだ。」

「は、はい！ 言います！ 教えます!!」

「もし、後になって言い残した奴が見つかったら……」

「み、見つかったら……？」

「お前……龍珠組から一生逃げ続けるだけの人生を送りたいか？」

その言葉に……選べる選択肢は残っていないのだと理解した。

「ア…ア…」

もう逃げられないと……恐怖で意識を失う寸前に見えたのは〈龍〉の文字だった。

小野寺麗は探りたい

感想ありがとうございます（・V・）

私には最近……気になる男子がいる。気になると言っても、それは恋愛的な意味じゃない。強いて言えば……好奇心？ だと思う。キツカケは、先月に起きたある事件……

昼休み……いつもの様に友達と机を並べてお弁当を食べていると、男子2人の話し声が校内放送で聞こえて来た。どうやら、話している2人は荻野と石上というらしい。荻野は確か演劇部の人間だ……話の内容は荻野の最低な行為（自分と関係を持った女子生徒を脅し、他校の生徒に貸し出していたと後で知った）を糾弾するモノだった。いつの間にか昼休みの喧騒は鳴りを潜め、皆が放送に耳を傾けていた。

荻野は最初見逃してもらおうように交渉してたけど、通用しないと気付くと今度は、石上と仲の良い風紀委員2人に危害を加えない事を交渉材料に脅しをかけ始

めた。風紀委員の2人と仲の良い男子生徒……という情報でやっと石上という男子生徒が誰かわかった。いつも2人で行動してる風紀委員の伊井野ミコと大仏こばち……周りは、あまり良い評判を聞いた事がないけど……最近男子と一緒に居る所を何度か目撃した事があった。風紀委員、しかも堅物な伊井野ミコと多数の女子に嫌われている大仏こばちと一緒に居るなんて物好きだな……と思った。

どうやらこの校内放送は石上の策略で、荻野の行いを全校生徒に周知する事が目的だったらしい。荻野の叫び声が校内に響き渡った所で、先生達が廊下を走って行くのが見えた。多分、放送室に向かっているんだろうな……今更止めたところで意味なんてなさそうだけど。

教室は先程から流れて来る放送の内容に騒然としていた。そろそろ先生達が放送室に着いたかなと思った頃……

〈僕が守るよ。〉

〈2人に危険が及ばなくなるまで、僕が……2人を守る。〉

という核爆弾級の言葉が聞こえて来た。近くにいた一部の女子達は、キャーキャーとほんのりと紅潮した顔を手で覆っている……多分、私も少し顔が赤くなっていた

と思う。その直後、先生達の声が聞こえて放送は止められた……石上優という男子が気になりだしたのはその時からだと思う。

石上優という男子は……良くも悪くも、それなりに有名らしかった。

2年までは影が薄く友達もいない、成績も下から数えた方が早い程、所属していた陸上部は2年の春に退部……あまり人と関わるタイプではないらしい。それが3年に進級すると、陸上部に再入部して都大会入賞、学期末テストでは不動の一位だった伊井野ミコと同率一位。クラスの雑用や委員会の手伝いも積極的に取り組む変わり様。とても同一人物とは思えない変化だ。

……変化といえば風紀委員の2人にも起きた。堅物な伊井野と女子達の嫉妬で疎まれていた大仏さんに対する認識が変わったのだ。原因は荻野の発言、いくら疎ましく思っても自分と同じ年の子が酷い目に遭いそうになったと知って、今まで通り嫌がらせやイジメを続ける人間は激減した。人は良くも悪くも他人に影響を受ける生き物だ。周りが嫌がらせを辞めたのに、自分だけ辞めないなんて出来る筈が無い。石上の行いは過激ではあったけど、全てが良い方へ働いたみたい……

「おのちゃん、お待たせ！」

私を呼ぶ声に、思考から意識を外し顔を上げる。小野寺だからおのちゃん……普通に麗じゃダメなのかと思ったけど、そこまで呼び名に拘っている訳でもないので好きに呼ばせている。

「あんま待ってないから大丈夫。それじゃ、行こうか大友さん。」

今日は石上と同じクラスの大友さんから話を聞く為に待ち合わせをしていた。適当な喫茶店に入って注文をすると、早速本題に入る。

「大友さん、石上と同じクラスだよ？ ちょっと聞きたい事があるんだけど……」

「石上君？ 私にわかる事ならいいよ。」

「……石上ってどんな奴？」

「どんな？ うーん、一言で言うなら頑張り屋さんかなあ。」

「頑張り屋ね……」

「うん、部活とか勉強とか凄い頑張ってるよね！ あと、委員会とかも！」

「大友さんとは仲良いの？」

「良いと思うよ？ 休みの日に遊んだりはしないけど、学校じゃ色々助けてもらってるよ。挨拶する時もなんか……ニコッて感じで優しい顔でしてくれるし。」

「ふーん、なんかイメージと違うね。」

「私も最初はちょっと暗い感じの男子なのかなって思ったけど、全然そんな事なかったよ。」

「なるほどね……」

「ねえおのちゃん、私も1つ聞いて良い？」

「別にいいよ、何？」

「おのちゃんてさ、石上君の事好きなの？」

「はあっ!? なんでそうなの……」

そこで私は、現在の自分の行動を思い返した……ある男子について調べ回り、同じクラスの女子に詳細を聞く女子……

（もしかして、今の私って……気になる男子について聞いてるみたいになってる!?）

「ち、違うから！あの放送聞いてどんな奴か知りたくなっただけだから！」

「……ふーん？」 いびき

「信じてないでしょ!? ホントだから！大体それを言うなら大友さんはどうなの

!？」

「私？」

「そうだよ、仲良いんでしょ？知らない内に好きになったりするんじゃないの？」

「うーん……真面目だし、優しいし、凄くいい人だと思うよ？」

「何？それだけ？」

「うん、単純にタイプじゃないんだー。」

大友さんは一切悪びれる事も無く、石上との可能性をバツサリと否定した。

（うわっ、キッツ……）

「そ、そうなんだ……」

「うん。あっ、すいませーん！ショートケーキお願いしますーす。」

「……」

（なんか……石上がかわいそうに思えてきた……もしこれで、石上が大友さんの事が好きだったら目も当てらんない……）

……

「あ……」

(石上……)

数日後……廊下を歩いていると、偶々石上の後ろ姿を目撃する。私は特に意識する事無く近付くと……

「石上、強く生きなよ……」サキ

「え、小野寺いきなり何？」

「……ん？　なんで私の名前知ってんの？」

「あ……そ、その、誰かにそう呼ばれてる所を見た事があってさっ……」

(危なっ……そういえば、まだ知り合ってなかったわ……)

「ふーん……ね、連絡先教えてよ。なんかの時、必要になるかもだし。」

「ああ、いいよ。」

「……」

(とりあえず……噂はアテにしないで、私の目で見て判断しよう。)

小野寺麗、色々と成長出来るお年頃。

風紀委員は確かめたい

感想ありがとうございます！（・A・）

〈風紀委員室〉

「全くもうっ！ 皆学校に関係ない物持って来すぎなのよ！」

「まあ気持ちにはわかるけどね……ミコちゃん、とりあえず検分だけしちやお？」

「そうね、じゃあ私はコレを……」

「……ミコちゃん、前みたいにエッチなページを何往復もするのはダメだよ？」

「そ、そんな事してないもん！」

「ウン、ソウダネー。じゃあ始めよ？」

「……してないもん。」

ペラペラとページを捲る音が部屋を満たし始めた頃……

「……」

（最近の少女漫画って過激だよねえ。そういえばミコちゃんは……）

「ううん……」ぐーん

「ミコちゃん、どうしたの？ またエッチな漫画でもあった？」

「ないからっ！ その、この記事読んで……」

「うーんと……」

〈悪い男に騙されるな！ ヤリチン診断で自分を守れ！〉

「うわあ、凄く頭の悪いタイトル……」

「うん、それはまあ……それで、この診断って奴をちょっと……」

「えーと？」

1、女に優しくする男はヤリチン！

2、常に女と一緒にいる男はヤリチン！

3、女の頼みをアッサリ聞く男はヤリチン！

4、ボクサーパンツを履いてる男はヤリチン！

5、男友達より女友達が多い男はヤリチン！

「……独断と偏見が凄い、こんなの信じる人いる訳……」

「も、もし石上がヤリチンだったら……!?」

「いるし。もー、石上はそういう男じゃないでしょ？　そもそも中学生だし。」

「うう……それはわかってるけど、何か気になっちゃって……」

「はあ、じゃあ確かめに行く？　石上、まだ帰ってないと思うけど……」

「と、とりあえずバレない様に隠れて調べよ？」

「はいはい。」

検証1、女に優しくする男はヤリチン！

「……石上は普通に優しいよ？」

「うん、知ってる。」

「や、ヤリチ……」

「違うから、偏見にも程があるから。」

検証2、常に女と一緒にいる男はヤリチン！

「石上って割と私達と一緒にいる事多いよね。」

「や、ヤリチ……」

「違うってば……じゃあ、私達以外の女子って事にしよ？」

「そういえば……あんまり見た事ないかも！」

「良かったねー、ミコちゃん。」

……

「石上、おつ。今帰り？」

「ああ小野寺か、いやちよつと頼まれ事を……」

「へえ、どんなの？」

「大友に課題の手伝いを頼まれて……」

「大友さんの……強く生きな。」オ。ン

「何その哀れんだ目？」

……

「こばちゃん！ い、石上が女子というよ！」

「……」ム

「こばちゃん？」

「……まあ、そういう時もあるでしょ。」

検証3、女の頼みをアッサリ聞く男はヤリチン！

「ごめんね石上君、課題手伝わせちゃって。」

「気にしないでいいよ。」

.....

「あああ！こばちゃん、3連続クリアだよ！」

「今日に限ってなんてタイミングの悪い……」

検証4、ボクサーパンツを履いてる男はヤリチン！

「……ミコちゃん、聞くの？」

「ど、どうしよう……漫画みたいに転んだ拍子を狙って……とか？」

「絶対にやめたほうがいいと思う。」

「……ん？2人共委員会は終わったのか？」

「あ、うん。石上お疲れ。」

「おう、お疲れ。」

「ねえ、石上……」

「ん？」

「今どんなパンツ履いてるの？」

「

（ミコちゃん！ それじゃ只の変態だよ!?)

「は？」

「ごめんね、ミコちゃん思春期だから……」

大仏は保身に走った。

「まあ伊井野だしな……」

「その納得の仕方やめて！」

「……で、どんな理由があんの？」

「ミコちゃんがコレ読んで気になっちゃったみたいで……」

「んー？」^{うん}

「……」

「……………」^{アッギアッギ}

「なるほど……」

（ボクサーパンツ履いてる奴はヤリチンか、昔の僕と同じ事言ってる……この記事書いた奴、絶対童○だろ。）

「ど、どうなの？」

「つまり……伊井野は僕がヤリチンかどうか気になったって事か……」

「う……そうよ！ 成績優秀者は、他の生徒の模範となるべき行動が求められるのよ！ だから石上を調査する事は、秀知院の品格にも直結するの！」

「……らしいよ？」

（ミコちゃん……咄嗟に考えたにしては上手い言い訳考えたね。）

「流石にコレは偏見が過ぎると思うけど……」

「ミコちゃんを満足させる為だから……ね？」

「……ボクサーパンツだよ。」

「っ!? こ、こばちゃん4連続だよお……」

「まあ最後の奴は大丈夫だと思うけど……」

「……」

（女子に自分が履いてるパンツ言うってどんな状況だよ……）

検証5、男友達より女友達が多い男はヤリチン！

「石上、スマホ見せて！」

「ええ……プライバシーの侵害だろ。」

「じゃあ、女友達と男友達の人数だけ教えてあげて？」

「えーと女友達は……大友、大仏、伊井野、龍珠先輩、小野寺の5人だな。」

「じ、じゃあ男子は？」

「大体で良いからね。」

（まあ石上は陸上部入ってたし、流石にいないなんて……そんな事はないでしょ。）

「……いない。」

そんな事あった。

「えええ!? 陸上部入ってたのに!？」

「いや、そうなんだけど……連絡先交換するまで行かなかったとか、会ったら普通に挨拶はするけどそれだけっていうか……流石に嫌われてはないと思うけど。」

「あ、なんかごめん……」

「ミコちゃん、私達が石上を支えてあげよ？」

「うんっ……そうだよね！」

「哀れむな。」

石上優は見つけたい

11月に入り、肌寒さを強く感じる季節になった今日……石上優は文化祭に向けた風紀委員の会議に参加していた。

「……以上が文化祭の風紀委員の主な業務になります。当日は高等部から数名風紀委員の助っ人が借りられるので、そのつもりでお願いします。」

「……人手不足だよなあ。」

伊井野の発言を聞きながら言葉を洩らすと、隣に座る大仏と目が合う。

「まあ、風紀委員はあんまり人気ないし……これでも石上が事務処理してくれてるから、かなり時間に余裕が出来てるんだよ？」

「そんなもんか……」

「質問がない様ならコレで解散とします。誰か、高等部の風紀委員にこの申請書を……」

「あ、じゃあ僕が持って行くよ。」

「……石上が良いなら頼むけど、無理しなくてもいいのよ？ 本来は風紀委員の仕

事なんだから。」

「大丈夫だよ。それに僕なら高等部に知り合いがいるし……行きづらい人が行くよりは、僕が行った方がいいだろ？」

「石上先輩あざーす！」

後輩の言葉に、別にいいよと返して書類を受け取る。

「じゃあ行ってくる。」

「石上、待ってようか？」

「大丈夫。時間掛かるかもしれないし、先帰っていいよ。じゃ、皆お疲れ。」

大仏の言葉に答え教室を出る。

「……」

廊下を歩きながら思い出す。10月も終わりに近付いたある日、行方のわからなかった荻野が警察署に出頭したのだ。荻野が出頭する数日前、荻野の悪友達が全員自首したと噂で聞いていたけど……何があったのかは相変わらず不明のままだ。

その翌日……僕は伊井野と大仏に呼び出された。

……

「その、もう大丈夫だと思うから。石上、その……あ、ありがとう……」

「気にするな、僕が勝手にやってた事だし。」

「そ、それでも！……石上に負担が掛かってたのは事実だし。」

「ホント、真面目だな伊井野は。」

「何よ、悪い？」

「いや、伊井野らしいよ。」

「そ、そう……」

「石上……」

大仏に袖を引かれたので振り返る。

「守ってくれて……ありがとね。」

「おう、大仏も気にするなよ。僕じゃ頼りにならないかもしれないけど、困った事があつたら助けになるからさ。」

「ううん……そんな事ない。頼りにしてるよ、ありがとう。」

その日は3人で寄り道をしながら帰った。伊井野が何か言うと思ったけど、やっぱり寄り先にバーガーショップを入れたのは正解だったらしい。友人と寄り道をし

て帰る……以前の僕では考えられない日々を過ごしながら、頭の中に妙な引っ掛かりを感じていた。

……その引っ掛かりの正体がわかったのは、高等部の風紀委員に申請書を提出した帰りだった。

………

「……」

（うーん、今日も会長達見掛けなかったな。まあ殆ど生徒会室で仕事してるから仕方ないのか。）

未だに一目見る事すら叶っていない、現生徒会メンバーについて考えていると……何やら妙な声が聞こえて来た。

「ぐうつ……うえええつ……」

「……ん？」

もしかしたら、誰かが急病で苦しんでるのかと思ひ声のする方へと移動する……どうやらその声は、中庭の茂みから聞こえて来る様だ。邪魔な草木を避け茂みを覗き込むと……

「クズヅ……うええっ……なんで私はあっ……ぐえうっ……いつも、いつもお……けぶっ……」エグエグッ

「」

（っ……ツンデレ先輩いい！！！？）

その瞬間、石上の脳内を衝撃が襲う！

「っ!!」

（あああっ！　そうか！　なんか引ッ掛かってる気がしてたのはコレかあっ!!）

四条真妃！　約半年後……自分の親友と想い人が付き合うという地獄を味わう事になる、四宮家の血筋を引くお嬢様である。古いタイプのツンデレ発言が災いし、一向に彼との関係が進まない事に1人落ち込む少女……そんな場面に石上優は遭遇していた！

「だ、大丈夫ですか？」

「えぐうっ……う？」

「……」

（絶対コレ、翼先輩の事で泣いてたよな……）

石上優は即座に状況を理解した。

かつての友人との再会、それが石上優にもたらすモノとは……

石上優は逃れたい

感想ありがとうございます！（。▽。）

（本当にすみません、別に忘れてた訳じゃないんです……只ちょっと忙しくてウツカリしてただけなんです……）

四条真妃!! 前回の人生に於いては、お互いの恋愛について相談したり、ちよくちよく遊びに出掛けたりした仲である。文化祭では……四条真妃に背中を押してもらった事で、一歩踏み出した行動を取る事が出来た。親友と想い人が目の前でイチャつく様を何度も見せられ、その度に死んだ目で自分を見てくる彼女を見て……なんでこんな良い人が辛い目に遭ってるんだろう

神はこの世に居ないのか

いつになったら幸せになれるんだろう

と石上は常々思っていた。

(と、とりあえず落ち着かせないと……)

僕は自販機でココアミルクを購入すると、直ぐにマキ先輩へと手渡した。

「先輩、どうぞ。」

「やぞ……フン、なかなか気が効くじゃない。」

マキ先輩は勢い良く缶を傾けると、ゴクゴクと喉を鳴らして一気に飲み干した。

「はあー……少しだけ落ち着いたわ。」

「良かった……カカオポリフェノールにはストレス解消に効果が。牛乳に含まれるトリプトファンという物質は、幸せホルモンと呼ばれる神経伝達物質のセロトニンを作る材料になるんです。コレ飲んで、激減した幸せホルモンが元に戻るといいですね。」

「ぶんなぐんぞ。」

「とりあえず、名前聞いていいですか？」

「あら、私の事知らないの？……ってその制服あんた中等部ね。仕方ないから教えてあげるわ！私の名前は四条真妃！学年三位の天才にして、正統な四宮の血筋を引く者よ！」

「わー、あの四宮家の……」

「そうよ！ 現生徒会副会長の四宮かぐやは、私の再従祖叔母はとおおおおばにあたるわ。」アッヤ

「だから遠いんですって。」

「……だから？」

「ああいえ、こっちの話です。それで、四条先輩はどうして泣いてたんですか？」

「……」

「まあ、言いたくない事なら無理にとは言いませんけど……悩みがあるなら、誰かに話す事で解決する事もありますよ？」

「……ココアのお礼って事で、特別に話してあげるわ。」

10分後……

「つまり……来月に高等部で奉心祭が開催されるから……」

「うん、ぐすっ……」

「好きな人を誘おうとしたら、恥ずかしくなってつい罵倒してしまい……」

「うん……えぐっ……」

「結局誘えずに自己嫌悪していたと。」

「うううう……えぐう……」

「……」

（不憫な人だ。素直に誘えば、柏木神と神ってない翼先輩とならすぐに恋仲になれそうなのに。柏木神と……神ってない……ああああっ!? そうだよ! まだ付き合っていないじゃん!!）

石上気付く。

（前のマキ先輩は、神殺しに1人で挑む装備無し勇者みたいな状況だったけど、神ってない今なら普通にチャンスなんじゃ……）

しかし! 此処で石上優の脳内を過去の記憶が走馬灯の様に駆け巡る!

渚……好きだよ……

翼……私も……

（でも僕がアドバイスしてツンデレ先輩が翼先輩と付き合う事になったら、あの幸せに満ちたカップルの存在がなくなるって事になるんじゃない……）

罪悪感!! なまじ幸せそうな柏木×翼のカップルの様子を見て来た経験があるだ

けに、石上はとてつもない罪悪感を感じていた!!

（ヤバイ、罪悪感で死にそう……かと言ってこのまま何もしないのは、ツンデレ先輩がかわいそうだし……泣きたくなってきた……）

「ぐすつ……はあ、こんな事年下に言ったところで意味ないわよね。有益な事言える訳じゃないだろうし……」

「グズ……」

「あ、ご、ごめんね!? 態々話を聞いてくれたのに、私ったら……」

（……いい人なんだよなあ……よし。）

「あの……文化祭デートに誘うのが恥ずかしいなら、言い方を変えてみませんか？」

「……言い方？」

「はい、今月末に中部部で文化祭があるんですけど、それに誘うんです。誘いは……後輩が中部部で店を出すらしいから様子見に行くんだけど、ついだから一緒に行かない? って感じで、目的はあくまで後輩の様子見って事にして……」

「そ、それくらいなら……で、でも、もし断られたら……」

「大丈夫です、女子の誘いを断る男なんていませんよ。丁度僕のクラスがたこ焼き屋をやる事になってるので、様子見の理由には十分でしょう。」

「そ、そうよねっ……態々私が誘うんだもん……断る訳ないわよね！」

「そうですよ、頑張って誘って下さい。」

「……ねえ、なんであんたは先輩とはいえ、初対面の人間にそこまでするの？」

「……好きな人がいる人の想いは、報われてほしいじゃないですか。話掛けるのにも凄いドキドキして、一緒にいると嬉しくて、でも自分は好かれてるのか不安になって、いろんな感情で頭の中がぐちゃぐちゃになってるのに、好きって気持ちはキラキラと輝いてる。……それに、先輩を見ると応援したくなっちゃうんです。」

「ふ、ふんっ！ とんだ変わり者ね！」

「……そうかもしれませんね。」

「貴方、名前は？」

「石上優です。」

「そ、石上優……ね。覚えてあげるわ。誇りなさい！ 私に名前を覚えてもらえる事を！」

「ハハハ。ありがとうございます、四条先輩。」

「私はもう行くわ、じゃあね。」

「はい、頑張ってください。」

去って行くツンデレ先輩の背中を目で追いながら、ふうつと息を吐く……

（まあ結局、誰と付き合うか決めるのは翼先輩だからな……僕はあくまで、ちょっとアドバイスしただけだし……決して責任から逃れたいとかそういう事じゃないから。）

石上は田沼翼に全責任を転嫁した。

石上優は準備する

感想ありがとうございます(。ω。)

中庭でツンデレ先輩と出会ってから、僕は月末に控えた文化祭の準備に迫られていた。高等部の奉心祭は、予算も潤沢で大規模な催しがされるが、中等部はそれよりも規模が小さい……とはいえ、並みの高校レベルの文化祭規模はある為、各クラスも出し物の準備や買い出しに放課後遅くまで残っていた。

僕達のクラスはたこ焼き屋を営む為、予めたこ焼き機と千枚通しなどの道具を用意しておけば前日に材料を調達するだけで事足りる。当日も男子は裏方、女子はたこ焼き担当と分けられている為、それ程大変なものではなかった。

文化祭まで後3日と迫ったある日……自分のクラスの出し物の準備も終わり手持ち無沙汰になった僕は、風紀委員の見回りに同行していた。いつも通り伊井野、大仏と見回っているとすれ違い様に女子2人の会話が聞こえてきた。

「それで、高等部の七不思議が……」

「やだ、やめてよー。」

七不思議か……そういえば前回の2学期、体育祭を目前にした時期に秀知院学園七不思議……なんてモノに振り回された苦い記憶を思い出す。《骸骨》から始まり《指輪》で終わる6つの怪談と、その6つの怪談に遭遇する事で条件を満たす7つ目の怪談……もうあんな怖い思いは二度と御免だと強く思ったものだ。

「……そういえば、中等部には七不思議とかないのか？」

ふと疑問が湧き、隣を歩く大仏に聞いてみる。

「七不思議……？ うーん、私は聞いた事ないなあ……ミコちゃんは？」

「……私も聞いた事ない。」

「ふーん、じゃあ高等部だけなのか……」

「あつ、でも変な噂は聞いた事ある。」

「変な噂？」

伊井野の言葉に聞き返す。

「うん、えーと……秀知院学園には、絶対に敵対しちゃいけない人達がいらしい

んだけど、最近それが1人増えたって噂。」

「へーそんな噂があるのか……でも妙な時期に増えるんだな。」

「うん、確かにそうなのよね……新入生が入ってくる4月とかなら、まだわかるんだけど……」

「……」

（……それ多分、石上の事だ。）

大仏は首を傾げる2人を見ながら、その噂が立った原因を思い出していた。

石上が荻野に対して行った立ち回りは、嘘で固められた荻野の外皮を剥ぎ中学生にしては不釣り合いな策略で決行された。あの事件で、後ろ暗い事をしている人間は石上から必要以上に距離を取るようになった。もし、石上と敵対すれば自分も荻野の様に嵌められるのではないか……という警戒心が出来上がってしまった為だ。それに次いで、荻野の行方が一時的にだが不明になり、荻野の悪友達が次々と自首していったのは石上が裏で手を引いていたのでは？ という考えになっても仕方ない状況だった……更に噂に尾鰭が付き、石上は3年になるまで本来の実力を隠していた。今まで目立っていなかったのは、中等部の問題児を調べて肅正する為だと

か色々な憶測が囁かれている。

（……まあ私は、石上はそういう人じゃないってわかってるけどね。人の噂も75日っていうし……変な噂話もそのうち消えるでしょ。）

「……ほらほら2人共、ボーっとしてたら見回りにならないよ？」

大仏は首を傾げる2人を促し、見回りを続けた。

文化祭を楽しみたい

文化祭当日……各々が担当する出し物や役割に準じて行動し、束の間のお祭り気分を楽しんでいた。

しかし……秀知院の文化祭は、高等部だけではなく^{他校}外部からの^{生徒}訪問者も多い為、起きるトラブルは決して少なくないのである。

へ小野寺麗は回りたい

「うーん、ちょっと時間空いちゃったなあ……」

午前中の仕事を済ませて校内を適当に見て回る。私のクラスはクレープ屋の出店をしていて、ジャムとクリームだけを使った簡素なモノだけど、それなりに忙しかった。今は他のクラスの友達に空き時間が出来るまで1人で時間を潰している。適当に他クラスを覗き見しながら歩いていると、複数の男子に囲まれている秀知院の女子が見えた。

「はあ……」

（全く、男子ってホント……）

助け出そうと近付いて見ると……囲まれている女子は、風紀委員の伊井野ミコだった。

（伊井野か、だったら大丈夫かな？あの男子達もツイてないね、お堅い風紀委員で有名な伊井野をナンパするなんて。）

「なあ、ちよつとでいいから付き合ってよ。」

「奢るからさー。」

「ちよつとだけお喋りしようよ！」

「お断りします。いい加減にしないと先生を呼んで……」

「ていうか君可愛いね！」

「……」

「いやホント！マジ可愛だわ！」

「それな！こんな可愛い子と少しでも遊べたら、オレらメツチャ嬉しいっていうか……」

「真面目な話、休憩時間までどれくらいなの？俺ら普通に待つよ？」

「ま、まあ、後30分くらいですけど……」

（あれ……伊井野？）

「それくらいなら全然待って！」

「ね？ ちょっとだけ付き合ってよ。」

「……ちょっとだけなら。」

「っ!？」

（チヨツ口!? 伊井野チヨ口過ぎでしょ!?)

「ちよつとだけなら……じゃねえよ。」ニ。ニ——ぐ

「痛あああっ!？」

「すいません。コイツまだやる事あるんで、他当たって下さい。」

「こぼちゃん、石上がまた叩いた！ クズだよ！」

「ハイハイ。ミコちゃん、石上にちゃんとお礼言わないとダメだよ？」

「叩かれたのにっ!？」ぎゅぎゅ——ぐ

「……」

（ええ……伊井野ってあんな感じなんだ、かなり印象変わったわ。アレじゃ、石上と大仏さんも大変だなあ……）

〈大友京子は作りたい〉

「よし、ジャンジャン作るよー！」

「ちよっ!! 京子タコ入れ過ぎじゃない!!」

「えー? そうかなあ……?」

「京子……料理出来るから調理係に立候補したんじゃないの?」

「んーん? タコ焼きクルンってするのが楽しそうだったから。」

「そんな理由っ!?!」
「ちよっ——」

〈石上優はもてなしたい〉

「石上、来てやったわよ。」

「あ、四条先輩どうも。」

「君がマキちゃんの言ってた石上君？」

「……はいそうです。先輩方、態々来てくれてありがとうございます。」

（うわあ、チャラくない翼先輩とか凄い違和感ある……柏木神の影響エグい……）

「僕は田沼翼。マキちゃんと同じ高等部の一年だよ、よろしくね。」

「あ、どうも……石上優です。」

「眞妃に中等部の知り合いが居たなんて知らなかったなあ……私は柏木渚、よろしくね？」

「は、はい……」

（なんか怖い……）

「石上君、マキちゃんに出店に来てくれるよう泣きついたんだって？」

アハハと笑いながらそう言ってくる翼先輩の後ろに佇むツンデレ先輩を一瞥する。

「……」

（はあ、しょうがない……）

「……ええ、そうなんですよ。美味しいから是非食べに来て欲しくて、お願いしちゃいました。」

石上は大人の対応を取った。

「じゃ、人数分頂こうかな？」

「はい……タコ焼き3つになります。」

「じゃあ座って食べようか。」

3人がテーブルに座り、タコ焼きを頬張る様子を見ながら石上は仕事に精を出す。

「……」

（……ちゃんとツンデレ先輩が誘えるか不安だったけど、とりあえず良かった。まさか、柏木神も一緒に来るとは思わなかったけど……）

「……」
ぐー

「……」

（まあ、一歩前進しただけマシかな……）

「……」
ぐー

「……」

（パツと見は翼先輩が二股掛けてるように見えるけど……）

「……」
「ぐー」

「……」

（いやあ、でも……なんで柏木神ずっとこっち見てくんの？ 死ぬ程怖いんだけど……）

……

〈石上優は考えたくない〉

「なかなか美味しかったね。」

「ふんっ、まあまあね。」

「真妃ったら、そんな事言っちゃダメでしょ。」

「それじゃ、そろそろお暇しようか。」

翼先輩が立ち上がり2人に促す。

「そうね、それじゃ石上……私達は行くわよ。」

「御馳走様。」

「はい、先輩方がとうございました。」

「……」

去り際に柏木先輩が近付いて来た……

「君さ、何か隠してない？」

「……な、何をですか？」

「それはわからないけど……凄く大事な事。」

「……そんな訳ないじゃないですか。四条先輩以外とは、今日が初対面なんですよ？」

「うん、そうなんだよねえ……」

「渚ー、何してんのよ？置いて行くわよ？」

「あ、すぐ行く。ね、石上君、また今度ゆっくりお話しよっか？……じゃあね。」

「ハハハ、さよなら……」

柏木先輩が教室を出て行くのを黙って見届ける。

「」

（怖ええええ!! サタン柏木メチャ怖えええ!……え? 実は僕と同じで逆行してる

とかないよね？もしそうなら僕殺されるよね？あー考えちゃダメだ、恐怖で死ぬ自信がある……）

何はともあれ中等部文化祭、無事終了。

石上優は眠りたい

感想ありがとうございます（；▽；）

〈2学期期末テスト発表掲示板前〉

文化祭も滞りなく終わり、冬休みまで残り1週間を切ったある日……掲示板の前は、いつも以上に生徒でごった返していた。

一位 伊井野ミコ（500）

（相変わらず、ミコちゃんは凄いなあ……今回は満点だし。石上の方は、ちょっと落ちちゃったみたいだけど……）

九位 石上優（462）

（それでもトップ10入りしてるのは凄いけど。）

「うう……」

「石上……大丈夫？ 体調でも悪いの？」

大仏は項垂れる石上に近付き話し掛ける。

「いや、なんでもない……」

嘘である。この男、先月の文化祭で柏木渚と出会ってから謎の悪夢に悩まされている。ある時は暗闇の中ずっと追い掛けられる悪夢、またある時は椅子に縛り付けられ拷問器具を順に見せつけられる悪夢、悪夢！悪夢！！その度に恐怖で飛び起きる事になっていた石上は、テスト期間中はほぼ寝不足で過ごす様になっていた。

「はぁ……」

（あーしんどい……昔、四宮先輩にビビってた時の事を思い出すな……）

「石上……本当に大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫……伊井野は満点か、凄いな。」

「うん。凄いよね、ミコちゃん。」

「なんか秘訣でも見つけたのか？」

「別に、いつも通り勉強しただけよ。」

嘘である。この女、1学期末頃から勉強時間を2時間程多めに取る事に成功している。人数不足により多忙を極めていた風紀委員に石上優という情報処理のエキ

スパートが助っ人として加わった事で一日の仕事量は激減。更に9月の萩野事件を経て周囲からの嫌がらせも激減。以前とは比べ物にならない程ストレスも軽減されており、2学期は心身共に好調をキープ出来ていたのである。

「ふう……」

「石上、保健室で休んで来たら？」

「保健室……」

大仏の言葉に、大友京子の前で泣いてしまった恥辱体験が石上の脳内でフラッシュバックする！あの時の恥ずかしい感情は、石上の脳裏に焼き付いており、保健室というキーワードはその記憶を呼び覚ますトリガーへと進化していた！

「ごめん、保健室はちょっとダメなんだ……ちょっとしたトラウマみたいなモノがあつてさ。」

「……保健室で何か怖い目に遭ったの？」

「怖い目……」

（そういえば……七不思議の〈見舞う骸骨〉に遭遇したのも保健室だった……2つの意味で、もう保健室には行けないな。）

石上はトラウマが増えた。

「……なんでもないよ。とにかく保健室はちょっとね……」

「だったら、風紀委員の教室で休んだら？」

「……いいのか？」

伊井野の言葉に思わず聞き返す。

「もう学期末だから仕事も殆どないし、その状態のまま帰らして事故に遭ったら困るもの。」

「そっか……じゃあ、お言葉に甘えて休ませてもらうよ。」

「じゃあ石上、これスペアキー……明日会った時にでも返して。」

「ああ、ありがとう。」

僕は伊井野から鍵を受け取ると、風紀委員室へと歩き出した。

〈風紀委員室〉

教室に入ると直ぐに椅子を一行に並べ横になる。枕が無い為、多少寝づらいが仕方ないと諦め目を閉じると……疲れが溜まっていたのか、直ぐに眠気に襲われた。

「スゥ……スゥ……」

石上の寝息だけが教室に漂い始めた頃……

「……」*カチャッ、ハ。タッ*

1人の少女は音を立てない様に気をつけながら、横になって眠る石上の頭の横に腰を下ろす。起こさない様に細心の注意を払い、少女は自身の太腿に石上の頭を乗せ膝枕の状態を作った。

「……」

石上が目を開ければ見つめ合う形になってしまいが、少女は只々眠る石上を見下ろし続けている。

「……カ……」

「ッー」*どッッ*

1時間程そうしていると……石上の零した声に少女は膝枕を止め、足早に教室を出て行った。

「ん、はぁ……少しはマシになったかな……誰か居た様な気がしたけど、気の所為か？」

石上はさっさと椅子を片付けると、風紀委員室を後にした。

小野寺麗は聞いてみたい

感想ありがとうございます(。ω。)

〈風紀委員室〉

「ミコちゃん、此処って……」

「えーと、其処は確か……」

今日は他の風紀委員も石上も居ない為、私とミコちゃんだけで風紀委員室に陣取っていた。文化祭も期末テストも終わり、残る行事は来週に控えた終業式のみ。ミコちゃんと冬休み前の軽い事務処理に取り掛かっていると、コンコンッとドアをノックする音が教室に響いた。

「はい、どうぞ。」

ミコちゃんが来訪者に入室を促すと、ゆっくりとドアが開く。

「失礼します。」カチャッ

「えーと……貴女は？」

「小野寺麗、伊井野……さんと大仏さんだよね？ ちょっと聞きたい事があって来たんだ。」

「私達に？」

「聞きたい事？」

小野寺麗……確かいつもテスト結果で、50位以内に入ってる人だ。今風の女子って感じに見えるけど、風紀委員の見回りでも注意される事は殆どない為記憶に残っていた。ルールの中でオシャレや学生生活を楽しんでいる女子……それが私から見た小野寺麗という女子の印象だ。

「うん、石上は居ないんだね。」

「今日は来る予定はありませんけど……」

「いや、寧ろ好都合。」

ミコちゃんにそう答えると、小野寺さんは私達の向かいの席に腰掛けた。

「石上が居ないのが好都合とは……どういう意味ですか？」

私は少し警戒度を上げて小野寺さんに問い掛けた。

「あ、警戒しないでくれる？ 別に変な事しようとかじゃないから。ただ、ちょっと石上の前じゃ聞き辛い事があってさ……」

石上の前じゃ聞き辛い事？ なんだろう……私とミコちゃんは、小野寺さんの続く言葉を待つ。

「石上って好きな人いると思う？」

小野寺さんのその言葉に……ドクンッと心臓が飛び跳ねた気がした。

「い、いいいし上の好きな人っ!？」

……どうやら、ミコちゃんも似た感じらしい。

「どうして……そんな事を私達に？」

「うーん、まあ普段から一緒にいる2人なら知ってるかもって思って……あとはほら、精神的負担が軽減されればいいなって感じ？」

「……精神的負担？」

「あはは……気にしないで。」

（もし石上が大友さんの事を好きじゃないなら……気が楽になるというか……悲恋を見なくて済むし、とは言えない。）

「……そういう話を石上とした事はありません。そもそも学生の本分は勉学に励む事です。中学生で恋愛事に現を抜かすなんてそんな……」

「私も聞いた事はないですね。」

「ふーん、そっかあ……じゃあ2人は石上の事どう思ってたの？」

「んんっ!？」

「い、石上の事って……一体どういうっ……」

「んん、んん……」

「だーから、好きかどうか聞いているの。」

「すっ……ど、どうしてそんな事を貴女に言わないといけないんですか!？」

「……私もミコちゃんと同意見です。」

「そっか……じゃあさ、最後に1つだけ聞いていい？」

「まあ、最後なら……」

「……一体何ですか？」

「……あの放送聞いてどう思った？」

「っ!？」

あの放送……そのキーワードを聞いて、2人の脳内には同じセリフが飛び交っていた。

僕が守るよ

2人に危険が及ばなくなるまで

僕が……2人を守る

羞恥心!! あの恥ずかしい体験から既に3ヶ月は経過しているが、伊井野ミコ、

大仏こばちはあの時の事を不意に思い出してしまいベッドの上で悶えるという事を未だに繰り返していた！

「べ、別に石上が言った事なんて私はっ……」

「っ!? ミコちゃん！」

「……あれ？ 別に私は、石上が言った事について聞いたつもりはなかったんだけど……」

謀られた……

「あ、ち、違っ……今のはっ……あうっ……」ギョ

伊井野ミコ撃沈。

「アチャー……やり過ぎちゃったか。」

「……小野寺さん、どういうつもりですか？」

「ん？ どういうつもりって？」

「だから……態々、私達だけの時を狙ってあんな事を聞く理由です。」

「ん……私は2人よりも石上と付き合いは短いけどさ、石上が良い奴って事は、ここ2、3ヶ月でわかってきたつもりなんだ。だからかなあ、石上と普段から一

緒にいる２人が……石上の事どう思ってるか聞いてみたくなったの。」

「そう……だったんですか。」

「うん、まあ……聞くまでもなかったみたいだけど。」

「それはっ……」

「ふふっ……ごめんごめん、大仏さんって凄い美人で近付きづらい感じがしてたんだけど、実際話してみるとそうでもないんだね。」

「……」

「折角だからさ、連絡先交換しようよ。石上を落とすのに知恵が必要ならチカラになるからさ。」

「お、落とすって……」

「……うかうかしてると、誰かに取られちゃうよ？ とりあえず、来週高等部である奉心祭にでも誘ってみれば？」

「奉心祭に……」

「じゃあ、私はそろそろ行くね、伊井野にもよろしく言っといて。」

それだけ言々と小野寺さんは、振り返らずに風紀委員室を出て行った。

「石上を奉心祭に……」

私は気絶したミコちゃんを起こすと、風紀委員の仕事が続ける。仕事中、頭の中はさっきの小野寺さんとの会話がグルグルと繰り返されるだけだった。

奉心祭は終わらない（前編）

感想ありがとうございます（・∀・）

奉心祭!! 凡そ千年前……病に倒れた姫君を助ける為に、1人の男が心臓を捧げ姫君の命を救ったという逸話から名付けられた由緒正しい祭りである。そして、奉心祭でハートの贈り物をするとう永遠の愛がもたらされる……という噂が広まり毎年奉心祭の時期が近付くと、独り身達はそわそわと浮き足立ちする様になった。各々が胸に抱いた想いを吐露する場合もあれば、想いを吐き出せず仕舞い込み続ける場合もある。人は愛される事を求め、時に愛する事に恐怖する。しかし、結局どんなに愛され様と、どんなに愛を注ぐと……想いは口に出さなければ伝わらないのである。

〈生徒会は誘えない〉

「ん？ 藤原書記はいないのか？」

「ええ、藤原さんならテーブルゲーム部の方に顔を出しに行きましたよ。」

「そうか……」

「何か用事でも？」

「ああいや……さっきA組の前を通りかかったらな、こんなモノを渡されてな。」

「これは……A組で出し物としてやってる喫茶店の無料券ですね。」

「ああ、2枚渡されたから四宮と藤原で行ってくるといい……と言うつもりだったんだがな。」

「藤原さんは不在ですからね、1人で行くというのも味気ないですし……」

（さあ会長、さっさと私を文化祭デートに誘いなさい。会長がどうしても言うのなら、応えてあげても構いませんよ？）

「確かにそうだな……さて、どうするか……」

（さあ四宮、さっさと俺を文化祭デートに誘うんだな。四宮がどうしても言うのなら、付き合ってやらんでもない。）

（フフフフツ……）ニヤ〜

「会長！ かぐやさん！ 見て下さい、良い物もらっちゃいました〜」

「ふ、藤原っ!？」

「藤原さんっ!？」

「A組でやってる喫茶店の無料券です！ちゃんと人数分ありますから皆で行きましよう！」
「ふん」

「あっ……おい、藤原っ!？」

「ふ、藤原さんっ!？」

「はやくはやくう！」

「「ああああっ……」」
「ムムムム」

〈四条真妃は誘いたい〉

「何あんた、折角のお祭りに一緒に回ってくれる女子もないの？」

「あはは、マキちゃんは痛いトコ突くなあ。」

「ど、どうしてもって言うなら、わ……わたっ……私がっ……!？」

「あー真妃こんな所にいたー。C組の出し物凄いんだって、見に行こうよ。」
グッ

「渚!? あああっ……ち、ちょっと今はっ……」

「はやくはやく。」

「ああああっ……」ズルズル

「2人共楽しんで来てねー。」

〈龍珠桃はサボりたい〉

「あー、ダリい……」

龍珠桃は天文部所有の部屋の前で椅子に凭れ掛かっていた。今年の天文部は部室内を一部改造し、簡易的なプラネタリウムを出し物としてやる事になっている。決められた人数を部室に押し込んだ後は、設定時間が経つまで外で待っていればいい……楽な仕事だと高を括っていたが、未だ1人の来客もないのである。理由は

明白、部室の前には椅子にだらしく座り、不機嫌さを隠そうともしない目付きの悪い少女がいるのだから。学内の人間ならば、龍珠組の愛娘……龍珠桃は有名人であり、自ら近付こうとする人間はごく少数である。龍珠桃を知らない学外の間人もその不機嫌オーラを見ると、来た道に戻って行く……詰まる所龍珠桃の存在は、客寄せならぬ客避けにしかなくなっていなかった。

「客来ねえならサボろうかな……」

「龍珠先輩、こんちわっす。」

「おう、石上か……よく来たな。」

「……暇なんですか？」

だらけている龍珠を見て石上は尋ねる。

「お前らが最初の客だよ。」

「そ、そうですか……」

予想外の客入りのなさに石上は戸惑った。

「じゃ、入ろうか石上。」

「ああそうだな。」

石上は隣の大仏と並んで部室へと入った。部室の中は暗幕により夜と見間違う程の暗闇と化していた。少しすると天井が淡い光を放ち出し、夜空に輝く星々が様々な星座を創り出す。

「凄いなあ、部活の出し物でこんな本格的なモノが見れるなんて……」

「うん、凄い綺麗……」

大仏は頭上に輝く星々を見ながら、隣に佇む石上へと視線を向ける……

「……」

（まさか、石上と2人っきりで回れるなんて思わなかったな……）

大仏は先程まで一緒にいた2人の少女の事を思い出していた。

奉心祭は終わらない（後編）

〈大仏こばちは踏み出したい〉

石上を奉心祭に誘うのは難しい事ではなかった。2人つきりじゃなくて、ミコちゃんと小野寺さんも一緒だと言ったし、元々石上は1人でも奉心祭に行くつもりだった様で結構簡単に事は運んだ。石上のゲーム友達である先輩が部活で出し物をするらしいから見に行こうという言葉に従い付いて行くと、その途中の教室からワンコ蕎麦とか食いトーナメント（飛び入り可）という看板が見えた。

「ワンコ蕎麦、とか食い……」*（さぶさぶ）*

看板の前から動かないミコちゃんに近付こうとすると、小野寺さんの……

「伊井野は私が見とくから、先行ってくれば？」

「……え？」

「小野寺、いいのか？」

「大丈夫だって、後で合流すればいいでしょ？……それに、すぐお腹いっぱいになるでしょ？」

こんな小さいんだからと小野寺さんは言外に漂わせるけど、ミコちゃんは小さな体に似合わず大食いだ。実際に見ればきつと驚くだろう……

「石上、どうする？」

「まあ、食べ終わるの待つくらいなら先行ってくるか……大仏はそれで良いのか？」

「

「うん、良いよ。じゃあ小野寺さん、ミコちゃんの事お願いね。」

「オッケー、任せておいて。じゃあ……大仏さんも頑張ってるね。」

「ん？ 何を頑張るんだ？」

「まあいいじゃん。ほら、行った行った。」

「お、おい小野寺押すなって、わかったから！ じゃあ……伊井野の事頼んだ。」

「オッケー。」

歩き出す石上の後について行く際、一度だけ後ろを振り向くと……ウインクする小野寺さんが目に映った。どうやら……気を遣われたらしい。でも折角の機会なんだから楽しもうと思った。

……

夜空を彩る星座は忙しくその姿を変えていくが、次第に光が弱まり最後には入室時と同じ何もない真っ暗闇へと変わった。突如扉が開けられ、真っ暗な空間に光が差し込む。

「終了時間だ、どうだった？」

「凄かったですよ！ あんな狭い部室なのに夜空とか広く見えて凄く綺麗でした。」
「ぐも、狭いは余計だ。」

そう愚痴る龍珠先輩は、石上の賞賛の言葉を笑いながら受け取る。どうやら満更でもない様だ。

「あ、あの……私も凄く綺麗で、感動しました。」

「おう、楽しんでもらったんなら何よりだ。」

「じゃあ先輩、店番頑張ってくださいね。」

「おー、じゃあな。」

龍珠先輩と別れたと同時に、小野寺さんからメッセージが届いた。

「ヤバイ、伊井野がワンコ蕎麦トーナメント決勝まで進んだ」

「……流石ミコちゃん。」

「ん？ 伊井野どうなったって？」

「決勝進出だって。」

「……流石は伊井野だな。」

「私はちょっと心配だよ……」

「……伊井野の腹が？」

「んー……ワンコ蕎麦の在庫が。」

「ははは、確かにな。」

石上と談笑しながら廊下を歩く……まるでデートをしてる恋人みたいだと、錯覚してしまいそうになる。校舎を出て中庭へ行くと、石上と2人でベンチに腰掛け……先程までの校舎内の熱気が嘘のように中庭は閑散としていた。

「やっぱり高等部の文化祭は規模が大きいな。」

「うん、ホントだね……」

漂うシンとした空気に反して、私の心臓は走った直後の様にドクドクと脈打っていた。奉心祭で好きな人にハートを象ったモノを贈ると、〈永遠の愛〉がもたらされると言われる奉心伝説……最初はさり気なく渡すつもりだったのに、こんなに緊

張してたらとてもさり気なくなて出来ない。気を紛らそうとベンチ横に佇む木に視線を向けると、頭上まで伸びた枝に咲く花が見えた。

「これ……なんの花なのかな？」

「これは桜だよ。」

「桜？ 冬に咲く桜なんてあるの？」

「ああ……これは冬桜といって、冬と春に2回咲く桜なんだ。」

「2回咲く桜……珍しいね。」

「そうだな……冬桜の花言葉は精神美、優美な女性、純潔、そして冷静……大仏み
たいだな。」

石上のその言葉に顔が熱くなる。

「い、石上……買い被り過ぎだからっ！」

「そうかな？……実はもう1つあるんだよ、冬桜が大仏みたいだと思った理由。」

「……どんな理由？」

「冬桜は別名コバザクラ小葉桜とも呼ばれてるんだ。」

「……絶対そっちの理由が本命でしょっ！」

「ははは、悪かったって。別に揶揄った訳じゃないよ。」

「もう……」プーッー

振動するスマホを手にとると、小野寺さんからのメッセージが表示される。

〈伊井野ヤバイ、普通に優勝した〉

「ミコちゃん優勝したって。」

「やと思ったよ……そろそろ合流するか？」

「……うん、そうだね。ミコちゃんをお祝いしないといけないし。」

「じゃ、行くか。」

ベンチから立ち上がり中庭を後にする。後ろを振り返ると、冬桜の花は風に揺られていた。来年の奉心祭、それまでに石上にも私の事を好きになってもらえる様に……それと、今度はちゃんと誤魔化そうとせずに、気持ちを込めてコレを渡そう。

「……」ギョ

ぎゅっと手の中に包まれたハートのキーホルダー、コレを渡せる時まで……私の奉心祭は終わらない。

完

とりあえず奉心祭というキリのいいイベントが終わったのでこの話で完とします。

ある程度目処が立ったら高等部編も書きたいですし、中等部に関して書き残しがあれば（番外編）として追加で書くかもしれません。ここまで読んでくださりありがとうございます。（；▽；）

あと、大仏ルートっぽいエンドというニッチな趣味ですいません（・ω・）

高等部編

高等部入学式

今回から高等部編です。(・・・)

奉心祭から3ヶ月以上が経ち、石上優は秀知院学園高等部の入学式に参加していた。

(やっとここまで来れた……)

石上優はかつて自身が所属していた……生徒会のメンバーや年上の友人達を思い浮かべながら、入学式が終わるのを待つ。

「続きまして……白銀生徒会長による新入生への挨拶です。」

その言葉に、生徒達の響めきが体育館に充満する。生徒会長白銀御行は、舞台へ上がると演台の前に陣取りその鋭い瞳で全体を見渡す。生徒会長の傍らには副会長

である四宮かぐや……かつて石上に救いの手を差し伸ばし、時に導いてくれた2人の姿を石上はやっと自身の視界に収める事が出来たのである。

（やっと会えました……会長、四宮先輩。）

凛々しくも厳格に言葉を発する会長を見て、無意識に口元が緩んだ。

（今回は荻野の件で勧誘される事はない。なんとか自分を売り込んで生徒会に入れれば……）

その心配が杞憂となる事を彼はまだ知らない。

入学式も問題なく終わり、各々が掲示板で自身が振り分けられたクラスを確認する。

（僕はB組か、こちら辺も前と同じなんだな。）

石上はそのままB組の欄を眺める。

（伊井野、大仏、小野寺……多分他の生徒も前回と同じクラスになってるんだろう

な。)

「石上君、クラスどこだった？」

「B組だったよ、そっちは？」

「私はC組だったよ、別れちゃったね残念。」

そう目の前で洩らす女子……大友京子を見て僕は肩の荷が下りた気がした。

どうやら前回、大友が高等部に進学しなかったのは荻野の件は関係なく、単なる学力不足という事実を僕は大友に勉強を教える過程で知った。前回の大友は、他校へ行っても楽しく生活しているようだとか会長から聞いていたが、どうせなら友達と一緒にいられるようにしてあげたいと思い勉強を教える事を快諾した。その時は伊井野と大仏も協力してくれたが、内部進学試験が終わる頃には皆が疲れた顔をしていた。……それだけ大友に勉強を教えるのはキツかった。まあ、苦勞した甲斐もあって、こうして大友が高等部へ進学出来たのは喜ばしい事だと思う。

……

大友と別れ、これから過ごす事になるB組の扉を開け自分の席に着く。今日は授業もない為、担任から高等部の校則と設備についての説明が終わるとあとは帰宅

するだけだ。帰り支度を済ませ席を立つと、伊井野と大仏が近づいて来た。

「石上、今回は同じクラスだね。」

「ああ、これからもよろしくな。」

「うん、よろしく。それで石上……ミコちゃんが話があるんだって。」

「ん、なんだ伊井野？」

「ねえ石上、私とこばちゃんは風紀委員に入ろうと思うんだけど……一緒に入らない？」

一瞬、それも良いかもな……なんて思ったけど、やっぱり僕の居場所は彼処しかないと思った。

「……ごめん、折角誘ってもらって悪いけど、どうしても入りたいトコがあるさ。」

「……そっか、何処に入るの？陸上部？」

「いや、僕が入りたいのは……」

「失礼する……石上優という男子生徒は残っているか？」

「……！」

背後から聞こえて来たその声に、勢い良く振り向いた。マイク越しよりも、何度も直接聞いたその声を聞き間違える事なんて有り得ない。

「僕です、僕が石上優です。」

「そうか君が……俺は生徒会長の白銀御行。先程入学式で挨拶したばかりだから覚えてくれるとありがたいが……少し話がしたい、そう時間を取らせないからついて来てくれ。」

「……わかりました。」

教室を出て会長の後ろについて行くと、どうやら生徒会室に向かっているようだとわかる。

かつての自分が通い慣れた道を進み、旧校舎の最奥地に構えられた生徒会室へと案内される。

「……」

「緊張しなくていい、好きに掛けてくれ。」

「はい……」

その言葉に従い、会長と机を挟む形でソファアへと腰掛ける。

「……それで話というのは？」

「まあそう慌てるな、コーヒーでも淹れようか？」

「いえ、お構いなく……」

「そうか。」

石上、意図せずに危機を躲す。

「では、本題に入ろう。」

生徒会は見極めたい

感想ありがとうございます（・∀・）

「では、本題に入ろう」

そう言って此方を見る会長と目が合った。寝不足の所為で出来た隈と、それによって生まれた副産物の鋭い眼光。人を寄せ付けない……それでも、周囲の人間から畏敬の念を抱かせるその姿を……僕は懐かしい気持ちで眺めていた。

「去年の9月、中等部で起こったある事件……身に覚えがあるな？」

「荻野の件ですか……」

「ああ、そうだ。荻野コウという生徒は自分と付き合っている女子学生を他校の男子に斡旋していた。それを君が校内放送で暴露した事件……高等部でも少し話題になったよ。」

「……そうでしたか。」

「ああ、何故あんな大々的な方法を取ったのか君に直接聞きたかったんだ。」

「……僕は何の後ろ盾も無く、碌な信用も無い人間です。1学期から勉強や部活動は頑張っていました。それでも信用されているかどうかはわかりませんでした。そんな僕が演劇部の部長で人気者の荻野相手に何の準備もなく挑んでも、どうこう出来る訳がありませんでしたから……」

「ふむ……だが、教師に頼る事くらいは出来たんじゃないのか？」

「それも無理です。もし、事なかれ主義の教師に相談してしまった場合、有耶無耶にされる可能性があります。事実、放送中に乗り込んで来た教師の中には秀知院の評判を気にして学内で処理するべきだと言った人もいました。」

「なるほど……先程何の後ろ盾もないと言ったな、それは本当か？」

「え？ はい、本当です。」

「ふむ……」

（石上は龍珠を後ろ盾と認識していない？ あの龍珠が誰かの為に自ら動くなんて事があるとは……）

「因みに……君は龍珠桃という女子生徒を知っているか？」

「あ、はい。龍珠先輩は、よく遊んでもらってるゲーム友達です。」

「ゲーム……友達か。」

（そうか、友達か……あの他人を寄せ付けなかった龍珠にこんな友人が居たとは……）

「龍珠先輩が何か？」

「ああいや、気にしないでくれ。では最後に1つだけ聞かせてくれ……荻野コウを断罪した理由を。」

「……理由？」

「ああ……所詮は他人のする事だと、目を背ける事も君には出来た筈だ。なのに君はそれをせず、自身が信用を得る努力をし、証拠を集め、荻野を罰する策を練った……どうしてそこまでしたのかと思ってな。」

「……何も悪くない人が酷い目に遭って、悪い奴がヘラヘラ笑ってられるなんて……そんなのは違うと思いますからです。それに……」

お前はおかしくなんてない

次は負けちゃダメよ

「……それに？」

「……いえ、それだけです。」

（いつか……前みたいに信用される日が来たら、会長と四宮先輩には話してもいいかもしれないな。）

「そうか……話は以上だ、時間を取らせてすまなかったな。」

「いえ、気にしないで下さい。それでは……」

僕は席から立ち上がると生徒会室を後にする……折角の機会だから自分を売り込もうかと思ったけど、僕と会長はコレが初対面……良い返事は期待出来ないだろう。

「……」

生徒会室の扉を閉めて立ち尽くす……前回はほぼ毎日見た生徒会室の風景を……僕はこれからも見る事が出来るのだろうか……

〈生徒会室〉

「……2人共、もういいぞ。」

俺がそう声を掛けると、戸棚の影から2人の少女が出てきた。

「今のが中等部で有名だった石上くんですかあ。」

「……それで、会長のお眼鏡には叶いましたか？」

「ああ、理不尽を嫌い正義感もある……中等部の頃に助っ人で風紀委員に参加し、事務処理を任されていた様だから能力もある。それに中等部からの混院らしいしな……俺以外の外部から来た人間も、1人は必要と思っていた所だ。会計としてスカウトしようと思うが構わないか？」

「新メンバーですねえ！ 私達先輩がしっかり仕事を教えてあげましょう！」

「……会長の決めた事なら従いましょう。」

「うむ。また後日、彼を会計として招こう。」

「はい！」

「ええ、わかりました……では私は用事があるので、今日はコレで。」

「ああわかった、お疲れ。」

「かぐやさん、また明日ー。」

「はい、また明日。会長もあまり無理はなさらないようにして下さいね？」

「ああ、善処しよう。」

「……では。」ヂャッ、ン。ダ

……

「……早坂。」

「はい、かぐや様。如何なさいますか？」

「石上優という男子生徒について……可能な限り調べなさい。」

「……かしこまりました。」

石上優は受からせたい（番外編）

奉心祭は終わらない後、中等部3学期の話です（。ω。）

3学期！ およそ2週間の冬休み期間を経て、中等部生活も残り3ヶ月を切った。3月の春休み期間を除けば、残りの中等部在籍期間は約2ヶ月。1月末に控えた内部進学試験を除けば大したイベントもない為、3年生は特に気負う事もなく秀知院高等部へと進む事になる。それはこの男、石上優とて例外ではなかった。去年の4月に舞い戻ってからおよそ10ヶ月……様々なイベントや問題を時に突破し、時に解決して来た男、石上優。その男が、今まさに……

「まさか……ここまでだったなんて。」

絶望に打ちひしがれていた！

……時は3日前まで遡る。

〈風紀委員室〉

冬休みも終わり1週間が経った頃、僕はいつものように風紀委員室で事務処理に精を出していた。教室には伊井野、大仏、僕の3人しか居らず、他のメンバーは風邪や家の用事などで欠席していた。本日分の事務処理が終わろうとした時、突如扉が開かれた。

「石上君！ 助けて!!」ンギャーッ

「お、大友!？」

勢い良く教室に飛び込んで来たのは、同じクラスの大友京子だった。ハアハアと息を荒くする大友を、伊井野や大仏も神妙な顔で見つめている。

「どうしたんだよ、そんなに慌てて……」

とりあえず、ここまで慌てる理由を聞き出すと……

「勉強教えて!!」

「「は？」」

大友を除く3人の声が重なった。

……

大友から詳しい話を聞くと……どうやら今月末にある内部進学試験で落ちる可能性が高いと教師に言われ、慌ててここまで来たらしい。

「勉強を教えるのはいいけど、僕で良いのか？」

「石上君が友達の中で一番頭良いからお願い！」

「大友がそれで良いなら構わないけど……」

チラリと伊井野に視線を向ける。

「別に……勉強なら此処でして構わないわよ。」

「良いのか？」

「遊ぶ訳じゃないし、内部進学試験に向けてなら真面目に取り組むでしょ。」

「私もミコちゃんが許可するなら良いと思う。」

「ありがとう伊井野ちゃん！」

「い、伊井野ちゃん!？」

「あ、ゴメン、嫌だった？」

「べ、別に構いませんが……」

「おさちゃんもありがとね！」

「お、おさちゃん……」

……伊井野と大仏ってこういうグイグイ来る系女子苦手そうだからなあ……

「先ずは、どれくらいの学力か見せてくれるか？ 2学期の期末テストとかあれば分かり易いけど。」

「うん、先生に持って来るように言われたから持ってるよ！……ハイ。」

大友は鞆から5枚の紙を取り出し机に広げた。

「こ、これは……」

「赤点ギリギリの奴ばかり……」

「辛うじて社会だけはそこそこ取れてるな……」

内部進学試験！ 国語、社会、数学、理科、英語の5教科に加え、特別措置科目として保健体育、技術、家庭科の3科目から1つを選び、その科目で獲得した点数の半分を5教科の合計得点に加える事が出来る。秀知院高等部への進学率を上げる為の特別措置である。

「とりあえず、社会以外を重点的にやろう。大友は特別科目は何を選択してるんだ？」

「保健体育だよ。」

「じゃあ、とりあえずそれは後回しにしよう。」

「うん、後でちゃんと教えてね。」

「いや、保健体育に関しては僕よりも適任者がいる……伊井野、頼んだ。」

「は、はあっ!? なんで私が適任なのよ!？」

「いや、お前並大抵のムツツリじゃないだろ……どうせ保健体育も満点取ってるだろ？」

「言い方っ!! 女の子に言うセリフじゃないでしょ!! アンタが教えなさいよ!」

「女子に保健体育教えるってどんな状況だよ。」

「ま、まさか実技で教えるつもり……」

「僕は教えないって言ってるだろ!」

「大友さん、とりあえず数学から始めようか？」

「はい。」

そして、3日が経過した……

「……採点終わったわよ。」

「石上、こっちも採点終わったよ。」

「ああ、僕ももう終わる。」

大友が風紀委員の教室を訪ねた日から、放課後は大友の勉強を見るようになった。伊井野と大仏も乗りかかった船と言って協力してくれている。

「……採点終わったぞ。」

机の上に擬似テストとして作った問題集を並べる。

「コレは……」

「ちよつと……」

「まさか……ここまで（馬鹿）だったなんて。」

「ど、どうしよう……私、進学出来ないの？」

「いや、まだ出来ないと決まった訳じゃない。試験まで残り10日はあるし……」

「ねえ石上、アンタ3年になって急に成績上がったわよね？何か特別な勉強でもしたんじゃないの？」

「あ、そっか。石上の勉強法を大友さんに教えてあげれば……」

「石上君、お願い教えて！」

「……別に特別な事はしてないよ。やってる事自体は伊井野と変わらないかもしれない。」

「それでもいいからっ！」

お願いと懇願する大友に根負けして話す。

「……何も無い部屋に勉強道具だけ持って入った後、鍵を掛けて5時間勉強してただけだよ。」

「……中々やるわね。」

「石上……それは特別じゃないかもしれないけど、特異ではあると思うよ？　ほら……大友さんも衝撃受けてるし。」

「5時間……5時……間……」

まあ気持ちはわかる。僕も四宮先輩に言われた時は、かなり面食らった訳だし……「だけど、時間がないからしょうがない。そのレベルで大友には頑張ってもらうしか……」

「う、うん！ 私頑張るよ！」

「私達も協力します。」

「どうせなら、最後まで面倒見ないとね。」

「わぁーん、皆ありがとうー！」

そして……

「伊井野ちゃんココ教えて！」

「……」

（此処、中学2年の問題だ……）

10日間の……

「大友さん、言語を英語で？」

「ラングアゲー！」

「……それはlan^ラgu^ンage^イと読むんです。」

地獄の様な……

「大友、この時の作者の気持ちは？」

「うーん、売れたらいいなあとか？」

「いや、そういう事じゃなくて……」
月日が流れた……

そして、内部進学試験結果発表日。結果が貼り出される掲示板の前には、秀知院学園高等部への進学を希望する生徒で溢れていた。それもその筈……秀知院はエスカレーター式の為、現中等部3年生の殆どがそのまま高等部への進学を希望していた。更に！9月に起こった荻野事件の際に石上が放ったあの恥ずかしいセリフと風紀委員2人との関係が此処に来て影響を与えていた。秀知院という閉鎖空間に突如降って湧いた恋愛イベント！他人の恋愛イベントは直接関わるより外から眺めているのが一番である。男女問わずあの恥ずかしいセリフを平気で言える石上優という男子と、そのセリフを向けられた風紀委員の女子2人の行く末が気になって仕方なかった。噂では、この3人の結末を見る為に外部進学を希望していた生徒も内部進学に進路を変更した……なんて話もある程である。

内部進学への合格が決まった事を確認した生徒達は、掲示板の前から次々と去って行く……その中で友人と抱き合い、喜びを分かち合う大友の姿を石上は確認した。

「やった、受かったよ！ コレでみんなとまだ一緒にいられるよ!!」

「もー京子のバカ、心配したんだからね！」

「ホントだよねー。」

「うああん、ごめんねー！」

「……良かったな大友。」

「うん！ 石上君も伊井野ちゃんもおさちゃんもありがとう！ みんなのおかげだよ！」

「よかったです。私も安心しました。」

「大友さん、受かって良かったね。」

「ああ……ホッとしたよ。」

友人達と和気藹々とはしゃぎながら去って行く大友を眺める3人は……

（はあ、良かった……でも……）

（もう大友さんに勉強教えるのは……）

(勘弁してほしいな……)

ゴリゴリに精神を削られていたのであった。

早坂愛は調査する

感想ありがとうございます――φ――

早坂愛！ 四宮家に忠誠を誓う早坂家に生を受けた、四宮かぐや直属の近侍である。秀知院学園ではギャル風の少女に擬態し、人知れずかぐやへのサポート任務を遂行している。今回はかぐやの命により、石上優についての捜査をする事となった。

「あ、ねえねえ！ 貴女達1年生だよね？ ちょっと教えて欲しい事あるんだけど
☆」

「え？ はい、私達でわかる事なら……」

5分後……

「そしたら、昼休みに校内放送で……」

「へー、そうなんだあ☆」

10分後……

「それで、荻野が脅しを掛けて……」

「うんうん、それでそれで？」

20分後……

「もう、スツゴイドキドキしちゃいました！」

「わかる！ アレは女子だったら、絶対キュンキュンしちゃうよねー！」

「へー、そうだったんだ！ 色々教えてくれてありがとう☆」

早坂は話してるうちに盛り上がりを見せ始めた女子2人と別れると、直ぐに廊下の角に身を隠した。

「……………」

早坂、石上の恥ずかしいセリフ事件当時の校内放送の詳細を聞いてしまい、本日の任務続行不能。

〈四宮邸〉

「かぐや様、ここ数日の調査結果です。」

私はかぐや様の部屋を訪ねると、調査結果を纏めた資料をかぐや様へと手渡した。「お疲れ様。早坂……貴女から見て、石上優という男はどういう風に映ったのかしら？」

かぐやはパラパラと資料に目を通しながら、私にそう訊ねた。

「……良くも悪くも一本筋の通った人間という印象です。ですが、正義感からあいつた事件を起こす人間は、いずれ本物の悪人と対峙した時に潰されるでしょう。」
「辛辣ね……まあ、私も其処は同意見だけど。」

「中等部で3年に進學すると人が変わったように部活と勉強に取り組み、風紀委員の仕事も無償で手伝っていたとありますが……何故3年になった途端、努力をし始めたのかは様々な噂も飛び交っており判断出来ません。」

「其処はそれ程重要視していないわ。」

「……かぐや様は件の男子が生徒会に入る事に否定的なのですか？」

「別に……そこまでは言わないわよ。ただ私は、会長程簡単に人を信用しないだけよ。」

「……重々承知しています。最後に1つ、去年の11月頃から四条真妃様と懇意に

しているようです。」

「……眞妃さん？」

「はい、眞妃様もかぐや様程ではありませんが他者に対する警戒心は相当なモノ……その眞妃様が少なからず信頼を置いている人物、あまり警戒する必要は無いかもしれません。」

「……そう、話はそれで終わりかしら？」

「はい。」

「そう……今日はもう下がっていいわ、おやすみなさい。」

「はい、おやすみなさいませ……かぐや様。」

会長に生徒会室に呼び出されてから、数日が経過した。その間、陸上部からスカウトされたり、先輩の風紀委員から勧誘されたりと色々あったけど……未だに僕は何処にも所属していない。僕が前回生徒会に入れたのは、荻野の件で不登校になっ

た僕を周囲の生徒から守る保護的な意味もあったのだろう。今回は保護する理由も無く、生徒会と関わりも無いので、今の状況は当然と言える。

「はあ、どうすれば良いのかなあ……」

生徒会役員は会長の指名制だから、そこをどうするか考えなければいけないのだ
が……いい考えが浮かば無い為、今日も授業が終わると真っ直ぐ帰宅する事になる。

「石上、今帰り？ おっつ。」

「おう、小野寺は部活か……頑張れよ。」

「ん、じゃあね。」

教室を出て少しした頃……スマホがメッセージの着信を告げた。

〈中庭に集合〉

龍珠先輩からのゲームの誘いだ。伊達に1年間高等部で過ごしていないからか、
風紀委員の巡回時間や巡回ルートを熟知しており、先輩の呼び出した場所で見つ
かった事は一度もない。今日も龍珠先輩と協力プレイの為に中庭へと向かう。下駄
箱で靴を履き替えていると背後から声を掛けられた。

「お前が石上優か。」

名前を呼ばれて振り向くと、目付きの悪い男子が此方を睨み付けていた……中等部の頃に何度か見た事があるから、多分同じ1年なんだろうけど……話した事は無い筈だ。

「そうだけど……」

「此処で構わないから少し話したい。いいな？」

有無を言わせぬその眼光に……僕は頷く事しか出来なかった。

龍珠桃は告げられない

秀知院VIPの1人、警視庁警視総監の息子で剣道部部長の小島の名前がわからないので今作では小島剣（コジマケン）という設定にします。

小島好きな人はすいません。（-A-）

目の前の男子生徒の話がしたいという言葉を了承すると、彼は腕を組み話し始めた。

「剣道部所属、小島剣だ。」

小島剣……その名前と剣道部所属と聞き、最近噂として流れて来た話を思い出した。入学したばかりの1年生が剣道部の部長から一本取り、そのまま部長の地位に就いたらしい。その生徒は警視総監の息子で、秀知院で敵対してはいけない人物として他の生徒から恐れられているという……そんな人が僕になんの用があるって言うんだ？

石上にメッセージを送り教室を出る。春が過ぎ夏を迎えると、あの後輩と出会ってから1年の時間が経った事になる。出会ってからちよくちよく喫茶店や高等部に呼び出してゲームの相手をさせているが、後輩の態度が変わった事は唯の一度も無い。広域暴力団龍珠組組長の愛娘と、周囲から距離を置かれ遠巻きに眺められる事に慣れた私にゲーム友達が出来るなんて思ってもいなかった。石上の普段の態度を見るに、私が龍珠組の娘と言う事に気付いていないみたいだ。秀知院に籍を置く人間なら、普通は龍珠と聞けば気付きそうなモノだけど……私もバレていないなら構わないと、自分から話す事はしなかった。龍珠組組長の娘の龍珠桃としてではなく、龍珠桃という1人の人間として接してくれる人間は希少だ。だから、あの場面に出会して……もう終わりなんだと思った。

「龍珠桃と関わるのはやめておけ。」

小島剣と名乗ったその男は、いきなりそんな言葉を口走った。

「は？　なんで……」

そんな事を言われなきやいけないんだと、反論しようとした所を小島の言葉に遮られる。

「中等部の頃から龍珠とよく会っていたそうだな？　お前は龍珠について何も知らないのか？」

「……そんな訳ないだろ。龍珠先輩は僕の一個上の先輩で、天文部所属の……」

「俺が言っているのはそんな事じゃない。龍珠はあの広域暴力団龍珠組組長の娘だ。荻野の悪事を暴く正義感のある人間が付き合うべきじゃない。」

「龍珠先輩が……暴力団？」

「なんだ、本当に知らなかったのか？　龍珠と聞けば真っ先に思い浮かぶと思うが……」

……

「ッ！」ッ

石上と小島が話してる現場を目撃した私は、隠れて2人の会話に耳を傾ける……忘れていた、小島も今年から高等部に上がった来ていたんだった。小島とは中等部の頃から何かと衝突する事が続いていた。警視總監の息子と暴力団組長の娘……どう見ても水と油にしかならないこの関係は、私が高等部に上がり中等部の小島と別れた事で一旦は終わりの形となった。まさか、小島のクソ野郎がこんな回りくどい嫌がらせをしてくるとは思わなかったけど……

「……ッ」

不意に昔の記憶が蘇った。

龍珠ちゃんのお父さんは悪い人だから、もう遊んじゃダメなんだって……

……え!? 龍珠さん家ヤクザなの!? ご、ごめんっ! 私もう行くねっ……!

昔から親がヤクザだと知られると、誰も彼もが私から離れて行つた。それが小等部、中等部と続く内に……もう他人に過度な期待を持たない様になつていた。高等部に入っても、私を生徒会に誘つて来る様な奇特な先輩や、同じ生徒会の人間を除き、周囲の人間は変わらず距離を取り続けた。

だからゲーム友達である石上には、私からその秘密をバラす気にはなれなかった。中庭で、喫茶店で、木陰で、ベンチで、ゲーム片手に遊んだ記憶が石上に秘密を告げる事を邪魔してきたから……

「……………」

小島の言葉に、石上がどう答えるのか……聞きたく無いとその場を離れたくなかったけど、その気持ちに反して体は動いてはくれない……私は只立ち尽くす事しか出来なかった。

龍珠桃は無二を得る

感想ありがとうございます（・ω・）

「つまり……龍珠先輩の家がヤクザだから、もう関わるなと……そう言いたいのか？」

「そうだ。龍珠の家について今まで知らなかったみたいだからな、これからは気を付ける。」

余りにも龍珠先輩を軽視するその言葉に、流石の僕もカチンと来た。

「は？ 普通に嫌だけど？」

「……何？」

「だから、お前の言う事は聞かないって言ってるんだよ。」

「お前……俺の言葉の意味を理解していないのか？ アイツは龍珠組の愛娘、付き合いをやめたほうが賢明だと……」

「はあーっ？ 何そのクソ理論……警視總監の息子がそんな程度の低い事しか言えねえの？」

「……なんだと？」

「龍珠先輩の家がヤクザとか言ってるけどさあ、警察官の犯罪率知った上で言ってるの？ 少なくともここ数年は暴力団よりも上なんだぞ？ そもそも警察官が罪を犯しても、平気で不起訴になったり軽い処罰で済んだりしてるだろ。他人の家について偉そうな事言う前に、自分トコしっかり管理するべきなんじゃないの？」

「こ、このっ……！」

「大体お前は親の職業でしか他人を見てないのかよ？ 僕から見た龍珠先輩は……そりゃ目付きは悪いし、偶に口も悪いけど優しいし、ゲームで負ければ悔しがるし、勝てば得意気に笑う……普通の女の子なんだよ！ お前は親とか関係無く、自分の目で龍珠先輩をちゃんと見た上で判断出来ないのかよ！」

……

「……」

私の為に……あそこまで怒る奴は初めて見た。恥ずかしい奴、あんなに熱くなり

やがって……

「貴様っ……!」

小島は石上に一步踏み出すと、そのまま流れるような動きで石上を床に組み伏せた。

「ぐっ!? な、何をっ……!?!」

「警察を侮辱した事、今すぐ謝罪しろ。」

「くっ……お前が先に龍珠先輩に謝れよ!」

「……この状況下で、まだそんな事が言えるのか? 大したものだ……」

小島は掴んだ石上の左腕へ……徐々に圧力を掛けていく。

「ぐっ……痛う……!」

「早く謝ったほうが身の為だぞ。」

「ハッ……うるせえ、バァカ。」

「……ならば、仕方が無いな。」

小島は掴んだ腕に体重を掛け始めたが、結末を静観するつもりは……私には微塵も無い。

「やめろ。」

「っ!？」

小島は首筋に当てられた感触に動きを止めた。

「お前っ……」

「り、龍珠…先輩……!？」

「そいつを離せ。」

「龍珠、貴様っ……」

「聞こえなかったのか？ そいつを離せ。」

グイッと首筋に当たる感覚が強くなったのを感じた小島は、掴んだ腕を離し石上から離れた。

「……石上、大丈夫か？」

石上を助け起こすと、ジッと先程まで組み伏せられていた身体を観察する……余計な怪我はしていないみたいだ。その事実には、ホッと安堵する。

「はい、ありがとうございます……助けてくれて。」

「……気にすんな。」

「ふん、随分と飼い慣らしたものだな龍珠。」

「……」

「お前っ……まだそんな事を！」

「そこまでだ。」

その言葉に私達は動きを止めた。

「良い後輩を持ったな龍珠……いや友達か？」

「お前……何しに来了。」

声の主は生徒会長の白銀御行だった。私は顔を隠すように帽子を深く被りながら問い掛ける。

「いや、下駄箱で1年生が争っていると報告を受けてな……まさか、石上と小島だとは思わなかったが……」

「……なんでお前がコイツを知ってんだよ。」

「少し用があつてな……やはり石上は、俺が思った通りの人間の様だ。」

徐々に周囲には生徒の数が増えて行き、皆が一定の距離を空けて事の成り行きを見守っている。

白銀は2人に近づくと、お得意の理路整然とした物言いであつた後輩2人をすぐに落ち着かせた。小島は何か言いたそうだったが、白銀の諭すような語り掛けに平静を取り戻し、自分の落ち度も認識した様だ。白銀と一言二言の言葉を交わすと、此方を見もせずに去って行った。

石上も……少し落ち着きを取り戻した様で、先程までの強張った表情は消えていく。

「うん……」

いつの間にか……握り締めていた掌から定規が抜け落ちたのを感じて、初めて私は……柄にもなく緊張していたのだと気付いた。

「しかし、彼相手に啖呵を切るとは……中々度胸がある様だ。」

「……そんなのじゃありません。友人が悪く言われてカチンと来て……言い返しただけです。」

「ふむ……相手を選ばずにそれが出来る事を度胸があると言うのだと思うが……君は彼の事を知っているか？」

「え？ まあ親が警視總監とか、1年で剣道部の部長とか……それくらいです。」

「そうか……」

（全く……それを知った上で彼に齒向かえる人間がこの学園にどれ程いるか……君は知らないのだろうか。）

「あの……？」

会長は僕を視界に捉えたまま動かない。……問題児と認識されたら嫌だな。

「1年B組石上優、君を会計として生徒会にスカウトしたい。」

周囲に散らばった生徒達から響めきが広がった。

「せ、生徒会……僕で良いんですかっ!？」

「ああ、君じゃなければ誘わない。……返事を聞かせてくれ。」

「よ、よろしく願います！」

「此方こそよろしく頼むよ。では生徒会室で詳しい話を……」

「あっ、すいません。今日はこれから用事が……」

「……いいから行って来い！」

バシッと背中を叩かれる……振り向くと、帽子を目深に被った龍珠先輩が目映った。

「え、でも……」

「うるさいこのバカッ！……ったく、私との約束はいいからさっさと行って来い。」

「……いいんですか？」

「ああ、次の呼び出しはちゃんと来いよ……優。」

プイと顔を背けながらそう言った龍珠先輩の言葉の裏に隠れた意味は、流石の僕でも理解出来た。

「はい、わかりました……桃先輩。」

「……おう。」

桃先輩は小さく返事をする、黙って去って行った。

生徒会は集結する

感想ありがとうございます(〃。ω。〃)

やっと生徒会メンバーが揃った(;▽;)

あと最後に秀知院VIPメンバー柔道部部长が出てきますが、名前も学年もわからないので3年三國正道としますが、別に覚える必要はありません。

会長に連れられ生徒会室を訪れる。今日から僕も……生徒会役員会計、石上優として前回同様、会計処理に従事する事になる。

生徒会室の扉を開けると、頭にリボンを付けた少女……藤原先輩が近付いて来た。「君が石上優くんですね？ 私は2年B組、生徒会役員書記担当の藤原千花です。気軽に藤原先輩って呼んで下さい！」

「あ、はあ……わかりました。」

(その呼び方、全然気軽じゃないんですけど。)

「その呼び方の何処が気軽なんだ、藤原書記。」

会長と脳内のツツコミが被った。久しぶりの藤原先輩だ……なんだかんで見掛ける機会もなく、優に1年振りの再会となった。

「これからよろしくね、石上くん！」

「はい、よろしく願います……藤原先輩。」

しかし、この頃の藤原先輩は……フワフワしてるというか、雰囲気が柔らかく感じる。コレが1年も経たない内に……

うるさいなあ、ぶっころすよ？

はいどーん！クソザコ極まれりー！！

石上くんはチェリーボーイですしねえー！

とか言っただけで来たり、ハゲヅラ被ったりする様になるのか……時間の残酷さを垣間見た気分だ。

石上は自分の言動が少なからず影響を与えていたとは、少しも思っていなかった。

「ん？ どうしました？ 石上くん。」

「いえ、時間の残酷さに嘆いていただけです。」

「？」

「石上が妙な目で藤原を見てるんだが……」

「アレは加工前の家畜を見る目ですね。」

「どんな目だ……四宮、そろそろ自己紹介を。」

「ええ……石上君、はじめまして。四宮かぐやです、生徒会副会長を務めています。これから……よろしく願いますね。」

「はい、よろしく願います四宮先輩。」

僕の言葉に、四宮先輩はニコリと笑ってくれたけど……どう見ても外面だけの笑顔だとわかる。まあ、それも仕方が無い。今の僕はまだ一欠片の信用も得ていないのだから……これから少しずつ信用してもらえろ様に頑張ろう。

「最後に……改めて自己紹介しよう。俺は生徒会長、白銀御行。石上、これからよろしく頼む。」

その言葉と共に差し出された……会長の手を掴み固く握手する。

「はい、これからよろしく願います！」

そして数日後……

「石上、昨日頼んでおいた部活動予算の前年度との比較データだが……」

「はい、昨日の内にまとめておきました。」

「ほう、仕事が早いな……助かるよ。」

「……」

「石上君、新入生を含んだ新しい委員会名簿の作成ですが、出来れば明日までお願い出来る？」

「大丈夫です。今日中に終わらせて、データ送っておきますね。」

「あら、じゃあお願いね。」

「……」

「ん？どうした藤原。」

「藤原さん？」

「違ーーう！違うでしょ!？」

「うおっ……いきなり叫んでどうしたんですか、藤原先輩？」

「どうしたもこうしたもありません！　なんで直ぐに仕事出来るようになったちゃうの!?　こういう時は普通……」

藤原先輩、書類処理出来ました。

……石上くん、ココ間違えてるよ？

あつ、す、すいません！　僕っ……！

ふふ……間違えは誰にでもありますから、気にしないで下さいね？

藤原先輩……なんて器の大きい人なんだ！　滅茶苦茶尊敬します！

「……とかなる筈でしょう!？」

「……また藤原が珍妙な事を言い出したぞ。」

「新人が思っていた以上に有能だったので、焦っているんでしょうね。」

「全く、新人に妙な言い掛かりを付けおって……呆れられるぞ。」

「いいですか石上くん！　私が生徒会で3番目に偉いんですからねっ！」

「はい、藤原先輩。」

（あーコレコレ、この器の小さくて人として尊敬出来ない感じ……正しく藤原先輩

だ。」

「また石上が妙な目で藤原を見ているな……」

「アレは幼稚園児の精一杯の虚勢に、ウンウン頷く大人の目ですね。」

「あー、その例えはなんかわかる。」

「石上くん、ちゃんと聞いてますかっ!？」

藤原、下衆な女の本領発揮。

へ4月某日剣道場へ

「脇が甘い!」ニヤ

「うわっ!？」

「次!」

「……なんか最近荒れてるなあ、小島部長。」

「なんかあったのかな?」

「其処！何を無駄口叩いている!!」

「ひいっ!? す、すいません!」

「失礼するよ、小島は居るかな?」*チャッ*

「……何か用ですか?三國先輩。」

三國正道！秀知院VIPに名を連ね、陸上自衛隊幕僚長の息子にして、柔道部部長を務める秀知院学園3年生である。その大柄な体躯とは対照的な、理知的な相貌を小島は真正面から睨み付ける。

「少し話がしたい、いいね?」

「……わかりました。」

有無を言わさぬその物言いに了承する。此処で嫌だと言っても……組み伏せられるだけだと俺は知っている。剣道三倍段……武器有りの剣道に、無手の空手や柔道などの武道をしているものが相對する時は、段位としては三倍の技量が必要というが……俺はこの人に未だに勝った事がない。普段の理知的な佇まいからは、想像が出来ない程この人は強い……

剣道場を出て三國先輩について行くと、先輩は木陰のベンチに腰掛けた。なんと

なく隣には座りたくないと思い、ベンチの背凭れに体を預ける。

「……それで、話って何ですか？」

「……また龍珠君とやりあったそうだね？ 中等部の頃からずっとだ。」

「……アイツはヤクザ、俺は警察。相容れないのは自明の理です。」

「全く……変わらないね、その視野の狭い所。生徒会長……白銀君から部活組合に正式な抗議書類も提出されたし、個人的に文句も言われたよ……ちゃんと手綱を握っておけと。」

「ふん……別に先輩に手綱を握られた覚えはありません。」

「やれやれ……小島、君はどうして各界を代表する重鎮や名家の子息令嬢が、こぞってこの学園に入学して来ると思う？」

「そんなの……只の箔付けでしょう。」

「まあ、勿論それもあるだろうね……だけど俺の見解は違う。秀知院に在籍している生徒の多くは将来……国を背負う立場になる人間だ。」

俺は勿論……君もだ、と此方を見る先輩から視線を外し先を促す。

「……だが、どんなに財閥の御曹司で財力があろうと、名家のお嬢様で権力がある

うと……1人で出来る事なんて大した事じゃないんだよ。あの4大財閥、四宮家のお嬢様であろうと、絶対に1人じゃ出来ない事は存在する。」

「……何が言いたいんですか？」

「だから俺は思うんだよ。この学園に集まる人間は……将来1人じゃ出来ない事や1人じゃ立ち向かえない敵と対面した時に、支えて助けてくれる仲間を探しているんじゃないかって。」

「……」

「……君はオセロを知っているね？」

「は？」

突如話題が切り替わり、思わず呆けた声が出た。

「オセロが人間の一生に例えられるのを聞いた事があるか？」

「まあ、表と裏が入れ替わるのを寝返りや裏切りに例える話なら……」

「それ以外にも……4隅の石は絶対に裏切る事は無い……とかね。」

「……」

「……俺は思うんだよ。1人の人間が一生で手に入れる事の出来る……信頼出来

て、自分を裏切らない存在もまた……4人程度しかいないんじゃないかと。」

「秀知院に居る奴は全員……信用出来る奴を探してると?」

「信用ではなく信頼だ……俺は龍珠君が羨ましいよ。」

何故……と言いかけて口を噤んだ。先輩の言いたい事が予想出来たからだ。

「彼女は……少なくとも既に1つ、絶対に裏返る事がない石を手に入れたんだから。」

「……」

「龍珠君の事を極道の娘としか見ていない内は、君がその石を手に入れる事は無いだろうね。」

「……言いたい事はそれだけですか?」

「ああ、時間を取らせて悪かったね……今度は、時間がある時にでも仕合うとしよう。」

「……絶対嫌です。」

ベンチから立ち上がり歩いて行く先輩の姿が消えても、俺はその場から動く事が出来なかった。

「……」

龍珠君を只のヤクザの娘としか見ていない内は、君がその石を手に入れる事は無いだろうね

その言葉が鉛の様に俺の体を重くし続けていた。

四条眞妃は相談したい

感想ありがとうございます。(。ω。)

〈生徒会室〉

「邪魔するわよ！」ニヤニヤ

「うわ、びっくりした……ってマキ先輩ですか。いきなりどうしたんですか？」

「アンタが生徒会でちゃんと仕事が出来てるか、見に来てあげたのよ！」アッ

アッ

「……本当は？」

「そ、その、いつもの相談を……」ぎぎ

「……わかりました、どうぞ座って下さい。」

（急に可愛くなるんだよねあ、この人。）

「……今日は優しいの？」

「えーと、四宮先輩と藤原先輩は部活で……会長は野球部とサッカー部がグラウンドの使用面積で揉めているので、その仲裁に……」

「ふーん、まあ優 1 人だけなら都合が良いわ。」

「それで、相談というのは？」
コソ

僕は紅茶を先輩の前に置きながら尋ねた。

「そ、その……ね？ 優がバレンタインの時にアドバイスしてくれた様に、翼君を水族館に誘ったんだけど……」

「おお！ 誘えたんですね、良かったですね！」

（アドバイスしてから 2 ヶ月以上経ってるんだけど、ツンデレ先輩が自分から誘えただけマシと思うべきか……）

「うん……それでね、流石に 2 人つきりは恥ずかしいから……」
サササ

「ふう、やっと片付いた。」

「あ、会長。」

「ん、来客か……って四条か、なんか用か？」

「……優に相談があつて来てたのよ。」

「相談？ お前達知り合いだったのか？」

「あ、はい……去年の11月くらいから。」

「……また日を改めるわ。」

先輩が立ち上がろうとするのを慌てて制する。

「待って下さいマキ先輩！ 会長ならきつと力になってくれますし、他の男子の意見も聞いとくべきですって。」

「ああ、クラスメイトだし、生徒の悩みに答えるのも生徒会長の務めだからな。」

「……アンタ達がそこまで言うなら。」

……

「……なるほどな。つまり、四条は田沼翼が好きで恋人になりたいと。」

「はーっ？ 違うわよ、そんな訳ないでしょ！」

「えっ!? 違うの!？」

「ま、まあ？ 向こうがどうしてもって言って来たら考えてあげても……」

「会長、見てて下さい。マキ先輩……ツンツンするのはやめて、素直になった方が良いつて言いましたよね？」

「うっ……」

「そうやって相手が告白して来るのを待ってるだけじゃ、知らない内に好きな人が横取りされる事になっちゃいますよ?」

「ううっ……」*ウッ*

四条真妃に40のダメージ

「グハッ……」*グハッ*

白銀御行に100のダメージ

「うええっ……ごめんなさいい……」

「……とまあ、マキ先輩はこういう人なんです……あれ? 会長、どうしました?」

「い、いや……なんでもない。」

「それで、話の続きですけど……水族館には誘えたんですよね? それからどうしたんですか?」

「うん、流石に2人っきりは恥ずかしいから、友達も誘って3人でってなったんだけど……」

「なるほど……」

（ああ、誘った直後に日和っちゃったのか。）

「だけどね……誘っておいでなんだけど、やっぱり翼君と2人で少しは見て回りたいくて、だから……そのお……」

そこまで聞き、僕は全てを察した。

「なるほど……僕も誘って4人で行き、さり気なくマキ先輩と翼先輩を2人つきりにして欲しいと？」

「……うん、そうなの。」

「石上、よくわかったな……」

「まあ慣れてますから。」

「しかし、それなら当日はその友人に遠慮してもらうとかでも良くないか？」

「私から誘っておいてそういうのは……申し訳ないし、仲間外れみたいで可哀想でしょ。」

「む、それもそうだが……」

「……良いと思いますよ。好きな人と2人でデートする事と同じくらい……友達も大事なんですよね？僕は先輩らしいと思います。」

「優……」

「デートだからって、友達を蔑ろにする奴なんてダメですよ……マキ先輩、僕で力になれるなら喜んで手伝いますよ。」

「ほ、ホント？」

「ええ、任せて下さい。」

「あ、ありがとう……じゃあ、渚にも後で連絡しておくわね！」
「」

（……………え？）

「どうしたのよ？」

「ま、マキ先輩？ その誘った友達って……」

「何回か会った事あるでしょ？ 柏木渚、中等部の文化祭でも仲良さそうに話してたじゃない。」

石上優は行きたくない

感想ありがとうございます(。ω。)

「……デートに友達を連れて行くなんて愚の骨頂です。正気の沙汰とは思えませんが。」ガタガタ

「え、優?」

「石上!? さっきと言っている事が違うぞ!」

「デートに他人は邪魔でしかない存在です。考え直した方がいいでしょう。」ブ
ルブル

「お前さっき、デートだからって友達を蔑ろにする奴はダメとか言ってたじゃねえか!」

「異物の混じった空間、其処はもう貴女の知る場所じゃないんですよ。」ザザ
ケ

のよ。」

「……意味がわかると怖い話ですか？」

（２人共、柏木渚について話してるんだよね？ 何か噛み合っていない様な気がするんだが……）

「……」コンコン、ガチャッ

「失礼します。あ、やっぱり此处に居たー。」

「あら、渚どうしたの？」

「どうしたのじゃないでしょ。今日は今度行く水族館の予定決めるって言ってたじゃない。」

「あー、そうだったわね。」

「あつ、白銀くん何か話し中だった？ ゴメンね、邪魔しちゃって。」

「いや、気にしないでいい……な？ 石上。」

「……はい。」

（ああああ逃げ場ないいい！！ どうしようっ………本人がいる前じゃ流石に断りづらいし……）

「あ、それで水族館だけ……優も一緒に行く事になったから。」

「へえ、そうなんだ……石上君とは今までゆっくり話す機会がなかったから嬉しいな。」

（言っちゃった……いや、まだ間に合う筈！）

「あ、あの！水族館の件なんですけど……」

「うん？なあに？」

黙

（読めないけど死ぬほど怖い……）

「……な、なんでもないです☆わー、楽しみだなあ！」

「私も楽しみ。」

「じゃあ、私はそろそろ行くわね……優、白銀、話聞いてくれてありがとね。」

「気にするな、また何かあったら遠慮なく来て構わないぞ。」

「……気が向いたらまた来るわ。」*サッヤ*

「あ、待ってよ眞妃！　じゃあね白銀君、石上君。」*ハッダ*

「ああ。」

「」

「……白目剥いてどうした石上？」

「いえ……なんでもありません。」

「そんなに柏木の事が苦手なのか？　生徒会役員が特定の人物に苦手意識を持つのは良くないぞ。」

「確かにそうですね。僕も……覚悟を決めます。断じて行えばサタンもこれを避けると言いますし。」

「……それを言うなら、断じて行えば鬼神もこれを避ける、だ。」

バレンタインを贈りたい①（番外編）

感想ありがとうございます（・V・）

中等部時代のバレンタインの話です。

バレンタイン！かつて、若者たちの愛を取り込もうとしたキリスト教司祭ヘウアレんティヌス＜が由来である。現在では好きな人から、普段お世話になっている人と幅広い層への贈り物として、2月14日のバレンタインデーにチョコを贈るのが習わしになっている。毎年この時期が近づくと、男女問わずソワソワする者が現れ、女子によっては一世一代の告白を決意する者もいる……その告白が成就するかどうかは、神のみぞ知ると言った所ではあるが……

「バレンタイン？」

内部進学試験も無事終わり、まだまだ寒さが身を貫く季節ではあるが、徐々に和らぎ始めたある日の午後……石上優は高等部へと呼び出しを受けていた。

「う、うん……今年こそはちゃんとしたのを渡したくて……」

「因みにですけど……去年はどんなチョコを渡したんですか？」

（ツンデレ先輩の事だから、チロルチョコとかだろうけど……）

「その……つ、粒チョコ。」

「粒チョコ!? それってアレですよね!? 一袋に米粒みたいなチョコがいっぱい入ってる……」

「うん……それを3粒。」

「3粒!? そんなの義理以下じゃないですか!」

憐れみで施しを受けたレベルである。

「だ、だから! 今年はもうちょっとマシなチョコあげてもいいと思ったから相談してるの!!」

「はぁ……」

こういう相談も今回で二桁の舞台に到達する事になる。奉心祭、クリスマス、初詣など……イベントがある度に相談を受け、そして誘えなかった愚痴を数日後に聞く事が通例となっていた。やはりツンデレ先輩はツンデレ先輩なので、そもそも誘

う事自体のハードルが高いみたいだ……

「まずは、あげてもいいとかツンツンした感じはやめましょう。相手が額面通り受け取るタイプの場合は、悪手になりやすいです。せめて、もうちょっとマイルドに言い直して下さい。」

「マイルドに……つ、翼君がどうしてもチョコが欲しいって言うなら考えてもいいわよ！」

「はいダメです。ひと昔前のツンデレが災いして主人公に好きだと気付いてもらえないタイプじゃないですか。そういうキャラに限って、素直にチョコを渡すヒロインに主人公横取りされる事になるんですよ。それを柱の影から見てトボトボと1人で泣きながら帰る羽目に……」

「な、なんでそんな事を言うの……？」じわっ

「あつ、す、すいません！ 漫画！ 漫画の話ですから、泣かないで下さい！」

「ダメ……泣いてないわよお……」

「と、とにかく！ バレンタインなら、それなりに気合の入ったモノを渡すべきです！ 男はバカだから勝手に勘違いしてくれますよ。」

「そうなの……？」

「勿論です！……あれ？この子もしかして僕の事好きなんじゃ？って思わせれば勝ちです。」

「思わせれば勝ち……で、でも今年のバレンタインデーは日曜だし、休みの日に態々呼び出してチョコを渡すなんて……」

「だったらデートに誘いましょう。デートの帰り道……夕焼けが2人を照らし、先輩は徐おもむろにチョコを取り出します。先輩の顔は夕焼け色に染まり、翼先輩はその真意を読む事は出来ない。しかし、渡されたチョコを受け取り顔を背ける先輩を見て徐々に鼓動は早くなっていく……どうです？ウルトラロマンティックでしょう！」

「い、石上……アンタ天才？」

マジである。この女、その光景を脳内で緻密に想像し、思考力低下によりデートに誘えるなら普通にチョコくらい渡せるという結論に至らない。

「まあ僕、恋愛マスターなんで。」

嘘である。男は異性に対して強がる悪癖を誰しもが持っている。この石上優とて例外ではないが、女性は男の虚勢に気付いてる事が往々にしてあるものである

が……

「恋愛マスター凄いい……」

マジである。この女、一切の疑問も持たずに石上の発言を信じてしまう。なまじ中等部の文化祭に誘えた実績があり、普段から相談と称して愚痴を聞いてもらっている為、石上の発言に対して怪しむ隙間がなくなっていた。

「おすすめは……やっぱり水族館デートですね。多少はお互いが無言になっても誤魔化しが効きますし、話題にも事欠きません。」

「ふむふむ……」

一方その頃……

「石上にバレンタインのチョコを？」

「うん、石上君には普段からお世話になってるし……伊井野ちゃんとおのちゃんも誘って一緒に作らない？」

「それはいいけど……」

「ホント？　じゃあ、日曜日に集まって作ろ！」

「日曜日はバレンタイン当日なんだけど……」

「うん、だからチョコを渡すのは月曜日にするの。こういうのって、学校で渡す事に意味がある気がしない？」

「あー……なんとなくだけど、言いたい事はわかる気がする。じゃあ、日曜日に誰かの家に集まって作る感じ？」

「うん、誰の家がいいかなあ……おさちゃんの家は？」

「私の家はちょっと……大友さんの家は？」

「言い出しっぺで悪いんだけど、日曜日はママがお友達を家に呼ぶらしくて……」

「じゃあ、ミコちゃんに聞いておくね……多分、大丈夫だと思うし。」

「ホント？　ありがとう！」

バレンタインを贈りたい②（番外編）

〈伊井野邸〉

「来といてから言うのもアレなんだけどさあ……私、石上には普通に売ってる奴を義理チョコとして渡すつもりだったんだけど……」

「まあまあ、おのちゃん。みんなでチョコ作りとか絶対楽しいよ！」

「ん、まあそうかもね……伊井野は場所提供してくれてありがとね。」

「ううん、私の家にこばちゃん以外の友達が来るなんて初めてだから……嬉しい。」

「伊井野……」*サキサキ*

「伊井野ちゃん……」*サキサキ*

「な、なんで撫でるの？」

「良かったねー、ミコちゃん。」

「まあとりあえず、それぞれ違う種類のチョコにしよっか？ 被ってもつままないし。」

「おのちゃんの意見にさんせー！」

そして……

「大友さんっ!? チョコを溶かす時は直接鍋に入れるんじゃないと湯煎しないと!」

「えっ、そうなの?」

女子達の……

「……アレ? 伊井野、此処に置いてあった業務用チョコ知らない?」

「えっ?」 *ぎゅぎゅ*

「なんで食べてんのっ!?」

「ええと……先ずは素材の味を確かめてからじゃないとダメだと思って……」

「……もう半分なくなってるんだけど。」

バレンタインのチョコ作りが……

「……っ!? 大友さんストップ! それ薄力粉じゃなくて強力粉!」

「強いって書いてるからより美味しく……」

「ならないよっ!」

2人の女子の苦勞の元……

「……伊井野、何してんの?」

「砂糖をあと2g 足そうと……」

「そこまでカッチリしなくていいからっ！ 目分量でいいから！」
行われたのだった。

〈次の日〉

バレンタインが昨日だったせい、今日は学校のそこかしこでチョコを渡す女子を見掛ける。因みに、僕の今日の戦果は0だ。廊下を歩きながら……朝方、大友に言われた事を思い出す。

石上君、放課後……風紀委員室に来てくれる？

そんな事を言われたら、多少の希望を持ってしまうのは仕方の無い事だと思う。僕は目的地である風紀委員室の扉を開けて中へと入った。

「おっす、石上。」

「小野寺？」

「遅いわよ。」

「ごめんね石上、呼び出したりして……」

「いや、それは構わないけど……」

教室には小野寺、伊井野、大仏が待っていた。

「もうちょっと待っててね、大友さんがそろそろ来るから……」
ザザザ

「お待たせー！ あっ、石上君も来てるね！ じゃあ皆やるよ！」

「……？」

「[[「いつも助けてくれてありがとう！」]]」

「な、なんっ!？」

目の前の4人からの言葉に、上手く言葉が出て来ない……

「進学出来たのは石上君のお陰だよー！ あっ、モチロン伊井野ちゃんとおさちゃんにも感謝してるからね！」

「……風紀委員の仕事とか色々手伝ってもらってるし、その……ありがとう。」

「石上、いつも助けてくれてありがとうね。」

「あ、私は成り行きで言ったただけだから。まあ義理だけど、有り難く食べて。」

4人の言葉の後に大友から箱を手渡される。開けてみると10^チ程のホールケーキが入っている。

「……ありがとう。すげえ嬉しい……」

ケーキを嬉しそうに見下ろす石上を見ながら小野寺は考える。

「……」

（まさか材料が足りなくなつて、4人で1つのチョコを贈る事になるとは思わなかったなあ……）

知らぬが仏とはこの事であった。

〈高等部〉

風紀委員室的一幕も終わり、石上は高等部へと呼び出されていた。

「……まだ来てないのかな？」^{ブッブッ}

「うあああんっ！ 石上いー！ 水族館に誘えなかったあー！」^{ぎんぎん}

「ダメでしたか……チョコはどうでした？」

「……チョコは渡せた。」

「それなら良かったですね。」

「うん、あとコレ……」

四条先輩は、ポケットから可愛らしくラッピングされた袋を取り出して僕に差し出してきた。

「え……くれるんですか？」

「なんだかんだで世話になってるしね……これでも、ちゃんと感謝してるのよ？」

「ありがとうございます、四条先輩。」

「……優は特別にマキ先輩って呼ぶ事を許してあげるわ。」

「……あざっす、マキ先輩。」

「それより聞いてよっ！ 翼君を誘う時に……」

「はいはい、聞きますよ。」

〈自宅〉

「あれ？ なんかメッセとアイテムが届いてる？」

僕は携帯ゲーム機の点滅を確認すると、メニュー画面から通知画面を開いた。
龍珠さんからメッセージとアイテムを受け取りました。

〈やる〉

カカオケーキ（体力全回復）を受け取りました。

「ははっ、龍珠先輩らしいな。」

（……でもコレ、ホワイトデーはどっちで返すべきなんだ？）

生徒会はまだしてない

感想ありがとうございます――φ（――）

初体験！言わずと知れた恋のABCにおいて、Cに該当する行為を表す言葉である。高校生にとって経験済みというのは一種のステータスであり、同性に対しては格上として接する事が出来、異性に対しては経験済みという事実から余裕を見せ、大人の振る舞いをする事が可能になる魅惑の肩書きである。その事実を除いても、高校生と性の話題は切っても切れない関係。それは秀知院学園が誇る生徒会役員も例外ではないようで……

「すいません、遅れました。」がちゃん

「おう、別にそこまで仕事は溜まってないが……何かあったのか？」

「いえ、ちょっと風紀委員の友人に頼まれてデータ処理の手伝いを……」

「ああ、そういえば中等部の頃から手伝っていたらしいな……殊勝な事だ。」

「毎年風紀委員は特に人手不足らしいですからね。石上君、そういう理由なら問題無いわよ。」

「ありがとうございます……アレ？ どうしたんですかこの本？」

「ああ、校長が生徒から没収したらしいが……」

「こんにちはー！」*カチャッ*

「遅いわよ藤原さん。」

「ごめんなさーい……ん？ なんですかこの本？」

「校長からだ……教育上良くない本だから、生徒会で処分しとけだとき。」

「教育上良くない本？……ひゃあああっ!? み、乱れ……いや、淫れてます！

この国は淫れてますうっ！」*アアアア*

「……」

しゃおらー！ち●こおお！

「……」

（人ってここまで変わるものなのか……）

石上は時間の残酷さを再確認した。

「えーと、初体験はいつだったアンケート。高校生までに34%……ですか。」

「嘘です！ そんな高い筈ありません！だ、だって、それならこの中に最低1人はいる計算に!!」

「少なくとも私は経験済みですから、アンケート結果は正しいんじゃないですか？」

「えええええええっ!!!!?」

「」

「会長!? 大丈夫ですか!?!」

「……高校生にもなれば普通経験済みなのは？ 皆さん随分愛のない環境で育ったんですね？」

四宮も昔は初体験をキスの事だと思って……

「……」

（会長が昔言ってたのは、多分この事だな。）

石上は察した。

「……や、やっぱり、私も彼氏とか作ったほうがいいのかな……でも、そんなのお

父様は絶対許してくれないし……」

「……そんなに焦らなくても大丈夫ですよ。」

「え、石上くん？」

「別に高校の内に彼氏を作らなきゃいけない訳じゃないんです……時間が掛かってもいいから、ちゃんと好きな人と結ばれるべきですよ。」

「石上……」

「石上くん……でも本には、高校生にもなって未経験なんて恥ずかしいとか書いてますし……」

「……体だけ繋がっても虚しいだけですよ。」

過去に誰かと体だけの関係があった……みたいな言い方だが、石上は前回のクリスマスパティー後に体験した、かつての想い人との苦い記憶を思い出しながら答えただけである。

「「っ……？」」

しかし、結果的に2名の未経験者を勘違いさせてしまう。

（え、石上お前そっち側なのっ!? マジで!? 後輩に先を越されていたなんて……）

あらあら、石上君は経験済みなのに会長は未経験なんですか……
お可愛いこと……

「……………」

（コレはキツイっ……）

「い、石上くんは……その、経験が？」

「はは……さっきのは、なんでもないんです……忘れて下さい。」
本当になんでもない。

「ひゃああ……！」

未経験者（童貞）が未経験者（処女）を意図せず騙した瞬間である。

「い、石上、その……な、やはり学生という立場上、ある程度節度を持った付き合い方をするべきだと……思うぞ？」

白銀、なけなしの知識と常識で当たり障りのない発言をする。

「はい、心得てます。それに昔の事ですから。」
嘘ではない。

「グハッ……」ガッ

（む、昔……石上は既に、俺よりも上のステージにいたなんて！）

未経験者（童貞）が未経験者（モンスター童貞）を意図せず騙した瞬間である。

「は、はわあ……」

（す、凄い1年生が入って来ちゃいました！このままじゃ、ラブ探偵としてのプライドが……）

「くうっ……！」

（石上……俺なんかじゃ想像も出来ない様な経験を既にしてるなんて……！）

そう……石上優、この男こそ童貞でありながら自身の紛らわしい発言と周囲の勘違いにより経験済みと誤解された存在、エンペラー童貞なのである。

「……？」

（どうして会長と藤原さんは項垂れているのかしら？）

「それと四宮先輩、言っておきますけど初体験はキスの事じゃないですからね？」

「……え？」

16分後……

「だ、だって！　そういう事は結婚してからって法律で！」

「か、かぐやさん、落ち着いて……」

「しかし石上、よく四宮が初体験の事をキスと勘違いしてるってわかったな？」

「……マキ先輩も同じ勘違いをしてたんです。」

「なるほど……」

「それより……何言ってたかは聞こえませんでしたけど、16分も性知識話せる藤原先輩って凄くないですか？」

「ぶはっ！　た、確かにな。」プ。ル。ル

「~~~~っ！！？　い、石上くんっ!!」

四宮かぐやは絆されない①

感想ありがとうございます（・∀・）

〈5月某日生徒会室〉

「邪魔するわよ！」ニヤーン

「……真妃さん、何か御用ですか？」

「あら、お婆様だけ？ 優は？」

「石上君は、風紀委員の助っ人業務で遅れるそうです……あと、同い年でしょ？ いい加減、その呼び方はやめて下さい。」

「あら、続柄上そうなのだから仕方ないでしょう？……目上の者は敬えと教育されてますので。」ゴゴゴゴ

「……そうですね、分家は本家を敬うのが筋ですからね。」ゴゴゴゴ

「はぁ……優が居ないならしょうがないわね、また来るわ。」

「眞妃さん、随分石上君と親しい様ですね？」

「友達なんだから当然でしょ？」

「去年から付き合いがあるそうですが……」

「態々調べたの？ おば様も暇人ね……心配しなくても、優は良い奴よ。」

「……どうでしょうね。私にはまだ……なんとも言えません。」

「……生徒会に入って少しは丸くなったと思ったけど、相変わらず警戒心の強い事。」

「……財閥の娘ともなれば当然です。眞妃さんこそ、随分と簡単に彼を信用するんですね。」

「ま、私の恋愛相談に乗ってもらってるし……」

「れ、恋愛相談!？」

「優は恋愛マスターだから、良い案を提供してくれるし……」

「恋愛マスター!!?」

「そのお陰で今度……デートに行ける様になったのよ!」

「デート!!!?!!」

「おば様も恋愛に悩んでたら相談して見れば？」

「なっ!? べ、別に私は、誰にも恋い焦がれてなんていませんし！」

「ふーん? まあおば様が良いならそれで良いけどね……じゃ、失礼するわね。」
サッ

チャッ、ハッ

「石上君が恋愛マスターだなんて……どうやら、調べる必要があるみたいですね。」
（あくまで生徒会に属する者として、健全な学生生活を送っているかを調べるだけです。別に石上君が本当に恋愛マスターだったとしても、相談なんてしないんだからっ!……ま、まあ? 他人の意見から妙案が浮かぶ事もありますし……あまり邪険にするのもかわいそうよね。）

警戒心グラッグラであった。

〈中庭〉

「……」

（早坂にも調べるよう言っているけど、石上君は何処にいるのかしら……あら？この声は……）

かぐやは茂みの中から僅かに洩れ聞こえる声を辿り、草木の隙間から中を覗き込んだ。

「……優、やりづらいからもう少し腿上げろ。」

「うっす。」

「っ!？」

（えええーっ!?! 膝枕しながらゲームしてるっ!?! 貴方達付き合っていないのよねっ!?! なのにその距離感……アウトじゃないっ!?!）

「あつ、桃先輩そのアイテム僕が狙ってたんですけど……」

「フフ、早い者勝ちだバーカ。」

「だったらこっちも……」

「あっ！ 優てめえ、それは私のっ……」

「っ!?!？」

（しかも名前で呼び合ってる!?! なんなの!?! 最近はそれが普通なの!?! 私だって会

長とはお互いに名字と会長呼びしか出来てないのに!!)

〈校舎内〉

(全く、眞妃様もかぐや様に妙な事を吹き込まれて。その分私の負担が増えるっていうのに……)

「……ぎっ!」ぎっ

早坂は素早く階段の影へと身を潜めると……

「ヤバッ……遅れる。」

小走りで廊下を移動する石上を視界に収めた。

「……」

(まあ、都合良くそんな場面を目撃するとは思えないけど……)

石上が廊下の曲がり角に差し掛かると……

「うわっ!?」アッ!」

「ぎゃー!?」

「す、すいません!……って大仏? 悪い急いで……大丈夫か?」

「石上……うん、大丈夫……」
ぎゃー

「ん?」

「あ……」

大仏が離れようとした時、石上は自身の制服のボタンに髪が絡まっているのを見つけた。髪を辿ると、その髪は大仏の頭部へと続いている。

「わ、悪いっ……」

「いや、こっちこそ……」

（あちゃー、ああなると簡単には外せないんですよねえ……彼はどうするんですよか。）

「う……くっ!」

「外れそうにないね……石上、コレ使って。」

大仏はポケットから小型の裁縫セットを取り出すと、ハサミを石上に手渡した。

「ああ、じゃあ借りるよ。」

「……………うん。」

（あー切っちゃうんだ、髪は女の命なのに……実際に私もあの場面で髪を切られたら地味にショックを受けるんだけど、まあ男はそういう所に気が回りませんからね……………）

「……コレでよし、解けた。」

「……………えっ？」

石上の手にはボタンがあり、解けた髪がはらりと大仏の元へと戻って行く。

「い、石上……ボタンの方を切っちゃったの？」

「いや、それはそうだろ。悪かったな大仏……じゃ、またな。」

大仏は去って行く石上を見つめたまま動かない。

「もう！ アッサリこういう事するんだから……」

一方早坂は……

「……………!!」ハハハハハハハハ

（もうおおおっ!!）

だいぶ参っていた。

四宮かぐやは絆されない②

感想ありがとうございます。(。ω。)

〈校舎内〉

「……」

(全く、早坂ったら……理由は言えませんが任務遂行が不可能になりました……とか言って仕事を放棄するなんて、何を考えているのかしら。)

「~~~~!!」ハハハハハハハハ

(もうおとおっ!!) ↑理由

「さて、石上君は何処かしら……」

(あら? あの子……)

先程すれ違った女子生徒を振り返る。その生徒は顔を隠す程の高さまでダンボール箱を積み上げ、よろよとバランスを取りながら歩いている。

「……」

（危ないわね、大丈夫かしら？）

なんとなく目で追っている、探していた男子がその少女へと近付き話し掛けていた。

「伊井野、危ないから手伝うよ。」

「石上……じ、じゃあお願い。」

「1人で運ばずに誰かに手伝ってもらえば良いのに、相変わらず1人で無理する奴だな。」

「だって……」

「ま、僕の手が空いてる時は遠慮すんなよ？」

「……うん、ありがと。」

「おう、じゃあ行くか。」

私は2人の様子を怪しまれない程度に盗み見る。

（……打算なく他人に優しくするなんて、変わってるわね。まるで会長みたい……は、流石に言い過ぎかしらね。）

〈生徒会室〉

「――森へお帰り。」

「……はい、藤原先輩オッケーです。」

「えへへー、皆さんどうでした？」

「ああ、中々上手く踊れてたな。」

「ええ、本当に……やはり、こういう事は藤原さんに限りますね。」

「まあ……藤原先輩のアホっぽさは良く出てましたよ。」

「なんで石上くんは、私に対してそんな辛辣なのっ!？」

「しかし、生徒会のPR動画とは……校長も変わった提案をするものですね。」

「まあ、そう言うな四宮。生徒会のお堅いイメージが少しでも払拭されるなら悪い話じゃない。」

「そうですね！ 会長やかぐやさんは他の生徒達から距離を置かれ気味なんですか

ら、これくらいのおふざけは寧ろ必要な事です！」

「距離を置かれ気味とかバツサリ言うな！」

「……そういう藤原先輩はどうなんですか？」

「私は皆の人気者、藤原千花ですよ？ 逆に距離詰められ過ぎなくらいです！」

「そういう事は自分で言う事ではないわよ、藤原さん。」

「同感ですね。」

「ああ、全くだ。」

「私にそんな態度取ってる男子は、会長と石上くんくらいですよ!？」

「……皆さん内面に目を向けてないんですね。」

「どういう意味ですか?!？」

「……」

（そういえば、石上君は藤原さんに割と冷めた接し方をしていますね……なるほど、人の本質を見る目はあるみたいね。）

かぐやは中等部からの親友の内面を全く評価していなかった。

「……そういえば藤原先輩、最後に何かしてましたね。何してたんですか？」

「最後?」

「森へお帰りとかなんとか言ってた所です。」

「あーアレは、漆^{ウルシ}ゴキブリさんが居たから外に逃がしてあげたんですよ。私は慈悲深いので!」

「なるほど……とりあえず、近付かなくてくれますか?」

「なんでですかっ! 漆^{ウルシ}ゴキブリさんは、害虫じゃありませんから問題ないですよ!」

「素手でゴキブリ触った時点で大問題です。ドチャクソヤベー奴認定確実です。たった今、僕の恋愛対象者の条件にゴキブリを素手で触らないが追加されました。」

「そこまで言うのっ!?」^{ヤッペー}

「俺もゴキブリを素手で触るのはどうかと……」

「会長までっ!」^{ヤッペー}

「……」

（とりあえず、石上君は信用に足る人間の様ですから、少しは信用しても良いでしょう。）

柏木渚は話したい

感想ありがとうございます（「A」）

5月も半ばを過ぎたある日……僕と先輩3人は、都内の水族館へ訪れていた。

「晴れて良かったね、マキちゃん。」

「そ、そうね！ぜ、絶好のデート日和ね……」
「フニョフニョ」

「えっ？ マキちゃんごめん、最後らへんなんて言ったの？」

「な、なんでもないわよ！……ほらっ、さっさと入るわよ！」

「えっ、うん。」

「あっ、待ってよ眞妃！」

水族館の入り口へと走って行く先輩達に、視線を送りながら考える……

「……」

（大丈夫、そんな変な事になったりしない筈……幾ら柏木先輩でもこれだけ人目が

あつたら妙な事はしないだろうし、それに……)

来年には兄貴の結婚式もあるし……

桃先輩とゲームの約束もあるし……

まだまだ会長と四宮先輩のフォローをしなくちゃいけないんだ！

フラグ盛り盛りであった。

「優何してんのよ、置いていくわよ？」

「あ、はいすぐ行きます。」タッタッタ

「「……」」カッカッ

〈水族館内水中通路〉

「GWの時期からズラしたのは正解だったわね。」

「うん、GWに来てたら今より人一杯だっただろうね。」

「石上君の意見聞いて良かったね、眞妃。」

「ホントよね、助かったわ。」

「いえ、どうせなら人がごった返してる時じゃない方が楽しめますからね。」

「石上君は水族館に友達と来たりするの？」

「あ、いや……僕、男友達居ないんです。普段話すのは会長くらいですし、女友達はいますけど来た事はないですね。」

「そっか、じゃあ僕は会長に続いて男友達2号かな？」

「え？」

「あ、ゴメンね、石上君は年下だけど頼りになるし、こうして一緒に遊びに来たらもう友達かなって。」

「……謝らないで下さい、そう言ってくれて嬉しいっす。」

「そっか、良かった。」

「……」

（優しい人だな、あのツンデレ発言しまくりのマキ先輩と変わらずに接し続けているだけの事はある……もし、また翼先輩が彼女自慢して来てもトイレットペーパーを使うのはやめてあげよう。）

謎の思いやりである。

「……アンタら何恥ずかしい事言ってるのよ。」

「うっ、スルーして下さいよ。」

「あはは、気にしないで。」

「……」

「どう見てもダブルデートだね。」

「えっ……じゃあコレが終わったら、ホテルでよん……むぐっ!?」

「ミコちゃんホントやめて、こんな往来で。」

「……伊井野ってムツツリだよねー。エッチなのはいいけません、みたいな感じで風紀委員やってる癖に……」

「れ、麗ちゃん！ 私はそんなんじゃないっ……」

「「しーっ！」」

「静かにしなよ伊井野、石上達にバレるじゃん。」

「ミコちゃん、ハウスする？」

「うっ、ごめん……」

.....

〈3日前〉

（あ、石上と……2年生かな？）

「じゃあ、土曜日の10時に〇〇水族館に集合ね。」

「はい、わかりました。」

「へえ……」

（石上やるじゃん、年上とデートか……）

「あつ、居た……麗ちゃん、ご飯食べよ。」

「うん、今日は中庭で食べようか。」

「え？別に良いけど何かあるの？」

「ちょっとね……大仏さんもそれで良い？」

「大丈夫だけど……」

「じゃ、行こうか。」

〈中庭〉

「石上がデートッ!?麗ちゃんそれ本当!？」

「……」

「うん、ホントホント。」

「小野寺さん、詳しく聞かせてくれる？」

「えー、私も詳しくは知らないんだけど……」

……

「……なるほど、土曜日に水族館デートを……」

「い、石上、そんなふしだらな……」

「……」

（ふしだらなのは伊井野の頭の中でしょう……ってツツコミたいけどやめとこう。）

「……小野寺さん、土曜日暇？」

「え？ まあ暇だけど……ってまさか？」

「水族館行きたくない？」

「え、後つける気なの？ 大仏さんて意外と……」

「ミコちゃんも行くよね？」

「えっ!? わ、私はそんなっ……!!」

「ふーん……じゃあ小野寺さんと2人で行って来るから、ミコちゃんはお留守番ね。」

「あっ行く！ 行くからっ！ 置いてかないで！」

（チョロい。）

……

〈水族館アシカシヨードーム〉

「ミコちゃん、あんまり近づいたらバレちゃうからね？」

「うん、でも人多い……」

「まあ、此処の目玉イベントらしいし……どうせなら尾行なんかしないでゆっくり見て回ったかったけど……」

「うっ、ごめんね、麗ちゃん。」

「まあ別の機会にまた来ようか……大仏さん、石上達は？」

「彼処に先輩2人が並んで見えるから……近くに居ると思うんだけど、此処からじゃ見えないね。」

「こばちゃん、麗ちゃん、アシカ出て来たよ！」

「うん、可愛いねー。」

「だねー。」

眼前に広がる巨大な水槽を眺める。周りに人気は無く、今日の目玉イベントであるアシカショーを観に行ったようだ……唯一、僕とその隣で佇む少女を除いては……

「石上君、やっと……2人っきりになれたね。」

柏木先輩は、チラリと此方に視線を投げ掛けながら……ニコリと笑った。

柏木渚から逃げたくない

感想ありがとうございます(。ω。)

一部の人に受け入れられない展開があります。

「石上君、やっと……2人っきりになれたね。」

普通なら照れたり恥ずかしくなったりするセリフなのに、僕はその言葉に隣を向く事が出来なかった。館内は空調により過ごしやすい気温になっているにも関わらず、背中を嫌な汗が伝って行く……

「……そうですね。」

「そういえば……文化祭でゆっくりお話ししようって言ってから、半年くらい経っちゃったね?」

「……そうでしたね。」

(まあ、その間何度か逃げた事があるから仕方ないんだけど……)

「石上君、私見ると逃げるんだもん……流石に傷ついちゃうなー。」

「それは、すいませんでした。」

「ふふ、許してあげる。その代わり……教えてくれる？ 貴方はどうして私から逃げるの？」

「それは……」

「……話せないんだ？ じゃあ、どうして眞妃を応援したりするの？」

「……いけませんか？」

「うーん、正直やめて欲しいかなあ……」

「何故ですか？ 好きな人と付き合いたいっていう眞妃先輩の気持ちは、どうでもいいんですか？」

「……そんな訳ないじゃない、眞妃は大切な親友だもん。」

「だったらなんで？」

「なんで……か。はあ……この子達はいいいね、ずっと……死ぬまで一緒にいられるんだから。」

柏木先輩は、目の前の水槽を撫でながらそう洩らした。

「私と眞妃はね、小等部の頃からの付き合いなの。その間、ずっと一緒だったの……習い事も、遊びに行くのも、クラスも……でも最近、眞妃が私に隠し事をするようになった。」

柏木先輩の言葉を僕は黙って聞く。

「……去年の11月くらいかな？ 私に内緒で眞妃が何処かへ行ったり、誰かと連絡を取り合ってるのを見るようになったの。」

柏木先輩は、水槽で泳ぐ魚の群れを羨ましそうに見つめながら話を続ける。

「それである日、中等部の文化祭に誘われたの。後輩に誘われたって言ってたけど、眞妃を誘うような後輩なら私も誘う筈だからおかしいって思った。そして、文化祭へ行くと……君が居た。」

水槽を背にして柏木先輩は真っ直ぐに僕を見る。

「直感でこの子だって思ったよ。何かを隠してるような……罪悪感を感じてるような、妙な雰囲気が出て暫く色々調べてみても……大した事実は出て来なかったんだけど……」

「……」

「……君が眞妃と出会わなければ、私達はまだまだ一緒に居られる筈だったのに……」

「柏木先輩は……翼先輩にマキ先輩が取られるのが嫌なんですか？」

「取られるのが嫌か……当たり前でしょう？ 小さな頃からずっと一緒だったのよ？ これからだってずっと一緒だと思ってた……貴方が……貴方が余計な事さえしなければマキは……！」

前回の記憶を通して初めて……悲痛に顔を歪める柏木先輩を見た。でも、僕にはまるで……小さな子供が淋しいと、離れたくないと泣いて駄々をこねている様に見える……僕はもう柏木先輩を怖いとは思えなくなっていた。

「やめてよ……私から眞妃を離さないでよ……眞妃に恋人が出来たりしたら、もう一緒には居られない……嫌なのっ！ 離れたくないのっ！ 耐えられないの!!」

……元々、柏木先輩からずっと逃げるつもりは僕にはなかった。僕だけ記憶を持って巻き戻った時間をやり直す事で、荻野を除けば一番影響を受ける人間は柏木先輩だったから。だから……マキ先輩の背中を押して応援すると決めた時に、柏木先輩から逃げてはダメだと思った。

「……それは違います。」

「何が違うのよっ……わかってるわよ、自分が可笑しな事言ってるって……でも、私は……！」

「マキ先輩は、貴女から離れたりしませんよ。」

「……なんでそんな事、貴方に言えるのよ。」

「……マキ先輩が貴女の話をする時は、とても嬉しそうな顔で話すんです。大切な想い出を、宝物を自慢するように……柏木先輩がマキ先輩と離れ難く思っているのなら、マキ先輩もきっと同じ様に思っている筈です。だって、2人は親友なんですから。」

（それに、親友が好きな人と付き合って、目の前でイチャイチャされ続けても……マキ先輩は貴女から離れようとはしませんでしたよ。）

「……」

先程まで昂っていた柏木先輩の感情の波が……小さくなっていくのを感じた。

「……真妃はね、すっごく優しいの。」

「はい。」

「言葉遣いが悪いトコもあるけどね、他人を思いやれる……優しい子。」

「そうですね。」

「だからね、大好きなの。」

「はい、知ってます……」

「……そっか。もし眞妃が私から離れたりしたら、責任取ってくれる？」

「……僕に出来る事ならいくらでも。」

「じゃあ、とりあえずは……いいよ。今日の所はコレでお願い……まだアシカシヨーやってるかな？……行こっか、あんまり離れたままだと眞妃に怒られちゃう。」

「……そうっすね。」

〈水族館アシカシヨードーム〉

「うわぁ！ マキちゃん、あのアシカ凄いね。」

「うん、凄い……」

（優のお陰で翼君と2人になれた。変わった後輩よね、なんの得にもならないのに……）

隣でショーに夢中になっている翼君を盗み見る……今回は、今度こそは、次はきつと……告白するって決めて、その度に何も言えなくなる自分の弱さが嫌いだ。そういう事がある度に優に対して愚痴を吐いて、宥められるのがお約束になっていた。今日も2人で居る時間があれば告白するつもりだった。でも……私はまだ何も言えなくなる。

へ……以上で本日のアシカショーは終了となります。ご来場の皆様ありがとうございます。<

「マキちゃん、終わったよ……大丈夫？」

俯いている私を心配した声が隣から聞こえる。

「あ、もしかして気分悪い？ ちょっと休もうか、動ける？」

昔から変わらない、その優しさに……

好きな人がいる人の想いは……報われてほしいじゃないですか

物好きな、可愛い後輩の言葉に……

「翼君……」

私は……

〈水族館内水中通路〉

「……以上で本日のアシカショーは終了となります。ご来場の皆様ありがとうございます。」

「あー、アシカショー終わっちゃいましたね。」

「んー、じゃあ此処で待ってようか？ 丁度戻る時通る筈だし。」

「そうですね……ん？ 小野寺？」

「い、石上……やっほ。」ヤッホ

「奇遇だな、誰か友達と来てたのか？」

「う、うん……伊井野と大仏さんと3人で……」

「へー、仲良くしてるみたいだな。」

「そりゃまあ、同じクラスだしね。ゴメン、伊井野達先に行っててさ……もう帰るトコなんだよね。」

「そっか、引き止めて悪かったな。」

「気にしないでいいよ、じゃあね。」

（見つかったちゃったし、2人が戻って来たらボロ出しそうだし、さっさと此処から出よう。）

私が通り過ぎる瞬間、石上の隣にいた女性と目が合った。

「尾行する時はもう少し上手にね？」

「っ!？」

ボソリと呟かれた言葉が耳に突き刺さった……恐怖で振り返る事も出来ないまま、私は走って伊井野達の元へと向かった。

「あつ、麗ちゃんどうしっ……」

「早く出るよ!!」

「えっ、麗ちゃん？」

「何かあったの？」

「いいから早くっ!!」グググ

「ええええっ……」ズルズル

……

「……あ、マキ先輩達いましたね。」

「うん、合流出来て良かった。」

此方へゆっくり歩いて来る2人の姿が目映った。マキ先輩は俯き、翼先輩はそっぽを向いている。お互いの姿を見ていない2人の瞳に反して、2人の手は……しっかりと繋がっていた。

マキちゃん曇り顔派の人はすいません(´；ω；｀)

悩んだけど、5巻167ページを見て救済する以外の選択肢が消えました。マキちゃんの泣くトコはもう見たくない…

あと、サタン柏木のマキちゃんに対する同一化願望というのがイマイチ理解出来

ませんでした。が、ちょっと歪んだずっと一緒に居たい願望だと思うのでこういった話になりました。

あんまり狂気度上げると収拾つかなくなりそうだし：原作のやべー奴感には勝てない。A() E()

藤原千花はわからせたい①

感想ありがとうございます(。ω。)

波乱のダブルデートから数日後、生徒会が事務処理に従事していた時の事……

「……そういえば石上、この前のダブルデートはどうだった？」

「ダブルデート……まあそう言えなくもないですか。そうですね、良い感じで終わりましたよ。」

「あら？　そういえば真妃さんもデートだと言っていましたけど、もしかして？」

「はい、マキ先輩とその友達2人と水族館に行って来ました。」

「そう、問題なく終わったのなら何よりね。」

「まさか、本当に恋愛マスターだったなんて……」

「……」ツ。ワ。ッ。

「……ん？　どうした藤原？」

「この……ぼっけなすー!!!」

「藤原先輩、今度はどうしたんですか？」

「そんな面白いイベントがあったなんて、どうして教えてくれなかったんですか!？」
「いやだって……教えたなら隠れてついて来ようとするでしょ？」

「……っするよ!? 悪いっ!？」

「だから嫌なんですよ。藤原先輩が来ると成功するものもしくなりそうですし。」

「……」

（石上って堅実な判断するよなあ……）

「……」

（賢明な判断ね。）

「もうー!! 石上くんは私の事をなんだと思ってるんですか!？」

「強欲と自己愛に塗れたアホな先輩。」

「~~~~っ!? 言ってくれましたね! 勝負です! このラブ探偵チカが石上くんに恋愛偏差値テストで勝負を挑みます!」

「恋愛……」

「偏差値……」

「テスト……ですか。藤原さん、それはどういった内容なのでしょう？」

「そうですね、折角ですから会長とかぐやさんも一緒にやりましょう。ランダムに選んだこのサイトから出題します。いいですか？ 今から順番にこのサイトの問題に答えてもらい、全員が答え終わったら結果発表して一番恋愛偏差値が高い人の優勝です。」

「恋愛偏差値なぞ……実にくだらんな。」

（よし、コレで高得点を取り四宮に格の違いを見せつけてやる。）

「本当に藤原さんはそういうのが好きですね……」

（コレで会長より高得点を取れば、これからの学生生活を優位に進められる……ふふ、藤原さんにしては妙案ね。）

「まーたアホな事言い出したよ、この人は……」

（そんなサイトで恋愛偏差値なんて測れる訳ないでしょう。）

「……石上、気持ちはわかるが本音と建前は間違えないようにな。」

「余裕でいられるのも今の内ですよ！ 順番は会長、かぐやさん、私、石上くん」

行きましょう！」

「……いいだろう。」

白銀御行

Q・好きな人が出来ました、告白する？　しない？

（そんなもん、しのっ……向こうから告ってくるのを待つに決まってるだろ！）
四宮かぐや

Q・友達と同じ人を好きになってしまいました、どうする？

（……女同士の友情なんて脆いモノよね、さよなら藤原さん。）

「ん？　どうしました、かぐやさん？」

「いいえ、なんでもありませんよ。」

「……」

（四宮先輩、また藤原先輩を睨んでる……）

藤原千花

Q・恋人との初デート！　行き先は？

（初デートという所がミソですね、答えは遊園地です！）

石上優

Q・好きな人に言ってもらいたい言葉は？

(言ってもらいたい言葉か、この中だと……コレかな。)

〈結果発表〉

「さあ、お楽しみの結果発表です！ 皆さん心の準備はいいですか？ いきますよー！」

〈恋愛偏差値・70以上〉

藤原千花・石上優

あなたはかなり恋愛の達人。もうすでに、恋愛経験が豊富なのではないでしょうか？相手の気持ちを読み取る能力があり、咄嗟の判断もうまく出来るようです。無理せず、普通に、リラックスして付き合うのが、恋愛を長く続けるコツ。

〈恋愛偏差値・50前後〉

白銀御行・四宮かぐや

あなたの恋愛指数は平均並といった所、まだまだ勉強する余地がありそうです。頭の中だけで恋愛をしているような面があります。理想の恋を追い求めるのはいい

けれど、概ね現実と理想の間にはギャップがあるもの……経験値をもっと稼ぎ、たくさんの体験を重ねていけば、きつといい恋ができるようになるでしょう。もう少し頑張りましょう（笑）

（はあああああっ!? 恋愛偏差値50前後っ!? そ、そんな……）

「あ、私と石上くん恋愛偏差値一緒ですか。残念ながら引き分けですねー。」

「まあ、こんなモノは気休め程度に思っておくのが普通ですよ。」

「……っていうか、なんだこの最後のもう少し頑張りましょう（笑） って！ 完全に煽ってるだろ!?!」

「この私をここまで侮辱するなんて、サイト運営者は覚悟が出来ているんでしょうね……」

「2人共落ちついて下さい。気休め程度に言ったじゃないですか……そもそも、藤原先輩が恋愛経験豊富で、相手の気持ちを読み取る能力があり、咄嗟の判断もうまく出来るなんて信じられます?」

「それは……」

「確かに……」

「3人共、失礼って言葉知ってますか!？」

本日の勝敗、藤原の敗北

なんかかんや恋愛偏差値でエンペラー童貞と同点だったが、生徒会メンバーからの評価が著しく低かった為。

藤原千花はわからせたい②

私の名前は藤原千花！生徒会副会長であるかぐやさんの大親友であり、運動音痴な会長をバレーボール熟練者レベルまで育て上げた名コーチ！生徒会役員書記担当兼、彷徨う愛を見つけ導くラブ探偵!!……でも最近そんな私に天敵が現れました。その天敵は、新入生でありながら入学して間もなく会長にスカウトされ、私達の新たな生徒会の仲間となりました……ここまでは構いません。でも彼は、その本性を1ヶ月もしない内に露わにし始めたのです……先輩である私に対してアホ呼ばわりする事から始まり、漆ゴキブリさんを慈愛の心で逃した私をドチャクソヤベー奴認定するし、さらっと私を恋愛対象外とか言うし、そして何より……偶に私を素で見下した目で見て来ますし……あまりこういうった手は使いたくはないのですが、仕方ありません。先輩としての威厳を取り戻す為の必要悪です！

「……それで、まあ話はわかりましたけど、どうして私なんですか？藤原先輩。」
「ふふふ、小野寺さんは石上くんの友達ですよ？弱味の1つや2つ知ってるんじゃないですか？」

「……知りませんし、知ってても友達の秘密なんて喋るものじゃないと思うんですけど……他の人に聞いて下さいよ。」

「だって石上くんの友達って風紀委員だったり、龍珠さんだったりで教えてくれる人が居ないんですもん……」

「……私なら教えてくれると思ったんですか？」

（あれ、私もしかして口軽いと思われてる？）

「いえいえ、正直言えば秘密どうこうは冗談ですけど、同じクラスなので石上くんの恥ずかしい失敗談とかあれば聞こうと思ってました！」

「因みに……それ聞いてどうするんですか？」

「全力でイジります!!」

「そ、そうですか……」

（普通にタチが悪い……）

「それでそれで、何かないですか？」

「うーん、特にはないですね。」

「えー、そんなあ……じゃあ、何か石上くんに仕返し出来るような案とかないんで

すかー?」

「そこまで仕返ししたいんですか?」

「それはそうです! 何故なら……」

「あつ、理由ならもう聞いたので大丈夫です。」

(只の逆恨みな気がしたけど……)

「じゃあ早く、案を言うまで帰しませんよ。」

(め、面倒臭い……もう適当言って帰ろうかな。)

「あー、色仕掛けとか、ボディタッチとか? 男子なら緊張でドギマギするんじゃないですか?」

「その手がありましたか! 私急用が出来たのでコレで失礼しますね! ありがとう小野寺さん!」
~~~~~

「あ、はい。」

(石上も大変だなー、なんかあったら謝ってこ。)

……

〈生徒会室〉

「こんにちはー。」ハッ

「藤原先輩、ちわっす。」

「……！」

（ふふふ、会長もかぐやさんも居ないとは好都合ですね。なんだかんだで石上くんも男の子、普段から恋バナに触れてる私に負ける要素は皆無ですよ！）

「……？」

「あつ、石上くん……運動部の予算まとめてるんですね。何かわからない事があつたら聞いてくれていいですよ？」ス

（ふふふ、どうですか？ 対面ではなく、態々隣に座られるのは？）

「はい、今のトコ問題ないです。」

「そうですか……」

（むう、顔色ひとつ変えない……もう少し踏み込んで見ますか。）

「あ、そういうば石上くんって……」グ

「……」キ

「な、なんで逃げるんですか!？」



「藤原先輩、何か企んでるでしょ？」

「そ、そんな訳ないじゃないですかー！ 可愛い後輩と親睦を深めようとしただけですよ!!」

「親睦ですか……」

「そうですよ！ 大体石上くんもそんな目で先輩を見るもんじゃないですよ！」

「そんな目？」

「正に！ 今！ 人を見下す様な目で見てるじゃないですか！ そんなんじゃ学校生活上手くいけませんよ!!」

「それなら大丈夫ですよ。だって、藤原先輩にしかしてませんから。」<sup>（11）</sup>

「なお悪いじゃないですか！ もー逃げないで下さい！」<sup>（12）</sup>

「うわっ!!」<sup>（13）</sup>

「ぐへっ……うう痛い……あっ……あーあ、石上くんに傷物にされちゃいましたー。」<sup>（14）</sup>

「もし先程怪我をされたという事でしたら、医師の診断書と領収書を1年B組まで持って来て下さい。その場で改めて謝罪と治療費をお支払いさせて……」

「だからその目ええええ！」カチャッ

「藤原、さっきから何を騒いでるんだ？」

「声が外まで漏れてますよ、藤原さん。」

「あつ、2人共聞いて下さいよ！石上くんが酷いんです！態度最悪なんです！非常識なんです!!」

「……そうか？少なくとも、石上の俺に対する態度はかなりまともだと思うが。」

「そうですね、私にも常識的な振る舞いをしている様に見えますけど……」

「じゃあ、なんですかっ!?! 私が非常識だから私にだけ石上くんの態度が悪いとも言うんですかっ!?!」

「多分だけどそうだぞ。」

「多分だけどそうよ。」

「ええええっ!?!」ザッ——ン

「……藤原先輩、プリン食べます？」

「プリン!?! わーい頂きます!」

（餌付けしとる……）

（藤原さん、完全に性格把握されてるじゃない。）

「おいしーっ！」

（（チョロい……））

本日の勝敗、藤原の勝利

年下にアホを見る目で見られ、生徒会メンバーからの信用度順位が3番目だが、最後に美味しい思いが出来た為。

## 伊井野ミコは取り締まれない

感想ありがとうございます（・v・）

その日……石上優がいつもの様に、先輩でありゲーム友達でもある龍珠桃の呼び出しに応じた時の話である。今回呼び出された場所は、普段から通っている生徒会室の真下だった。吹き抜けになっている為、柱の影に隠れてもすぐに見つかってしまうが、そもそも生徒会室のある土地は校則の治外法権であり、風紀委員の権利を行使する事が不可能なエリアである。石上は特に気にする事なくゲーム機を取り出した。

「……優は左から攻撃しろ、私は右から回る。」

「了解っす、桃先輩。」

いつもの様に桃先輩と協力プレイをする……桃先輩はコンクリートの上に直接寝そべるのが嫌らしく、柱に背を預け座り込む僕の左半身に凭れてゲームに勤しんで

いる。

「風紀委員です。学園内でゲームは禁止されています、即刻やめて下さい。」

聞き慣れた声に瞬間、しまったと思った。声の主からは桃先輩と柱の影に隠れた僕は見えない様だが、時間の問題だろう。僕はゲーム機を仕舞うと見慣れた顔の風紀委員に話し掛けた。

「よっ、伊井野。」

「えっ、石上？」

「……知り合いか？」

未だ僕の体に凭れたままの桃先輩が、首だけ向けて聞いてくる。

「同じクラスの友達です。」

「ふーん、クソ真面目の面倒臭そうな奴だな。」

「まあ、真面目な奴ですよ。」

「い、石上が不良になっちゃった……」

「不良ってなんだよ……」

「だ、だって……成績も良くて、風紀委員の仕事も手伝ってくれるあの石上が……」

校則を破ってゲームしてるなんて！」

前回と比較して、色々真面目になったと言っても本来の僕は重度のゲーマーでオタクな人間だ。中等部では校則を破ってまでゲームをする余裕は無かったし、荻野の件が終わってから色々あってゲームをする機会は前回程多くはなかった。唯一、桃先輩に休日や高等部に呼び出しを受けた時は時間を忘れて楽しんでいたかな……ってくらいだ。そういえば、逆行してから伊井野の前で校則違反をした事は殆どなかったな……

「校則、校則ね……はっ、馬鹿らしい。」

苛立ちを含んだ声で桃先輩が立ち上がる。

「な、何が馬鹿らしいんですか！ 規則は守るべきです！」

「ふんっ、だったらお前が守る側だな。生徒会室のあるこの土地は学園ではなく、OBの有志が作った〈鳳凰会〉が所有している。つまり、完全に校則の治外法権地帯って訳だ……ほら、わかったらさっさとどっか行け。」

シッシツと犬を追い払うように、桃先輩は片手を振る……桃先輩は風紀委員が嫌いなのかな？ そういえば、初めて会った時も風紀委員か確認された様な気がす

る……

「ちゃ……」

（優とのゲームの時間を邪魔しやがって……）

風紀委員とかは特に関係なかった。

「そ、それなら、そこから出たら没収しますよ！」

「態々私達が此処から動くのを待ってか？ 風紀委員っていうのは、随分と暇なんだな？」

「ぐっ、くう……」

「桃先輩、あんまり言い過ぎるのは……」

「ふんっ……あんな奴は放っておいて続きやろうぜ、優。」

「っ!？」

（桃先輩!? 優!? 名前で呼び合ってる!?)

名前呼び！ 同性ならばともかく、異性に対しての名前呼びは些かハードルが高いモノである。子供の頃から一緒である場合や偶然名字が一緒で仕方なく名前で呼び合うなど理由は多岐に渡るが、こと思春期の男女に於いての名前呼びは、ある一

定以上の信頼関係を意味する！

「……優、もうちょっと寄れ。」グイグイ

「ちよっ、押さないで下さいよ。」

「……っ!？」

（ああああ!? あんなに密着してっ……!）

目の前で繰り広げられる光景に伊井野は冷静さを失った。もし仮に恋のABCならぬ、友（異性）のABCというモノがあったならば、先程の名前呼びはBに該当する案件であろう。しかし！今、伊井野ミコの眼前で繰り広げられているのは、身体的接触！言うまでもなく名前呼びよりも格上の行為、Cに該当するモノである。真面目に規則正しく、清廉潔白に生きて来た伊井野ミコからすれば、目の前でいきなり見せられるには些か衝撃が強い行為である。

「……ッ」

（い、石上、そんな……）

「あ、あの桃先輩、あんまり引っ付き過ぎるのは……」

「なーに、一丁前に照れてんだよっ。」



「……うわぁーん、こばちゃーん!!」*ダダダダ*」

「あー、こうなりそうな気がしたんですよ……」

「ふんっ、くだらない言い掛かりをつけて来るからだ……ほら、続きやんぞ。」

「……了解っす。」

「あ、居たミコちゃん。何処行ってたの?」

「こばちゃん、石上が不良になっちゃったあ!」

「ええ……」

……

「……なるほど、でも向こうの言い分が通りそうな話だと思うよ?」

「うっ……それはそうなんだけど、真面目だった石上が校則破ってるって思ったら訳わかんなくなっちゃって。もしかして、目の前にいる石上は偽物なんじゃとか考えちゃって……」

「偽物って……まあミコちゃんは一倍真面目だからね。でも石上も別に不良になっただとかじゃないでしょ。成績だって良いし、生徒会で頑張ってる話は良く聞きましょう？」

「うん、そうなんだけどね……」

「おーす、何話してんの？」

「あ、麗ちゃん。」

「小野寺さん、えーと……」

「麗ちゃんは今の石上と中等部の頃の石上、どっちが偽物だと思う？」

「え、どっちか偽物なの……」

「もー！ ミコちゃんステイ！」

……

「ふーん、そういう事……別に校則違反じゃないならいいんじゃない？ 締め付け過ぎても反発が大きくなるだけだよ。」

「うう、でもお……」

「……伊井野はさ、校則どうこうで怒ってる訳じゃないでしょ？」

「えっ、ええっ!？」

「まあ、石上がダブルデートするの見た後だから、女子と一緒にいるトコを見て怒るのもわからないでもないけどね……」

「そ、そんなじゃっ……」

「でも、そもその話さ……校則については、伊井野も人の事言えないでしょ？」  
「え、どういう意味？」

「……言いたくなかったんだけどさ、見ちゃったんだよね。伊井野って昼ご飯食べ  
た後、偶に本読んでるじゃん？」

「う、うん。」

「……」

（ミコちゃんが読む本……あっ、コレは。）

「……カバー掛けてるから表紙は見えなかったんだけどさ、開いたページに、そ  
の……半裸の男の挿絵があって……ね。」

「……っ!?!?! 　　そ、それは違うのっ!！」

「いや、大丈夫……私、そういうのに理解あるほうだからさ。まあ流石に学校であ

あいう本を読むのはやめといたほうがいいと思うけど……」

「待って麗ちゃん！ 誤解なのっ!!」

「いや、大丈夫だから。そういう趣味を持っても、私は伊井野から離れたりしないから……」

「今そういうセリフ言わないでっ！」

「まあ、だからね……どの口で校則とか言ってるって、ちょっとだけ思っちゃって……」

「くはっ……」  
ハッ

伊井野ミコ撃沈。

「あちゃー、言い過ぎちゃったかな？」

「まあ、ミコちゃんは頭が硬過ぎる所があるから、コレくらい丁度良いと思うよ？」  
「大仏さんスパルタだね……」

「そんな事ないよ、まあミコちゃんの趣味は言いふらさないで欲しいけど。」

「それは大丈夫。こうやって伊井野をイジる時しか言わないよ。」

「……それならいいかな。」

(……私も学校で本読むのやめよ。)

## 勘違いは止まらない

感想ありがとうございます（・∀・）

とある昼休み、多忙な生徒会役員は生徒会室で食事を摂りつつ仕事をしている事がある。今日は生徒会長と会計の2人が生徒会室に控えていた。

「石上、そういえばなんだが……先日のダブルデートの件で、柏木とは結局どうなったんだ？」  
「ムッ」

「どうなったか……そうですね、まあ何かあれば僕が責任を取る事で落ち着きましたよ。」

「ごふうっ!? げほげほっ!!?」

（せ、責任っ!? どう言う意味だ!?)

「会長、大丈夫ですか？」

「あ、ああ気にするな……少し咽せただけだ。」

（まさか、柏木を苦手にしていたのは責任の有無の話があったから？ えっ？ じゃあ石上と柏木は過去にそういう関係が？ イヤイヤ、流石に考え過ぎだろう……）  
考え過ぎである。

「まあ、元を辿れば僕が蒔いた種が原因なんで仕方ないんですけどね……」

「……そうなのか。」

（石上が蒔いた種だったーっ!! 大丈夫かっ!! 蒔いた種ってメチャクチャ意味深に聞こえるぞ!? もしかしてそういう意味かっ!?）

そういう意味ではない。

「だけど……いざとなった時の覚悟は疾うに出来ていますから。」

「うむ。」

（石上覚悟決めてたあああ!! マジで大丈夫かっ!! 高1で子持ちとか中々ハードな人生になるぞ!? 仮に4月頃にそういう関係があったとしたら……）

白銀は無意味な計算を始めた。

「失礼します。」コンコン、カチャ

「あれ？ 翼先輩……どうしたんですか？」

「田沼か、珍しいな。」

「実は、2人に相談がありました……」

「相談？」

「実は、恋愛百戦錬磨と呼び声名高い会長と友達の上石君に相談があつて……」

「い、いいだろう……生徒の悩みを解決するのも生徒会の務めだからな。」

「恋愛百戦錬磨って何だよ……それ俺じゃないからっ！ 上石の方だから！」

「僕で良かったら……」

（会長、いつの間にそんな呼び名で呼ばれる様になつたんだろ……）

「それで、相談内容とは？」

「はい、実は先週からその……こ、恋人が出来たんです。マキちゃんって言ひんですけど……」

「ほう四条か、それはめでたいな。」

「僕からも改めて言わせて下さい、おめでとうございます。」

「2人共、ありがとう。それでお互い恋人同士になつたので、距離も以前よりは近くはなつたと思つたんですけど……最近、本当に好かれてるか自信が持てなく



なってきた……」

「ええ……」

「何かあったのか？」

「はい、ついこの前の事なんですけど……」

……

数日前……

その日の僕はある覚悟をしていました。それは、帰り道で手を繋いで帰るという覚悟です。水族館で手を繋いで以来、中々そういう機会に恵まれなかったので、今日こそは手を繋いで帰ろうと臨みました。

「……っ！」 ギュッ

「っ、翼君!？」 ゴォッ

勇気を出して良かった、そう思いました。でも……

「ごめんっ、翼君……」 ェッ

……

「手を離されたんです!!」

「なるほど。」

「……」

「しかも、それから手を握ろうとしても避けられるし……実は好かれていないんじゃないかと、不安に思えてきて……」

「握る力が強くて痛かったとかは？」

「そこまで強く握ってませんでしたよ。」

「……それ、握ってからどれくらいの時間が経ちました？」

「えーと、5分くらいかな？」

「なるほど……多分ですけど、マキ先輩は手汗を気にしたんじゃないですか？」

「手汗？」

「ぼ、僕の手汗が原因って事っ!？」

「いいえ、逆です……マキ先輩が気にしたのは、自分の手汗なんです。」

「自分の……」

「手汗……?」

「先程翼先輩も気にしてましたけど、女子は男子以上にそういった事に敏感なんで

す。汚いとか気持ち悪いって思われたらどうしようと不安になったり、単純に恥ずかしかったり……それが最近出来たばかりの恋人なら尚更です。」

「……なるほどな。」

「じ、じゃあ僕はどうすれば……マキちゃんに気にしないから大丈夫とか言えбайいの？」

「直接言うのはダメです、マキ先輩に余計なダメージが行きます。」

「そんな……」

「ならばどうする？」

「そんなの、向こうが手を離そうとしても離さなきゃ良いじゃないですか！そういう時は行動で示すんですよ。」

「「な、なるほど！」」

「じ、じゃあコレも何か理由がっ!？」

……

昨日、マキちゃんに昼御飯と一緒に食べようと誘ったんです。でも……

「マキちゃん、一緒にご飯食べない？」

「き、今日はちょっと……ごめん！」

……

「逃げられたんです！　なんでっ!？」

「友人と食べる約束があったとかじゃないのか？」

「確かにマキちゃんは週一で友達とお昼食べてますけど、昨日はその日じゃなかったんです。」

「む、違うか……」

「翼先輩、昼食に誘った時……その場にはマキ先輩だけでしたか？」

「ん……いや、授業終わってすぐだったからクラスの子も大勢居たよ。」

「だったら簡単ですね。そんな大勢の前で誘わないでよ、恥ずかしいでしょって事です。」

「「そうなのっ!？」」

「この場合は予め了承を得ておき、人目を避け、人の居ない場所で落ち合うのがセオリーです。」

「そんな裏取引みたいな待ち合わせすんの!？」

「じ、じゃあコレはっ!？」

……

その日の放課後……

そういう事があって、不安になった僕はマキちゃんに聞いたんです……

「マキちゃん……僕の事好き？」

「ふ、ふんっ……」<sup>ふん</sup>

……

「顔背けて答えてくれなかったんです！これはどういうっ……」

「恥ずかしいからに決まってるでしょ！マキ先輩はねえ！ツンデレなんですよ！言いたい事と逆の事言っちゃう病気なんです！それ絶対帰った後、泣きながら後悔してる奴ですよ！」

「そ、そんな、じゃあ僕はこれからマキちゃんにどう接すれば……」

「……今まで通りで良いと思いますよ。多分昔からでしょ、マキ先輩のそういう所は。それでも変わらず側に居た優しい翼先輩だから……マキ先輩も好きになったんだと思いますよ？只……言葉の裏を読む努力はした方が良いですね。」

「そっか……うん、僕……自信が持てたよ。男らしく行動で示せる様に、マキちゃん  
の言葉の裏を読むように頑張ってみるよ！」

「その意気です。」

「石上君、会長、ありがとうございます！」ハッパッ

「……昼休みも終わるな、俺達も戻るか。」

「そうですね。では……」

「ああ、また放課後に。」ガチャ、ハッパ

（俺……1つもアドバース出来なかったな。）

## 四宮かぐやは絆される

感想ありがとうございます――φ（――）

---

5月の過ごし易い季節も終わり、暦は6月のジメジメとした時期へと移行し始めていた。

## 〈生徒会室〉

「こんちゃーっす。」カヂヤ

「やったー！会長にも勝ったー！」クルクル

「……藤原先輩、何やってるんですか？」

「ああ、石上か……いやな、来週に控えたフランス校の歓迎会の買い出しを決めるゲームをさっきまでやっててな……」

「藤原さんにしてやられたんですよ。」

（会長と買い出しデート！）

「へえ、先輩2人がですか……どんなゲームだったんですか？」

「ふふんっ、NGワードゲームですよ。石上くん、どうですか？ 会長とかぐやさんに勝利した藤原先輩ですよ！ 今までの無礼を謝るなら尊敬しても構いませんよ？」

「無礼？ 何かしましたっけ？」

「自覚無しっ!? 石上くんはそういう所がダメなんですよ!!」

「……」

（お前が言うな。）

「……」

（貴女は人の事言えないでしょう。）

「それはそうと、歓迎会の買い出しですか……あっ、それなら……」

（……はっ！ もし此処で代わりに僕が行きますよ、なんて言われたら会長との買い出しデートが!?!）

「コレ、僕がよく行く喫茶店のコーヒー無料券なんですけど、もし良かったらどうぞ。」

「石上、いいのか？」



「はい、2枚差し上げますから買い出しの日にも四宮先輩と一緒にどうぞ。」

「ふむ……四宮、後輩の折角の厚意だ……有り難く受け取ろう。」

（ナイスだ石上！可愛い後輩からの厚意、幾ら四宮であろうと無碍には出来まい！）

「そうですね。石上くん、有り難く頂くわ。」

（やだこの子、すっごく良い子じゃないっ！私は最初から石上君の事を信じてましたよ！）

かぐやは面の皮が厚かった。

「いいなあ、2人共……石上くん！私にも何かないんですかっ!？」

「藤原、後輩に集るなよ……」

「藤原さん、みっともないわよ。」

「藤原先輩には、このゼリーをあげます。」

「わーい！頂きまあす！」

「……」

（藤原、もう完全にコントロールされてるな……）

「はあ……」

（全く……淑女たる者、食べ物に釣られるなんて。まあ石上君が藤原さんを制してくれるなら余計な負担が減る分、会長に割ける時間も増えるでしょうから問題ないわね。）

藤原、親友から余計な負担扱いされる。

「……会長達がい出ししてくれるなら、前日の設営指示は僕がやりますよ。」

「その日は日曜だが、いいのか？」

「はい、それくらいはさせて下さい。本番の歓迎会ではフランス語が喋れない僕は役に立てるかわかりませんし……」

「そうか、じゃあ石上頼んでいいか？」

「はい、任せて下さい。」

「……藤原さん、貴女フランス語出来ましたよね？ 当日は石上君の近くに居てあげたら如何ですか？」

「えー、石上くんが藤原先輩お願いしますって言って来たら考えてあげても構いませんよ？」 いはい

先輩にあるまじき発言である。

「うーわっ……」

（藤原、普通に性格悪い事言ってるぞ。）

「藤原さん、貴女ね……」

（これは……流石に石上君の分が悪いわね。）

「……藤原先輩、性格と能力が反比例してますけど大丈夫ですか？ そのうち僕達以外にも化けの皮剥がれた所見られちゃいますよ？」

「反比例!? 化けの皮!? 石上くん、困った時くらい私に頭を下げて頼って来てもいいんですよ!」

上から目線で言うあたり、クズな発言である。

「一応対応策は考えてるので、大丈夫ですよ。」

「へー? ふーん!! 当日の歓迎会が楽しみですねえ、石上くん!」  
人格を疑う態度である。

「藤原……」

（いや、助けてやれよ。お前普段からプリンやらゼリーやら貰ってるだろ……）

「藤原さん……」

（売り言葉に買い言葉とはいえ対応策ね。少し興味もありますし、このままにしておきますか。）

……

〈歓迎会当日〉

「……なんとか間に合いましたね。」

「疲れましたあー。」

「ああ、校長には俺からキツク言っておく……それより石上、なんだそれは？」

「翻訳機です。フランス語以外の言語は外して、その分翻訳速度を向上するよう改造したんです。」

「へえ、石上君はそういうのが得意なのね……少し試しても構いませんか？」

「大丈夫ですよ。」

「では、ーーーーー。」

《はじめまして、私は秀知院学園生徒会副会長四宮かぐやです。今日は楽しんで下さいね。》

「おー、凄いな石上。」

（普通に欲しい……）

「中々高性能の様ですね、訳すのにも余り時間差はありませんでしたし。」

「……」↑泣いて頼って来ると思ってた。

「喋る方は付け焼き刃ですけどね。」

「準備して来るだけ大したモノだ。そろそろ時間だ、行こう。」

2 時間後……

「よいしょっと……ふー、何事もなく終わって良かったですねー。」

「……そうですね。」

「あれ？ 石上くん、その翻訳機どうしたの？」

「煙出して壊れました。」

「なんで!？」

「まあ、その……ス○ウターが壊れるのと同じ理由ですよ。」

（フランス校の生徒と喋る四宮先輩の言葉を翻訳した瞬間に壊れた……とは言い難いな。）

「ス○ウター!? 誰かの戦闘力でも測ってたの!？」

「結果的にそうなっちゃいましたね……」

（四宮先輩、相当怒ってたけどなんて言ってたんだろ……）

フランス校歓迎会終了。

フランス校歓迎会はアニメでは5月となっていますが、原作では6月っぽい描写があったので其方を採用しました。

どちらでも原作の石上は既に生徒会に居たはずですが、歓迎会に参加した描写がなかったのは、会長が気を利かせて石上を裏方に回したからだと思います。

マスメディア部員は騒がしい

感想ありがとうございます(。ω。)

〈石上優は返したい〉

「……コレ、なんだっけ？」

地面に落ちている既視感のあるノートを見つめ、石上は暫し記憶を探る。

「うーん、なんか見た事あるんだよね……名前は書いてないか、仕方ない。」

石上はノートを手に取るとページを捲る。

「あー……ああー……」

(あーっ……ナマモノだコレ。)

ナマモノ！ マスメディア部所属、紀かれんが夜な夜な妄想をペンに乘せ書き上げたへ白銀会長☒かぐや様、真実の愛編である。他人に見られれば即死レベルの

妄想を詰めに詰め込んだそのノートを石上は……

「ちょっといいですか？」

「あら？ 生徒会の……石上会計ですわね？ ごめんなさい、今少々探し物をしておりまして……」

「コレですか？ 気をつけて下さいよ、僕みたいにナマモノに耐性ある人間は少数なんですから。」

「」

マジである！ 紀かれんとはこの瞬間が初対面であるにも関わらず、石上は持ち主へ最短ルートでノートを返還。かれんからしてみれば、往来でいきなり羞恥心と言う名の通り魔に襲われた様なモノである。様々な言葉が脳内を駆け巡るかれんだが、出て来た言葉は……

「わ、私は知りませんわ……」ガクガク

只の言い逃れだった。

「な、名前も書いてませんし……」ブルブル

「じゃあ、コレは生徒会が責任を持って……」



「私のです!!」

「……初めから認めて下さいよ。」

「な、なんでノートの持ち主が私だと思いこむ？」

（あ、しまった……そう言われたら変だよな、名前書いてないのに……）

「……それくらい見ればわかりますよ。」

「」

（見ればわかるっ!? 同級生の妄想をノートに書き綴る様な人間は私しかいないと!?）

概ねその通りである。

「あ、あの……もしかして中身……」

「そうですね、もう少しコマ割りと今風の絵柄にする様に気をつければ作品として見れる様になると思いますよ。」

（ガッツリ読まれてますわーっ!?）

「くうっ……あ、ありがとうございます、精進致しますわぁ……」*うん。うん。うん。*

「それじゃ僕はコレで……そういうの、僕は悪くないと思いますよ。」

「……ッ！」

「ん？ かれん、何やってるの？」

「……編集者と話してただけですわ。」

「……編集者？」

〈紀かれんは聞き出した〉

「紀さん、この前はありがとう。」

最近、眞妃さんとお付き合いを始めた彼氏さんに話し掛けられました。まだ付き合い出して日が浅く、眞妃さんとの関係に悩まれていた様なので、生徒会は恋愛相談も受け付けていると教えて差し上げたらすぐに相談に行ったそうですわ。元々眞妃さんも石上編集に以前から相談されていた様ですし、そこに恋愛百戦錬磨の会長も加われば早期解決は約束された様なモノでしょう……それに、私の狙いは別にあります。

「お氣になさらず……それよりも、相談に対してどういったアドバイスをされました？」

（コレで会長の恋愛観を聞く事が出来れば、創作意欲向上に繋がりますわ！）

「それなら、男なら行動で示せて言われたよ……石上君に。」

「……他には何か言われませんでした？」

「マキちゃんは素直じゃない所があるから、言葉の裏を読める様になって……コレも石上君に。」

「か、会長は何かおっしゃってませんでしたか？」

「んー……ごめん、忘れちゃった。」

「忘れたも何も、何一つアドバイスが出来ていなかったのだから記憶に残ってないくて当然である。」

「……」

（会長の有り難いアドバイスを忘れちゃった？ 眞妃さんの言葉の裏を読む前に、人の話をちゃんと聞く努力をした方がいいのでは？）

かれんは毒を吐いた。

「じゃあ僕、そろそろ行くね。」タタタ

（まあ今回は、眞妃さんに免じて許してあげましょう。）

〈巨瀬エリカは記事にしたい〉

「生徒会新メンバーの取材？ 私とかれんで？」

「ええ、部長からの依頼ですわ。石上編し…石上会計は、1年で生徒会にスカウトされた有望株。白銀会長も1年の時に前生徒会長にスカウトされたという経歴があり、共通点もあります。それに…秀知院の敷地内で、度々あの龍珠さんと談笑されているという目撃情報もありますわ。」

「あー、なんか剣道部の部長と一悶着あったって話は聞いた事あるわ。」

「ええ、石上会計と剣道部の諍いに颯爽と現れた会長がすぐ様解決。そのまま石上会計をスカウトし生徒会へ招き入れたと。困っている人の所に風の様に颯爽と現れる…きつと会長の前世は聖騎士なのですわ！」

「説明に一々妄想挟むの何とかならない？」

「他にも風紀委員の業務に助っ人として参加したり、眞妃さんの恋愛相談に乗ったりと色んな所で活躍されているらしいですわ。」

「マキの恋愛相談？ 何それ？」

「……」

（んもーっ！ この恋愛音痴は!!）

「マキ誰か好きな人いるの？」

「その話は後で！ さ、取材に行きますわよ！」

「えー、気になる……」

……

〈マスメディア部〉

「石上会計……態々お越し頂いてありがとうございますわ。」

「それは大丈夫ですけど……」

「それでは、先ずは……」

「はいはいはい！ 生徒会室でかぐや様はどのように過ごされてるの!？」

「は？」

「……ホホホ、この子の事は気にしないで大丈夫ですわ。それで……会長とかぐや様の生徒会室での過ごし方でしたわね？」

「帰っていいですか？」  
「ん」

「ストープ！」

「お待ちになって！」

「お願いわかって！ 普段のかぐや様を知れる機会なんて滅多にないの！ 私達を助けると思って！」

「ヤベェ人の取材を受けてしまった事はわかりました。」

「だって、藤原さんに聞いても何もわからないままだし……」

「藤原先輩に頼るとか正気ですか？」

「私達も後悔したわ……」

「……」

（藤原さんは、石上会計からもそういう評価なんですのね……）

「まあ、僕で答えられる事ならいいですよ。」

「じ、じゃあ、普段のかぐや様は……」

1 時間後……

「2 人共、取材は終わった？」

「勿論です！」

「ちよつと見せてね……うん、ボツ。」

「えー!? なんでっ!?」

「ちゃんと取材しましてよ!？」

「石上君の事、殆ど聞けてないじゃない。貴女達に任せた私が間違ってたわ……」

「そ、それでは記事にするのは……」

「ダメに決まってるでしょ! 罰として、暫くは資料整理しかやらせないからね!」

「「そ、そんな〜。」」

〈龍の機嫌は損なえない〉

「ちょっとかれん、何処行くのよ？」

「取材に決まっていますわ。」

「取材ー？ 私達、部長から今そういうの禁止されてるじゃない……」

「だからこそ！ スクープを手土産に許してもらうのです！」

「それはいいけど、誰を取材するの？」

「龍珠さんです。最近、石上会計と一緒に所を良く目撃されていますし、雰囲気が柔らかくなったという話も聞きましたし……ラブの匂いがありますわ！」

「あの龍珠さんからラブの匂いい？ それホント？」

「恋愛音痴は黙ってついて来て下さい！」

「恋愛音痴っ!？」  
「チャビ—ッ」

……

「は？ 取材？ 嫌に決まってるだろ。」

「そ、そこをなんとか……」

「お断りだ、んなダリい事。」

「少しだけでも……」



「ちょっとかれん！ ヤクザの娘だよ？ あんまりしつこくすると埋められちゃうよ！」ギョギョ

「だって、今までずっと1人でいた龍珠さんが年下とはいえ、石上会計と一緒に居る様になったんですのよ？ 間違ひなくチョロくなっている筈ですし……個人的にラブの匂いがしますわ！」ギョギョ

「おい、全部聞こえてんだよ。埋めるとかチョロいとかモロクソ失礼だが。大体親がヤクザだろうが私がそんな事する訳ねえだろ……沈めんど。」

「沈めるのっ!?!」

「もし、くだらねえ記事書きやがったら……」

「し、失礼しましたわーっ！」ギョギョ

「ちよっ!?! かれん待って!?!」ギョギョ

「ったく……」

ラブの匂いがしますわ！

「ギョ……」



偶には雨に感謝したい

感想ありがとうございます(。ω。)

6月も終わりに近付いて来たが……降り続ける雨は変わる事無く、ジメジメとした鬱陶しい空気を作り続けていた。しかし、学生という立場においてはその鬱陶しさが消え去るイベントが存在する……それが、相合傘イベントである。

〈昇降口〉

私はザーザーと音を立てて地面に降り注ぐ雨を……只々眺めていた。失敗した……今日は天気予報を見忘れて家を出てしまった。同じ風紀委員である友人の傘に入ってもらいたいけれど、今日に限って用事があるそうで、授業が終わると直ぐに帰ってしまった……職員室に置いてある貸し出し用の傘は、風紀委員の仕事が終わった頃には既に無くなっていた。最悪、タクシーを呼ぶしかないのかなと思いはじめた頃……

「ん？ 大仏、今帰りか？」

「あ、石上。うん、そうなの。でも傘ないからどうしようか考えてた所。」

「傘ないのか……じゃあ入ってくか？」

「……いいの？」

「ああ、濡れないように気をつけろよ。」

「……うん、ありがとう。」

（もう、そうするのが当たり前みたいな顔して……今が薄暗くて良かった。）

私は石上から顔を隠す様に俯いて隣を歩く。

「……っ！」  
「ん、ん」

「ん、どうした大仏？」

「ぬ、濡れたら困るからっ……」

「ああ、そういう事。」

「い、石上は最近どう？ 生徒会とか……」

「そーだなあ……大変だけど、楽しいよ。」

「そっか、それなら良かったかな……あつ、マスメディア部の記事読んだよ。秀知

院が誇る生徒会の新メンバーに迫るって奴。」

「ああ、アレか……」

（ナマモノ先輩達の取材受けたのに、後でまた別の人から取材受けたんだよね……  
なんかダメだったのかな？）

ダメだったのはかれん達の取材内容である。

「あーいうの初めてで……変に緊張したよ。」

緊張したのは言うまでもなく、かれん達の取材ではなく別働隊の取材の事である。

「ふふ、でも書いてる事は立派だったよ。」

「えっ、何て書いてあったんだ？」

「取材受けたの自分でしょ？ 何で聞くのよ。」

「いや、あんまり何言ったか覚えてなくて……」

「ふうん……別に変な事は書いてなかったよ？ 白銀会長や四宮副会長の負担を少しでも減らしてフォローしたい……みたいな。」

「それなら安心したよ。」

「ふふ、何それ。」

（今日くらいは雨に感謝しなきゃね。）

1つの傘を分け合う男女を祝福する様に、降り注ぐ雨音は静寂を奏でていた。

……

一方その頃、例の2人は……

「見たんじゃないですか？ 天気予報……」

「……っ！」*ダラダラ*

なんとも対称的な絵面だった。

〈四宮かぐやを見舞いたい〉

7月某日……

「……四宮先輩が風邪？」

「ああ、昨日の大雨で体調を崩した様だ。四宮の家にプリントを届けなければいけないんだが……」

「私！ 私が行きます!!」

「……藤原書記が？」

「風邪引いた時のかぐやさんて……すっごく！ 甘えん坊でメチャクチャ可愛いんですよ！ だから私が行きたいです！」

「……!!」

（甘えん坊!? メチャクチャ可愛い!?）

「それだけはやめてあげて下さい、藤原先輩が見舞うとか絶対悪化するじゃないですか。」

「しませんよ!! 石上くんは私をなんだと思ってるんですかっ!!」

「確かにそうだな、四宮の家には俺が行こう。」

「会長までっ!!……だったら、公平にゲームで決めましょう!」  
「サッパリ」

「……ゲームだと？」

「はい、神経衰弱で決めましょう。異論はありませんね？」

「……僕はいいですよ。」

「ジョーカーはなし、イカサマは露見した時点でー5ポイントですからね！」

「うむ……」

「……」

「順番はじゃんけんで決めます。」キョ

「うむ……」

「……」

「では会長からスタートで……」

「……始める前に、僕から1ついいですか？」

「なんですか、石上くん？」

「イカサマしたら罰ゲーム有りにしませんか？」

「……いいでしょう！ 但し、常識外れなのはダメですからねっ！」

「ああ、わかった。」

「それでいいですよ。」

「じゃあ……スタートです！」

「ドーンだ藤原書記ィ!!」

「な、な、な、なんの話ですか会長っ!？」



「いや、しらばっくれるなよ。これイカサマトランプだろうがっ!! 石上も気づいてたんだろ?」

「ええ、だからこそその罰ゲーム有りルールにしましたし……」

「ふ、2人共! 私を嵌めましたね!? ずっこい! ずっこいです!!」*グニグニ*

「いや、先にズルしようとしたの藤原だろ……」

「人としての品性を疑います。もう少し秀知院の生徒という自覚を持った方が良くんじゃないですか? そんなんだから、藤原先輩はいつまで経っても藤原先輩なんですよ。」

「こんなんじゃないけども、ウチは先祖代々藤原ですよ!!」

「まあ何はともあれ、罰ゲームです。このプラカードを首から提げて校内一周して下さい。」

「私は由緒ある生徒会メンバーでありながら、イカサマに手を染めた卑しい人間です」

「」

「おおう……」

（石上、容赦ないな……）

「僕はこれから藤原先輩が罰ゲームを完遂するか見届けるので、プリントは会長が持って行ってあげて下さい。」

「お、おう……」

「……四宮先輩、大雨の中誰かを待ってたみたいですよ？ 傘を差して立ち尽くしてる所を偶々見ましたけど……」

「っ！　そうか、石上……あとは任せた。」

「はい、四宮先輩にお大事にと伝えて下さい。」

「ああ、必ず伝えよう。」ヤッ

「……じゃあ行きましょうか、藤原先輩。」

「ハイ……」

……

〈校舎内〉

「うえええっ……どぼちでえええ……！」

「走っちゃダメですからね。残ってる生徒にその卑しい姿を見てもらわないと。」

この事が原因で、藤原は校舎内に残っていた一部の生徒の間でイカサマをする卑しい人間という噂が広まったとか広まらなかったとか……

## 四宮かぐやは相談したい

## 〈生徒会室〉

「相談？ おば様が私に？」

「……相談とは少し違うかもしれません。私の話を聞いてどう思うか……エビデンスを集めただけです。所で眞妃さん……髪型、中等部の頃に戻したんですね。」

「まあね……か、彼氏が髪下ろした方が良いつて言うから……！！」

「良かったですね、好きな人と結ばれて。」

「いきなり何よ、気味が悪いわね。」

「これでも祝福しているんですよ？ 私達の様な立場の女性は、望まぬ婚姻を結ばれる事も珍しくないですから……」

「……まあそうですね、ウチはそこまで下劣な事はしないでしょうけど。」

「だから、好きな人とちゃんと付き合えた眞妃さんを祝う事はそままでおかしくはありません。」

「そうですね……そういう事なら、有り難く受け取っておくわ。」

「それで、話の内容なのですが……あと1人、誰か眞妃さんの御友人を呼んで頂けますか？」

「なんでよ？ 私だけじゃダメなの？」

「出来るだけ、普通の感性を持った女性が望ましいので……」

「さらっと私を普通じゃないって言った？ 大体、普通の感性持った人とか自分で用意しなさいよ。」

「私にそんな知り合いが居るとしても？ 藤原さんは論外ですし、早坂も四宮家と関わりが深い分普通とは掛け離れています。」

「うーん、普通の友人ねえ……」

……

〈ケース1〉

「は、はああーっ！！？ こ、此処が白銀会長とかぐや様の愛の巣!! 此処で日夜お互いに愛を囁かれていますのねっ!? こ、此処こそが人類が探し求めている……エデーーン!!」ハッ

「かれーんっ!？」

〈ケース2〉

「あっああああ……か、か、かか、かぐや様の相談に乗れるなんて……わ、我が人生に一片の悔いなし……！」  
 ンヤンヤ

「エリカーっ!？」

……

「……もしもし、渚？ ちょっと相談事があつて……生徒会室まで来てくれない？」  
 四条眞妃、消去法により柏木を選択。

……

「……失礼しまーす。眞妃に呼ばれて来たんですけど……」

「渚、急に呼び出して悪かったわね。」

「それは大丈夫だけど、どうしたの？……相談事って言ってたけど？」

「……私じゃないわよ。おば様が聞いて欲しい事があるんですって。」

「え、かぐや様が？」

「ええ、一般的な意見も必要と思ひまして……」

「私で力になれるのなら……」

「では、コレは友人の体験した話なのですが……」

〈中庭〉

「僕に恋愛相談ですか？」

「まあ、恋愛相談っていうか……俺の話を聞いてどう思うか言って欲しいというか……」

「まあ、それくらいなら別に良いですよ。役に立てるかはわかりませんが……」

「いや、それは大丈夫だ。寧ろ石上以上の適任はいない。」

（経験者の貴重な意見……一瞬たりとも聞き逃さん。）

「わかりました、どうぞ話して下さい。」

「ああ、コレは友人の話なんだが……」

「……」

（会長の話だな、時期的に相手はやっぱり四宮先輩なのかな……）

「だ、男子がっ……………！」

「ベッドの中に潜り込んでたっ!？」

「は、はい……………」

「はわぁ……………」アッザアッザ

「そ、そんな事……………いけません！ 破廉恥です！ 女の子が風邪で弱ってる時にそんな……………」

「……………！ ヲッ！」ウウウ

「そ、そうですね？ でも、その女の子は意識が朦朧として……………自分からって可能性も……………」ぞぞぞ

「だとしても！ 女の子が弱ってる時は男子がモラルを持って行動するべきです！」

「……………！ ヲッ！」ウウウ

「そ、そうよねっ!？ わたっ……………その女の子じゃなくて男子にモラルが無いのがダメ



なのよねっ!？」

「なるほど……ヤッちゃいましたか。」

「やらかしはしたけど、ヤッてはいねえよ!」

「冗談です。しかし会長、好きな人と同じベッドに入って普通に寝るって……何やってんですか。」

「はあああっ!？ 俺じゃねえしっ!？ 友達の話だしっ!？」

「あーそうでしたね……でも、とりあえずお互い謝ったんですよね?」

「ああ、だが……」

「恨みがましい目で見られると?」

「勿論、その男子に悪い部分があるのはわかる。だが、理性を総動員して耐え切った人間にする仕打ちにしては、些か厳し過ぎると思ってな……」

「だから……少し位恨めしい目で見ても、仕方無いじゃないですか……！」  
「かぐや様の言う通りです！　そもそも日本男子なら責任取るくらいの事はするべきです！」

「……ッ！ッ！」 *（うんざり）*

「そ、そうよねっ!? 男子なら、ちゃんと責任は取るべきよねっ!?」

「女子ってなんかあったらすぐ責任取る取らないの話に持っていくじゃないですか……」

「あ、ああ……」

（石上が言うとお滅茶苦茶重く聞こえるんだが……）

「お互い謝ってハイオシマイ、っていうのが不満なのかもしれませんね。」

「なるほど、何事も無かった様に接したのが不味かったという事か……」

「うーん、女子は妙な所に怒ったりしますからねえ……もしかしたら、ベッドに入っただけで別の所に怒ってる可能性もありますし。」

「その可能性もあるのか……」

「でも……別に良いんです、最初からこんな事で責任取って欲しいなんて思ってますし。」

「……じゃあ、かぐや様は何に怒ってるんですか？ 相手はかぐや様に何もしてなくて、責任を取って欲しい訳でもないなら……」

「……！」

「何に……い、言えません。」

「ええっ!？」

「ふふ、なるほどね。おば様の考えがわかったわ。」

「え？ 眞妃わかったの？」

「ええ、自分に置き換って……えて考えた訳じゃないけど！ 多分おぼ様は、何もさ  
れなかったのが不満なんでしょ？」

「……………」

「か、かぐやさん………」

「例えば、何もされなかった事が不満だったとか………」

「そ、そんな理由があるのかっ!？」

「あくまでも例えばの話です。会ちよ……その男子が本当に何もしていないのなら、謝る必要はありません。只、少しでも何かした事実があるのなら……言うべき  
かもしれませんね。」

「なるほど、必要なのは誠実さ……という訳か。」

「お役に立てましたか？」

「ああ、助かった……その男子にはちゃんと伝えておこう。」  
「……はい、お願いします。」

---

「……お返しです、これでチャラですよ。」マ。

「し、しのっ!？」

「私達、明日からはいつも通りですよね。」

「あ、ああ……」

「……」  
「……」

……

「はえーっ……!」ぐー

「か、かぐやさんっ……!」ぐー

「……」

（あー、やっぱり四宮先輩だったか。ベッドに潜り込むなんて会長も大胆……いや、

この場合大胆なのは四宮先輩か？  
（  
バッチリ見られていた。

## 生徒会は出掛けたい

一学期の総決算である生徒総会も無事終わり、秀知院は明日からいよいよ夏休みへと突入する。

### 〈生徒会室〉

「うおらぁ！ 生徒総会お疲れっ!!」

「明日から夏休みですよー!!」

「いえーい。」

「もう、石上くん！ もっとテンション上げて言って下さい！」

「藤原先輩のテンションはいつもフルスロットルですね……夏休みだからといって、余り羽目を外し過ぎない様にして下さいね。」

「石上くんが先生みたいな事言う!!」

「藤原書記は夏休み、したい事とかあるのか？」

（藤原、わかってるよな？）

「勿論です！ 旅行とか最高ですよー！」

「ああ、そうだな……日常から解放される時間ってのは必要だよな……」

（そうそう、その調子……）

「私も明日から1週間ハワイ行くんですよー！」

「」

（はーっ!? 前に生徒会で旅行行きたいだった張本人が何先陣切ってハワイ行くとしてんだよ!）

「そうですね、旅行……いいですね。」

（呼吸……楽しい……）

「……」

（普通に自分から誘えばいいのに、会長も四宮先輩も奥手なんだから……仕方無いな。）

「そういえば……会長、この前紹介した喫茶店はどうでした？」

「ああ、中々良かったぞ……珈琲も俺好みの味と風味だったしな。なあ四宮？」

「へ？ あつ、そうですね……私は普段あいつた場所には行かないので、とても新鮮でした。」



「それは良かった。もし気に入ったのでしたら、5枚ずつ差し上げますからコレをどうぞ。」

石上は財布から束ねた紙を取り出し、白銀とかぐやに差し出した。

「コレは……あの喫茶店の珈琲無料券か。」

「どうしてこんなに？」

「あの喫茶店、3回利用すると一枚貰えるんですよ。夏休みは会長も四宮先輩も少しは時間もあるでしょうし、一緒に行ってみたらどうですか？」

「それはありがたいが、こんなに貰うのは……」

「それ、まだ余ってるくらいなんですよ。だから気にしないで下さい。」

「石上……ありがとな、ありがたく頂くよ。」

（お前マジで欲しい時にパスくれる良い奴だな。流石経験者、どっかのハワイアンとは大違いだ。）

「石上君、ありがとうございます。」

（ホント良い子だわこの子っ！頭の中ホノルルってる藤原さんとは大違いね。）  
藤原の評価、また下がる。

「皆さんが夏休みはそれなりに忙しいのはわかってますけど、一度くらいは全員で何処かへ出掛けたいですよね。」

「石上？」

「僕は1年ですけど、会長達は2年……来年は受験勉強で遊ぶ所じゃないかもしれませんし。」

（事実会長は、前回と同じ様に進むなら来年は海外へ行くと言っていた……会長と四宮先輩の事も大事だけど、僕自身も会長達と思い出が作りたい。）

「石上君……」

「皆と一緒に遊べるのが今年だけかもしれないなら、一回くらいは……」

「そうだな……夏の終わりには大きな祭りがある。生徒会全員で集まって楽しもうじゃないか。」

「そうですね、可愛い後輩の頼みですし。」

「会長、四宮先輩……」

「石上くん！私ハッ!? 皆の中に私も入ってますよね!?!」

「あ、はい、もちろんですよ。」

「なんか、ついで感が凄いつ!!」

「やだなあ、藤原先輩……そんな事ある筈ないじゃないですか。」

「だからその目えええっ!!」

「やれやれ、夏祭りは8月20日だったな……全員予定を空けておいてくれ。」

「そうですね、わかりました。」

（夏祭り！花火！会長と花火!!）

「了解です。」

「あ……すいません。私その日は、トマト祭りでスペインでした……」

「……」

（この流れでそれ言うって凄いなコイツ。）

「……」

（藤原さん、少しは自己欲を優先する所を直した方がいいんじゃないかしら？）

「えっ、まさか私だけ除け者にしてみんなで夏祭りとか……そんな酷い事するんで

すか？」  
カレカレ

「うっ……」

（そういう言い方されると……）

「まあ……」

（除け者にするのは、流石の私も……）

「はあ……藤原先輩が来れないっていうなら仕方無いですね。」

「……っ！」

（石上!?!）

「……っ！」

（石上君!?!）

「夏祭りは僕達3人で楽しんで来るんで、藤原先輩は遠慮なくトマト塗れになつて来て下さい。」

「」

「……」

（バツサリ切り捨てて……いや、斬り捨てたな。）

「……」

（藤原さんにここまで言える男子なんて、石上君だけよね……）

「うううっ、行きますよ！ 夏祭り行きますよ！ 行けばいいんですよーっ!?」

「いえ、別に無理して来なくても……」

「ヤダヤダッ！ 仲間外れは嫌ですうっ！ 私も夏祭り行きますーっ!!」

「まあ、藤原先輩がそれで良いなら……」

「うううっ……鬼畜です、石上くんは鬼畜系男子です！ うえええっ……」  
ハッ

エグッ

「人聞きの悪い事を言わないで下さいよ。」

「まあまあ、2人共それくらいにしておけ。」

（結果的に上手くまとまったな。）

「そうですよ。藤原さん、夏祭り楽しみですわね？」

「ぐす……うん、楽しみ、わたあめ、タコ焼き、射的、いっぱいするの……」

「そ、そうですね……」

（精神年齢が退化してる……）

それぞれの夏休み編へ続く。

## 〈帰り道〉

「そういえば……さっき俺と四宮に5枚ずつ無料券くれたけど、そんなに喫茶店行ってるのか？」

「そうですね。殆どは、桃先輩と待ち合わせする時に使ってるだけですけどね。」

（殆どは喫茶店で待ち合わせして、そのままゲームしてるだけなんだけど……）

「そうなのか……」

（3回行ったら1枚貰える無料券、俺と四宮合わせて10枚、この前の2枚を足して12枚、12×3……しかもまだ余ってるとか言ってたな。石上、龍珠とそんなにデートしてんのっ!?!）

「会長、どうしました？」

「いや、流石だと思ってな……」

「？」

勘違いも続く。



## それぞれの夏休み①

〈小野寺麗は読ませたい〉

「お邪魔しまーす。」

「ミコちゃん、小野寺さん来たよ。」

「麗ちゃん、いらっしやい。大友さんは？」

「ちよつとだけ遅れるってさ。」*チャギン*

「そっかあ……って麗ちゃん何してるの？」

「ん？ エッチな本は何処にあるのになって。」

「ないよっ!? なんであると思ったの!？」

「だって……伊井野は学校であーいう本読む奴だし、持ってるかなって。」

「だからアレは誤解なの！ そもそも、女子向けのああいいう本は全年齢対象だった  
りするから、麗ちゃんが思ってるより健全なの！」

「アレが……健全？」 ↑正気かよという目

「うわあーん、こばちゃーん！ 麗ちゃんがイジメるうー！」*チャギン*



「ヨシヨシ、小野寺さん……上から二段目の左の奥だよ。」

「こぼちゃんっ!？」

「えーと、上から二段目の……左奥。」*ヤギン*

「あああっ！麗ちゃんダメーッ!!」

過激な少女漫画発見

「うわっ、キッツ……」*ウ。ウ。ウ。*

「」

「まあミコちゃんは思春期だから……」

「思春期って言葉で片付けていいモノなの？はあ……伊井野、エッチな本ばっかり読むんじゃないかって少しは違う本も読んだ方がいいよ？」

「うええっ、違うもん……ちよつと過激なだけの少女漫画だもん！」*ハッハッ*

*ッ*

「別に伊井野がムツツリスケベでも、私は気にしないよ？」

「私が気にするのお……」

「小野寺さん、それは？」

「女子高生向けの雑誌、ちょっと古いけどね。」

「どれどれ……初体験はいつだったアンケート、高校生までに34%……」

「そ、そんなっ……麗ちゃんっ!？」

「ちょっと待って! なんでそうなるのっ!？」

「だ、だって34%って事は、此処にいる内の1人が経験済みって事で、私とこばちゃんはずっと一緒だったからそういうのが無かったって知ってるし、残るのは麗ちゃんしか……」

「アンタ達2人が違うからって、次は確定って事にはならないからっ!」

「じ、じゃあ麗ちゃんもまだなの?」

「そ……そうだよ、悪い!？」

「良かったあ……」

「え、なんで喜ぶの?」

「だって1人だけ経験済みって、なんか気まずいというか……」

「まあ、ミコちゃんの言いたい事もちょっとわかる……」

「お邪魔しまーす! 伊井野ちゃん来たよー!!」

「あつ、大友さんいらっしやい。」

「みんなもお待たせー。何してたの？」

「コレ読んで話してたの。」

「大友さんにはちよつと過激かもね。」

「へー、ちよつと見せて！……ふむふむ、高校生なら付き合ってから3ヶ月半  
年が彼との初体験第1位……皆は彼氏が出来たらどれくらいですか？」

いきなりの爆弾投下である。

「ええっ!? わ、私はそんな……破廉恥な事なんてっ！」

「……なんか伊井野は、性に対する好奇心凄くから案外すぐ身体許しそう……」  
酷い言われ様である。

「わ、私はそんなエッチな子じゃないもんっ！」

「いや、今更カマトトぶられても……」

小野寺の目は冷たかった。

「カマトトっ!?」  
ぎゅ

「おのちゃんは？」

「んー、正直わかんないんだよね……相手にも寄るだろうし。」

「そっかぁ、おさちゃんは？」

「私？ ううん、私もわからないなあ……ちょっと草食系っぽいし。」  
ギョ

「……大仏さん、草食系って誰の事？」  
いふ

「えっ……わ、私そんな事言った!？」

「えっ？ 何々、おさちゃんなんか言ったの？」

「な、なんでもないからっ！ それより、大友さんはどうなのっ？」

「うーん、私はねえ……」

「カマトト……」  
メー

女子達の集いは続く……

〈報道女子は想いを馳せたい〉

「はぁ、会長☒かぐや様不足ですわ……」

「かぐや様あ……」

「私達がこうしている間も、御二方は逢引などされているのでしょうか……」

その頃の白銀……

くっ、どうする？ 喫茶店には俺から誘うか？ いや、四宮から誘いの連絡が来るかもしれない。もう少し待つか……

「私みたいな雑草と違って、かぐや様は優雅な休日を過ごされているのかしら……」  
その頃のかぐや……

もう！ 会長は何をグズグズしているの？ 折角、石上君が無料券を譲ってくれたのに！ こうなったら、もう私から……いえ、もう少し待ってからにしましょうか……

「……それじゃ、今日の活動はここまで。次の活動日はまた連絡するから、忘れない様にね？」

「……エリカ、帰りますわよ。」

「うん……」

「もう、少しは元気出して下さい……そうですね、帰りにスイーツでも如何です？」

「うん、食べる。」

「はあ……長期の休みになる度に、こうなる様だと先が思いやられますわ。」

「……そういうかれんだって、さっき会長<sup>〇</sup>かぐや様不足って言ってたじゃない。」

「確かに、今生きる活力が不足しています。しかし、会えない時間が想いを募らせるのか……最近、筆の進みが捗って仕方ないのですわ。」<sup>ギンギ</sup>

かれんの妄想ノートは、二桁の大台に達し様としていた。

「……会えない時間が想いを募らせる。そうよね、そもそもかぐや様と同じ時代に生まれただけで充分恵まれてる訳だし！」

かぐやガチ勢復活である。

「そうですね！ それに、こうして街をぶらついていれば逢引をされる御二方を見掛けるかもしれませんし！」

「……あれ？ 彼処にいるの会計君じゃない？」

「えっ、何処です？」

「ほら、あの喫茶店に……」

「あら、ホントですわね……向かいの席に誰かいますけど……っ！」

「あれ、龍珠さん……」

「龍珠さんですわ！やはり私の目は間違っていないませんでしたわ！ラブな波動を感じますわ！」

「ええ、そう？只ゲームしてるだけにしか見えないけど……」

「エリカもまだまだですわね、年頃の男女が休日逢う……この意味がわかりませんの？」

「その言い方だと、男女混合の部活動や委員会もそういう意味になっちゃうと思うんだけど……」

「もうっ！相変わらずニブチンですわね！とにかくコレはスクープになりますわ！早速記録しないとっ……」

「えー、スクープしちゃうの？龍珠さん怒ると思うけど……」

「大丈夫ですわ。記録すると言っても紙媒体にですし、会長□かぐや様のシチュウ妄想に転用する事にしか使いませんから。」

「その使い方もどうかと思うけど……」

「ついでに写真も撮って夏休み明けにでも、石上会計に見せてあげますわ！」

シヤカシヤ

「嫌がると思うけどなー。」ギョギョ。

「えっ？」カレ

「おう、嬢ちゃん達……お嬢の写真撮ってどうするつもりか、説明してもらってええか？」

「」

「」

数分後……必死の説明が功を奏し、なんとか誤解は解けた。

「かれん、私埋められるかと思った……」ザクザク

「私は沈められると思いましたわぁ……」ブズブズ

本日の教訓、好奇心は猫をも殺す。



## それぞれの夏休み②

〈早坂愛は落としたい〉

「……」オ。オ。オ。

〈会長、おはようございます。もし、お暇なのでしたら……石上君から貰った無料券で、珈琲でも飲みに行きませんか？〉

「……」オ。オ。オ。

作成文章を削除しますか？

YES↑

NO

「……あーん！もうっ!! どうして会長は、折角の夏休みに私を誘いに来ないのっ!?!」

「……自分から誘えばよろしいのでは？」

「ふざけた事を言わないで！それじゃまるで、私が会長と一緒に出掛けたいみたいじゃない！」

「先程から10回は、メールを送ろうとしては消しを繰り返している人の言葉とは思えませんか。」

夏休み！ 凡そ40日間の休暇をどの様に過ごすかは人それぞれ。ある者はバイトに精を出し、またある者は友人と親交を深める……そして、選ばれた一部の人間だけが異性と遊びに行くというビッグイベントを体験する事が出来るのである。

「だ、だって……こういう時に誘うのは、男子の務めでしょう!？」

「はあ、かぐや様ともあろうものが情けない事を。折角会計君が気を利かせて無料券までくれたっていうのに、当の本人がこの体たらくでは……」

「体たらくっ!?! 石上君の素行調査も満足に遂行出来なかった癖に言ってくれるじゃない!!」

「あ、あれはっ……」

「普段は偉そうな事言ってる癖に、いざその時になったら年下の男の子1人満足に調査出来ないんでしょう!?! 大体、早坂も恋愛事でアドバイス出来る程の経験があるの!?!」

「かぐや様も言ってくれますね……」ヤッ

「ふん！ 口ではどうとでも言えますからね！ 悔しかったら、石上君を落とすくらいして証明してみなさいよ!!」

「……ッ！」 ちぎ

「……」

「……かぐや様がそこまで言うなら、やってやりますよっ。」 コッコッコッ

「相手はあの石上君よ？ 精々、藤原さんみたいに泣かされないよう気をつける事ね？」 コッコッコッ

夏休みに入り暦は既に8月。その間、白銀から誘いのメールが来ない四宮かぐやの苛立ちと、普段から主人の我儘に振り回されている早坂愛のストレスがここに来て同時に爆発……何の関係も無い石上が巻き込まれる事態へと発展していた。

……

「こんな所ですね……」

対石上ファッションVer.1

伊達眼鏡☒ショートパンツ

「……普段の変装とは違うのね。」

「会計君とは学校で接点ありませんからVer.2（フィリス女学院ハーサカVer）でも問題ないとは思いますが、ああいったタイプの男子は清楚な眼鏡っ娘を好む傾向にありますので。」

「なるほどね……それで、どうやって接点を持つ気？ 今は夏休みよ？」

「会計君の行動パターン（休日）も既に解析済みです。今日は新作ゲームの発売日、馴染みのゲームショップに来店する可能性87%です。まあ、見てて下さい。」

〈ゲームショップ〉

「んー？ お、あったあった。」

石上は棚に陳列された物の中から、目当てである新作ゲームに手を伸ばした。

「あっ……ご、ごめんなさい！」と、  
「と、と」

その伸ばした手に重なる様に華奢な手が触れる。

「いえ、こちらこそすいませ……ん？」

(あれ? この人……)

「君もこのゲーム好きなの?」

「え? はあ、まあそうですね。」

「実は私もなんだー。私、同じ趣味の人って周りに居なくて……良かったら少し話さない? 丁度このお店ゲームブースもあるし、そこでどう?」

「……ええ、構いませんよ。」

「……」 ｺﾝｺﾝ

(早坂、中々やるわね……)

男女間に於いて、共通の趣味とは一種のブースト装置である。共通の趣味を持っているということは自分と少なからず似た考えを持っており、同じ趣味を楽しんでいるという事実が親しみやすさを感じさせるモノである。それが余り女子受けしない、ゲームという趣味ならば尚更……普通の男子ならば、この時点で落ちていただらう。しかし、早坂愛は知らない。石上優が持つ特異性を……

〈ゲームブース〉

「……」

(むう、仕切りがある所為で2人の声が聞こえないわね……)

「実は私、前作からこのシリーズやっててね……」

「……あの、間違ってたらすいません。早坂……先輩ですよね？」

「っ!!!?」

(そんなんっ……見破られたっ!?)

石上優の特異性、それは高校1年3月までの記憶を持つという点にある。当然その記憶の中には、白銀御行、四条真妃、早坂愛と共にバッティングセンターで遊んだ記憶も刻まれている。他人を見る目に秀でた観察眼を持ち、友人の少ない石上が共に遊び、並んで牛丼を食した事のある人間を見間違える事など有り得ないのである。

「な、何の話？」

(そんなん……有り得ないっ! 今まで誰にもバレた事の無い私の変装が見破られた!?)

何も知らない早坂の立場からすれば、その衝撃は如何程であろうか……

「まあ、そうなりますよね……」

（マキ先輩は早坂先輩の事を四宮先輩のお付きと呼んでいた。つまり、四宮先輩の周囲を警戒する仕事もしてる可能性がある。多分、僕が信用出来る人間か見極める為に近付いたってトコかな。）

単にストレスの爆発した少女2人の争いに、巻き込まただけである。

「そ、そうだっ……カラオケでも行かない？」

（このまま此処に居るのはマズイっ！暗闇で女子と2人になれば冷静さも失うはず……）

「……あれ？カラオケ嫌いなんじゃ？」

「うん？私、そんな事言った？」

「んん？」

カラオケは死んでもいやです、行き先は私に決めさせて下さい。

ええっ、主張つよ……

早坂がカラオケで白銀のラップ（なまこの内臓）を聴き、トラウマを植え付けられるのは……3ヶ月後の話である。

「えーと……じゃあ、バッティングセンターはどうですか？」

「うん、いいよ。」

（早坂、何処に行くのかしら？）と。

「ん？……っ!？」

〈バッティングセンター〉

「ああ、全然当たらないよお……」と。

「……」

（うわあ、メツチャ猫被ってる……僕達と遊んだ時は、バカスカ飛ばしてたのに。）  
記憶のある石上からすれば、そこそこ滑稽な光景だった。

「早坂先輩、僕には猫被んなくて良いっすよ。」

（……誤魔化すのは無理そうですね。）

「……はあっ、どうしてわかったの？」

「……なんとなくです。」



「……そもそも私、会計君と学校で話した事無かったよね？　なんで私の事知ってるの？」

「あー、何回か友達と話してる所を見た事があって……」

「ふうん？　その程度でよく私だってわかったね……なんで変装してるのかは？」

「さあ、そこまでは……でも、何か事情があるって事くらいはわかりますよ。」

「そう……」

「まあ、ストレスが溜まってるとならバッテリーングセンターくらいは付き合いますよ。」

「そんな、別にストレスなんて……ん？」と。ゴ

「早坂！　会長に喫茶店に誘われちゃったから行って来るわね！　帰りは遅くなるかもしれないから、早坂もくだらない事してないでさっさと帰っていいわよ。」

「……くだらない？　一体誰の所為で、こんな事をしてとっ……！」ウナナ

「……早坂先輩？」

「もうー……！！」チャリ、ガーン、ガーン

「……」

(うわぁ、絶対ストレス溜まってる……)

「ほらっ、会計君も！」

「あっ、はい……」ブッ、ブッ

「コラー！全然腰が入ってないよ!!」

「スパルタッ!?!」

本日の勝敗、早坂&石上の敗北

結果的にかぐやに振り回されストレスが溜まり、そのストレス発散に巻き込まれた為。

---

〈喫茶店〉

「……美味しいですね、此処の珈琲。」

「ああ、週一通いたくなる味だな……混んでいない今くらいの時間に。」

(四宮、わかるな?)

「そうですね、私も暇な時は来ても良いかもしれません。」

（なるほど、そういう事ですね。）

「ハハハ……」

「フフフ……」

本日の勝敗、白銀~~が~~かぐやの勝利

週一で喫茶店で会う事が可能になった為。

## それぞれの夏休み③

〈藤原千花は臭くない〉

「ん？ 藤原書記、奇遇だな。」

「藤原先輩、どうもっす。」

「あーっ！ 会長と石上くん、久し振りにですね。2人で遊んでたんですか？」

「ああ、石上がVR買ったって言うから少し触らせてもらった。んでメシ食って来た所。」

「この辺美味しい店いっぱいですもんね！」

「……」スズッ

「もう遅い時間だ。藤原書記も寄り道しないで帰れよ。」

「はい、それじゃっ……」

「藤原先輩、これあげます。」ム

「」

「それじゃ、気を付けて帰って下さいね。」

「

「……石上、さっき藤原書記に何か渡してたが、何を渡してたんだ？」

「ああ、ニンニク臭が凄かったので息ケアをあげただけですよ。」

「鬼かお前は。」

……

「……」ﾌﾟﾙﾌﾟﾙ

本日の勝敗、藤原の敗北

自身のエチケットに対する認識不足の為。

〈生徒会は集まりたい〉

約束の夏祭り当日、前回同様……四宮先輩は待ち合わせ場所に現れず、代わりに夏祭りには来れないという謝罪のメールが届いた。

「かぐやさん……」

「……会長、どうします？」

「とりあえず、石上達は此処で待っていてくれ。」

「はい！」

「わかりました。」トッ、ハ。——ッ

「チッ、始まったか……」

会長は空を見上げて口元を歪めると、自転車に飛び乗り去って行った。

「花火、始まっちゃいましたね……」

「きつと、大丈夫ですよ。」

（頼みますよ会長。）

石上優とて、全ての出来事に関わるつもりは無い。予めこうなるといふ記憶があり、対処する事も決して難しくない夏祭り当日の四宮かぐやの件。しかし、石上優は動かない。何故なら……

「……ッ！」

（この件に関しては、会長……貴方が頑張る必要があるはずです。）

1人の男が1人の女の為に、懸命に頭脳と身体を動かして見せてくれた光景

は……何よりも美しかったのだから。

（会長、また皆で花火を見ましょう！）

「ううっ……かぐやさんの携帯に繋がりません。石上くん、どうすれば……」

「藤原先輩は、そのまま連絡が取れる様にしておいて下さい。僕はタクシーを拾って来ます。」

「わかりました！」

……

〈本日の花火大会は終了いたしました。ゴミや飲食物は……〉

「ああっ、花火大会終わっちゃいました……」

「大丈夫です、きっと会長なら……」と。

〈見つけた〉

「っ！ 会長からです！ 見つけた……四宮先輩の事ですよっ！」

「良かったあ！ あっ、アレじゃないですか!？」

視線の先には手を繋いで走って来る男女……白銀御行と四宮かぐやである。

「かぐやさん、こっちですよー！」

「タクシー捕まえておきました！」

(……運転手、またあのカッコいい人だ。)

言うまでもなく、高円寺のＪ鈴木である。

「全員乗り込め！ 運転手さん！ アクアラインで海ほたるの方へ!!」

「……」

(ホント、カッコ良いな会長は……四宮先輩の為に一生懸命行動して、頭脳をフル回転させて、この光景を……四宮先輩に見せる事が出来たんだから。)

助手席から見えていた僕だから……後部座席の３人を見渡す事が出来たから気付けた。窓に張り付く様にして、打ち上がった花火を眺める先輩達の中に……花火ではなく、隣の男に釘付けになっていたその少女の姿を。

「……」

(良かったですね、四宮先輩。)

タクシーの中から見た花火は、記憶の中で色褪せずに残り続けていた花火同様、最高の美しさで闇夜に咲き誇っていた。



〈龍珠桃は見せたい〉

生徒会の皆で花火を見た数日後、僕はいつもの喫茶店でゲームをしながら向かいに座る桃先輩と、お互いの夏休みをどう過ごしたかについて話していた。

「へえ、夏祭りね……そんなにやってたのか。」

「まあ、都内だけでも10以上の夏祭りがありましたからね。」

僕は会長達と行った花火大会の他にも……伊井野、大仏、小野寺と4人で行った事もあったし、現地でマキ先輩と翼先輩の夏祭りデートを目撃したり、1人で軽く見て回って帰るつमりの夏祭りで大友やナマ先輩達と出会う事もあった。

「意外だな……優は私と同じインドア派だと思ってたよ。」

「基本はインドア派ですよ。でも折角の夏祭りですからね。非日常感を味わいたいですし……それに、友達から誘われたら嬉しいじゃないですか。」

「ふうん……そういえば、今日近くの神社で規模は小さいけど夏祭りやるらしいぞ。」

「へえ、そうなんですか。」

「……」

「……？」

「ああもうっ、わっかんねえ奴だな！ 行くなって聞いてんだよっ！」

「ええっ、そうだったんですか!？」

「わかれバカッ！」

「いや、だって桃先輩とはいつもゲームでしか遊んでなかったですし……まさか、先輩に夏祭りを楽しむ感性があるとは思いませんでした。先輩なら夏祭りとかはゲーム内のバザーとかVRゲームで行った気になってるものかと……」

「ブッ飛ばすぞ。」

「さーせん。じゃあ行きましょうよ！ 桃先輩とゲーム以外で遊ぶなんて初めてじゃないですか？」

「ああ……そういえばそうか。」

「祭りは何時からですか？」

「夕方の6時〜8時までだな。花火はないけど、出店はそこそ多いから楽しめ

ると思うぞ。」

「おお、楽しみです。それまで此処で時間潰していきますか？」

「……いや、今から一旦帰って現地集合で。」

「わかりました。じゃあ6時に待ち合わせでいいですか？」

「おう……じゃ、私は先に帰るわ。」

「うっす、じゃあまた後で。」

〈某神社鳥居前〉

待ち合わせ時間10分前に神社に着いた。桃先輩は規模が小さいと言っていたけれど、まだ祭りが始まる前だというのに段々と人の数も増えて来て、神社周辺は賑やかな雰囲気にも包まれていた。

「結構人が増えて来たな……」

（ちゃんと合流出来ると良いけど。）

「……………よう。」

「……………ん？」ヤロヤロ

桃先輩の声に振り向くも、周囲にはそれらしい人物は見当たらない。

「ボケてんじゃねえよ。」ヤッ

「……………え、ええっ!？」

足蹴にした声の主に視線を向けると、そこにはいつもとは違う服装……………浴衣に身を包んだ桃先輩が立っていた。

「……………なんか言いたい事でもあんのか？」

「帽子被ってない！」

「……………ッーッー」ヤッヤッ

「あっ、すいません、冗談です……………浴衣着て来たんですね。」

「……………ああ、母さんが折角だから着て行けって言うから。」ヤッ

「なんか……………雰囲気変わって見えますね。」

「ふん、似合っていないって言いたいんだろ？ 自分でもわかって……………」

「いや、似合ってますよ。浴衣着てると、江戸時代の町娘って感じで可愛いです

ね。」

「んなっ!? チッ……くだらない事言ってんじゃねえよ、行くぞ。」  
ヌ

「待って下さいよ、桃先輩。」

……

「結構色々ありますね。」

左右に並んだ出店を見ながら、感想を洩らす。

「ああ、規模の小さい神社の祭りなんて、古き良きって言えば響きは良いけど……  
要は古臭くて雑多な店が多いって事だからな、数だけは多いんだよ。」

「すげえ身も蓋も無い言い方……」

「お、射的か……折角だ、どっちが先に景品取れるか勝負しようぜ。」

「良いですよ……玩具屋次男坊の実力見せてやりますよ。」

「言ったな? じゃ、何か賭けるか……負けた奴は勝った奴の言う事をなんでも1  
つ聞くんていうのはどうだ?」

「そんな事言って良いんですか? 負けた後でやっぱり無しって言うのはダメです

からね?」

「ふん、上等だ。」

……

「……っし！景品ゲット！」

「……先輩の記録は5発で景品ゲットですね。じゃあ、僕は4発で落としてやりますよ。」

「ハッ、やれるもんならやってみろ！」

友達と夏祭りで射的勝負をする……充実した夏休みだな。今年はいろんな人と祭りに行ったり、祭りで出会ったり、遊んだり、前回の僕では到底考えられない過ごし方だ。

だから、油断していたのか……忘れていたとでも言えいいのかはわからないけど、人との出会いはいつだって突然やってくるのだと僕は再認識した。

「……あっ、ごめんなさい。」  
「フッ」

射的の弾を込めている僕に、バランスを崩した少女が背中になぐり当たった。

「いえ、気にしな……」

「ごめんね、大丈夫？」

申し訳ないと、顔の前で両手を合わせて謝ってくるその人に……僕は返事をする事を忘れてしまった。

「……」

（つばめ先輩……）

かつての想い人がそこにいた。

---

この話で一時更新ストップします。

暫くお待ちください。m(≡≡)m

多分誰かの√に入るみたいな感じになるとは思うけど……（――；）

あと、シリアスになりそうな感じですが別にそういう訳ではありません、シリアス嫌いやねん……

## 白銀御行は気が気じゃない（番外編）

感想ありがとうございます（・∀・）

思い付いたので投稿。

前半は、四宮かぐやは相談したい（54話）の後。

後半は、偶には雨に感謝したい（53話）より少し前の話になります。

箸休め的なお話です……Δ:(  
E] >):

〈白銀御行は気が気じゃない〉

夏休みを直前に控えたある日、1人の少女が生徒会室を訪ねていた。

〈コソコソ〉

「あら、誰かしら？」

「あっ、僕が出ますよ。」

「そう？ じゃあ、お願いね。」



「うっす……はい、どうぞ。」ガチャ

「失礼致します。」

「えーと、中等部……？」

（あ、この子、会長の……）

「私は中等部生徒会の会計、白銀圭です。」

「僕は生徒会の……」

「石上先輩の事は存じています。」

「あ、そうなの？ まあ、立ちっぱなしで話すのもアレだから、どうぞ座って。」

「はい、ありがとうございます。」

（しろがねけい、白銀系……白銀!! この子、会長の妹ね！ あるある！ 面影ある！）

「私は生徒会副会長の四宮かぐやです。」>」

「あ、ご丁寧にどうも。」>」

「紅茶です、四宮先輩もどうぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

「あら、ありがとう。」

「あの、会長の白銀御行は留守でしょうか？」

「えーと、確か……」

「会長なら部活連の予算案会議に出席していますから、暫くは戻らないでしょうね。」

「部活連の会議って……アレですよ？ 昔の外部入学の生徒会長が失礼を働いて、日本に住めなくなっただけという……」

「ふふっ、大分噂に尾ひれがついてますね。」

「あ、この話デマなんですか？」

「勿論ですよ。彼の父親の勤務先が……ちよつと遠くの国になっただけですよ。」

「それ飛ばされてますよね!？」

「……」

（まあ、桃先輩も参加してるらしいし、妙な事にはならないと思うけど。）

「大丈夫ですよ……四宮の名にかけて、何があっても私が会長をお守りします。」

（四宮先輩もこう言ってるし、大丈夫かな？ 書類チェックだけしたら、妹さんは

四宮先輩に任せよう。女子同士の方が話も弾むだろうし。」

……

2 時間後……

〈白銀家〉

「部活連会議どうだった？」

「まあ、なんとかあったよ。そういや圭ちゃん、うちの生徒会来たんだって？ どうだった？」

「どうって何が？」

「いや、一応兄として妹の立ち振る舞いが気になるというか……」

「過干渉キモっ。まあ千花姉えはいつも通りだったし、石上先輩は書類チェックしてくれて、色々親切に教えてくれたし……」

「へえ、そうなの？」

「四宮副会長とは……なんか緊張しちゃって、上手にお話出来なかった……」  
んギッ

「……え？」

（……えっ!? ちょ、圭ちゃん何その顔!? 石上の話でなんでそんなに顔が赤く……ハッ!? まさか……圭ちゃん、石上の事!?）

「け、圭ちゃん、よく聞こえなかったからもう一回言って……」

「うっさいしね!」

「」

（照れ隠し……もう間違いない!!）

間違いだらけである。

「……」

（そりゃ、石上は成績も良くて仕事も早いし、なにより良い奴だけど……）

お兄い、私、石上先輩と結婚するね?

会長、妹さんは僕が必ず幸せにします!

「」

（……それとコレとは話が別だろうっ!!? いやそもそも、結婚とかまだ早い

!! そういうのはもっとお互いを知ってからだ! 兄としてそんな簡単に許す訳にはっ……）

只のシスコンだった。

〈次の日〉

「い、石上は年下の女子をどう思うっ!？」

「はい？」

白銀は何も無い所に探りを入れていた。

〈藤原千花はまだ知らない〉

「……っていう事があってね!? 萌葉も酷いと思うでしょ!？」

「もー! 姉様は最近そればかりじゃないですかー! 愚痴に付き合わされる私の身にもなって下さいよー。」

「石上くんが酷い事ばかりするのが悪いんです! 文句があるなら石上くんに言つて下さいー!」

「石上先輩がねえ……まだ中等部に居た時に圭ちゃんと見に行っただけど、そんなに

酷い事言う人には見えなかったけどなあ……」

「それは、石上くんが猫被ってただけです！」

「えー？ そうかなあ、石上先輩か……あの爆弾発言生放送事件の事なら、少しはイジれるんじゃない？ 姉様には話したよね？」

「あー、その……それはちよっと、フェアじゃないと言いますか……」

「え？ どういう事？」

「ええと、悪い事してる人を糾弾する為に行動して、女の子2人を守る為に言った言葉ですから、イジるとか馬鹿にするのは……私的には違うんじゃないかなあつて。」

「姉様は変な所で常識的なんだよねえ。」

「いいんですよ！ そんな卑怯な手を使わなくなつてギャフンツと言わせて見せますから!!」

このやり取りをした数日後、卑怯な手を使った事がバレた挙句、プラカード引つ提げて校内一周するハメになる事を……藤原千花はまだ知らない。

## √ A. 仏の小鉢編

## 二学期突入

感想ありがとうございます（・∀・）

毎日更新が出来ずに止まる事もあるかもしれませんが、完結までよろしく願います。（√A）.

---

〈石上優は女々しくない〉

9月に入り新学期が始まったが……僕の心には、未だに多少の動揺が残っていた。1週間前、桃先輩に誘われて行った夏祭りで……つばめ先輩と出会ってから、胸にザワザワとした妙な感覚が芽生えていたからだ。

それはそうである……逆行という奇異な体験をしたとはいえ、中身は精々が高校生レベルの少年である。そんな簡単に自分の恋愛に折り合いをつけられる程、成

熟した精神を獲得してはいない。無論石上も、あの卒業式の日の子安つばめにフ  
られた事で、一応の気持ちの落とし所は見つけているし、吹っ切れてもいる。しか  
し……

「……」

（だってまさか、あんなタイミングで会うとは誰も思わないじゃん……射的勝負は  
負けるし、桃先輩には……）

勝負は私の勝ちだな、楽しみにしてな。

「はぁ……」

（……とかメッチャ良い顔で言われるし。いや、なんだかんだ言ってもとっくに  
吹っ切れてるし、それを何をグチグチと……僕だけが気まずいだけだし、大体フラ  
れてから１年と半年近く経ってるんだから、何を動揺してるんだよ。これじゃま  
るで、僕が凄いい女々しい奴みたいじゃないか！）

普通に女々しかった。

……

〈秀知院学園某所〉



「……それで、新学期早々私達を集めるなんてどうしたの？」

「なんかあったの？」

「……ギガ子ちゃん！ マッキーちゃん！ 私に2人の力を貸して欲しいの！」

〈藤原千花は侮れない〉

新学期に入り数日が過ぎ、いつもの日常を過ごしていた生徒会の面々だが……

「TG部で双六ゲームを作りました！ 皆でやりましょう！」

という藤原千花の提案により、なし崩し的にプレイする事になったハッピーライフゲーム……

「……」

しかし、記憶のある石上は知っている……コレがどういうゲームかを。

「……」いざ

そして、藤原千花はほくそ笑む。この後輩男子に舐められっぱなしだった日々

は、今日で終わりにするのだと。

この数日、既に完成していたハッピーライフゲームに追加で手を加え、部員の意見や交流関係から得た情報を追加し《新ハッピーライフゲーム》として、自分を一切尊敬していない後輩に一泡吹かせる為に生徒会室へと持ち込んだのだ。

「じゃあ石上くんからどうぞ！」

「……」

ココで石上も思い出す。自分が前回、何のマスを踏みどうなったのかを……  
あ！交通事故イベントですね！もう一度サイコロを振って1が出ると……  
1が出ました。

はい、石上くん死にしました。

はい、石上くん死にしました。

はい、石上くん死にしました。

交通事故で死亡、奇しくも自分が逆行する原因となった事象である。ただの偶然……そう言い切るのは簡単だが、当の本人は……

「……」

（え？まさか……ただの偶然だよな？でも藤原先輩が所属するTG部が作ったゲームだし、変な呪いくらい掛かっててもおかしくは……うーん。）

石上はTG部の事をあまり信用していなかった。

「石上くん？早く振って下さいよ。」

「……わかりました。」ゴッ

（まあ、そんな話ないか、偶然偶然。）

「5……えーと、放課後イベントですね。」

「……！」

（しゃあなああっ！死亡フラグ回避!!）

ガチ安堵である。

「放課後イベントは、放課後に遊ぶか勉強するかが選べます！どっちが良いですか？」

「じゃあ遊ぶで。」

（死なないなら、なんでもいいや。）

「ふふふ、更にタイプも選べますよ？アウトドアとインドアから選んで下さい

！」

「じゃあ、インドアで。」

「それじゃ！ 石上くんには、このアニオタカードをあげます！」

「……ケンカ売ってます？」

そしてゲームは進行する。

白銀はガリ勉カード効果で、高学歴を獲得。かぐやはラッキーマスを多数獲得し、現在所持金トップ！ 藤原、石上はゲーム慣れにより、効率良く自身のステータスを上げていく。

そして局面は、子供ゾーンから大人ゾーンへと移行する……

「あつ、石上くん結婚マスですね。この中から結婚する子を選んで下さい！」きき「……わかりました。」

（あれ？ 一番近いプレイヤーじゃないのか。）

1、大仏こばち

2、龍珠桃

3、伊井野ミコ

4、小野寺麗

5、大友京子

6、四条眞妃

7、柏木渚

8、四宮かぐや

9、藤原千花

10、紀かれん

「全員知り合いつ!?」

「……」

（女子の知り合い多いな、石上……）

「……」

（人は見かけに寄らぬものとは言いますが……それにしても多いですね。）

「それぞれステータスが違うので、よく考えて下さいね。」

「知り合いの時点で滅茶苦茶選びづらいんですけど……っていうかよく調べましたね？」

「ふふふ、私はラブ探偵チカですよ？ 石上くんと仲の良い女子くらい、直ぐに調べられますよ。」

（ふふ、知ってる人だと意識しちゃうでしょう？ 冷静さを失った石上くんに大差で勝つ。そして、この中に好きな子がいるなら……イジリまくった後で、このラブ探偵チカが導いてあげましょう!!）

かなりタチが悪かった。

「うーん……」

（人数多いし、ステータスもバラバラか……誰を選ぶかな？）

「い、石上は誰を選ぶんだ？」 ヽㄾㄾ

「ううん、そうですね……」

（あれ？ もしかして会長、四宮先輩が選ばれたらどうしようとか考えてる？ いやいや、たかがゲームだし……そんな訳ないよな。）

「……」

（些細なきっかけで異性を意識するのは良くある事だ……石上は成績も良く、内面的にも秀でた人間だ……四宮が結婚相手に選ばれたら、意識してしまう可能性もゼ

口ではない。)

滅茶苦茶考えていた。

「……」

(でも結婚相手か……僕もいつか、そういう相手に出逢う時が来るのかな……僕みたいな奴を好きになってくれて、お互いを支えて尊重し合える様な女性が……)

石上……守ってくれて、ありがとね。

「……」

「石上くん！いつまで悩んでるんですかっ!？」

「あっ、すいません。じゃあ……大仏で。」

「……へー、ふーん？」 いざい

「藤原先輩、どうしたんですか？顔が引き攣ってますよ？」

「それを言うなら緩んですよでしょっ!? 本当に石上くんは上級生を敬いませんね!!」

「何度も言いますが、こんな扱いをしてるのは藤原先輩だけですよ。」いじ

「テメーコラーツ!!」

「ふ、藤原抑えろっ! 石上もあんまり煽るな!」

「すいません。」

「ふうふうっ、いいでしょう。このゲームで勝ってどちらが上か教えてあげます!

」

(コレそういうゲームだっけ?)

「つ、次は俺だな。」コロ

「あ、会長も結婚マスですね。」

「ム!?!」

(か、会長が結婚っ!?)

「結婚相手はこの中から選んで下さい。」

「俺も選択式なのか……」



1、四宮かぐや

2、藤原千花

「少ないなおいっ!？」

「だって会長が普段話す女子なんて、私とかぐやさんくらいですよね？」

「ぐうっ! た、確かに……」

（石上の後だと、滅茶苦茶モテないやつみたいに見えるな俺……）

「さあさあ! 私とかぐやさん、どっちを選ぶんですか？」

「……」

（そんなもん四宮に決まって……いや、ちょっと待て! もし此処で、四宮を指名したら……）

あらあら、ゲームとはいえ私を結婚相手に選ぶなんて……会長、そういう事なんですわね? ふふ、お可愛いこと。

（そんな事したら告白したも同然! くっ、仕方ないが此処はっ……）

「ふ、藤原書記だ。」

「へー、私ですかあ……えへへへ、私会長と結婚しちゃいましたー。」  
（ぐい）

「

「……」

（あれ？ 四宮先輩じゃないのか……まあ所詮ゲームだし、誰を選んだ所で現実とごっちゃにする人なんている訳ないか。）

「

（か、会長が藤原さんと結婚!? なんで私じゃないのっ!? も、もしかして……会長は藤原さんの事がっ!?）

いた。

「会長、コレお祝い金です……四宮先輩、ゲームなので現実のお金は仕舞って下さい。」

「……」 プルプル

そして……

「あっ、また出産マスですねー。」

「お祝い金です。随分お盛んな様で……」 ヤン

「ゲームの話だからなっ!? ボソツとマジっぽく言うのやめろ！」

「……っ」ア。ハ。ハ。

「だから、リアルマネーは仕舞って下さい。」

新ハッピーライフゲームの……

「あ、石上くんはラッキーマスですね。アニメ好きが高じて、二次元空間からお嫁さんを召喚出来る機械を手に入れました！ アニオタ冥利につきますねー。」

「やっぱりケンカ売ってますよね？」

勝者が……

「あ、かぐやさんも結婚マスですね。」

「四宮先輩は男性不信カードを持っているので、強制的に藤原先輩と結婚となります。」

「」

「っ!？」

（四宮の目が死んだっ!？）

決まったのだった……

「……という事で結果発表です!!」

1 位、四宮かぐや (☒ 13 億 7 5 0 0 万円)

2 位、藤原千花 (☒ 4 億 3 0 0 0 万円)

3 位、石上優 (☒ 3 億 5 0 0 0 万円)

4 位、白銀御行 (☒ 9 5 0 0 万円)

「滅茶苦茶疲れた……」

「会長……一時期は 1 億 8 0 0 0 万の負債があったのに、よく☒収支に出来ましたよね。」

「ハッピーライフゲームの勝者はかぐやさんでしたー!」

（石上くんは大差をつけられなかったのは悔しいですが、まあ良しとしましょう。）

「……」

（1 位なのに嬉しくないし、全然ハッピーじゃない……）

大仏こぼちは気になる

去年の奉心祭に決意してから早9ヶ月、高等部は夏休みを終え二学期に入った。その間、石上とは良好な関係が続けて来れたと思う。ただ、最近気付いた事がある。それは……

い、石上！

石上、おっつ！。

石上君、バイバイ！

優、  
こっち来い。

あ、優ったら聞いてよー。

石上君、  
なんで逃げるの？

石上編集、  
聞いて下さい！

ねえ会計君、  
かぐや様の生徒会エピソードとかない？

会計君、また今度付き合って。

あら、石上君どうしたの？

うええっ、どうじで勝てないの……

石上は女子の知り合いが多い。私達みたいに同じクラスの女子や大友さんはまあわかるけど、何故か年上の知り合いが多い。龍珠先輩は奉心祭の時に会ったし、ダ

ブルデートの件も後で事情を聞いたから別にいいし、生徒会の先輩も一緒に仕事してるから仲が良いのもわかるけど……知らない間にマスメディア部の先輩とか、ギャルっぽい先輩とか増えてるのはどういう事なの？

別に全員が恋愛感情を持ってる訳じゃないんだろうけど……それでも少しは自重して欲しいというか、嫉妬してしまう私はイヤな女だと思う。

「なんで眼鏡外して迫んないの？」

相談というよりは愚痴に近い事を言っていた私に、小野寺さんはそう言った。

「大仏さん、美人だし普通の男ならすぐ靡くと思うけどね。」

「……石上は普通とは違うと思うから。」

「ふーん、まあ何か理由があるなら無理にとは言わないけどさ。とりあえず石上に恋愛感情持ってる人がどれくらい居るかくらいは把握しておけば？」

「恋愛感情……小野寺さんは誰だと思う？」

「えーと、まずは伊井野でしょ？ 本人に自覚があるかは知らないけど……」

「私もミコちゃんに自覚があるかは微妙だと思う、ミコちゃん素直じゃないし……石上から告白されたら普通にOKしただけ。」



「あとは……龍珠先輩くらいじゃない？ 偶に敷地内で一緒にいるトコ見掛けるし、喫茶店で2人でいるトコ見たって人もいるし。」

「それだけ？ 大友さんとか柏木先輩は？」

「大友さんは無いよ、断言してあげる。」

「そうなの……？」

「まあ、ね……」

うん、単純にタイプじゃないんだー。

「……」

（お願いだから石上も、大友さんだけは好きにならないで欲しいわ。）

「それなら柏木先輩は？ ダブルデートの事もあるし、可能性はあると思うけど……」

「個人的にそれは勘弁して欲しい……」カタカタ

（水族館の時メッチャ怖かったっ……）

「ええー、何かあったの……？」

「それは……まあ置いといて。他にマスメディア部と生徒会の先輩はないね、あくまで先輩後輩としての関係だと思う。偶に泣いてる藤原先輩と石上と一緒にいるの

は……まあいいとして、あとはそのギャルっぽい先輩？ 私はまだ見た事ないけど、最近知り合ったんならそこまで親しくもないでしょ。」

「だと、いいけど……」

「……次の奉心祭で告るっていうけどさ、そんなん待たないで告っちゃえば良くない？」

「うん……でも心の準備とか色々あるし。」

「まあ、無理強いするものでもないけどさ……石上は良い奴だし、知らない内に取られない様に気を付けなよ。」

「……うん、気を付ける。」

---

小野寺さんと別れた直後、廊下を歩いていると教室の出入り口で石上と出会った。

「大仏、今から委員会か？」

「うん、石上は今から生徒会？」

「おう、今月で生徒会も終わりだし、色々片付けておかなきゃいけない仕事とかあつてさ。」

「ふーん……石上はさ、次の生徒会長に立候補したりしないの？」

「僕が？ ないない、器じゃないよ。」

「そう？ 結構向いてると思うけど……石上はさ、困ってる人が居たら助けてあげられる人でしょ？ 普通の生徒からすれば、そういう人に生徒会長になってもらいたいと思うよ？」

「……そんな事言っているのか？ 伊井野は今年も立候補するんだろ？」

「まあ、そうなんだけど……」

「僕は味方になれないから、大仏が支えてやってくれよ。」

「え？ 味方になれないってどういう事？」

「……その内わかるよ。」

石上はそれだけ言うのと、歩いて行ってしまった。

「……？」

（その内？ 何かあるのかな……？）

生徒会業務終了後……

スマホが振動するのを感じて画面を開く。

「……」

呼び出しの連絡だ……僕は最近訪れる様になった場所へと、足を踏み入れた。

〈バッティングセンター〉

「うーっ！ 超恥ずかしかったし！」  
ギュー、ギュー

「……」

（うわぁ、もう既に出来上がってる……）

「せめて1ヶ月はあれば絶対イケてたし！」  
ギュー

「お、お疲れ様です。」

「来たんなら早く打つし！」

「あ、はい。」  
グュー、グュー

「全然ダメだし！男ならもっと豪快に行けし！」

「手厳しい!?」

（秀知院の制服の時はギャルモードなのか。）

「HR 打つまで帰るの無し！」

「えええっ!? ハードル高っ!?」

「文句言うなし！」

本日の勝敗、石上の敗北

自身のうっかり発言が原因で、そこそこの頻度でバッテリーセンターに呼び出される様になった為。

## 四条眞妃は惚氣たい

感想ありがとうございます(。ω。)

9月某日……2学期になり数日が経ったある日、生徒会室には2人の少女が居据わっていた。1人は生徒会副会長四宮かぐや、そしてあとの1人は……

「それでね……夏祭りの時、翼君はずっと手を繋いでくれてね？ その、所謂恋人繋ぎって奴を……」

「……」

「履き慣れてない下駄だったから、転びそうになったんだけどね？」

「……」

「咄嗟に翼君が繋いでた手を引き寄せてくれて、そのまま……抱きしめてくれたの

！」

「」

「とにかく、最高の夏休みだったの！……おば様は、夏休みどうだった？」

「そ、そうですね……」

（眞妃さん……貴女、夏休み前はそんな感じじゃなかったでしょう!? なにやら纏う空気がとても柔らかくなっていますし、それどころか目も凄いキラキラしていますし!）

四条眞妃! この夏休み期間、四条眞妃は恋人である田沼翼と良好なお付き合いを続けていた。会う頻度自体は、他の友人達と大差ないがその時間を大切に過ごして来た事により、最大の欠点であるツンの要素が薄まっていた。コレもひとえに、田沼翼が石上優からのアドバイスを真摯に受け止め、変わらない優しさで接し続け、言葉の裏を読む努力をした結果である。

（もうーっ! 私でも会長と恋人繋ぎしたり、抱きしめられた事なんてないのにつ!!）

惚気られる立場からすると、たまったものではないが……

「そうですね、私も……生徒会の皆と、花火を見る事が出来ました。」

「……そ、なら良かったわ。」

「眞妃さんは、その……彼氏さんとは何処まで？」

「……き、キスマでっ！」

「そ、それはっ……些か早すぎるんじゃない？」

※個人の意見です。

「えうっ……わ、私もちょっと早いかなと思ったんだけど、でも急だったし……」

※個人の意見です。

「そうです、早いです！もっと自分を大事にするべきです！……ち、因みにどうでした？」

「……え？何が？」

「だ、だからっ……き、キスがですっ！」

「とりあえず、すごかった……！」

「……ぐ、具体的にはっ!？」

「頭がボーンとして、今までにないくらい顔が熱くなっちゃって……一瞬しか触れてなかったのに、唇の感触は凄が残ってるの……」

「はわっ……」アッザアッザ



「も、もう！ おば様ったら、あんまり恥ずかしい事言わせないでよ！」

「す、すいませんっ……」

（もし、会長にキスされたら……）

「ま、まあ別にいいけど……」

（思い出したら、また恥ずかしく……）

「……………！」アッザッザ

※余談だが……高校生の付き合ってからキスまでの平均期間は、凡そ1ヶ月である。

# 〈中庭〉

「僕に相談事……もしかして、マキ先輩と上手くいってないんですか？」

「ううん、そんな事ないよ……寧ろ上手く行き過ぎ？ みたいな感じかな。」

「じゃあ、なんで相談を？」

(……相談風自慢かな?)

「その、実はさ……初体験ってさ、キスからどれくらいの間を置いてするものなのかなって。」

「」

「ご、ごめんね。こんな事年下に相談する事じゃないんだろうけど……」

「ああいや、気にしないで下さい。ちょっと面食らっただけなんです……」

(うわあ、なんか……うわあ……)

石上は、親しい人間の性事情は聞きたくないという、あの感情に苛まれた。

「そうですね……やはり、時間どうこうよりも相手がどう思っているかが大事だと思います。」

「相手がどう思っているか……」

「はい。男と比べて女性の負担が桁違いに大きい行為ですし、何よりマキ先輩はその……凄い奥手なタイプですし。」

「あんまりガッツかない方が……いいよね?」

「そうですね、下手したら婚前交渉は良しとしない可能性もあります。」

「ええっ!? そこまでっ!?」

「まあ、男の方も辛いとは思いますが、頑張って耐えて下さい。」

「う、うんっ! マキちゃんに無理はさせたくないし、耐えて見せるよ!」

「……お願いします。」

（コレで、暫くは悩まされないで済むかな。）

……

「……」アッ、アッ

（友達の性事情の相談とか、地獄かと思った。）

「……」アッ、アッ

「……」アッ、アッ

（別にマキ先輩に恋愛感情がある訳じゃないけど、コレが脳が破壊されるって奴か……）

「……」アッ、アッ

「……」アッ、アッ

（それに、マキ先輩と翼先輩が神ったりしたら、柏木先輩が柏鬼先輩にならないか

心配になるわ。まあマキ先輩なら神ったとしても、友達を蔑ろにはしないと思うけど……」

「……石上君。」キョウ

「えっ？ か、柏鬼……柏木先輩!? 一体どうしたんですか!？」

「今なんで言い直したの? ……まあいいや、責任取ってもらいに来たよ。」ヒョウ

「石上君、言ったよね? もし眞妃が私から離れたりしたら、責任取ってくれるって。」エリカ

「ちちちちちょっと待って下さい! マキ先輩がそんな簡単に友達と距離を置くなんて……」

「私も本当は嫌なの……ごめんね?」

「滅茶苦茶不穏な謝り方しないで下さい! じ、事情っ! 事情を話して下さい!」  
「いいよ……去年までの夏休みは、週に3〜4回は会う機会があったの。でも、眞妃に彼氏が出来た今回の夏休みは、会う機会が2〜3回に減ったの……ここま  
で言えば、もうわかるよね?」

「……当たり判定厳し過ぎません？」

本日の勝敗、石上の敗北

なんとか説得する事に成功したが、余計な気苦労を負った為。

## 生徒会は終わらない

感想ありがとうございます（・∀・）

## 〈生徒会室〉

「1年であっという間でしたねー。」

「僕は実質半年も居なかったので、余計に短く感じますね……」

「この1年間、皆には色々と支えてもらったな……感謝してるよ。」

「もう、やめて下さいよ会長。私達は望んで生徒会に居たんですから。」

（楽しい時間は短く感じるというけど、本当にその通りね……）

「ゲーム類も持って行かなきゃですね。」

「ああ、あのイカサマトランプ。」

「うぐっ!? いいですか、石上くん！世の中バレなきゃ何してもいいんですよ！」

「藤原……バレたからあんな目に遭ったんだろ。」

「あんな目……?」

「四宮が風邪で休んでいた日に、誰が見舞いに行くかを決める勝負をしてな。」

「藤原先輩が行くのを阻止する為に、僕と会長が立ち塞がった訳です。」

「かぐやさん! 2人ったら酷いんですよ!?! 私が行ったら風邪が悪化するとか言つて、お見舞いの邪魔してきたんですから!」

「そうだったんですか。」

(藤原さんが来なくて助かったわ。)

「はい、その勝負で藤原先輩がイカサマして来たので……コレを首に提げて、校内一周の罰ゲームやらせたんですよ。」  
「ゴッゴッ」

「まだあったのソレ!!!? さっさと捨てちゃって下さいよ!!」

「いえ、藤原先輩の事だから、また使う事になると思います。」

「なんだとカラー!」

「2人共さっさと片付けますよ。」  
「ン。ン。ン。」

「全く、最後まで賑やかなものだな。」

「……」

（最後……そっか、最後なのよね。）

……

「もう忘れ物はないな？」ヤ、

「ファミレスでも行って打ち上げします？」

「それもいいかもな……」ニ、

「……」

「藤原さん？」

「ぐうっ……ぐすっ、えぐっ……！」オ、ロ

「藤原……」

「……藤原先輩。」オ、

「ううっ……、石上くん……？」

「藤原先輩のそういう……自分の感情に素直な所、僕は好きですよ。」

「うううっ!! ごんな時だげっ……ひくっ、優しい事言うのズルいですう！」

「……そうっすね、すいません。」

第67期秀知院生徒会、全活動終了。



〈ファミレス〉

「『かんぱーい！』」

「さっきも言ったが、全員お疲れ様。生徒会の激務に、弱音を吐かずによくついて来てくれた。」

「まあ、1番の激務は会長ですけどね。」

「僕達はいくまで補助的な役目ですしね……会議や集会は、会長が先頭に立って色々やってくれましたから。」

「本当、1番大変な人が頑張ってたんですから……私達が弱音なんて吐けませんよ。」

「確かに大変だったな、こんなの1年やれば十分だ。後は優秀なのが後を継いでくれるのを待つばかり……どうだ石上、立候補してみないか？」

「ふふ、確かに石上君ならなれそうですね。」

「いえ、僕は生徒会長の器じゃないですよ。」

「そんな事はないだろう？ 現に……」

「それに、僕にとっての生徒会長は……会長だけですから。」

「石上……」

「石上君……」

「……石上くんは、生徒会に入るより前に会長と会った事あるんですか？」

「え？ どうしてです？」

「だってなんか、偶に会長を見る時に懐かしさ？ みたいな感じの目をしてる事があるの。」

「そうなの？ 藤原さん。」

「なんとなくですけどねー。」

「俺には身に覚えがないが……石上、以前に何処かで会ったか？」

「……藤原先輩の気のせいですよ、高等部で会ったのが最初です。」

（そういえば、藤原先輩が謎のミラクル属性持ちなの忘れてた。）

「そうか、そうだよな。」

……

「じゃあ、俺と四宮はこっちだから……2人共気をつけて帰れよ。」

「はい、会長達も気をつけて。」

「また明日ー!」

「ええ、また明日。」

「……2人共行っちゃいましたね。」

「……そうですね。」

「私、あの生徒会が大好きでした。会長が居てかぐやさんが居て石上くんが居る、あの生徒会が……でも、もう終わっちゃったんですね。」

「……そうとは限らないんじゃないですか。」

「え?」

「……帰りましょうか、送って行きますよ。」

「ふふ♪今日の石上くんは、優しいですね。」

「今日だけですよ。」

「なんで!? いつも優しくして下さいよ!」

「藤原先輩がやらさなければいい話でしょう？」

「私が原因みたいな言い方やめて下さい！」

「無自覚とは、恐れ入りますね。」

「んだこらーっ！」

「はいはい、帰りますよ藤原先輩。」

「石上くんには次こそ、キツイお灸を据えてやりますからね！」

「……次ですか。」

「そうです、次こそです！」

そう言った藤原先輩は、いつもと変わらない……満面の笑みを浮かべていた。

# 〈職員室〉

「白銀……お前もう生徒会は、やるつもり無いって言ってなかったか？」

「最初はそのつもりでした。だけど……」

僕にとっての生徒会長は……会長だけですから。

一生に一度のわがままです、私は……

「……」

（あそこまで言われたんだ……応えなきゃ男じゃないだろ。）

会長は、会長がいい……

「……一生に一度、根性見せる時が来てしまったみたいで。」

## 小野寺麗は応援したい

感想ありがとうございます（「A」）

生徒会が解散し、10月の選挙活動期間に突入した秀知院学園高等部。選挙活動期間も数日経ち、学園内にはある噂が充満していた。それは……

「ねえ石上……なんか白銀会長が四宮副会長に告るって噂聞いたんだけどホント？」

小野寺の言葉に眉間にシワを寄せながら答える。

「はあ？ 誰だよ、そんなデマ言い触らしてるのは……」

「あ、やっぱりデマなんだ。」

「そりやそうだろ。大方、応援演説を頼むとかそういう事だと思うけど……大体、告るにしても噂で広まってる時点でダメだろ。」

「え、なんでダメなの？」

「いや、そりゃ……そういうのは、2人だけの時に言うもんだろ。」

「……プッ、あはははっ！ 石上って意外と可愛いところあるねー。」

「わ、笑うなよ……」

「照れんな照れんな。」サ。サ。

「あーもう、言うんじゃないかった……」

「ごめんごめん……そういえば、伊井野と大仏さんは？」

「選挙活動だろ……伊井野は昼休みも使ってやってるみたいだな。」

「大仏さんはその付き添いか、大変だねー。」

「……そうだな。」

「石上はさ、2人を手伝わないの？」

「そりゃ僕は、白銀陣営の人間だからな。」

「大仏さん1人で伊井野のフォローするの、結構大変だと思うけど？」

「まあ確かに大変だと思うけど……」

「……ごめん、私の言い方が悪かったね。敵とか味方とか関係なく友達として助けてあげて。それならいいでしょ？」

「まあ、それなら……」

「じゃ、さっさと行った行った。」と。と。と。

「何処にいるかもわからないの？」

「そう言うと思って、居場所は既に突き止めてるよ。スマホって便利だね。」

「……わかった、行くよ。」

僕は小野寺から居場所を聞くと教室を出た。

「……やれやれ。」

（ま、応援するって言った手前、一緒に居る時間を増やす事くらいはしてあげなきゃね。）

〈職員室前廊下〉

「ふう……」

（ビラ配り用のチラシの準備は出来たけど……）



私はコピーし終わったビラ用紙を見下ろす。

「重い……」ズン

（刷り過ぎちゃったな……今はミコちゃんも居ないし、どうしよう？ 諦めて2回に分けて運ぶしかないのかなあ……）

「大仏、手伝うよ。」

「えっ、石上……どうして此処に？」

「いや、1人じゃ運ぶの大変そうだし。」

「……石上は白銀前会長側の人間でしょ？ ミコちゃん陣営の私を手伝って大丈夫なの？」

「ああ、選挙の敵味方はとりあえず置いとくよ……友達が大変そうな事してたから手伝うだけだし。」

「もうっ……お人好しだよね、石上は。」

「……そういう事にしとくよ。」

「ふふ、じゃあさ……このチラシ、教室まで運ぶの手伝ってくれる？」

「ああ、任せてくれ。」

「あ、ちょっと待ってね……」と。ゴ

(……小野寺さんから?)

〈束の間の校内デート楽しんでね〉

「こっ……」

(校内デートって……もう!)

「こ?」

「な、なんでもない! そろそろ行こっか!」

「ああ、そうだな。」

〈放課後〉

「ねえ石上……なんで放課後になった途端、皆走って出て行ったの?」

「ああ、小野寺が言うには、会長が四宮先輩に告るとかいうデマが広がってるらしくてな……それが今日の放課後に校舎裏であるらしい。」

「へー、みんな恋愛事に興味深々って事ね。ミコちゃんが聞いたら肩震わせて怒りそう。」

「確かに、それで今日はどうするんだ？」

「うーん、そうだね……なるだけ人気の多い場所でビラ配りかなあ。」

「じゃあ、そこまでビラ運ぶの手伝うよ。」

「ええっ!? そこまでしてもらう訳には……」

「でもコレ重いぞ?」*ズン*

「うっ、それはそうだけど、良いのかな?」

「別に大丈夫だろ……流石に、一緒にビラ配りは出来ないけど。」

「ふふ、ちょっとだけ変な光景になっちゃうね。」

「確かに……別陣営の人間が選挙で競う相手のビラ配り手伝うって、すげえシュールだな。」

「ふふふ、ちょっとやめてよ。」

「悪い悪い。」

「じゃ、そろそろ行こっか?」

「何処に行くつもりなんだ？」

「うーん、噴水広場にしようかなって思ってる。あそこなら人気もそれなりにあるし……石上には迷惑掛けちゃうけど。」

「迷惑なんかじゃないよ、じゃあ早速行くか。」

「うん、ありがと。」

〈噴水広場〉

「……というか、伊井野は何処行っただ？」

「えーと……校内の掲示板に選挙のビラを貼る許可取りと、ビラ貼り作業だね。終わったら此処で合流する予定だよ。」

「態々許可取らなくても、暗黙の了解で選挙期間は無許可使用が認められてるのにな。」

「だってミコちゃんだもん。」

「確かに、伊井野だもん。」

「……こばちゃん、待たせてごめん！ ってなんで石上もいるの？」

「スパイだよ。」

「ええっ!？」

「もう、違うでしょ？ ミコちゃん、石上がここまでビラ配りのチラシを運んでくれたの。」

「あ、なんだ……もう！ くだらない冗談言って！」

「悪かったって……伊井野、ウチの会長は手強いからな。」

「……っ負けないもん！」

「おう、じゃあ僕はそろそろ行くよ……2人共またな。」

「うん。石上、ありがとね。」

「……また。」

……

「さて……先ずは、マスメディア部から怀柔してみるか。丁度同じクラスに部員も居る事だし、白銀御行さえなんとか出来れば、俺が生徒会長だ。」

伊井野ミコは入りたい

感想ありがとうございます（・∀・）

〈生徒会選挙予測速報〉

白銀御行 60%

伊井野ミコ 35%

本郷勇人 5%

「おーっ！半数以上が会長に入ってますね！ コレは当選確実ですよ！」

「いや……油断は禁物だ。」ヤミ

（いやもうコレ、完全に勝ちだろ。）

「……」

（伊井野は35%か……前回の時よりも少しだけ高くなってると、頑張ってるみ

たいだな。」

「次点は1年の伊井野ミコちゃん……ん？」

「何処かで見た名前だな。」

「……友達です。」

「あーっ！ そうだ、石上くと仲の良い女の子ですよ！」

「ああ、あのゲームで見た名前だったか。」

「ええ、丁度彼処でビラ配りしてるのがそうですよ……会って見ますか？ 会長と

同じ学年1位ですよ。」

「ほう……なら頼む。」

……

〈噴水広場〉

「よろしくお願いします！」

「是非ご覧になって下さい。」

「……2人共お疲れ。」

「石上？」

「どうしたの？」

「いや、ちょっと会長が伊井野と話しをしたらしいからさ、顔繋ぎ役として来た。」

「……君が伊井野ミコか？」

「はい、初めまして……ですよね、白銀前会長。」

「前会長……まあそうだな。聞いたぞ、学年1位らしいじゃないか。」

「はい、入学以来ずっと1位です。」

「ふ、ふーん……」

「……選挙の予測速報見たよ。伊井野、頑張ってるみたいだな。」

「うん、ミコちゃん毎日遅くまで選挙活動色々やって……あんまり無理し過ぎないで欲しいけど。」

「大仏も無理はするなよ。」

「うん……でもミコちゃんも頑張ってるし、私だけ休んでられないよ。」

「まあ、また何かあったら手伝うから言えよ。」

「……うん、ありがと。」

「……！」



（コレは……なるほど、なるほど。石上くんはわかりませんが、この子はそれっぽいですね。）

「そして私が生徒会長になった暁には、藤原先輩に副会長として支えて頂きたいのです！」くわっ！

「えっ!? 私!?」

「えーっ！っ！!? ちょっと待て！なんでよりによって藤原なんだ!?」

「伊井野、それは学園崩壊が起こるからマジでやめとけ。」

「失礼って言葉知ってますか男子共!!」

「ちよつとそのマトモそうな人！これは流石に止めた方が良いんじゃないか!?」

「いえいえ……論理的に考えて、藤原先輩は副会長に相応しいかと。」

「論理的!?」

「……」

（まあ、3ヶ月もすれば伊井野も藤原先輩の本性に気づき始めるんだけどな……）  
わ、私は藤原先輩の事まだ尊敬してます！

……まだ？

「貴方は藤原先輩の何を知ってるんですか!! 藤原先輩程立派な人が居ますか!?

「いや、居つむぐつ……」

「静かに! 人の話は最後まで聞きましょう!」

「いや、掃いて捨てるほど居るだろ。」

「石上くんこらあ!!」

「藤原先輩は凄い人なんです! ピアノコンクールで金賞を取り、5カ国語を操るマルチリンガル! そして、秀知院学園で普通の成績を取る秀才!」

「最後だけ格下感ハンパないな。」

「石上くんは黙って! ううっ……最近はどうぞいな扱いをされる事も多かったの  
で嬉しいです! この子凄く良い子です!」ヤッー

「……」

(藤原……瞬で懐柔されたな。)

「藤原先輩を副会長として招き入れ……そして、石上にもそのまま会計としてやってもらいます!」

「へ? 僕も?」

「今思えば……石上は、生徒会に入ってからおかしくなりました。」

「おい。」

「規則を破って校内でゲームをする様になったり、男女交際に現を抜かしたり……その原因は生徒会に入ったからだとは私は思ってます！」

「生徒会は関係ありません！ 石上くんは最初から（私に対する態度が）おかしかったです！」

「藤原先輩、人の事を頭おかしい奴みたいな言い方しないでくれます？」

「いいですか、前会長……確かに今は票数で遅れを取っています。しかし、私の理念はいつか皆に理解してもらえと思っています！ 藤原先輩と石上を救う為にも、この選挙勝たせてもらいます!!」

「絶対に負けません！」とどきん

「……なんでナチュラルに寝返ってるんだよ。」

「……裏切りボン先輩は放っておきましょう。」

「裏切りボンっ!？」やんぱーん

……………

「しかし……伊井野ミコか。コレは対策を講じる必要があるな……」  
「その心配はないかと思えますよ……只、会長にお願いがあります。」

### 〈中庭〉

数日後、昼休みに中庭を通り掛かった時の事だ。

「ね、いいでしょ？」

「……いえ、私は興味ないので。」

「そう言わずにさー。」

「……？」

（敷地内でナンパか？ 良くやるよ……）

「遠慮します、じゃあ私はコレで。」やぎ

「……あれ、大仏？」

「い、石上!? こんな所でどうしたの？」

「いや、通り掛かっただけ。それより……さっき誰かと話してなかったか？」

「その……」

「待ってよ、ツレないなあ。」さっき

「ッ！」

「……」

茂みから出て来た男子を見た瞬間、大仏の顔が曇った。僕は身体をズラして大仏を背中に庇う。

「……ナンパにしても、しつこ過ぎるのは問題だと思いますよ？」

「ナンパだなんて心外だなあ……そもそも、君には関係無い話だろ？」

「関係大アリです、大仏は友達なので。」

「あれ……君、もしかして石上君？」

「そうですね……」

「俺は君にも用があるんだよ……ちょっと話をしようか？」

「……」

「俺は本郷勇人……言ってしまうえば、君が応援する大将の競争相手だよ。」

「ああ、確か予測速報で最下位だった……」

「へえっ……言ってくれるね？ でも……それは今の所だよ。石上君、取引をしないかい？」

「取引……？」

「ああ、君が僕に力を貸してくれるなら……僕が生徒会長になった暁には、君に副会長の地位を与えると約束しよう。」

「……なるほど、大仏にもその取引を持ち掛けたって事ですか。」

「いいや？ 伊井野さんはあの公約内容的に勝手に自滅するだろうから、大仏さんを誘ったのは……男としてさ。」

「心外とか言っというて、結局ナンパだったんじゃないか！」

「ははは、当然だろ。それに、あの龍珠さんや背中に隠れてる大仏さん、マスメディア部とも懇意にしている君が手を貸してくれるなら、白銀君を蹴落とす事は難しくない筈だ。生徒会という権力と副会長の座、どうだい？ 悪い話じゃないだろう？」

「はあ……器じゃないですね、お断りします。」

「いやいや、君ならきつと副会長も問題無く熟せる筈だよ。」

「ああ……違いますよ。器じゃないって言うのは、本郷先輩の事です。」

「なんだって……?」

「貴方は生徒会長の器じゃない……生徒会長所か、生徒会役員さえ務まらないでしようね。」

「言ってくれるじゃないかっ……!」

「もういいですか? それじゃ僕達はコレで……大仏、行くぞ。」  
ヅハヅ

「あ、うん。」  
タツタツタ

「……~~や~~ ! 彼さえ仲間に引き込めれば、選挙戦も楽に勝てると思ったが……マスメディア部も不発だったし、次はどうするか……」

「……」  
ヅー

……

「はあ、大仏も面倒な相手に捕まってたな。」

「まあね……でも、あーいう事は良くあるし。」

「大変だな、大仏は。」

「慣れてるけどね……でも困ってる所を助けてもらって、背中に庇ってもらえるな

んて……凄く熱いシチュだった。」サッ

「ん、なんて？」

「な、なんでもない！ それよりもありがとね、助かったよ。」

「おう、昼休みももう終わるし教室行くか。」

「そうだね。」

……

「……」

（マスメディア部を利用しようとしただけでは飽き足らず、石上君も利用しようとするなんて……やり過ぎましたね、本郷君。）

〈生徒会室〉

「淹れ終わりましたよ。さあ……温かい内に頂いて下さい。」チャッ、チャッ、

チャッ。



「お、俺、選挙辞退するっ……から！」ガタガタ

「いやだわ……別に私は、そんな事を強いている訳じゃないんですよ？ 安心して下さい、此処に貴方の敵は居ませんから……ね？」

「ひっ……」ガタガタ

「あらあら……そんなに怯えてどうしたんですか？ 私は只……教えて欲しいだけなんですよ？ マスメディア部、石上君……次は何を利用するつもりなんですか？」

「ひっ、ひいっ!?」ガタガタ

本郷勇人、生徒会選挙リタイア。

## 大仏こばちは近付きたい

## 〈選挙戦当日〉

「石上くん、どうしたんですか？ 選挙前に皆に頼みたい事があるなんて。」

「……今日の選挙、皆さんには本気で臨んで欲しいんです。」

「もちろん手は抜きませんけど……事前調査では私達、8割近くの票を獲得していますよ？」

「何かあるんですか？」

「いえ、今日の選挙は僕達が確実に勝ちます。只、勝ち方に拘るだけです。会長には既にお願ひしてありますけど……」

「ああ、俺もその件は了承している。伊井野ミコに全力を出させて勝つ、だろ？」

「はい、お願ひします。」

「ねえ石上君……貴方はどうして、そこまでするのかしら？」

「……全力を発揮した上で負ける、その経験が伊井野には必要だと思ったからです。」

そして会長なら、伊井野に全力を出させた上で勝てると……信じているからです。」

「そう……石上君がそこまで考えての行動なら、私も乗ってあげます。」

「私もーっ！」

「……ありがとうございます。」

……

「……ミコちゃん大丈夫？」

「うん……大丈夫。」

〈立候補者と応援演説者の人は、準備をお願いします。〉

「すう……はあ……」

「こ、こばちゃん、頑張って！」ヤッ

「……うん、頑張る。」

アナウンスで呼ばれた大仏が舞台へと上がった。

「……始まるな。」

「ええ……」

「……伊井野ミコは、とても真っ直ぐな女の子です……」

「……淀みもなく、よく出来た演説だな。」

「でも一般生徒からすれば、選挙演説なんて退屈なだけ……真面目に聞ける奴なんて半分程度でしょう。」

「……ご静聴ありがとうございました。」アキ、アキ

「……お疲れさん。」

「石上……」

「良い演説だったよ。」

「うん、ありがとう……でも、殆どの人は聞いてなかったかもね。」

「ま、仕方無いよ。普通は選挙演説なんて真剣に聞かない。四宮先輩でもなければ……な。」

「え？ それってどういう……」

〈キーンンン〉

「え？ 今のって、ハウリング？……まさか、わざと？」

「ああ……皆には手を抜かない様に頼んだ。」

「え、石上……？」

「きつと……此処で会長に負ける事が、伊井野には必要だと思うから。」

「そっか……石上ってさ、偶に全部わかってて行動してる感じするよね。」

「……ハハ、そんな訳無いだろ。」

「……続きまして、伊井野ミコさんの立候補演説です。」

「ミコちゃん……」

俯いて舞台の上へと上がる伊井野を……大仏は心配そうに見つめている。

「大丈夫だよ。」

「石上……」

「私の、名前は……」サッ

「え？　なんて？」

「マイクトラブル？」

「ミコちゃん……」

舞台上に上がり演台の前に陣取っても、俯いたままの伊井野に……徐々に会場はざわつき始める。

「……もういいだろ、時間の無駄だ。」

「ま、まだ……」

「今の時代に強制坊主……くだらないな。どうした？ 反論があるなら俺の目を見て言ってみろ。」

「わ、私はっ……」

「石上っ……」ヤッヒ

「ちゃんと、見ててやれよ。」ヤッヒ

「……っ！ この公約は、全然くだらなくありません!! いいですか、こちら各名門校のブランドイメージのアンケートです！」

「……っ！」

（嘘、ミコちゃんが……）

「我々秀知院の生徒は、世間から偏差値だけのボンボン共！ そんな目で見られているのです!!」

（言いたい事が言えてる!?!……そうか、今は白銀さんしか見てないから……）

「な、大丈夫だったろ？」

「……石上は、こうなるってわかってたんだね。」

「ああ、まあな。」

「カッコいいでしょ、坊主頭はーっ!!」

「あはは……ミコちゃん、全校生徒の前で坊主フェチって宣言しちゃったよ。」

「はは、まあいいんじゃないか？ 言いたい事言えてるなら。」

「うん……そうだね。」

伊井野と会長の討論は時間内に終わる事は無く、30分延長し終了した。

〈生徒会長選挙結果〉

白銀御行 328

伊井野ミコ 282

「負けた……」  
ぐぐぐ

「ミコちゃん……」

「2人共、お疲れ。」

「石上……」

「惜しかったな、演説……良かったぞ。」

「うん……ありがと。」

「石上は、そのまま会計続けるの？」

「ああ、そのつもりだよ……それと、会長から2人に話があるってさ。」

「選挙も終わって早々に悪いな……2人共、生徒会に入るつもりはないか？ まだ生徒会長を目指すなら、実地で学んでおいた方が良さだろう。」

「……」

（……ミコちゃんと違って、私は生徒会には興味が無い。単にミコちゃんの応援がしたいから、応援演説を引き受けただけ。でも……）

「ん？ 大仏どうかしたか？」

「その……」

（石上と一緒に生徒会……生徒会役員は生徒会長の指名制。ここで断ったら、もうこんな機会は無いかもしれない……私は、もっと石上に近付きたい！）

「返事は今直ぐじゃなくても良いが……」



「は、入ります！」

「え……」

（あれ？前は興味無いって言ってたのに……何か心変わりでもあったのか？）

「こぼちゃんっ!？」

「わかった、伊井野はどうする？」

「わ、私、生徒会誘われたの初めてで……でも、その……」

「私も書記続投するんですよー！」

「入ります！」

「そ、そうか……伊井野は会計監査、大仏は庶務として……これからよろしく頼む。」

「「よろしく願います！」」

「……これからよろしくな、2人共。」

「うん……よろしくね、石上。」

「……よろしく。」

「では、生徒会最初の仕事だ……体育館の椅子を片しに行くぞ。」

「」「はい！」「」

……

〈保健室〉

「まさか、あんな遣り方で演説を続けるなんて思わないじゃない！」

「まあ、優しい会長さんなら見て見ぬ振りはしないでしようし……かぐや様は何が不満なんですか？」

「そ、それはっ……」

「イヤーン、会長！ 私以外に優しくしないでー（かぐや声真似）って事ですか？」  
「そ、そんな訳ないでしょう!? 大体なんで会長はお見舞いに来ないの!? 私が倒れたと聞いたなら何をおいても駆けつけるべきなんじゃっ……」

「あー、ハイハイ。」

白銀御行が保健室を訪れるまで、後10分。

〈翌日〉

「さあ、長かった選挙戦も無事終了した。二学期は体育祭に文化祭！年明けには修学旅行と色々忙しい……気張って行くぞ新生徒会！」

「はい！」

「新メンバーも2名加入しての新体制だ、よろしく頼むぞ！」

「よろしくお願いします！」

生徒会、新メンバー2名獲得。

## 四宮かぐやは防ぎたい

感想ありがとうございます（・∀・）

この世には、宿命論運命論というモノが存在する。運命論とは、世の中の出来事はすべて、予めそうなる様に定められていて、人間の努力ではそれを変更できない、とする考え方のことである。本来ならば、回避していた筈の出来事……しかし運命は、この男に試練を与えたい様である……

## 〈四宮邸〉

「……会長さんの浮気防止？ かぐや様、いきなり何を言うんですか？」

「実は今日、生徒会室に向かう途中に聞いてしまったの……」

……

## 〈2年教室前廊下〉

「白銀会長も無事当選されましたし、かぐや様も副会長を継続……新メンバーも2

名追加され、益々生徒会の活動が活発になる事でしょうね。」

「本当に良かった……かぐや様も生徒会を続けられる様で……！」

「もう、何を当たり前の事を！ 会長とかぐや様は2人で1セットであり、一心同体と同義なのですわ！ はあぁっ！ また1年間、御二方の活躍を見れるなんて……感無量ですわ！」

「これから1年は、妄想少なめでお願い。そういえば、新メンバーって風紀委員のあの2人よね？」

「伊井野さんと大仏さんですね……エリカの言いたい事もわかりますわ。」

「へ？ 言いたい事？」

「女性を2名追加……コレはもう、会長はそういうつもりなのかと……」

「何がそういうつもりなのよ？」

「エリカには少し前に話しましたね？ 生徒会役員は会長の指名制だと……」

「かれん、貴女まさか……」

「……」  
「……」

（今日は確か……体育祭の申請書類の処理だったわね。）

「新メンバー2名も女性！ コレはもう、会長が食いしん坊でハーレムを目的にしていると思えませんか!!」

「っ!?」とどろ

「いやいや、そんな訳無いでしょ。」

「でも！ 会長だって男……いえ、雄なんですよ!？」

「ちよつ、雄とか言わないの！ こんな事誰かに聞かれたらっ……」ヤギヤギ

「まー!」まき

「……はあ、今は大丈夫みたいだけど、少しは注意しなさいよ。大体、なんでまたそんな思考に到ったのよ……」

「私だって我慢しました！ でも、舞台演説で見たあの会長の雄々しさったら……！ 敵である筈の伊井野さんの顔を立てた上で、選挙に勝つ御姿はさながら……格式を重んじる騎士団長の如き立ち振る舞いでしたわ！」

「聖騎士の次は騎士団長ね……どうでもいいけど、会長本人に聞かれたらどうするのよ？」

「会長本人に……」

俺は四宮さえ居ればハーレムなんぞ要らん！あまり俺を見くびらない事だな。

「……それはそれでアリですわ。」サレ

「なんで!？」

………

「早坂、会長も雄なのよ！優しさでコーティングされた内面には獣が棲んでいるのよ！」ンンンンン

「そうですか……」

（はぁ……あの2人も面倒なタイミングで、かぐや様に話を聞かせて……）

「だから、会長が浮気をしない様に対策を練る必要があるの！」

「……現在フリーの会長さんが誰と何をしようと、浮気にはなりませんけどね。」

「早坂！」

「あー、ハイハイ。」

………

〈次の日〉

「……マッサージ？」

「はい。選挙戦の事もそうですが、普段から会長はワーカーホリック気味な所がありますから、少しでも疲れを取って欲しいと思って……」

「……ふむ。折角の四宮からの申し出だ、頼むでしょう。」

「はい！」

……

「今日は2人共、そのまま生徒会か？」

「うん、先輩達が気を利かせてくれたの。」

「ミコちゃんは、どっちも手を抜かずに頑張りそうってバレてるんだよね。」

「じゃ、一緒に行くか？」

「うん、行く。」

「よろしくね、先輩。」

「なんだよ、先輩って。」

「石上は半年長く生徒会に居たからね。」

「ああ、そういう事か。」

雑談をしている内に生徒会室まで辿り着く。伊井野がドアノブに手を伸ばし、生



徒会室の扉を開くと……

「こんにちは……」カチャッ

「……ちゃんと気持ち良くしてあげますから、横になって下さい。ほら、ベルトも外して……」

「ま、待つんだ四宮！ いや、もう十分気持ち良かったからっ！」

「ええ……」

「……ッー」スチャッ

「……」

「もう……そう言わずに、いつもの御礼と思って受け取って下さい……ほら、ココとか凄く凝ってますよ？」キキス

「いや、手で十分満足したから!!」

「……」

「……」

「……」

「これ以上は気持ち良くて死んじゃうから！」

「

「

「フキフキ」

「……あ、3人共来てたのか。」

「し、神聖な生徒会室で……イヤッ……けだもの！」

「いやっ、違っ……」

「伊井野さん達も一緒にしますか？」  
「」

「えっ!? 初めてでいきなり5ぴつむぐう!?」

「ミコちゃん、私まで同類に見られるからホントやめて。」

「えーと……僕達どこかで時間潰して来ましょうか？」

「違うから！ お前達が考えてる様な事じゃないから！ 余計な気遣いとか要らないから！」

「でも……白銀会長、凄く凝ってる所（意味深）があるんですよ？」  
「」

「肩な！ 変な所じゃなくて肩の話な！」

「まあ、私的には生徒会っていうのは、結構熱いシチュなので否定はしませんけ

ど。」

「いや、大仏庶務の趣味は知らんけど！」

「でもミコちゃんは、むつつりドスケベなのでそういう事は人の居ない所でお願いします。一応私達、風紀委員と兼任してるので……」

「本当の事でも、むつつりドスケベとか言ってるのよ……」

「むつつりドスケベ……本当の事……」ムツツリ

「もおおーっ！ だから違うんだってええっ！」

本日の勝敗、白銀の敗北

新メンバーの誤解を解くのに、大分骨を折った為。

## 生徒会は話したい

## 〈生徒会室〉

「折角新メンバーとして女子が2人も増えたので、女子会をしましょう！」

「女子会……ですか？」

「はい！今日は男子が居なくて仕事もないですし、やっちゃいましょう！」

「女子会……やった事ありませんね。藤原さん、それはどういう事をするんですか

？」

「お菓子食べながらお話しするんですよー！2人は女子会、やった事ありますか？」

「女子会かどうかはわかりませんが……ミコちゃんの家に、同級生の女子数人と集まった事なら何度かあります。」

「いいですねえ！話題はやっぱ恋バナですか？恋バナですよー！今日は私達も恋バナやっちゃいますよー！」

恋バナ！ 文字通り「恋に関するお話（バナシ）」という意味である。今の彼氏や好きな人に関する話題だけでなく、元カレの話や今カレの元カノにまつわる話まで、恋愛に関係する話を広く「恋バナ」と表す場合が多い。しかし！ 現在生徒会室に集まっている4人の秀知院女子全員が過去に異性と付き合った事実は皆無！ 必然的に話題は、今好きな人へと集約される事となる。

「……」

（あんまりこういうの得意じゃないんだけどなー、とりあえず様子見に徹しよう。）

「恋バナ……藤原先輩は好きな人居るんですか？」

「えー、私ですかー？ 実は……います！」

「えっ!? 一体誰ですか!？」

「ふふん、秘密です！ ミコちゃんが好きな人を教えてくれたら、教えてあげますよ！」

「ううん、好きな人……」

「……」

（藤原さんに好きな人？ 嘘ね、そんな素振り今までなかったですし。）

「……」

（藤原先輩、お願いですからミコちゃんの本心を刺激する様な事言わないで……）

「平野〇耀くん。」

「」

（ミコちゃん！ それあんまり言わない方がいいヤツ！）

「ほほう！ 何処のクラスで何年生ですか!？」

「あ、クラスとかじゃなくて、アイドルの……」

「アイドル……」

「……」

（藤原先輩、ちょっと引いてる……）

「……いつも私の事を見てくれて、私の気持ちをわかってくれて、困った時は颯と助けに来てくれる……そんな人がタイプです。」

「そんな都合の良い男性がいるとは、到底思えませんが……」

「います、世界の何処かに必ずいます。」

「ミコちゃん……夢を見るのは良いけど、現実に戻った時辛いのは自分だよ？」

「いるもん……」ㄗㄗ

「現実が見えてない辺り心配になるわね……」

「四宮先輩……ミコちゃんは夢見がちで、想像力が豊かな思い込みの激しい子なだけですから、きっと大丈夫です。」

「何処に大丈夫な要素があるのかしら……」

「私は言いましたよ！ 藤原先輩はどんな人が好きなんですか!？」

「んー、まあ仕方ないですねー。ええと、一見クールなんですけど、凄く優しくて……頭は良いのに結構可愛い所もある……そんな人です。」ㄗㄗㄗ

「……」

「あれ……？ 藤原さん、本当っぽい？ しかも、その特徴に合致する人なんて……」

「……」

「え？ 藤原先輩の好きな人って……」

「ㄗ!？」

「会長しかいないじゃない!」

「ㄗ!？」

（まさか、石上!?!）

無論コレは藤原千花の策略。恋バナをする際に、好きな人はいないなどと場が盛り下がる様な事を言ってしまったえば、他のメンバーの口が重くなるのは必至！故に藤原は小細工を弄する……四宮かぐやに対しては、本人をあたかも異性の様に話す事で好きな人を聞き出す狙い。大仏こばちに対しても、石上と勘違いする様な言い方をし本音を聞き出す狙いである。かぐやと石上、どちらとも取れる様な言い方をしたのは、只々恋バナをしたいという欲求に従った結果である。

「……………」

（まあ私は、石上くんが凄く優しくくて結構可愛い所があるとまでは思っていないですけどね！精々が少し優しくて、ちょこっと可愛い部分がある程度でしょう。）

藤原は小狡かった。

「藤原先輩、イニシャルとか教えて下さい！」

「んー、イニシャルはちょっと……あ、でも名前にYが入ってる事は教えてあげます！」

（セーフ……石上くんもかぐやさんも、名前にYが入ってて助かりました！）



「ㄣ!？」

(M i y u k i !? コレは確定だわ！)

「ㄣ!？」

(Y u !? 嘘、どうしよう……)

恋は盲目とはよく言ったモノである。

〈中庭〉

「態々ごめんね？ ちょっと、大至急2人に聞きたい事がある……」

「まあ、それは大丈夫だが……」

「翼先輩、何かあったんですか？」

「まずは、コレを見て欲しいんだ。」ㄣ

翼先輩は、スマホのトークアプリのトップページを開くと……1番上に表示されたへまきちゃんという部分を指差した。

「四条のアカウントだな。」

「問題は表示されてる文章で……既読を付けない様に、トーク画面は開いていないんです……この言葉になんて返せばいいのかわかんなくて……」

〈ぎゅー〉

「なんだコレは？」

「……コレだけしか送られて来てないんですよ。」

「ふむ……牛乳を買って来て欲しい、とかではないのか？」

「うーん……マキちゃんは普段牛乳飲みませんし、牛乳の打ち間違いだったら直ぐに訂正文が来ると思ってます。」

「確かに……そもそも四条は、彼氏をパシらせたりはしそうにないしな。」

「はい、それでどう返すのが正解かわからなくて困ってたんです……」

「……僕答えて良いですか？」

「石上、わかるのか？」

「教えて、石上君！」

「まあ、合ってるかはわかりませんが……恋人のいる人って友達と居る時にふざ

けてだったり、唆されたりして友達の考えた文章を恋人に送る事があるんですよ。」

「あー……」

「……なるほど。」

「で、そのぎゅーって……多分ですけど、ハグした時の擬音じゃないんですか？」

「……それだー!!」

「つまり、ここでの最適解は……」

〈ぎゅぎゅうっ〉

「コレですよ。」

「さ、早速送ってみるよ!」

---

〈2年教室〉

「……ッ」ピョッ

（ああ、かれんに唆されて翼君に変なメッセージ送っちゃった……こんなのわかる

訳ないのに！)

「はっ！ 来た、来ましたわ眞妃さん！」

「ううっ、もし面倒な女って思われたら……」

「早く見て下さい！」

「うー……」サ。サ。サ。

〈ぎゅぎゅうっ〉

「つ、翼君っ……」ヤン

「きゃー！ アツアツですわね！ バカカップル此処に在りですわ！」ハ。ハ。ハ。

「バカカップル!? アンタがやれて言ったんでしょが！」

……

「……返信来ました！」

「どうだ!?」

「どんな返信ですか!?」

〈わかってくれて嬉しい！ ありがとう！〉

「正解でしたああ!!」

「しゃあああああ!!」

「よっしゃあああ!!」

謎の一体感が生まれていた。

わかりづらい様なので補足。

恋バナで藤原は好きな人の特徴を言っていますが、かぐやと大仏に狙いを絞っての発言です。

かぐやに対しては、かぐや本人を異性の様に話しています。そもそも、藤原はかぐやが会長好きなの知りませんしね。

大仏に対しては、石上に対する態度からある程度察しているので、石上とも取れる様な言い方をしています。

決して会長のつもりで話しているのでは無い訳です。会長の事は、異性としては産業廃棄物だと思ってます。

## 石上優は参加したい

感想ありがとうございます(∇、\*)

そして、かぐや様は告らせたいアニメ三期&OVAおめでとうございます。、(、

▽、)

生徒会選挙で学園中を沸かした10月も終わり、秀知院学園は体育祭に向けて本格的に動き始めていた。そして、此処にも体育祭に向けて行動を開始した男が1人……

「もしかして赤団、アゲてっちゃうー!?!」

「ウェーイー!!!!!!」

「……」

(正直言って調子に乗っていた自覚はある。だけど、2回目だからどうとでもな  
ると思っていたし、応援団の皆と接点が出来るんだから入る以外の選択肢は実質な

かった。だけど……)

「……って事で俺が団長、子安が副団って事で……オケマルー!?」

「オケ丸水産!!」

「」

(相変わらずこのノリきつつ……)

「ええ……」

「……」

(隣に座っている小野寺が、大丈夫かコイツという目でこっちを見ている……)

凡そ1年と半年もの間、陽の者達との関わりが殆どなかった石上は……久しぶりの場の空気に圧倒されていた!

「<sup>シ</sup>!!」

(だがしかし、僕は既に経験済み! なんでもかんでもインスタ映え狙ってるんですよ? LINQでインスタ送って、ストーリーでハイプ狙いの今日はクラブオフなんでしょう? 最近はそういうのが熱盛なんですよね? ちゃんと調べてるんですからね! お見通しなんだからね!!)

かなり必死だった。

「とりまLINEでグループつくろっかー。」

「石上、何してんの？ さっさと来なよ。」

「了解道中あざまる水産！」どきん

「どしたんお前。」

「……あー！ やっぱりそうだ！ 夏休みに神社で会った子だよね？」

「つ…子安副団長……はい、そうです。」

「あの時はぶつかってごめんねー！」

「いえ、気にしないで下さい。」

「なにになー？ つばめちゃん何かあったの？」

「なんでもなーい！」

「えー、気になるう！」

つばめ先輩は、友達とふざけながら笑っている。多分、僕とつばめ先輩の人生が交わる事はもう無い。応援団の副団長と平団員、先輩と後輩……それが、今回の僕とつばめ先輩の関係性だ。



「……」

「……石上？」

「ん、ああ悪い。じゃあ、はい。」ワルワル

「……よし！ 全員グループに入ったな？ 練習日の連絡事項とかあれば知らせるって事で……オケマルウ？」

「イエーイー!!」

「それじゃ、各自本番までに女子は男子の、男子は女子の制服用意しとけよ？」

「ウェーイー!!」

「」

（やっべ、地獄のイベントあんの忘れてた……）

……

「……」

（あー……どうしよう、そりゃ前の時と違って結構仲が良い女子は多いけど制服となると……）

多感な高校生、幾ら仲が良いとはいえそれとこれとは話は別……という可能性も

十分ある。石上自身も多感なお年頃、同級生から借りるのは流石に躊躇する！ 結果……

「うーん……」

（貸してくれそうなのは……マキ先輩、桃先輩、藤原先輩、四宮先輩だけど、マキ先輩はなんか……翼先輩に申し訳ないし、桃先輩は……）

……は？ お前何言ってるの？

（最終的には貸してくれそうではあるけど、凄い目で見られそうだし、藤原先輩は……マウント取って来そうで嫌だな。やっぱり借りるなら……）

「四宮先輩しかないかなあ……」

「私なんですか？」

「うわっ!? あ、四宮先輩……」

「何か悩み事ですか？」

「悩みという程ではないんですけど……」

……

「なるほど、女子の制服ね……私のでよかったですよ？」

「頼んでてなんですけど……男子に貸すなんて、抵抗感ありません？」

「全く無いと言えば嘘になりますけど……石上君なら別に構わないわよ。」

「四宮先輩……まじ叩つす。」

「……それ、どういう意味ですか？」

「僕も未だにわかりません……」

「……石上君は仲の良い女子が多いんですから、貸してくれる人くらいはいるんじゃないかしら？ 例えば……伊井野さんや大仏さんとか。」

「伊井野は……なんか被害妄想発言されそうなのでパスしたいです。」

「確かにそうね、じゃあ大仏さんは？」

「えーと、大仏は……ちょっと、なんというか……借り難いと言いますか……」

（あら？ もしかしてコレは……ふふふ、石上君も案外可愛い所あるじゃない。）

「仕方がありませんね、貸してあげますよ。」

「あ、ありがとうございます！」

「折角ですから、お化粧もしましょうか。」  
さや

……

「なんでまた悪戯なんてするんですか。」

「んふふっ、ごめんなさい。ちゃんと直しますから……ぷふっ。」

「笑わないで下さいよー。」

「……」ぐー

（……いや、仲が良いのは結構だけど距離近くない？ 石上、四宮狙いとかじゃないよな？）

### 〈中庭〉

チュンチュンと小鳥の囀りを聞きながら、僕と会長は芝生の上で寝転んでいた。「……で、今度は何をしたんですか？ 体育倉庫に閉じ込められて一線を越えそうになったとか、意中の人に背負い投げされたとか、そんな漫画みたいな事はないでしょうけど。」

「……ハハハ、マサカマサカ。」

「じゃ、どうしたんですか？」

「いや、今回は相談じゃなくて……雑談？　みたいな感じだと思ってくれ。」

「雑談ですか……例えば？」

「そうだな……今の生徒会は加入メンバーも含めて女子が4人に増えただろう？　石上も年頃だ、その中に好きな人でも居ないのかと思ってな。」

「ははは、年頃って……父親みたいな事言わないで下さいよ。」

「偶にはこんな話もいいだろう？　で、どうなんだ？　誰か居ないのか？」

「うーん、そうですね……」

「……藤原とかどうだ？　ピアノも出来て、マルチリンガル系女子だぞ？　普段からよく2人でわちゃわちゃやってるから、付き合っても上手く行くんじゃないか？」

白銀は、石上の意識をかぐやから逸らす事に必死だった。

「……」

石上は、不動産屋で執拗に事故物件を勧められている様な錯覚に陥った。

「会長……心配しなくても、僕は四宮先輩の事なんて狙ってませんよ。」

「べ、別に俺はそんな心配はしてないぞ!？」

「はは、そういう事にしときましようか。あと、藤原先輩はお断りします。」

藤原はフられた。

「相変わらず藤原には毅然としているな……来月には奉心祭もある、意中の異性を誘うには絶好の機会だぞ？ 文化祭マジックというモノもあるらしいからな。」

「ははは、なんですか文化祭マジックって……っ!？」

（ん？ ちょっと待て、なんか忘れてる気が……）

んー知り合いつていうか、付き合ってる。

試しに付き合ってみる？ って言われたから……

まあいいかなって。

「あああああっ！！？！？」

「うおっ!?! いきなりどうした石上!?! 何かマズイ事でもあったのか!?!」

「はい！ とんでもなくマズイ事に……気付いて……マズイ？」

（あれ？ 何で僕はそんな事を思ったんだ？）

「……石上？」

「……何がマズイんでしょう？」

「いや、知らんけど……」

「……ん？」

（団長がドルオタになっちゃうから？……でも別に、そこまでマズイかって聞かれるとそうでもないと思うし……あれ？）

## 石上優は確かめたい

感想ありがとうございます（・∀・）

## 〈生徒会室〉

「何これ、少女漫画？」

机の上には数冊の本が並べられていた。僕はパラパラとページを捲る眼鏡の少女に訊ねる。

「此処に来る途中に没収したの。ミコちゃんも一緒だったんだけど、没収品リストの書類を風紀委員室まで取りに行ってる。」

「へー……それ、面白い？」

「読む？」

つい先日、〈今日はあまくちで〉という少女漫画で盛り上がった生徒会である。未



だ少女漫画に対する興味は継続中……石上は二つ返事で差し出された漫画を受け取る。

「まあでも〈今日あま〉レベルの漫画はそうは無いだろうけど……」

ネタバレこそしないで済んだ、先日の生徒会〈今日あま〉旋風だが……

まあ、僕コレ読むの2回目なので、どうなるかわかってるんですよ……

ほらほら、前はこのシーンでうるっと来たんですよ。今思えばお約束過ぎるっていうか……

に……2回目なのにつ、悔しいいっ……

結局ダメだった。

「……」ハァハァ

「お疲れー。」

「あ、白銀会長、お疲れ様です。」

「おう……石上は漫画読んでるのか？」

「はい、ミコちゃんが没収した少女漫画を。」

「ほう、少女漫画か……また随分と集中して読んでるみたいだな。」

「……」ハ・ハ・ハ

いいですか、主人公ちゃん！ 気になる人が他の子とイチャイチャしてる所を想像して見て下さい！

「……」ハ・ハ

こぼち……

風野先輩……

「……」ハ・ハ、ギョ

もしそれでイライラしたり、嫌な気持ちになったらその子の事が好きって事なんですよ！！

「はあっ!？」

「え、何？」

「んんっ!？」

「いや、なんだよ。」

「あ、すいません会長。来てたんですね……」

「ああ、随分集中していたみたいだな……そんなに面白いのか？」

「えっ、ええ、そうですね……」お

「石上、どうしたの？」

「……なんでもないよ。」

〈中庭〉

「石上君から話があるなんて珍しいね。」

「すいません、ちょっと翼先輩に聞きたい事がありました……」

「全然いいよ、いつもは僕が相談に乗ってもらってるんだからさ……それで、聞きたい事って？」

「えーと、翼先輩はマキ先輩と付き合い出してそろそろ半年くらいですよね？」

「うん、来週で半年だね。」

「マキ先輩を女性として意識したり、好きだと自覚するのってどういう時ですか？」

「

「ええっ!? うーん、そうだなあ……マキちゃんは女友達と一緒に居る時は結構ズバ言ったりしてるのに、僕と一緒に居る時は借りてきた猫みたいに大人しくなったり、何気無い仕草が可愛いかったり、一緒に居て笑った顔を見た時に……ずっと傍で笑ってて欲しいなって思った時かな?」

「ずっと傍で……」

「石上君はそういう子、いないの? ずっと一緒に居たいとか、自分に笑い掛けて欲しいとか、この人だけは守りたいっていう子がさ。」

「……そう、ですね……」

ふふ、ありがと石上。

「僕は……」

守ってくれて、ありがとね。

「……どう、なんですかね……」

「わからない時は難しく考えずに、自分の気持ちを吐き出してみたら? 僕で良かったら聞くよ?」

「自分の気持ちを……僕、大分前に振られた事があるんですよ。その人を振り向か

せる為に勉強やスポーツを頑張って、でも結局ダメで……」

「そうなんだ……」

「はい……で、その人は泣きながら謝るんですよ。ごめんなさい、優君は悪くない、私が臆病だからって……何度も何度も」

「……」

「僕が好きになった所为で……結果的にその人を泣かせる事になってしまった訳じゃないですか。だから……」

「違う。」

「えっ?」

「僕はその時の詳しい状況はわからないけどさ、石上君が精一杯頑張って……少しでも好きになって貰いたくて色々やってたんでしょ? マキちゃんと付き合う様になったからわかる事だけど……人を好きになって、その人に自分を好きになって貰う為の努力をし続けるって……とても大変な事だと思うんだ。だって頑張っても相手が自分を好きになってくれる保証がない、不安で怖くて本当にこのままでいいのかもわからない状況で頑張る続ける……きつと凄く大変な筈だよ。その子も石上君

の頑張りをちゃんとわかって……でも気持ちに應える事が出来ない事を凄く……それこそ、泣く程悔やんでいたって事だと思うんだ。」

「翼先輩……」

「だから……石上君、好きになった所為で泣かせたとか思わなくていいんだよ。いや、絶対に思っちゃダメだ！」

「……」

「それにね、今石上君が気にしている子は……このまま君が何もしなければ、違う男の所に行ってしまうかもしれないんだよ？」

「……」

「石上君、君はそれで良いの？ 本当に大事な人なら……絶対に自分から離れちゃダメだ、気持ちを誤魔化して好きになる事を怖がっちゃダメだ。」

「好きになる事を……」

（そうか……僕は怖かったのか……あの日、つばめ先輩にフられて……泣かせてしまつて……人を好きになる事を、心の何処かで……）

「……」

「翼先輩……色々話聞いてくれて、ありがとうございます。」

「ううん、気にしないで。その代わり今度話す時は、マキちゃんとの惚気話を大量に用意しておくからね。」

「ははは、それは勘弁っす。」

場を和ませる為に冗談を言ってくれた翼先輩を残し、僕はその場を去った。

〈校庭〉

〈フレーフレー赤組！〉

〈フレッフレッツ赤組、フレッフレッツ赤組！〉

「あ、石上……」

グラウンドの一角に陣取った応援団の中に、汗を流しながら練習に励む石上を見つけた。

「……」

（頑張ってるなあ、でも石上は応援団とかするタイプには見えないのに……）  
〈心を燃やす、情熱の赤！〉

「……よし！一旦休憩するぞー！各自水分補給キッチリな！」

「うーす。」

「……」

（何かあるのかな……？）

「やっほ！大仏ちゃん。」

「つばめ先輩……」

「中等部以来だね？アレからどう？私も色々話は聞いてるけど……」

「そう、ですね。最近は学校も楽しいです。」

「そかそか、卒業した後も心配だったから安心したよー。」

辛い時は頼ってよ、とりあえず味方してあげるからさ。

そう言ってくれたつばめ先輩が卒業してしまっ……コレでまた、味方はミコ

ちゃん1人しか居ないんだなと思ってた。でも……

うるせえ、ばーか。



私を……助けてくれる人が現れた。

「……助けてくれた人がいるんです。何の得にもならないのに、守ってくれた人が……」

「……それって石上君？」

「えっ!? なんで知って……」

「いやー、結構話を聞くんだよね……去年中等部で起きた事件の事とか、それに付随した噂話の事とか……ね、団長？」

「ん? ああ、事件の話は俺も知ってるぞ。」

「そうですか……あの、石上は生徒会に入ってるのに……風紀委員の仕事も手伝ってくれて、結構無理して頑張り過ぎちゃう所があると思うので、その……」

「うん、大丈夫。ちゃんと見とくから。」

「団員が無理しない様に気をつけるのは団長の仕事だ、安心してくれ。」  
サッ

「はい……お願いします。」

……

「……」  
グッ

（団長、ちょっと大仏と距離近過ぎません？ 何肩ポンとかしてるんですか？ この頃から既に狙ってたんですか？ 言っておきますけど、僕はもう遠慮も誤魔化しも怖がりもしませんからね。）

## 秀知院体育祭！

感想ありがとうございます（ω。）

---

体育祭当日……個人競技とクラス対抗戦、部活・委員会対抗戦で構成された秀知院学園体育祭。全校生徒約600人が赤組と白組に分かれて雌雄を決する一大イベントの開催である！

〈100m走〉

「おー、やっぱ石上速いねー。」

「うん、凄いね……他の走者は部活やってる人もいたのに1位だし。」

「……惚れ直した？」ギョッ

「も、もうっ、小野寺さん！小学生じゃないんだからっ……！」

「あはは、そりゃそうだよねー。」

「……ッー」と。ヨレ。ヨレ

(会長、頑張ってー!……はい、はい!)

……

「会長、流石の1位ですね。」

「そういう石上もだろう? 生徒会男子で出場競技1位総なめでも目指すか?」

「ははは、それもいいですね。会長はあと何に出るんですたっけ?」

「残りは確か……午後の棒引きと部活・委員会対抗リレーだな。」

「僕は借り物競争なので、1位取れるかは運に左右されそうです。」

「そういえば、四宮も借り物競争出るって言ってたな……」タタ

「石上君! 二人三脚の相手が欠場してて、代わりに出てくれない?」

「つ:副団長? 僕は1年だけど良いんですか?」

「うん! 実行委員と先生には許可取ってるからお願い!」

「わ、わかりました……会長、ちょっと行って来ます。」

「おう、頑張れよ。」

……

「良く来てくれたな石上!」タタ

「どうも……」

（相変わらず筋肉の圧が凄い……）

「風野も石上君もがんばれー！」

〈借り物競争〉

「……よく少女漫画でさー、借り物競争で好きな人って書いてる紙が入ってたりするじゃん？」

「麗ちゃんそれ……実際にあったら大問題だし、風紀委員として取り締まり対象だからね。」

「まあ、ミコちゃんの言う通り問題だよ。実行委員がちゃんと確認もしてる筈だし。」  
タタタッ

「大仏！来てくれ！」

「えっ、私!？」

「ああ、大仏以外じゃダメなんだ！頼む!!」

「い、石上がそこまで言うなら……」

「よし、じゃあ行くぞ！」  
ギョッ

「あぁっ、石上もうちょっとゆっくりっ……………!」

「

」

「はい、お題確認しました。」

「よし、1位ゲット!」

「はぁっ…はぁっ……………い、石上…………お題ってなんだったの?」

「え? 眼鏡女子。」

「…………」トズズズ

「えっ、大仏? ちょっ、なんで脇腹を…………」

「紛らわしいでしょ!」トズズズ

「…………なんかゴメン。」

……………

「まして1位か、やるな石上。」

「あはは、お題に恵まれましたからね。」タタタ

「石上君、一緒に来て!」

「四宮っ!？」

「あ、はい。」タタッ

「……………」

（四宮が石上を……何故俺じゃないんだ!? 確かに石上は、足が速いが俺だって負けてない筈……態々石上を選ぶなんて、お題は一体……でもココで気になっている事がバレたらっ……）

お可愛いこと……

「ぐうっ……………」タタッ

「ふー、勝てて良かったっす。」

「い、石上……お題は何だったんだ?」

「後輩でした。」

「……………なるほどな。」

（深く考え過ぎかーっ! 良かった……）

〈応援合戦〉

「かぐやさん、午後は応援合戦からみたいですわねー。赤組の応援団は男子は女子の、

女子は男子の制服を着てやるらしいですけど、石上くんは誰に借りたんですかねー？」

「それなら私が貸してあげましたよ。」

「え!？」

「へー、かぐやさんが……でも石上くんだったら、同級生から借りる当てくらいありそうですけどね。」

「ふふ、石上君にも色々あるみたいよ?」

「えっ、かぐやさん、なんですかそれ!？」

「秘密です。」

「えー!? 教えて下さいよー。」

「……?」

……

「会計君、ちょーっとツラよろしいかしら?」

「……なんか面倒な気配がするので嫌です。」

「いーから!」



「ええ……僕これから応援合戦あるんで、手短かに頼みますよ……」

「ちよつと質問するだけだから……その制服がかぐや様から借りた物って本当？」

「ええ、そうですけど……」

「なるほど、なるほどね……とりあえず、抱きしめても？」ゼッ

「先輩……四宮先輩フリークも大概にした方がいいですよ。」

「お願い！ きつとこんなチャンスもう来ないと思うの！ 少しで良いから私の意を汲んで!？」

「ヤベェ先輩に絡まれた僕の逃げ出したい気持ちも汲んで下さい。」

「じゃあせめて写真だけでも！ 体しか撮らないから!! 顔には全然興味ないから!!!」

「言い方癪だなこの人。」

「こんな所にいましたのね、エリカ。」

「あれ、かれん？」

「あら、石上会計……ふふ、その御姿大変お似合いですわよ。」

「女装を似合ってるって言われても嬉しくないっすよ……」

「あらあら、うふふ……別に照れなくてもよろしいんですよ?」

「……次女装ネタでイジったら、会長達の前でナマモノ音読しますよ。」

「」

〈応援団の皆さんは入場門に集合して下さい。〉

「あ、じゃあ僕はコレで。」*タタタ*

「……ねえかれん、ナマモノって何?」

「良いですか、エリカ……世の中、知らない方が良い事もありますのよ?」

「ええー、気になる……」

〈団体対抗リレー〉

「石上、ちょっと来て!」

「え、小野寺? どうしたんだよ。」

「いーから、来て。」*グダグダ*

……

「……いやーまいった、まいった。スカートって忘れて柵飛び越えようとしたら、思いつきり引っかけって足首やっちまってよ。」

「アホだ……」

「あほがいる……」

「悪いけど石上、俺の代わりに団体対抗リレー出てくれないか？ アンカーなんだけど、走れそうにないからさ。」

「僕で良いんですか？」

「おう、1年の100m走見たぞ。石上、かなり速いだろ？ 陸上部からも勧誘されたって聞いたぞ。」

「まあ……わかりました。団長の無念を晴らして見せます！」

「石上、そこまで気負わなくてもいいから。」

「TG部さん、立ち止まらないで下さい！」

「またなんかやってんな、TG部……」

「TG部さん走って下さい！」

「ま、TG部がこんだけ遅れたなら団長でも負けるだろうし、石上もあんま強い張り過ぎんなよ？」

「……いや、勝つよ。」

……

「……………」

（前の人生は失敗と敗北だらけだった……でも、今回の僕は違う。少しくらい勝ちに貪欲になってもいい筈だ。それに……負けた事が只々悔しかったから……今度は負けたくない！）

（少し遅れて赤組アンカーもバトンを受け取りました！果たして、TG部が作った遅れを挽回する事が出来るのか!?）

「『名指し!?』『やべー』」

「行け、石上ー!」

「石上くん頑張れー!」

「石上君も中々速いわね。」

「速い……石上コレ、イケんじゃない?」

「うん、頑張れ石上!」

「……………」

（あと少し……走り抜けろ!!）

〈団体対抗リレーを制したのは……赤組ー!!〉

「っし！」ツッ

「石上君、スゴイスゴイ!!」

「流石は俺が見込んだ男だな！」

「……団長はもうちょい自分の不注意を反省してよー。」

「ハッハッハッ！ まあ、勝ったんだからいいじゃないか！」

「おい、みんなー団長反省してないぞー。」

「ハッハッハッハッ!!」

今日の勝敗、赤組の勝利。

## 伊井野ミコは癒されたい

感想ありがとうございます(。ω。)

地の文はどれくらいの割合が普通なのか模索中です……書いててわかんなくなってきた(。▽。)

色々気をつけながら更新してみます。(ゝ・▽・ゝ)

---

## 〈生徒会室〉

〈ああ……君は偉いよ〉〈とても頑張ってる〉〈良い子だね〉〈大丈夫……僕がついてるから〉〈僕は君の味方だよ〉

□

□

体育祭が終わり数日が経過した。当時の熱気も徐々に霧散していったある日の午

後……生徒会室の机でイヤホンをし、勉強に打ち込む1人の少女と扉の前で動けなくなっている2人の少年少女……時間はこの状況が出来上がる20分前まで遡る。

……

# 〈生徒会室〉

「お疲れ様です。」カヂヤッ

「……あれ？ ミコちゃん、先輩達居ないね？」

無人の生徒会室を見渡した大仏は、背後に佇む伊井野へと振り返りながら問い掛ける。

「こぼちゃん、確か2年は今日学年集会だよ？」

「あ、そっか。そういえば言ってたね。」

「私、先輩達来るまで勉強してるね。」

「うん、私の事は気にしないで。」

「……」カウカウ

伊井野は勉強道具を取り出すと、真剣な表情でノートと向き合っている。

「……」

（ミコちゃんは真面目だなー。少ない時間でも暇を見つけては勉強してるし、一位の重圧とかストレスも凄いんだろうなあ……）

「ううん……ゴメンこぼちゃん、集中したいからイヤホンしていい？」

「うん、いいよ……私はちよっとお手洗い行って来るね。」

「うん。」

……

「……ふう。」

「……」アアア

「……！」

（……あ、石上だ。）

トイレから出ると、生徒会室へと向かう石上が見えた。石上の背中を追いつけて話し掛ける。

「石上、今から生徒会？」

「ああ、大仏だけか？」

「ミコちゃんは生徒会室に居るよ。先輩達が居ないから勉強してる。」



「へえ、会長達居ないの？」

「学年集会だって。」

「……学年集会？」

その言葉に、ドアノブを回そうとした石上の手が止まった……

「石上、開けないの？」

「なんか……嫌な予感がするんだよ。」

（……なんだ？ 何かを忘れている様な気がする……思い出せ、何かがあった筈だ……）

「……とりあえず、入ろうよ？」

固まり続ける石上に痺れを切らした私は、もう片方のドアを開いてしまった。

「大仏、待っ……!!」

……

「ああ……君は偉いよ」へとても頑張ってる」へ良い子だね」へ大丈夫……僕がついてるから」へ僕は君の味方だよ」

「」

「

（あ、嫌な予感の正体はコレか……）

石上優……死ぬ寸前に縋るCDと二度目の邂逅である。

「

（ミコちゃん!? 何とんでもないCD聞してるの!?)

〈辛いよね、でも大丈夫〉

「

（辛いのは友達のかなな所を見ちゃったこっちだし、全然大丈夫じゃないよ!?)

〈泣きたい時には泣いていいんだよ?〉

「

（友達のとんでもない秘密を知った私が泣きたいよ!……って、そういえば石上  
は……）

「……」

「……」

黙って生徒会室から出ようとしていた所を、大仏に腕を掴まれて阻止される。

「ちょっと!? 大仏、離してくれ!」

「なんで出て行こうとしてるの!？」

「いや、こういうのは同性の方が言い易いだろうし……」

「私が言うの!？」

「だって、僕は言いたくないし……」

「私も嫌なだけど……」

「まだ女友達に言われた方がダメージは少ないと思うんだ。」

「私には荷が重いよ……」

「いや、でも急がないと……」

大仏と小声で言い争う僕の背後から、ガチャリとドアノブを回す音が僅かに聞こえた。

「こんにちはー!」  
「ガッシャッ」

「あー! あー! あー!」

「あ……藤原先輩! あれ? こばちゃんと石上も居たの?」  
「ど。」

「う、うん。勉強の邪魔しちゃ悪いと思って。」

「もう、気を遣わなくてもいいのに。」

「……」

（いや、かなり氣い遣ったよ……）

「あのー……さっき入って来た時、変な声しませんでした？」

「き、気の所為じゃないですか？」

「そうかなあ……あれ、ミコちゃんが音楽聴いてるー。何聴いてるの？」

「軽いヒーリングミュージックですよ。」

死ぬ寸前に縋るヘビーミュージックである。

「……！」

（もうダメだ、もうすぐ会長と四宮先輩も来てしまう……もう僕に出来るのは……

！）

「そうなんだー、ごめんね勉強の邪魔してー。」

「いえ、気にしないで下さい。」

藤原への返答を済ませた伊井野は再度、イヤホンを耳に差し込み勉強を再開する。

「ミコちゃん、待っ……んぐっ!？」

（い、石上!? なんでっ!? このままじゃ、ミコちゃんが闇が深い痛い子扱いにっ!）  
 伊井野の身を案じる大仏を僕は背後から抑える。

「堪えてくれ、大仏! ダメージを最小にするにはもうこれしかないんだ!」  
 ンギン

（こうなったら、会長と四宮先輩が来る前に全てを終わらせるしかっ……!）

「んーっ!」ンギン

（耳元で囁かないでー!）

伊井野のスマホから発せられた再生音のピツという音が、その時の僕には……どんな騒音よりも響いて聞こえた。

〈君は本当に可愛いね〉〈大丈夫、自信持って〉〈世界一可愛いよ〉

「……」

「……」

「おおうっ……」ビギン

「」

……

「皆さん、遅くなりました。」

「皆揃ってるな、それじゃあ早速……ん？ 伊井野はどうかしたのか？」

「」

「気にしないであげて下さい。ミコちゃんは……今ちょっと自分を見失ってるだけなので……」

「何があった!？」

「何かあったんですか？」

「……伊井野の分の業務は僕がやるので、少しの間放っておいてあげて下さい。」

「ううむ、まあ石上が言うなら……」

「仕方ありませんね。」

「……」

（コレはイジっていいヤツなんですかねー？）

……

「では、今日の業務はここまでにしよう。」

「そうですね、お疲れ様でした。」

「お疲れ様ー!」

「お疲れーっす。」

「お疲れ様です。」

「」

「結局、伊井野は元に戻っていないんだが……」

「本当にどうしたのかしら?」

「ううん……まあ、伊井野の内面に深く関わる事なので……」

「ミコちゃんが正気に戻るまで私達が付いてますから、会長達は先に帰って大丈夫ですよ。」

「そうか……まあ同学年にしかわからない事もあるか……」

「藤原さんは最初から居ましたよね? 何か知ってるんじゃないですか?」

「……ミコちゃんの名誉の為に言えません!」

「名誉って……」

「……仕方あるまい。四宮、藤原書記、俺達は先に帰るぞ。」

「そうですね、わかりました。それじゃ石上君、戸締りお願いね?」

「それじゃまた明日ー。」

「はい、お疲れさんでした。」

「お疲れ様です。」

……

生徒会室を出て行く先輩達を見送り、10分が過ぎた頃……

「……ハッ!?……あれ、私？」

「ミコちゃん……」

「やっと元に戻ったか……」

「……っ!?!!?!? あ、夢か……」

「ミコちゃん……現実逃避したい気持ちはわかるけど……」

「シヨックなのはわかるけど現実だぞ。」

「はあっ!? シヨックな訳ないでしょ!」 出

石上の言葉に立ち上がり抗議する伊井野だが……

「でも自立出来なくなってる!」

精神的ダメージは甚大であった。



「まあ、落ち込むのもわかるしな……もう帰って寝て忘れろよ。2人共送って行くから。」

「ミコちゃん、帰ろ？」

「うん……藤原先輩何か言ってた？」

「……特に何も言ってなかったよ。」

「……」

（顔は引き攣ってたけどな……）

本日の勝敗、1年組の敗北

伊井野のやらかしに巻き込まれた為。

## 合コン遊戯に興じたい

## 〈生徒会室〉

「みんなで合コンゲームやりましょう！」

体育祭から早1週間が経ち、通常業務へと戻った生徒会……突如藤原の発言により開催される事となった10円玉ゲーム。YESなら表を、NOなら裏を出し出題者の質問に答える匿名式アンケートゲームである。

「嘘はダメですからね!? 少しでも怪しいと感じたら嘘発見機で晒し上げますからね!!」

「藤原さん、何もそこまでしなくても……」

「合コンにポリグラフ持って来る人とか、次から絶対呼ばれませんよ。」

「あ、あれ? 合コンゲームってコレ使わないんですか?」

「ミコちゃんそれ、コックリさん呼ぶ奴……」

「伊井野の中の合コンのイメージどうなってるの?」

「じゃあ行きますよー？ 私に恋愛感情を持っている人は表、持っていない人は裏を出して下さい！」

「……」

（藤原もまた面倒な質問を……）

「どうして藤原先輩は、自分から傷付きに行くんですか？」

「どういう意味ですか!? いいから出して下さい！ 3、2、1、ハイ！」

（ふうんだ、口ではなんとでも言えますからね！ 本当は私に普段からドキドキしたりしているんでしょうっ!?）

裏×6

「……」  
ぎ

（良かった、会長は藤原さんに恋愛感情は無いのね……まあ知ってましたけど。）  
「……ミコちゃん、嘘発見機の準備して。」

「は、はい！」

「藤原先輩、往生際が悪いですよ。」

「それはこっちのセリフです！」

「ふ、藤原先輩、準備出来ました！」

「では、会長から嘘発見機にかけます！」

「はあ、さっさと終わらせてくれよ……」

（此処で反応したらマズイ、何かなんでも平静を保たなくては！）

「いいえで答えて下さいね？……会長は、私に恋愛感情を持っていますか？」

「いいえ。」

（親父の顔、親父の顔……）

〈……〉↑嘘発見機無反応

「……」サ

「」

「ぶふっ……」

藤原先輩の、ウソでしょ……とでも言いたげな表情に思わず吹き出した。

「石上くん、何笑ってるんですか！」

「いえ、グクッ……すいません。」サ

「もー！次は石上くんですよ！」

「はいはい。」

「いいえで答えて下さい……石上くんは、私に恋愛感情を持っていますか!？」

「いいえ。」

〈……〉↑嘘発見機無反応

「……」サ

(はあ、良かった……石上は藤原先輩を好きじゃないんだ。)

「もおおおお！　なんでウチの男子共は、こんなにも恋愛に淡泊なんですか!？　特に会長は、私が普段どれだけお世話してるとっ……」

「うぐっ……なんかスマン。」

「別に恋愛に淡泊な訳じゃなくて、単純に藤原先輩が恋愛対象外なだけですよ。」い

い

「そっちの方が腹立つんですけど!？」

「次は僕が質問しますね……現在、好きな人がいる人は表を、いない人は裏をお願いします。」

「「「っ!?!?」」」

(い、石上!? なんつう質問を……)

(石上君!? 貴方なんて質問を……)

(どうしよう……嘘ついて裏を出してもいいけど、嘘発見機を使われたら困るし、ううん……)

「じゃー、行きますよー?」ニギ

表×4

裏×2

「えっ、多いつ!?」

「だれだれ!? 誰が恋してるんですか!?!」

「藤原先輩、特定は禁止ですよ。」

「……」

(こ、この中に恋をしている人間が……)

「……」

(4人……伊井野さんは、この前の女子会で堂々とアイドル好きを公言していましたし、藤原さんも態々女子会で小細工を弄した事実から好きな人があるとは考え

づらい……つまり、表を出したのは藤原さんと伊井野さん以外の全員？」

「……」

（一体誰だ？ 藤原のそういう話は聞かないから、裏を出した2人の内1人はおそらく藤原だろうが、残りの1人は……）

情報量の差……女子会に参加したかぐやは、伊井野の歪んだ恋愛感を直接聞く事が出来た為、裏を出した人間を特定可能。

対する白銀は当然ながら、女子会は不参加。それどころか、その様な催しが開かれていた事すら知らない。狙った訳ではないが、此処に来てかぐやは情報量の差で一步リードする事となった。

「……」

（僕以外に3人が表を出した……会長と四宮先輩は確定で、藤原先輩は除外……伊井野が大仏のどちらかが、今誰かに恋をしている……？）

「じゃあ次はミコちゃん、行きましょー！」

「えっ、私ですか……ええと、私……普段から友達に色々ダメ出しされる事が多いんですけど……もしかしたら、生徒会でも全然役に立ってない役立たずなんじゃな

いですか?」

不安そうな表情を浮かべ、周りを見渡しながら洩らした伊井野の発言に生徒会室の空気が凍る。

「質問内容が暗いな!」

「さっきまでの空気が吹き飛んだぞ……」

「すいません……じゃあ質問を変えます、私を生徒会に必要な人間だと思っている人は表、要らないと思うてる人は裏をお願いします……」

「だから暗いつてっ!!」

「それ何の投票!」

「……」

(またミコちゃんはブツとんだ事を……)

「じゃあ行きますよー? ミコちゃん必要だと思ってる人は……」

表×6

「6人! ミコちゃんはちゃんと生徒会に必要な人材ですよ!」

「えっ、本当ですか?」



「一体どんなダメ出しをされたら、そこまで病むのか気になるな。」

「まあ、小野寺さんとか私が結構ズバズバ言ってるから……」

「伊井野監査は、普段から真面目に取り組んでいるしな。」

「そうですね、大仏さんと風紀委員会を兼任していて良く頑張っていますし。」

「そうですよ！ ミコちゃんはもっと自信持って下さい！ ミコちゃんは可愛い！  
頑張ってる！ 頼りになります！」

（……特殊性癖持ちな部分は、ちょっとアレですけど！）

「……ッ！」 ゼッゼッ、ツツツ

「伊井野はマジで1人で行動するのは控えろよ、チョロいにも程があるから。」

「ミコちゃんが終わったから、次は私ですね……付き合うなら巨乳の方がいい、Y  
ESなら表、NOなら裏でお願いします。」

「えーっ！……？」

「大仏庶務、なんて質問を出してるんだ!？」

「なんで、男子を狙い撃ちすんの!？」

「女子は全員、表を出して下さいね。」

「特定禁止だっつってんのに、特定する気満々じゃねえか!!」

「まあまあ、ちょっとした茶目っ気ですよ。」

「いや大仏、その質問エグいって……」

「因みに、どちらを出そうと嘘発見機は使いますから正直に答えた方が良いでしょう。」

「悪魔かお前は。」

「……」

（石上は胸の大きさを女性を選ぶなんて事はないと思うけど、念の為確認だけしておこう。）

普段から、身長に見合っていないスタイルを有する伊井野と一緒にいる大仏である。石上の人間性を信じている一方、男の下心的存在を危惧する板挟みの心理状態であった。

「さあさあ〜！ 会長も石上くんも観念して下さい。」 いざいざ

「会長？ 早くお出しになって下さい。」

（まさか、胸の大きさにしか目がいかない卑劣漢ではないと信じていますが……）

「石上もほら、早く出して。」

クイツと眼鏡を押さえる大仏の言葉に後退る。

「か、会長からどうぞっ……」

「い、いや、石上から行けよ！ 俺は後でいいからっ……！！」

「「さあ、早く。」」

「「あ、ああああ……」」

本日の勝敗、白銀と石上の敗北

女子の多数派圧力の怖さを思い知った為。

## 生徒会は勉強したい

## 〈生徒会室〉

「……今日から暫く、生徒会も試験休みを取ろうと思う。」

11月もあと数日で終わろうとしていたある日の生徒会、白銀御行の発言に室内の視線が集まった。

「あら？ 今まででは試験前でも、通常営業でしたのに……」

「まあ生徒会も人数が増えたからな……多少の休みを取っても後で挽回出来るくらいの余裕はある。各自、試験勉強に集中してくれ。」

「会長……ちゃんと皆の事考えてくれてるんですねー！」

「ハハハ、当然だろう。」

嘘である。この男、他人に対する配慮のつもりは一切ない！何を隠そうこの男、四宮かぐやが近くに居るとチラチラと見てしまい勉強に集中出来ない。二学期に入り、生徒会長選挙や体育倉庫イベントに始まり、最近ではスマホを入手したかぐや

とメッセージのやり取りをする様になり、心は乱される一方。一位維持の為にも、テスト期間中は想い人と距離を置くという苦肉の策を弄する白銀であった。

「確かにそうですね、私達2年は進路にも影響する大事な試験ですし……家で静かに勉強した方が集中出来ますしね。」

嘘である。この女、家では全く勉強に集中出来ていない。つい先日、スマホを手し手軽にメッセージのやり取りが可能になったかぐやである。勉強していてもスマホが気になり、チラチラと見てしまいメッセージが来たら来たでテンション爆上げ状態となり、勉強そっちのけで返信内容を考える為、家では一切集中出来ていなかった。

「……こういう時期だからこそ、追い詰められて悩みを抱える人も多いと思いますけど、皆さんが言うなら私は従います。」

嘘である。この女、心の底からやったあ！と思っている。伊井野もまた、白銀と同様学年一位の重圧に耐える人間である。最近では、小等部からの付き合いである大仏こばちだけでなく、中等部からの友人である小野寺麗や大友京子とテスト期間中に集まって勉強する機会も出来ていた。友人と集まって和気藹々と楽しく勉強

する時間は勿論大切だが、1人でする勉強時間の確保は伊井野にとっても有難い話であった。

「……」

（悩みっていうか、闇を抱えてる伊井野が言うときい重みがあるな……）

「私も今回の試験はちゃんとしないと、お小遣い減らされちゃうんですよねー。」  
嘘である。この女、お爺ちゃんからもこっそりお小遣いを貰っている。孫を甘やかしたい祖父とお小遣いが欲しい孫……完全な利害の一致である。

「……」

「大仏、どうしたんだ？」

「うん……私も生徒会メンバーとして、もっと勉強頑張った方が良いのかなって……」

「そんな気にする必要は無いんじゃない？」

「そうだな……大仏庶務、別にそこまで気にする必要はないぞ？」

「そうですよ！ 私なんてテストの点が下降の一途を辿っても、全然気にしてませんよ？」

藤原は友人にギガ子という留年経験者が居るにも関わらず、一切の危機感を感じ

ていなかった。

「ええ……」

「そこは気にしろよ。」

「藤原さんは、もう少し頑張った方がいいわよ。」

「藤原先輩と同じクラスになるのは勘弁して欲しいので、頑張ってくださいね。」

「石上くんは私の事バカにし過ぎですから！」

「そうよ、石上！ それに藤原先輩は、只の勉強に縛られる様な存在じゃないのよ！」

「ミコちゃん！」「ヤッヤッ

「……でも、私は藤原先輩と同じクラスになったら嬉しいですよ？」

「」

「……もしそうになったら、タメ口でいいですか？」

「いい訳ないでしょ！……っていうか、なりませんか!!」

「あ、会長……生徒会室で勉強するのはアリですか？」

「ん？ ああ、別に構わんど。戸締りだけ気をつけてくれればな。」

「あざっす。」

「石上くん、家で勉強しないんですか？」

「まあ、色々誘惑も多いですからね……」

「あー、普段見ないテレビとかつい見ちゃいますよね……あと、片付けが異様に捗ったり……」

「あら？ でも石上君は、1学期から50位以内に入り続けていますよね？ 今更誘惑に惑わされたりするのかしら？」

「まあ、学校なら気が引き締まるので。」ヤッ

「なるほど……そうですね、学校なら気が引き締まりますからね。」

「そうですね……」

（なんか……見透かされてる気がする。）

「じゃ、私は帰りますね！ それじゃ、また明日！」

「……俺も帰るか。」

「私もそろそろ……」

「じゃあ石上、戸締りは頼んだぞ。」



「はい、お疲れ様でした。」

「石上君、頑張ってね。」

「はい……で、大仏はどうする？ 僕で良かったら、勉強教えるけど……」

「え、良いの？」

「成績の事、気にしてたみたいだし……」

「ありがとう……じゃあ、私も残ろうかな？ ミコちゃんはどうする？」

「……ゴメン、人が居る所で勉強しないって決めてるから……」

「そ、そうなんだ……」

（滅茶苦茶この前の事が尾を引いてる……）

「まあ、あんま気にすんなよ……」

「えっ、何が？ 石上、何かあった？」

「いや……そうだな、何もなかったな……」

石上は目頭を押さえた。

「ミコちゃん……」

（無かった事にしようとしてる……）

「じゃあ、私も帰るから……」

「お、おう……お疲れ。」

「ミコちゃん、また明日ね。」

「うん、また……」*ヒヤ、ン。*

生徒会室を出て行く伊井野を見送る。

「ミコちゃん、滅茶苦茶気にしてたね……」

「そうだな、会長と四宮先輩に知られなかっただけマシと思うしかないけど……」

……

「麗、帰りどっか寄って帰ろー?」

「そだね、ファミレスで勉強でもする?」

「うーん……じゃあ、勉強教えてね。」

同じ部活の友人と喋りながら歩いていると、生徒会室に明りが点いているのが見えた。

「テスト期間なのに生徒会は仕事かあ……」

「……あれ? さっき白銀会長と四宮副会長が帰るトコ見たよ?」

「え、そうなの？」

「うん、誰か残って仕事してるんじゃない？」

友人のその言葉に疑問が浮かぶ。白銀会長や四宮副会長は、仕事を他の役員に任せて帰る様な人間だろうか……仕事で残っているというよりは、誰かが他の理由……例えば、勉強で残っていると考えるのがしっくりくる。

「……」と。

すぐにスマホを取り出して〈伊井野〉と表示された欄からメッセージを送る。

〈今何処？〉

1分もしない内に既読が付き、返信が来た。

〈家だけど、麗ちゃんどうしたの？〉

確定だ。多分……生徒会室には、あの2人が居るのだろう。伊井野の返信になんでもないと返し、友人と帰路に着く。

「……」

（頑張りなよ。）

最後に振り返って見た生徒会室は、薄暗くなった周囲を照らす様に煌々とした光

が  
灯  
っ  
て  
い  
た。  
。

## 石上優は攻めたい

最近……気が付けば目で追っている女子がいる。それは……

「ミコちゃん、そろそろ風紀委員の見回り時間だから行こ？」

大仏こばち……中学3年の4月に逆行して少し経った頃、女子に言い掛かりをつけられている所に遭遇してからよく話す様になった。前は偶に話すクラスメイト程度の関係だったのが、今回は勉強を教えたり、委員会の仕事を手伝ったり、夏休み等の長期の休みでは図書館と一緒に課題に取り組んだり、夏祭りに一緒に行ったりする仲になった。自惚れでもなく、前回より明らかに仲が良くなったと言いつける事が出来る少女……今回は何か心変わりがあったのか、伊井野と一緒に生徒会へ入って来た。

新生徒会が発足し、既に1ヶ月以上が経過した……その間、少女漫画旋風があったり、会長と四宮先輩の一目情事な場面に遭遇したり、体育祭の準備に取り組んだり、借り物競争で一緒に走ったり、伊井野の闇を垣間見たり、合コンゲームで追い詰められたり……ってコレはまあいいとして！同級生の中では、間違いなく1番

一緒の時間を過ごしたと言えるだろう。そして、翼先輩に相談して気付いた。どうやら僕は……

「なるほど、優はその子の事が好きって事ね。」

「ん……まあ、そうですね……」

中庭の木陰で寝転びながら洩らした僕の独白に、同じく隣で寝転ぶマキ先輩が答える。

「なんでそんなに歯切れが悪いのよ。」

「いや……その、友達に恋愛感情を持ったの初めてなので……」

「なるほどね……わかる、わかるわー。それで、優はどうしたいのよ？」

「一応仲は良い方だと思うので、少しずつでも距離を縮めていけたらと……」

「ふうん？ 仲が良いなら2人つきりで出掛けたり、さり気なく優しくしたりすれば良いんじゃない？」

「なるほど……」

「まあ変に気負わずに、優はいつも通りで良いと思うわよ。」

「いつも通り……そんなので良いんですか？」

「大丈夫よ、マキ先輩を信じなさい。」（いいえ）

（優しくしてお人好しの優ならきつと大丈夫よ。）

「わかりました、いつも通りですね。」

「でもそうね……いつも通り接するのは周りに人が居る時だけにして、2人っきりの時はちよつと攻めるのもアリかもね。」

「ちよつと攻める……例えば？」

「そうね……ここまで優しくするのはお前だけ、とかそういう特別感を出すのが良いわね。」

「特別感……やっぱり女子視点だと嬉しいモノですか？」

「そりゃそうよ！ポロつと洩らす本音とか、普段優しい人が偶に強引になる所とか……凄くドキドキするわ！」

「なるほど……参考にしてみます、ありがとうございます。」

「ふふ、別にいいわよ……また何かあったら聞きに來なさい。」

「はい、じゃあ僕はコレで。」

「ええ、またね。」

……

「マキ先輩……普段優しい人が偶に強引になる所にドキドキするらしいですよ？」

「そうなの？ ありがとう、今度やってみるよ。」

ちやっかり情報はリークしていた。

### 〈生徒会室〉

「今日は仕事も大して無いし、休みにするか。」

白銀のその一言で、突如休みとなった生徒会。

「ミコちゃん！ この前言ってたスイパラ行きましょうよ！」

「あ、良いですね！ こばちゃんも行こ？」

「あ、ゴメン、今日は用事が……」

「そっかあ、残念……」

「そうですか、用事があるなら仕方ないですね……こばちゃん、次は一緒に行き



ましようね！ミコちゃん、今日は私の奢りですから好きなだけ食べて良いですよ！」

「わーい！」

藤原、自ら地獄の門を開く愚行。

「……」

（ミコちゃん、手加減してあげてね……）

「それじゃ、また明日ー！」

「お疲れ様でした。」

「……じゃあ私も失礼します。」

「僕も帰りますね。」

「ああ、お疲れ。」

「みんな、お疲れ様。」

生徒会室に会長と四宮先輩を残し、大仏の隣を歩く……

「……途中まで送って行くよ。」

「じゃあ、お願いしちゃうかな？」

校舎を出ると、びゅうっという音が耳を撫でた後、冷気を纏った風に体が襲われる。暦は既に12月へと入り、本格的な寒さを身体で感じる季節だ。隣を歩く大仏も体を縮こませて寒さに耐えている。

「うう、寒っ……もうすっかり冬だねー。」

「冬でもスカートなんて、女子は大変だよな。」

「校則でスカートの下に体操服着るの禁止されてるから余計キツイよ。」

「……それくらいの許可は出しても、良さそうなものだけだな。」

「まあ、見栄え悪いからね。スカート丈長ければそれ程気にならないし……首元とか今ヤバイけど。」

「……コレ、使うか？」

僕はマフラーを外すと、大仏へと差し出す。

「えっ!？」

「あ、悪い……嫌だよな、さっきまで僕がしてたマフラーとか……」

「違っ!? ちょっとビックリしたただだから! その……ありがと。」

「そっか、なら良かった。」

「もう、石上……こういう事、他の女子にもやってるの？ 優しいのは石上の良いトコだけど、あんまりやり過ぎると勘違いされちゃうよ？」

「……」

（本音をポロツと、多少は強引に……）

「……石上？」

「やってないよ。」

「……え？」

「大仏にしか、こういう事やってない。」

「な、なんで……？」

（そ、それって……！）

「大仏は嫌か？ 僕にこういう事されて……」

「……いやじゃない。」

「……なら良かった。」

「……」

大仏は口元が隠れるまでグルグルとマフラーを巻き始めた。

「大仏、マフラー巻き過ぎじゃないか？……そんなに寒いのか？」

「そう……じゃないけど、いまはこれでいいの！」

「まあ、大仏が良いならそれでいいけどさ。」

「うん、良いの。」

「じゃあ、行くか。」

「うん……！」

（顔が赤いのが見られてないよね……少しは期待してもいいのかな？）

「……」  
「フムフムフム」

（大丈夫か？ キモくなかったかな？ 本音出し過ぎじゃなかったか!? やっべ、今考えたらずり過ぎな気がして来た……）

恋する少女は話したい

感想ありがとうございます！（・A・）

〈中庭〉

「……石上がグイグイ来てる？」

「うん……」

12月に入り、二学期期末テストも無事終了したある日の午後、ベンチに座り大仏の言葉に耳を傾けるのは同じクラスの小野寺麗である。

「ふーん、良かったじゃん。石上も大仏さんの事、意識してるって事じゃないの？」

「そう……なのかな？ でも……そんな都合が良い話があると思う？」

「うーん、私はグイグイ来てる内容を知らないからねー。具体的にはどんな感じで来てるの？」

「え、ええと……後ろから抱きつかれたり、生徒会が休みになったのに態々残って勉強を教えてくれたり、マフラー貸してくれたら、それに……」

大仏にしか、こういう事やってない。

「くうう……」アザアザ

「……それに？」

「な、なんでもない……！」

大仏は紅潮した顔を隠す様に、俯きながら答えた。

「えー……」

（そこまでしてゐる時点で、高確率で石上も大仏さんの事好きだと思ふけど……でも、後ろから抱きつくなんて、石上も結構過激な事すんねー。）

伊井野の面子を守ろうとした結果である。

「じゃあさー、大仏さんもちよつと攻めてみたら？ 石上が大仏さんを意識してるなら、何かしらのリアクションがあるかもしれないし。」

「攻める……どんな感じであればいいかな？」

「え、うーん……」

小野寺は言葉に詰まる。何故なら……この女、大仏の恋愛相談に乗ってはいいるが自身の恋愛経験は皆無！ 故に異性に対するアピールなど、皆目見当も付かない。精々が少女漫画やドラマ、友人の経験談から答えを導くしか出来ないのである。

「そういうえば……手に対するスキンシップは、好意の意味があるって聞いた事あるよ、隙を見て手でも握ったら？」

「ええっ!? それはちよつと、ハードルが高いというか……」

「……あれ？ 体育祭の時に、借り物競争で手握ってなかった？」

「あ、あれはっ……石上に引っ張られてただけだから……！」

「ふーん、手握るくらいで……うぶだねー。」

「もう、やめてったらー。」

中庭で2人の少女が恋バナに花を咲かしている頃、生徒会室では……

……

〈生徒会室〉

「……それで、この前が付き合って半年記念だね？ その日の翼君は、凄く強引で……」

「……」

「い、所謂……フ、フレンチキスっていうの？　そういう感じのをされちゃって……」

「……え？」

（フレンチ……？　何故いきなり西洋料理の種類の話に？）

「それでね、それでねっ……！」

「あの、眞妃さん……話の腰を折って申し訳ないのですが、フレンチキスとは何でしょう？」

「えっ!?　おば様知らないの？」

「すいません、そういった事には疎いもので……」

「ああ、名家の御令嬢は箱入りだもんねえ……ええと、フレンチキスっていうのは……」

「フレンチキスというのは？」

「ディ、ディープなキスみたいな？」

「ディープ？　深いのですか？　具体的に何が深いのですか？」

無知とは罪である。



「えっ、ええと……し、舌をね……？」

「……舌？」

「」

（ええええっ!? ここまで言ったんだから、なんとか察しなさいよ!）

四条真妃の困惑も仕方のない事である。1学期の初体験勘違い事件を経て、一応の性に対する基礎知識は身に付けてはいるが、基礎知識はあくまでも基礎知識。基礎を發展させた応用編は未だblack boxの中で燻っている状態である。

「……あの？ 真妃さん、出来ればもっとちゃんと教えて頂きたいのですが……」

「し、仕方がないわね！」

四条真妃は立ち上がると、かぐやの耳元へと口を近付ける。

「ディープキスっていうのはね……」

「……はい。」

「……で、2人の……をしたり……されたり……っていうのがディープキスよ、わかった!？」

半端やケクソで説明した四条真妃であった。

「プ。ル。ル。」

「お、おば様？」

「は、破廉恥です！　そ、そんな……粘膜接触を高校生がするなんて!!」

「ち、ちょっと!! 粘膜接触とか生々しい言い方しないでよ！」

「ま、眞妃さん!? 今はそういうのが普通なのですか!?!」

「あ、当たり前でしょ！　皆やってるわよ！」

四条眞妃は、自身のアブノーマル扱いを避ける為にホラを吹いた。

「当たり前……皆やってる……」

「あつ、でもこういうのは本当に好きな人とやるものだからね？　其処は間違えちゃダメよ？」

「も、勿論です！　私はそんなはしたない女じゃありませんからっ……!!」

「なんか言い方に含みがあるんだけど……」

「ディープキスは、本当に好きな人に……」

幸か不幸か、今回もかぐやに時限爆弾が搭載された。

「それで、どうだったんですか？」

「な、何が？」

「で、ですから……ディープキスの感触とか、感想とかです！」

「ね、ねえ……なんかディープキスってストレート過ぎていかかわしい感じがするから……おさしみって言い方にしない？」

「……其方の方がかなりいかかわしい印象を受けますが、別にいいですよ。」

「ふう……やっと終わった。」*さっさっ*

「「ひゃわあああっ……っ」*どん*」

「えっ!? 何!? 何事だ!?」

「か、会長!？」

「お、おう、四宮……四条も居たのか。」

「ま、まあね。」

「何か相談事か？」

「ううん、まあそんなトコ!……じ、じゃあ、そろそろ失礼するわね!」

「お、おう……」

ボタンッと勢いよく扉を閉めると、四条真妃は出て行った……

「随分と慌てていたな……何か聞かれたくない話だったのか？」

「ま、まあそうですね……おさしみの話を少々。」

「おさしみ？」

「……………」アッギアッギ

「……………」

（わからん、なんで四宮は顔を赤くしているんだ？　そもそもなんで刺身？）  
白銀は混乱した。

---

※おさしみとは、江戸時代の隠語でディープキスの事です。（・ω・）

大仏こばちは攻めてみたい

感想ありがとうございます(。ω。)

〈生徒会室〉

「こんにちは……あれ、会長だけですか？」

石上が生徒会室に入ると、室内に居るのは白銀御行だけだった。白銀は視線を下ろしたまま、手元の書類にサインをしながら答える。

「ああ、2年は今日三者面談だ。俺は順番最後だから、事務処理しに寄っただけ。」

「あー、三者面談……今日でしたか、面倒臭そうですね。」

「自分の将来に関する事だからそうも言ってもらえんがな……石上は将来の展望とかないのか？」

「将来の展望……」

白銀は話の流れ的に当然、進路や就職についての展望を聞いたに過ぎないのだが……

「……」

（出来る事なら早い内に大仏と付き合って、そこからは恋人として高校生活を過ごしたいし、一緒の大学にも行きたい……）

今の石上は、若干恋愛脳になっていた。

「石上、どうした？」

「あ、すいません……そうですね、奉心祭が勝負かなと思います。」

「いや、何の話だよ。」カチャッ

「お疲れ様です。」

「おう、お疲れ。」

「大仏庶務、伊井野監査はどうした？一緒にじゃないのか？」

「今日2年の三者面談で、風紀委員が少し人数不足なんですよ。とりあえず、先輩の面談が終わるまでの繋ぎ役として、ミコちゃんが残ってます。」

「なるほどな。」

「白銀会長も今日は面談じゃないんですか？」

「ああ、時間まで仕事しにな……そろそろ行かなくてはならんな。少しの間、石上と大仏庶務の2人になるが……」

「大丈夫ですよ、とりあえず進められる分は進めておきますから。」

石上はパソコンを立ち上げながら、書類の準備に取り掛かる。

「ふむ、石上がいるなら大丈夫か……直に藤原と四宮も来ると思うからのんびりやってくれ。」

「了解っす。」

「わかりました。」

2人の返事を確認すると、白銀は生徒会室を出て行った。

「……じゃあ大仏は、この申請書類をクラスと部活で別にしておいてくれ。」

「うん、任せて。」

「おう、任せた。」

石上はパソコンで書類処理を、大仏は書類の選別作業に暫し没頭する……

……

「……ふー、終わったあ。」

僕はパソコンから目を離すと、天井を見上げて目頭を押さえる。

「お疲れ様、相変わらず早いね。」

「まあ、これくらいはな……」

大仏の言葉に、両手をヒラヒラと振りながら答える。

「……」

そういえば……手に対するスキップは、好意の意味があるって聞いた事あるよ、隙を見て手でも握ったら？

（……よし！）

「ねえ、石上……」

「ん？」

「パソコン作業で疲れてるならさ……マッサージでもしようか？」

「マッサージ？」

「うん、パソコン腱鞘炎っていうのもあるらしいし……ダメ？」

「いや、してくれるなら有難いけど……」



（え？ マッサージ？ しかも手のマッサージって事は、直接手を握られるって事!?）

「じ、じゃあ……するね？」 ヤ、ヒ

（き、緊張してきた……）

大仏は石上の隣に移動すると、靴を脱ぎソファに正座で座り直した。石上と向かい合い、両手を伸ばして石上の差し出された手を包み込む様に握るとマッサージを始めた。

「……っ!？」

（大仏の手、柔らかっ……いやいや、大仏は善意でやってくれてるんだ、邪な考えは捨てろ！）

「……んっ、ふっ……！」 ヒ、ヒ

（やっぱり……石上も男の子なんだなー、私の手なんかより全然大きい……）

「……」

（好きな子が自分の為に頑張ってる姿って、嬉しいというか……凄い癒されるな……）

「……石上の手、意外と大きいね？」

「ん、そうかな？」

「うん……ねえ石上、気持ち良い？」

「ああ、凄い気持ち良いよ。」

「そっか、良かった……」

「……」

（油断したら、勢いで告りそうになる……耐えろ、石上優！）

「……」

（もし、石上と付き合えたら……こういうスキンシップも増えるのかなあ……）  
などと生徒会室でやっている２人だったが……

……

〈２年教室廊下〉

「あ、かぐやさんも面談終わったんですか？」

「ええ、藤原さんも？」

「はい！一緒に生徒会室行きましょー！」

「そうですね……会長が言うには、生徒会室には石上君と大仏さんの２人だけの

様ですし。」

「えっ!? かぐやさん、それは本当ですか!？」

ガシッと藤原はかぐやの肩を掴み問い掛けた。

「え、ええ……先に事務処理を進めてくれているらしいですよ。」

「こうしちゃいられません! かぐやさん、急ぎますよ!」グングン

藤原はかぐやの手を掴むと一目散に生徒会室へと向かった。

「ええっ!? ふ、藤原さん!？」

「かぐやさん、急いで!」

「な、なんなのー!？」

……………

〈生徒会室前〉

「もう……藤原さん、どうしたんですか?」

息を整えながら、かぐやは藤原をジト目で睨む。

「シッ! ……かぐやさんは気付いてましたか? こばちちゃんが石上くんを好意的に見てる事。」

「好意的？ ええまあ、それくらいの事なら気付いてましたよ。」

「いいですか、かぐやさん！ この場合の好意的って意味は恋愛の意味ですよ！ ラブ探偵の恋愛センサーが反応しまくってます！」

「はあ……それで、藤原さんは何がしたいんですか？」

「いいですか？ 誰も居ない生徒会室に男女が2人……しかも片方はもう片方に好意を持ってるんですよ？ 何かありそうじゃないですか？」

「藤原さん、貴方まさか……」

「ちょっとだけ、ちょっとだけドア開けて聞き耳立てるだけですからっ！」

「要は覗きじゃない……藤原さん、そういった行いは慎むべきだと……」

藤原は僅かに開いたドアの隙間から、室内の様子を窺う……

「藤原さん!! 貴方っ……」

「シーッ! かぐやさんも、ここまで来たら一連托生ですからね!」

「はあ……仕方ありませんね、何もなければすぐに終わりにするんですよ？」

「はーい……」コソコソ

「じ、じゃあ……するね？」

「っ!」ガハッ

「石上の…意外と大き……」

「はああああっ!? 何がですか!? 何が大きいんですか!?」

「ここからだ、ソファの背凭れが邪魔で見えませんね……」

「……ねえ石上、気持ち良い?」

「ち、ちよちよちよっ!? 違いますよね!? そんな事してませんよね!?」

「……凄い気持ち良いよ。」

「してるっぽーい!?」

「藤原さん、してるって何をですか?」

「あの体勢的に考えられるのは……」  
「フ、フ、フ、フ」

「手っ!」

「そっか、良かった……」

「何も良くないです! 生徒会室でなんて事をしてるんですか!?」

「に、逃げた方がいいんじゃない?」

「あのー……2人共何してるんですか?」

「ひゃわあああっ!？」

「え!? ど、どうしたんですか?」

「み、ミコちゃん! 驚かせないで下さい!」

「えっ、す、すいません……」

「藤原さん、ダメよ八つ当たりなんて。」

「あ……ゴメンね、ミコちゃん。」

「いえ……私が悪いんです。私がいけない子だから……」

「……」

（この子、大丈夫かしら……）

「ミコちゃん、お願いがあるの! 一緒に生徒会室に突入してくれる!？」

「はい、藤原先輩のお願いなら!……でも、どうして突入するんですか?」

「説明は後です! 行きますよ、ミコちゃん!」

「は、はい!」

「……」

（藤原さん、伊井野さんを無理矢理巻き込みましたね……）

「モラル警察です！生徒会室でインモラルな事をしている悪い子は此処ですか!?

」ハッ

「は？」

「え？」

」

藤原は、自分がやらかした事を察した。

.....

「……つまり、藤原先輩は僕と大仏が生徒会室で変な事をしていると勘違いしたと？」

「ハイ……」↑正座

「藤原先輩……そういう事に興味がある年頃なのはわかりますが、TPOを考えて下さいね。」

「うわあああん!! 優しく諭さないでいっそのこと罵倒して下さいよー!!」

「……ミコちゃんも、あんまりHな事ばかり考えちゃダメだよ?」

「ええっ!? こばちゃん、私は違っ……」

「ミコちゃん！」

「……ハイ。」↑正座

「……」

（……ホント、藤原さんの言う事を信じると碌な事がないわね。）

かぐやは無関係を装った。

本日の勝敗、藤原⇄伊井野の敗北

勘違いの所為で後輩にムツツリ扱いされ、そのムツツリに巻き込み事故を喰らった為。



## 文実委員は煮詰めたい

感想ありがとうございます（・∀・）

---

奉心祭まで残り2週間を切った今日、秀知院学園は活気に満ちていた。生徒会長、白銀御行の尽力により今年の奉心祭は2日間の日程で執り行われる事が決まったのである。各クラスや部活動の出し物について議論する会議にも当然熱が入る。それは此処、文化祭実行委員会会議も例外ではなく……

「それじゃあ、みんなー？ アゲていくよー!! ウェーイ!!!」

「ウェーイ!!!」

「ええ、私こういうテンション凄く苦手……こばちゃん、早く終わらせて戻ろう？」  
「そうだね、私もアゲアゲ系はあんまり得意じゃないし……石上もそうでしょ？」  
「ウェーイ!!!」

「!!!」

石上は経験者だった。

「アレ？ 3人共なんで居んの？」

「麗ちゃん！」

「生徒会からのヘルプだよ。」

「文実が1番人手足りてないらしいから、私達1年組が来たの。」

「ふーん、よろしくね。」

「……それでは、文化祭会議を始めます。まずは文化祭のスローガンを決めたいと思うので案のある人は挙手して下さい。」

子安つばめの言葉に数人が手を挙げる。

「はいはい。」

「はい、小野寺さん。」

「やっぱ秀知院は、パないって意味を込めて……これっしょ！」

「青春だしん！ やばたにえんなチカラア!!」秀知院半端ないって」

「麗ちゃん!？」

「ええ……」

「正気か。」

（小野寺も結構ヤベェ感性してんな……）

「いいね！ エモエモ！」

生徒会3人のローテーションに対して、その他の評判は良かった。

「待って下さい、子安委員長！ もっと秀知院に相応しい高偏差値なスローガンが宜しいかと！ 例えば……」

眼鏡を掛けた男子は、まともな人間が見れば正気を失ったとは思えない文章を得意気に書き綴り出し……

「……こういうのです！」

自信満々に振り返り、教室を見渡した。

「え、やだ……」

「うわぁー……」

ホワイトボードに長々と記された正気と知性を疑うスローガンは、伊井野と大仏には理解し難い感性だった。

「京都大学のスローガンを参考にしました。」

「京都大学ってこんななの!？」

伊井野は信じられないという目で眼鏡男子を見る。

「いや、長過ぎだし、9割意味わかんねえよ。小野寺案の方がまだ偏差値高いわ。」

「

石上は男子には厳しかった。

「ちょっと石上、まだってどういう意味？」

「やべっ、つい……」

「そこまで言うなら、石上が案出してみなよ。」

「……ウケ狙ったもんは出せないぞ。」

「私も無理にウケ狙ったり、奇をてらう必要はないと思うから……石上君、どうぞ

！」

つばめ先輩に促され、僕はホワイトボードにスローガンを書き出す……といって  
も、前と同じスローガンを書くだけなんだけど……

〈伝われ燃える想い！ハートtoハート奉心祭!!〉

「おー、いいね！うん、良いと思うよ！皆はどうかな？」

つばめ先輩の問い掛けに、特に反対意見は出ずそのままスローガンは採用となった。

「石上、言うだけあるじゃん……」

「悪かったから、睨むなよ……」

「凄いなあ石上……」

「こ、こばちゃん！ 私達も何か役に立たないと！」

「だねー。」

「次は各クラスから文実に質問が来てるから、それに答えようか。」

〈販売価格を上げたいので、原価率の下限撤廃を希望します〉

「……どうしてダメなんだろ？」

「それについてはワテが答えますわ。臨時営業許可が不要なのは、非営利活動に限定されていますねん。つまり、儲けを出す目的での出店はあきまへんちゅうワケですわ。」

「そっかあ、じゃあ価格は上げられないね……」

「補足いいですか？ 最終的に利益を寄付や経費計上にすれば、どれだけ売上があつ

でも問題ありません。学生の内に価格設定の難しさを学べるなら有意義じゃないですか？」

石上の発言に子安つばめが目を輝かせる。

「へー、そうなんだ！ じゃあその件は先生と要相談で、次は……」

へクレープ屋台がなんで駄目なんですか？」

「なんでダメなんだろ？」

「それは僕から……基本的に保健所の指導で、直前に熱処理された食材しか使用出来ないんです。クレープなら缶詰フルーツやクリーム類はNGなんですよ。」

「流石佐藤くん、じゃあクレープは……」

「それについても補足が……確かに乳製品は弾かれますが、加工品のホイップクリームやジャムなら代用可能です。再検討の余地はあるかと。」

「ホント？ 良かったあ、それウチのクラスの事なんだよね。」

石上の発言に、C組女子が安堵の声を出す。

「……!!」

（な、なんなんだあの一年坊!? さっきから子安先輩の前で良いトコ見せる邪魔し

やがって!?)

石上の男子達からの好感度が下がった。しかし、石上は別に子安つばめにアピールする為に他の男子を完封している訳ではない。理由は只1つ……

「はー……」

「っ!」  
ッ

感心した様な顔で自分を見る大仏を確認すると、石上は机の下で拳を力強く握った。そう、この男……大仏こぼちに只々カッコいい所を見せたい、頼りになると思われたいが為に、前回の記憶をフル活用し問題点に対する回答を入念に準備して来ていた。

(これで、少しは好感度上がったかな?)

既に上限一杯である事を石上は知らない。

「次が最後だね……キャンプファイヤーの実施を望む。」

「是非やりましょう!」

立ち上がり周囲に呼び掛けた伊井野だが、予想に反し教室に沈黙が流れる。

「うーん、流石に難しいかなあ。」

「最近は何れも厳しくなっていますからね、火災対策に治安問題、何より自治体の許可が下りないでしょう？」

「で、でも……確かに大変かもしれませんが、みんなで頑張れば……」

「ミコちゃん……」

「口で言うのは簡単だけども……実際問題どうするつもりなの？」

「そ、それは……」

男子からの問い掛けに、伊井野は答えに窮する。

「……補足良いですか。同様の理由で行き詰まっていた高校の文化祭が過去にもありました、消防車を1台用意して自治体からの許可が下りたという記録があります。町内会長の所に出向き、文化祭最終日に防災訓練の申請をしてもらえば、後は近隣住民に周知して回る手間で済みます。」

「町内会長の所に出向くって……そんなの誰がやるんだよ？」

バンッと机を叩く音が室内に響き、一同は音を立てた人物を見た。

「私が行きます！ 風紀委員の仕事とは、大人から信用をもぎ取る事です!! 必ず許可を取ってみせます！」



「……じゃあそういう事で準備を進めて行こうか！ みんな、それで良いかな？」

子安つばめの発言に異を唱える者はいなかった。

……

会議終了後……

教室を出ると、後ろから小野寺に肩を叩かれた。

「石上、よくあんだだけ調べてたねー。」

「大した事じゃないよ。」

（ここら辺の事は忘れてなかったただだし……）

「ふーん？ じゃあ、私は伊井野と町内会の方に行くから。」

「ああ、頼んだぞ。」

「おー。」

手をヒラヒラと振りながら、歩いて行く小野寺を見送っていると、袖をクイッと引かれた。振り返ると大仏と目が合う。

「石上……ごめんね、全部任せちゃって……」

僕を見上げながら、そう洩らす大仏を宥める。

「気にしなくて良いよ。偶々僕の案が採用されただけだし……」

「石上……先輩達にもちゃんと意見とか言ってたし、問題にも平然と答えてたし……流石っていうか……うん、とにかく凄かったよ。」

「……まあ、会長に任された仕事だし、生徒会役員として少しは役に立つ所も見せたいし。」

（これで時間にも余裕が出来るから、大仏と一緒に時間が増えるし、上手く行けば文化祭と一緒に回れる。それに大仏と一緒に居れば、団長がアプローチを掛ける隙がなくなる筈……）

滅茶苦茶、私利私欲だった。

## 祭りの準備は慌ただしい

奉心祭まで残り1週間を切った。次第に加熱するクラスや部活動の生徒達……友人や普段は話さないクラスメイトと交友を持つ機会が増えたり、四苦八苦しながら出し物の準備に明け暮れる。そして、祭りはある意味……本番よりも準備の方が忙しく楽しいモノなのである。

「こぼちゃん、暗幕が足らないって麗ちゃんが……」

「えー、暗幕もう無いんだけど……石上、どうする？」

「ちよっと待ってくれ……確か暗幕の貸し出し数は、クラス別に記録してた筈……」  
僕は素早くパソコンから目当てのページを開くと、各クラスの貸し出し数を確認する。

「……やっぱりな、3年B組とオカ研が必要以上に持って行ってるみたいだ。」

「もう！　なんでそんな事してるのよ!？」

伊井野の苛立ちを受け流しながら答える。

「仕方ねえよ、念の為って言って多めに持って行く所は一定数ある訳だし。僕は3

年の所に行くから、伊井野と大仏はオカ研に行ってくれ。」

「わかった、こぼちゃん行こ？」

「うん。石上、コレが終わったらA組との合同会議があるから忘れないでね。」

大仏の言葉に、壁に掛かった時計を確認する。

「げっ、もうそんな時間かよ……急いで終わらそう。」

僕は急いで3年B組のクラスへ向かうと、唯一の知り合いに声を飛ばした。

「団長！ 暗幕の余りがあったら譲ってくれませんか？」

「おう、石上か。暗幕なら……コレくらい余ってるな、全部持って行ってくれて大

丈夫だぞ。」

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます。」

僕は両手一杯に暗幕を抱えて、教室を出て行く。

「ふう……」

（重い……けど、こっちの方が暗幕の数が多かったし、何より……団長と大仏はなるだけ近づけさせない様にしなさいといけないし、仕方ない……うん、仕方ないんだ。）

石上は狡かった。

……

「失礼します！ オカルト研究会の余った暗幕を回収しに来ました！」

伊井野がドアを開けると、薄暗い空間に迎えられる……その独特の雰囲気、伊井野は思わず足を止めた。

「ミコちゃん、どうし……うわっ、滅茶苦茶暗いね。」

「……あらあら、可愛い子猫ちゃんが2人も……何か御用かしら？」

「「ひっ!？」」

暗闇から聴こえて来た声に、2人は揃って小さな悲鳴を上げた。

「ふふっ、ごめんなさいね？ 驚かせる気はなかったんだけど……」

「あの……貴女は？」

「あら、ごめんなさい。余った暗幕を取りに来たんだったわね？ 年頃の子が部屋を暗くする道具を求めるなんて……ふふ、いやらしいわね。」

「何を言ってるんですか？」

「……」

（この学校ってホント変な人が多いなあ……）

伊井野と大仏は困惑した。

「折角来てくれたんだし、占ってあげましょうか？」

「急ぎますので、結構です！」くわっ！

「あら、残念……暗幕はその箱の中よ。どうぞ、持って行って。」

「失礼します！こぼちゃん行こ？」

「うん。」

「……眼鏡の貴女。」

部屋を出て行った伊井野の後を追おうとした時、大仏は背中からの呼び掛けに振り返る。

「はい、何ですか？」

「……1週間後、人生の岐路に立つ事になりそうね。」

「……人生の岐路？」

「しかも、選択する機会はたった一度だけ……覚悟しておいた方がいいわ。」

魔女帽子を被った目の前の少女の言葉に、じわりと不安が胸に広がって行く。ま

るで、この空間だけ世界から切り離された様な錯覚と共に不安は消えてはくれない。

「……」

「こばちゃん、早くー！」

「あ、ミコちゃん……」

廊下から聞こえて来た友人の声に、先程までの不安が霧散する。

「引き止めてごめんなさいね。」

「いえ、じゃあ失礼します。」

私は部屋を出て、ドアを閉めようと手を掛ける。

「最後に忠告してあげる……貴女に最も近い男性に注意しなさい、その男の言う事を信用してはダメよ。」

「えっ？」

その言葉を聞き終わると同時に、ボタンという音を立ててドアは閉まった。

「……どういう意味だろ？」

「こばちゃんー！」

少し離れた場所から自分を呼ぶ友人の声に、先程までの思考を隅に追いやる。

「ごめん、今行く。」

最も近い男性に注意しなさい、その男の言う事を信用してはダメよ。隅に追いやったその言葉の意味は……まだわからない。

……

「……あれ？ 部長、此処に置いてあった暗幕どうしました？」

「取りに来了娘に渡したわよ。構わないでしょ？」

「はい、それは大丈夫ですけど……」

「ふふ……珍しい運命の子だったから、思わず占っちゃったわ。」

「ああ、だから機嫌良いんですね。」

「あそこまで両極端な運命は珍しかったから、つい……ね。」

「へー、どんな運命だったんですか？」

「ふふ、秘密よ。」

部長と呼ばれた少女は、楽しそうに唇の前で指を立てて微笑んだ。



## 〈1年B組〉

「えーと、A組とB組の合同企画であるホラーハウスですが……残り1週間を切った今、進捗状況は50%以下です。正直ヤバイです。」

会議進行役の小野寺がクラスを見渡しながら口にする。

「皆がもっと真面目にやらないかつむぐ!？」

「ミコちゃん、今それ言うともっと遅れる事になるから。」

「……現実問題として、少し企画の変更が必要です。何かアイデアのある人は居ませんか?」

「ルートを大幅に減らすしかなくね?」

「半分喫茶店にしちゃうとか?」

「部活もあって忙しいし、適当で……」

「……」

ダメだ、みんな真剣に考えてない……大幅なルート削減をすれば合同企画の意味がなくなるし、半分とはいえ今さら喫茶店にしようとしても、申請と食材の準備に

今以上の時間が掛かるし……私だって部活をしながら準備してるんだから、忙しいのは言い訳にならない。私は頭を抱えたくなるのを必死で堪えながら、黒板に先程出した案を書き出す。妙案とはいえない案を書き終わると、地べたに座る石上に視線を向ける。

「石上、何かない？」

「そうだな……視覚と聴覚２種類のお化け屋敷にでもしてみるか？」

「聴覚のお化け屋敷？」

「遊園地とかでよくあるだろ？ 立体的な音と雰囲気だけで観客を怖がらせるアトラクション。」

「バイノーラル音響の事？」

僕の発言に伊井野が反応を示す。

「伊井野詳しいの？」

「詳しいって程じゃないけど……」

「……」

（いや、滅茶苦茶詳しいだろ。）

「……」

（十分詳しいよね、ミコちゃん……）

2人は口から出そうになった言葉を飲み込んだ。

「……本当に自分が体験してるみたいな錯覚がする程で、耳元で囁かれてる音声とか、クオリティの高い耳かき音声とか本当にんぐっ……!?」

「はい、ストップ。ミコちゃん、今自爆されたら本当に人手が足りなくなるからやめて。」

「……ふーん？ バイノーラルが凄いのはわかったけど、残り1週間で間に合うの？」

「出来てる分のお化け屋敷は、前半パートにでも使えば残りは少ない準備で済むだろ。後半パートとしてバイノーラル音響が必要だから……」

「それならこの私、榎原こずえに任せなさい！」

バンッと椅子から立ち上がり、そう名乗った少女は自信満々に言い放った。

「あと1週間しかないけど、大丈夫なの？」

「……問題無いだろ、TG部ならこういうの得意だろうし。」

不安そうな小野寺に答える……不安な理由が残り時間かTG部だからなのかはわからないけど……

「石上、アンタ見る目あるわね！ 流石、私が目をつけてた男ただけあるわ。」

「そうかい……僕はヤベエ奴に目えつけられてたっていう、知りたくない事実を知る羽目になったけど……」

「とにかく！ 私に任せてもらえれば万事解決よ！」

……

### 〈視聴覚室〉

両手を縛られた状態で椅子に座らされ、アイマスクまでされたミコちゃんが榎原さんと何故か途中参戦して来た藤原先輩の責め苦に必死に耐えている……あー、またミコちゃん声出しちゃった……

「もうさ、口にガムテしなきゃダメかもね。」

小野寺さんの発言に、榎原さんは嬉々としてガムテープでミコちゃんの口を塞いだ。

「コレで最後にするからさ、伊井野も頑張つてよ。」

「んーあん……」

多分、麗ちゃん……とでも言ったんだろうけど、ガムテープの所為で聞こえない。まあ、コレで録音も終わるかな……

貴女に最も近い男性に注意しなさい、その男の言う事を信用してはダメよ。

不意に……オカ研の部室で言われた言葉が脳裏に浮かんだ……アレはどういう意味なんだろう？ それに、選択の機会は一度だけっていうのも気になるし……

「はあ、はあ……やっと終わった、こんな事もう二度とゴメツ……」*グミグミ*

「あ……ミコちゃん、ごめん。ボーツとして録音してなかった……最初からやり直しで。」

「」

その瞬間、ミコちゃんの目から光が消えた……ごめん、次はちゃんとやるから……

※マッキー先ハイが石上に目をつけてたと言っていました、不治ワラちゃんと

いう友達から話を聞いて興味を持ったけなので、恋愛的な意味はありません。

## 石上優は誘いたい

感想ありがとうございます（・∀・）

---

奉心祭まで残る猶予はあと3日、日を追う毎に忙しさを増して行く各クラスの生徒達とその管理とフォローに精を出す生徒会と文化祭実行委員の面々、それぞれが只1つ……奉心祭の成功を目標に励んでいるのである。

## 〈中庭〉

「ゴメンね2人共……忙しいのに呼び出しちゃって。」

「いや、気にするな田沼。」

「そうっすよ。もう準備も殆ど終わってますし、あとは当日まで不備がないかの確認と突発的なトラブルの対処くらいなので。」

申し訳なさそうな顔をする翼先輩を会長と2人で宥める。

「石上君のクラスはお化け屋敷だっけ？」

「はい。中々の出来になってるんで、マキ先輩と是非来て下さい。」

「楽しみにしとくよ……ああ、でもマキちゃんは、怖いのが苦手だからなあ……」

「2人まで一緒に体験出来るので、マキ先輩にカッコいい所見せるチャンスですよ。」

「絶対行くよ。」

目の色を変えて返事をする翼先輩から会長に視線を移す。

「確か……会長達のクラスはバールンアートでしたっけ？」

「ああ、最近やっとマトモなのが作れるようになってな……」

「会長、最初は風船割りまくってたのに、今は難しいのも作れる様になってるんだよ。」

「おー、流石会長……」

「よせよせ、何事も努力次第でどうにかなるモノだ。」

この場に藤原が居れば、1番頑張ったのは私ですけどね……と言っただろう。

「それで、話の内容なんだけど……2人は奉心伝説を知ってるよね？」

「勿論だ。」



「まあ、話くらいなら……」

「……奉心祭で意中の人にハートの贈り物をする、永遠の愛がもたらされると言われている奉心伝説……僕も奉心祭でマキちゃんにハートの贈り物をしようと思うんです！」

「……」

（……ん？）

「しかし、田沼は既に四条と付き合っているだろう？ 今更それをしてどうするんだ？」

「確かに、僕とマキちゃんは既に恋人同士です。でも、マキちゃんが勇気を出して告白してくれたんだから、僕もマキちゃんに自分の言葉で告白したいんです！」

「そうか……頑張れよ、応援してる。」

「はい！」

力強く答える田沼を見ながら白銀は思った……

「……」

（恋人に対して、永遠の愛がもたらされるといわれる奉心伝説に準えた告白って……

プロポーズじゃないのか？)

はたから見てプロポーズ以外の何物でもなかった。

「……………」

そして、石上も思考を働かせる。

(え？ 永遠の愛？……………まさかー！ 翼先輩の言い方だと、まるでハートを贈る行為がそのまま愛の告白と同義の意味があるみたいじゃないか。)

「会長、翼先輩……………ちょっと教えて欲しいんですけど、付き合っていない男女が居てですね、片方が片方にハートの贈り物をした場合……………告白になる、なんてそんな馬鹿な話は……………」

「いや、馬鹿な話も何も……………奉心伝説はそういう話だろ。」

「そうそう、奉心祭ではハートの贈り物をする⇨告白って事だよ。」

「……………え？」

(ちよっと待てよ……………前回のつばめ先輩との奉心祭で僕は……………)

つばめ先輩、これ貰ってくれますか？

(景品で取れた……………ハート型のクッキーを渡したよな？ それに対してつばめ先輩

は確か……)

えっと、これは……どういう意味の？

(って聞いて来たよな？ 思い出せ……僕はそれになんて答えた？)

石上は必死に記憶を探り自身の発言を思い出す。

これは僕の気持ちです。

「あああああっ!?!?!」

(滅茶苦茶やらかしてたあっ!?)

「い、石上？」

「石上君？」

白銀と田沼がいきなり頭を抱え出した後輩に声を掛けるが、当の本人は返事どころではない。

(そりゃ、その後距離取られるに決まってるよ！ だって告白されてんだもん！ あー、じゃあその後の校舎裏のやり取りの意味も違ってくる……)

石上優、自身のやらかしを2年越しに自覚する。

「石上!?! しっかりしろ！」

「石上君!? 大丈夫!?」

ガシッと会長に肩を掴まれ揺さぶられる。

「あ……ああ、すいません。ちょっと、自分の迂闊さに動揺してただけです。」

「……ちょっとか？」

かなり動揺していた。

「石上君、本当に大丈夫？」

「大丈夫ですよ、只ちょっと……保健室行って来ます。」

「え、保健室？」

「やはりどこか調子が……」

「いえ、ちょっと枕に顔埋めて足をバタつかせてくるだけです。」

「ええ……」

「お、おう……」

「それじゃコレで……」

中庭から去って行く後輩を見ながら2人は思った……

（何かやらしたんだな……）

と。

〈保健室〉

「んがああ あっ!?! んむうう!?!?」ハタハタッ

……僕は一頻り悶えるところを切り替える。

「……」

（そうだ……大事なのは過去よりも今なんだから、今更氣にしてもしょうがないだろ。寧ろハートの贈り物をすれば大仏に僕の事を意識してもらえる訳だし、告白とハートの贈り物のダブルコンボを決めれば良い返事がもらえる可能性だってある筈……）

石上は変な所で前向きだった。

〈1年B組教室〉

「今日はここまでにしておけー。」

教室を覗きに來た担任に帰宅を促される。作業を中断し、教室を見渡すと意中の少女を発見する。

「大仏、そろそろ帰るか?……伊井野と小野寺が居ないな。」

「うん、帰ろっか。ミコちゃんも町内会の方へ最後の確認に行ってるよ……小野寺さんはその付き添い。」

「そっか、じゃあ先に帰るか。」

「うん。」

文化祭に向けた準備も徐々に整いつつあり、クラスや部活動の出し物の準備も順次完了している。この調子なら、ある程度余裕を持って本番を迎えられるだろう。校門を過ぎた頃……僕は意を決して、隣を歩く少女に話し掛ける。

「大仏……もし、時間が空いてたらで良いんだけど……2日目の奉心祭、一緒に回らないか?」

「えっ?」

石上の言葉を脳が上手く処理してくれない……もしかして私、文化祭デートに誘われたの?

「その、他に予定があるなら……」

「あつ、ない！ 予定ないから！」

「お、おう、なら良かった。お互いの空き時間を調整して、時間合わせるか。」

「うん、そうだね……なんか懐かしいね。」

「ああ、去年も最初は一緒に回ったよな。」

「うん……天文部のプラネタリウム見た後、色々見て回ってそれから……」

「中庭で桜を見たんだよな。」

「うん、冬桜……だったよね？」

「そうそう、よく覚えてるな。」

「……忘れないよ。」

（忘れるわけない。）

「……また見に行くか？」

「うん、行く……ふふ、楽しみだね。」

「……だな。」

……そのまま少し話した後、石上と別れて家路に着く。石上に文化祭デートに

誘われた……デート、で良いんだよね？ ううー……顔のにやけが止まらない。嬉しい、石上も私の事……そういう考えを期待してしまう。家に着くと弾む気持ちのまま、ドアを開けて中に入った。

「ただいま。」

私はリビングに居るであろう、お母さんに向けて声を掛ける……返事がない。どうしたんだろう？ 買い物にでも行ってるのかな？ 私がリビングに入ると、テーブル椅子に腰掛けたお母さんともう1人……その人は振り返りながら言った。

「久しぶりだなあ……こばち。」

「お、父……さん……」

ああ、そうだ……良い事があった後にはいつも……悪い事が起こるんだ……

書き溜めが完全になくなったので、暫しお待ち下さい。A:(  
E] <):





## 大仏こばちは仮面を被る

「あれ……伊井野、大仏は今日休みか？」

次の日、学校に来るといつも伊井野と一緒に登校して来る大仏の姿が見当たらなかった。

「うん……こばちゃん今日は、どうしても外せない用事があるんだって。」

「へえ、そうなのか……」

少し残念な気分を味わいながら、文化祭の準備に取り組む……キリの良い所で作業を中断して時計を確認すると、時刻は既に12時を回っていた。さっさと食って仕事に取り掛かろう……教室でそのまま昼食を食べていると……

「石上！ コレ見て!!」

血相を変えた伊井野と小野寺が走って教室に入って来た。風紀委員である伊井野が廊下を走るなんて、よっぽどの事だ。僕は小野寺に差し出されたスマホ画面を覗き込んだ。

へ大仏と書いておさらぎって読めます！ ぜひ覚えて下さいねっ！ へ

その画面の中には……聞き慣れた声で、普段とは違い澁刺とした感じに話す大仏の姿があった。いつもと違う……作った様な笑顔と、眼鏡を外した瞳を晒して。

……

また此処へ戻って来てしまった。もう来る事は無いと思っていたのに……私は向けられたカメラに向かって、カンペに書かれたセリフを吐く。此処とは何年も離れていたのに、いざカメラを向けられると勝手に体と口が動いた。演技と嘘を吐く事ばかりしていた……私の1番、無かった事にして忘れてしまいたかった過去……こんな私を見て、石上はどう思うかな……沈んだ心とは真逆の仮面を付けて、私は笑った。

「お、父……さん……」

あの時、数年振りに我が家を訪れたお父さんを見て……嫌な予感がした。そして……その予感は的中した。お父さんは、お母さんと養育費について話をしに来たんだと言った。そして、今までと変わらずに養育費を工面するのは不可能だとも……お母さんにも貯金はあるらしいけど、秀知院は名門私立……生活費と学費の両方を賄えるほどの蓄えは無いと言われた。つまり、学費のあまり掛からない公立

高校に転校する必要があると……いきなりの事に動揺する私に、お父さんは肩に手を置いて言った。

「友達と離れたくないか？ それなら、いい考えがある。こばちが自分で金を稼ぐんだ。勿論、父さんも協力する……どうだ？」

「何を……」

折角仲良くなれた人達と離れるなんて嫌だ……皆と、石上と離れたくない……私は俯いたまま、お父さんに訊ねた。

「すれば良いの……？」

その時の私には、それ以外の選択肢なんて思い浮かばなかったから……

自室のベッドに体を投げ出して天井を見上げる。昼休みに……大仏が映っていた番組を見てから、ずっと頭の中を……何故？ という疑問が飛び交っていて、気付いたら下校時間になっていた。その間の記憶は朧気だけど、伊井野や小野寺が言うに

は只々無心で仕事をしていたらしい……大したミスもしてないなら別にいいかと、樂觀的に判断して思考を切り替える。

昨日まで大仏から、芸能界に入る……なんて事は聞いていなかったし、伊井野や小野寺の驚き様を見ると、誰にも言っていない事は明白だった……大仏にメッセージを送るが、未だに既読すら付いていない事実……ゾワゾワとした嫌な感触が身体中に纏わりつく。

「大仏……」

ポツリと零れた言葉は、真っ暗な部屋に消えて行った……

次の日、奉心祭を明日に控えた秀知院は1番の賑わいを見せていた。直前になって備品申請をしに来る部活部員、レイアウトで意見の衝突をする生徒、前日にも関わらず進捗率が芳しくないクラス、それらのフォローや手伝いをする生徒会と文化祭実行委員……その中で僕達のクラスだけは、周りの賑わいに反して静けさが漂っ

ていた。

「……おはよ。」

日頃の疲れと昨日の昼休みの衝撃からか、机に突っ伏していた僕は頭上からの声に顔を上げた。

「大仏……おはよう。」

「……うん。ゴメンね、昨日休んじやって……あと、メッセージの返信も出来なくて。」

「あ、いや……それはいいけど、どうして？」

言外に昨日のTV番組の事を含ませて尋ねる。

「昨日の事、だよね……ちよつと理由があつてね。でも、そんなに長くやるつもりはないの。」

「そう、なのか……？」

「うん、心配させてゴメンね。」

僕と大仏の遣り取りに対して、周囲のクラスメイトも聞き耳を立てている事がわかった為、それだけ聞くと話題を変える。

「明日から文化祭だけど、大丈夫か？」

「……明日は大丈夫。でも、2日目は来るの遅れると思う……」

「え、そうなのか？」

「……うん、番組収録の予定があつて。夕方には来れると思うけど……ごめんね、折角誘ってくれたのに……」

大仏は氣落ちした様に言葉を零した。

「待つよ。」

「え？」

「少しくらい遅れたって気にするな、ちゃんと待ってるから。」

「っ……うん、ありがと。」

「おう。」

僕と大仏の会話は教室に入つて来た、伊井野と小野寺の割り込みにより中断された。大仏に詰め寄り、小型犬の様に吠える伊井野を宥めていると、始業のチャイムが鳴り響いた。

文化祭の準備も昼過ぎになれば、徐々に作業の終わったクラスや部活動の姿もチラホラと見え始める。僕達のA組B組合同ホラーハウスも完成し、残るは僅かに作業の完了していない出し物の手伝いをするだけだ。2時間程、校内を見回り最後の確認と手伝いをして今日の作業は終了した。本番である明日は、5時には来て準備や確認をしなければいけない……生徒会で備品の貸し出しデータをまとめていると、ガチャリという音と共に扉が開かれた。

「あら、石上君まだ居たの？ 明日は早いんですから、程々にしておきなさい。」

「はい、コレをまとめたら帰ります……四宮先輩はどうして此処に？」

「明かりが点いていたから確認しに来たのよ。」

（もしかしたら、会長がいるかもしれないと思って来たなんて言えないわね……）

「そうだったんですか、すいません余計な手間を取らせて……」

「別にいいわよ……それより、大仏さんは大丈夫だったかしら？」

「えっ、まあ……大丈夫そうでしたが、四宮先輩も知ってるんですか？」



少し意外だった為、思わず四宮先輩に訊ねる。

「同じ生徒会メンバーの近況くらい知ってるわよ、失礼ね。」

「ハハハ、すいません。」

「石上君……まだ掛かるなら手伝いますよ?」

「……いえ、もう終わりました。」

僕はパソコンの電源を落とすと、鞆に仕舞って立ち上がる……その弾みで、ポケットからキーホルダーが零れ落ちた。

「あら? コレは……あらあら、石上君もそうなのね。」

四宮先輩は僕より先にそのキーホルダーを拾うと、手のひらに乗せて僕に差し出した……ハート型のキーホルダーを。

「……どうも。」

妙な気恥ずかしさを感じながら、キーホルダーを受け取る。

「誰に渡すのかしら?」

「……大仏に。」

僕は観念して白状する……しらばっくれても意味が無い気がしたし、四宮先輩に

は極力嘘は吐きたくない。

「あら、素直ね……そ、それで……いつ告白するつもりなの？」

「はい、奉心際の2日目に。」

「そ、そうなの……でも、そんな急ぐ必要があるのかしら？ もっと関係性を深めて……なんだったら、向こうから告白されるのを待ってもいいんじゃないかしら……」ぎゅぎゅ

思いつきり自分の事だった。

「別に急いでる訳じゃありませんよ、ただ……このまま待つだけなんて僕には出来ません。大仏が僕以外の男に奪われるなんて、考えたくないですし……それに、もし上手くいけば残った学生生活を恋人として過ごせるんですから。」

「……石上君は、フられたらどうしようとか考えてないの？」

「もし、フられたとしても……好きになってもらう様に頑張るだけですから。」

「そう……強いわね、貴方は。」

「……そうですか？」

「ええ……引き止めてごめんなさい、また明日ね。」

「はい、お疲れ様でした。」

「……お疲れ様。」

私は部屋を出て行く後輩の背中を見送る……そう、石上君は勇気を出すのね。な  
ら私も……

## 奉心祭①

## 〈奉心祭初日〉

予め予想出来る問題に対策はしていたが、それでも忙しさはあまり軽減されなかった。特に僕と大仏は、明日の午後に自由時間を確保する為に仕事が大目に割り振られている。

「悪いな石上、無線マイク融通してもらって。」

「構いませんよ。只、文実の予備の奴なんで使い終わったら文実委員か僕に返して下さいね。」

「おう、サンキューな。」

「石上、暗幕の余りない？」

団長と備品のやり取りをしていると、大仏に後ろから袖をクイツと引かれる。

「あれ、まだ足らなかったのか？」

「出入り口の分を忘れてたんだって。」

「あー、準備中は開けっ放しだったからか……まだあった筈だから取って来るよ。」

「じゃあ、お願い。小野寺さんに渡してくれたら良いから。」

「ああ、わかった。」

「……」

走って暗幕を取りに行った石上を見ていると、ミコちゃんが近づいて来た。

「はあ、中々スムーズに行かないねこばちゃん。開場までもう時間無いのに、次から次にやる事が出て来るし……」

「当日になってみないとわからない事ってあるからねー。」

〈ピンポンパンポーン〉

「あ……」

「始まるね。」

〈それでは……秀知院学園文化祭、奉心祭のスタートです!!〉  
……………

「1年生達は先に休憩入ってー!」

つばめ先輩の言葉に作業を中断し、各自昼休憩を取る。

「伊井野、教室戻る?」

「うん、麗ちゃん行こ。こばちゃんも……」

「あ、先行ってて。」

「……わかった、伊井野行くよ。」<sup>タッ</sup>

「あああつ、麗ちゃん!？」

察してくれた小野寺さんに、ミコちゃんは引っ張られて行った……

「……石上、昼休憩行かないの？」

「実は……今日コンビニ寄って来るの忘れててさ、どっか適当なクラスの出し物で済まそうかと。」

「あ……だったら、一緒に行って良い？ 私もついでにご飯済ませたいし。」

「ああ、じゃあ行くか。」

大仏と連れ立って校内へと向かう途中、此方に歩いて来る翼先輩達3人と鉢合  
わせた。

「あ、石上君、準備頑張ってたね。」

「おつかれ、優。」

「お疲れ様。」

「こんにちは。」

「どもっす……皆さんは、今からクラスの当番ですか？」

隣でぺこりと頭を下げる大仏を視界の隅に収めながら、翼先輩に話し掛ける……  
そういうえば、大仏は先輩達と面識あったっけ？

「うん、よくわかったねー。」

「ハハハ、なんとなくですよ……」

（そりゃ、柏木先輩連れて文化祭デートしてたんならドン引き案件だからですよ。）

「……」  
「ぐー」

「そういえば……優のクラスはおぼけ屋敷らしいわね？」

「ええ、結構な自信作なんで是非来て下さい。」

柏木先輩の視線を受け流しながら、マキ先輩に答える。

「マキちゃん、石上君もこう言ってるんだから一緒に行こうよ。」

「で、でも私、怖いのは……」

「大丈夫だよ、僕がちゃんと守るから。」

「翼君……」  
「キョッ」

バカップルと化した翼先輩とマキ先輩2人を眺めていると、突き刺さる様な何かを感じた。

「……」

「あの……瞳孔開いた目でこっち見るのやめてもらえませんか？」

「……？」

（どうして柏木先輩は、凄い目で石上の事見てるんだろう……）

……

先輩達と別れると、大仏と飯系の屋台が密集しているエリアを回る。昼休憩終了まであまり時間が無い為、手っ取り早く食べられるモノを探す。

「こうして回って見ると、壮観だなあ……」

「ただでさえ規模が大きい文化祭なのに、今年は2日開催だからね。みんなも気合いが入ってるんじゃないかな？」

「そうだなあ……あ、タコ焼きがあるな。」

タコ焼きと書かれた看板を見つけて近付くと、2つのタコ焼き屋が並んで販売されていた。片方は普通のタコ焼き屋、もう片方はへハート型かまぼこ入りと表



記されていた。

「……」

（此処でタコ焼きとはいえ、大仏にハート型のモノを渡すのは違う気がする……）

「……」

（うーん、石上には明日渡すつもりだから今日はやめといった方が良いかなあ。）

結果、両者普通のタコ焼きを選択する。

「……美味しいな。」

「……だね。」

人混みを抜けてベンチに座ると、明日についての話題を振る。

「なるだけ早く帰って来るから……ごめんね。」

「気にしないで大丈夫だよ。何処かで待ち合わせでもするか？」

「あ、じゃあさ……去年一緒に桜を見た所で待ち合わせしよ？ 彼処なら人気も少ないし。」

「そうするか、じゃあ先に行って待ってるよ。」

「うん、楽しみ。」

「だな。」

短い昼休みが終わると、また僕達は文実の仕事に精を出した。

### 〈生徒会室〉

「いやー、なんだかんだ言って結局みんなココに集まっちゃうんですよねー！」  
「実家の様な安心感がありますね。」

生徒会室には生徒会メンバー全員が集まっており、皆が疲労を滲ませた顔をする中、藤原だけは平気な顔で室内をウロウロしている。

「皆さん、かなり疲れてますねー？」

「まあ、今日だけで色々ありましたし……」

（中年の接客が1番疲れたわ……）

「文実の手伝いで、僕ら1年はクラスの出し物に顔出す暇もなかったですし……  
昼飯の時にちょっとだけ回ったくらいですか。」

「へー、そういえばTG部の皆とおばけ屋敷行きましたよ！」

「そうだったんですか、私が接客したかったんですけど……残念です。」

伊井野はガツクリと肩を落とした。

「どうでした？」

「はい、面白かったですよ！ ミコちゃんが椅子に縛り付けられながら録音してる所を思い出して、思わず爆笑しちゃいました！」

大仏の問いに人格を疑う返しをする藤原先輩を指差して伊井野に尋ねる。

「なあ伊井野……そろそろ尊敬出来なくなってきたんじゃないか？」

「……そ、そんな訳ないでしょ！」

「ミコちゃん、間があったけど……」

「いい加減夢から覚めろよ。」

「ちよっとちよっと石上くん？ その言い方じゃ、ミコちゃんが私に過度な幻想を抱いてるみたいじゃないですか。」

「まんまその通りでしょう。」

「ちよっと石上、藤原先輩を悪く言わないで！」

「ミコちゃんー!」ヤッ

「私は藤原先輩の事……まだちゃんと尊敬してるんだから!」

「……まだ? ミコちゃん、まだって何?」

伊井野の発言に引っ掛かりを感じた藤原先輩が伊井野に詰め寄る。

「……ボチボチ現実が見え始めてるな。」

「ねー、3ヶ月前は上限一杯まで尊敬してたのに……」

伊井野を懐柔する藤原先輩を視界に収めつつ、大仏と駄弁る。

「ま、皆満喫した様なら良かったよ。」

「会長はあまり回れなかったのですか?」

「保護者の案内ついでに多少は見て回ったが……それらしい事と言えば、四宮の所でカフェイン摂取したくらいだ。まあ今日で寄付金の目標額は達成したし、明日は色々回る時間もあるだろう。」

会長と四宮先輩の会話が耳に届いた。

「……」

（会長も大変だな、僕は昼休みだけでも回れただけラッキーだったな……大仏と一

緒だったし。」

「……はい、私が悪い子だからダメなんですよね。藤原先輩が私に酷いことするのは、私の為を思ってる事なんですよね……」

「石上、ミコちゃんが洗脳されちゃった……」

「色々ダメそうだな……」

何はともあれ奉心祭1日目無事終了。

## 奉心祭②

奉心祭最終日、早朝に集まった生徒達は騒然としていた。何故なら……

「かれん、何かあったの？」

「エリカ、事件です。飾りが……あれだけあったハートの風船が1つ残らず無くなってるの！」

……

「……なんか騒いでるトコあるね、なんだろう？」

「さあ……よし、直ったぞ。」

「悪いね、石上。ロッカー直してもらっちゃって。」

「気にすんな、昨日あんだだけ開け閉めしてたら扉が緩むのも仕方ないし。」

「石上は、今日は午後からフリーなんだよね？」

「ああ、そうだよ。」

「ふうん、まあ頑張んなよ。」

ポンッと小野寺は肩を叩くと、持ち場へと戻って行った。

「……頑張んなよ、か。」

（言われなくとも、頑張るさ。）

……

「でも、一体誰が……」

「やってくれましたわね、TG部！」

かれんは決め付けた。

〈藤原千花は計れない〉

大仏との待ち合わせまでは、まだ時間がある……適当にぶらついて時間を潰すかと、校内を1人で散策していると……藤原先輩が此方に走って来るのが見えた。

「藤原先輩？ 一体どうしたんですか？」

「そうですね、怪盗という名の探し物をしている最中……ですかね。」  
「アッ、アッ」

「……本当にどうしたんですか？」

「もうっ、わからない人ですね！ 実は……」

……

「なるほど、風船が盗まれたと……只の愉快犯じゃないんですか？」

（そういえば、前回もあったなあ……色々あってそれどころじゃなかったけど。）

「はあー、石上くんは察しの悪い子ですね……」

憐れみの視線を向けて来る藤原先輩に訊ねる。

「じゃあ藤原先輩は、どういう理由があるの？」

「そんなの決まっています！ いつの時代も……怪盗は探偵に見つけて欲しいモノなんです！ 謂わばこの挑戦状は、怪盗から探偵へのラブレターと言っても過言じゃないんです！ 必ず見つけてみせますよ!!」

藤原先輩は……興奮気味にそう捲し立てると、走って去って行った。

（まあ、楽しんでるなら別にいいか。）

暫し校舎内を散策するも、人混みの熱気に負けた僕は校舎裏へと移動した。

「ふー、凄い熱気だった……」

壁に凭れ息を吐くと、近くで人の声がした。



「これ、受け取ってくれないか！」

……どうやら告白の現場に居合わせてしまったようだ。興味本位で壁に隠れて覗き見ると……

「……じゃじゃん！突然ですが、ここでクイズです！」

告白されたのに、いきなりクイズを出す藤原先輩が居た。

（えー、なんでクイズ……本当に意味わかんない人だな。）

「羽は羽でも重さのない羽ってな〜んだ？」

「ええっ!? えーと、エジプト神話に出て来る裁判の羽根とか……あっ、ピンハネ？」

藤原先輩のクイズに動揺しながらも、男子生徒は答えた。

「ぶー！不正解です。正解は楽しい事を精一杯やる心……人に縛られない自由な羽の心です。」

（……あの人何言ってるの？）

「それでは！私は怪盗を捕まえなきゃいけないので……ごめんね！」

藤原先輩は男子の返事も聞かずに走って行った。

「……」

（ちよっと気の毒だな、いくら藤原先輩が相手とはいえ……）

「心の羽に重さはない……か。」<sup>ツ</sup>

（あ、大丈夫そうだ。）

ヤベエ奴に告る奴もまた、ヤベエ奴なのである。

〈四条真妃はほっとかない〉

ハートの風船が突然、夜空に舞い始めた。サプライズ演出だろうか……私はハートが舞い上がる光景を暫し眺める。真妃は……今頃は彼と一緒に居るのかな……

「……」

「渚、何してんのよ。」

「真妃……」

「こんな所に1人でボーっとして……暇なんだったら付き合いなさい。折角のキャ

ンプファイヤーなんだから。」

「……彼氏と居なくていいの？」

「翼君ならあっちで友達と騒いでるわよ……それに知ってるでしょ？ 私、大事なモノは傍に置いておくタイプなの。」

「……真妃は欲張りだよね。」

「当然、私は四条家の人間よ？ そこら辺の凡人とは違うのよ。」

「ふふ、本当にカッコいいなあ……」

（私は恵まれてるよね、こんなカッコいい女の子が親友なんだから……）

〈大仏こぼちは現れない〉

待ち合わせ時間、桜の木の木の傍に設置されたベンチに腰掛けて待つ。徐々に暗くなって行く周囲を眺めながら、大仏が来るのを待ち続けているが……未だに待ち人は現れない。

「……………」

僅かだが歓声らしき声が耳を掠める。次いで、校舎を隔てた向こう側から赤々とした光が見えた。そうか、四宮先輩のキャンプファイヤーの点火式か。なら奉心祭が終わるまでは残り1時間……

「寒っ……」

ポケットに手を入れ寒さに耐える……未だ待ち人である、大仏こばちは現れない。

## 大仏こばちは間に合わない

## 〈某TV局〉

マズイ……収録に時間が掛かり過ぎている。番組収録では良くある事だけど、何も今日じゃなくてもいいのに……

「はい、OKです。お疲れ様でした。」

スタッフさんと出演者に挨拶を済ますと、急いで自分の楽屋へと走る。石上との待ち合わせ時間は既に過ぎている……それ所か、奉心祭の閉場時間まであと僅かという時間だった。鞆からスマホを取り出して石上に連絡を……

「嘘でしょ……電池切れて……」

私は楽屋を飛び出した。どうして、こういう時に限って悪い事ばかり……

「え、そんなに仕事入れて大丈夫なの？ 娘さん……確か秀知院でしょ？」

お父さんの名前が書かれた楽屋の前を通り過ぎる瞬間、半開きのドアからそんな言葉が聞こえて来た。確かこの声は……番組プロデューサーの声だ。私は、会話が

聞こえる様にドアに隠れて室内を窺った。

「別に構いませんよ。頃合いを見て、芸能科のある高校にでも転校させますから。」

「娘さんには話してるの？」

プロデューサーの言葉に、お父さんは鼻で笑って返した。

「はんっ、まさか……近い内に契約書で縛っておけば問題ないでしょう。数年前に一世風靡した人気子役……役者として俺がもう一度芸能界で幅を利かすには、二世タレントとしてのアイツの存在が不可欠ですからね。」

「……まあ、ウチとしても数字が取れるなら家族間の事に口出しはしないけどね。」  
「大丈夫ですよ。今回も学費をネタに少し脅しを掛けただけで、言う事を聞きましたから。」

その言葉の意味を理解した瞬間……私は走ってその場を離れた。どれくらい走っただろう……気付けば私は、TV局から離れた場所で膝に手について荒れた息を整えていた。

「……くっ、ふっ……うわぁ……」

悔しくて涙が出た。お父さんは、自分の為に私を利用するつもりだった……でも

学費に関しては本当なのだろう、お母さんの貯金では足りないのは事実……不倫スキャンダルでマスコミと世間から散々叩かれたお母さんは、人目を気にして働きに出る事が出来なくなってしまうた。それでも女優時代の貯金でどうにか出来ていたらしいけど……秀知院は私立の名門、学費だって1年で200万くらい掛かる。秀知院の奨学金制度も調べてみたけど、元々財閥の子息令嬢や才覚のある人間ばかり受け入れていた為か補助に関しては受け取る資格の条件がどれも厳しいモノばかり……私には条件をクリア出来ない。残りは400万……只の高校生には到底用意出来ない金額……私が秀知院に居続けるには、芸能界でお金を稼ぐ事しか出来ない。でも、このままじゃ……そこまで考えて真っ暗な空を見上げた。

「……奉心祭、終わっちゃったな……」

石上と約束した時間はとくに過ぎてるし、奉心祭も既に閉場している時間だ。でも……

少しくらい遅れたって気にするな。

気が付けば、私の足は秀知院に向けて走り出していた……頭では意味がない、居る筈がないとわかっていても……

ちゃんと待ってるから。

石上の優しさに、縋りたくなってしまったから……

### 〈秀知院学園〉

「……ふふ、居る訳ない……よね。約束破って……嫌われちゃったかな……」

せめて、連絡が出来れば違ったんだろうけど……私は、人気の無くなった秀知院を眺める。キャンプファイヤーの跡、周囲に散らばった萎んだ風船、無人の屋台……明日は片付けが大変だな、と思いながら敷地内へと入る。校舎内に入りさえしなければ、防犯機能に引かかる事は無い……私は、石上との待ち合わせ場所へと向かった。

僅かな光量で周囲を照らす外灯を頼りに、目当ての桜の木を見つけた。暗闇の中で外灯に照らされる桜を見た瞬間、止まっていた涙がまた溢れて来た……私は俯きながら一歩ずつ桜に近付く。涙がぼたぼたと重力に従って落ちて行くのをぼうと



眺めていると、1年前の光景が蘇った……

これは桜だよ。冬桜といって冬と春に2回咲く桜なんだ。

そうだ、石上に教えてもらうまで冬に咲く桜があるなんて知りもしなかった。2回咲くなんて珍しいねって言ったら……

冬桜の花言葉は精神美、優美な女性、純潔、そして冷静……大仏みたいだな。

「……」

ふふっ……あんな事、女の子に言って勘違いしたらどうするのよ。

……実はもう1つあるんだよ、冬桜が大仏みたいだと思った理由。

それで、私がどんな理由って聞いたら……

冬桜は別名小葉桜コバザクラとも呼ばれてるんだ。

もうっ……あんな雰囲気で揶揄うなんてイジワルして……でも、そういう所も……

「大仏。」

「……え？」

前方からの声に俯いていた顔を上げる。嘘だ、そんな訳ない、ありえないと否定の言葉が次々と出て来るけど、今1番聴きたいあの声だけは……聞き間違えるな

んてありえないから……

「嘘……なんで……」

顔を上げると、桜の木の前に立つ 1 人の男子と目が合った……

「ちゃんと待ってるって言つたろ。」

その言葉を聞いて……気付いたら私は、石上の胸に飛び込んでいた。

「ごめんっ……間に合わなくて……折角、石上がっ……く、ううっ……」

涙が止めどなく溢れて、石上の制服を濡らす……約束を守れなかった自分に対する憤り、石上に対する申し訳なさ……なにより、それでも待つて居てくれた石上の優しさに私は……涙を止める事が出来なかった。

……

僕の胸に顔を埋め、泣き囁く大仏の背中をポンポンと叩いて落ち着かせる。

「大丈夫だから、落ち着いて……な？」

なるだけ、優しい声色になる様に心掛けて話し掛ける。少しでも大仏に安心して欲しくて大丈夫、大丈夫と繰り返して宥めていると、徐々に嗚咽は収まっていく。

「石上……どうして、待つてくれたの？」

泣き腫らした目で、ジッと此方を見上げる大仏に答える。

「単純に待ちたかったっていうのもあるけど……もし、大仏が来たのに僕が居なかったら……きつと寂しい思いをさせてしまうと思ったから。」

「石上……」

この日を迎える為に、色々シミュレーションはしたし、どんな言葉で告白すればいいか、なんて事も考えていた……でも、目の前で涙を流している大仏を見て……考えていた事が頭から消えてしまった。今の僕の頭の中にあるのはただ一つ……

「……大仏こばちさん、貴女が好きです。僕と……ずっと一緒に居てください。」

自然と口から出た僕の言葉に、大仏は目を見開いた。僕はそのまま流れる様に大仏へと、ハートのキーホルダーを差し出す……女の子の弱っている所につけ込む様な卑怯なタイミングで告白している自覚はある。でも、それでも……大仏の傍にいる理由がどうしても欲しかったから……

「何があっても絶対に守るし、辛い思いもさせない。だから……僕と付き合ってくれ！」

「っ……ふっ……ううっ……」

ポロポロと涙を流す大仏に、一瞬悪い結果が脳裏を過る。

「私は……ずっと、私を見てくる男子の目が嫌いだった……顔だけ見て寄ってくる男子や、親のスクャンダルを詰ってくる男子が……だから私は、石上の前でもずっと眼鏡を外さなかった。お母さん譲りのこの顔よりも……私自身を好きになって欲しかったからっ……私は、ずっと石上を試してたんだよ？ それでもいいの……？」

「大仏……僕にとって今一番大事なのは、目の前にいる女の子が大仏こばちである事なんだ。素顔でも、眼鏡を掛けていても関係無い。それに……僕は、大仏の事、ちゃんと見てたよ。」

「……どうして、石上はいつも私を助けてくれるの？ どうして、いつもっ……言って欲しい言葉を私にくれるの？」

「大仏……」

「私も、石上の事が好き、大好き！」

その言葉を聞いた瞬間、僕は、大仏を抱き締めた。

大仏こばちは帰りたくない

感想、誤字脱字報告ありがとうございます！（・A・）

……お互いに告白し、晴れて恋人同士となった僕と大仏。暫し抱き合った後、声が震えない様に気をつけながら大仏に尋ねる。何故、芸能界で活動をし始めたのかを……大仏はポツポツと少しずつ説明してくれた。

両親が離婚してから会っていなかった父親が家に訪ねて来た事。

秀知院の学費を払い続ける事が困難な事。

学費を工面する為に、芸能界で活動する様勧められた事。

そして……父親は自分の芸能活動の為に、娘である大仏を利用しようとしている事……

「私……転校したくない……」

「……大丈夫、言ったろ？ 守ってみせるし、辛い思いもさせないって。」

「石上……」

「……大仏、ちょっと確認したい事があるんだ。」

……

僕は太仏から聞いた情報で頭の中で整理する。

「……なるほどな。最後に1つだけ……太仏の父親が不利益を被る事になるかもしれないけど……それは、その……大丈夫か？」

「不利益……？」

「ああ、太仏の父親が芸能事務所と交わした契約内容によっては……何かしらの不利益が発生するかもしれないから。」

「……お父さんが自分でした契約なら、自業自得だと思うから別にいいよ。」

「そっか、なら良かった……今日は疲れたろ？送って行くよ。」

「……」

「……太仏？」

「帰りたくない……石上の家に行っちゃダメ？」

「んえっ!？」

大仏の衝撃発言に思わず、変な声が出た。

「……あっ！ち、違うよ!? そういう意味じゃなくて……帰ってもしお父さんが居たら嫌だし……今は石上と離れたくないなって。」

今は石上と離れたくないなって……

石上と離れたくないなって……

離れたくないなって……

「……っ!!? お、おう……じゃあ、僕ん家行くか。」

(そんな事言われて断られる訳ないよ。)

「……うん。」

「あ、安心してくれ!ちゃんと親も居る筈だから……」

「うん、別に居なくても気にしないよ。……信じてるから。」

「……ありがとう。」

僕は仏と並んで歩く。隣を歩く大仏の姿を視界の隅に収めながら、大仏の手を握る……弱々しく握り返してくれた手の体温を感じながら決心する……絶対になんとかなして見せると。

## 〈石上家〉

大仏を連れて家のドアを開ける……両親にはどうやって説明しようかと思案していると、母さんがリビングから出て来た。

「あら、優ちゃんおかえ……」

「こ、こんばんは……」

母さんは……ペコリと頭を下げる大仏を見ると固まってしまった。

「ちよつと家の事情で、今日は帰りたくないんだってさ。泊めてあげたいんだけど、良いかな？」

「あ、あらそうなの？……お、お父さんに聞いてみるわねっ！」ママ

ドタドタとリビングに戻って行く母さんを見送る……チラリと大仏に視線を移すと目が合った。

「やっぱり迷惑かな……」



「そんな事無いから。母さんも……ちょっとビックリしただけだと思うし。」

「そうかな……」

「そうだよ……さ、こっちだ。」

大仏にそう促し、リビングへと向かう。リビングには両親が揃っており、入って来た僕と大仏に視線を向けた。

「お、お邪魔します！ 大仏こぼちと言います。い、石上君とは、その……」

言い淀む大仏の言葉を引き継いで答える。

「僕の大切な……彼女だよ。」

僕の発した一言で、狼狽える両親を宥めて事情を話す……僕に彼女が出来るのは、そんなに狼狽える事なのか……

……

「……なるほど、事情はわかった。大仏さん、せめて親御さんには連絡しておきなさい……泊まる分には問題ないから。」

「は、はい、お世話になります！」

「そう畏まらなくても大丈夫……母さん。」

「あ、そうね……こばちちゃん、泊まるならお風呂入るでしょ？ 今準備するから。」

「えっ、あ……ありがとうございます。」

「優ちゃん、貴方の服貸してあげなさい。」

「あ、うん。わかった……」

1人自室へと向かい、タンスから上下の部屋着を取り出し直ぐにリビングへ戻った。

「あれ、大仏は？」

「直ぐにお風呂に入ってもらったわよ。着替えを置いて来るから、優ちゃんは此処にいなさい。」

着替えを持って脱衣所に向かう母さんを見ていると……

「優、コレを……」

スツと千円札を父さんに差し出された。

「……何コレ？」

差し出された千円札の意図が読み取れない為、聞き返す。

「……近くのコンビニまで走って買って来なさい。その、ゴムの奴を……」

「どんな気の回し方してんだ！ いらねえよ!!」

「あ、ああ、そうだよな……スマン、ちょっとテンパった。」

「全く……大仏は今それどころじゃないっての。さっき説明しただろ？」

「ああ……優、その事に関してお前はどうするつもりなんだ？」

「……それについて、父さんにちょっとした頼みがある。」

……

30分程父さんと話していると、僕の部屋着に身を包んだ大仏が戻って来た。

「あの、お風呂ありがとうございました。」

「ふふ、気にしないで良いわよ。優ちゃん……ご飯出来たら呼んであげるから、それまで部屋で待ってなさい。」

こぼちゃんもね、と付け加えた母さんの言葉に従い、大仏を連れて自室へと向かう。

「……優しいね、石上のお父さんとお母さん。」

「そうかな？」

「うん、いきなり来た私にも優しくしてくれたし、ウチとは違うからいいなあっ

て……」

「大仏……」

「あ、ゴメンね……充電器借りて良い？ 電池切れちゃって……」

しんみりとした空気を振り払う様に、大仏はスマホを取り出した。

「ああ、好きに使ってくれ。親に連絡したら、伊井野達にも連絡してやってくれよ。相当心配してたから……」

「そっか、心配させちゃったな……」

母親へメッセージを送る大仏をボーッと眺める。なんか……大仏が僕の部屋に居るって変な感じだな。

「あっ、ミコちゃんから電話来た。」

通話と表示された欄をタップして大仏は電話に出る……スマホを耳に当てない所を見ると、如何やらテレビ電話の様だ……電話の邪魔にならない様に黙っておく。

へこばちゃん、大丈夫!? ずっと、既読つかなくて心配したんだよ!?

「ミコちゃん……うん、大丈夫。電池切れちゃってて、ゴメンね……」

へ大仏さん、おつかれー。へ

「あれ、小野寺さん？」

「おさちやーん、私も居るよー！」

「大友さん？ 皆一緒に居るの？」

「そーそー、伊井野家で奉心祭の打ち上げかな？ ついでに泊まる感じなんだけど、大仏さんも来れるなら来ない？」

僕はカメラに映らない様に気を付けながら、画面を覗き込む。画面には入れ替わり立ち代わりで、伊井野、小野寺、大友の姿が映っている。そうか……家に帰らなかったのなら、別に伊井野の家でも良かったのか……うっかりしてたな。

「……ごめん、今日はちょっと行けないんだ。」

「そっかー、残念……」

「……こばちゃん、今どこにいるの？ 見た事ない部屋だけど……」

「……」

マズイ……伊井野が大仏の後ろに映る風景に疑問を持ってしまった。

「え、ええと……それは……」

伊井野の言葉に大仏は言い淀む。

へよく見たら……こばちゃんそんな部屋着持ってたっけ？ 凄いダボダボに見えるけど……」

「彼氏の部屋だったたりしてー。」

「えっ、ええと、その……うー……」

大友の発言に、大仏は顔を紅くする。可愛い……けど、それ所じゃない、ヤバイ、バレル。

「……石上ー、居るんでしょ？」

「ええっ、お、小野寺さん!？」

最初は慌てていた大仏だが、小野寺の言葉に観念したのかスマホの画面を此方に向けた。

「……よう。」

その瞬間、伊井野と大友の驚きの声がスピーカーを通して室内に響き渡った。

## 奉心祭の夜に

感想ありがとうございます（・∀・）

---

へい、いいいいい石上!! アンタ、どうしてこばちゃんと一緒なの!!?<br>スピーカーから聞こえて来る伊井野の声に、思わず通話終了ボタンをタップしたくなる。

「……そういう事だよ。」

へキヤーツ!! どっち!? 石上君、どっちから告白したの!!?<

「そ、それは……」

大友の勢いに思わず後退る。

へ石上ー、今言わなくても明日吐く事になるんだからさー、言っちゃいなよ。<

へそうだ、そうだー!<

追求する小野寺と、その言葉にノリノリで追随する大友……

「い、石上！ アンタ、こぼちゃんを自分の部屋に連れ込んでナニするつもり!?」  
微妙に何のニュアンスが違う伊井野……大仏に救いの目を向けるも逸らされる。

「僕からだよ……あと、伊井野は脳内ピンクも大概にしとけ。」

「おー……」

「おー！」

「脳内ピンク!?!」

伊井野の横から大友が画面を覗き込む。

「ねえねえ！ 何て言って告白したの？」

「お、大友さん、もういいでしょ？」

大友の追求に耐えられなくなった大仏が、自分に画面を向けて喋る。助かった……

流石にそれは言いたくない。

「おさちゃん、彼シャツしてるんだねー？……もしかして、お泊り？」

大友の言葉に大仏の肩がピクッと跳ねた。

「いや、大友さん流石にそれはないって……ね、大仏さん？」

「え、ええとっ……う、うん。」



〈……うわぁ、マジか。〉

小野寺の全てを察した声が聞こえて来た。

〈石上！ アンタ、こばちゃんを襲ったりしたら只じゃつむぐっ!?〉

〈ハイハイ、伊井野は落ち着きな。〉

〈おさちゃん、明日感想聞かせてね!〉

「何の感想!?!」

〈わかってる癖にいゝ。〉 いゝいゝ

（大友さんが凄い絡んでくる……）

「……もしかして、お酒飲んでる?」

〈えないない、奉心祭が終わった開放感と大仏さんの恋バナでテンション上がってるだけ。〉

「そう……」

（まあ、ミコちゃんが居てそれはないか。）

〈まー、今日の所はこれくらいでやめておこうか。〉

〈えー、もっと話したいよー。〉

小野寺の言葉に、大友が駄々を捏ねる。

「でも大友さん、2人はこれからほら……アレだし。」

「あー……じゃあ仕方ないね。」

「大友さんは何を察したの!？」

「小野寺！ 変な気の利かせ方すんな！」

「じゃー頑張ってねー。」

「頑張れー！」

「むぐうー!!」

言いたい事だけ言って小野寺は通話を切った。

「……あはは、バレちゃったね。」

「まあ、遅かれ早かれバレてただろうな……それに、隠す事でもないし。」

「うん、そうだね。」

「2人共ー、ご飯出来たわよ。」

階下から聞こえて来た母さんの声に、大仏と顔を見合わせ下へと降りた。

## 〈四宮邸〉

「……はっ、初キスで舌をっ!? かぐや様! なんて事をしてるんですか!?!」

「感極まっちゃって思わず……でも、眞妃さんもしてるって言ってたし……」

「眞妃様は付き合って半年以上経ってるからですよ! 初キスでディープキスをブチかます様なかぐや様と一緒にしないであげて下さい!」

「早坂! ディープキスなんてエッチな言い方じゃなくて、おさしみって言って!」

「なんですか、おさしみって!……っていうか、そっちの方が淫らに聞こえますよ!?!」

「はぁ……」

（駄目ね、キスもした事ないお子様な早坂に話すだけ無駄だったかしら……）

「いま滅茶苦茶ムカつく事考えてますよね? 一旦叩いて目を覚ましてあげましょうか?……では、かぐや様がやらかしたか、やらかしてないか、あの子に聞いてみましょう。」

「あの子……?」

かぐやが身悶える事になるまで、あと10分……

夕食後、両親に大仏との事を根掘り葉掘り聞かれ余計に疲れた……部屋に上がりスマホで時間を確認する。時刻は11時過ぎ……普段ならまだまだ起きていられる時間だが、今日は色々あって疲労感が凄い。大仏も疲れているだろうと、母さんに諭され客間に案内された……まあ、恋人が同じ部屋で寝るっていうのは、親の立場的に問題があるのだろう。もう少し一緒に居たけど仕方ない……と自分を納得させ、ベッドで横になるとスマホが着信音を響かせた。

……

「……あ、会計君? 今ちょっと良い?」

「早坂先輩? どうしたんですか?」

「ちょっとね……実は会計君に聞きたい事があってさー。」

（あの子って石上君の事だったのね、早坂……いつの間に石上君の連絡先を知ったのかしら？）

「会計君はさー、初キスでディープキスする女子をどう思う？」

〈初キスでって……ははは、そんな女子いる訳ないじゃないですか。〉

「うん、私もそう思ってたー……じゃなくて、思ってるけどさー……例えばいいからどう思うか教えてー？」

へまあ、ド淫乱ですよ。実際そんな事されたら、かなり欲求不満なんだな……と  
か思っちゃいますよね。〉

「」

「だよなー……ありがと、それだけ聞きたかったんだー。じゃあ、またねー。」

〈あ、はい……また。〉

「……どうですか、かぐや様？ 自分が何をやらかしたのか、少しは自覚して頂けましたか？」

「は、早坂……私、明日からどんな顔して会長に会えば……」

「まあ、ド淫乱の欲求不満女と思われる事は覚悟しておくべきかと……」

「

本日の勝敗、かぐやの敗北

結果的にやらかしてしまい、更にそれを自覚してしまった為。

〈伊井野邸〉

深夜……

「不純異性交遊はんたーい！」くわっ！

「はんたーい！」

「不純異性交遊は取り締まりたいしょー!!」くわっ！

「たいしょー!!」

伊井野が叫び、それに大友さんが合いの手を入れる光景を私は眺める……2日に渡って開催された奉心祭による疲労、開放感、大仏さんと石上の恋人報告……更に深夜テンションが合わさり、最早私には制御出来ない状況になっていた。

「私が生徒会長になったら、厳しく取り締まります！」（サッ）

「いいぞ、いいぞー！」

「……大友さんは、厳しく取り締まられたら困るんじゃないの？ いつも彼氏欲しいって言ってるのに……」

「私に彼氏が居ないんだから、他の人もつくるなー！」

「つくるなー！」くわっ！

大友さんの発言に、今度は伊井野が合いの手を入れる。

「ええ……」

（ふ、普通にタチが悪い……死なば諸共みたいな事言ってるし……）

「我等独り身3人娘！ 生まれた場所は違うけど……なんちゃらかんちゃらー！」

「らー！」くわっ！

（コレ、私が收拾つけないきゃいけないの？ しかも、独り身3人娘って私もカウ  
ントされてるし……でも、伊井野もこんなバカ騒ぎにノるなんて、意外っちゃー意  
外……）

床についた手にカサッと何かの包み紙が触れた。私はその包み紙を拾い上げる

と、書かれた文字に目を通した。

〈whisky bonbon〉

「あー、ウイスキーボンボン……原因はコレかなあ。」

「おのちゃん！ 私達はいつまでも一緒だよ！ 抜け駆けはナシだよ！」

「アハハ……」

（そういう事言う子に限って、1番最初に抜け駆けしたりするんだよね……）

「麗ちゃんも、私と一緒に不純異性交遊取り締まろうね！ 一生！」

「いや、流石に一生はちよつと……」

「麗ちゃんー！」<sup>ヤッ</sup>

「おのちゃんー！」<sup>ヤッ</sup>

「あーもー、2人共もう寝なさい！」

✕小野寺の敗北

この後、このテンションの2人の相手を2時間務めた為。



想い想われ、呼び呼ばれ

感想ありがとうございます(ω。)

早坂先輩との電話を終えると、スマホを枕元へと置く……結局、あの質問は何だったんだろう？ まあ大方友達とそういう話になって、男の意見を聞く為に電話したってトコだろうな。

ほぼ正解。

……にしても、初キスでディープキスする女子なんている訳ないのに。

残念ながらいる。

まあ、僕の意見を参考にしてももらえたなら（早坂先輩か友達かはわからないけど）初キスでやらかす事にはならないよな。

既にやらかした後である。

そもそも……ゲームや漫画の中ならともかく、現実になんな女子がいる訳無いし。

現実とは時として常人の予想を上回るモノである。

「ふぁ……」

ベッドで横になっていると、徐々に睡魔がやって来た。なんだかんだで、今日は結構疲れたな……

……

どれくらい微睡んでいたろう……僕はコンコンッとドアを叩く音に意識を取り戻した。スマホを確認すると、時刻は12時を回っている……この状況で僕の部屋を訪ねて来る人……僕はドアに向けて話し掛けた。

「開いてるよ。」

カチャと遠慮がちに開かれたドアから顔を覗かせたのは、予想通り大仏だった。

「ゴメンね、寝てた？」

「いや、それより……どうしたんだ？」

僕は微睡んでいた事を誤魔化し、大仏に訊ねる。

「眠れなくて……そ、それに、折角石上と同じ家に居るのに、寝るのはもったいないとか……もうちょっと一緒に居たいなって。」

(可愛い……)

「可愛い……」

「い、石上！ あんまり揶揄わないでよ！」

「あ、すまん、つい本音が……」

「もう……ねえ石上、ありがとね。」

大仏は僕の隣に腰を落とすと、俯きながらそう言った。

「えっと、何が……？」

「色々だよ……待っててくれた事。私自身をちゃんと見て、受け入れてくれた事。抱き締めて……優しく落ち着かせてくれた事。守ってくれるって言うてくれた事……石上のしてくれた事の全部が嬉しくて……嬉し過ぎて、胸がいっぱいになっちゃった。」

「……」

大仏の話を僕は黙って聞き続ける。

「私は今まで、辛い事や悲しい事でしか泣いた事がなかった……でも石上のしてくれた事、言うてくれた言葉が……嬉しくて、安心して泣く事もあるんだって初めて

知る事が出来たの……だから、ありがとう。」

「大仏……」

「ねえ石上、私だけ貰ってばかりで何も返せてない……石上は、私にして欲しい事とかしたい事ってないの？ 私、石上になら……」

大仏は、僕の胸に顔を埋めながら……言葉を繋いだ。

「なにされても……」ヤッヒ

「……なら1つ、頼みがある。」

「……」

僕の言葉に、大仏はピクツと僅かに肩を震わせた。

「……うん、なんでも言ってる？」

「2人っきりの時は、僕の事……名前で呼んでくれ。僕も大仏の事は……名前で呼びたいから。」

「……優。」ヤッヒ

「……ありがとう、こぼち。」

こぼちは僕の胸に顔を埋めたまま、ジツとしている。少しでも僕の気持ちが伝わ

る様に、少しでも安心してもらえる様にと、優しく頭を撫でていると……小さな寝息が聞こえて来た。こばちが案内された客間は一階だ。階段を降りて運ぶのは危険だし、何より……愛しい人の寝顔をもう少し眺めていたいという欲には逆らえなかった。起こさない様に気を付けながら、こばちをベッドに寝かせる……辛い事や悲しい理由で流す涙は今日で終わりになる様にと、その寝顔に願いながら……夜は更けていった。

### 〈翌日〉

次の日の朝、こばちは制服に着替える為一旦家に帰ると言った。母さんが気を利かせてタクシーを呼び、僕はこばちの父親が家に居た場合に備えてついて行こうと提案したが……

「大丈夫、お母さんに聞いたら来てないって。心配してくれてありがとね……優。」  
と言われたので、それ以上は何も言わなかった。只、通学路の途中で待ち合わせ

をして一緒に行く約束はする事が出来た。タクシーに乗って去って行くこぼちを見送ると、シャワーを浴びて眠気を飛ばす。あれから僕は、こぼちの眠るベッドに入る事もせず、毛布にくるまって3時間程眠った。未だ多少の眠気はあるが、こぼちと恋人同士になった事が関係しているのか、精神的な負担は無い。僕は身支度を整えると、家を出た。

### 〈秀知院学園〉

今日は、各クラスや部活動でやった出し物の後片付けが主で授業はない。片付けの終わったクラスの生徒はそのまま帰宅する事が許されているし、部活動も許されている。僕達1年B組はA組との合同企画だったのでそんなに時間は掛からないと思っていたが、予想よりも時間が掛かってしまった。備品の返却に不備がないかを確認し終えると、僕達のクラスは解散となった。生徒会役員は片付けが終わったら、生徒会室に集まり会議をする事になっているのだが……

「石上、詳しい話を聞かせてもらえるわよね？」

「ま、ネタは上がってる訳だし……隠し事は無しね？」

伊井野と小野寺に詰め寄られる。クラスには既に僕達しか居らず、こぼちは少し離れた席で大友（走って教室に入ってきた）に尋問されている。

「ねーねー、おさちゃん、石上君とはどこまでヤツたの？」

「」

イを噛んだと思いたいけど、大友だからなあ……というか、付き合い始めのカッブルに聞く事じゃないだろ。こぼちも大友の質問に絶句している。

「な、なあ伊井野、僕達は生徒会の会議があるだろ？ 急いで行った方がいいんじゃないか？」

真面目な伊井野なら、生徒会を引き合いに出せば考え直してくれると思ひ口にす  
る。

「会議までまだ少し時間はあるから大丈夫よ。それより、いくつか聞きたい事があるの。」

「……黙秘権を行使する。」

「石上、アンタ……そんなのが通用すると……」

「伊井野、ココは私に任せて。ねー石上、もし質問に答えなかったら……藤原先輩  
呼ぶよ?」

「わかった、なんでも聞いてくれ。」

小野寺の言葉に僕は、あっさりと屈した。

……

同時刻、生徒会室……

「かぐやちゃんは私が1番好きだもんねー。ほらっ、いつもみたくいちばんしてー  
?」

「……」  
「ん、どうした四宮?」

「いちばん」  
「え」

「……さんばん」

「どゆこと!? 此処には私と会長しか居ないのになんで私が3番なの!? じゃあ、



2 番は!？」

「いしがみくん」

「私、石上くん以下!? もーっ! 石上くんは一体どんな汚い手を使ってかぐやちゃん  
の好感度をゲットしたんですか!？」

「……」

(日頃の行いだろ……)

日頃の行いである。

……

「……こばちゃん、本当に何もなかったの? 石上に変な事とかされなかった?」  
小野寺達の尋問も終わり生徒会室に向かう途中、伊井野からそんな言葉が飛び出  
した。

「もう、ミコちゃん! そういう事言っちゃダメでしょ?」

「だ、だってえ……」

心外だ……詳しい事情を知らないとはいえ、そんな発言をする伊井野に興味返し  
の意味を込めて問い掛ける。

「変な事って？」

「え？」

「だから、具体的に変な事ってなんだよ？」

「そ、それは……」

「ん？ それは？」

「そ、そんな事言わなくてもわかるでしょ!!」

勝った……伊井野は自身の発言を誤魔化す様に、生徒会室のドアを勢いよく開けた。

「こんにちは！」くわっ

「お疲れ様です。」

「こんちゃーっす。」

挨拶をしながら部屋へ入ると……

「ちのみや、ちのみや！」

「かいちよっ、かいちよっ！」

「ちのみやー！」

「かいちよー!」

「」

「」

「」

恐ろしい程中身の無い会話をする……会長と四宮先輩が居た。

「ハッ!? ち、違うんだ、コレはっ……」

「いい年して何してるんですか!」

「違うんだって! 説明が難しいけど、ちょっと色々あっただけで……」

伊井野が詰め寄り、会長に問い質す。

「何が色々なんですか! もう少し、生徒会長としての自覚を……」

「い、石上! お前ならわかってくれるよな!」

「ほーら、四宮先輩、お菓子ですよー。」

「わーい!」

「聞いてない!」  
「ぎゅー」

「ねえ石上……四宮先輩、いつもと違う気がするんだけど……」

「まあ、こういう時もあるだろ。」

（懐かしー、そういうえば四宮先輩がこうなるのって、奉心祭の次の日だったっけ。）

「ええ、軽い……」ニタニタ

「かぐやちゃん！ お菓子買って来たよ!!……あー！ 石上くん、早速かぐやちゃんに媚び売って好感度稼いでっ……普段からそういう事してたから2番なんです  
ね!? ずっこい、ずっこいです!!」

部屋に入って来るなり、藤原先輩はいきなり叫び出した。

「……よくわかりませんが、なる様になった結果だと思えますよ。」

「ふん、見て下さい!……はい、かぐやちゃんお菓子だよー? 石上くんのお菓子より美味しいよ? だからいつもみたくいちばんしてー?」

「……さんばん」ニタニタ

「だからなんでえ!?!」

本日の勝敗、藤原の敗北

さんばんだった為。

## 石上優は策を講ずる

感想、誤字脱字報告ありがとうございます

(・・A・・)

---

「……………うん……………」

「あーあ、かぐやちゃん寝ちゃいましたねえ……………折角お菓子とか買って来たのにー。」  
グニグニ

ソファに横たわり、魘されながら眠るかぐやの頬を藤原は指で突く。

「藤原書記、寝かしてやれよ……………文化祭の疲れとかもあるだろうし。」

「はーい……………あつ、そういえば石上くん、クリスマススイブの日ヒマ？ その日ウチ来ない？」

(藤原先輩!?)

「っ!?」ヤッー

「痛ーいっ!?」

「ああ、クリスマスパーティーするんですね。」

「……あ、ゴメンね、ミコちゃん。」ギ

「ううっ……」グズ

「石上……今ので良くわかったな。」

「まあ、藤原先輩はこういう人ですから……」

「という訳で、生徒会の皆でクリスマスパーティーをしましょう! 場所はウチを提供しますので! かぐやさんも来ますよね?」

「ちゅ……」

「よし、言質取りました!」

「いや、魔されてるだけだろ。」

「折角誘ってもらって申し訳ないですが、その日は無理ですね。」

「えー、なんですかあ! 恋人のいない可哀想な後輩を誘ってあげてるのに!」

「……さーせん、その日はどうしても外せない用事があるんすよ。」

(言い方……)

「はー、残念ですが仕方ないですね……ミコちゃんとかばちちゃんは？」

「あ……私も友達と一緒につばめ先輩のクリスマスパーティーに呼ばれてるんです。」

「すいません。」

「……」

(よし、違和感ない感じに断れたな。)

すいません、と藤原先輩に謝るこぼちを見てホッとする。僕と同じクリスマスの日に用事があるなんて言えば、恋愛脳の藤原先輩なら確実に探りを入れて来る。だから、伊井野の発言の後に謝罪を挟めば、こぼちも同様の理由で行けないと誤認識させる事が出来る。伊井野は態々言い触らす様な人間じゃないし、こぼちの問題が片付く前に色々言われるのは勘弁して欲しいから仕方ないよな。

藤原、ガチの対策を取られる。

「じゃあ、仕方ないですねー。かぐやさんといいでに会長で我慢してあげます。」

「藤原、今ついでだった？」

「……そういえば会長、会議はどうします？」

ソファで眠る四宮先輩を見ながら訊ねる。

「そうだな……まあ、別に急ぎという訳でもない。今日は休みにするか、皆も文化祭の準備や片付けで疲れも溜まってんだろうしな。」

「わーい！ じゃあ私、TG部に顔出しに行きますね！ それじゃまた明日ー。」

藤原は颯爽と生徒会室から出て行った。

「じゃあ、僕達も失礼します。四宮先輩は……」

「ああ、四宮は俺が責任を持って見ておく。」

「お願いします……それじゃ、お疲れ様でした。」

「お疲れ様でした。」

「失礼します。」

生徒会室に会長と四宮先輩を残して部屋を出る。伊井野は気を利かせてくれたのか、校内に残っていた小野寺と合流して一緒に帰るそうだ。折角出来た2人っきりの時間……活用しない手はないし、動くなら早い方が良い。僕は隣で歩く恋人に話し掛けた。



「なあ、こばち……」

「な、何？」と『タ』

（な、名前で呼ばれると昨日の事を思い出しちゃうな……撫でられてる内に、いつの間にか寝ちゃってみたいだし……）

「今日、こばちの家に行っていいか？」

「え、ええっ!？」

（い、いきなり!？）

「こばちの母親と話がしたいんだ。」

「あ……うん、わかった。ねえ、優……これだけは約束して。私の為に無理はしないって。」

お願いだから、と僕を見上げてそう言って来るこばちの背中をポンポンと叩く。

「うん、大丈夫だから……任せてくれ。」

「うん……」

そして、僕達はこばちの家へと向かった。

## 〈大仏家〉

「お母さん、この時間帯なら居る筈だから。」

「うん……こばち、悪いけど30分だけお母さんと、2人で話をさせてくれないか？」

「……私が居たらダメ？」

「今はまだ……でも約束する。絶対にこばちも、こばちのお母さんも不幸にさせない。だから……」

信じてくれ……と言おうとした所で、こばちに人差し指で止められる。

「信じてるよ、優の事。」

「……ありがとう。」

……

こばちの母親との話を済ませると、〈こばち〉と表記された部屋のドアをコンコンと叩く……数秒後、ドアが開かれこばちに迎えられる。

「いらっしやい、入って。」

はにかんだ笑顔を浮かべるこばちに、部屋へと招かれる。

「……どうだった？」

「ああ、何とかなったよ。こばちのお母さんの許可と了承が出たから、後はなんとかなると思う。」

「……聞いていい？ 優はどうするつもりなの？」

「……こばちを拐うつもりだよ。」

「えっ!？」

……最初は一瞬の出来心だった。でも……その一瞬の浮ついた気持ちは、取り返しのない現実となって私と家族に襲い掛かった。娘が生まれるまでは女優として、生まれてからは大人気ママタレントとして……芸能界で活動していた私の人生は、こばちが中学に上がった頃に激変した。偶々、番組収録で一緒になった他事務

所のタレントと懇意になり、プライベートでも会う様になった。夫のたいきと娘のこばち……大した不満もなく、仕事も順調だった。ただ、ほんの少しだけ刺激を求めた火遊びのつもり……でも、それが週刊誌に掲載されると、マスコミと世間は全力で私を糾弾した。

私は仕事を失い人前に出る事が困難になった為、無期限の活動停止を余儀なくされた。別居している夫には離婚届を突きつけられたけど、私は未だにハンコを押していないし、未練がましく大仏性を名乗り続けている……が押していないだけで、事実上の縁切り状態だ。こばちも私の不倫騒動の直後、芸能界から身を引く事になった。母親として情け無く、申し訳ない気持ちで一杯だった。

でもある日……こばちが中学三年に進級して直ぐの頃、いつも暗い顔で帰宅し学校の話題を話さないあの子が……澆刺とした表情でたたいまと帰宅の挨拶をして驚いたし、それから暗い顔をする事も無くなった。だけど最近、数年振りに会いに来た夫の話を聞いて、また暗い顔をする事が増えてしまった。こばち自身は、芸能界に未練はないのだろう……只々学費を稼ぐ、それだけの為に欺瞞、虚栄、欲望に支配された世界に身を投じる……本当に私は情け無く、悪い母親だ……娘が苦しん

でいるのに、何も出来ないなんて……

「はじめまして。大仏こばちさんとお付き合いさせて頂いてます、石上優です。」

そんな自己嫌悪を感じていた時だった。真っ直ぐな瞳に何かを決意した様な空気を纏った男の子が訪ねて来たのは……そうか、こばちを救ってくれたのは貴方なのね。石上優と名乗った男の子は、その見た目からは想像もつかない、とんでもないことを私に提案した。

---

最新刊にて、大仏こばちの父親は大仏たいき、母親は芸名MEARIとしてタレント活動していたらしいので、大仏芽有とします。

## 石上優は伝えたい

感想ありがとうございます（・∀・）

---

## 〈中庭〉

「そっか、上手くいったみたいで良かったよ。」

「翼先輩には相談に乗ってもらって……ありがとうございました。」

「全然いいよ。僕だって相談に乗ってもらってたし、こういうのはお互い様だからね。」

翼先輩にこばちと恋人となった事を報告する。翼先輩も気にしてくれていた様で、笑って祝福してくれた。

「会長には、もう報告したの？」

「いや、それが……」

翼先輩の言葉に思わず言い淀む。僕は今日の会長の姿を思い出す……

……

「羊が87匹、羊が88匹、羊が89匹……」

「……」

「ひ、棺が一基、棺が二基……」

「棺!？」とどッ

……

「……ちょっと忙しそうなので、落ち着いたら伝えます。」

「そっか、まあ生徒会長だもんね。」

「……そうですね。」

（四宮先輩が髪を下ろしてるのと同様関係してると思うんだけど……前回はいつの間にか元に戻ってたからなあ。）

「マキちゃんには伝えた？ 心配してたよ。」

「この後に伝えに行こうかと思ってます。」

「そっか、じゃあ早く教えてあげて。マキちゃんも早く知りたい筈だよ。」

「そうっすね、行ってきます。」

「マキちゃんは生徒会室に行くって言ってたよ。」

翼先輩の言葉に僕は手を振って感謝の意を示し、生徒会室へと向かった。

### 〈生徒会室〉

「違うって言ってるでしょ！」

「何が違うのよ！」

生徒会室に入ると、マキ先輩と四宮先輩が言い争いをしていた。

「ちよっ!!? 2人共どうしたんですか!!?」

「石上君……」

「優……翼君と一緒にじゃなかったの？」

「翼先輩にマキ先輩は此処だって聞きました。」

「あら、私に何か用？」



「……内密な話なら私は席を外しますが？」

「いえ、四宮先輩にも聞いて欲しいんです。」

……

「へえ、大仏さんとね……おめでとう、石上君。祝福するわ。」

「良かったわね。大仏って、あのTVに出てた眼鏡の子でしょ？ 眼鏡外したらかなり印象変わって見えるわよね。」

「ありがとうございます。今、その件で色々考えてまして……」

「……石上君さえ良かったら、話してくれますか？」

「そうね、何か問題があるんでしょう？」

「はい、実は大仏がTVに出ていたのは……」

「待ちなさい。」

話し始めてすぐに、四宮先輩に止められる。

「はい？」

「先ず、問題背景を知る為に……付き合う事になった時の事を詳しく話すべきだと思わわ。」  
カクカ

「た、確かにお婆様の言う通りね……優、詳しく話してー」 ヅツツ

「ええ……女子ってホント恋バナ好きですよね。」

……

四宮先輩とマキ先輩が固唾を飲んで僕の話に聴き入っている。途中、こぼちと桜の木の下でした遣り取りも細かく説明させられた。流石に恥ずかしいからと濁して言おうとしたら、滅茶苦茶怒られたし清々しい程全部吐かされた……もう胃液も出ない。

告白の微に入り細を穿つ説明が終わり、僕の計画を2人の先輩に伝えた。

「へえ？ 石上君にしては……という遣り方ね。」

「……ダメ、でしょうか？」

「私は嫌いじゃないわよ。初手の子供っぽさと未成年である事を利用した狡賢さ、そして前準備は完了済み……強いて言えば、その父親に対する罰が軽過ぎるくらいかしら。」

「そうですかね……マキ先輩はどう思います？」

「私もお婆様と同意見よ。だけど、1つだけ……彼女には伝えてるの？」

「それは……」

「ま、優の言いたくない気持ちもわかるけどね……」

「今回の件で、大仏は十分辛い思いをしました。これ以上余計な罪悪感とか感じて欲しくありませんし、縛り付ける様な真似はしたくありません。」

「……でも、石上君が待っててくれて、彼女は心の底から嬉しかった筈よ。」

「……」

「無意識に、心の奥底で望んでいた……彼女が1番求めている行動を……石上君、貴方は取ったのよ。」

「だったら俺が見せてやる。」

かぐやの脳裏には、かつて夏祭りで自分を探し出してくれた男の姿が去来する。

（まるで会長みたい……そう思った事が間違いじゃないと言える程、貴方は優しい子ね……）

「確かに……石上君のしようとしている事の一部は、大仏さんが気に病んでしまう内容かもしれない……でも彼女からしたら、石上君が1人で抱え込む事を良しとするかしら？」

「それは……」

「逆の立場なら……優はどう思う？……コレはそういう話よ。」

四宮先輩とマキ先輩の言葉に僕は……

「まあ……石上君がやろうとしている事自体は、別に問題ないと思うわ。」

「そうね、おさしみやかすおば様より全然マシだと思うわ。」

「だから、それは違うと言ってるでしょう！ アレはもう1人の私が勝手にした事で……！」

（……遊○王？）

「まあまあ、2人共落ち着いて下さい……というか、おさしみって何ですか？」

「「んなっ!? このハレンチ!!」」

「ええっ!?」

こぼちの問題を解決するには、幾つかの条件がある。

1つ、秀知院学園の残り2年分の学費（約400万）の工面。

コレは前回の僕なら到底無理だったけど、今回はなんとか出来る。

2つ、こぼちの母親の収入源の確保。

例えこの件が解決しても、こぼちが大学進学する場合は進学先の選択肢が狭まってしまうので心配していたが……

3つ、こぼちが芸能事務所と契約をしているかどうか……

コレが最も重要な案件だったが、こぼちに確認すると書類等に一切のサインはしていないと言う。全くの無契約な少女をTV局が出演させるとは思えない。いざという時の為、書類上の責任者がいる筈だ。そして……こぼちがTV局で聞いた父親の発言から、当面の責任者は間違いなく父親だ。まあ、大した問題を起こす訳じゃないからそこまで凄い賠償額にはならないだろうけど……

「なあ、こぼち……」

隣を歩く少女に話し掛ける。

「うん？ なあに、優？」

「明日、僕は……」

いよいよ、明日は……クリスマスイブだ。……恋人同士が寄り添う日、そして……  
大仏こぼちの問題を解決する日だ。

## 大仏こばちを守りたい

12月24日、クリスマスイブ当日……こばちの問題に決着を付けると決めた日に僕とこばちは……

「凄い綺麗……」

「だな……」

クリスマスデートをしていた。立ち並ぶ樹々に取り付けられた光り輝くイルミネーションが……道行く人々を明るく照らす。夜空はネイビー色に彩られ、その下を歩くのは殆どがカップルだ。

「こばち、寒くないか？」

「うん、大丈夫。でも……ホントに良いのかな？」

「大丈夫だよ。」

不安そうにするこばちを宥める。今日、こばちは番組収録をドタキャンしている……いや、僕がさせたと言った方が正しいか。こばちのスマホには父親からの電話がひっきりなしに掛かって来るので、今は電源を切っている。相当怒っているだ

ろうな……だけど、それで良い。冷静さを欠いた状態なら、僕でも言い負かすくらいは出来る筈だし、暴力に訴えて来るなら話はよりシンプルになる。父親だからと言って、こばちを泣かせていい理由も利用していい理由もないのだから。

………

### 〈大仏家〉

こばちとのデートが終わると家へと送り届ける……世間では性の6時間とか言っ  
て盛り上がっているカップルも居るだろうが、僕はそんな性欲を優先するヤリチン  
でも、世間の風潮に流されがつついてしまう童貞でもない。そういう神聖な行いは  
もっとこう……お互いの気持ちを大事にするべきで、クリスマスに便乗してするの  
は違うと思う。

行為の神聖視や気持ちが大事とか言う辺りは、まさしく童貞ぽかった。

こばちの母親からのメッセージで、既に父親は家に居るといふ事を知った。ドア  
を開く前にこばちへ視線を向けると目が合った……それは、覚悟と意思の宿った瞳  
だった。

………



「……ただいま。」

「お邪魔します。」

家へと入ると、ドタドタと騒がしい足音が聞こえて来た。

「こぼち！ お前仕事をドタキャンするなんて何考えてるんだ!!」

父親の剣幕に、ビクツと肩を震わせたこぼちを背中に庇う。

「優……」ヤッヒ

ギョツと不安そうに腕に掴まるこぼちに……

「大丈夫。」

と返して、父親へ向き直る。

「なんだお前は？」

「はじめまして、こぼちさんとお付き合いさせて頂いてる石上と言います。」

「……お前がこぼちを誑かしたのか!？」

「はい、そうです。僕が仕事をドタキャンする様に言いました。」

「お前……自分が何をしたかわかってるのか!!」

「たいきさん、話ならリビングで……」

母親に宥められると、こばち共々リビングに案内される。父親と反対側のソファにこばちと座り、父親はソファにドカッと座ると……苛立ちを隠さずに話し出した。「プロデューサーはカンカンだ。それ以外にもスタッフや共演者の人間にも迷惑が掛かった……こばち、お前には常識というモノがないのか!？」

「……」

「……」ヤム

俯いて沈黙するこばちの手を握る。

「……常識と言いますが、実の娘を利用して芸能界でのし上がろうとする貴方の方が常識が無いのではないのでしょうか？」

「な、なにを……」

「こばちさんは聞いたそうですよ？ 貴方が楽屋で……番組プロデューサーとどのような話をしている所を。」

「それは……」

「そもそも、娘とはいえ未成年に無理矢理働かせるのは労働基準法違反です。例えば働き場所が芸能界であろうと関係ありません。」

「……番組収録をドタキャンしたんだ、こばちには賠償責任が生じるぞ？ お前がこばちを唆したからっ……」

「……子供だからって舐めてます？ ある訳ないでしょ、そんなモノ。こばちは書類の類いには一切のサインをしていないと言っていました。だけど、何の契約もしていない少女をTV局が使うとは思えません。何かあった時の責任者がいる筈です……貴方でしょう？」

「……」

思った通り図星らしく、僕はそのまま話を続ける。

「だから、賠償責任が生じるとすれば貴方で、こばちには一切の責任はありません。こばち自身、もう芸能活動はしたくないと言っていますし……」

「……じゃあ、こばちが転校しても良いんだな？」

「……」

「元々、こばちが芸能活動を再開したのは学費が払えないからだ。芸能活動をしないうちから、公立校に転校するしかないぞ？ それに、大学に進学するなら更に金がいる……用意出来るのか？」

ニタニタと笑いながらそう言う父親に、若干の苛立ちを覚える。くだらない……揚げ足を取ったつもりで、得意気な表情を浮かべる男に毅然とした態度で言い放つ。

「それに関しても問題ありません、ご心配なく。」

「なっ!? そんな馬鹿なっ……一体どうするつもりだ!?」

その言葉に僕は、時間が戻って数ヶ月経った頃を思い出した。

……

特に深く考えずに……僕は父さんに、わかる範囲のヒット商品の情報を伝え続けた。最初の商品がヒットし、次の商品も……そのまた次の商品もヒットした……当たり前だ、僕には何がヒットするかわかっているのだから。会社の経理に関わった前回同様、今回も経理に携わっていた僕だけ……会社の利益や仕入れなどに目を通していて思った。

あれ? もしかして、やり過ぎた? と。

それ程までに……前回とは桁違いの利益を父さんの会社は得ていたし、終いは……

「優、お前が会社継ぐか?」

と父さんに打診される始末……勿論全力で断った。会社は兄貴が継げば良いと思つてたし、僕は人の上に立つタイプの人間じゃない。ただ……父さんがそんな事を言う程の利益を会社にもたらした……その事実が無ければ、こぼちの学費の問題もクリア出来なかつただろう……

……

「……という事なのでご心配なく。母親の芽有さんも既に了承済みです。」

「お前……知ってたのか!？」

「ええ……知っていたわ。」

「くっ……恥ずかしくないのか!? こんなガキに施しを受けるなんて……」

当然、話を持ち掛けた時は断られた。だけど、根気強く話を続けて納得してもらつたし、借りを作るのが嫌なら学費を返すのはいつでもいいし、働く意思があるのならウチの会社で雇う事も提案した。だけど、母は強しというか……

「施し?……馬鹿を言わないで。」

「……は?」

先程までとは違い……凜とした雰囲気を纏つた女性は、毅然とした態度で発言し

た。

「1年よ。1年でこばちの学費も進学に必要な費用も……全て稼いでやるわよ。」  
芸能界に復帰してね、と告げた母親にこばちも驚いた様だ。

「本当に情け無いわね、私達……子供に余計な苦勞を掛けて、親失格だわ。」

「お、お前……」

「元々、事務所から芸能界復帰の打診は来てたのよ。私が臆病で甘えてただけ……こばち、ごめんなさいね……辛い思いをさせて。」

「お、お母さん……」

瞳を潤ませるこばちの背中を優しく摩る。

「だ、だったら俺と一緒にまたっ……」

「お断りよ、貴方はもう他人なんだから。」

「……他人？」

「昨日、離婚届にサインをして役所に提出したわ……貴方は既に記入済みだったんだから、問題無いでしょう？」

「え……あ……」

「話は終わりよ、さっさと出て行つて。」

「くっ……」

父親はガラリと鋭い視線を僕に向ける。

「ヒーローにでもなったつもりか？ ええっ!? ガキの分際でよくもっ……」

「お父さん……」

「……別にそんなつもりはありません。只、好きな人を泣かせたくないだけです。」

……好きな女の為に寒空の下でいつまでも待ち続け、数百万の金額を立て替え、家庭の事情に踏み込む……見る人が見れば青いと嘲けり、世間知らずと罵り、馬鹿だと糾弾するだろう……しかし、それで良いのである。男は惚れた女の為ならば、天才の仮面を被り続ける事も……

どこまでも優しく  
突き抜けた馬鹿になる事も出来るのだから

## 石と小鉢のエピローグ

アレから直ぐに、こぼちの父親は出て行った。汚い言葉を撒き散らし、最後には二度と顔を見せるなど言って……実の父親からそんな事を言われたこぼちが心配になり視線を向けるも……

「……大丈夫、案外平気みたい。愛想が尽きたって感じ？」

と、本人はケロッとしていた。それに、母親である芽有さんも……

「はあ……あんな男に未練を持ってたなんて恥ずかしいわね。」

結果的にこぼちの問題も解決したけど、まさかアレから直ぐに離婚届を出していたとは……女は度胸という言葉を聞いた事があるけど、覚悟を決めた女性は強い……いや、子を守ろうとする母が強いのか？ぐるぐるとそんな事を考えていると……

「こぼち、お母さんはちょっと出掛けるわね。」

「え……こんな遅くに？」

「事務所の飲み会に顔出しに行くわ。これからまたお世話になる訳だし。」



「……うん、わかった。」

「……優君、こぼちだけじゃ心配だから泊まって行ってくれるかしら？」  
という、とんでも発言が飛び出した。

「ええっ!？」

「お、お母さん!？」

「こぼちも朝帰りしたんだから、別にいいでしょ？」

「あ、朝帰りって……別に何もなかったよ!？」

「別に何かしろなんて、お母さん言っていないんだけど……」

「そ、それはそうだけどっ……」

「じゃあ、そういう事でよろしくね、優君。」

芽有さんはそれだけ言うと、出て行った。

「なんか、最初のイメージと大分違う気が……」

「……私知ってる、働いてた時のお母さんはあんな感じだよ。色々吹っ切れたんだと思う……お父さんの事もスキャンダルの事も。」

「そっか。」

（だとしたら……良い事、なんだろうな。）

「そ、それで……泊まって行くんだよね？」

「こ、こばちが良かったら……」

「うん、お願い……お風呂入る？」

「あ、じゃあコンビニで下着買って来るよ。」

「私も一緒に行って良い？」

「いいけど、寒いぞ？ 此処で待ってた方が……」

「今日はなるだけ一緒に居たいの……ダメ？」

「……いいよ、じゃあ行こうか。」

「うん、ついでにクリスマスケーキも買って帰ろ？」

「そうだな、こばちは何が良い？」

「うーん、チョコも良いけどどうしようかな。」

クリスマスイブの寒空の下、恋人と手を繋いで夜道を歩く……気温は低く、風は冷たいけれど……繋いだ手は、じんわりとした温かさを保っていた。

日付けも変わった次の日、残った二学期登校日も今日と明日の終業式を残すのみとなった。こぼちの家を早朝に出て、自宅で軽くシャワーを浴びて制服に着替える。眠気を飛ばす為、普段は飲まないブラックコーヒーをパンと一緒に流し込む。……結果的に朝帰りする事になった僕を母さんは何も言わずに迎えてくれた。……父さんはその後ろで、人差し指と親指で作った輪っかに指を通すという下品極まりない動作をしている所を母さんに見つかり叩かれた。そんな自宅での一幕も終わり、これからまたいつもの日常がやってくるという予感を感じながら家を出た。

……

### 〈生徒会室〉

二学期も明日で終わる為、今日中に提出する書類の整理をする。先輩達や伊井野も冬休みに向けた書類作成や整理に勤しんでいる。ソファに腰掛けてパソコン作業をする僕の隣には、恋人の大仏こぼちが陣取っている。暫し書類作成に勤しんでいると、隣に座る少女が自身の腕を摩るのが目の端に映った。この生徒会室にはエア

コンが無い為、梅雨はジメジメ、夏は暑く、冬は寒いという環境だ。僕はソファから立ち上がると、事前に準備していた毛布をこぼちの背中から掛けた。

「あ……優、ありがとう。」

「ああ……此処は冷えるから風邪引くなよ、こぼち。」

「うん。」

「……」

「……」

「……」

「」

先程までのペンを走らせる音や資料を捲る音がなくなった事に違和感を感じ、周りを見渡す。

「あれ、皆どうしたんですか？ 藤原先輩は特に凄い顔してますけど……」

「今、石上くんとこぼちちゃん……名前で呼び合いませんでした？」

「そりゃ、そうですよ。付き合ってるんですから。」

「……聞いてない!! 聞いてませんよ、そんな事!？」

「そりゃあ、藤原先輩には今初めて言いましたからね……」

「なんですぐに教えてくれないの!? 普段お世話になってる先輩に対して、あまりにも不義理じゃないですか!?!」

「お世話……?」せで

「本気のキョトン顔やめて下さい!……ん? 私にはって言いました?」

「はい。」

藤原先輩はギギと首を回して会長達に話し掛けた。

「か、会長?」

「ああ、知ってたぞ。」

「か、かぐやさん?」

「勿論、知ってたわよ。」

「み、ミコちゃん……?」

「口止めされてたので……」

「なんで私には教えてくれなかったの!?!」

「今教えたじゃないですか……」

ギヤイギヤイと叫ぶ藤原先輩に呆れ顔で答える。

「なんで1番最後のの!?! 普通にシヨックなんですけど!?!」

「優は悪くないんです。私の事情で色々あって……すいません。」

「あぁっ……別にこばちゃんを責めてる訳じゃないですよ!?!」

申し訳なさそうに謝罪するこばちに、藤原先輩は虚を突かれた様で慌てている。

「まぁ、藤原先輩みたいなtricksterに教えるのは、全部終わってからって決めてたんで……」

「誰がtrickster!?! こばちゃん、本当に石上くんが良いの!?! 私だったら絶対選ばないよ!?!」

「……はい、優じゃないとダメなんです。だって……大好きですから。」

そう言って微笑んだこばちの表情は、今まで見た中で1番輝いて見えた。

――完――

ここまで約3か月、お付き合いしてくださってありがとうございました。(V:V)  
 最後は駆け足気味になったかもしれないが……元々はかぐ告二期のアニメ11話を見て、テンションのまま書き殴った今作でした。一応、時系列やキャラの口調などには気をつけて書いたつもりですが、不備があったらすいません。

大仏が石上に恋心を抱いていた描写や、かぐやの石上と大仏は似ている発言からヒロインを大仏こばちにしました。

あと、何話かアフターストーリーを書く予定ですので、お暇ならお付き合い下さ

い。(V:V)

## 仏の小鉢after①

感想、誤字脱字報告ありがとうございます

（・・・）

## 〈生徒会室〉

3学期に入って数日……今日は珍しく、僕が生徒会室に1番乗りの様だ。いつもなら会長や四宮先輩が先に居るんだけど……僕は先に仕事を始めようと書類を準備する。

「……」

暫し、書類に必要事項を記入していると、記入ミスをしてしまった。

「あー、しまった……これだから、紙書類は苦手なんだよ。修正液って何処だったの？」



僕は棚や引き出しを探すも目当ての物は見つからない。残るは会長の仕事机の引き出ししかない。

「えーと……」

ゴソゴソと机を漁っていると、カチッと爪に硬い何かが当たった。

「……なんだ？」

つい気になってしまい、ソレを取り出すと……何故か、会長の机の引き出しから手錠が出て来た。

「ええ……なんで手錠？」  
ヤッヤッ

手錠を持ち上げて眺めていると、ドアが開かれる音がしたので振り返る。

「こんにちは……」

「ああ、伊井野か、お疲れ。」

もし……この場面で伊井野ミコ以外の人間がドアを開けたのなら、別段問題はなかった。藤原主催のクリスマスパーティーに参加した、白銀御行、四宮かぐや、藤原千花の3人は、石上が持つ手錠がプレゼント交換で白銀御行に当たった藤原萌葉のプレゼントだと理解しているし、恋人である大仏こばちならば早合点せずに、

それどうしたの？と聞いてくる程度だろう……

「ひっ……い、石上、それでどうするつもり!?」

唯一……何事に対しても早合点し、むつつりスケベな妄想癖のある伊井野ミコだけは、違う答えに行き着いてしまう。

「……!?」

（て、手錠を持った石上十部屋には私と石上2人だけ……ち、調○される!?）

「何勘違いしてるんだよ、コレは……」

後退る伊井野に説明をする為、近付く。

「だ、ダメよ石上……アンタにはこばちゃんがっ……」

「どんな勘違い!? 伊井野お前、むつつりも大概にっ……」

僕は伊井野を落ち着かせようと軽く肩を掴んだ。

「いやあああっ!!?」

「いやあああじゃねえよ!! どんだけ真に迫った叫び声上げてんだ! ちょっとマジで黙ってくれ! こんなトコ見られたら誤解されるだろうが!!」

「むぐうっ!!」

勘弁してくれ、という気持ちで伊井野の口を塞ぐ……と同時に部屋のドアが開いた。

「こんにちはー！」*チャッ*

「お疲れー。」

「こんにち……」

最後に入って来た四宮先輩と目が合い、続いて会長、藤原先輩の視界に僕と伊井野の姿が映った……片手に手錠を持ち、もう片方の手で伊井野の口を塞ぐ僕のが……

……

「だから、違うって言うてるでしょうが！ 修正液探してたら、会長の机から出て来たんですよ！」

散々藤原先輩から詰られた後、弁明を試みる。会長と四宮先輩は、始めから何か事情があるのだろうと察してくれている。

「会長の？ あー……」

「あら会長、それって……」

「藤原妹からのクリスマスプレゼント……だな。」

「……は？ 手錠がクリスマスプレゼント？ もしかして、藤原先輩の家族ってヤバイ人しか居ないんですか？」

「いや、親御さんは凄くまともだぞ。」

「ええ、親御さんは……ね。」

「ちょっとちょっと、2人共々？ それじゃまるで、私達姉妹がヤバイ人みたいじゃないですかー？」

（いや、別に比喩的な意味で言った訳ではないんだが……）

（その通りでしょうに……）

「か、会長の私物……？」 *カタカタ*

伊井野はカタカタと、身体を震わせながら会長を睨み叫んだ。

「せ、生徒会室で手錠プレイとか、一体何を考えてるんですか!？」 くわっ！

「人の話聞いてた!？」

「お前が何考えてるんだよ!!」

「っ！」

(て、手錠プレイ……)

か、会長っ……離して下さい！

駄目だ。四宮が俺から離れられない様にする為には、躰が必要だからな。

だ、ダメです、会長……あ……

「……っ！」*ぎぎぎ*

(か、会長がどうしても言うなら一回くらいは……)

かぐやの性知識は中級者レベルに上がっていた。

「こんにちはー。」*チャチャ*

「こぼちゃんー！」*ヤッヤ*

伊井野は入って来たこぼちに抱きついた。

「わっ、ミコちゃんどうしたの？」

「こぼちゃん、大丈夫？ 石上に手錠プレイとか強要されてない!？」

「えー……」

「だから手錠は僕のじゃねって言ってんだろ！ よしんば手錠プレイに使ってるとしても、本来の持ち主である会長だから!!」

「俺もねえよ!!」

白銀、とんでもない巻き込み事故に遭う。

「……なるほど、優が白銀会長の手錠を持っている所を偶々目撃したミコちゃんがまた勘違いしたんですね?」

「俺の手錠という部分は否定したいが……概ねその通りだ。」

「こぼちちゃん、よくわかりますねー。」

「まあ、ミコちゃんとは付き合いも長いので……」

「それでも、石上くんが浮気するとかは考えないんですか?」

とんでもない質問をこぼちに投げ掛ける藤原先輩を止めようと話し掛ける。

「藤原先輩、変な事言わないで下さいよ。」

「だって男は狼なんですよ!?!」

「……っ!」ちがひ

藤原先輩の発言に伊井野も頷いて賛同する。

「優の事、信じてますから。」

「むむむ、見せつけてくれますねー。でも、生徒会にはかぐやさんやミコちゃん、

そして何よりこの私っ……」

「すいません……藤原先輩の事は魅力的な人だとは思ってますが、僕の趣味趣向にはガチのマジでそぐわないです。」

藤原はつられた。

「……石上くん、一回でいいからぶん殴っちゃダメ？」

「嫌ですよ……」

3学期も生徒会は平常運転である。

〈大仏たいきは出られない〉

時間は少し巻き戻る……クリスマスも終わり、今年が終わるまであと僅かという今日、大仏たいきは芸能事務所に呼び出されていた。

「……全てのTV出演が見送り？ど、どういう事ですか!？」

「どういう事……か、それは私が聞きたいね。」

高級な椅子にドツカリと座る社長の眼光に射抜かれる。

「おい佐々木、説明してやれ。」

「は、はい……」

そう促された佐々木という男は俺のマネージャーだ。黙って佐々木の言葉を待つ。

「し、出演予定だった全ての番組プロデューサーから、ウチでは使えないと連絡が来ました。それ以外の……ローカルを含めたTV局にも営業を試みましたが、結果は変わらず……」

「な、なんでそんな……」

「普段からウチと懇意にしてくれているTV局のお偉方が言うには……スポンサーからの指示だと。」

「す、スポンサー……？ な、何故……何処の会社がそんな指示を……」

「……四宮グループです。」

……

〈四宮邸〉



「かぐや様……TV局への指示と根回し、全て完了しました。」

「あら、お疲れ様。ふふ、自己顕示欲の強い目立ちたがりな芸能人がテレビに出られない……あらあら、どうやって賠償金を支払うのでしょうか？」

「……今回は、随分と動かれましたね。」

「そうかしら？別に、借りを返しただけよ。」

「借り……ですか。」

「ええ、四宮家たるもの、借りは返すのが必定ですもの。」

「……たかが喫茶店の無料券を貰った借りとしては、随分なお返しですね。」

「……私にとっては、十分過ぎる程大きな借りだったのよ。」

（だって……夏休みに会長と会うキッカケを作ってくれたんだもの。）

かぐやはヒラヒラと〈珈琲無料券〉と表記された紙を揺らしながら嬉しそうにソレを見つめていた。

## 仏の小鉢after②

感想ありがとうございます（・∀・）

if√は集計後、12月に投稿開始します。

デブリボン……一体、何原ちゃんなんだ……

〈藤原千花は愛されたい〉

「皆さんの私に対する態度が最近、本当に酷い。」

藤原のこの発言を発端に、突如開始される事となった〈愛してるゲーム〉……面と向かい合い「愛してる」と発言、それに対して照れたら負けというシンプルなゲームである。

「とりあえず、ミコちゃんとやってみますね。ミコちゃん、こっち来て。」

「は、はい。」

「ミコちゃん……愛してる。」

「っ!？」

「こんな感じで、照れたり狼狽したら負けです……皆さん、散々私を馬鹿にしてるんですから、まさか照れたりなんて……しませんよねえ？」

「する訳ないでしょう？ なんだったら、ハンデ有りでも良いですよ？」

「……」

（愛してるゲームでハンデって何だ？）

白銀は困惑した。

「そんな事言って、後悔しますよ!？」

「僕言われる側だけで良いですか？ こばち以外には愛してるなんて言いたくないので。」

「ゆ、優!？」

最近の石上は、ブレーキが壊れていた。

「くっ、なんか見せ付けられてる気分です……精々彼女の前で照れない様に気をつけるんですね!! ミコちゃん、スタートの合図を！」

「は、はい！では、スタートです！」

「……この1年間、石上くんとは色々やり合って来ましたね。今まで私と対等な態度で接してくれる男子って会長くらいしか居なかったもので、石上くとワーワーやってる時が実は1番楽しかったりしたんですよ？……えへへ、石上くん好きだよ。」

「……」ギョッ

秘技、舌噛み！前回の人生において、石上優は藤原千花相手にこのゲームで照れてしまい、あっさりと敗北を喫した！その際藤原に、アホ程マウントを取られた事を石上は未だに根に持っていたのである!! 照れない為、耐える為に舌を噛み、拳を強く握り、態と伸ばした爪を掌に食い込ませた痛みで藤原の発言に死ぬ気で耐える。男としてのプライド、恋人の前で無様な姿は晒せない……と言えば聞こえは良いが、只々藤原にマウントを取られた事が悔しかっただけである。

「……もういいですか？」

「うあーっ！なんでえっ!! 普通の男子なら瞬殺なんですよ!!」

「何度でも言いますが、藤原先輩は僕の趣味趣向にはガチのマジでそぐわないから

です。」

「何度も言わないで下さい！ 次です、次!! 会長ですよ!!」

「お、俺か!？」

会長と藤原先輩のやり取りを尻目に、こばちと向き合う。

「優、よく照れなかったね。」

「……そりゃそうだろ。こばちに言われるならまだしも……」

「ゆ、優……愛してる。」

「……僕も愛してるよ、こばち。」

こばちを抱き寄せ、耳元で囁くと耳まで真っ赤になったこばちが此方を睨む。

「も、もう！ 私ばかりドキドキさせられてる気がする……」

「……少しはカッコ付けさせてくれよ。」

「優はずっと……あの時から、カッコイイままだよ。」

僕は仏の事、ちゃんと見てたよ。

そう言って私を助けてくれた……あの時から。

「……」

（羨ましい、堂々とイチャイチャして……あとで、仕事を理由に会長と残ってギュッとしてもらいましょう。）

「……なんで、会長は泣いてるんですか!? どんな感情が渦巻いてるんですか!?」

「……」 いはい

（ふふ、流石は会長ね……やはり殿方とは斯くあるべきだわ。）

「……って石上くん！ 何を堂々とイチャついてるんですか!? 離れて下さい!!」

「独り身の嫉妬は見苦しいですよ。」

「言い方あ!!」

本日の勝敗、藤原の敗北

生徒会男子を照れさせる事が出来なかった為。

「……」 ハハハハハ

（び、びっくりしたあ……石上とこばちゃん、き、キスするかと思った……）

伊井野の敗北

〈石上優は結びたい〉

「……会長、コレは？」

僕は机の上に置かれた箱を指差して尋ねた。

「ああ、校長からの差し入れだ。」

「わーっ！ サクラランボのゼリーだ！ 早速食べましょう！ はい、ミコちゃん。」

「わーい！」

順番にゼリーを渡す藤原先輩を見ながら思った……来たかと。

前回の人生で起こった石上優チェリーボーイ事件！ サクラランボの茎を舌で結べるかを競った勝負に於いて、石上は藤原に敗北！ 前回の人生で苦汁を舐めさせられた愛してるゲーム同様、アホ程マウントを取られたのである。そして、石上は当然ながらそれも根に持っていた！ 故に、この時の為だけに茎結びの練習を滅茶苦茶して来ていたのである！

「皆さん、サクラランボの茎を口の中で結べます？」

藤原先輩の発言を皮切りに、皆がサクラランボの茎を口の中へと放り込んだ。四宮

先輩は、今回も秒でクリアしていた。流石に四宮先輩みたいに、口の中で結んで解けるテクニシャンには勝てないけど……そうこうしている内に、手応え……いや、舌応えを感じて舌を出した。

「あ、出来ました。」

石上は舌を出し、クリアした事をアピールするが……

「……」

シンと生徒会室は静まり返っていた。

「え？ 何ですか、この空気？」

石上は気付いていない。前回の茎結び勝負に参加した人間の中には、表向きは付き合っている人間がその場に居なかった。白銀御行と四宮かぐやは今回も当然恋人同士ではあるが、表向きは付き合っていないし、かぐやは茎結びを出来なかったと装っている……石上優と大仏こばちの2人だけが周囲に認知されているカップルなのである。つまり……

「い、石上……アンタ……」フ。ゥ。ゥ。」

「えっ、何？」



「そ、その舌遣いで、こぼちゃんの口の中を陵辱しまくってるのね!？」

「はあああっ!？」

この様な誤解が生まれるのも必然であった。

「こ、口腔陵辱罪で取り締まるわよ!!」

「嫌な言い方すんじゃねえよ! なんだよ、口腔陵辱罪って!？」

「アンタがこぼちゃんに普段からしてる事よ!!」

「誤解だって! こぼちも何とか言ってっ……」

「あ……」

大仏こぼちとて、乙女である。彼氏である石上優が、茎が結べればキスが上手いと言われる茎結びを1分と経たずにクリアした事実を目の当たりにし、平静を失っていた。

「こぼち、今その反応は誤解されるヤツだから……」

「ご、ごめん……!」

「い、石上……やっぱり!？」

「だから違うって……」

「あ、出来ましたー……じゃ、皆さんお仕事に戻りましょうか。」

話を終わらせ様とする藤原先輩の発言に反発する。

「ちょっと待って下さい！ 誤解が解けてから次に行って下さいよ!？」

「さ、流石は石上だ……だが、校内では慎みを持つようにな。」

「会長!？」

「テクニクも大事だけど、1番大事なのはタイミングよ？」

「四宮先輩!？」

（一番のテクニシャンがそれ言います!？）

「ゆ、優……私もその、上手に出来る様に頑張るから……」

「……っ!？」

「……石上、今はやめとけよ。」

「……大丈夫です、耐えました。」

「うん？ 優、どうしたの？」

「……なんでもないよ。」

（あんな事言うなんて、我慢する男の事も考えてくれよ……）

本日の勝敗、石上の敗北  
彼女の発言がクリーンヒットした為。

## 仏の小鉢after③

## 〈中庭〉

「みんなー、お待たせー。」

中庭に設置されたベンチに、ミコちゃん、小野寺さんと3人で腰掛けていると、此方に走って来る大友さんが見えた。今日は4人で集まってお昼ご飯を食べる約束をしている。

「ゴメンね、遅れちゃって。4時間目が体育だったの。」

「気にしないでいいよ、大友さんも座ったら？」

「うん……伊井野ちゃん、また凄い大きいお弁当なんだねー。」

「こ、これは、家政婦さんがお父さんのお弁当と間違えたからで……」

「そうなんだー。」

（おっちょこちょいな家政婦さんなんだー。）

「伊井野……」

（その家政婦さん、今週だけで3回は間違えてる事になるんだけど……）

「ミコちゃん……」

（その割には毎回完食してるよね……）

「な、何？」

「んー、なんでもないよ。」

「お昼、食べよっか。」

「え、ええー……」

……

「そういえば……なんか人が少ないと思ったら、2年生いないんだね？」

「修学旅行だからねー。」

大友さんの呟きに、お弁当を摘みながら答える。

「でも、2月のイベントと言えばアレだよね！」

「バレンタインだね！」

「こばちゃん、今年もまた皆で集まって作るの？」

「伊井野、それは無いって。大仏さんは、自分だけの手作りチョコを渡したいと思

うよ？」

「う……まあ、そうなんだけど……今年はちゃんとした手作りチョコを渡したいなって……」

「自分にチョコ塗って、召し上がれみたいな？」

「しないよ!? 大友さんの中では、それがちゃんとなの!？」

「ど、どういう意味の召し上がれ……」

「ミコちゃん、掘り下げなくていいから! もう、大友さんも変な事言わないでよ……」

「だって、おさちゃんは唯一の彼氏持ちだしー。」

「私は今年は手作りせずに、普通の売ってる奴を義理チョコとして渡すよ。」

大仏さんに悪いしね、とニヤケ顔で言われる。

「別にそんな事で嫉妬とかしないよ?」

「ホント? 石上君が他の女の子からチョコ貰ってても平気?」

「ふふ、もちろん。それだけ、優の事を良く思ってる人が居るって事でしょ?」

「うわ、流石彼女……余裕の表情。」

「おさちゃんは、浮気の心配はしてないの？」

「んー、してないね。信じてるもん。」

「確かに、石上は浮気しそうにないよねー。」

「優しくてー。」

「誠実だし。」

「真面目……」

大友さん、小野寺さん、ミコちゃんが順番に優の良い所を挙げていく。

「あー！ 私も彼氏欲しー！ そんな人どこかに居ないかなあ……」

「実は石上って、メチャクチャ優良物件なんだよね……一部の女子から人気あるらしいし。」

「えっ、麗ちゃんそうなの!？」

「んー、大仏さんと付き合い出す前までは、割とそういう話聞いてたよ。」

「あー、なんかウチのクラスの女子が、文化祭の会議とか準備で凄く頼りになっ  
たって言ってたよ！」

「へー……」

「あれ？ 大仏さん、危機感感じてる？」

「ち、違うからっ……」

「石上君を離れさせない為にも、チョコ塗って召し上がれて……」

「其処に話に戻るの!？」

「こ、こばちゃん……」

「しないから!……ほら、もう昼休み終わるから戻ろ？」

「もう、そんな時間かー」

「じゃあ、また一緒に食べようね。」

「うん。」

「大友さん、また今度。」

「バイバーイ!」

走り去る大友さんを見送る。

「私達も戻ろっか。」

「うん。」

「……そうだね。」



〈バレンタイン当日〉

男子が浮き足立ち、ソワソワとするバレンタイン当日……当然、僕も男なので多少はソワソワとしてしまうが、こばちから貰えるのなら他はなんでもいいと思っていたが……

「おはよ、石上。はいコレ。」

小野寺……

「い、石上！ コレあげる！」

伊井野……

「石上君、友チョコだよ。」

大友……

「石上君、これあげるわ。」

四宮先輩……

「うぷっ……石上くん、私もう食べられないからあげる……」

藤原先輩……残飯処理みたいな渡し方して来るのは、人としてどうなんですかね……でも嬉しいは嬉しいし、色々な女子から貰えるのは有り難かった。でもやっぱり、1番嬉しいのは……

「優、コレ……」

こぼちからハート型の箱を手渡される……じんわりと胸の奥に熱が灯る。

「ありがとう、凄い嬉しいっ。」

「うん、それと……チョコとは別に、渡したいモノがあるの。」

「ん、何？」

「目……瞑って。」

「わかった。」

目を閉じると……地面を蹴るタンっという音と共に、唇に柔らかな感触を感じた。

「!!？」

驚いて目を開けると、目の前の愛しい少女の瞳と目が合う……

「私の初めて、あげるね。優……大好き。」

イタズラが成功した子供の様に、そう言って微笑んだ少女に……僕もだよと答える。もう辛い思いをしなくてもいい様に、どんな苦難が訪れようとも僕が傍で守り続けると、その笑顔に誓いながら。

とりあえず、この話で仏の小鉢編は終了です。  
12月からは、√B・開始します。(。ω。)



## √ B. 龍と黒白の珠編

### 龍珠ルート突入

アンケートの結果

年上の眼光鋭き、極道少女（444）

同級生のむっつりスケベ風紀委員（263）

デブリボン（100）

その他（34）

となりましたので、龍珠桃編開始します。

アンケートにお答えして頂きありがとうございました。（√A）.

この√は、60話のハッピーライフゲームで、大仏こばちではなく龍珠桃を選択した世界線となります。故に、大仏こばち√で起こった大仏父イベントは無く、学

費問題に寄る大仏こぼちの芸能界入りもありませんし、大仏こぼちは生徒会にも入りません。

その他のイベントは、同じ様に起こっていると思って下さい。(眞妃ちゃん関連など)

その設定を許容出来るなら、お読み下さい。(ÄÄ).

夏休みも終わり、未だ残暑を感じ続ける9月のある日……四宮かぐやは、藤原千花、その妹萌葉、その友人白銀圭と4人でウインドウショッピングに出掛けた。秋物の服を買い揃え、次の店へと移動していると……

「……」

(あら？ この喫茶店は……)

かぐやは、ある喫茶店の前で暫し立ち止まる。その喫茶店は夏休み、想い人である白銀御行と共に数回利用した喫茶店だった。夏休みの始めこそ白銀と会う機会の

無かったかぐやだが、8月に入って直ぐに白銀から喫茶店へと誘われ、それ以降は週一で喫茶店デートを楽しむ事が出来たのである。

（それも……石上君が気を利かせて無料券を融通してくれたからね。本当に、可愛い後輩だわ。）

かぐやはなんとなしに店内を見渡すと、見知った顔を窓側の席に見つけた。

「……………」

（あら、石上君……偶然ね。）

「かぐやさん、どうしたんですかー？」

「いえ、其処の喫茶店に石上君が……」

「石上くん？……休みの日に1人で喫茶店なんて、寂しい子ですね。」

ぷひゅひゅと笑いを零す藤原をかぐやはジトツとした目で見つめる。

（……態々休みの日に、面倒な思いをさせる必要もないわよね。）

「藤原さん……幾ら同じ生徒会とはいえ、プライベートに不必要な干渉は避けるべきよ？」

「えー？ 折角1人喫茶店っていう、寂しい事してる石上くんをイジるチャンス

なのにい……」

「(休日まで藤原さんの相手をさせられる石上君が)可哀想だから、やめてあげなさい。」

「そうですね！(1人喫茶店してる所を女子に見られるなんて)可哀想ですしね！」

かぐやと藤原は噛み合っていなかった。

「……姉様？ どうしたの？」

「四宮さん？ どうかしたんですか？」

喫茶店の前で立ち止まって、会話を続ける2人を訝しんだ萌葉と圭が近付く。

「あー、石上先輩だ。」

「あ、ホント……1人なのかな？」

「寂しい人ですよね。」 いびい

「あれ？ でも千花姉、向かいの席に誰か座ったよ？」

「え!？」

「あら……」



外から眺めていると、石上の向かいの席には帽子を被った少女が座った。

（龍珠さんと来てたのね。）

「龍珠さんと来てたんですねー。むふ、デートの邪魔しちゃ悪いから行きましかー！」

「そうね……」

（週明けにイジる気満々ね……）

藤原はニマニマとイヤラシイ笑みを浮かべ、窓越しに2人を見ていると……

「……ッ！」ヤラッ

「ぴいっ!？」ピッ

「どうしたの、姉様？」

「千花姉？」

「……藤原さん？」

「い、行きましようか！……ね!？」

「え、千花姉どうしたの？」

「い、いいからっ……ほら、急いで！」

「え、ええー!?」

……

「ん？ 桃先輩、どうしたんですか？」

「……なんでもねえよ。」

「？」

〈9月9日、白銀御行誕生日当日〉

「会長、誕生日おめでとうございます。コレ、誕生日プレゼントです。」

「え？ い、いいのか？」

「はい、会長の為に買った物なので。」

「そうか、ありがとう……開けてもいいか？」

会長の言葉に勿論です、と答える。

「……おお！ 万年筆か、有難い。大切に使用せようよ。」

「喜んでもらって何よりです。」サッサッ

「こんにちはー!」

「こんにちは」

「おう、じゃあ仕事を始めるか。」

暫し、生徒会室にはパソコンのタイピング音とペンを走らせる音が充満する。

(誕生日……か、そういえば……)

僕はパソコンに保存したファイルを開き、目当ての項目を確認して行った。

……

「今日はこれくらいにしよう。皆お疲れ。」

「お疲れ様でしたー! それじゃ、また明日ー。」

「お疲れ様です。僕も今日はコレで……」

「おう、また明日。」

「また明日ね」サッ。サッ。サ

「はい、また明日……」

(なんか、今日の四宮先輩はポヤポヤしてたな……)

僕は、生徒会室に2人を残して出て行った。

……

### 〈石上家〉

その日の夜、そろそろ寝ようとベッドに入ろうとした時だ……そういえばと思い立ち、僕はスマホで藤原先輩へとメッセージを送った。

……

### 〈藤原家〉

「あれ、石上くんからメッセージ来てる……珍しく、なんだろう？」

藤原はスマホを操作して、メッセージ画面を開いた。すると……

「知ってました？ 今日って会長の誕生日なんですよ？」

「」

藤原はやかした。

## I ある少女の独白

私が2年生に進学し、後輩になる新1年生が入学して2ヶ月が経った頃……1人中庭で過ごす女の子を見つけた。なんとなく気になって、友達や部活の先輩や後輩から話を聞くと、その女の子が誰かわかった。広域暴力団龍珠組の愛娘、龍珠桃……そういえば、同じクラスの会長君がやっと口説き落とせたと、友達に零していたのを聞いた事がある。去年、1年生にして生徒会長に就任した傑物と言われている彼がそこまでする程の少女……なのに、彼女はいつ見ても1人だった。ある時は木陰で、またある時は中庭のベンチで……いつも1人の彼女を見て、次は話し掛けようと密かに決めていた。

人生というフィルターを通して見た場合、高校生活の3年間はとても短いモノだと思う……でも、いつか学生時代を振り返る時が来た時、この高校生活はとても大きな割合を占める。その時に嫌な気持ちや苦々しい気持ちを抱き、無意味な高校生活だったと思うてしまう人を少しでも無くしたい……そういう気持ちで、私は龍珠桃という少女を探していた。

……7月に入って直ぐの頃、中庭の木陰でゲームに勤しむ彼女を見つけた。近

付いて話し掛けようとすると、彼女は木の裏側に身体を向けて何やら喋り出した。誰かいるのかな？と様子を窺っていると、木の裏側から中等部の制服に身を包んだ男の子が出て来た。2人は少しの会話の後、座り直しゲームを始めた。そこで初めて私は、笑った彼女を見て……もう龍珠ちゃんは1人じゃないんだと思った。偶々、偶然、偶発的、思い掛けず……このタイミングで彼女と知り合った事は、あの男の子からしたらそういった言葉で片付けられる事だろうし、それは龍珠ちゃんも同じだと思う……只、それを見ていた私だけはどう思った。

この出会いは……運命かもしれないと。

## 星天の霹靂

感想ありがとうございます(ω。)

---

9月某日、今日の生徒会室は少しばかり浮足立っていた。正確には1人の男だけ、だが……

「十五夜！月見するぞー！フッファー!!」

「うわっ……テンション高いですね、突然何を言い出すんですか？」

「それ、藤原先輩が言います？」

「今夜は中秋の名月！こんな日に夜空を見上げないなぞ人生の損失だぞ！」

「えー、急過ぎませんか？」オホ

「……」

（とか言いつつ、うさ耳は被るのか……）

石上は呆れ顔で藤原を見た。

「いや、今日の星空指数めっちゃ良いんだって！十五夜でこの数値出ちゃったら行くしかないから！」

「……僕は乗りますよ。今の生徒会が解散するまで残り2週間も無いんですから、思い出作りです。」

「まあ、石上君がそこまで言うなら……」

「仕方ないですねー……会長！月見団子は!？」

「もちろん用意しているぞ！」

「わーい！」

「さっさと仕事を終わらせて、準備に取り掛かるぞ！」

……

〈屋上〉

「わー、意外と星見えますねー！」

「だな……街灯りも少ないし、ロケーションも悪くない。」

「……学校の屋上程度でも、結構圧倒されますね。」

「石上は、こういうのは初めてか？」



「そうですね……去年の奉心祭で天文部のプラネタリウムを観たくらいですか。」

「ああ、それなら俺も観たぞ。」

「そうだったんですか。」

「ああ、何処かですれ違っていたかもな。」

「……そうかもしれませんね。」

（まあ、すれ違ってたら気付いた筈だから、それはないか……）

会長とそんな話をしている内に、四宮先輩と藤原先輩は物陰に鍋と団子を運んでいた。

「会長、月見団子はもう少し待って下さいね。」

「ああ、すまんな四宮。」

「いえいえ……」

（さて、どうやって石上君を此処から離脱させようかしら……）

「僕も……ちよっと肌寒いんで、火の側に行って暖まって来ますね。」

会長も四宮先輩と2人っきりの方が良いだろうと、僕はその場を離れて藤原先輩の所へと向かう。

「ん？ ああわかった。」

「わかりました。」

（あら、拍子抜けですが……まあいいでしょう。）

物陰に移動すると、藤原先輩が鍋に団子を投入する所だった。

「……藤原先輩、味付けは何ですか？」

「肌寒いのでお汁で頂きましょう！」

「……藤原先輩、それって月見団子じゃなくて、お雑煮ですよね？」

「美味しければ、そんな事は些細な事ですよ！」

「まあ、いいですけど……」

……

「もうやめてって言うてるでしょ!? 恥ずかしいのお!!」

「し、四宮!？」

「……? お餅出来ましたけど……」

「あーもう駄目!! 私耐え切れなーい!!」

「かぐやさん!？」

屋上から走り去るかぐやを一同は只々見送った……

「……」

（……あーなるほど。そういう事だったのか……抱き寄せるとか、会長も結構ヤルなあ。）

石上、前回の疑問点1つ解消。

……

屋上での月見も無事に終わり、時刻は午後10時過ぎ……僕はショートカットを狙い公園に入った。公園には街灯もあるが、それが不必要なくらい月明かりに照らされて隅々まで見渡す事が出来る……不意にすべり台の頂上に視線を向けると、馴染みのある横顔が夜空を見上げていた。

〈龍珠家〉

「……ちょっと出て来る。」

「お嬢、もう大分遅い時間ですぜ？ 一体何処へ……」

背中から聞こえて来る声を無視して、玄関のドアをピシヤリと閉めて外へと出た。

「……やれやれ、一体何処へ行くんだか。」

「独り身のお前にはわかんねえだろうがな……年頃の娘さんってのは、1人になる為だけに外に飛び出す事もあんのさ。」

「そうか……ってお前も独りモンだろうが!!」

「ガハハ！ 小せえ事は気にすんな！」

……

……私が今こうして公園のすべり台に登って、月を見ているのに大した理由はない。月が見たいなら家でも良いし、態々肌寒いのを我慢してまで見るものでもない。只なんとなく、そういう気分だっただけだ……

「桃先輩。」

「……優？」

「こんな所でどうしたんですか？ あ、ココアいります？」

後輩から差し出された暖かい缶を受け取る。

「ああ、サンキュ……別に大した意味はねえよ。なんとなくだ……そういうお前は？」

「さっきまで、生徒会の皆と屋上で月見してたんです。」

「……白銀が言い出したな？」

「よくわかりましたね？」

「そんな事言い出す奴なんて、あの天文馬鹿くらいなもんだろ。」

「……同じ生徒会だったんですよね、仲良いんですか？」

「……さあな。」

「えっ？」

「確かに、私に普通に接してくる物好きな馬鹿ではあるし、借りもある……けど、仲が良いかと聞かれたらわからねえな。」

「そうなんですか……っていうか、物好きな馬鹿って……」

「ああ、アイツ以上のが居たなそういえば……特大の物好きな馬鹿が……目の前に。」

「ええ、それって僕の事ですか？ ヒドイなあ……」

「ハハ、拗ねんな、拗ねんな。」

「別に拗ねてませんけどー？」

他愛のない遣り取りをしながら、桃先輩と隣り合い夜空を見上げる。地上の全てを照らす様に、満月は煌々と輝いている。偶にはこういうのも悪くない……

……月に関係する小話にこんなモノがある。

近代日本文学の文豪夏目漱石が英語教師をしていた頃、教え子が「I love you」を「我、君を愛す」と直訳したところ、「日本人はそんなことは言いません。月が綺麗ですね、愛の告白という式が出来上がった。世間一般に対する認知度も……インターネットの発達した現代はそれなりに高く、愛や恋に敏感な中高生にもなるとその認知度は8割を超える。しかし……

「……月が綺麗ですね。」

「ああ、そう……っ!？」

残りの2割は当然の様に知らない！ 残念ながら、石上も残りの2割に該当する人間である！ この逸話が教科書に載っていたならば、今生はしっかりと勉強を

している石上の目にも止まっただろう。しかし、この逸話はあくまで都市伝説的なモノとして語り継がれているもので、信憑性自体は低い。石上が知らないのもある意味当然ではあるが……

「……」

（本当に、今日の月は良く見えるし綺麗だなあ。）

などと、楽観的思考をしている場合ではないのである。

「……………」

「……先輩？」

（こ、コイツ……）

「お、お前！ 意味わかって言ってるのか!？」

「え？ 何かあるんですか？」

「……紛らわしいんだよ！」

「えっ!? す、すいません？」

「……まったく、焦って損したわ。」

ガシガシと帽子越しに頭を搔く桃先輩に尋ねる。

「何か意味があるんならっ……」

素早くポケットからスマホを取り出すも……

「無えから、絶対に調べるなよ？」

「あ、はい。」

桃先輩からの思わぬ圧に速攻でスマホを仕舞う。

「はあ、ったく……まあ、確かに綺麗だな。」

「ですね。」

（……お前が隣にいるから……なんてな。）

「……また、見に来るか？」

「良いですね、また来ましょう。」

第三者が見れば、告白以外の何者でもないこの遣り取り。しかし当事者にとっては、普段と何ら変わらない会話をしているに過ぎない……少なくとも、石上優にとっては……

……

〈龍珠家〉



「なんか……今日のお嬢、いやに機嫌がいいな。」

「ああ、帰って来てからやたら鼻歌鳴らしてるしな……」

「~~~~♪」

「……でも多分、理由聞いたら怒るよな？」

「ガハハ！間違いねえな！」

帰宅した龍珠桃を遠巻きに眺めるゴツい男達が居たとか居ないとか……

## 極道少女と妄想乙女

僕達が活動していた第67期秀知院生徒会も解散し、秀知院は次の生徒会長を決めるまでの準備期間に入っていた。当然、昼休みや放課後に生徒会業務に費やしていた時間の余裕が生まれた僕は、束の間の時間を……

「優……ソイツ狩ったら、次はイベントミッションだからな。」

「うす、その前に武器新調したいっす。」

ゲームに費やしていた。会長と伊井野の顔繋ぎを済まし、生徒会長選挙で使用する資料は既に編集済みだし、僕達はビラ配りはせずに掲示板にポスターを貼るくらいなので、今忙しいのは演説文を考える会長と四宮先輩くらいだ。僕と藤原先輩は現在暇を持て余している状況の為、各々の好きな様に過ごしている。因みに藤原先輩は、TG部の3人でサイコロ持って校内をウロチョロしている所を何度か目撃している。ボスマンスターを倒して暫し、自キャラの装備調整に勤しんでいると……

「そういえば……優はまた生徒会に入るつもりなのか?」

「はい、会長が誘ってくれるなら……ですけど。」

ゲーム機から視線を外して問い掛けて来た桃先輩に答える。

「ふーん？ 二期連続でやりたいもんでもねえだろうに……お前も白銀も酔狂というか……変わってやがんな。」

「まあ、そうかもしれないですね……」

「楽な仕事じゃねえし、面倒な仕事が多いだろ……私なら絶対やらないし、こうやってゲームしてる方が良い。」

「桃先輩はそうでしょうね……」

桃先輩と知り合ってた事がある……この人は基本的に面倒臭がりだ。去年の11月のある日……高等部は体育祭真っ最中の筈なのに、桃先輩のゲームキャラは昼頃からずっとログイン状態だった。後でその事を聞いてみると……

……自分の出る競技が終わったから、サボってゲームしてた。

……と言っていた。まあ、前回の人生でリア充滅びろとか思ってた僕がどうこう言える資格は無いのだが……こういう陰キャ的要素を持っているのも、僕からすれば親しみやすい要因なので特に問題視はしていない。

「……なんだよ？」

「……いえ、桃先輩はそのままの陰キャで居て下さいね。」

「誰が陰キャだコラ。」

### 〈中庭〉

現在……僕は中庭のベンチに座り、隣の女子生徒からの質問にどう答えようかと考えていた。

「……と言う訳で先日、白銀会長の威圧感が無くなった理由を石上編集なら知っているんじゃないかと思ひまして。」

只の寝不足解消が理由である。

「そ、そうですね……」

（コレ、正直に言っているのかな……）

学年1位という実力と、鋭い眼光で周囲の人間を萎縮させ畏敬の念を抱かせる白銀御行の威圧感の原因が、只の寝不足だと周囲の人間にバレる事を石上は懸念し

ていた。更に今は、選挙期間の真っ只中……白銀陣営である石上からすれば、少しでも票数を減らす様な発言は控えたい所である。

（ダメだな、なんとか話を有耶無耶にしないと。）

「先輩はどんな理由があると思ってるんですか？」

「そうですね……」

（生徒会が解散し、激務から解放された事によって睡眠不足が解消された……なんて考察は凡人のソレですわ。）

正解である。

「そういえば、普段一緒にいるガチ勢先輩は何か言ってなかったんですか？」

「……ガチ勢先輩？ エリカの事ですか？ エリカは……」

ゆっくり寝てスッキリしたとか……

「か、かぐや様と寝てスッキリしたとか言っていましたわ！」

「えー、あの人そういうタイプなんですか。」

「今度からは、ポンコツドスケベお味噌と呼んで下さいまし！」

とんだ風評被害である。

「いや、長いですよ。でも、まあ……」ぐっ

（やっぱり、類は友を呼ぶというか……この人自体、同級生でナマモノ描く様な人だからなあ。）

「……何故でしょう、もの凄く残念なモノを見る様な目で見られてる気がしますわ。」

「いえ、なんでもないです……この前生徒会で月見したんですけど、その時の月の魔力が時間差で今頃効いて来たとかかもしれないよ？」

半端笑い話にでもなれば良いくらいの軽い気持ちで、先日した月見の話を持ち出す。

「ああ、生徒会で月見をしたらしいですね。藤原さんから聞きましたわ。」

「はい、会長は四宮先輩と隣に並び合って夜空を見上げて……」

「そ、それは本当ですよ!？」

「え、ええ……」

「ぐ、具体的には!？」

「具体的？ 僕は離れた所に居たので会話は聞こえませんでしたけど……会長が空

を何度か指差していたので、星について四宮先輩に教えていたんじゃないですか？

「星について……」

会長、どれが秋の四辺形なんですか？

ん？ 興味あるのか？

はい、とっても。

じゃあもつとこっち来い。

「ㄟ!!」

（そして、白銀会長はかぐや様を瞬時に抱き寄せ、顔を近づけたかぐや様の耳元で星について語り出すのですわ!!）

かれんの妄想が真実に辿り着いた瞬間である。

「……貴重な情報感謝しますわ！ 流石は石上編集です、頼りになりますわ!!」ㄟ

ㄟ、ㄟㄟ

「えっ？ はあ……」

ナマ先輩は僕の手を握ると、ブンブンと嬉しそうに手を上下させながらそう言っ

た。

その光景を目撃したのは、昼食を食べ終わり中庭を通り掛かった時の事だった……

「流石は石上編集です、頼りになりますわ!!」

そんな言葉が聞こえて来た。声のした方へ視線を向けると、女子生徒が優の手を握りブンブンと振り回している所だった。同じクラスの紀だ……部活動か何かは知らないけど、もう1人の巨瀬って奴とウロチョロしてる所を良く見る。そんな奴がどうして優と……私は未だに優の手を離さずに振り回し続ける少女の姿に、若干の苛立ちを覚え始めていた。

「そうですか、お役に立てて良かったです。」

（あちゃー……話は逸らせたけど、妄想のネタを提供しちゃったかー。）

「でも御二人の会話は聞いてはいけませんわよ?」

「え?」



「ふふふ、何故なら……その時に2人が紡ぎ繋いだ愛の言葉は、白銀会長とかぐや様だけのモノなのですから。」ニヤニヤ

紀は口の前で指を立てウイंकをすると、嬉しそうな顔をしてベンチから去って行った。

パチンとウイंकをし、ドヤ顔を浮かべながらそう言うナマモノ先輩を見て僕は思った……妄想癖が過ぎると、ここまで日常会話に影響を及ぼす様になるのかと。

「それでは、石上編集失礼しますわ。」

満足した様な顔でそう言って走り去るナマモノ先輩を見送っていると……

「鼻の下伸ばしてんじゃねえよ。」

ドカッと隣に座って来た女子生徒にそう言われる。

「いや、桃先輩……そんなんじゃないですよ。」

「どーだか……」

「あれ？ 桃先輩もしかして、怒ってます？」

「……別に怒ってねえよ。」

「まさか……」

「……！」

「今度は何のアイテム取り損なっただんですか？」

「……」

「あ、それともイベントミッション失敗でもしましたか？」

「お前はそういう奴だよな……」

「え、違いました？」

「ばか、バカ。」

「え、ええー……」

本日の勝敗、石上の敗北

敗因、ばか。

## 龍珠桃は阻止したい

感想ありがとうございます(。ω。)

---

10月に入り生徒会長選挙まで残り1週間を切ったある日の昼休み、廊下を歩いているとガチ勢先輩に呼び止められた。

「か、会計君……ち、ちょっと聞きたい事があるんだけど、今大丈夫？」ニン

ン

「……とりあえず、その荒い息なんとかしてくれませんか？」

……

「ふう……実は、未確認情報の真偽を確かめる為に会計君に聞きたい事があってね。」

階段横の空いた空間へと連れ出される。先輩は胸に手を当て息を整えると、そう話を切り出した。

「未確認情報？」

「かぐや様が鼯鼠にしている喫茶店があるって聞いて……会計君、知らない？」

「……どこからそんな情報が？」

「夏休みに、かぐや様が白銀会長と喫茶店で一緒に居る所を目撃したって噂があるの。因みに、かれんには言っていないから安心して。」

「へえ、そうなんですか……真っ先に情報共有しそうなのに。」

「情報が不確かな状態で、かれんみたいな妄想癖持ってるヤバイ子に教えられる訳ないでしょ。」

「……そうですよね、ガチ勢先輩ギャバイ人には教えられませんよね。」

「その反応、知ってるんでしょ!? お願い教えて!! 違うの! 別に悪用しようとか思っていないから! 只、偶然を装って同じ喫茶店でお茶したいだけだから!!」  
ハハハ

「ええ……」

「(……っていうか、さっき息切れしてたのは走って僕を探してたとかじゃなくて、単に興奮してたからか……)」

「じゃあ外から眺めるだけ！ ね？ 外から心のシャッターを切るだけならしてもいいでしょ!？」

「営業妨害になりそうなんでやめといった方が……っていうかなんですか、心のシャッターって。」

「そ、それにね!? この情報に変な人に知られる前に、マスメディア部として情報規制する必要があると思うの!」

「それに関しては、もう手遅れだと思いますけど……」

「……じゃあ、会計君が私について来て見張ってて! それならいいでしょ!？」

「ええー……」

「ね? お願いだから付き合って! ね、ね!!」

昼休み、1年教室廊下横に位置する階段に足を掛けた時だ……

「……だから付き合って! ね、ね!!」

……聞いた事のある声が、階段の影から聞こえて来た。確かこの声はマスメディア部の……私はソツと声のした方を窺うと、同じクラスの巨瀬が優の制服の袖を掴んで迫っている現場を目撃した。

「っ!? ……つと!」

飲んでいたパックジュースを落としそうになり、慌てて持ち直す。

「お願い! もう私には会計君しかないの!」

上気した様に赤くなった顔で、優に詰め寄る巨瀬に対する苛立ちが生まれる。

「仮に行ったとしても、四宮先輩が居るとは限りませんよ?」

「それならそれで良いの! 同じ喫茶店、同じ空間でお茶したって事実だけで生きて行けるから!」

優の声は少し距離がある所為で聞こえないけど、巨瀬はさっきから発言に必死さが漂っている……この前の紀といい、優の奴が女と一緒にいる所をよく見掛ける。もしかして、優ってモテるのか? 胸の奥に居座る、妙な感情に従って私は一歩踏み出した。

「それならそれで良いの！ 同じ喫茶店、同じ空間でお茶したって事実だけで生きて行けるから！」

ガチ勢先輩は、なんとか件の喫茶店を突き止め様と必死になって縋ってくる。その瞳からは普段にはない、強い圧を感じる。

「……」

（……狂信者ってこんな感じなのかな？）

石上の中での巨瀬エリカの位置付けは、ガチ勢を通り越して狂信者になりつつあった。

「出来れば、今度の土曜日とか……」

「悪いな、コイツその日は私と予定があるんだよ、他当たってくれ。」

「桃先輩……？」

「り、龍珠さん!？」と叫ぶ

突然の龍珠の登場に、エリカの脳裏には夏休みのある記憶が去来する。

おう、嬢ちゃん達……お嬢の写真撮ってどうするつもりか、説明してもらってええか？

（……埋められる!?!）

「……ごめんなさい！」

ガチ勢先輩は、それだけ言うと走って行ってしまった。

「が……巨瀬先輩と仲悪いんですか？」

「別に……そういうんじゃないよ。」

（……はあ、何やってんだ私は？でも何故か苛立ちが収まらねえ、なんで私は……  
！）

「……それで、何処行きます？」

「……え？」

「今度の土曜日。何処行きましょうか？」

「……偶にはゲーセンも良いかもな。」

「いいっすね、行きましょう。」

（良かった。何か沈んだ雰囲気だったけど、少しは元氣出たみたいだ……）



「この前の夏祭りみたいにな、また勝負するか？」

「良いっすよ、今度は負けませんから。」

「フン、忘れてないだろうな？ この前の夏祭りでした射的勝負で、優は一回私の言う事を聞く義務があるんだぞ？」

「うっ、覚えてましたか……」

「ハッ、残念だったな、忘れてやんねえよ。さあて、どんな事をさせてやろうか……」

「お、お手柔らかに……」

「やだよ、バーカ。」

桃先輩はニヒルな笑みを浮かべてそう言った。

## 〈2年C組〉

「……エリカ、正直に言って下さい。龍珠さんに何かしましたわね？」

「し、してないわよ！ なんで決め付けるの!？」

「だって……」ギョ

「……」ズーッ

「さっきから滅茶苦茶こっちをガン見して来るんですもの！ どうせポンコツお味増なエリカが何か粗相をしたのだらうと……」

「なんですってえ!? 妄想癖のあるかれんに言われたくないんだけど!？」

「妄想ではありません！ 僅かな情報から真実を読み解いているだけです！」

「ウソつけえっー！」

……何やら言い争いを始めた2人から視線を外す。

「……はあ。」

（別に今あの2人を見ても苛つきはしない……どうなってんだ？）

机に突っ伏したまま、先程生じた苛つきの正体に思考を働かせる……

「ううん……?」

「……龍珠さん、悩み事？ 俺で良かったら相談に乗るよ？」

「邪魔だ、失せろ。」

思考の邪魔をして来た男に言い放つ……誰だっけ、コイツ？ 前も話し掛けて来

た様な気がするが、名前は覚えてない。

「……そ、そう。邪魔して悪いね。」

(さ、選挙前にどうにか交流が持てないかと思ったが……相変わらずガードが堅いな。)

「フゥ……」

(はあ、つまんねえ……早く放課後にならねえかな。)

少女の脳内には、ゲーム機を持った後輩男子が浮かぶだけだった。

## ゲームセンターで遊びたい

感想ありがとうございます（・∀・）

---

土曜日、僕と桃先輩は巨大ショッピングモール内に居を構えるゲームセンターに訪れていた。

「僕は普段携帯ゲーばかりですから、こういう所は新鮮に感じます。」

「私は久しぶりだな……」

「へえ、そうなんですか？」

「ああ、ウザい奴に絡まれる様になってからは来てなかったけど……」

「まあ、ナンパ目的でゲーセンとか映画館に来る男はいますからねえ……」

「……なんでナンパってわかった？」

「そりゃあ、桃先輩みたいな子が1人で居たらされるでしょ。」

ジャラジャラと換金した小銭をポケットに仕舞いながら、そう口を滑らす。

「……私みたいになってどういう意味だよ。」

「え？ あー……なんでもないっす。」

（桃先輩、可愛いつて言うとか機嫌悪くなって蹴り入れて来るんだよなあ……）  
只の照れ隠しである。

「おい、ふざけんな言え！」

襟の部分をガシッと掴まれ、前後に揺さぶられる。

「ぐへっ……じ、じゃあ勝負で勝ったら言います！ それで行きましょう……ねっ  
？」

「今だ、今言え！」

「あ、あれー？ 桃先輩勝つ自信ないんですか？」

「……いいだろう、その挑発乗ってやるよ。」

「チョロくて良かった……」

（ありがとうございます！）

「あ？」

「」

……

桃先輩をなんとか宥めた僕は、色々なゲームで勝負をしていく事となった……

〈レースゲーム〉

「だあっ!? 空中で赤甲羅とか卑怯だろ!?」

「テクですよ、テク。」

〈格闘ゲーム〉

「くっ、う……っし！ 私の勝ちだな！」

「……桃先輩、ずっと僕の手元チラチラ見てましたよね？ どんな技出すか筒抜けでしたよね？」

「……知らねえな。」

「……」

(セコい……)

次の勝負はどうしようかと周囲を見渡していると、キャッチャーゲームに目が向いた。桃先輩を連れ立って近付くと、設置されている景品はゲームのキャラクターだった。少し前に、桃先輩と同時にクリアしたオフラインゲームの主人公とヒロイ

んだ。そのゲームは、クリア後のエンディングに賛否が分かれるモノで……ボスを倒してハッピーエンドというお約束な内容ではなかった。主人公と出会ったヒロインは、最初は記憶を失っており旅をしていく内に徐々に記憶を思い出していく……そして、ラスボスを倒すと全ての記憶を思い出すというモノだった。主人公とヒロインは両想いだったから、クリア後は一緒になって幸せになるのだろうと想像していたら、ヒロインは主人公に向かって……

「……私は貴方と未来に生きる事は出来ません。」

と言って主人公を拒絶する……そのヒロインは、過去・現在・未来に1人しか存在出来ない特異な存在であり、ラスボスを倒した後はまた記憶を失った状態で過去に戻り主人公と最初から旅をする……という事を繰り返していると告白した。

「……辛くないのか？」

そう問い掛ける主人公にヒロインは……

「……辛くなんてありません。また、貴方と一緒に旅が出来るんですから。」

そう答えてヒロインは過去へと戻る……というエンディングだった。桃先輩は終わり方に納得していなかったし、ネットで評価を見るとゲームシステムやキャラク

ターに関しては概ね好評だったが、エンディングに関しては賛否両論だった。

「コレ、やるぞ。」

「……うす。」

桃先輩がコレをやりたいて言うのも当然かもしれないな……

「くっ！ そうだ、そこをっ……」

アームがキャラクターの頭に被さり、首に爪を立てて持ち上げるが……ポトリッと途中で落としてしまった。

「あっ！……くう、次だ次！」

結果的に桃先輩は二千円をキャッチャーゲームにつき込むも、1つも取れずにリタイアとなった。

「コレ絶対アームの力加減どっかで操作されてるだろ！ おい優、スタッフ呼んで確かめさせろ。」

「クレーマーみたいな事するのやめましょうよ……仕方ないですね、僕が取りますよ。」

前日に某動画サイトで、キャッチャーゲームの極意は学習済みの今の僕に死角は



ない。一回で取ろうとせず、徐々に取りやすい位置と角度に調整して勝負に挑んだ。結果はもちろん……

「取れましたー！」<sup>ニヤ</sup>

（しかも千円で取れたから、桃先輩の半分か……うん、敗北が知りたい。）

石上は調子に乗っていた。

「……まあ私が色々動かしてたからな。」

「そうですね。」<sup>ニヤ</sup>

「ドヤ顔やめろ！」<sup>グッ</sup>

「すいませんー！」

……随分と熱中していた様で、気付くと時間は既に18時を回っていた。偏見だとは思うけど、夜のゲームセンターはガラの悪い連中が集まり易い気がする。今日はこちらまでにしましょうと桃先輩に提案し、了承を取る。桃先輩もそれなりに満足した様で、僕の隣を弾む様に歩いている。

……

「此処でいい。」

ゲームセンターからの帰り道、桃先輩を送っていると例の公園前で立ち止まった。桃先輩は振り返りながら、いつもの様にニヤッと笑って言った。

「偶にはゲーセンも良いな、また行こうぜ。」

「そうっすね……あ、コレ要ります?」

桃先輩の前に、キャッチャーゲームで取った2つの人形を差し出す。

「……こっただけでいい。」

「1つで良いんですか?」

桃先輩はヒロインの人形だけをサッと取り、人形の両脇を抱える様に持った。

「……」

「……桃先輩?」

「……そのまま持ってる。」

「え? はい……」

桃先輩に言われた通りに、胸の前で主人公の人形を持った体勢を維持する。桃先輩も同じ様に、ヒロインの人形を胸の前に構えている……僕と桃先輩の距離は凡そ30センチ、人形同士の距離が10センチ程……桃先輩は腕を少し伸ばして人形同士の顔……

口の部分を軽く触れさせた。ゲームでは結ばれる事の無かった主人公とヒロインはその瞬間……確かに結ばれた様に感じた。

「……良かったな、お前ら。」

そう言葉を零した桃先輩の表情は……普段のゲームで勝った時に見せる得意気な笑顔や、ニヒルな笑み、偶に見せる可愛いらしい笑顔とも違う……優しい笑みを浮かべていた。

「……優しいっすね。」

「……そんなじゃねえよ。只、あの終わり方に納得してなかったただけだ……」

「そういう事にしますよ……」

（はあ、素直じゃないんだから……でも、そういう所が……）

そこまで考えて、思考に？マークが入り込んだ。

「……？」

（ん？　そういう所が……？　なんだっけ？）

「……帰る、じゃあな。」

「あ、はい……気を付けて。」

「おう。」

公園の外灯に照らされながら走る桃先輩が見えなくなるまで見送った。桃先輩の姿が視界から消えた頃には、先程まで考えていた疑問もいつの間にか霧散していた。

## 石上優は渡したい

感想ありがとうございます（・∀・）

※龍珠桃の誕生日を10月10日と仮定します。

法則的にゾロ目で、白銀御行と一ヶ月と1日違いの筈……

---

今日は10月10日、ゲームセンターで桃先輩と遊んだ翌日の日曜日だ。僕はスマホで桃先輩へとメッセージを送った。昨日も会っていたのだから、その時で良かっただろうと言われるかもしれないが、こういうのは当日に渡す事に意味があると思う……数分後、桃先輩から了承の返信が届いたので、公園で待ち合わせをする事にして家を出た。

……

## 〈公園前〉

公園に着くと、入り口のポールに凭れる様にして桃先輩が待っていた。僕は直ぐ

に駆け寄り話し掛ける。

「態々すいません。ちょっと、桃先輩に渡したいモノがありました……」

「別にいいけど、昨日じゃダメだったのか？」

「もちろんです……桃先輩、誕生日おめでとうございます。」

僕は背中に隠していた、プレゼント用にデコレーションされた袋を桃先輩に差し出した。

「……私、誕生日教えたっけ？」

「……生徒会で委員会と部活動の名簿作ってるのは僕なので。」

「そうか……開けていいか？」

「はい、どうぞ。」

桃先輩はガサガサと袋を開けると、袋から30センチ程のクマのぬいぐるみが顔を出した。

「……なんで、ぬいぐるみ？」

「前にスマホでビデオ通話しながら、ゲームした時があったじゃないですか。」

「そういえば、そんな事もあったな。」

「はい、その時に桃先輩の後ろに大きなクマのぬいぐるみがっ……」

そこまで言って、桃先輩に胸ぐら掴まれる。

「お、おとお前っな、何見てやがんだ!？」

「えー、そんなに慌てる様な事ですか？」

「だ、だって、私みたいな奴が……」

「別に変だとは思ってませんよ、可愛いトコあるなあとは思いましたけど……」

「んなっ!？」

「それに……クマのぬいぐるみ良いじゃないですか。イギリス人の3割はデディベアと一緒に寝てるんですよ?」

「いや、それは知らねえけど……」

「もし、いらないんだったら……」

「……まあ、折角用意してくれたんだし、もらっとくよ……ありがとな。」

「うす……桃先輩はこれから用事あるんですよね?今日はコレで失礼します。」

「用事って程でも無いんだけど……まあ、そうだな。また明日な……」

「はい、また明日。」

桃先輩と別れ、帰路に着く。道中、プレゼントを渡せた満足感に浸りながら……

優と別れ家へと帰った私は、直ぐに自室へ戻ると先程渡された袋からぬいぐるみを取り出した。

「……」

別に変だとか思っ  
てませんよ

「……」

可愛いトコあるな  
あとかは思いましたけど……

「……ったく、バカにしやがって……私の方が年上なんだぞ、わかってんのか？」  
抱き抱えたクマのぬいぐるみに話し掛ける。

「お前の贈り主は……ホント、物好きな奴だよ。」

物言わぬクマのぬいぐるみを抱き締めると、私は勢いよくベッドに寝転がった。

「……っ!!」  
「ギャー」



ゴロゴロと寝転がりながら、ぬいぐるみを抱き締める……丁度良い抱き締め具合だし、抱きぐるみとして使ってやるか……ギューギューと小さな音を出しながら、ぬいぐるみは私の胸にスッポリと納まっている。

「……お嬢！ 誕生パーティーの準備が出来やしたあ!!」*ぎぎぎ*

「勝手に開けてんじゃねえ!!」

私は咄嗟に掴んだ目覚まし時計を力の限りを尽くし投げつけた。

「ぐへえっ!?!」

目覚まし時計が命中した男は、バターンッと後方に倒れた。

「あと、一々誕生パーティーとか開かなくていいって言っただろうが。」

「そ、それはオヤジに言ってくだせえ……」

「*ぎぎ*……バカ親父が。」

（あのまま優とファミレスでも行った方が良かったかな……）

私は律儀に帰宅した事を少し後悔した。

……

〈都内某所〉

「親分はどこ行った!? もうすぐ虎狼組との会合があるってのに……」

「で、電話してみやす!」

男はスマホを取り出すと、親分と表示された欄をタップする……暫しの呼び出し音の後、通話が始まる。

「おーう、どうした?」

「繋がりをやした! 親分、どこ行ってんですか!? もうすぐ虎狼組との会合の時間ですぜ!」

男は他の組員にも聞こえる様に、ハンズフリー通話に切り替えながら訊ねる。

「……いや、5時から娘の誕生パーティーあるから。〓。ミッミー——」

親分と呼ばれた男は、それだけ言う通話を切った。

「ええ……」

「……若を代理人にするか。」

「……へい。」

微妙に肩を落として歩く2人の厳つい男が居たとか居ないとか……

10月に入り、2週間が経とうとしていたある日の午後……私は中庭を一人で歩いて周囲の景色を眺めていた。今週は生徒会長選挙、来月は体育祭……そして再来月は奉心祭と、2学期はイベントも豊富で楽しきも多い。半年後に秀知院を去る身としては、残されたイベントを精一杯楽しんでやり残した事も無く卒業したい……私が今中庭を散策しているのも、この広い中庭を隅々まで見ておきたいという思いがあったからだ。暫し歩いていると、茂みの中から声が聞こえて来た。私はちよつとした好奇心で茂みの中を覗き込んだ……

……

「いよいよ明日は会長選挙だな……」

「そうっすねえ……桃先輩も興味あるんですか？」

「……正直、誰が生徒会長になろうがどうでもいい。まあ、今回もアイツが当選するだろうけどな。」

「桃先輩も会長に投票してくれるんですか？」

「……消去法でな。他の奴にやらすくらいなら、白銀にやらした方が過ごし易そうだからな。」

「……なるほど。」

「まあ、アイツが落選したらお前が暇になるから、こうやってゲームする時間が増えるしどっちでも良いんだけどな。」

「うっ、落選とか縁起でもないですね……でも、会長は当選しますよ。」

「そんな事わかんねえだろ?」

「コレに関しては絶対と言えます。」

「へえ……随分な自信だな。」

「そりゃ……」

……

そこまで覗いて身を引き、そつとその場を離れる。夏祭りの時の男の子だ……という事はあの時、龍珠ちゃんも居たのかもしれない……ゲームをしながら雑談する2人からは、お互いに気を許し合っている空気が漂っていた。

「羨ましいな……」

無意識に口から出た言葉に、まだ引きずっているのかと自分が嫌になる……私にも彼氏が居た時があったけど、二股をかけられて随分と嫌な目に遭った。その事が原因で、他の人も巻き込んだちょっとした騒ぎになるし、風野と森君の派閥まで一時期険悪になるしで本当に散々だった。だからかな？ 無意識に羨ましいという言葉が出たのは……去年見た時は中等部の制服を着ていたから、一年生か……ちよつとだけ興味が出たので、友達や部活の後輩から情報を集めると、男の子に関する情報はすぐに集まった。まあ、特に何か目的がある訳じゃないんだけど……ちよつとだけだった興味が大きくなった事は確かだった。

## 生徒会と取材と〇〇と

感想ありがとうございます（・∀・）

〇〇には七つの大罪の何かが入ります。

生徒会長選挙も無事終了し、伊井野を会計監査として迎えた新生徒会活動が始まった。新生徒会が発足しても、僕の仕事はあまり変わらない。週に1、2回程度だが、藤原先輩がTG部に行っていたり、伊井野が風紀委員の活動で遅れる時などは、意図的に生徒会室を会長と四宮先輩の2人つきりにしたりしている。その間は、僕も他所で自分の仕事をしたりして時間を潰す。丁度、生徒会室の真下の空間が空いている場合が多いので、壁に背を預けて簡単な事務処理や書類整理を終わらせてから生徒会室へと向かい、急ぎの書類や案件が無い場合は桃先輩と一緒にゲームをしたりと、今までとあまり変わらない日々を過ごしていたある日の放課後……

〈生徒会室〉

「……僕と伊井野に取材？」

「ああ、マスメディア部から正式な申し込みが来てな……石上は以前も受けた事があるから大丈夫だろう？」

会長は書類に視線を落としながら、そう言った。

「それは構いませんですけど、なんで僕と伊井野だけなんですか？」

「確かテーマが……次代を担う1年生徒会役員、だったと思う……そういう事情だから、受けてくれるとありがたい。」

「今日はそれ程急ぎの案件も無いですし、2人さえ良かったら今からマスメディア部に行ってもらえるかしら？」

「わ、わかりました、行ってきます！」

四宮先輩の言葉に、伊井野が緊張を含んだ返事をする。

「石上くんは、ミコちゃんの事をちゃんとフォローしてあげないとダメですよ？」

（なんてったって、私を副会長にしようとする慧眼の持ち主ですからね！）

節穴の間違いである。

「石上君、伊井野さんをちゃんと見てて頂戴ね。」

（伊井野さんは、藤原さんを副会長にしようとするヤバイ子なんだから、何を口走るか正直不安なのよね……）

かぐやは伊井野の正気を疑っていた。

「……はい。」

（なんか、言ってる事は殆ど同じなのに全然違う意味に聞こえるな……）

「石上、早く行くわよ。」

「ああ、そうだな。」

（まあ、前と似た感じの取材だろうし……別に問題無いかな。）

僕は伊井野と共にマスメディア部へと向かった。

……

マスメディア部を訪ねて取材を受けに来た旨を伝える。準備に少し時間が掛かるという事で、偶々手の空いていたらしいナマ先輩とガチ勢先輩と雑談して時間を潰す。

「そういえば、選挙期間中に先輩達の記事を見ませんでしたけど、担当してなかったんですか？」



（何よりも優先しそうなのに。）

「フフ、そうですね……私達、会長最前の記事を書き過ぎて、選挙期間中は部屋の出入り禁止令が出ましたの。」

にこやかに言う辺り、全然反省してなかった。

「ねー。直前に出禁は解除されたけど、部長からは釘を刺されるし、念書は書かされるしで、結局選挙関連には関わられなかったから……」

「エリカと2人で横断幕を作っていましたわ。」

ねー、と言いながらナマ先輩とガチ勢先輩はペチンツとハイタッチをする。

「そうですか……」

（なんか可哀想に思えて来たな……）

「部長さんはまともですね……」

「ちよっと伊井野さん？ その言い方だと、まるで私達がまともじゃないみたいじゃない。」

「心外ですわー！」

「……では、お2人が今回、私達の取材を担当した場合何を聞きますか？」

「生徒会室でのかぐや様のご様子は!？」

「会長は!？」

「……そんなのだから、取材メンバーから外されたのでは？」

「」

「」

「……」

（伊井野も容赦ないな、まあ正論だけど。）

年下にそんなの扱いされる、かれんとエリカだった。

……

あれから直ぐに準備が整い、30分程取材を受けてマスメディア部を出た。伊井野は取材が終わるや否や挨拶もそこそこに走って行った。多分、トイレだろう……いつかやらかしてしまわないか心配だ。部室を出てしばらく歩いていると、後ろからナマ先輩とガチ勢先輩に止められる。

「どうしたんですか？」

「お堅い伊井野さんも今なら居ない事ですし……最近の会長とかぐや様の新エピソード」

どは!？」

「かぐや様のご様子は!？」

「……伊井野の言葉に全然堪えてないんですね。」

（部長さんも大変だな……）

「ねーねー!」ググググ

「お願いしますわぁ!」ググググ

グイグイと両腕を掴まれ、両サイドから引っ張られる。

「子供ですか……」

「おーねーがー……い!？」

「お願いしま……すわ!？」

急にビクッと動きを止めた2人に訊ねる。

「どうしたんですか?」

「お、オホホホ……そ、そういえば私達、部活の途中でしたわね!？」

「そ、そうだったわねっ……じゃあね、会計君!」

2人は何かから逃げる様に走って行った。

「……………」

放課後、廊下を歩いていると優の腕を掴んで揺さぶる紀と巨瀬が見えた。モヤつとした不愉快な気分が顔が歪むのを感じる……優は背中を向けていて此方を見てないが、腕を掴んでいる2人は此方を向いていたので目が合った。その瞬間、2人は優に何か一言だけ言って走って行った……なんとなく、顔を見られたくないと思いい物陰に移動する。モヤモヤとした妙な不快感……そうだ、この胸の奥で燦る妙な感情は……あの時に感じたモノに似ている。

龍珠桃と関わるのはやめておけ。

そう言っただけ私の家の事情をバラした小島と、それを聞いた優を見て……私は柄にもなく、言ひ様の無い恐怖を感じた。今まで私の家の事を知り、離れて行った奴等同様……石上優という友人も失ってしまうのかと。だけど優は、そんな事は……親は関係無いと、小島相手に啖呵を切った。その言葉を聞いて、私の胸の奥に芽生え

た嫌な感情は消え去った……それどころか、顔がニヤケていないか別の心配事が出た程だ。バレない様に帽子を深く被り、優の背中を大袈裟に叩き、ソッポを向いて誤魔化した。だから、この感情は……優が私から離れる事に対する嫌悪感や不安感と言うモノなのだろう。そして、この感情がまた芽生え始めた。今度は紀や巨瀬と一緒にいる優を見て……この感情がどういった名前の感情か気付いたのは、それから直ぐの事だった。

## 2 度目の再会

感想ありがとうございます（ω。）

10 月も下旬に差し掛かる頃、秀知院は二学期中間テスト期間に入っていた。中間テストが終われば、直ぐに体育祭の準備に取り掛かる事になる。僕は既に一度体験した身なので、体育祭開催までに必要な書類や起こる可能性のあるアクシデントに対する対策と準備に余念はない。中間テストまであと数日という事もあり、生徒会の仕事は少量に抑えている。今日も僕は、さっさと仕事を終わらせて……

「中間テストか、ダリいな……」

「でも、テスト日は午前で終わりますよ？」

中庭で桃先輩とダラけていた。あと 1 ～ 2 週間もすれば肌寒くなり、中庭で過ごす事が厳しくなる時期だ。去年は流石に校舎内に入り込んでゲームする訳にもいかなかったので、寒い季節は専ら喫茶店で待ち合わせてゲームをしていた。今年は

どうしようかと考えていると、別の疑問が浮かんた。

「そういえば……桃先輩ってテスト期間中もゲームしてますけど、頭良いんですか？」

「……普通。」

「普通ですか……」

「別に有名大学へ進学するとか考えてねえしな……秀知院ならエスカレーター式だから、面倒な事は省略出来るし。」

「じゃあ、進学先は秀知院大学ですか？」

「今ん所はな……特に何かやりたい事がある訳じゃねえし。」

「へー。」

「……お前はどんなだよ？」

頭良いんだろ？と言外に付け足され問われる。

「まあ、会社は兄貴が継ぐでしょうし……大学卒業までにやりたい事がなかったら、ウチの会社に就職するんじゃないですかね？」

「そんなもんか……」

「……先輩はどうするんですか？ その……実家を継ぐ話とか。」

「私は女だぞ？ 流石にねえよ。適当に若い衆の中から優秀な奴が継ぐだろ、世襲制とか古臭い。」

「良かった……」

「何がだよ？」

「あ、いや……別に。」

「言え。」

真下から睨み付けて来る桃先輩に屈する。

「……笑わないで下さいよ？ その……僕は極道の世界には詳しくないんですけど、もし桃先輩が継いだら危ない目に遭ったりするかもしれないじゃないですか……それが嫌だったので、良かったと。」

「……そうかよ。」

桃先輩は先程まで見上げていた僕の顔から目を逸らし、ソッポを向いてしまった。

「……先輩？」

「うるさい、寝る。」



「えー……」

僕の太腿を枕にされているから動けない。仕方無い、暫くは好きにさせておこう……10分程ゲームに勤しんでいると、スウスウと小さな寝息が聞こえて来た。本当に寝たのか……桃先輩って、意外と警戒心無いのかな？

……警戒心が無いなどと、そんな事は有り得ない。龍珠桃は広域暴力団龍珠組の愛娘である。他者に対する警戒心に限れば、四宮かぐやに比肩しうる程である。現在秀知院には、龍珠組と敵対する他組織の息子や娘は在籍していないが、それでも……幾ら敷地内だからと言って、睡眠による無防備な姿を晒すなど龍珠桃本来の性格ならば有り得ない。唯一、石上優に対する絶対的な信頼を除く以外は……

「……」

（まだそこまで気温は低くないけど、念の為。）

僕は起こさない様に気を付けながら、上半身を上手く捻り上着を脱いだ……そして、傍らで眠る少女にゆっくりと上着を被せる。

「ふう……」

（ミッシヨンコンプリート。）

そう思って安心した時だ……

「……君は優しいね。」

「えっ？」

いきなり声を掛けられ、思わず声のした方向へと振り向いた。

「久しぶりだね……あ、覚えてるかな？ 夏祭りの時に会ったんだけど……」

「つばめ……先輩。」

「あ、私の事知ってるんだ？ よろしくね、石上優君。」

つばめ先輩はそう言って、僕の記憶通りの……太陽の様な笑顔を浮かべた。

男の子の情報はすぐに集まった。友人の中にはマスメディア部の部長を務めている子も居るけど、その子に頼る必要が無い程アッサリと……特に一年生の中では、石上優という子は有名人だった。

一年前の中等部で……女子を脅して、他校の生徒へ幹旋業紛いの行為をしていた

男子の悪事を全校放送で暴露した張本人だそうだ。その事件は、高等部でもそれなりに大きな話題として友人との会話に上がった。更に高等部に進学して直ぐの頃、小島君とケンカしたらしい……それだけ聞くと野蛮な子……みたいになるけど、近くで見ていた一年生女子の話だと、小島君が龍珠ちゃんを貶す様な事を言って石上君は怒ったらしい。床に叩きつけられても自分の意見を曲げなかったと聞いた。

小島君も何か思う所があったのか、それから少し大人しくなったらしい。その直後に生徒会長直々にスカウトされて生徒会へと入会……なんとも凄い男の子だ。調べ始めてからちよくちよく意識して探して見ると、交流のある人間も凄い人ばかりだった。

同じ生徒会のメンバーは当然として……四条家の令嬢、病院長の息子、大手造船会社の社長令嬢、大手出版社の社長令嬢と大手味噌製造メーカーの社長令嬢等、その交流関係の中に大仏ちゃんの姿があつて安心もしたし……だから、機会があれば話してみたいと思った。そして、その機会は割とすぐにやってきた。

中庭の木陰で龍珠ちゃんと居る所を見つけた……どうやら、龍珠ちゃんは寝てしまったらしい。石上君は上着を脱ぐと、龍珠ちゃんへと上着を被せた。

「……君は優しいね。」

だから、思わずそう言って話し掛けてしまった。

「つばめ……先輩。」

そう言って私の名前を呼んだ彼は、少し驚いていたけど……私を知っていてくれた事が嬉しくて、つい笑っちゃった。

## 龍の眠りと燕の問い

感想ありがとうございます（＾、＾）

夏祭り以来の……つばめ先輩と2度目の再会を果たした僕は、少しの戸惑いを感じていた。偶然遭遇した夏祭りと違い、今回は中庭の木陰と非常に見つかりづらい場所で、しかもつばめ先輩から話し掛けて来るなんて思いもしなかった。次会う機会があるとすれば体育祭の応援団だと思っていたし、態々探さないと見つからない様なこんな場所で再会するとは思わなかった。暫し見詰め合う形になった僕とつばめ先輩だったが……

「ごめんね、いきなり話し掛けて……」

「あ、いえ……全然……」

「2人は……付き合ってるの？」

「えっ!? 僕と桃先輩がですか!?」

つばめ先輩の問いに思わず声が大きくなる。

「シー！ 龍珠ちゃん、起きちゃうよ？」

「あ、すいません。その……つばめ先輩は、桃先輩の事を知ってるんですか？」

「うん……一方的にだけだね。去年、1人で居る所を見掛けて話し掛け様としたんだけど……」

「……だけど？」

「ふふ、君に先越されちゃったの。夏休み前だったかな……話し掛け様とした日に、君が龍珠ちゃんを見つけた。」

「そう、だったんですか……」

まさかあの時、近くにつばめ先輩が居るとは思わなかった……

「あの、どうして……その後、桃先輩に話し掛けたりしなかったんですか？」

「それは……龍珠ちゃんが1人じゃなくなったから……かな。」

「え？」

「私はね……学校が楽しいし部活動も好きだし、友達が居ればもっと楽しくなると思ってるの。たとえ辛い事があっても、友達や自分を見ていてくれる人が居た

ら……1人じゃなかったら頑張れると思うんだ。だから……あの日龍珠ちゃんに話し掛け様としたし、君が居たから……それ以降は話し掛けなかった。」

龍珠ちゃんは今もう1人じゃなくなったから……と、つばめ先輩は言った。

「それで、この前……選挙前だったかな？ 此処で今みたいにしてる2人を見掛けて……羨ましいなって思ったの。」

「羨ましい……ですか？」

「うん、2人の間には……お互いを信頼し合ってる空気って言うのかな？ そういうのを見ちゃったから……君に興味持ちちゃったの。」

「……僕にですか？」

「うん、だからね……」

優と進路の話になった流れで、私が家業を継ぐかどうかの話になった。私はあんな面倒な家業を継ぐつもりはない……その言葉を聞いた優は、良かったと安堵の表

情を浮かべた……何が良かったのかと、気になった私が問い質すと……

「……笑わないで下さいよ？ その……僕は極道の世界には詳しくないんですけど、もし桃先輩が継いだら危ない目に遭ったりするかもしれないじゃないですか……それが嫌だったので、良かったと。」

……相変わらず、恥ずかしい台詞を恥ずかしいと認識していないバカ男だ。私は、先程まで見上げていた顔から視線を外した。自分の顔が熱くなる現象に戸惑いながら、誤魔化す様に……うるさい、寝るとだけ言って目を閉じた。顔の熱が治るまでの時間稼ぎのつもりだったのに、私の意識はいつの間にか沈み込んでいた。

「ッ、うわ……」

「あ、起きましたか。」

その言葉で徐々に意識が覚醒していく……私は寝てたのか……不意に自分の体に掛けられている上着が目に入る。全く、余計な気を利かせやがって……悪態を吐く思考とは裏腹に、胸の辺りにはボンヤリとした温かさが湧き上がっていた。

「おはようございます。」

「……おう。」



なんとなく気恥ずかしくなり、気のない返事で誤魔化しながら聞く。

「私……どれくらい寝てた？」

「えーと……30分くらいですかね。」

「そうか……」

（30分程度とはいえ、私が学園内で無防備に寝るなんて……）

「どうしました？」

「いや、誰にも見られてないよな？」

「……はい、誰も来ませんでしたよ。」

---

20分前……

「……君に興味持っちゃったの。」

「……僕にですか？」

「うん、だからね……また話し掛けても良い？」

「別に良いですけど……僕と話してもつまらないと思いますよ？」

「そうかな、私はそうは思わないけど？ あ、それと私が来た事は龍珠ちゃんには秘密にしてね。」

「え？ 为什么呢？」

「んー、女の子はね……無防備に寝てる所を他人に見られるの、凄く嫌がるんだよ？」

「そうなんですか？……起きた時が怖いなあ。」

「あ、君は大丈夫だから、気にしないで。」

「え、なんで……」

「んー……秘密。頑張って考えてね。」

「えー……」

「それじゃ、私はそろそろ行くね。」

そう言いながらつばめ先輩は立ち上がった。

「またね、優君！」

「……はい、また。」

そう言って去って行くつばめ先輩を見送る……前と同じ呼び方をされた事に少し動揺してしまったが、変わらないリズムで寝息を立てる桃先輩を見下ろし、僅かに上下する肩をポンポンと叩きながら時間は過ぎて行く。

「そういえば……質問に答えてなかったな。」

2人は……付き合ってるの？

つばめ先輩の問いに、付き合っていないと……即答しなかった自分自身を訝しむ。  
「どうして……」

その疑問の答えは、後日……思ってもいない形で明らかとなった。

## 龍の嫉妬と独占欲

11月に入り、中間テストも無事終了した。秀知院学園は、体育祭に向けての準備と練習に精を出していた。それは僕も例外ではなく……

「応援団？……お前が？」

正気かよ……という目で桃先輩に見られる。いや、まあ……そう思われるのも仕方ないのかもしれないけど……そこまで？

「そうなんですよ。しかも、応援団の服装が男子は女子の制服を着なくちゃいけないみたいで……はは、笑っちゃいますよね。」

正直、制服の件だけはなんとか回避出来ないかと思ったけど……無理だった。

「ふーん……借りる当てとかあんのか？」

「いや、今の所ないっすね……」

（前みたいに四宮先輩が貸してくれるなら、滅茶苦茶有り難いけど……）

「……貸してやろうか？」

「えっ!？」

桃先輩からの思わぬ提案に驚く。

「どうなんだよ？」

「そりゃ貸してくれるなら有り難いですけど……」

（うーん……でも、桃先輩って四宮先輩より小柄だよな？ って事は……）

「なんだよ？」

「いやー、桃先輩小っちゃいから、僕じゃ制服入らないんじゃないですか？ 胸とかキツ過ぎて伸びちゃったりしたら悪いですし……」

「……」ぢぢ

「アレ、どうしました？ 腕なんか掴んっ……」

「フンッ!!」ヤッヤッヤッ

「痛だだだっ!!」

「誰が小っちゃい？ 胸がなんだって？」ヤッヤッ

「痛だだっ!! す、すいません!! し、失言でしたあっ!!」

石上優、地雷だと気付かずに地雷を踏み抜く男。

桃先輩と別れた後……生徒会室に向かった僕は、前回同様四宮先輩から制服を借りられる事となった。面倒な懸念材料が片付き、少し浮かれ気分では中庭を歩いていると……

「ふう……四宮先輩から制服借りれる事になって助かったな。」

「会計君、今なんて言ったの!」ギョギョ

「うわっ!?! なんだ、ガチ……巨瀬先輩じゃないですか、いきなりどうしたんですか?」

「ガチ? そ、そんな事より今、かぐや様の制服を借りるとか何とか聞こえたけど!」ハッハッハッ

（うーわあ、考えうる限り1番聞かれたらダメな人に聞かれてしまった……）

「さ、さあ? そんな事言いましたっけ?」

「さっきの発言について、マスメディア部の力の限りを尽くして調べ上げてもいいんだけど……」

「執念がエグい……」

……

「つ、つまり……会計君は体育祭で応援団に女子の制服が必要なのをいい事に、かぐや様から制服を拝借したって事!？」

「言い方にかかなりの引っかけを感じますが、概ねその通りです。」

「な、なるほど、なるほどね……因みにいつ借りるか聞いても良い？」

「え？ 多分前日か当日辺りじゃないですか？」

「ねえ会計君！ お願いがあるんだけど……」

「……なんででしょう？」

（また前みたい……抱きしめても？ とかトチ狂った事言い出すのかな……）

「も、もし前日に借りれる事になったら……ちょっとだけ貸してくれない？」

「」

「あ！ ち、違うよ!? 別に変な事に使おうとかじゃなくて……只、温もりを！ かぐや様の温もりを直接感じただけなの!!」

充分、変な事に使おうとしていた。

「うわぁ……」

（女子が男子に制服を貸したくない心理が理解出来てしまった……）

「待って!? 本気のうわぁはやめて!? 嘘だから! 冗談だから!!」

「……先輩、犯罪だけはしないで下さいね。」

「ホント待って!? お願いだから!!」

……

優が生徒会へ行って少し経った頃……私は木に背中を預け、携帯ゲームをしていた。すると……

「ホント待って!? お願いだから!!」

何やら鬼気迫る声が聞こえて来た。体を捻り、木の陰から声のした方へと視線を向ける。

「お願いだから信じて! コレは純粋な気持ちだから!!」

困惑顔の優と……ガシリと優の手を握り、上気した顔で言い寄る巨瀬が居た。

「またアイツか!」  
ゼンゼン

私は反射的に立ち上がった。



〈1年昇降口〉

「石上、おっつー……制服借りれた？」

「ああ、四宮先輩が貸してくれる事になった。」

「ふーん、良かったじゃん……っていうか、私達どっちも異性の制服が必要だったんだから、交換すれば良かったね。」

「言われて見れば……でも僕は良いけど、小野寺は嫌じゃないか？ 制服を僕に貸すなんて……」

「え？ 別に嫌じゃないよ。なんで？」

「え、そう？ いや、別に理由とか無いけど。」

（ついさっき、男子に制服を貸したくない女子の心理が理解出来たから……とは言えない。）

「まあ、もう借りた後だから意味ないけどね。」

「ハハ、確かな。」

……という石上優と小野寺麗の遣り取りを……隠れて見ている少女が居た。

「サ……」

少女は小さく舌打ちをすると、その場を離れて行った。

……イライラする。アイツが……優が私以外の誰かと一緒に居る所を見るだけで、優が私以外の女に笑い掛ける所を見るだけで、優が私以外の女と楽しそうにしているだけで……胸の辺りにザワザワとした嫌な感情が吹き荒れる……いや、もうわかってる。この感情がなんなのか……この感情は嫉妬だ。優を取られたくない、優を誰にも渡したくないという独占欲……まさか、私がこんな執着深い女だったなんてな……いや違う。私が誰かに、優に恋をするなんて……

いつか、桃ちゃんも心の底から大好きって言える様な……素敵な男の子に出会えるわよ。

昔……幼等部の頃、母さんに言われた言葉を思い出した。心の底から大好き……か。そんな恥ずかしい事、言える訳が無い……私みたいなガサツで、可愛さの欠片もない女が……

浴衣着てると、江戸時代の町娘って感じで可愛いですね。

「……」

可愛いトコあるなあとかは思いましたけど。

「……ばーか。」

頭の中を駆け巡る優の言葉に、思わず悪態を吐く。とりあえずは、今の関係のままで良い。とりあえずは……そうやって、無理矢理自分の心の落とし所を見つけて、問題を先送りにした……つもりだった。まさか私が……あんな暴挙に出るとは、この時は想像もしていなかった。

そして少女は踏み出した

感想ありがとうございます（・∀・）

石上優……物好きで小っ恥ずかしいセリフも平気で吐く、1つ下のバカな後輩……去年の夏に知り合ってから、既に1年と半年近くの月日が流れていた。その間、優の人間性は十分過ぎる程知る事が出来た。でも最近は……今まであまり気にしていなかった事にも目が向く様になった。それは……優は私と居る時以外も、よく女子と一緒に居るといふ事だ。この前も……

〈1階渡り廊下〉

「そ、それで、会計君……かぐや様はいつ制服を貸してくれるって？」  
「ハハハ」

ハ」

（今んトコ、断トツでヤバイなこの人……）

「……当日に貸してくれるそうです。」

「そうなんだ……」ギョッ

「そもそも、仮に前日だったとしても貸せませんけどね……」

「……会計君、体育祭当日の応援合戦の前に校舎裏に来てくれない？」

「普通に嫌ですね。」

「お願い！ 何も変な事はしないから!! 只……ちょっとだけ！ ちょっとだけだから!!」

「……」

（この人ホントヤバイ。）

石上の中で、巨瀬エリカのヤベエ奴指数が爆上がりした。

……

「……」

（また、巨瀬と一緒にいやる……）

## 〈中庭〉

「……という事があったので、当日はなるべく目を光らせておいてくれませんか？」

「

「え、エリカがとんだご迷惑を……でも聞いて下さい！ エリカは決して悪い事に利用しようと考えてる訳では……！」

「まあ、ちょっと行き過ぎな所はありますけど……悪い人じゃないのはわかってますよ。」

「石上編集……でも、エリカにも困ったモノですわね。自分の推しに対して許されるのは、見守る事と妄想だけだというのに！」アハハハ

「妄想も駄目じゃないっすか？」

……

「……」

(今度は紀かよ……)

……優の奴、私の気持ちに気付いてて、わざと見せつけてんじゃねえだろうな？  
とんだ言い掛かりである。

私は木陰に座り込み、思考に身を委ねる。1人になりたい時や、考え事がしたい時はこういった他人に見つかり難い場所は貴重だ。唯一、欠点があるとするなら……

「ねー、聞いた？ C組にヤクザの娘がいるじゃん？」

「龍珠だっけ？ それがどうしたの？」

「なんかあ、聞いた話だと1年の男子に無理矢理言い寄ってるんだってー。」

「あ、もしかして生徒会の子？」

「そうそう！ なんか友達が見たらしいんだけどさ……その男子が他の女子と一緒に居る所見て、凄い顔で睨み付けたらしいよ？」

「アハッ、メツチャ嫉妬してんじゃない！」

「ウケるよねー、まあでもその男子しか相手してくれる人居ないんじゃない仕方ないんじゃないね？」

「アハハ、ひっどーい！」

……よくまあ、他人の悪口でそこまで盛り上がるモンだ。誰も居ないと油断して、陰口を叩く人間を此処に居るとよく見掛ける。友人、教師、先輩、そして今回の様に……自分とは直接関係の無い人間の悪口に花を咲かせる……私には理解出来ないし、したくもない。私に聞かれていたとは知らずに、女子生徒2人は話を続けている……

「でもさあ、その男子って最近つばめ先輩と一緒に居るトコ見ない？」

「あ、私も見た！ つばめ先輩、狙ってるのかな？」

「えー、2個下だよ？ ちょっと、くない？」

「えー、そう？」

「そもそも……つばめ先輩とは流石に釣り合わない？」

「でもさ、入学して直ぐに生徒会にスカウトされたんでしょ？ 滅茶苦茶有能って



事じゃないの？」

「あー、そう言われると確かに……まあヤクザ女に言い寄られるよりはマシか。」

「アハハ、言えてるー。」

女子2人は言いたい事だけ言って、その場を離れて行った。

「……ま、今更ヤクザどうこう言われても気にはしないけど……」

私はそう独り言を呟くと、その場を離れた。

### 〈中庭〉

特に目的も無く……いや少しだけ、優に会える事を期待して中庭を歩く。他の季節と違い、11月ともなれば肌寒くなり始める季節だ……芝生やベンチに座る人間も少なく感じる。不意に向けた視線の先に、ベンチに座る2人の男女が視界に入った。その2人は、先程の女子2人の会話に出ていた……子安つばめと石上優だった。

「……………」

漠然とした……嫌な感情に心を苛まれる。今までは、なんとなく感じていた嫌な気分……自覚した途端コレか。私は胸に渦巻く感情を必死で抑え込む。子安つばめ……私でも名前を知っている3年のマドンナだ。アンタ引く手数多だろ、選び放題だろ。なんで優に近付くんだよ、やめろよ……優もなんで楽しそうな顔して笑ってんだよっ……グチャグチャになった思考を誤魔化す様に、私は走ってその場を去った。

これから生徒会だと、つばめ先輩との会話を打ち切り、中庭を歩いていると……茂みから飛び出して来た手に裾を掴まれ茂みの中に引っ張られた。

「痛っ!?! な、何っ……」

少しの間、目が回ったが直ぐに視界が定まる。引っ張られた衝撃で仰向けになった僕に、馬乗りで乗り掛かる少女が見えた。顔は逆光でよく見えないが、小柄な体

に見慣れた帽子……そして何より、こんな強引な事をする人は1人しかない。

「……どうしたんですか、桃先輩？」

「……」

「……先輩？」

また何か機嫌が悪くなる事でもあったのだろうか？ 返事をしない桃先輩にどうしようかと考えていると……

「……夏祭りの射的勝負、私はお前に1つ言う事を聞かせる権利があつたな？」

「え、はい……そうですね。」

「なら、今から言うから……ちゃんと聞けよ。」

「……出来れば、ソフトな奴でお願いします。」

「……他の奴なんて見ないで、私を見ろ。」

「……え？」

「同じクラスの奴も、紀や巨瀬も……子安つばめも見ると、私を見ろ。」

「え、ええと……どういう意味ですか？」

「くっ……」

（こ、ここまで言ってもわかんねえのか、このバカは!? だ、だったらっ……）

「先輩……?」

「どういう意味か……教えてやるよ。」

桃先輩は両手で僕の胸元を鷲掴みにすると、顔を近づけて来た。

「……ッ!」 ザッ

（頭突きされる!?!）

咄嗟に出た思考に従い、ギュッと目を瞑る。数瞬後、唇に柔らかな何かが触れた。思わず目を見開くと……僅かに瞳を潤ませて、顔を真っ赤にした桃先輩と目が合った。

「ハハッ……ど、どうだ、コレでわかったか      !?」

「えっ……あ……」

あまりの衝撃に頭の中が真っ白になった。前の人生を含めても、初めての唇の感触に……上手く言葉を紡ぐ事が出来ない。

「おい、わかったかって聞いてんだよ!」

「あ、えっと……はい。」

桃先輩の言葉に思わず頷き答える。

「なら、これからは……そういう事だからな。」

先輩は馬乗りから立ち上がると、今度は返事も聞かずに走って行ってしまった。

「……そういう事？ え、そもそもさっきのって……キス？」

今までで1番と言ってもいい程、僕の脳内は混乱を極めていた……

## 石上優は相談したい

感想ありがとうございます（・∀・）

## 〈生徒会室〉

「会長ー、なんか……今日の石上くん、ちょっと変じゃないですか？」

「あぁ、藤原書記も気付いたか……」

「心ここに在らず……と言った感じでしょうか。」

「でも、かぐやさん……タイピングは滅茶苦茶速いですよ？」

「」カタカタカタ

一心不乱にキーボードを打ち込む石上に、一同は困惑する。

「ううむ……伊井野監査、何か知らないか？」

「……いえ、私もわかりません。教室では普通だったんですけど……」

「うーん……という事は、教室から此処に来るまでの間に何かあったって事ですかねー？」

「そうだろうな……まあ、本人に聞いてみるのが1番手っ取り早いが……」

「じゃあ私が！……石上くん、此処に来る前に何かあったんですか？」

「……勘違いした頭突きは目を瞑った時でしたね。」

「……え？」

「つまりですね……茂みで頭突きは馬乗りの後って事です。」

「ひっ!? か、かぐやさん、怖いです！」ぎぎ

（っていうかコレ、なんか見た事ある！）

藤原は1学期に起こった生徒会猫耳事件の白銀を思い出し、青い顔でかぐやの腕に抱き付いた。

「か、会長！ なんとかして下さい！ 経験者でしょ!？」

「藤原、経験者ってどういう意味だ！……ンンッ！ 石上、何か悩みでもあるのか

？」

「悩み……」

「ああ、もし何かあるのなら相談に乗るぞ？ 普段から石上には何かと世話になっているしな。」

「……なら、後で少し良いですか？ 出来れば会長だけでお願いしたいんですけど……」

「ああ、わかった……生徒会が終わったら時間を取ろう。」

「……ありがとうございます。」

……

「それじゃまた明日ー。」

「お疲れ様です。」

「お疲れ様。会長、戸締まりお願いしますね。」

「ああ、わかった。お疲れ。」

藤原、伊井野、かぐやの3人は、男子2人を残しさっさと生徒会室を出て行った。

「むむう、会長だけに相談するなんて石上くんも水臭いです……ね、ミコちゃん？」  
「確かにそれは……そうですね。」



「男同士の方が話し易い事もあるのでしょね。石上君は普段からしっかりしていますけど、まだ1年生ですからね……ふふ、少し安心しました。」

「かぐやさんは気にならないんですかー?」

「全く気にならないと言えば嘘になりますけど、石上君が話しても良いと判断してくれるまで待つのも……先輩の役目よ?」

「うぐっ、それはそうかも……」

「四宮先輩……」

「伊井野さんもよ? 今、石上君が話してくれないのは、自分の中でまだ整理が出来てないだけかもしれないわ。伊井野さんはクラスメイトなんだから、ちゃんと見てあげて下さいね?」

「は、はい!」

「……じゃあ、今日は女子だけで何処に行きましようか!」

「藤原先輩、何処に行くんですか?」

「スイーツでも食べに行きましよう! かぐやさんも、それで良いですか?」

「ええ、構いませんよ。」

「やったー!」

「わーい!」

女子3人がスイーツ店へと赴く事が決まった頃……

〈生徒会室〉

「お、押し倒されてキス!? しかも龍珠に!」

先輩として後輩の相談に乗り、頼りになる所を見せよう……という多少の打算を持っていた白銀の思惑は、石上から話を聞いた直後に吹き飛んだ。

「はい、まだちょっと混乱してるんですけど……」

「な、なるほどな……うん、気持ちにはわかる。わかるぞ……」

（マジかよ……もっとソフトな奴だと思ってたのに、滅茶苦茶へビィな奴来たじゃん……）

モンスター童貞には荷が重かった。

「……会長も経験が？」

「あ、ああ、まあな……」

嘘である。この男、恋文やバレンタインチョコを貰った経験こそあれど、キスどころか異性と手を繋いだ経験すら無い（花火大会でかぐやの手を一方的に握った経験は除外）只々、モンスター童貞がくだらない見栄を張っただけである。

「……会長は、その時はどうしたんですか？」

「ンンッ!? そ、そうだな……石上、俺がどうしたかは重要じゃない。重要なのは……石上、お前自身がどうしたいか、だ。」セシ

（イケるか……?）

「会長……そう、ですね。ありがとうございます。僕自身がどうしたいか、考えてみます。」

「ああ、また何かあれば話くらいは聞こう。」

（イケたー!）

「それじゃあ、僕はコレで。」カチャッ

「ああ、お疲れ。」

生徒会室を出て行く後輩を白銀は見送る。

「しかし、龍珠がなあ……」

白銀の脳裏には……去年、生徒会に入ったばかりの頃の気弱だった自分を鼓舞し、被るべき仮面と演じるべき性格を示唆してくれた……かつての仲間の姿が浮かんでいた。

### 〈石上家自室〉

「僕自身はどうしたい……か。」

僕は一年前の夏……桃先輩と出会ってからの事を思い出していた。ゲーム好きで、面倒くさがりで、素直じゃない。でもなんだかんだで優しく可愛らしい一面を持つ、警戒心の強い猫の様な1つ上の先輩……考えるまでもなかった。キスをされたと気付いた時、混乱すると同時に僕は……嬉しくて堪らなかった。つまりは……そういう事だ。僕の心の奥底に隠れていた……僕自身、自覚していなかった

気持ちを……桃先輩に引っ張り出された。

「敵わないなあ……」

そういえば、桃には花の花言葉以外にも……桃の実にも花言葉があるのを思い出した。確か、桃の実の花言葉は……

〈天下無敵〉

その言葉を思い出した僕は、思わず笑みを零してしまった。

一方その頃……

「~~~~っ！！！！」ヤ~~~~、ゴ~~~~ロ

クマのぬいぐるみに顔を埋めて、悶える少女が居たとか居ないとか……

## 石上優は捕まえない

感想ありがとうございます(。ω。)

---

次の日の休み時間……授業の合間の僅かな時間を利用して、僕は桃先輩に会いに行った。

〈2年教室前〉

「あ、桃先輩！」

「ゆ、優っ!?!」どッ

僕を見るなり驚いた表情を浮かべ、肩を震わせた桃先輩に近づく……

「あの、ちょっと良いですか？」

「……よ、良くない！」

「え？」

「……っー」どッ

桃先輩はサツと背中を向けると、走って逃げてしまった……

「ええー……」

「……あら、石上編集？ 何か御用ですか？」

「いえ、気にしないで下さい……」

……

それからは時間が許す限り桃先輩を探しては話し掛け、見つけては話し掛け続けた僕だったが……

「桃先輩……」

「っ！」  
「んん」

その度に、脱兎の如く逃げる桃先輩に……困惑と、ほんの少しの鬱憤が溜まって行った。

「……ん」

（桃先輩、なんで逃げるんですか……こっちをその気にさせるだけさせて、話も聞かないで逃げるなんて。まあ多分、冷静になって自分のした事が恥ずかしくなったから逃げてるだけだと思うけど。でも逃げるとか……素直じゃないというか、恥ず

かしがり屋というか……)

そこまで考えて、あ……と、この問題に対して良い案を提供してくれそうな人物が浮かんだ。僕は直ぐにスマホでメッセージを送り、その人と会う約束を取り付けた。

# 〈中庭〉

「ふうん？ それで私に相談しようって思ったの？ 中々の慧眼ね。」

「はい（かつて弩級レベルに拗らせていた）マキ先輩なら、何か良い案を出してくれるんじゃないかと思ひまして。」

「……何か引かかるけど、まあいいわ。それで、具体的に何があったか教えてくれる？」

「はい、昨日の事なんですけど……」

……



「お、押し倒されてキス!? だ、ダメよそんなのっ……早い! 早いわ!」

「ええー……」

マキ先輩のあまりの雑魚っぷりに、思わず天を見上げた。

「そ、そういうのはもっと段階を踏んでからよ!? 私だって翼君とキスするまで、3ヶ月は掛かったのに……早過ぎるわ!」

「落ち着いて下さい。あと、その手の文句は桃先輩に言って下さい。」

「あ……そ、そうよね! でも、まさか……あの子がそんな事をするなんてね……」

「……知ってるんですか?」

「まあ……同じ学年だしね。入学当初は結構騒がれたのよ? なんせ四宮家令嬢お嬢様に始まり、総理大臣の孫娘や四条家の令嬢、広域暴力団の愛娘なんて言うビッグネームが揃って入学したんだから。」

「……偶に忘れますけど、そういうえばマキ先輩も凄い人なんですよね……今はもう、恋愛脳なチョロインみたいになってますけど……」

「ぶん殴んぞ。」

「さーせん。」

「……それで、まあ少しは意識するじゃない？ 四宮家程じゃないけど、日本国内に対する影響力なら間違いないくトップカーストな訳だし。他人に対する警戒心や周囲の人間に対する敵意は……本当の自分を隠して守る為……って感じの印象を持つたわ。それに……」

「……それに？」

「彼女も……かつての私と同じ匂いを纏っていたから……かしらね。」

「えっ？ あ、はあ……カッコいいですね？」

（マキ先輩と同じ？ 流星にそこまでポンコツじゃないと思うんだけど……）

石上はひどかった。

「私には、渚達が居たけど……あの子は、特に親しい友達もいなかったみたいだしね……そういえば、優はいつ頃知り合ったの？」

「去年の夏休み前に偶然……」

「そう……ならまあ、強気に行く事ね。」

「強気に？」

「あの子の方からキスして来たんでしょ？ だったら、少しくらい強引な方が良い

わよ。逃げるのは単に、恥ずかしがってるだけだろうし。」

「そう、ですかね……」

「もう！ 男がくよくよ悩むんじゃないわよ！ 男ならガッと行きなさい、ガッと！」

（去年の夏なら、私よりも付き合い長いじゃない。それなのに、変にウジウジしちゃって。全く、男はコレだから……）

眞妃は半年前まで、田沼翼に対してウジウジしていた自分を棚上げした。

「わかりました、ガッ行ってやりますよ！ 先輩、ありがとうございました。」

「また何かあったら、相談に乗ってあげるから……頑張んなさい。」

「はい！」

憑き物が落ちた様に、元氣良く返事をして去って行った後輩を少女は見送る。

「……優しいのも良いけど、女の子としてはやっぱりガッと来て欲しいモノよね。」  
ウツク

おさしみまで残り数日に迫った、ある日の午後の出来事である。

## 〈中庭〉

放課後、桃先輩を探して中庭を彷徨く。普段、僕と桃先輩が隠れてゲームをするポイントをいくつか覗き見て、最後のポイントに行き着いた時だ。

「……ッ」

(……居た。)

「……」カタカタ

カタカタとゲーム機のボタンを押す桃先輩を視界に収める。そっと近付き、ゆっくりと驚かせない様気を付けながら話し掛ける。

「……桃先輩。」

「っ!？」ビュッ

僕の呼び掛けにビクッと体を震わせて、桃先輩は此方に視線を向けた。

「ゆ、優……」

立ち上がり、走って逃げ様とする桃先輩の腕を掴む。

「は、離せっ……」

「嫌です、ちゃんと話をさせて下さい！」

桃先輩の目を真っ直ぐに捉えながら言う。

「……っ！ はあ……わかったよ。」

桃先輩は観念したのか、体から力を抜いて座り込んだ。

「それで、その……昨日の事についてなんですけど……」

「……悪かった。」

「……え？」

「その、あんな無理矢理……嫌だったろ？ ちょっと……混乱というか、頭の中グチャグチャになっちゃって……」

桃先輩は膝を抱えて、そう言葉を零しながら最後に……

「ゴメンな……」

そう言って寂しそうに顔を伏せた。

自分の迂闊さを本気で呪った。嫉妬、ヤキモチ、独占欲……感情に動かされ、冷静になれたのは事が終わった後だった。走って家に帰り自室に飛び込むと、クマのぬいぐるみを抱き締める。ぬいぐるみを抱き締めていると、徐々に荒れた息も整い始め冷静になっていく……冷えた頭で先程までの出来事を思い出し、やってしまったと思った。驚いた顔で私を見上げる優の顔が浮かび上がり、次いで……唇の感触が蘇る。

「~~~~っ!!」

噴き出しそうになる羞恥心を誤魔化す様に、ぬいぐるみに顔を埋めてやり過ごす。「明日から、どんな顔して会えてんだ……」

縋る様な気持ちで、ぬいぐるみに問い掛けた言葉に……返事は返って来なかった。  
……………

次の日、碌な考えも浮かばないまま時間は過ぎて、気付けば授業も終わっていた。まあ、普段から真面目に受けている訳じゃないから別にいいけど。休み時間に入り、気分転換に歩こうと廊下に出ると……優に話し掛けられた。すぐに昨日の事

について話をしに来たんだとわかった。心の準備も何もない状態だったから……思わず逃げてしまった。その後も、休み時間の度に優は私に会いに来て……その度に私は優から逃げる、という事を繰り返した。でも放課後……中庭の1番見つかり難い場所で隠れてゲームしている所を見つかった。気付くのが遅かった所為で、逃げ遅れたし何より……ちゃんと話をさせてくれと、真っ直ぐに私を見る優の目に……逃げ続けても意味がないと理解した。体から力が抜け、座り込んだ私に優は……

「それで、その……昨日の事についてなんですけど……」

そう話を切り出した……何かを言われる前に言ってしまうおうと、謝罪の言葉を口にして顔を伏せる。悪いのは私だし、何を言われてもそれは仕方の無い事だ。あの時の優は私のわかったかという問いに、はいと答えたけど……つい口から出ただけかもしれない。だから……拒絶の言葉を言われるかもしれないと思うと、怖くて仕方なかった。

「桃先輩……」

その声に、私の体はビクリと震えた。

## 想いの吐露

感想ありがとうございます（・∀・）

膝を抱えて俯く桃先輩に話し掛けると、ビクリと体を震わせた。何かに怯えている様な……不安を押し殺して、なんでもない様に取り繕おうとする桃先輩の姿を見て、上辺だけの言葉や慰めは無意味だと思ったし何より……僕自身の気持ちを桃先輩に聞いて欲しいと思った。

「僕は……嬉しかったですよ。」

「……え？」

桃先輩が僅かに顔を上げて、目が合ったのを確認して続ける。

「桃先輩がキスしてくれて……凄く嬉しかったです。」

「んなっ!？」

カッと顔を赤く染める桃先輩に……心が温まるのを感じる。意外と打たれ弱いと



というか、防御力が低いというか……そういう所も可愛いなと思うし、こういう部分を見せてくれるのも……もしかしたら僕だけかも、なんて考えが浮かんで来る。

「僕も……桃先輩の事が好きですよ。」

「えっ!? あ、えと……」

「桃先輩……返事を聞かせて下さい。勘違いや自惚れじゃないなら……桃先輩も僕の事が好きなんですよね?」

「そ、それはっ……」

昨日とは立場が逆転した様に、言葉に詰まる桃先輩に詰め寄る。

「ううっ……」

ギョツと桃先輩の手を両手で包み訊ねる。

「桃先輩!!」

「……わ、わかった、わかったから!」

「何がわかったんですか!? フワツとした言葉じゃなくて、ちゃんと行って下さい!!」

慌てた様に僕から顔を背ける桃先輩に更に詰め寄る。ここで曖昧な返事で済まざ

れたら、有耶無耶になってしまいかもしれない。しっかりと、ちゃんとした言葉を聞くまでは……この手を離さないと決めた。

「だ、だから……」

「はい！」

「わ、私……」

頭の中を色んな感情が、言葉が交差する。

拒絶されるのが怖い。

嫌われたくない。

今までの関係を壊したくない。

そんな言葉が頭の中を掻き乱す。だから、優の声が聞こえて……嬉しかったという、その言葉の意味を理解した時……思わず顔を上げて、優の顔を凝視してしまった。目が合った瞬間、少しだけホッとした様に口元を緩めて優は続ける。

「桃先輩がキスしてくれて……凄く嬉しかったです。」

私からキスをした……その事実を突きつけられ、顔に火が灯った様に一瞬で熱くなった。更に続けて、優の口から放たれた言葉に思考する余裕を奪われる。優が……私の事を好きだと言った。勘違いでも聞き間違いでもなく……その言葉は、しっかりと私の耳に届いた。羞恥と混乱と……喜びの感情に惑わされ、上手く言葉が出て来ない私に優は……両手を包み込む様に握り、更に詰め寄って来た。普段のゲームをしたり、駄弁ったりする時の優とは違う、真剣な表情で答えを待つその姿に……誤魔化す気持ちは消え失せてしまった。でも、何て言えばいいのかわからない……

「わ、私……」

いつか、桃ちゃんも心の底から大好きって言える様な……素敵な男の子に出会えるわよ。

「……！」

こんな時に、母さんの言葉を思い出すなんて。でも……嘘じゃないから、別にいいのかな……

「私も……大好きだぞ。」

自分が思っていたよりもあっさりと、その言葉は優へと向かって飛び出して行った。

「私も……大好きだぞ。」

その言葉を聞くや否や、僕は握っていた桃先輩の手を引き寄せた。バランスを崩して此方に倒れてくる桃先輩を抱き締める。

「はえ……？ お、おい!？」

スッポリと僕の胸に収まった桃先輩から抗議の声が飛んで来るが、今の僕には通じない。

「やった……両想いですよね？ 僕達、恋人になったんですよね？」

ギュウツと抱き締める力を少しだけ強めて、桃先輩へ問い掛ける。

「ま、まあ……そうかもな。」

「かも？ 何か問題があるんですか？ あるなら言って下さい、言ってくれるまで離しませんから！」

「わ、わかった！ 無い！ 無いからっ！」

「良かった……」

「……優、お前そんなキャラじゃなかったろ？」

「……ある人に、ガツと強引に行けとアドバイスを受けまして。」

「誰だか知らねえけど、傍迷惑なアドバイスしやがって……」

「迷惑、でしたか？」

照れ隠しだとわかっていても、つい聞いてしまう。

「別に、そういう意味じゃない……お前、わかって聞いているだろ？」

「はい、照れ隠し……ですよね？」

「そ、そういう事はわかってても言うもんじゃないだろっ……」

「すいません、桃先輩が可愛くてつい……」

「お、お前……そんな事言って、恥ずかしくないのか!？」

「……言わなくても伝わる関係性も良いですけど、言わなきゃ伝わらない事や直接

伝えたい言葉もあると思ってるので。」

「優……」

「桃先輩も、さっきみたい……偶にで良いので、言葉にして伝えて下さいね？」

「っ!?……き、気が向いたらな。」

「はい、待ってますね。」

フンツと鼻を鳴らし、顔を背ける桃先輩を解放したのは……それから暫く経ってからだった。

---

### 〈生徒会室〉

桃先輩と気持ちを確かめ合い、晴れて恋人同士となった僕の心は有頂天状態だ。今なら、急なフランス校との親善パーティーを1人で段取りから準備までやれと言われてもやれるくらいには浮かれていたし、やる気に満ちていた。

「それで、何か進展はしたのか？」

仕事が終わっても生徒会室に残り続ける僕に会長はそう訊ねて来た。今日も生徒会の女性陣は先に帰宅しており、此処には僕と会長の2人だけだ。別に四宮先輩達に言いたくないとか、そういう訳ではないのだが……

あ、あんまり付き合ってるって言い触らすなよ！

と、桃先輩に念を押されているので仕方ない……相談に乗ってくれた会長とマキ先輩には報告し、それ以外には頃合いを見て報告しようと思う。

「進展……そうですね、桃先輩と付き合う事になりました。」

「付き合う!? そ、それは……恋人になったと、そういう認識でいいのか？」

「はい、会長には相談に乗ってもらって……ありがとうございます。」

「いや、俺は何もしていない。自分で考え、行動に移したのは石上自身だからな。」

（いやホント、碌な事言てなかったし……）

「……やっぱり会長は頼りになりますね。」

「ハハハ、よせよせ……」

（そう言ってくれるのは有り難いが、あんまり持ち上げないでくれ!?)

「……じゃあ、今日はコレで。」ガッちゃん

「ああ、お疲れ。」

（昨日の今日でもう解決か、非童貞<sup>石上</sup>凄いな……今度詳しく話し聞かせてもらおう。）

〈龍珠家〉

「……」

（恋人……優が恋人……）

僕も……桃先輩の事が好きですよ。

すいません、桃先輩が可愛くてつい……

「……っ!!」ヤッー

最早、何度目かわからない……ぬいぐるみを抱き締めて恥ずかしさを誤魔化す行動を取る。なんか、私ばかり負けている気がする……

「私の方が……年上なんだから、舐めるなよ。」

いつかと同じ様に、ぬいぐるみに愚痴を吐く……暫し、ぬいぐるみと見つめ合っ



ていると、コンコンッとドアをノックされる。

「桃ちゃん、ご飯出来たわよ。」

「……うん、すぐ行く。」

珍しい……母さんが態々呼びに来るなんて。いつもと違う出来事に少し訝しみながら、食卓に着くと、普段より何割増しかニコニコ顔の母さんと……運ばれて来た赤飯に、私は言葉を失った。

## 彼女の誘いと体育祭

感想ありがとうございます（・v・）

桃先輩と付き合う事になり、数日が経過した。体育祭を目前に控え、準備や応援団の練習、更には生徒会業務と多忙な時間の合間に桃先輩と会ってゲームをするのは、今までとあまり変わらない。唯一変わった部分があるとするなら……

「桃先輩、あんまり動かないで下さいよ。」

「据わりが悪いんだから我慢しろ。」

現在、僕と桃先輩の体勢は、壁に背中を預けて座る僕の足の間に桃先輩が入り込み、僕の胸板に背中を預けている……要は僕を背凭れにしている状態だ。11月中旬に差し掛かって肌寒いからか、桃先輩は小さな膝掛け毛布を持参している。

「もう冬ですね……こうやって外でゲームするのもキツくなって来ました。」

「まあ……」

校舎が風除けになる様な場所なら、まだ寒さは感じないだろうけど……桃先輩は誰かに見つかる事を嫌がるし、この場面を見られるのは……流石に恥ずかしい。結果、風通しの良い開けた場所にある木陰や茂みの中に陣取ってゲームをする事になるのだが、風が吹くとかなり寒い。

「……天文部の部屋とか使えないんですか？」

桃先輩は天文部部长だ。鍵の管理くらい任せられていると思い聞いてみる。

「鍵は持つてるけど、部屋は……ダメだ。」

「え、なんでですか？」

「そ、それは……」

「それは？」

（密室に2人っきり……）

「だ、ダメなモンはダメだからに決まってんだろ！」

「ええー……」

「そ、それよりも、続きやるぞ！」

「うーす。」

とは言っても……桃先輩が足の間に陣取っているので、手を伸ばさなきゃダメが出来ない。ぱっと見は僕が桃先輩を後ろから抱き締めている様に見えるだろう……周囲に対する警戒は怠らない様にしよう。

「……優、今週の日曜……暇か？」

「え？ はい、特に予定はありませんけど。」

「……」

「……先輩？」

「暇なら……私ん家、来ないか？ 母さんが連れて来いってさ。」

「え、僕を？ なんでまた？」

「……いいからっ、来るのか来ないのかハッキリしろ！」

「はい！ 行きます!!」

「全く……最初からそう言えっただ。」

「さーせん……あ、コレって俗に言うお家デートって奴ですか？ まさか、先輩から誘ってくれるなんて……」

「で、デート!？」

「違うんですか？」

「うっ……」

「先輩？」

「し、知るか！ 言ったからな!? ちゃんと来いよ！」

桃先輩は慌てて立ち上がると、そう言い残して去って行った。

「ホント、可愛いなあ……」

桃先輩が去って行った方向を眺めながら呟く。桃先輩が恥ずかしがったり、顔を赤くする所を見たいが為に、意図的にこういう言い回しをしたりする……偶にだけど。

「ま、何はともあれ……」

今週の体育祭が終わってからだ、と気合いを入れて立ち上がった。

……石上優は気付いていない。日曜日の龍珠家訪問……それは、お家デートどころか、恋人の親への挨拶イベントであるという事に。

体育祭当日、午前の競技が終わり昼食休憩に入った。僕は桃先輩の姿を探してキョロキョロと周囲を見渡すが、見当たらない。午前にあった障害物競争に参加し終わってから姿が見えないから、多分また何処かでサボっているんだろうな。昼休憩は40分と限られているから、さっさと探そう。まあ、居るとすれば彼処かな……

〈屋上〉

「やっぱり此処でしたか……」

屋上で寝転びながら、ゲームに勤しむ桃先輩へと話し掛けた。

「……よく此処だってわかったな。」

「愛ですね。」

「ぶっ飛ばすぞ。」

「……ま、体育祭の昼休憩だといつも以上に中庭は人が居ますからね。桃先輩は嫌がるだろうなって……先輩は天文部ですし、屋上の鍵くらい持っていると思いましたし……」

「……当たり前だ。」

チャリツとキーホルダーに繋がった鍵をクルクルと回しながら、桃先輩は続ける。

「去年、屋上の使用許可取った時に合鍵作っておいたんだよ。」

「それ……生徒会的には割と問題案件なんですけど……」

「内緒な。」

桃先輩は口の前で人差し指を立てながら、ニヤリと笑いながら言った。

「仕方ないですね……それより、桃先輩お昼食べました？ 色々買って来ましたけど。」

「気が利くな、何がある？」

「えーと……」

……

暫し、桃先輩と駄弁りながら昼食を取る。桃先輩は午前の部で参加競技を済ませており、後は此处でゲームをして過ごすそうだ。僕は昼休憩後は応援合戦の為、早めに行つて着替えなければいけない。

「そろそろ時間なんで行きますね。」

「おー、女装応援頑張れよ。」

「女装応援って……」

「それと、頼むから目覚めんなよ。」

「目覚めませんよ!？」

普段の意趣返しと言わんばかりに女装する事をイジられる。

「ほら、はよ行って来い。」

ひとしきり僕をイジって満足したのか、桃先輩に送り出される。ヒラヒラと手を振りながら、片手でゲーム機を弄る桃先輩を残して屋上を後にする。空き教室に入り、せっせと四宮先輩から貸してもらった制服に着替えると、走って校庭へと向かった。

「か、会計君！ ちょっと良い!？」ハッハッハッ

そして、ヤベェ人に捕まった。

「……なんですか？」

「ふう、とりあえず……抱き締めるね？」

「人を呼びますよ。」

「じゃあわかった！ 写真、ね？ 写真は撮って良いでしょ？」



「嫌ですよ。」

「大丈夫、大丈夫だから！ 後でちゃんと、フォトショでコラ改造するから！」

「必死過ぎる……」

（なんというか、なんとかしてホテルに女を連れ込もうとする、ガツついた男みただいなあ……）

女子生徒に対する例えではない。

「……エリカ！ 何してますの!？」*ぎぎ*

「か、かれん!？」

「ごめんなさい、石上会計……ちょっと目を離れた隙に見失ってしまっ……」

「まあ、実害は出てないので大丈夫ですよ。応援合戦あるんで、もう行きますね。」

「はい、頑張ってくださいね。」

「かーれーんー、離してー!」*ぎぎぎ*

「エリカ、暴れないで下さいな！ 部長に言いつけますわよ!？」

「……」

（四宮先輩と違うクラスに居てコレって……もし、同じクラスだったらどうなるん

だろ……)

石上は余計なフラグを建てた。

へ本日の体育祭の勝者は紅組となりました。皆さん、お疲れ様でした。これより、閉会式を執り行います。へ

アナウンスが流れ、閉会式が終わると一般生徒はそのまま直ぐ帰宅となる。実行委員と僕達生徒会は後片付けの仕事が残っている為、せっせと体育祭で使った道具を倉庫に運んで行く。受け持った道具の最後の1つを倉庫に片付けて鍵をする……後は鍵を職員室に返せば終わりだ。鍵の付いたキーホルダーを指に引っ掛け、クルクルと回しながら職員室へと向かう。体育祭も終わり、桃先輩とのお家デートに意識が向く。お土産は何か良いかなあと樂觀的に過ごし、当日を迎えた。

## 龍珠家訪問

感想ありがとうございます(。ω。)

龍珠桃の母親↓龍珠華

龍珠桃の父親↓龍珠龍造とします。

長くなってしまった……(ノДノ)

---

「おどりゃあ!! ウチの娘泣かすたあどういいう了じゃコラアアッ!!?」

「オヤジ、落ち着いて下さい! そもそも、堅気の坊主相手にポン刀持って凄むとか大人気な……」

「うっさいわボケエエ!!」

顔に傷のある中年男性は刀を構え、圧を纏った怒声を少年に向けて放つ。そして……その怒声を一身に受ける少年、石上優は……

(ええー……)

ドン引いていた。

時は数時間前に遡る……

今日は桃先輩の家へ招かれている。人気店のバームクーヘンをお土産に門の前に立つ……。そう、門の前に。桃先輩に住所を聞きGoogleマップのストリートビューで確認すると、正に古き良き日本家屋とでも言うような家がデカデカと画面に映っていた。存在感溢れる家を守る様に、門壁が周囲を囲っている。桃先輩に到着した事をスマホで知らせ、僕は門に備え付けられたインターホンを押した。

へ……はい、どちら様ですか？

「あ……っと、石上優と申します。先輩……桃さんのこ、後輩です。」

恋人と言いそうになり、慌てて修正する。桃先輩が家族に内緒にしていた場合、僕からバラす訳にはいかない。

へあらあら、直ぐ行きますね。ㄥダダダッ

〈母さん！私が行くから！〉

女性の声の後に、走って来た様な足音と聞き慣れた声が聞こえて来た。良かった……ほっと胸に手をやり安堵する。流石に桃先輩の居ない状態で御家族との対面は緊張する。

〈優、直ぐ行くから待ってろ！〉

「あ、はい。」

暫し門の前で待っていると、門……ではなく、壁と思っていた部分が長方形に開いた。どうやら、門にはドアが付いていたみたいだ。

「何ボーっとしてんだ、さっさと入れよ。」

「うっす。」

ひょこっと顔だけ出した桃先輩に促され、敷地内へと入る。玄関まで伸びた石畳を歩き、桃先輩に続いて家の中へと足を踏み入れた。

「……ん？」

背中に視線を感じ、振り返るも視線の正体は見当たらなかった。

「優、どうした？」

「……いえ、何でもありません。」

気の所為か、と思い直して桃先輩の後ろを付いて行った。

……

「お、お嬢がダチを連れて来るなんて……」

「……初めてじゃねえか？」

「友達どころか恋人だったりしてな……」

「ガッハッハッ！もしそうなら、オヤジがブチキレるな！」

「あらあら、態々お土産まで……優君、ありがとう。」

和服に身を包んだ女性（桃先輩の母親で龍珠華と名乗った）へとお土産を手渡し  
ながら答える。

「い、いえ、つまらない物ですが……」

「ふふ、そんなに緊張しなくても大丈夫よ。」

柔らかな表情を浮かべ、そう言ってくれる桃先輩のお母さんを見て思った……桃先輩に良く似ている。母親だから当然なんだけど、特に似ていると思ったのはその表情だ。その表情は、桃先輩が偶に見せてくれる……優しい顔とそっくりだった。

「桃ちゃんが最近女の子らしくなって来たのは、優君の影響かしらね？」  
なんとも答え難い質問に……

「え、ええと、どうなんですかね……」

と、無難に答えておく。

「桃ちゃんたら……偶に部屋で1人の時、小さなクマの人形を抱き締めててね……」

「か、母さん、もういいでしょ！ ほらっ、行けど優！」

「え、あ……はい。」

桃先輩は僕の手を掴むと、早足で部屋へと向かった。部屋に入ると、ベッドの上には大きなクマのぬいぐるみが鎮座しており、枕元には僕が贈ったぬいぐるみが座り込んでいる。

「適当に座って良いぞ……って何見てんだ？」

「いや、ぬいぐるみ……抱き締めてるんだなあと思って。」

「くうっ!? い、いいか、今聞いた事は忘れろ!」

「そういうトコ、可愛いですよね。」

「聞いてんのか!? 忘れろって言ってるんだろ!!」

「どんな感じで抱き締めてるんですか?」

桃先輩をここぞとばかりにイジる。後が少し怖いけど、恥ずかしがって慌てる姿を見たいからしょうがない……うん、しょうがないんだ。

「の、飲み物取って来る!!」

このままでは旗色が悪いと思ったらしい桃先輩は、足早に部屋を出て行った。少しやり過ぎたかも……用意されていた座布団に座り、部屋を見渡すと小さい方のクマのぬいぐるみと目が合う。

偶に部屋で1人の時、クマの人形を抱き締めてて……

「……いいなあ、お前は。僕なんて抱き締められた事ないぞ?」

と、クマのぬいぐるみに対して愚痴を言ってみる。ジッと変わらない瞳でこっちを見るぬいぐるみから視線を外し、大人しく桃先輩の帰りを待った。



飲み物を持って来てくれた桃先輩と隣り合ってゲームをする。例えお家デートでも、普段とやってる事が同じ事に少しだけ可笑しくなり笑みが零れる。暫し、桃先輩とゲームに興じていると……

「もう、6時か……優は晩飯はどうする？」

「うーん、流石にそんな遅くまでお邪魔するのも悪いんで……」

そろそろ帰ります、と続けて言おうとすると桃先輩の……

「良かったら……食べて行けよ。」

という言葉に別の言葉が飛び出す。

「えっ、いいんですか？」

「うん……今から準備するから、居間で待ってろ。」

桃先輩に居間に案内された後、1人居間に残される。

「……」

（え？ 桃先輩が料理すんの？）

状況的にはそうとしか考えられない……桃先輩が料理をする意外性よりも、僕の心は……

「桃先輩の手作り料理か、楽しみだなあ。」

その一心で埋められていた。

……

「ふふ、桃ちゃんと一緒に料理が出来るなんて……夢が叶ったわ。」

「もうっ……大袈裟だから！」

「そうね、桃ちゃんも女の子だものね。大好きな人に手料理、振る舞いたいわけね。」

「も、もういいからっ……早く教えてよ！」

「ふふ、はいはい。」

「……」

ポーッとテレビを見ながら、桃先輩を待っている……

「桃のダチか？」

と声を掛けられた。その声に後ろを振り返ると、左右に厳つい顔の男を連れた……顔に傷のある男性と目が合った。

「えっと……はい、石上優といいます。お邪魔させてもらってます。」

「おう、ワシは桃の親父の龍珠龍造や。まあ、気軽に親父さんとも呼んでくれや。」

「……はい、親父さん。」

（凄……本物だ。念の為、龍○如くやって来て良かった……）  
対策になっているかは微妙である。

「メシが出来上がるまで暇やろ？ ワシとゲームでもして時間潰そうや。」

「え？ はい、何しましう？」

（ゲーム好きなのかな？ 話が合えばいいけど……）

「なら、人生ゲームで勝負するか。」

「ええ……」

（なんで人生ゲーム……）

「ワシとお前の一騎打ちや、異論はあるまい？」

「……わかりました、やりましょう。」

（……別に良いけど、人生ゲームって2人でやるモノだっけ？）

2人でやるモノではない。

「……これ、オヤジはゲームしたいだけちゃうか？」ヒソヒソ

「半々ってトコやな……マジで人間性見るつもりもあるんやろ。」ゴゴゴ

「じゃあ、始めるか。」

（フン……軽く考えとるみたいやが、人生ゲームは桃○同様プレイングに自身の性格が色濃く出るゲーム……お前がどんな人間か、桃ちゃんの側におっても大丈夫か、よく見させてもらおうやないか。）

一方的な石上優の人間性見極め人生ゲームのスタートである。

「4……コツコツと堅実に働き、実家のおもちや屋が繁盛……1000万を得る。」

「ほう、堅実なんは良い事や。」

「ははは、まあゲームですから。」

（どんな意図があるか心配してたけど、只ゲームするだけみたいだ……良かった。）  
「よし、次はワシの番やな。2……む、娘が嫁に行く……娘のおる奴はお祝い金  
100万円を別プレイヤーにつ……」プ。ワ。ワ。

「……」

気の所為か、一気に部屋の雰囲気が暗くなった様な気がした……ドンツという音  
に視線を向けると、目の前に帯で包まれた札束が置かれていた。

「……あの、ゲーム内のお金でお願い出来ますか？」

「オヤジ……高校生に現ナマ渡すんは、絵面的にヤバいんで自重してください。」  
「わ、わかつとるわ！次、お前の番やぞ!!」

「は、はい！」

漂い始めた不穏な空気を誤魔化す様に、サイコロを振る。

「5……け、結婚……お祝い金として他プレイヤーから100万円を貰う……」

「ワシは認めんぞおおおっ!? 桃ちゃんはなあ、子供ん時はパパと結婚する言うた  
んやぞ!？」

「いや、これゲーム！現実じゃなくて遊びですから!!」

「遊び!? 桃ちゃんとは遊びやったんか!？」

「オヤジ、落ち着いてくたせえ!」

「ぐうっ……くうう……!」フ。ワ。ワ。ス。

「だからリアルマネーは仕舞って下さい。」

（見た事あるな、この光景……）

「わ、ワシの番やな……1、む……娘の夫が借金を作る……マイナス1億円……お前、コツコツ堅実に働いとったんちゃうんかああ!?!？」

「僕じゃない! 僕じゃないです!! っていうか、なんでこのゲーム娘マスこんな多いの!？」

「坊主! オヤジが本切れする前に早よゴールしてくれ!」

「は、はい!……3。き、キャバ嬢に貢ぎ借金……マイナス1億円……」

「おどりゃあ!! ウチの娘泣かすたあどういう了見じゃコラアアッ!?!？」

親父さんは背後に飾られていた日本刀を掴み、金属音を響かせながら近付いて来た。

「オヤジ、落ち着いて下さい! そもそも、堅気の坊主相手にポン刀持って凄むと

か大人気な……」

「うっさいわポケエェ!!」

(ええー……)

ヒュンツという音が頭上から聞こえ、近付いて来る親父さんの頬を何かが掠めた……とほぼ同時に、壁にタンツと包丁が突き刺さった。

「貴方? さっきから何を騒いでいるのかしら?」

「は、華さん!? いや、コレはやな……」

「子供相手に、日本刀持って威圧するなんて……恥を知らなさい。」

「……ハイ。」

「優、出来たぞ……ってどうかしたか?」

「……いえ、なんでもないっす。」

(桃先輩のお母さんっつよ……)

……

夕食後、あまり長居するのも悪いので帰宅する旨を伝えると、門の所まで桃先輩が送ってくれた。

「悪かったな、親父が迷惑掛けたみたいで……」

「いえいえ、気にしないで下さい。楽しかったですよ？ 桃先輩の手料理も食べれましたし、充実した一日でした。」

「ふーん……？」 いん

嬉しさを隠し切れていない様に、桃先輩は僅かに笑みを浮かべる。

「また来ても良いですか？ あ、その前に今度は僕ん家で遊びましょうよ。」

「……うん、今度は私が優の家へ行くよ。」

「約束ですよ？ じゃあ今日はコレで。」

「ああ、また明日な。」

桃先輩と別れの挨拶を済ませ、一步目を踏み出した時……ギュツと背中から抱き付かれる。

「せ、先輩？」

「こ、コレでいいんだろ……」

「え？」

……いいなあ、お前は。僕なんて抱き締められた事ないぞ？



「……もしかして、聞いてたんですか!？」

「……さあな。」

桃先輩は最後にギュッと力を込めると、直ぐに離れた。そして、僕が振り返るのを待たずにドアへと逃げ込むと……

「じゃあな!」

その言葉と共に、ドアはバタンツと閉められた。

「……抱き逃げされた。」

その帰り道は、11月下旬だというのに全く寒さを感じなかった。

……

「……」

「オヤジ、こんな所に居たんですか……何か考え事でも?」

「ああ、昔を思い出しとった。ワシが学生ん時は、極道息子ってだけで色んな差別や問題に巻き込まれて、ダチも大して出来なかった。それで、その度に……華さんに支えられて、助けてもらったんや……」

「今は昔程、極道ってだけで差別や問題はないと聞いてますが……」

「だが、全く無い訳やない……桃には、余計な荷物を背負わせてしもうとるな。」

「オヤジ……」

「……」

（人間は簡単に、偏見と独断で他人の評価を決めてしまう……それはいつの時代も変わらん。石上優……お前はそれでも、桃の味方で居続けられるんか？）

先程までの雰囲気とは打って変わって、男は静かな空気を纏って……闇色に染まる空を見上げていた。

## 不幸な勘違い

感想ありがとうございます（・∀・）

あけましておめでとうございます。

---

12月も中旬に差し掛かった。期末テストも無事終わり、残るイベントは奉心祭を残すのみだ。奉心祭に向けての会議や準備を熟し、徐々に開催に向けて完成度を上げて行く……既に一度経験している身としては、トラブルが起きても問題なく過ごせるだろう。何より、僕には今回……桃先輩という彼女がいるのだから、例えば問題が起きたとしても彼女持ちとして余裕を持って対応出来るだろう。そう、彼女持ちとして……

石上は少々図に乗っていた。

まあ、それはさておき……

昼休み……生徒会役員全員が揃った生徒会室では、あるイベントが開催されてい

た。そのイベントとは……

「全生徒会腕相撲トーナメントの開催です!!」

全生徒会腕相撲トーナメント！ 前回の石上は、かぐやの利き腕に合わせて左腕で勝負し、敢え無く惨敗。先輩とはいえ、女子に負けたという事実には石上は地味にヘコんでいた。しかし、今回の石上は中等部では部活動に勤しみ、引退してからも筋トレ自体は続けていた……今回こそはと、ある種の覚悟を持って臨んだかぐやとの腕相撲勝負、果たしてその勝負の行方は……

「ではレディー……ファイ！」

伊井野の掛け声と共に、一気に左腕に力を込める。四宮先輩相手に油断は禁物、一瞬で勝負を着ける！ そう決意した僕の覚悟を……四宮先輩は一瞬で刈り取った。僕の左腕は、敢え無く机に叩きつけられたのだ……

「四宮先輩の勝利！」

「」

「石上くんの負けー！ ハイ、これ付けましようねー。」

嬉々とした藤原先輩に問答無用で、弱者と書かれたタスキを掛けられる……嘘や

ん、四宮先輩メツチャ強いやん……コレは勝てませんわ。

石上は左腕のダメージ以上に、精神に傷を負った。

「ふふっ、では会長……フェアプレイで行きましょう。」  
いっいっいっ

「わかってるさ。」  
いっいっいっ

手を握り合う会長と藤原先輩を見ながら洩らす。

「人ってというのは、変わらない生き物なのかもな……」

「石上、何言ってるの？」

「……レフェリー、これはアリなんですか？」

伊井野の発言に被せる様に、四宮先輩が藤原先輩のイカサマを見破った。

「……以上の理由から、これでは藤原さんが一方的に有利になってしまう訳ですが、本当にアリなんですか？」

「ふ、藤原先輩……？」

「……」ブッ

嘘ですよ？とでも言いたそうな伊井野の視線から、藤原先輩は目を逸らす。

「ほーらやると思った!! 1学期からホント成長してませんね! そこまでして勝

ちたいですか!? 普通にセコい! コレはもう、人としての品性の問題ですよ!」  
ここぞとばかりに藤原先輩を罵倒しまくる。当然、セコい手を使えなくなった藤原先輩と会長の腕相撲勝負は……

「へ。ぎ」

「……会長の勝利です。」

「じゃあ、藤原先輩行きましょうか。」

「……ハイ。」

弱者と書かれたタスキと、1学期に使用したプラカードを藤原先輩の首に掛ける。

「じゃあ、僕達ちょっと席外しますね。」

目の死んだ藤原先輩を連れて出て行く。

「お、おう……石上、程々にな……」

「はあ……」

（藤原さんもホント懲りないわね……）

「藤原先輩……」

## 〈校舎内〉

「ぐうえええ……もうやだあ……！」  
「ハッハッハッ」

「自業自得ですからね、我慢して下さい。」

本日の勝敗、藤原の敗北

人生には幸運、不運が連続して起こる時がある。それが偏った確率で起こったとしても、何れは適切な確率へと収束する。しかし、人間は良い事よりも悪い事が起きた時の方を意識してしまいガチである。そして、不運が起きるとちよつとしたきっかけから、だんだんと追い打ちをかけるように、広がっていくことがある。

## 〈中庭〉

放課後、中庭に設置されたベンチ裏の茂みで寝転がり、カタカタとゲームに勤しむ。優は生徒会室でやる事があると言っていたから、今は私1人だ。軽快にゲームを進めていると……

「ねえ、聞いた？ 奉心祭の話！」

「奉心祭？ ハートを贈るとーって奴？」

「そうそう！ 凄いロマンチックじゃん！」

「アンタ相手いるの？」

「こ、これから作るの！」

奉心祭の話に盛り上がる、女子2人の話し声が聞こえて来た。奉心伝説について話してるって事は、あの2人は1年か……なんとなく、優と同じ1年という事で会話に意識が傾く。

「そういやさー、アンタのタイプってどんな感じ？」

「えー、とりあえず……頭良い人、カッコいいじゃん！」

「ふーん、生徒会長みたいな？」

「あー、カッコいいよねー！ 学年1位!! 生徒会長だから、流石に気後れしちゃうけど……」

……出会ったばかりの白銀<sup>ア</sup>御<sup>イ</sup>行<sup>ツ</sup>を知っている身としては、女子にキャーキャー言われている所を見ると、未だに多少の違和感を感じる。あの頃のアイツは、相当な



へタレだったからな……

「そういえば、生徒会にもう1人男子居るよね？ 私達と同じ1年で。」

「石上君でしょ？ 生徒会長が直々にスカウトしたっていう。」

優の名前が出た瞬間、ピクリと体が僅かに反応する。

「アンタ知ってんの？」

「うん、私C組の代表で文化祭会議に参加したんだけど、会議でもバンバン意見出して凄かったよ！ 2年生とかも意見出してたんだけど、それについての捕捉説明とか解決策をスラスラ言ってるカッコ良かったなあー。」

……優が他の女子からも一目置かれている事に、ほんの少しだけ優越感が湧き上がる。ハッ、残念だったな、優はもう私の……

「告っちゃえば？」

……は？

「……ん？ 今、なんか声しなかった？」

「うん？ 気の所為じゃない？」

「そうかなあ……まあいいや。それで、告っちゃいなよ。結構優良物件じゃない？」

「えー、確かにそうだけども……付き合ってる人いるんでしょ？」

「あー……聞いた事はあるけど、アレってホントなの？」

「じゃないの？ 前に一緒に居るトコ見たって人いるらしいよ？」

……まあ、割といつも一緒に居るからな。誰かに見られてても不思議は……

「確か……藤原先輩だったよね。」

……その発言に思わず、ゲーム機を握る手に力が入る。メキッと悲鳴を上げるゲーム機に構わず、私は話に聞き入った。

「そうそう、なんか偶に校舎内で羞恥プレイみたいな事してるんでしょ？」

「いや、流石に学校で羞恥プレイは無いと思うけど……」

「でも、昼休みの時も……」

まだ女子2人は喋っていたけど、話し声は耳に入って来なかった。浮気……いや、優に限ってそんな事ある訳ないな……多分、何かの勘違いだろ。でも、なんでよりによって勘違いの相手がアイツなんだ。私は少しでもイラついた感情を誤魔化す様に、ゲーム機の電源を入れた。

はあ……また少しスランプ気味になってしまいましたわ。エリカの提案した、かぐや様が本来持つ気高さで会長をお守りするという展開も描き尽くしてしまいましたし……やはり、ここは一度基本に帰るべきでしょうか……私がいつもの様に、会長×かぐや様シリーズの構想を練っていた時の事です。気分転換に中庭を散歩していますと、ベンチ裏にある茂みの中に人の気配を感じました。興味本位で私はバれない様に、ソッと近づいて様子を見ていました。すると……

「遅いな……優の奴。」

龍珠さんはそう言葉を洩らしますと、スマホを取り出してポチポチと操作し始めました。多分、石上編集を待っているんですね……寂しそうな龍珠さんの姿を、そしてその表情を見た瞬間、私の頭に雷が落ちた様な衝撃が走りました……コレですわ！ 会長を待ち続けるかぐや様！ そして、約束を果たす為かぐや様が待つ場所へと走る会長!! 道中、立ち塞がる難敵を乗り越えて会長はかぐや様を抱き締め

る……完璧ですわ!! この名案を忘れない内にノートに書き溜めなくては! 私は素早くノートを取り出し、先程浮かんだ案をスラスラと書き綴っていました。その時です……

「おい! 何してる!!」

「ひゃいっ!？」

いきなり怒声を掛けられ、体が跳ね上がりました。声のした方を振り向くと、龍珠さんが口元を歪めて私を見ていました……

「あ……べ、別になんでもないんですのよ?」

「……さっきノートに何か書いてただろ? そのノートを見せろ。」

「」

ノートヲミセロ? え? どういう意味ですか? 龍珠さんの衝撃的な言葉に動揺し過ぎて理解が追い付きません……

「おい、何無視してんだ、さっさとっ……」

龍珠さんは私に近付くと、グイッとノートの端を掴みました。

……

「うわっ!? なんだコレ……白銀と四宮の妄想ばかり……」

「あ、あああっ……ち、違うんです、違うんです……これには事情が……」

「お前、流石にコレは引くわ……念の為、2人には伝えておいた方がいいかもな。」  
「り、龍珠さん!? お願いですから、待って下さい!!」

「近寄るな、変態!」

……

……だ、ダメですわーっ!! この中を見られるのだけは絶対に阻止しませんと!!

「ダ、ダ、ダメですわぁ! こ、このノートは見せられませんか!!」

「さっき私を見ながら何か書いてただろーが! 見せろ!」

「違うんです! コレはそういうのじゃないんです!!」

「じゃあ、見せられるよな?」

「それは無理なんです! 後生ですから見逃して下さい!!」

「お前……いい加減に……」

「あっ、石上会計!」

此方に歩いて来る石上編集が目に入り、私は思わず声を上げました。

「えっ?」

龍珠さんはノートから視線を外して、後ろを振り返りました……今ですわ!

「ごめんなさい!」ㄨㄣ

「あっ、おい!」

私はノートを胸に抱き締めて、走り出しました。私を呼び止める龍珠さんの声には、一度も振り返らず……只々ノートを守る為に走り続けました。

「……桃先輩、何してるんですか? さっき走って行っただけで、紀先輩ですよ?」

「……そんな事より、ちょーっと聞きたい事あんだけど?」

「アレ? 桃先輩、なんか怒ってます?」

「優……羞恥プレイは楽しかったか?」

「何の話!?!」

✕石上の敗北

## 悪意の矛先と踏む地雷

感想ありがとうございます(。ω。)

友人や先輩、後輩との話題……それは、千差万別。生徒とコミュニティの数だけ存在する。その話題の中には……

「……って事があってよー。」

ある時は、オチも無いくだらない実体験……

「私、今度の奉心祭で告白する！」

ある時は、高校生らしい恋愛話……

「本番に間に合うか微妙になって来た……」

またある時は、奉心祭についての近況報告……

「ねえ、聞いた？ あの噂……」

そして、根拠の無い……

「聞いた聞いた、ヤクザの子がマスメディア部の子を虐めてたんだって？」  
故意に創られた、個人を攻撃する噂話が存在する。

その日は、朝から妙に視線を感じていた。いつもの様に、昇降口で靴を履き替えた時も、教室に向かう途中の廊下でも、私が在籍する2年C組の教室に入った時も……

「やだ……」

「ヤクザってやっぱり……」

ドアを開けて、教室に入った私をチラチラと見ながら、ヒソヒソと何かを言い合っている女子生徒が視界にチラつく。

「……？」

（なんだ？ 何か、違和感が……まあいいか。）

元々クラスの人間に大した興味もない……鞆を机の横に掛け、周りを見渡すとそ



こで初めて、この違和感の正体に気付いた。

「へえ……そういう事か。」

正面に配置された黒板には、一枚の紙と写真が貼られていた。

〈ヤクザの娘である龍珠桃は、マスメディア部女子を虐めている〉

そう書かれた紙と、紀に詰め寄る私を写した写真を剥がす事もせず……私は椅子に座った。

〈同時刻、1年B組〉

「なんだよ、コレ……」

龍珠桃のクラスに貼られていたのと同様の紙と写真が、石上優のクラスにも仕掛けられていた。

貼り紙と写真を黒板から剥ぎ取ると、くしゃくしゃに丸めて握り潰す。一体、誰がこんな事を……ギッと無意識に拳に力が入る。ふざけるなよ、なんだよコレは……

しんと静まり返った教室を見渡して問い掛ける。

「……コレ、いつから貼られてたか誰か知らないか？」

返事が帰って来ない事に苛立ちが増す。更に言葉を続け様とした時……

「石上、落ち着きな。そんな威圧してたんじゃ、答えたくても答えらんないよ。」  
ポンッと小野寺に肩を叩かれて諭される。

「……威圧してた？」

「気付いてなかったの？ 結構、圧凄かったよ。」

「……悪い。」

「……伊井野と大仏さん、今日風紀委員の用事で早く来てたみたいだから何か見てもかもしれないよ？ とりあえず、2人が来たら聞いてみれば？」

「……ああ、そうするよ。」

その後、教室に来た2人に何か見ていないか聞いて見たが、有力な情報は得られなかった。

……

チャイムが鳴り、休み時間になった瞬間に僕は教室を飛び出した。向かう先は、

桃先輩が在籍する2年C組だ。途中、スマホのメッセージ着信音に足を止められる。それは、空き教室に來いという桃先輩からのメッセージだった。

〈空き教室〉

「放って置けばいいだろ。」

「で、でも……誤解なんですよ!? ちゃんと、説明すれば……」

「……わかってねえな。他人を迫害する理由ってのは単純明解、それが楽しくてラクだからだ。全員がお前みたいに正しく在りたい訳じゃないし、あの写真を見れば殆どの人間は、紀が被害者で私が加害者だと思うだろ。この場合、大事なものは正しいかどうかじゃない……自分が多数派に入るかどうかだ。周りの人間と違う事を言えば、今度は自分が迫害されるかもしれない……そういう事なんだよ。」

「でも!!」

「優がそこまで怒る事じゃない。私は平気だし、優は信じてくれてるんだろ?」

「当たり前です、桃先輩はそんな事をする人じゃない。」

「……だったらいいよ。お前がちゃんとわかってくれてるなら、私は平気だから。」

「桃先輩……」

「それにな……私のクラスは大した問題になってないんだよ。」

「え？ どういう事ですか？」

「それがな……」

### 〈中庭〉

昼休み、僕はもう1人の当事者から話を聞く為に、紀先輩と中庭のベンチに腰掛けていた。

「……なるほど、一連の流れは理解しました。」

先日の桃先輩と紀先輩の遣り取りの内容を聞き、暫し思考に沈む。

「ほ、本当にごめんなさい！ まさか、ここまで大事になるとは思わなくて……」

「まあ、コレに関しては……悪意を持って貼り紙を仕掛けた人間が悪い訳ですし……それに、桃先輩から聞きましたよ。教室に入って、黒板に貼られた紙と写真が目に入るや否や……」

コレは真実ではありません!!

「……って否定してくれたんですよね。ありがとうございます。」

「い、いえ！ 本当の事ですし、当然の事をしただけですもの。あの……龍珠さんは何と？」

「……放って置けばいいって言ってきました。」

「そうですか……龍珠さんは強い人ですね。」

……あれから、桃先輩の噂は緩やかに、だけど確実に秀知院に広がって行った。少し調べた所、その噂は昨日の時点で存在していて、今日の朝にはある程度広まっていたらしい……まだ全部のクラスを調べた訳じゃないけど、あの貼り紙が仕掛けられていたのは少数のクラスだけみたいだ。その事に少しでも安堵する……

「でも、これからどうすればいいのでしょうか？」

「先輩が噂を信じている人全員に、ノートの中身を見せて説明すれば良いんじゃないんですか？」

「……私、今遠回しに死ねと言われてます？」

「それくらいで死のうとしないで下さい。」

「いえ、もしそうするしか手がないのなら……私は死を選びますわ。」

「……冗談ですから。」

（そんなノートを普段から持ち歩いてるって、常にdead or alive状態なんじゃ……）

寧ろdead or die状態である。

「……決めましたわ！」

「……何か良い案でも浮かんだんですか？」

「ちょっと遺書を書いて来ますので、少々お待ち下さい！」

「死ぬ覚悟を決めないで下さい。はぁ……とりあえず、噂を広めた人間を突き止める様と思います。昨日の時点で桃先輩の噂が存在していたなら、放課後の2人の遣り取りを見ていた人間という事になります。噂の出处さえ調べれば……」

「……それは不可能に近いと思いますわ。」

「え？　なんでですか？」

「……石上編集は、F・O・A・Fいうのをご存知ですか？」

「……なんですか、それ？」

「Friend of a friend……友達の友達という意味の言葉です。都市伝説や噂話が広まる時のシステムの様なモノですわ。例えば……会長がコレは友人から聞いた話なんだが……とかぐや様に話したとします。そしてかぐや様も藤原さんに同じ話をします。そして藤原さんも石上編集へ同じ話をします。こういった過程を踏んだ場合、藤原さんに誰からその話を聞いたと訊ねれば、かぐや様と答えるでしょう。石上編集に聞けば、藤原さんと答えます。」

「そりゃ、事実その通りですからね。」

「しかし更に進んで石上編集が友人Aに、更にその友人AはBに……と進むとどうなるでしょう？」

「え、何か変わるんですか？」

「友人Aは石上編集が藤原さんから聞いた事を知っていたとしても、態々藤原さんから話を聞いた石上編集に教えてもらった、とは言いません。省略してこう言います……コレは友達の友達から聞いた話なだけど……と。」

「あ……」

「つまり、都市伝説や噂話の最初の1人を探る事は不可能に近いのですわ。まだ

噂が広まる前なら、可能性はありました。でも……こうも噂が広まった状態だと、誰から聞いたと舐潰しに調べても成果は得られないかもしれません……」

「……なるほど、確かにそうですね。」

「出鼻を挫く様な事を言って申し訳ありません。」

「いえ……無駄骨折る前に知れて良かったです。流石はマスメディア部ですね。」

「いえ、それ程でも……」

「妄想ばかりしてる、残念ナマモノ先輩じゃなかったんですね。」

「……え？」

「とりあえず、色々考えてみます。」

「妄想ばかり？ 残念？ ナマモノ先輩？ 石上編集、ちょっとそこら辺詳しい説明を……」

しっかり地雷は踏み抜いた石上だった。



## 聞き込み調査とアドバイス

感想ありがとうございます(。ω。)

桃先輩の放って置けと言う言葉を無視して、僕はなんとか犯人に辿り着く為に情報を集めた。文化祭の準備や生徒会の仕事と並行して調べている為、割ける時間は多くは無い。とりあえず今日一日調べた結果、犯人に直接結び着く様な情報は得られなかったが、いくつかわかった事がある。

1 つ、貼り紙が仕掛けられていた教室は、1 年 A 組と B 組、2 年 C 組の 3 クラス。

2 つ、昨日の放課後には、既に噂が存在していた。

3 つ、確実ではないけど、3 クラスのみという事実から犯人は 1 人、又は少数。

……という事だ。あの文面的に桃先輩を標的にしているから 2 年 C 組に貼るのはわかるし、桃先輩と付き合っている僕のクラスに貼るのもわかる。桃先輩と付き

合っている事を口外してはいないが、2学期に入ってからには特に一緒にいるから、付き合っていると気付く人間もいるだろうし、僕と仲違いさせたかつとも考えられる……問題はA組だ、なんでA組にも仕掛けられていたのか？仕掛ける数が増えれば増えるほど、見つかる危険性は増える筈なのに……そこまで考えて、1つの事実を思い出した。そういえば、A組にはアイツが居た筈だ。生徒会室に行く前に話をしておくか、ちよつと気まづいけど……

へ1年教室廊下へ

「部活に行く前に……ちよつといいか？」

「……いいだろう。」

相変わらず、鋭い眼で此方を睨む男に辟易する。

「此処じゃなんだから……こっちで話そう。」

「ああ。」

階段横の死角に陣取り、男と向かい合う。

「それで、何の用だ？」

僕と向かい合う形で佇む男、小島剣はそう言いながら壁に背を預けた。

教室に入ると、クラスメイトが黒板の前に集まっているのが見えた。何かの連絡事項でも貼られているのか？ 確認の為に黒板に近付くと、俺に気付いた数名のクラスメイトが身を引いて道を空ける……なるほどな、そういう事か。

「コレはいつから貼られていた？」

目の合った男子生徒に問い掛ける。

「……わかんねえ。来たら貼ってあったんだ。」

「では、1番最初に教室に入った者は？」

続く問い掛けに、1人の女子生徒が自信なさげに手を挙げる。

「わ、私です。」

「教室には何時頃に入った？」

「8時丁度だったと思います……」

その言葉に腕時計を確認する。秀知院が開門されるのが7時30分……30分の間

に、事を済ませたという事か。

「その時に誰か見ていないか？」

「いえ、見てません……」

「なるほど、わかった。」

黒板に貼られた紙と写真を剥がし、ポケットに仕舞う。

「せ、先生に報告とかしなくていいんですか？」

「報告する事に意味があると思うか？」

女子生徒の問いに、そう言葉を返す。幸か不幸か、この学園の教師は生徒同士の問題に必要な以上に関わろうとはしない。余程問題が大きくなならない限り、生徒同士で解決させる。教師が早い段階で関わるのは、学園カーストの低い者同士で問題が起きた時だけだろう。龍珠が関わっている時点で、教師の力量ではどうにも出来ない。俺の言葉の意味がわかったのか、女子生徒はそれ以上言葉を発しなかった。

「だが……」

まさか、龍珠に対してこんな事をする奴がいるとは……余程の考え無しがいる様だな。龍珠も降り掛かる火の粉くらい、自分で払うだろう……俺には関係ないと高

を括っていると、放課後にあの男が訪ねて来た。

「部活に行く前に……ちょっといいか？」

石上優……4月に衝突して以来か。力や権力に屈しない珍しい人間で、龍珠に懐いている物好きでもある。噂で他のクラスにもあの紙が貼られている事は知っている。このタイミングで来たのなら、コイツのクラスもやられていたのだろう。

「……いいだろう。」

龍珠と敵対していた俺を疑っているのだろう……教室を出て階段横の死角に移動して訊ねる。

「それで、何の用だ？」

理由はわかっていたが、敢えて知らないフリで対応する。石上がこの問題にどう関わるのか興味が湧いたからだ。

小島にA組の反応や手口の確認をする。A組も他のクラスと同様の手口らし

い……大した騒動は起こらなかったらしいから、それは良かったけど……最低限の感謝の言葉を述べ、小島に背中を向けて歩き出そうとした時だ。

「……それで終わりか？ 何故俺を疑わない？」

「疑う？ なんで？」

小島の言葉に振り返って答える。

「……忘れたのか？ 俺は龍珠と敵対していた人間だ。お前にとっては、最初に疑って掛かるべき人間の筈だ。」

「いや、お前はやらないだろ。」

「何故……そんな事が言える？」

「……お前はこういう、ネチネチした遣り方はしなれないと思ったただだよ。今回の場合、お前なら直接桃先輩か紀先輩に事の真偽を訊ねるだろ？」

「……」

図星だったらしく、小島は黙り込む。

「4月の件でお前とはまだ少し気まずいし、桃先輩を悪く言った事は許してないけどさ……僕はお前の事、苦手だけど嫌いではないよ。」

「……そうか。」

「もういいなら行くけど……」

「待て。」

「今度は何っ……」

「推測だが……犯人はそれ程学園カーストの高い人間では無い。件の話を聞く限りの印象は、単独犯で考えが浅い。俺のクラスにも仕掛けられていた事を考えると、4月にあった件を直接もしくはそれに近い形で知っている人間の可能性が高い。恐らくは、俺に龍珠を責めさせるつもりだったんだろう。」

「なんでそこまでわかるんだよ?」

「学園カーストについては、ある意味当たり前の事だ。龍珠の家は広域暴力団……日本国内の影響力は言うまでも無い。この学園に通うカースト上位者は、絶対に敵対するべきじゃない人間を理解している。だが今回、龍珠に対してここまでの事を仕出かしている……龍珠を敵に回すリスクにも考えが及んでいない……馬鹿としか言い様がないな。」

「……お前が言うのか?」

「警察と極道は反発し合う磁石の様なモノだ。多少の小競り合いこそ有れど、本格的に手を出す事はない。」

そういえば……僕が知っている限り小島が桃先輩に関わったのは、4月にあった昇降口での一度切りだったか……僕からすれば、小競り合い自体するなよって話なんだけど……

「……折角の機会だから聞くけどさ、どうして僕に桃先輩から離れろって言ったんだ？ お前だったら、桃先輩に直訴しそうなもんだけど……」

「……そんな昔の事は忘れたな。」

「昔って……半年くらいしか経ってないだろ。」

「フン……最後に1つ。」

「無視かよ。」

「仕掛けられていたクラスは3つ。1年A組とB組、2年C組……犯人が居るとするならこの中の人間だろう。」

「えっ!？」

「考えてもみる。昨日から噂を流し、早朝に登校し貼り紙を仕掛ける……犯人の心



理的に直接クラスの騒動を目にしたい筈だ。先ず間違いなく、この3クラスの中に居るだろう。」

---

### 〈中庭〉

あの後……小島と別れた僕は生徒会室に向かう前に情報を整理しようと、中庭のベンチで考えを巡らせていた。犯人は3クラスの中に居る……なんとか犯人を突き止めたけれど、どうすれば良いんだ？ 頭を悩ませていると……

「お悩みかな？ 石上優君。」

「……え？」

背後からの声に振り向こうとするが……

「ああ、振り返らないで。僕と話してる所は、他の人に見られない様にした方がいいよ。」

「え、なんですか？ というか貴方は……？」

「最初の質問は簡単さ、僕は嫌われ者だからね。君達 1 年生は知らないだろうけど……2、3 年は僕を嫌っている人間が殆どだ。だから、僕が誰かなんて気にしなくていいよ。」

背後から聞こえる声には、穏やかで理知的な雰囲気が漂っていた。とても、人に嫌われる様な人間が出すモノとは思えない……暫し、黙って考えていると……

「龍珠君の件は噂で知っているよ。3 クラスまで絞れているなら、犯人を捜すのはそう難しくはなさそうだね。」

「え？ なんで……」

その情報は、ついさっき小島から聞いたばかりで誰にも喋ってないし、小島も言いつつ触らす様なタイプではない。

「少し思考を働かせれば、簡単に辿り着ける結論さ。」

「……でも、3 クラスまで絞れても犯人を見つけられないと意味がありませんし、噂を消そうにも噂はもう学園内に広がり切ってます。例えば犯人を見つけても、桃先輩をそういう目で見る人は居なくならない……」

「人の噂も 75 日と言うけどね？」

「待てるわけないでしょう！ 桃先輩は何も悪くないのに、一方的に噂みたいな人間に見られるなんて不条理です！」

「不条理か……確かにそうだね。では、先輩から後輩に1つアドバイスをしてあげよう。誤解を解く、犯人を捕まえる……君の目の前にある選択肢は、その2つだけかな？」

「え？ それってどういう……」

「……僕はコレで失礼するよ。」

「ち、ちょっと待って下さい！ さっきのってどういう意味ですか？」

振り返って問い掛けた僕の言葉に、返事は返って来なかった。というか、既に誰も居なかった……

「早っ……結局誰だったんだ？」

頭を悩ます要因が1つ増えた事にげんなりしつつ、僕は生徒会室へと向かった。

## 無言の帰り道

感想ありがとうございます（・∀・）

## 〈生徒会室〉

謎の先輩男子生徒からの助言の意味を考える。

誤解を解く、犯人を捕まえる……君の目の前にある選択肢は、その2つだけかな？

アレはどういう意味なんだろう……そもそも、あの人は桃先輩を知っているみたかったけど、自分の事を嫌われ者とも言っていた……会長なら知ってるかな？

「石上、居たのか……少し、面倒な事になっているみたいだな。」

「会長……」

いつの間にか、会長が生徒会室に入ってきて来ていた。考え事をしていて気付かな

かった……

「龍珠は大丈夫か？」

「はい、全然堪えてませんよ。放って置けばいいって……」

「まあ、龍珠ならそう言うだろうな……」

「でも僕は、そんな事出来ません。くだらない噂を信じて桃先輩に侮蔑の視線を向ける人達も、桃先輩の事を何も知らないのに陥れようとする犯人も……許せない。」  
ギリッと拳を握って歯を食いしばる。

「石上……俺の方でも色々調べてみよう。龍珠が悪く言われるのは、俺も気分が悪い。」

「会長……ありがとうございます。」

「いや、気にするな。俺もアイツには……恩があるからな。」

「……恩ですか？」

「まあ、な……」

「あ、そういう会長に聞きたい事が……」

「こんにちはー！」ガチャッ

「こんにちは。」

「ああ、お疲れ四宮、藤原書記も。」

「……お疲れっす。」

藤原先輩の挨拶に遮られる。まあいいか……また後で聞こう。

「……大変な事になってるみたいね、石上君。」

「石上くん、大丈夫？」

「ええ、まあ……」

「ここまで情報が交錯していると、意志の弱い人間は多数派に流れるモノです。そして、現時点での多数派は……言うまでもありませんね？」

「はい……」

四宮先輩の言葉に頷き答える。

「私もあの噂は信じていませんが、大衆からすれば正しい正しくないは問題ではないのですね……友人と一緒に盛りがれる、ストレス解消になる、悪者を責めるのは気分が良い……そんなくだらない感情で他人を愚弄する……浅はかと言えませんか。」

「私の方でも、噂はデタラメだって言っておきますからね！」

「藤原先輩……お願いします。」

「……藤原なら交流関係も広い、直ぐに噂も終息するさ。」

「だと良いんですけどね……」

「石上君、伊井野さんが来ていない様ですが？」

「伊井野は……」

「すみません、遅れました。」*グチャッ*

「ああ、伊井野監査、お疲れ。委員会か？」

「はい、風紀委員長に現在秀知院で起きているイジメ問題についての報告をしていました！」

「態々悪いな、伊井野。」

「なんで石上が謝るのよ、風紀の乱れを正すのは風紀委員の絶対的職務よ！ それに私、こういうの大っ嫌い！」*くわっ！*

伊井野も風紀委員って事で、中等部の頃から煙たがられていた経験があるからか、積極的に協力してくれている。

「わあ、ミコちゃんが燃えてる……」

「でも、イジメね……」

（広域暴力団組織、龍珠組……四宮の力を持ってしても、無傷で掌握するのは不可能に近い……そんな人間に敵対するなんて、命知らずな人も居るものね。でも……）

「イジメ……か。」

（龍珠にこんな事を仕出かすとは、命知らずな奴も居たもんだ。でも……）

「……」

（確かに……イジメと言っても差し支えない状況なのだけど、龍珠<sup>あの子</sup>さんがイジメられる姿が想像出来ないわ。）

「……」

（起きている出来事は確かにイジメなんだが、龍珠がイジメられているイメージが一切湧かん。）

……

桃先輩の件は一先ず置いて、文化祭に向けた書類整理に従事する。各クラスが出し物で使う備品申請の処理、在庫に限りがある備品は数に制限を設け、必要書類が



提出されていないクラスへの催促など……奉心祭当日に近付けば近付く程、仕事は増えて行く。前回の一度体験した記憶があると言っても、効率良く仕事を熟せるだけで別に仕事量が減る訳ではないのが痛い所だ。

「藤原先輩、このデータって……」

「それは新規に保存しなくても、上書き保存で大丈夫ですよ。」

「あ、そうなんですね……藤原先輩ありがとうございます。」

「全然良いですよ！ミコちゃん、わからない事があったらバンバン聞いて下さいね！」

「……」

（藤原……石上には先輩面出来ないから、滅茶苦茶嬉しそうだな……）

「あ、漢字ミスっちゃった。修正液つと……」

「……藤原書記、あまり修正液で塗り潰すとコピーを取った時に歪に見えるから注意しろよ。」

「はい。」

「……ん？」

（なんだ？ 今なんか引っ掛かった様な……）

「石上、どうかしたか？」

「いえ……なんでもないっす。」

「そういえば……藤原さんは、随分前に寝ている会長の額にイタズラで落書きした時も、漢字間違えをしていましたね？」

「え？ そうでしたっけ？」

コテンと首を傾げる藤原先輩に視線が集まる。

「藤原先輩、いい歳して何やってるんですか。」

「藤原先輩……」

「ううむ、俺も覚えてないな。四宮、どんな間違いをしていたんだ？」

「果肉入りと落書きしていましたが、果の漢字の木の部分の横棒が無かったんです。」

「うわぁ……いい歳して落書きしてたのも恥ずかしいのに、漢字ミスって二重に恥ずかしいヤツじゃないですか。しかも藤原先輩の役職書記なのに、何やってんですか……」

「ゆ、ユーモアですよ！ワザと間違えたに決まってるじゃないですか!？」

「あら？笑いながら何の果肉が入ってるんだろうと、それは楽しそうに言ってますが……」

「か、かぐやさん!?!もうその辺で……」

「藤原先輩は、自分の頭の中に入ってる果肉が何なのかを気にした方が良くないじゃないですか?！」

「ほらあつ！正論で殴るDV男がイキイキと攻めて来たじゃないですか!！」

「完全に藤原書記の自業自得だろ。」

「……」

「藤原先輩を副会長にしなくて良かったな?！」

「べ、別にそんな事思っていないわよ！藤原先輩のイタズラは、生徒会役員同士の関係を円滑にする為の潤滑油みたいなモノで……」

「潤滑油って……就活生か。」

「それに、藤原先輩は凄く優しいんだから!！」

「ミコちゃん!！」ダッキッ

「この前はスイパラに連れて行ってくれたし、クッキーもチョコレートもくれるし、偶にプリンだって……」

「食いモンばっかじゃねえか。」

「餌付けだな……」

「餌付けですね。」

「じゃー逆に聞きますけどね！ 人に優しくする事は悪なんですか!? お菓子をあげる事は大罪なんですか!?!」

「こっちを悪者にされてもな……」

（相変わらず、強欲な子……）

「食べ物で釣ろうって魂胆が透けて見えるのが問題なんですよ。あと伊井野は、道端でお菓子とか貰ってもついて……」

「行かないわよ!!」くわっ！

生徒会の仕事も終わり、寒空の下帰路に着く……生徒会がある事は、既に桃先輩には連絡済みだ。今日一日だけで結構な情報が集まった……家に帰ったら色々考えよう。そう思いながら、校門を通り過ぎ様とした時だ。

「……お疲れさん。」

「も、桃先輩!? 待っててくれたんですか?」

「……偶にはな。」

「寒くなかったですか?」

「……寒い。」

「えーと、じゃあとりあえずコレを……」

自分に巻いていたマフラーを外し、桃先輩の首に巻き直す。

「……サンキュ。」

「じゃあ、帰りましょうか。」

「……優、手袋はないのか?」

「手袋……すいません、持ってないっす。」

（次からは、手袋も用意しておくか……）

「なら、今日の所はコレで我慢してやる……」ヤッ

桃先輩は俯いたまま僕の手を掴むと、自分の手と絡ませた。ギュッと小さな力で握って来るその手に、僕も同じくらいの力で握り返す。お互い無言のまま歩き続ける……言葉を交わす代わりにギュツギュツと手を握って来る桃<sup>人</sup>先輩の体温を感じながら、強く思った……やっぱり手袋用意するのやめようと。

## 石上優の自己満足

感想ありがとうございます(。ω。)

次の日、依然として桃先輩の噂は秀知院に漂っているし、桃先輩と一緒に居る時にふと視線を感じる事がある。噂を信じた軽蔑の視線か、単なる興味本位の視線か、或いは真偽を確かめ様とする視線か……何れにせよ、ジロジロ見られるのは気分が良いモノではない。桃先輩は本当に気にしてないみたいで、自身に浴びせられる視線を全く意に介していないし、犯人探しをするつもりも微塵も無いらしい……僕だけが気にして、僕だけが噂を消したくて、僕だけが犯人を突き止めたいと考えている事に何とも言えない気持ちになる。もしかして、僕は無駄な事をしているんじゃないか？ 桃先輩本人が気にしていないのに、奔走しているのはバカな行いではないのか？ そういった思考がフツフツと湧き上がった。

「絶対そんな事ないよ！」

胸の前で拳を握り、僕の考えを力強く否定してくれたのはつばめ先輩だ。

「……そう思いますか？」

「そりゃそうだよ！ 男の子が自分の為に頑張ってくれてるんだもん。女の子なら絶対嬉しいし、龍珠ちゃんだって嬉しい筈だよ？」

「だったら、いいんですね……」

「私のクラスでも少し話題になっててね……流石に噂を鵜呑みにする人は居ないけど、あんまり良い気はしないよね……」

団長やつばめ先輩經由で調べた所、3年生はこの噂に懐疑的な人も多いらしい。流石に最上級生ともなれば、情報に踊らされる事も無いのだろう。この前のアドバイスをして来た謎の男子生徒も、3年生の可能性が高くなった。

「そもその話……桃先輩がこういう人間か知らない人が多いから、コレだけ噂が広まったとも言えますよね……」

「龍珠ちゃん、あんまり人の輪に入る様な子じゃないからね……」

あんまりと言うよりは全く、なんだけど此処で指摘するのも野暮だと無言で頷くだけに留める。



「龍珠ちゃんがどんな子か……皆に知ってもらえたら良いのにね。」

「そうですね……」

お前がちゃんとわかってくれてるなら、私は平気だから。

桃先輩の言葉が脳裏を過る……前回の石上優も、桃先輩と同じ事を思っていた。荻野に嵌められ、停学処分を受け、誰にも理解してもらえない状況で、1人で耐え続け、そして……

よく耐えたな、お前はおかしくなんてない。

会長のその言葉を聞いて……1人でもわかってくれる人がいるなら、周りにどう思われてもいいかなと思えたんだ。ただ……今なら会長の気持ちも良くわかる。会長は何度も……僕にその気があるのなら、弁明の場を用意すると言ってくれた。会長は嫌だったんだ、僕が謂れもない迫害を受ける事が……僕は嫌なんだ、家柄という一面しか知らない人間が桃先輩を好き勝手に罵る事が……黙って俯く僕に、つばめ先輩は背中をポンと叩き……

「何かあったら協力するからね?」

そう言ってくれたつばめ先輩に辛うじて、ありがとうございますと言葉を返し思

考に身を委ねた。

〈中庭〉

つばめ先輩と別れた後も、僕はベンチに座ったまま考えを巡らせていた。頭の中には、ここ数日に見聞きした出来事が次々と浮かんで来る……

誤解を解く、犯人を捕まえる……君の目の前にある選択肢は、その2つだけかな？

どうせなら、もっと直接的なアドバイスが欲しかったなあ……アドバイスするって事は、あの人にはどうすればいいかわかってるって事なのか？

「……」

じゃー逆に聞きますけどね！人に優しくする事は悪なんですか！？お菓子をあげる事は大罪なんですか！？

ホント、藤原先輩を見てると真剣に悩んでるのが馬鹿らしくなるな、毒気が抜か

れるというか……

「……」

龍珠ちゃんがどんな子か……皆に知ってもらえたら良いのにな。

結局の所、自分とは無関係だから好き勝手言えるんだろうな……名門秀知院学園とは言っても、所詮は子供……

「ッ！」

カチリと頭の中で、交錯する情報が噛み合った気がした。

……

暫し思考を重ねる。なんとかなる……か？ 今回の問題点は……

1、桃先輩への攻撃的な噂を消す方法はあるか？

2、犯人を見つけられるか？

3、極道ヤクザの娘というだけで塗り固められた桃先輩への認識を変えられるか？

1と3は、なんとかかなると思う。問題は2の犯人を見つけられるかどうか……

まあ折角だ、アイツにも手伝ってもらおう。それと後で念の為、会長と四宮先輩には相談しよう。ただ、僕がこれからやろうとしている事は桃先輩との約束を破る事

になつてしまふし、桃先輩に泣かれる……事は流石に無いだろうけど、怒らせてしまふかもしれない。でもコレは、僕のエゴで、利己で、我儘で、自己満足だ。噂に踊らされ、桃先輩の事を何も知らないのに好き勝手言い放つ人達に、桃先輩に侮蔑大切な彼女の視線を向ける奴等に、怒りとほんの少しの哀れみを込めて……実行に移すと決めた。

偏見の目を向けられる事には慣れている。小等部の頃から現在まで約10年、その間全く味方がいなかった訳じゃないけど、基本的には極道ヤクザの娘という事で遠巻きに眺められる事が多い。畏怖、軽蔑、憐憫、好奇心、憤怒……様々な感情を纏った視線を向けられても、私自身は他人に何かをしようとは思わなかった。だが、そういった視線を向ける周りの人間は、勝手に想像を膨らませ次々とありもしない噂を創り出す。他人に興味を持たなくなった私は、近付いて来ないなら好都合と特に対策もなかった。私とは逆に、優は今のこの状況を良く思っていないみたいで、

色々と頭を悩ませているし、やめろと言ってやめる奴でもない。逆の立場なら私も何かしらの行動を取ると思ったから好きにさせている。優が満足する結果を出すか、はたまた諦めるか、何れにせよ優が行動して出した結果ならどんな結果でも受け入れるつもりだった。そして数日後、優は結果を出し私は優を……一生許さないと決めた。

## た　っ　た　ひ　と　つ　の　馬　鹿　な　や　り　か　た

感想ありがとうございます（・v・）

数日後……全ての準備を終えた僕は、息を整えて時間が来るのを待つ。この数日間、桃先輩の噂は鎮火せず、犯人も捕まらなかった……だから僕は、今日全てを終わらせるつもりで此処にいる。奉心祭まで残り一週間を切り、こんな状況では桃先輩との文化祭デートも心から楽しめないし……まあこれからやろうとしてる事に桃先輩が怒らなければの話なんだけど。生徒会に所属している僕が、やって良い事ではない……だから、会長と四宮先輩には予め話を通し、もし迷惑が掛かる様なら生徒会を辞めるつもりだとも言った。でも会長と四宮先輩は……

## 〈生徒会室〉

「全く、思い切りの良い奴だ……生徒会の事は気にせずやりたい様にやれ、石上会

計。」

「会長……でも、生徒会役員の僕が問題を起こせば、会長達に（ご）迷惑が……」

「構わんさ、俺も今回の件は腹に据えかねていた。それにな、石上……後輩は先輩に頼って良いんだぞ？」

「……」

真っ直ぐに僕を見る会長に言葉が詰まる。

「お前は最初から生徒会の仕事も出来ていたし、助けてもらった事やフォローしてもらった事も両手の指では足りないくらいだ。でもな、先輩からすれば頼られないのは案外……寂しいモノなんだ。だからお前の行動でどんな結果が出ようと、俺は石上の味方だ。」

「会長……」

「ふふ、会長……そこは俺達と言って下さい。でも……面白い事を考えるわね、石上君。あまりにも馬鹿馬鹿しいやり方……少なくとも私には浮かばないわね。」

「馬鹿馬鹿しいですか……」

「あら、褒めてるのよ？ だって、私には絶対に出来ない……いえ、この件に関し

て言えば……石上君にしか出来ない、貴方だけのやり方だもの。」

「確かに……そうですね。」

「安心して下さい。石上君の行動で貴方や生徒会に不利益が生じる事はありませんから……四宮の名において、ね。」

「四宮先輩……」

「ふふ、でも石上君も考えましたね。確かにこの方法なら、学園に蔓延している龍珠さんの噂は無くなる可能性が高いですし、元々噂に懐疑的な人間や中立な立場に居る人間を味方に出来るかもしれません。でも……わかっていますね？ 貴方がやろうとしている事は、噂の消去ではなく塗り潰しです。覚悟は出来ていますか？」

「勿論です。」

「そう、なら頑張りなさい。」

「石上、応援しているぞ。」

「はい！」

……

会長と四宮先輩が背中を押してくれたんだ、思いっきりやってやる。



〈ピンポンパーン〉

校内放送を知らせるチャイムの音が響き渡る。僕は一度深呼吸をしてから、マイクへと近付く。

〈……生徒会役員会計、石上優です。現在、秀知院に蔓延している噂について話が……〉

〈1年A組教室〉

……始まったな。石上<sup>アイツ</sup>の話聞いた時は馬鹿な事をするもんだと思ったが……結果がどうなるかは直ぐにわかるだろう……態々俺の名前を使う許可も出したんだ、失敗する事は許さん。

〈1年B組教室〉

……石上の声がスピーカーから聞こえて来る。石上が言うには、このクラスに犯人がいる可能性もあるらしい……クラスメイトを疑いたくはないけど、仕方ない。

それに、こばちゃんと麗ちゃんも協力してくれるから心強い……私はスピーカーから流れて来る声に耳を傾けながら、周囲に意識を向けた。

### 〈2年C組教室〉

スピーカーを通して聞こえて来る石上編集の言葉に、クラスメイトが騒めいていきます。元はと言えば、私がノートの中身を龍珠さんに見られそうになった事が原因ですから、協力するのは当然です。だけど龍珠さん、怒らない……訳無いですわよね？ エリカも手伝ってくれますが、龍珠さんを抑えられる自信が無いですわ……私はスピーカーを驚きの表情で見つめる龍珠さんを視界に収めながら、小さく溜息を零しました。

〈現在秀知院には、2年C組の龍珠桃先輩がマスメディア部員にイジメをしているという噂が蔓延していますね。コレについて、皆さんにいくつか言いたい事があったのでお伝えします……〉

そこまで言って、僕はスウウと息を吸い込み……

へ……んな訳ねーだろ、バァーカ!! はあぁあ……由緒ある名門秀知院学園に所属する学生が、これからの日本を背負うと言われている人材が、くだらない噂を盲目的に信じてピーチクパーチクうるせえんだよ……恥ずかしくないの?」

噂を信じている人間に向けて、溜まりに溜まった不平不満をぶち撒ける。

「へいい歳して噂の真偽も見極められねーの? 桃先輩がそんな事する訳ないだろうが! 親がヤクザでただで、偏見で好き勝手言ってるんじゃないよ! 桃先輩が誰か傷付けたのか!? 誰かに嫌な思いをさせたのか! 僕は桃先輩と知り合って1年以上経つけど、嫌な思いをした事なんて一度だってないぞ! ずっと一緒にいる僕が言ってるんだから、桃先輩がイジメをする様な女の子じゃないって事は絶対の事実だ!」

すう……と息を吸い更に続ける。

「桃先輩は他人に対して、ちよつと警戒心強い所はあるけど……ゲームで負けたら拗ねるし、意外と乙女趣味なトコあるし、僕が告白した時は真っ赤な顔で答えてくれる可愛い一面もあるんだぞ! そういう一面を見れば誰だ……って誰が見せる

かバーカ！そういうのを見て良いのは僕だけなんだよ！✓

「コラ！ 石上開けんか!! 何をやっている!？」

ドンドンと扉越しに教師の怒号が聞こえて来る。ここまでの様だ……無視して粘っても、良い結果にはならないだろう。僕は最後の言葉をマイクに向かって発した。

へああ、あと最後に……あの貼り紙した犯人、証拠品残すなんて馬鹿じゃねえの？  
小島経由で警察に指紋捜査頼んだから覚悟して待ってろよ。✓

……決まりだな。石上の発言に笑う者、呆れる者、興奮する者が居る中で唯一人……歯を食いしばり悪意の視線をスピーカーに向ける女子生徒の姿を視界に捉える。全く……よりによって俺のクラスの間人だとはな。女子生徒はスピーカーから聞こえて来た石上の……

へー覚悟して待ってろよ。✓

という言葉に、先程まで悪意に満ちていた顔が動揺一色に変貌した。無論指紋捜査なんて物はブラフだが、十分な効果があった様だ。本来は、コレで犯人が動揺して誰か特定する事を期待していたが……まあここまでわかりやすく悪意を晒してくれたのは有り難い。石上にメッセージを送り、さっさと犯人の処理を終わらせよう。アイツには、これから特大の仕事が残っているから……龍の機嫌を直すという特大の仕事が。しかし、よくもまあそこまで恥ずかし気もなくあんな事が言えるモノだ。

……

# 〈職員室〉

「ハッハッハッ！ 良いデスねー！ アオハル青春デスねー!!」

「……校長、何はしゃいでるんですか……生徒会の人間がこんな事仕出かして、口頭注意で済む話じゃないんですよ？」

「オー、大林先生は厳しいデス。そうデスね……反省文2〜3枚デ許してあげマシヨウ。」

「……校長は軽過ぎるんですよ。生徒達の騒ぎを収める事になるの、俺達教師陣な

「んですよ？」

「噂を放置シタ罰とデモ思っ下サーイ。」

「はぁ……教師やめてえよ……」

# 龍の許しは頂けない

感想ありがとうございます（・∀・）

## 〈3年A組〉

ブツンという電源を切る音がスピーカーから聞こえて来たのを皮切りに、教室内は騒然とし始める。当然だ、噂を信じていた人への不満と罵倒、優君の龍珠ちゃんへの惚気と言っても差し支えない言葉、犯人への宣戦布告。幾ら3年生と言っても、いや……秀知院という場所で過ごし、嫌でも大人に成らなければならなかった私達にとって、優君の無鉄砲さ、青臭さ、彼女を守ろうとする誠実さは……羨ましく、そして……眩しく見えてしまう。

「いいなあ……」

だから、そんな言葉が自然と出てしまうのも仕方のない事だと思う……騒がしさ

で誰にも聞かれなかった事に安堵していると、近くの男子2人の会話が聞こえて来た。

「フフ……ハハハ……」

「……随分と楽しそうだね？」

「三國か……うん、面白いと思ってるね。」

「……面白い？」

「龍珠君の問題に彼がどう関わるのか……一応少しだけアドバイスはしていたんだけど、まさかこんな遣り方があったなんてね。」

「……アドバイス、ね。生徒会時代の仲間の為かい？」

「……昔の？ 僕は今も彼女達の事を仲間だと思ってるよ。」

「だったら君が解決してやればいいものを……」

「……あと3ヶ月で秀知院<sup>ひでとも</sup>を去る僕達が動いても意味がないよ。残る者達が自分で考えて行動し、解決する事に意味があるんだ。」

……その言葉を聞いて、確かにそうだと思った。私に出来る事は……さっきの放送内容が歪んで伝わらない様に行動でもしようかな？ 優しい男の子が大好きな女



の子の為に行動した……恥ずかしくて、むず痒くて、胸キュンで……とってもエモエモなお話の為に。

### 〈1年B組教室〉

スピーカーから聞こえて来た石上の発言を聞きながら、周囲を見渡す。全く、ここまでするなんてホント馬鹿。でも……そんな馬鹿だから私達も手伝ってあげたと思ってたし、困ってる友人を助けたと思って。周囲を警戒しながら見渡していると、こばちゃんと麗ちゃんの声が途切れ途切れに聞こえて来た……

「……いいの？」

「うん……上が選ん……もん。それに……私も救われた……きになって良かった。」  
クラスの喧騒で聞こえ難いけど、麗ちゃんと喋るこばちゃんの顔は……心なしか満足気だ。気になるけど、今はこの放送で動揺する人が居ないかを見なくてはいい。後で聞こうと気持ちを切り替えて、私は再度クラス内を見渡した。

## 〈2年C組教室〉

石上編集の言葉にクラスは沸き立つ……という訳にも行きません。このクラスには当事者の1人……龍珠さんが居るのですから。学園という、ある種の閉鎖空間で過ごす私達学生にとって、刺激的な出来事や話題は常に求めているモノ……だからこそ、龍珠さんの噂も広まるのが早かった……石上編集は、その噂を別の噂で塗り潰すつもりだと言っていました。龍珠さん1人が的になっていた噂話を、石上編集と龍珠さん2人を的にした噂話で塗り潰す……しかも、その内容は石上編集だからこそ言える、龍珠さんの人となりや龍珠さんへの想いの吐露。周りを見渡すと、女子は顔を手で隠して恥ずかしがっていたり、友達と小声でキャーキャー言い合っていました。何故か……男子の殆どが目頭を押さえて下を向いています。それはいいでしょう。石上編集の行動によって、今日から秀知院に広まる噂は変わるでしょう……1人の女子生徒を攻撃する噂から、学園一のバカッブルを見守る噂

に。

あの後、生徒指導室に連行された僕は説教タイムを味わう羽目になった。説教内容が無許可の校内放送に関してだけで、僕の発言についてはお咎めはなかった。まあ、先生達も桃先輩の噂に対して対応を取らなかつた事に多少の罪悪感があったって事なのかな……僕の予想に反して、処分が反省文3枚の提出で済んだのもラッキーだった。生徒指導室を出ると、壁に寄りかかって此方を睨む少女……桃先輩と目が合った。

「桃先輩……」

「……私言つたよな？ 付き合ってる事は言い触らすなって。」

「はい、言いました……約束破ってますいません。」

僕の自己満足で仕出かした事だ、頭を下げて桃先輩へ謝罪をする。

「噂に関しても放って置けって言つたよな？」

「はい……桃先輩、怒ってます……よね？」

「当たり前だろ！ あんなっ……あんな恥ずかしい事をペラペラ全校放送で言いやがってっ……」

「……すみません。どうしたら許してくれますか？」

「絶対許さねえ……一生許してやんねえ。」

一瞬、僕の脳内に〈嫌われた〉という言葉がチラついた。ザワリと胸に嫌な感情が広がる……

「だから……罰として、一生私に謝罪し続ける。」

桃先輩の言葉に、えっ？ と呆けた返事をしてしまった。

「私がお前を許すまで、ずっと傍で……」

一生……謝罪し続ける……桃先輩が許すまで、ずっと傍で……その言葉の意味を理解した時、僕は反射的に桃先輩を抱き締めていた。

「勿論です！ 桃先輩いませんでした!!」ヤッヒ

「お、おいコラ！ 私は怒ってるんだからな!? 一生許すつもりもないんだぞ!？」

「はい、一生傍で謝り続けます！ ずっと一緒です!!」

「くうっ……わかった！ わかったから離せ!!」

「桃先輩がずっと傍に居ろ、離れるなって言っただけですよ!？」

「離れるなとは言っていない!」

……校内放送で優の声が聞こえて来た時は、心底驚いたし……全校生徒を敵に回す様な事を言っただけな男だと思った。でも……私の為に行動してくれている事も直ぐにわかった……ここまでしてくれた奴は今まで1人も居なかった。

龍珠ちゃんのお父さんは悪い人だから、もう遊んじゃダメなんだって……

え、龍珠さん家ヤクザなの？ご、ごめん……私もう行くねっ……

別に、そう言われた事を気に病んでいる訳じゃない……ただ、私がいつまでもその言葉を忘れられないだけ……多分、これからも忘れられないままなんだと思ってた。

……んな訳ねーだろ、バァーカ!!

スपीカーを通して聞こえて来る、優のその言葉を聞くまでは……

桃先輩がそんな事する訳ないだろうが!! 親がヤクザってだけで、偏見で好き勝手言ってるじゃねえよ!

私の記憶の中で、私を否定し囁き続ける……かつての同級生達に言っている様な気さえた。恥ずかしかったし、約束を破った事には怒ってるし、一生許してやらない。でも……

「一生傍で謝り続けます。だから、ずっと一緒に居て下さい!」

優は私を抱き締めながら、恥ずかしいセリフを吐き続ける……そういえば、恋人になった時に言われたっけ……

桃先輩も、さっきみたいに……偶にで良いので、言葉にして伝えて下さいね

……私の為にここまで行動し、周囲の人間を敵に回しかねない発言までして、私の身の潔白を証明しようとした……優の必死な声を聞いて……泣いてしまいたい程嬉しかった事と、少しだけ……ほんの少しだけ優をカッコいいと思った事は……いつか伝えてやろうと思った。

## 石と龍のエピローグ

感想ありがとうございます(。ω。)

---

あの騒動から数日が経過した。桃先輩を見る周囲の目は新しく広まった噂により、以前よりもかなり良い方へと改善された。まあ、友人との話題も特定の人物に対する悪口や陰口よりも、恋話の方が精神的にも良いという事だろう……チラチラと見られるくらいは甘んじて受け入れよう。

そういえば、意外……でもなく、1番反応がデカかったのは、藤原先輩だった。「なんで私には付き合ってる事内緒にしてたの!?! 会長やかぐやさんには言ってたのに!」

「ちょっと面倒くさかったの。」

(すいません、忘れてました。)

「こらあ! 今絶対思ってる方言ったでしょ!」

「でも、藤原先輩には感謝してるんですよ？」

「え？」

「あの方法を思い付いたの……藤原先輩見てると、色んな事が馬鹿馬鹿しくなるって思ったのがキツカケでしたから。」

「なにそれ!？」

「……流石は藤原だな、普通にしてるだけでいいんだもんな。」

「流石ね、藤原さん。」

「複雑なんですけど……!？」「カビ〜」

……犯人については、翌日に桃先輩と小島の所へ詳しい話を聞きに行った。僕個人としては、面と向かって文句の1つでも言ってるやられたけど、桃先輩の……「どーでも良い……優も気にすんな。」

という言葉に矛を収める形となった。その後、1人の時に小島を捕まえて、犯



人は誰かだけ聞こうと思ったのだが……

「やめておけ、まともな会話が出来るかどうかからんぞ？」

という、物騒な言葉が飛んで来た。

「お前……何したんだよ？」

「……本当に聞きたいか？」

……聞かない方が精神衛生上良い気がしたので、潔く辞退する事にした。まあ、次やったら僕も容赦しない……と無理矢理自分を納得させる事にした。犯人の事を考えるくらいなら、桃先輩の事を考えていたほうが断然有意義だし。

桃先輩のクラス内での対応も少し変わった様だ。今までは全くなかったらしいが、最近は挨拶をされる事が増えたと言っていた。僕の言葉が少しでも周りの人達が持つ、桃先輩への認識を変える役に立ったのなら嬉しい限りだ。中でも、同じクラスの紀先輩と巨瀬先輩は挨拶だけでなく、偶に話す事もあるという……一体どん

な話をしているのか気になったので聞いてみたら……

「か、会長と1年生の時、同じ生徒会だったのでしょうか？ その時の会長はどんな感じでした？」

とペンを片手に聞いて来るらしい……歪みないな、あの人。巨瀬先輩は紀先輩の付き添いみたいな感じらしいが、良く話し掛けて来るらしく……

「ね、龍珠さんから会計君に頼んでよ……かぐや様の行きつけの喫茶店教えてって。」

「知るか、自分で聞けよ。」

「えー、彼女持ちの男子と出掛けるのってちょっと申し訳ないんだけど……」

「なんで一緒に喫茶店行く事になってんだ！」

「嫉妬？ 今の嫉妬だよね!! ……龍珠さんも女の子だねー。」ぐ。ぎ

「そうですわねー。」ぐ。ぎ

「ハイタッチすんな！ 違うから!!」

という遣り取りもあったらしい……桃先輩は少し困った様に愚痴を洩らしていたが、満更でもなさそうだった。

そして、ある意味1番困ったのが……

「石上君は、私を置いて……自分だけ、幸せになるんだね……」

「」

桃先輩と一緒に居る時に、瞳の澱んだ柏鬼先輩に本気かどうか判断しづらい台詞を投げ掛けられた事だ……胸の辺りがヒュンッてなった。

「……優、どういう事だ？」

「い、いや……桃先輩が考えてる様な関係じゃないですよ!？」

「……そうだよ。石上君にとっては、そうなんだよね……」

目を伏せ、如何にもな雰囲気で柏木先輩は爆弾を落とし続ける。ホント勘弁して下さい……

「おい、優……どういう事だ。」

「や、やだなあ柏木先輩……何深刻な空気出してるんですか……」

「私の初めての（デート）相手は石上君だったのに……」

「言い方あ……」

「優！」

「違います！ 誤解ですから!!」

平静を失った桃先輩に詰め寄られ、弁明を繰り返していると……クスッと笑った柏木先輩と目が合った。

「なーんちゃって……2人があまりにも幸せそうだから、イジワルしちゃった。ゴメンね？」

最終的には冗談だと謝ってくれたが、滅茶苦茶心臓に悪かった……

でも、1番変わった事と言えば……

「お、今日も一緒か、全く……アツアツだな！」

「団長、どもっす。」

「おう、じゃあな。」

それだけ言うと、歩いて去って行く団長の背中を見送る。

「……お前の所為で話し掛けて来る奴が増えた、謝れ。」

「はは、すいません。」

1 番変わった事、それは僕と桃先輩が一緒に居る所を見た人が偶に一声掛けて行く事だ。秀知院一のバカップル、龍を手懐けたヤベー奴、龍珠桃にべた惚れの会計君など……僕達を評する言葉は色々あるけど、もう桃先輩を悪意の籠った目で見る人はいなくなった。まあ桃先輩本人は……

「はあ……最近はお睨みつけても、全然怖がられないし……」

と、少し困り気味だ。まあ、凄んでもその度に……うんうん、わかってる。彼氏との時間を邪魔されて嫌なんだね。みたいな視線を向けられ続けたら諦めもするだろう。僕的には嬉しいんだけど……

「それもこれも、優……お前の所為なんだからな！」

「はい、すいません！許して下さい！」

「……ぜーったい許してやんねえ！」

そう言って、少しだけ笑う桃先輩を……僕はこれから見続けるだろう……ゲー  
ム好きで、優しく、素直じゃないけど可愛らしい所もある、龍珠桃という大好き  
な人の隣で。

ー完ー

これにて、龍珠ルート完結です。後は龍珠アフターを投稿したら終わりにしよう  
と思います。

## 龍と黒白の珠 after ①

感想ありがとうございます（・∀・）

〈持たざる2人は聞き出したい〉

〈生徒会室〉

「お茶です！」まぎ

「……どーも。」

リボン女 藤原から差し出された湯呑みを受け取る。私は、1年振りに生徒会室を訪れていた。今日は生徒会の仕事も大した量がないと優から聞いていたから、ただ待つくらいならと優を迎えに来ただけ……優は委員会のヘルプに行っているらしい。入れ違いになっても面倒だから、そのまま優が戻るのを待っている。

「しかし……龍珠が生徒会室此処に居るのを見るのは、随分と久し振りだな……アレから何か変化はあったか？」

「フン……あのバカがやらかした所為で、何処に居ても鬱陶しい目で見られるな。まあ、此処ならそんな奴は居ないし……どうせ優を待つなら、此処はマシな場所だな。」

「そうか、息苦しさを感じる様なら好きな時に来ていいからな……まあ、そんな心配は要らないだろうがな……」

「……さあな。」

……昔はお姫様に無視されただけで凹んでいた癖に、随分と生徒会長が板に付いた様に感じる……白銀と話していると、四宮<sup>お姫様</sup>かぐやから妙な圧を感じた。コレ以上話していると面倒な事になりそうだと思い、白銀との会話を打ち切る。暫しお茶を飲みながら横目で生徒会室を眺める……変わらないな、此処は。

「会長、ズルいですよお！」

その声に視線を向けると、藤原が白銀に何やら抗議をしていた。

「ずーるーい、ずーるーいです！」

……何の話をしているかは聞こえないが、藤原は飛び跳ねながら……白銀に向かって同じ言葉を繰り返している。



「ずーるーいーでーすー。」ギョギョギョ

「……」やう

上下に揺れる2つの物体……その持ち主は特に意に介した様子もなく、机に手を付き小さく飛び跳ねている。特に理由はない……本当に理由はないが、その姿を見ているとなんとなく……イラっとした。

「見せつける様に揺らしやがって……あの駄肉、引き千切ってやろうか……」

「また藤原さんは、これ見よがしに見せつけて……腕いでやろうかしら……」

「は？」

「あら？」

「……」

お姫様と視線が交錯する……私は視線を少し下げて一考する。流石に……これに仲間意識を持たれるのはイヤだな、まだ私の方が……

「……ハッ、お姫様も随分なコンプレックスを抱えてるみたいだな。」

「あら、それは此方のセリフです。貴女も人並みに劣等感を感じているみたいで安心しました。」

「……」ゴゴゴゴゴゴ

「……何をやってるんだ、あの2人は？」

「……さー？」

（なんか寒気が……）

130分後ー

「ヘルプ終わりましたぁ……伊井野は風紀委員に顔出してから来るそうです。」

「ああ、お疲れ。石上、いつも悪いな。」

「いえいえ……ってアレ？ 桃先輩どうしたんですか？」

「あっ！ 石上くん聞いて下さいよー。」

「……」ザッ

「ピィッ!? ……わ、私、用事があったの思い出しました！ お疲れ様でしたー！」

「どうしたんだ、藤原の奴……」

「さあ？」

……

「桃先輩、態々迎えに来てくれたんですか？」

「……暇だったからな。」

「あらあら、龍珠さんは素直じゃないんだから……ああ、そういう一面を見せるのは石上君の前だけでしたか？」

「てめえ……」

そんな遣り取りをする桃先輩と四宮先輩を見ながら、会長に小声で聞く。

「……会長、桃先輩と四宮先輩って仲悪いんですか？」

「そういう話は聞いた事ないが……」

「そういえば……殿方は胸の大きい女性を好むらしいですね？ 石上君もそうなのかしら？」

「四宮先輩!？」

四宮先輩のトンデモ発言に目を見開く。此処で動揺したら終わりだ……

「……ハハハ、もう四宮先輩ったら、何言ってるんですか……」

勘弁して下さいよーという感じで四宮先輩の言葉に答える。

「もし、そうなら……」

四宮先輩はチラリと桃先輩に視線を向けると……

「ふふ……」

挑発気味に笑った。

「……」

その追撃に、桃先輩は黙って四宮先輩を睨みつける。

「いやいや、そんな胸の大小で決めたりはしないだろう……な、石上？」

「……今はそういうの話をしてるんじゃないやねーんだよ、黙ってる。」

「ぐうっ……」

桃先輩の言葉に会長が黙る。マズイ……なんとか有耶無耶にしなければ……このままじゃ……

「そういえば……白銀は巨乳派だったか？」

「はあああっ！……？ 龍珠、お前何をっ……」

「へえ……会長、そうなんですか？」

「

四宮先輩からの圧に、会長が言葉を失う……桃先輩負けず嫌いだから、絶対やり返すと思った……

「い、石上、なんとかしてくれっ……」

会長にそう耳打ちされるが、打開策なんて浮かばない……ラブコメなら回避不可イベントだろう。一縷の望みをかけて、桃先輩に近付く。

「……それで、どっちだ？」

「桃先輩、胸の大ききなんて関係ないんです！好きになった人のサイズがタイプです！」

桃先輩の目を真っ直ぐに見つめ、勢いでなんとかしようとするも……

「……それで、どっちだ？」

先程と全く同じ表情と声色で、全く同じ問いを投げ掛けられた。僕はクルリと方向転換し、会長に耳打ちする。

「会長駄目です、吐きましよう。」

「折れるの早えよ!!」

本日の勝敗、石上&白銀の敗北  
吐かされた為。

へモモちゃんは呼ばれたくない

「はぁ……」

「……会長、どうでした？」

雑誌を閉じながら、溜息をついた会長に話し掛ける。

「……桃缶ホント最高。」

「禿げ上がる程同意します。」

桃缶！週刊ミドルジャンプで連載中のへモモちゃんは考えない……つい先日もアニメ化が決定した話題で盛り上がった漫画である。前回の記憶がある石上は、当然内容も知っている為、態々週刊誌を買って読む必要はない。……しかし桃缶は、前回の自分が白銀御行と漫画やアニメの話題で盛り上がる事が出来た数少ない

存在……少しの出費でオタ友が出来るならと、石上は白銀の隣でミドジャンを読み続けた。結果……

「モモちゃんめっちゃかわええ……」

前回同様、白銀御行はオタの道に足を踏み出したのだった。

「わかります、面倒くさがりな所とかもですけど……」

「先週号のベッドに寝そべる話も良かったよなー。」

「そう！ そうなんですよ！ それに、あの話も伏線があって……」

2人が楽しそうに、オタ話に花を咲かせている頃……

……

「ったく優の奴……さっさと仕事終わらせろっつーの。今日はオンラインイベントがあるって言ってたのに……」

龍珠桃は、恋人を迎えに生徒会室に向かっていった。無駄に長い廊下を歩き、生徒会室と表示された部屋の扉を開け声を掛ける。

「優、いつまで掛かって……」

「モモちゃん可愛い！」

「わかります、モモちゃん可愛いっすよね!!」

「……」

2人のオタクは、部屋に入って来るなり口元を歪め始めた少女に気付く事もなく話を続ける。

「あの気怠げな所も理由があるって判明した時は……」

「そうなんですよ! それが素直じゃないトコにも繋がってて……」

「……」

龍珠はゴミを見る様な目で2人を見始めた。

「まあでも結局……モモちゃん可愛い!」

「モモちゃんめっちゃ可愛っ……あ、桃先輩。」

「おう龍珠、石上を迎えに来たのか?」

「……」

「……先輩?」

「……龍珠?」

黙って此方を睨む龍珠桃を、白銀は訝しむ……しかし、そこは学年一位を取り続



ける男……すぐに先程までの自分達の発言を思い出す。

「……ハッ！ い、いや、違うぞ!? 確かにさっきまで俺達はモモちゃんモモちゃん言っていたが、別に龍珠の事を言っていた訳じゃ……」

「……言いたい事はそれだけか？」

「マジなんだって！ いや、確かにお前も桃ちゃんだが、俺達が言っていたのはモモちゃんであって、決して桃ちゃんと言っていた訳では……」

「モモちゃん、モモちゃんうるせえ!!」  
「アッ、ヤッ」

「ぐほおっ!?!」

「か、会長……!!?!」

本日の勝敗、白銀&石上の敗北  
オタ話は程々に。

## 龍と黒白の珠 a f t e r ②

感想ありがとうございます（・∀・）

奉心祭当日、文実の助っ人業務に精を出す。桃先輩と文化祭を回る時間を作る為  
せつせと働く。

「1年生は先に休憩入ってー。」

つばめ先輩の号令に作業を中断し、休憩を取る。適当に屋台で昼食を取ろうと歩き出すと、背中から声を掛けられた。

「お疲れ、今から休憩か？」

その声に振り返りながら答える。

「はい、桃先輩ですか？」

「私はずっと休憩みたいなもんだ。」

「アレ？今年も天文部はプラネタリウムやるって言ってませんでした？」

「あー……一応やってる、私は今回自由時間多いんだよ。」

去年の客避けが原因で他部員からNGが出た事と、元々やるつもりがなかっただけである。

「へー、そうなんですか。じゃあ一緒に回りませんか？」

「おう……」

「桃先輩は、お昼食べました？」

「いや……まだ。」

「じゃあ、何処かの出店にでも……」

「な、なあ……その、コレ。」

桃先輩は俯きながら、布に包まれた箱を掲げた……どう見ても弁当箱にしか見えない。

「も、桃先輩……まさかコレ……」

「お前、準備とか頑張ってるし……こういう時くらいは……その……い、要らないならっ！」

「ありがとうございます！滅茶苦茶嬉しいです！」

嬉しさのあまり顔がニヤける……いや、でもコレは仕方ない。誰だってニヤけるって。

「……何ニヤついてんだよ。」

「すいません、嬉し過ぎて……彼女がお弁当作って来てくれるって、男の憧れですもん。」

「ふーん……単純だな男って。」いん

と言いつつ桃先輩も口元が微妙に緩んでいる……全く、本当に可愛い人だな。

「……いつまでニヤついてんだ、中庭の端の方なら空いてるだろうしそっち行くぞ。」

「そうですね、行きましょう。」

……

暫し、桃先輩とお弁当を食べながら談笑する。

「今日はずっと仕事か？」

「いえ、3時から自由時間ですね。」

「ふーん、じゃあそれくらいにまた来るわ。」

「わかりました、じゃあ1年B組前で待ち合わせましょう。」

「別にいいけど……そういえば、優のクラスって何やってんだ？」

「それは……お楽しみという事で。」

「いや、なんでだよ。」

---

〈1年教室前〉

「あら、学園一有名なカップルじゃない。まさか、龍珠ちゃんに恋人が出来るなんて思わなかったわ。それはそうと、ちゃんと避妊はしてる？」

桃先輩と合流して話をしていると、近付いて来た女性にいきなりヤベエセリフを投げ掛けられる。

「……この人、なんなんですか？」

「……オカ研の阿天坊……先輩。」

「知り合いですか？」

「部活連の会合で、何度か会ったくらいだな。」

「あら、冷たいわね……折角、男子が喜びそうなテクを教えてあげようと思ったのに。」

「いらねえよ！」

「あら？ でも……彼はそれでもなさそうよ？」

「優、てめえ……」

「僕は何も言ってますん！」

「フフ、貴方可愛いわね……お姉さんと火遊びする？」

「はあっ!？」

「ちよっ!？ 何言ってるんですか!？」

トンデモ発言をする阿天坊先輩から身を引きながら叫ぶ。

「あら、照れなくてもいいじゃない。」

「おい！ アンタいい加減にしろよ！」

「大丈夫よ。私、彼女持ち相手でも気にしないから。」

「何言ってるんだ!!」

「……最低限の倫理観くらいは持った方がいいんじゃない？」

「あら、失礼ね……まあいいわ、じゃあ行きましょか。」

阿天坊先輩は僕の腕を取ると、暗幕で閉ざされた教室へ入ろうとする。

「ちょ!? 何やってんですか、行きませんよ!」

「ツレないわねー。」

「アンタ1人で入れよ!!」

桃先輩は僕の腕を取り返し、威嚇する様に阿天坊先輩を睨んだ。

「おぼけ屋敷……ね。ああ困ったわ、私……血とか怖いのが苦手なのよね。」

（普通に入ろうとした癖に……）

「へえ、そうなんですか？ でも、女性の方がそういうのに耐性あるっていいですよね。」

「女は毎月血を流してるからって言いたいのか？ 流石男子、エロね。」

「言ってるじゃない!?」ぎゅーぐ

「もう相手すんな、行くぞ!」

「あ、はい……」

桃先輩に腕を掴まれ、おぼけ屋敷へと入る。

「あら……逃げられちゃったわ。」

阿天坊は残念そうに、逃げて行く後輩2人を見つめていた。

「……いい加減その見境無く誘惑するの、やめなさい。」

「あら、雫……見境無くだなんて心外だわ、ちゃんと相手は選んでるのに……」

「彼女持ちの男子を誘惑しておいて選んでるなんてよく言えるわね……」

「男嫌いの雫に言われたくないわ。」

「はあ……まあいいわ。つばめの演劇、もうすぐ始まるわよ？」

「あら、もうそんな時間？ 急ぎましょ、あの子拗ねたら面倒臭いから。」

「どの口で面倒くさいと言ってるの？」

少女2人は小走りで体育館へと向かって行った。

……

「……桃先輩、怖いなら手繋がりますか？」

「は、はあ!! 怖い訳ないだろ、舐めるのも大概にしろ。」ヤッヒ

「……そうですね、すいません。」



（制服の端を無意識に掴んで来る桃先輩可愛い。）

A組との合同企画であるホラーハウスは、前半と後半で種類の違う怖さを味わえる自信作だ。別に下心があつて誘つた訳では……いや、あわよくば抱きついてくれないかな、とか少しは思つたけど……

「お、おい！ もっとゆっくり歩けよ！」ザッ

「あ、すいません。」

制服の端を遠慮がちに引つ張られる……これはこれで可愛いからよし！

「皆、このロッカーに隠れて！」

前半のおばけ屋敷を通過すると、ロッカーに入つての立体音響体験となる。案内役の女子生徒に促され、桃先輩と一緒にロッカーの方へと押される。

「ロッカーに入ったら、このヘッドホンとアイマスクをしてお待ち下さい。」

「はあ!? ふざけっ……」

「桃先輩、入りますよ。」

「お、おい!? 私は入るとはっ……」ンギ

桃先輩を半ば無理矢理ロッカーへと引つ張り込む。ロッカーだけあつてとても狭

い……2人で入るとほぼ抱き合う形になる。

「無理矢理こんな所に閉じ込めやがって……覚えてろよ。」

「……怖かったら、ヘッドホンもアイマスクも付けなくて良いですよ。」

あまり強要しても後が怖い……十分、桃先輩の可愛い所は見れたし。

「……お前は付けろよ。」

「りょーかいです。」

アイマスクとヘッドホンを装着する……と言っても本番前のテストで既に体験してるんだよな、僕は何の気なしにヘッドホンだけを少しズラして付ける。

「……優、聞こえてるか？」

（……桃先輩？）

「聞こえてない……よな？ 今だから、言うけどさ……」

桃先輩は聞こえていないと判断したのか、独白を続ける。

「私は……優があそこまでしてくれて、嬉しかった。」

トンッと桃先輩が体を預けて来るのを感じた。

「私の所為で優が傷つく事になってたかもしれない、私を庇った所為で優まで周り

から嫌われる事になってたかもしれない。なのにお前は……」

今更聞こえていたとは言えない。僕は、桃先輩の小さな体を壊れ物を扱う様に優しく抱きしめる。

「……私を、今もこうして抱きしめてくれる。凄く安心するし、幸せだって思う……だから、いつも素直になれない私だけど、これからもずっと……」

「終了です、お帰りは此方からお願いしまーす。」

桃先輩の言葉を遮る様に係員の声が響いた。トントンと胸を叩かれたのを合図にヘッドホンとアイマスクを外す。

「……終わったぞ。」

「……うっす。」

桃先輩と連れ立って教室を出る。

「……どうでした？」

「まあまあだな。」

「でも、桃先輩途中抱きついて来ましたよね？」

「……狭いからそう感じたただけだろ。」

素直じゃない……でも其処も含めて桃先輩だし、そういう所も好きなんだと再確認する。それに……僕も同じ気持ちだ。

「……桃先輩。」

「ん？」

「桃先輩と居ると安心しますし、凄く幸せだと思います。年下で、頼りない所もあると思いますが、これからも……ずっと一緒に居て下さい。」

「ッ！！？ ゆ、優、お前……まさか、聞いてっ……」

「さあ？ 何の事でしよう？」

「おい、待て！ ちゃんと答えろ!! ヘッドホン外してやがったな!？」

「……ハハハ。」

「ハハハじゃねえ！ 優!!」

桃先輩の追撃を躲しながら思う。きっと僕達2人はいつまでも一緒に居られるだろう。……だって、お互いがお互いに……ずっと一緒に居たいと思っているんだから、きっと大丈夫だと……僕は向かって来た桃先輩を抱きしめながら言った。

「すいません、聞いてました。許して下さい。」

「……ぜーったい許してやんねえ！」

その言葉とは裏腹に、桃先輩は嬉しそうに笑っていた。

---

これにて龍珠桃√完結とします。

最後まで書いて良かった……読んでくれた方々、感想をくれた方々ありがとうございます（・∀・）

## 龍と黒白の珠 a f t e r ③

奉心祭も問題無く終了し、秀知院学園は冬休み期間に入っていた。秀知院生である僕と桃先輩も、当然その恩恵を受けているのだが……

「本当にお邪魔して良かったんですか？」

「ああ、気にすんなくて。別に誰も文句言っただろう？」

「それはまあ、そうですね……」

12月31日の大晦日……僕は桃先輩の家にお呼ばれしていた。夕飯をご馳走になると、後は大人の時間だと言わんばかりに桃先輩の親父さんや組員の人達が酒瓶を片手に集まり出した為、桃先輩の部屋へと避難して今に至る……という訳だ。

「でも夕飯を食べた後、すぐに上がって来ちゃいましたし……」

「ま、親父達は宴会で酒飲みながら騒ぎたいだけだしな。未成年は居ない方が気兼ねなく飲めるから、別に問題無いだろ」

「……ですかね」

僕の胸を背凭れにしつつ、そう言葉を返す桃先輩を見下ろしながら答える。あと

3時間程で日付が変わり年が明ける……しかし、僕にとってそんな事はどうでも良い事だ。今の僕にとっての最重要事項、それは……

「……」

（桃先輩とキスがしたい）

桃先輩と付き合う事になって、そろそろ2ヶ月の時間が経とうとしていた。その間、全く恋人らしい事が出来なかった訳じゃない。今みたいに僕に身体を預けてゲームをする事はよくあるし、ハグなどのスキンシップも頻度は多くないが偶にある……だが、キスだけは未だ無い。桃先輩との初キスは付き合う前だったから、恋人としてのキスは未だ未経験という訳だ。

「……」

「♪」さき

ゲームに集中する桃先輩の体温を感じながら、頭の中で考えて来た策を反芻する。そう、既に桃先輩とキスをするシチュエーションは計画済みなのだ。あとはソレを実行に移すだけ……僕は意を決して計画の第一歩を踏み出した。

「桃先輩、もう少ししたら初詣行きませんか？」

「寒いからやだ」ガチャガチャ

「」

秒で計画が破綻した……え、そんな事ある？ まさかノーチャンスなパターン？  
いや、まだ諦めるな！

「せ、折角の大晦日イベントですよ？ ソシヤゲならガチャ率緩くなったり、新規アイテム入手イベントがある特別な日ですよ!？」

「なんでそんなに必死なんだよ……寒いし人多いし、行くにしても三が日過ぎてからで良いだろ？」

「三が日過ぎちゃったら、それはもう初詣じゃなくてただの神社参拝だと思うんですけど……」

「言いたい事はわかるけど、する事は一緒だろ？」

「ぐう……」

取り付く島もない。まあ面倒臭さがりな桃先輩なら、こういった対応も有り得た訳だけど……

「……」



いきなり出鼻を挫かれたが、そもそも初詣に行かなきゃキスが出来ない訳じゃない。なんだったら、今この瞬間にもやろうと思えば出来るのだ。桃先輩がOKするかどうかは別として……

「♪」 ざざざ

「……」

こう言っではなんだが……桃先輩は僕を押し倒して無理矢理キスをしたんだから、僕も一回なら許されるのでは？ いや許される所か、僕からキスをする事でお互いに一回ずつキスをした事になりバランスが取れるのでは？

「……」

「ん？ どうかしたか？」

「いえ、なんでもないっす……」

（ま、流石に無理矢理はしないけど。はあ、なんかの拍子にそういう雰囲気にならないもんか……）

……

「んー！ はあ……」

小一時間程ずっと同じ体勢だった為、グツと両手と両足を伸ばして息を吐く。桃先輩も僕の身体を背凭れにした体勢のまま、ゲームを続けて……ってあれ？さっきから画面の中のキャラが動いてない？

「桃先輩？」ゼッ

「ッ！？」どゥッ

「え、どうかしましたか？」

「な、なんでもない！」

「そうですか？……あ、僕ちょっとコーヒー淹れて来ますね？桃先輩も何か……」

「ば、バカ動くな！」ゼッ

「へ？どうしてですか？」

「それは、その……」

「……？」ゼッ

「ッ！？」!?だから動くなってっ……！」どゥッ

「もしかして……足が痺れてるとか？」

「……ッ」

桃先輩は僕の言葉に答える事も無く、只々ジッと身体を強張らせている……その姿を見ていると、妙な感情が沸々と湧き出して来た。

「……」ぢぢぢ

「ジャッ」!? だ、だから動くなつてば!」ヤッ

「……」

確認の意味を込めて僅かに身体を動かすと、袖を掴まれて動きを止められる。これは……千載一遇のチャンスなのでは? 今の桃先輩なら多少のお願いは聞いてくれるかもしれないし、何より……普段とは違う弱々しい桃先輩が見れる絶好の機会なんじゃ?

「桃先輩……初詣行きませんか?」

「っ!? お前っ……それは卑怯だろ!?」

「ははは、何の事かわかりませんねー」

「おい、あんま調子に乗ってるとっ……」

「乗ってるとっ?」ヤッ

「~~~~ッ!?」ビュッ

足先で軽く桃先輩の両足を時間差で擦る……なるほど、右足が痺れている様だ。桃先輩のウィークポイントを握り、自身が優位な立場に居る事を自覚した僕は、更に攻める事を決意する。

「桃先輩？」

「……！わ、わかった！わかったから！」

「何がです？何がわかったんですか？」

「……！」

「聞いてます？」

「……」

「……！」

普段の桃先輩からは考えられない、弱々しくも可愛いらしい声に思わず動きが止まる。

「……」

先輩自身も、自らの口から出てしまった声に羞恥心を感じている様だ……その証拠に、顔を伏せて口を両手で塞いでしまっている。

「……………」

いつもとは違う恋人の姿に、小さく喉が鳴った……僕は自分の事をSっ気のあ  
る人間だとは思っていない。ただ……恋人にここまで可愛らしい反応を見せられて  
何もしない程、ヘタレでもないつもりだ。

「……………」

いや、ヘタレとかSっ気とかそんな事はどうでも良いんだ。僕はただ、桃先輩  
の可愛い所をもっと見たいだけなんだから……

「ゆ、優……?」

僕が黙ったままなのを不安に感じたのか、桃先輩は紅くなった顔で此方を見上げ  
て来る。

「桃先輩……」

ほんの少し……怯えの色を浮かべた桃先輩の瞳を真っ直ぐに捉えると、僕はゆっ  
くりと手を伸ばした。

5分後……

「やっ……やめろって……!」ヤッポ

「……」サアサ

10分後……

「……」!? い、いつまで触ってっ……!」

「先輩……滅茶苦茶可愛いです」ナザナザ

「い、今そういう事っ…言う、な……!」ビクッ

15分後……

「もう、やめっ……」ビクビクッ

「……」

「お願い、だからっ……」サァ

「ッ!」

上気して紅くなった頬、潤み始めた2つの瞳、普段の桃先輩からは想像出来ない、弱々しく懇願して来るその表情を見た瞬間……辛うじて残っていた僕の理性はキレイに吹き飛んだ。

「……で、何か言い訳はあるか？」

「……」

30分後……痺れが治まった桃先輩は、ベッドの上で仁王立ちした状態で正座姿の僕を見下ろしていた。

「人が足が痺れて動けない事を良い事に？ 言う事を聞かせようと脅迫したり？ 私が抵抗出来ないのに構わずキツ…無理矢理口を塞いで来た変態鬼畜野郎様は、何か言いたい事はないのか？」

「……全くありません！ 僕はさっきまでの行動に、一欠片の反省も後悔もしていません!!」

「せめて反省はしろ、このバカ!!」  
「ぐはっ!？」

結構なスピードで枕やクッションが飛んで来たが、甘んじて受け入れる……調子に乗った代償なので仕方ないし、それだけの価値は確かにあったと断言出来る。ちなみにこの後……結局初詣には行けなかったし、3時間正座を強要された挙句しっ

かりとやり返された。

そういえば足が痺れた女の子の足を触って苛めるという、メジャーなシチュエーションを書いてなかったなと思い書きました。書くに当たって、ヒロイン達の中で一番違和感がない龍珠✓を採用しました。評判が悪ければ消しますので、遠慮なく感想欄で言っ下さい。

……足が痺れた女の子の足を触って苛めるシチュってメジャーですよね？



## √ C. 皇女の御心編

伊井野ミコは勝ち取りたい

感想ありがとうございます(。ω。)

以前みたいなスピーディな投稿は出来ないし見切り発車ですが、それでも良いならゆっくり投稿します。頑張って完結させたい……

章タイトルは、皇女(ミコ)の御心(みこころ)編です。

2学期に入り1ヶ月が経過した。僕達が在籍していた第67期生徒会は全活動を終了……これから約2週間の選挙活動期間を経て、次代の生徒会長を決める生徒会長選挙が行われる。当然僕は白銀陣営の1人として、会長のサポートに徹する事になる。今も会長が任期中に残した功績などをそれっぽく編集している真っ最中だが……僕はキーボードを叩きながら、先日のお出来事を思い出していた。

……

生徒会が解散した次の日、僕は伊井野に呼び出された。

「石上……私、生徒会長選挙に出るの、手伝って！」

「ごめん、それは出来ない……僕は会長を補佐する。」

「……私が生徒会長じゃ嫌？ 私は……生徒会長に相応しくない……？」

僕の言葉に……伊井野はショックを受けた様で、スカートの裾を掴みながら此方を見る。

「違うよ……ただ、会長には恩があるから……会長が生徒会長に立候補するなら、全力で応援して手伝いたいんだ。」

「そう……」

僕の言葉に短く返し、俯く伊井野を黙って見つめ続ける……前回の僕なら、絶対に手伝ってくれなんて言われなかったな……そういう意味では伊井野の申し出は嬉しいし、友人として応援したいと思っている。

「だったら……私が白銀前生徒会長に勝って生徒会長になれば、石上は生徒会に入ってくれる？」

顔を上げた伊井野は、強い意志を秘めた眼差しを此方に向けながらそう言った。

「いいよ……でも、会長は手強いぞ？」

「負けないから!!」

そう叫ぶ伊井野を見ながら思う……出来る事なら味方してやりたいけど、コレだけは駄目なんだ。僕にとっての生徒会長は、白銀御行<sup>会長</sup>だから……来年は絶対に手伝うからと、心の中で一方的に約束する事で許してもらおう。

……

そんな事があったから、前回以上に伊井野の動向を気にしてしまう。今回も伊井野は、ウケの悪いビラを配り、真面目過ぎる公約を掲げて選挙に挑む。そして、演台の前に立ち……また、何も言えなくなってしまうのだろう。今回も会長が助け船を出せば、上手くいく筈だ。だから、僕が余計な事をしなくても伊井野は大丈夫。そう思っている……僕の胸にはモヤモヤとした何かが居座っていた。

## 〈中庭〉

昼休み、コンビニ袋片手に中庭を歩いていると……

「アクセサリーを付ける事は校則で禁じられています！ コレは没収させて頂きます。放課後、風紀委員室まで取りに来る様に。」

風紀委員の腕章を付けた伊井野を見掛けた。どうやら、昼休みの見回り当番のようだ。注意を受けた男子生徒は頭に手をやり、ガシガシと髪を掻き乱しながら叫ぶ。

「っだー！ ツイてねえ!! 風紀委員に、しかも伊井野に見つかるのか……見逃してくれない?」

「駄目です!」

「ヤ……お前になんか投票しねえからな　!」

「……」

走りながら去って行く男子生徒を……伊井野は黙って見送る。全く……見逃して好感度を上げて置けば、票も増えるかもしれないのに……いや、わかってる。それを良しとしないのが伊井野ミコという人間なんだ。呆れる程真面目で、他人にも自分にも厳しく、只管規則を遵守する……その姿勢と心意気が、いつか大勢の人間に

理解してもらえればいいのと思った。

選挙期間に入り1週間が経過した。会長と伊井野の顔合わせも済み、僕は今日も編集作業に追われている。

「……あれ？これってどうだったわけ？」

手元の資料を調べてもわからない。はあ、仕方ない……生徒会室に行って確認するとしよう。作業を中断し、僕は無人の生徒会室に足を踏み入れる……筈だった。  
〈生徒会室前〉

まだ1週間しか経っていないのに、生徒会室に向かう途中の道が随分と懐かしく感じる。僕にとって、生徒会室はある意味……自室よりも居るのが当たり前の場所だ。後1週間もすれば、また生徒会役員として来る事が出来る……そんな事を考えながら生徒会室の前に着くと、中から人の話し声が聞こえて来た。僕はそっとドアに耳を近づけ、全神経を聴く事に集中させる。

……

〈生徒会室〉

「つまり、来年協力する代わりに……自分達の出馬する今年は降りろ……そういう事ですか？」

「あら？ そう聞こえましたか？」

「そうですか……石上が肩を持つからどんな人格者かと思ったら、なんて汚い……貴女のような人達に秀知院学園は任せられません！」

「あら、随分と言ってくれますね……」

「……四宮先輩、そこまでです。」サッザミ

伊井野と四宮先輩の衝突が大きくなる前に、生徒会室へと乱入する。

「石上君……」

「い、石上……」

ホッと何処か安心した様な表情を浮かべる伊井野を一瞥し、四宮先輩に視線を移す。

「……どうして此処に？」

「前期生徒会の活動資料を見に来たんですよ。PV編集に必要なだったので……」

「そう……」

「石上……」

「ごめんな、伊井野……僕に免じて四宮先輩の発言は聞かなかった事にしてくれないか？ 伊井野はいつも通り正々堂々、全力で会長選挙に挑んで大丈夫だから。」

「……うん、わかった。」

失礼します、と礼儀正しく生徒会室を出て行った伊井野を見送ると四宮先輩に向き直る。

「……何やってるんですか、四宮先輩。」

「……貴方が気にする事じゃないわ。私はただ、会長を勝たせる為に全力を尽くしているだけよ。貴方こそ……邪魔立てするなんてどういうつもり？」

「はあ……未遂で終わって良かったです。」

「……どういう意味かしら？」

「いや、だって……こんな事してるなんて会長に知られたら、絶対嫌われますよ？」

「え……嫌われる？」

僕のその言葉に、四宮先輩は目を見開いて固まった。

「そりゃそうですよ、会長からすれば……四宮先輩がそこまでしなきゃ、自分は生徒会長になれないと思われているんだなって勘違いしても不思議じゃないですし……会長は責任感も人一倍強いですから、もしこんな事をしてるなんてバレたら会長選挙を辞退する可能性だって……」

「え、え……」

そうか、四宮は俺の事を信用していなかったんだな……

ち、違うんです、会長！

いや、もういい。悪かったな、頼りない男で……

か、会長！ 待って下さい、違うんです!!

さよならだ、四宮……

か、会長——!!

「」ガタガタ

四宮先輩は、傍から見てもわかる程動揺し始めた。まさか、そこまで考えてなかったのか……もしくは、バレないと高を括っていたか……伊井野が会長に抗議し



たら一発でバレルのに。

「ど、どうすればっ!? も、もしこの事がバレたら私……会長に嫌われ……!?」ヂ

カカッ

「……伊井野には口止めしとくんで、落ち着いて下さい。」

「ほ、ホント? ちゃんと内緒にしてくれる様に言ってくれる?」

「大丈夫です、僕も会長に辞退されるのは困りますから。」

「お、お願いね、石上君! ホントの本当にお願いいね!」ヂ

四宮先輩に肩を掴まれ、揺さぶられながら懇願される……

「わ、わかりましたから、落ち着いて下さい!」

「そ、そう……ならいいの。じ、じゃあ、私はこれで……」

四宮先輩は落ち着きを取り戻すと……

「……本当にお願いいね?」

生徒会室を出て行く寸前、そう言い残して去って行った。

「はあ、なんかあった。でも四宮先輩……前回もこんな事してたのか? 伊井野は何も言わなかったけど……まあ、言い触らす奴じゃないか。」

僕は目当ての資料を棚から取り出し確認すると、生徒会室を出た。帰る途中、スマホで伊井野に口止めのメッセージを送るのも忘れずに。そして……ほんの少しの申し訳ない気持ちを込めて、文の最後にへ応援してるゝとだけ記して送信して、スマホをポケットに仕舞い編集作業に取り掛かった。

大仏√と龍珠√で原作ネタ使い尽くした感が……ネタ被りとかするかもしれませんが、許して……許して……(´・ω・｀)

## 伊井野ミコを嗤わせない

感想ありがとうございます（・∀・）

暗い、真っ暗だ……辺りを見回すも、月明かりの無い夜の様に黒一色で占められている。この感じ、夢だな……どうせ夢と自覚するなら、もっと楽しい夢が良かったけど……どうやったら起きられるかな？とりあえず歩くか。

特に目的も無く歩き続けていると……前方から微かな声が聞こえて来た。

……ぎ、ひぐっ……あああっ……うあっ………！

……なんだ？ 誰かが……泣いてる？ 僕は声のする方へと歩みを進める。暫く歩くと、地面にへたり込み顔を伏せながら泣き声を上げ続けている少女の小さな背中が見えた。

「……大丈夫？」

膝を曲げ少女と視線を合わせ様とするが、少女の顔は……黒く塗り潰されていて見えない。目がある位置からポロポロと雫が落ち続けているから泣いている事はわかるけど……

さ……あぁっ……め、なさ……ごめ……なさ……！

「……どうして泣いてるの？」

出来るだけ優しく、怖がられない様に心掛けながら話し掛ける。

だって……ひぐっ、だってえっ……

少女は嗚咽混じりに、だっつと繰り返しながら涙を流し続ける。

だって、私の所為でっ……右上がっ……！

黒く塗り潰されていた少女の顔がハッキリと見えた。それは、時間が巻き戻る直前まで僕の瞳に映っていた……泣きじゃくる伊井野の姿だった。

……

「あー……夢見、最悪だ。」

目を開くと、見慣れた天井が視界に映る。僕は陰鬱とした気分を誤魔化す様に、ガシガシと頭を掻きながら起き上がった。夢から覚めても、先程の光景は鮮明に脳

裏に焼き付いている。

さ……あ……め、なさ……ごめ……なさ……！

夢とはいえ……伊井野の泣いている所を見るのは正直キツイ。時計を見ると、短針が丁度7時に到達した所だった。今日は生徒会長選挙当日……前回と同じ様に、今回も会長が勝つだろう。会長には既に伊井野の事は頼んでるけど……

だって……ひぐっ、だってえっ……

今の伊井野には……当然前回の記憶は無い。だから僕を嫌っていた記憶もなければ、事故の記憶も無い。でも……

だって、私の所為でっ……石上がっ……！

……せめて、僕に出来る事で伊井野には償いたいと思った。真面目で責任感が強く、少し抜けた所のある……アホな小型犬みたいな、伊井野ミコという少女を泣かせた事を償うのなら……全てを会長に任せるのは、少し違うと思った。

〈生徒会長選挙前〉

「四宮先輩、少し良いですか？」

「……どうしました、石上君？」

「……1つ、お願いがあるんです。」

……

〈立候補者と応援演説者の人は準備お願いします。〉

アナウンスの声が体育館に響き、空気が張り詰め始める。

「……伊井野ミコの応援演説を務める、大仏こばちです。」

大仏による伊井野の応援演説が始まった。淀みもなく、伊井野の長所を的確にアピールする大仏の応援演説は、十分及第点だろう。でも……

「……ご静聴ありがとうございます。」

ガヤガヤとした空気が体育館に充満する。演説なんて、選挙に興味がない生徒からすれば、面倒なだけの時間だ。真剣に聞いている生徒なんて半分程度だろう……とぼとぼと戻って行く大仏とすれ違いに、今度は四宮先輩が舞台へと上がった。

……

〈生徒会長選挙前〉

「……このメモを応援演説の時に置いて来るだけで良いのね？」

「はい、お願いします。」

「何を書いているか、見てもいいかしら？」

「別に良いですよ。」

二つ折りにしたメモ用紙を四宮先輩は広げて見る。

「……これだけ？」

「はい。それでダメなら、後は会長を頼る事になってしまいますけど……」

「ふうん、随分と肩入れするのね？」

「そんなんじゃないですよ、ただ……」

「……ただ？」

「いえ、なんでもありません。」

（もう、伊井野が泣く所は見たくないから……とは言えないな。）

四宮先輩の応援演説は、流石としか言えない程レベルの高いモノだった。こばちゃんの演説も決して負けているとは思わない。でも……自信に満ち溢れた微笑を浮かべ、白銀元会長が当選したメリットをそれでもかかと並べ尽くした演説は大反響の結果となった。

「ご静聴ありがとうございました……白銀御行に清き一票を。」

「……続きまして、伊井野ミコさんの立候補演説です。」

その言葉に、ビクッと体が僅かに跳ねる……纏わりつく緊張を振り払う様に舞台へと向かうと、拍手喝采を浴びながら、舞台から降りて来る四宮先輩とすれ違う。

「全く、敵に塩を送るなんて……私には理解出来ないわ。」

「え……？」

四宮先輩とすれ違う瞬間、そんな言葉が聞こえて来た……でも、どういう意味か考える時間はない。舞台上上がり、演台の前に立つと……全員の視線が一瞬で集まったのを感じた。震える手で演説文を広げて視線を落とすと、演台の上に小さなメモ用紙が置いてあった……なんだろう？ 四宮先輩の忘れ物……？ 無意識に手を



伸ばし、二つ折りにされたメモ用紙を開くと、そこにはこう書かれていた。

「周りの視線なんて気にせずに、言いたい事言っちゃえ。」

石上の字だ……敵同士なのに、私の事を心配してこんな言葉を伝えてくれるなんて……私は俯いたまま、ギョツとスカートを掴んだ。負けない、負けたくない！でも、怖いっ……私を見る人達の目が、私を詰る人達の声が……怖くてたまらない。黙って俯き続ける私に、ガヤガヤと騒めきが大きくなる……そんな時だった。

「パーン!!」

手を叩く音が響き渡り、体育館が静まり返る……周囲を見渡すと、音の発信源は石上だった。そのまま視線を向けていると……僅かに頷く石上と目が合った。

負けるな、頑張れ。

そう、言われている気がした……気が付けば、さっきまで感じていた緊張も怖さも和らいでいた……私は演説文に視線を落とすと、すうっと息を深く吸った。

「わ、私の名前は、伊井野ミコです！」

……

会長、もし伊井野が萎縮して言葉に詰まる様な事になったら……助けてやっても

られますか？

「……」

そう頼み込んで来た後輩の言葉を思い出す。

「……どうやら、俺の出る幕はなさそうだな。」

「わ、私の名前は、伊井野ミコです！」

声を張り上げ、真っ直ぐな目で演説文を読み上げる伊井野には……俺の手助けは不要だと確信したからな。

〈生徒会長選挙結果〉

白銀御行 428

伊井野ミコ 182

結果は、前回よりも票数に差が出る形となった。会長との討論演説が無かった分、伊井野の票が伸びなかったのだ。でも伊井野の……言葉に詰まりながらも、懸

命に演説文を読み上げる姿を嘲笑う者は……1人も居なかった。

「此処に居たのか。」

「石上……」

通路の隅っこで、座り込む伊井野を見つけて話し掛ける。

「演説お疲れ……会長、手強かったろ？」

「ごめん……なさい……」

「……なんで謝るんだよ？」

「だって、石上があそこまでしてくれたのにつ……負けちゃった、から……」

そう言って落ち込む伊井野に近寄る。相当悔しいのだろう……唇をキツく結び、膝を抱えた伊井野の隣に腰を落とし手を伸ばす。

「伊井野、よく頑張ったな……偉いぞ。」

俯いたままの伊井野の頭を撫でる。前回の伊井野は会長に発破をかけられた事で、立候補演説を会長との討論演説という形でやり切る事が出来た。でも今回は、会長の力を借りずに演説をやり切った……票数こそ前回より少なかったけど、伊井野1人の力で獲得した票だ。謝ったり、落ち込む必要はない……そういう思いを

込めて、僕は伊井野の頭を撫で続けた。

「ふえ……?」

「……やっとこっち見たな、いつまでも落ち込むなよ。」

こっちを見上げたまま固まる伊井野の頭をポンポンと叩いて立ち上がる。

「会長が伊井野に話があるってさ、来てくれないか?」

座り込んだままの伊井野へと手を差し出す。

「は、はい……」

「……なんで丁寧語?」

僅かに潤んだ瞳で、此方を見上げて来る伊井野の手を引っ張って起き上がらせる。

「じゃ、行くか。」

伊井野の手を離して、歩き出す。伊井野の手を離した瞬間、後ろから……

「あっ……」

という伊井野の切なそうな声が聞こえた気がして振り向いたけど、伊井野は俯いたまま僕の後ろについて来ている。気の所為かと思い直し、伊井野の歩く速さに合わせつつ僕達2人は会長達の待つ場所へと向かった。

## 〈伊井野邸〉

家に帰った私は、今日の事を振り返っていた……

その気があれば明日、生徒会室に来てくれ。歓迎する。

初めて、生徒会に誘ってくれた白銀会長……

明日からよろしくね、ミコちゃん！

天使の様な笑顔でそう言ってくれた藤原先輩……

四宮先輩は、保健室で休んでいたから顔合わせはまた後日になっちゃったけど……

伊井野、よく頑張ったな……偉いぞ。

「~~~~っ!!?」

胸に抱えたクッションに顔を埋めて耐える。あんなのっ……あんなのずるい！

頭に意識を向けると、あの時の感触がまだ残っている様な気がして顔が熱くなる。

私はソッと石上に撫でられた部分へ自分の手を重ねた……

あんなに優しく撫でるなんて……石上のバカ。  
一人きりの部屋で浮かんだ言葉は、消える事なくいつまでも胸に留まり続けた。  
いた。

## 伊井野ミコを馴染ませたい

感想ありがとうございます（・∀・）

生徒会長選挙も無事終了……今日からは新メンバーの伊井野を加えた新生徒会として、生徒会業務に従事する事となる。新生徒会とは言っても、僕からしたらや々と全員が揃ったという感じなんだけど。

「……」チヂチ

「……なあ、伊井野。」

「っ!?」フッ

「はあ……」

僕は今、伊井野と一緒に生徒会室に向かっている。生徒会初日と言う事で、風紀委員の仕事を免除された伊井野をどうせなら一緒に行こうと誘った所までは良かったが……チラチラと此方を窺い、話し掛ければそっぽを向く伊井野に辟易する。な

んでだ？今回は伊井野の前で校則違反をした事は殆どないから嫌われてない筈だし、昨日までは割と普通だったのに……ううん、わからん。

友人の様子を訝しむ石上優の脳内には、？が浮かぶばかり……しかし、伊井野ミコも好んでそっぽを向いている訳ではない。先程の一場面にわかりやすさを加えるならばこうである。

「……」（さぶさ）

（石上の手、意外と大きかったなあ……大きいのに撫で方は優しくて凄く安心し……はっ!? 実は女の子の頭を撫で慣れてるって事は……!?）

「……なあ、伊井野。」

「っ!?」（アッ）

（ひゃっ!? ビ、ビックリしたあ、石上の手を見てた事バレてないよね？すぐ顔逸らしたし。）

「はあ……」

（あ、無視したみたいになっちゃった……違うのに。でも、今から何か言うのも変な感じだし……もー！なんで今までみたいに話せないの!?）



意識しているからである。

〈生徒会室〉

伊井野と四宮先輩の顔合わせも終え、早速生徒会業務に取り組もうとした僕達だったが……

「親睦を深める為に恋バナしましょー！」

藤原先輩がいきなりそんな事を言い出した。

「藤原書記、いきなり何を言い出すんだ？」

「これから私達は同じ生徒会として仕事をする事になるんですよ？ そして、円滑に仕事をする為には、相互理解が必要になってきます。恋バナはお互いを理解するのに最適な話題です！」

「確かに、相互理解は必要だが……」

「藤原さん、よりによってなんで恋バナなの？」

「学生が1番盛り上がるのが恋バナだからです！どんなタイプが好きだとか、デートはどんな場所に行きたいとか……そういう心の中のモノを赤裸々に言い合う事で、お互いに絆が生まれ結束が強まるんです！」

「さ、流石は藤原先輩です！」

「……」

多分恋バナしたいだけだな、この人……まあ伊井野が生徒会に溶け込みやすくなるというのなら、反対する理由は無いけど。

「それでは、会長は気になる女の子との初デートをどう過ごしますか？」

「お、俺か!? う、ううむ、いきなりそんな事を聞かれてもな……」

「っ!？」

（会長のデートプラン!? 藤原さん、よくやったわ!）

「別に難しく考えなくてもいいんですよ？ 馬鹿になんてしませんから、会長の思うままのデートプランを言って下さい！」

「ううむ、まあ初デートだからな……無難にウィンドウショッピングや映画とかか？」

「うわー、なんの面白味もないデートですね……正直ガツカリです。」

「馬鹿にはしてねーけど、メッチャ上から言うじゃん。」

「……」

（会長とウィンドウショッピング……）

……このネックレス、四宮に似合ってるな。

え？ そ、そうですか？

ああ、是非プレゼントさせて欲しい。

あ、ありがとうございます……

「……！」

（……良い!!）

「ミコちゃん、会長のデートをどう思いました？ アリかナシかで言って下さい。」

「批評させんな。」

「ええと……アリです。置きに行き過ぎな気がしますし、とりあえず感が否めませ

んが……まあアリです。」

「そこまで言われるなら、ナシって言われた方がマシだったな。」

「す、すいません……」

「ミコちゃん、気にしちゃダメですよ！　しょーもないデートプランしか言えない会長が悪いんですからね？」

「は、はい。」

「藤原、結束強めるつもりないだろお前。」

「次は……黙ってやり過ごそうとしてる石上くん！」

目敏い……面倒だから気配消してたのに。

「うーん……デートプランですか。そうですね、例えば……」

僕は前回の人生で学習した。何度も四宮先輩に恋愛相談をし、その度に気持ち悪いと詰られた。自分でコレだと思ったデートプランも、四宮先輩には常軌を逸していると言われ……僕は理解した。自分の趣味趣向を前面に出してしまうと、反感を買ってしまうと言う事に。だから、自分を出すのはほんの少しに留め、万人向けのデートプランを練れば良いんだと気付いた。

「公園や動物園などのデートで、行く先々に花を一輪用意しておくんです。そして、デートの最後には今までにデート先で見て来た花で作られた花束を贈るんです！」

どうですか!？」

「ほう……」

（なるほど、流石は石上だ……中々センスあるデートプランだな。）

「アハハハ……石上くん、キモーい。」

「……」

（久々に死にたくなった……）

「……」

（マジかよ、コレ駄目なのか……）

「……」

かぐやも藤原と同様、行く先々に予め花を用意してる辺り気持ち悪いと思ってるが、選挙前の暗躍の件で石上には借りがある為我慢した。

「ミコちゃんはどう思いました？」

「え、えと……」

（はあああああっ!?! い、石上って意外とロマンチックな所あるの!?!）

マリアージュ  
奇跡的相性

他者にはともかく、伊井野にとって石上の述べたデートプランはドストライク！高校生にも関わらず、白馬に乗った王子様が迎えに来てくれると言って憚らない女である。石上の常人には理解されないロマンス全振りの感性も奇跡的に伊井野にはブツ刺さる！前回の人生では殆ど生かされる事はなかったが、石上優は伊井野ミコに対する恋愛特効持ちなのである！！

「……ミコちゃん？」

「あつ、ええつと……な、何ですか!？」

「いや、石上くんのデートプランがアリカナシかですよ。遠慮なく言っちゃって下さい！」

「えうっ……ええと、その……」ヤギ

「……僕に気を遣う必要はないぞ？」

（伊井野に色々言われるのには慣れてるし。）

「あ……アリ………です。」

「えええっ!?!? ミコちゃん、頭大丈夫!?!」

「ええっ!?!」ガッ

「藤原先輩、オブラートって知ってますか？」

「……藤原さん、自分の感性和ズレているからって馬鹿にしてはダメよ。」

「はーい。」

本日の勝敗 白銀&石上の敗北

デートプランをダメ出しされた為

「……」*ぎゅ*

「ん？ 伊井野、どうかしたか？」

「な、なんでもないっ……」

（ど、どうしよう……石上の事、ちゃんと見れなくなりそう……）

&伊井野の敗北

マスメディア部員は確かめたい

感想、誤字脱字報告ありがとうございます

（・・・）

〈生徒会室〉

「マスメディア部からの取材依頼……ですか？」

「僕と伊井野だけで？」

「ああ、正式な取材依頼だ。石上は1学期に一度取材経験もあるから、一通りの流れはわかると思うが……」

「それは大丈夫ですけど……」

「伊井野監査は、こういった取材を受けるのは初めてか？」

「は、はい、初めてです。」



「そうか、まあ……石上も一緒だからあまり気負わずにな。石上、何かあればフォローしてやってくれ。」

「わかりました。」

「じゃあ、早速マスメディア部の部室に向かってくれ。」

「わかりました、行くぞ伊井野。」

「う、うん。」

……

〈マスメディア部〉

「遠路はるばる良く来て下さいましたわ。早速取材を……と言いたい所ですが、機器の準備が整うまで今しばらくお待ち下さい。」

ナマ先輩に案内され、伊井野と2人でソファに腰掛ける。向かいの席には、ナマ先輩とガチ勢先輩が陣取っている。

「御二人は、夏休みをどの様に過ごされました？」

「夏休みですか……」

（なるほど、始めは雑談から入って緊張を解すつもりなんだな。伊井野は取材初め

てみたいだし、気を遣ってくれてるんだな。」

「私は……友達と集まって課題や勉強をしたり、夏祭りに行ったりしてました。」

「夏祭り……いいですね。そういうば……石上会計とは夏祭りでバッタリ会いましたわね？」

「ああ、そういえばそうでしたね。」

「会計君、1人だったけど友達いないの？」

「メディアに関わる人間なら、言葉を選ぶべきでは？……違いますよ、その時は偶々ふらっと寄っただけでしたから……他の夏祭りは友達や生徒会で行ったりしましたけど。」

「その言葉が聞きたかった（ですわ）」セリ

ナマモノ先輩とガチ勢先輩のセリフが重なった。

「ぐ、具体的に生徒会の皆さんで夏祭りに行かれた日付は!？」

「ええと、確か……8月20日だったと……」

「正解ですわ!」

「なんでそっちが正解判定出すんですかね……」

「じ、じゃあ……あの時、かぐや様をかれんが見たっていうのはホントって事？」

「だから言いましたでしょう!? アレは妄想でも幻想でもない！」

「……」

（普段の言動で信じてもらえなかったのかな……っていうか、あの花火大会に居たのか……）

「じゃあ私は……かぐや様とあの時、同じ花火を見てたって事……？」

……綺麗ですね、巨瀬さん

は、はいっ……かぐやしゃまっ……

巨瀬の脳内で記憶の捏造が行われた。

「……ぐふっ!?」ハッ

「うわっ!?」

「ひうっ!?……あ、あの大丈夫ですか？」

伊井野は身を乗り出し、ガチ勢先輩を氣遣うが……

「かぐやしゃまという花火から散り行く一粒の火の粉になりたい……」

「……」

ガチ勢先輩の発言に顔を顰めると、身を引き座り直した。何言っただこの人……

「つ、つまり……会長とかぐや様の愛がスターマインって事では……？」

「アンタも何言っただ。」

……綺麗ですね、会長

ああ、だが……俺にとっては、闇夜に咲き誇る数々の花火よりも……四宮、お前が1番綺麗だ

会長……

「現実には勝る妄想なし！」<sup>ハッ</sup>

現実ではない。

「今日も2人はフルスロットルだな……」

「石上……この人達大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないよ。」

「ないの!?!」<sup>カッ</sup>

「ごめんね、2人共……あの子達には後でキツク言っておくから。」

眼鏡を掛けた先輩から謝罪を受ける。この人は確か部長だっけ……大変そうだな。

「あ、いえ……気にしないで下さい。」

「僕達は大丈夫ですけど……」

「そうね……大丈夫じゃないのはあの子達だもんね。」

「まあ……」

（部長からもそういう評価なのか……）

「そ、そんな事は……」

「いいのよ、あの子達ね？ 会長選挙中、部室を出禁にしてたから……久しぶりの取材でテンション上がっちゃったのね。」

「は、はあ……」

「……」

（いや、取材に入る前に暴走したんですけど……っていうか出禁になってたのか……）

「とりあえず、取材は他の子に頼むからちょっと待ってね？」

「は、はい。」

「わかりました。」

その後、30分程時間を掛けて取材は終了した。

「はい、2人共お疲れ様。今日は来てくれてありがとう。」

手を合わせながら、そう言う部長さんの傍で代理の取材陣が片付けを始める。僕は何気なく、その動きを目で追っている……

「あ、石上君は少しだけ個別に取材させてくれる？」

「え？ はあ……わかりました。じゃあ、伊井野は先に戻っててくれるか？」

「うん、わかった。じゃあ、私はこれで……」

「ええ、伊井野さんもうありがとう。良い記事にするからね。」

伊井野はペコリとお辞儀をすると、マスメディア部を出て行った。

「実は……今から聞くのは、私個人の興味を満たす為だけのモノなの。記事には絶対にはしないと約束するから、答えてくれる？」

「……まあ、答えられる事なら。」

「聞きたい事っていうのはね……選挙の時、伊井野さんの立候補演説で手助けをしてたよね？ アレはどうしてかなって思ったの。」

「どうして……そんな事が気になるんですか？」

「ふふ、言ったでしょう？ コレは私個人の興味を満たす為だけのモノだって……言いたくないなら別にいいの。」

「……伊井野は、融通の利かないクソ真面目な人間です。風紀委員として、校則と規則を何よりも重んじる……でも、そんな伊井野にも欠点があります。それは……」

「人前でのあがり症かしら？」

「……そうです。会長選挙の立候補演説……伊井野が萎縮するのはわかっています。そして、伊井野を煙たく思っている人間がここぞとばかりにヤジを飛ばす事も……」

「変な話ね……そもそも貴方は、白銀陣営の人間なのに。」

どうして、助け船を出したの？と言外に匂わせる部長さんの言葉に答える。

「そうですね……今回の選挙で会長が勝つ事はわかっていました。ただ伊井野には、負けるにしても悔いが残る様な負け方をして欲しくなかったんです。伝えたい事を伝え切れないまま負けたんじゃ、あまりにも不憫です……」

「なるほどね、でも……それだけかしら？」

「……後はまあ、僕のエゴみたいなモノです。」

「なるほど、エゴ……ね。」

「……あれ？」

（ここまで喋るつもりなかったのに……）

バツと視線を上げると、部長さんはニコツとした笑みを浮かべていた。

「ふふ……必要以上の情報を引き出せるから、マスメディア部の部長なのよ？」

「怖あ……」

「ごめんね、記事にしないって約束はちゃんと守るから安心して？」

両手を合わせ、謝罪を述べる部長さんを見て思った……

「じゃあ、まあいいですよ……」



ホント、この学園の人間は侮れない人ばかりだ。

## 伊井野ミコは測りたい

感想ありがとうございます(。ω。)

## 〈中庭〉

私が生徒会に入って一週間以上が経過した。今は昼休みに行われる風紀委員の見回りをする為、こぼちゃんと待ち合わせ中だ。壁に背を預けボーっとしていると、近くのベンチで昼食を摂っている女子生徒2人の会話が聞こえて来た。

「そういえばさー……男の人って手が大きいと、アッチの方も大きいっていうよね。」

「えー、やだあ！ じゃあ、手で大きさバレちゃうって事じゃん。」

「っ!？」

（そ、そうなの!？）

「いや、私も友達から聞いただけなんだけどね。」

「なーんだ、これから男子の手見る時ドギマギしちゃう所だったじゃん。」

「あはは、ごめんごめん。」

「……………」

（石上の手、意外と大きかった…………って事は!?）

「ミコちゃん、お待たせ。じゃあ、見回り行こっか？」

「んひゃあっ!?」どッ

「わっ!? どうしたの、ミコちゃん？」

「う、ううん…………なんでもない！早く行こ！」

「う、うん。」

……………

〈生徒会室〉

放課後、私は白銀会長と2人で生徒会業務に勤しんでいる。四宮副会長と藤原先輩は部活、石上は担任の先生に頼まれた仕事を終わらせてから来るらしい……

男の人って手が大きいと、アッチの方も大きいっていうよね

手が大きいと、アッチの方も大きいっていうよね

アッチの方も大きいっていうよね

「……」

昼休みに耳にした女子生徒の言葉が、頭の中を駆け巡る……べ、別に気になってる訳じゃないし！ 変な意味じゃなくて……そうっ！ 知的好奇心として気になってるだけだから！

痴的好奇心の間違いである。

「……」  
ぎゅ

サラサラと書類処理をする白銀会長をチラリと盗み見る……と、とりあえず情報を集めないと！ 白銀会長の手の長さを調べて、石上の手と比較すれば何かわかるかもしれないし！

仮にその何かがわかったとして、どうしようというのか。

「……白銀会長、少し良いですか？」

「ああ、何かわからない所でもあるのか？」

「いえ、その……手を見せてもらえますか？」

「……手？ なんだ、何かあるのか？」

「え、ええと、手相を見てみようかなって……」

「手相？」

「は、はい……すみません。」

「いや、別に謝らなくてもいいが……」

（なるほどな……伊井野なりにコミュニケーションを取ろうとしてくれているのか……）

至極しようもない理由で、手の長さを測ろうとしているだけである。

（先輩として、歩み寄ってくれている後輩の思いを無下には出来まい。）

「……別に構わない、存分に見てくれ。」

「は、はい！」

（やった、上手く行った！）

伊井野は心優しき先輩の思いを無下にした。

「では……失礼します。」

「ああ、そんな畏まるモンでもないけどな。」

「……」 いぎいぎ

（落ち着いて、正確に直径を測る……）

「……」

（昔は……圭ちゃんとも、こういうスキンシップはあったんだがな……今はちょっと話し掛けるだけで……）

は？ お兄いには関係ないし

そういう所ウザいから

「……」

（圭ちゃんも昔はもっところ……）

お兄いー、どこ行くの？

私も一緒に行くー

「……」

（こういう時代もあったんだよなあ……）

白銀は、かつての妹の姿を思い出し頬を緩めた。

「こんにち……わー!?」  
「やっやっ」

「藤原さん、いきなり大声出してどうし……」

「あ……」↑後輩に手を握られている

「え……？」↑先輩の手を握っている

担任から任された仕事を終え、早足で生徒会室へと向かう。もう、みんな揃って  
るだろうな……急がないと。早足の勢いそのまま、僕は生徒会室の扉を開けた。

「すいません、遅れまし……」カチャッ

「ええー!? ミコちゃんって……もしかして、会長の事!？」

「ち、違います！ 白銀会長は全然タイプじゃありません！」

「下級生に手を握られて、随分と表情が緩んでいる様でしたが……会長、相当嬉し  
かったみたいですね？」コッコッコッコ

「四宮落ち着け！ だから誤解なんだって!!……というか、伊井野監査は言葉を選  
べ！ 傷付くだろうが！」

「す、すいませんっ……」

「……傷付く？ それは伊井野さんに対して良からぬ感情を持っていると？」

「いや、そういう意味じゃなくてだなっ……」

「……」んぐ

気付かれない様にそっと扉を閉めた僕は、深く息を吸い込み吐き出した。

「ふうー……さて、何処で時間を潰して来ようかな。」

石上は逃げた。

30分後、再度生徒会室を訪れると先程の騒ぎは収まっていた。

「……何があったかは知りませんが、随分疲れてますね。」

「あ、ああ……そういえば、この前は結局俺と石上だけ恋バナして終わったよな？  
次は女性陣の恋愛観も聞いてみたいモノだ。」

白銀は露骨に話題を変えた。

「良いですね！ やりましょう!!」



「そうだな、伊井野監査はどういう男がタイプなんだ？」

「むふふ、ついさっき会長ワられちゃってますから気になってるんですよね？」

「傷エグんな。」

「あ、あのっ……違いますよ!? 別に白銀会長の事が嫌いとかそういう事じゃないんです。単純にタイプじゃないってだけで……」

「メッチャ塩塗り込んで来るじゃん。」

「で、でも白銀会長はカッコイイと思いますよ! クラスで4ゝ5番目位の顔です!」

「そ、そうか……」

「(4ゝ5番目かぁー!)」

白銀の自己評価は2ゝ3番目だった。

「……」

（会長がクラスで4ゝ5番目位の顔? この子、目の水晶体濁ってるんじゃないかしら……）

「それに……」

「い、いや……もうわかったからいいぞ！ それより、伊井野監査の好きなタイプの話だったな！」

白銀は、これ以上塩を塗り込まれる前に話を戻した。

「私の好きなタイプ……いつも私の事見ててくれて、私の気持ちをわかってくれて、困った時は颯爽と助けに来てくれる王子様みたいな……そんな人がタイプです。」

「居ねえよそんな奴っ……ん？」<sup>ヤッ</sup>

「そんな人いる訳……あら？」<sup>ヤッ</sup>

「……ん？ どうしました？」

「い、いや……なんでもない。」

（アレ？ それって……）

「……なんでもないわ、気にしないで。」

（どう考えても……）

（石上の事じゃねえか！）

（石上君の事じゃない！）

白銀とかぐやは察した。

「ミコちゃん……夢は幾ら見てもいいですけど、最終的に傷付くのは自分ですよ？」

「いるもん……」グッ

藤原は全然察していなかった。

「……！」

（ん？……待てよ？もし、石上と伊井野がくっ付いたら……）

きゃーん！ 私も彼氏欲しー！ 会長付き合って！ 2人みたいにイチヤイチヤしましよー！

やれやれ、仕方のない奴だ。

「……！」

（……はっ!? もし、石上君と伊井野さんが付き合えば……）

ぐっ！ 羨ましいい……四宮、俺と付き合ってくれ！そして、石上達以上にイチヤイチヤさせてくれ！

あらあら、仕方のない人ですね。

（イケる!!）

周りのカップルの存在が、行動や思考に与える影響は大きい……カップルのイチャつきを見せつけられると、自分も彼氏（彼女）が欲しい、自分もイチャイチャしたいという欲求が生まれる。その影響力に期待し、本人達の与り知らぬところで後輩カップルを作ろうとする2人の天才だが、どう考えても遠回り……その時間を恋愛<sup>別</sup>頭脳戦<sup>事</sup>に使っていた方がマシなレベルである。しかし……

（フッ、全く……四宮がそこまで言うのなら仕方ない。）

（ふふ、会長がそこまで懇願するのなら仕方ないですね。）

都合の良い妄想に取り憑かれた2人には、妙案としか思えなかった。斯くして、今此処に……後輩カップルを作ろうとする先輩2人と、知らぬ間にくつつけられる事になった後輩2人、そして……

「……ハッ!? 何か私の知らない所で、面白い事が起こってる気がします!」  
「……藤原先輩、何言ってるんですか?」

蚊帳の外のラブ探偵が誕生した。

後輩達を焚き付けたい

感想ありがとうございます（・ω・）

〈生徒会室〉

数日後……生徒会室には白銀、石上の男性陣は居らず、3人の女子が陣取っていた。

「ドキッ！ 女子だけのミコちゃん歓迎会の始まりですよー！」ハッ。チ。  
「すみません、態々私の為に歓迎会なんて……」

「いえいえ、ミコちゃんは生徒会の大事な仲間ですから当然ですよ！」

「藤原先輩……！」

「今日は男子共も居ないので、女子だけで内緒のお喋りしましょう！」

「内緒のお喋り……ですか？」

「藤原さん、それは具体的にどの様な内容なのでしょう？」

「ズバリ！ 今現在、皆さんは気になってる男子は居るんですか!？」

「き、気になってる男子!？」

「あらあら……」

（……ふふ、上出来ね。恋愛事を絡めると、藤原さんは操作しやすくて助かるわ。）

……

数日前……

「あーあ……折角生徒会の皆で恋バナ出来ると思ったのに、中途半端な所で終わっちゃいましたねー。」

「そうですね……でも男子の前だと言い難い事もありますし、丁度良かったかもしれません。」

「……っ！ だったらかぐやさん、ミコちゃん、私の3人でお喋りしましょう！ 折角ですから、ミコちゃんの歓迎会も兼ねて！」

「あら、それは良いですね。じゃあ、伊井野さんに話を通しておいしてくれますか？」

「わーい！ わかりました、任せて下さい！」

……

（ふふふ、さて……伊井野さんをどう焚き付けてあげましょうか？）

「気になってる男子ですか……」

「はい！ 身近な男子にドキドキしたり、気になって仕方なかったり、そういう人は居ませんか？ それと、ミコちゃんは現実に存在する男子でお願いしますね！」

「藤原さん……なんですか、その注意事項は？」

「ミコちゃんはこの前、随分とメルヘンな事言っていましたから！」

「メルヘン……」  
「フーッ」

「……藤原さん、今日の主役が早速落ち込んでしまったのですが……」

「いえ……いいんです。実際、友達にも良く言われてますから……」

「そうですか……それはそうと、私達に身近な男性と言うと……石上君はどうですか？」

「い、石上ですか!？」

「ええ、伊井野さんとは同級生ですし……中等部の頃からの付き合いなのでしょう？」

「べ、別に私は……石上の事なんて……」

「そうですか。藤原さんは、石上君はどうなんですか？ 結構仲が良い様に見えますが……」

「っ!？」

「……」いぎ

（ふふ、焦るでしょう？ 他の女子に好きな人を勧められると、取られるんじゃないかと不安になるでしょう？ 嫌なら早く石上君とくっ付いて、会長を焦らせなさい。）

自分がやられて嫌な事はやらない様にと習わなかったのであらうか。

「石上くんですかー……まあ確かに遠慮なく色々言える仲ですけど……」

「傍から見たらお似合いに見えますよ？」

「私と石上くんがですか？」

「ええ。」

「え、あっ……ふ、藤原先輩……待っ……！ あう……」フタツタ

「……ふふ。」

（あらあら、そんなに焦って……恥ずかしがらずにさっさと素直になれば済む話な



のに。)

特大のブーメランである。

「あははは、石上くんとか絶対無いですよ。先輩の事敬わないし、直ぐ正論でボディブローしてくるし、罰ゲームは酷い事させて来るし！」

「そ、そう……」

(全部自業自得だと思いますけど……)

「ほっ……」

「そう言うかぐやさんは、石上君の事……どう思ってるんですか？」

「えっ……私？」

「私にだけ言わせるなんてダメですよ？ かぐやさんも石上くんの悪口言っちゃって下さい！」

「趣旨が変わってるじゃない。でもそうね……とても、優しい子だと思うわ。あの子は最初から臆せずに私に接して来ていましたし。この学園で、四宮かぐやという人間から距離を取り遠くから眺める人は、それこそ数え切れない程居るのに……今思えば、本当の意味で石上君が私にとっての初めての後輩なのかもしれないわね。」

「かぐやさん……」

「四宮先輩……」

「ふふ、恥ずかしいから本人には内緒よ？」

「もちろんです！ 此処で話した事は女子だけの秘密です！」

「ええ、お願いね。」

「……！」

（し、四宮先輩……まさか、石上の事……）

石上の事を恋愛対象として見ていないからこそ、かぐやは恥ずかしがらずに思った事が言えるのである。しかし、伊井野からすれば石上優という人間を正しく理解、評価し、信頼している年上の女子生徒という風にしか見えていない。石上もかぐやの事を信頼しているのは、日頃の態度を見れば明白！ 結果、伊井野の脳内は焦りと不安に支配されていた。

「それにしても、かぐやさんは石上くんの評価高いんですね……かぐやさん、もしかして石上くんの事……」

「だっ、ダメです!!」ガッ

（掛かりましたね。）

「あら？ 伊井野さん、何がダメなのかしら？」

「えっ、あれ？ ええと、その……」

（私、なんで……）

「伊井野さん……何がダメなのか、落ち着いてちゃんと説明してくれる？」

（このまま畳み掛ける！）

「え、ええ……と……」

つまり……会長とかぐや様の愛がスターマインって事では……？

（ハッ!?)

「し、四宮先輩は白銀会長とお似合いだと思っているので！」

「お似合い!? わ、私と会長が？」

（こ、この子……）

「はい！ 見るからに相性ピッタリって感じで素敵だと思います!!」

「素敵な相思相愛カップルだなんて……」

そこまでは言っていない。

「で、でも、私と会長はそういう関係じゃないですからね？」

（滅茶苦茶良い子じゃない……あまり追い詰めたりしちゃ可哀想よね。伊井野さん、少しずつ距離を縮める感じで大丈夫よ。）

かぐやは秒で懐柔された。

「えー……会長とかぐやさんがあ？」

「……藤原さん、何か言いたい事でも？」

「うーん、会長とつていうのが納得出来ないと言いますか……」

「……藤原先輩は、白銀会長の事どう思ってるんですか？」

「赤ちゃん。」

「？」

「？」

白銀に対する特訓が大分マイナスに働いていた。

## 〈中庭〉

「この前は酷い目に遭ったな……」

「大変でしたね。」

「結局、俺だけ傷を負ったし……折角だ、石上も何か言えよ。」

「えー、何を言えって言うんですか？」

「そうだな……生徒会の女性陣の中で付き合うとしたら誰が良いとかか？」

「えー……」

「此処だけの話にするから！ それで……そうだな、藤原はどうなんだ？」

「いやー、ないですね。何というか……藤原先輩は生徒会のマスコットっていう感じなので……」

「そ、そうか……」

（即答で藤原をマスコット扱いか、凄いなコイツ……）

「ちゃんと秘密にしろって下さいよ。藤原先輩にバレるとギャイギャイ言ってくるから……」

「ああ、わかってる、わかってる。ならば石上、伊井野監査はどうなんだ？ 同じ

クラスだし、中等部からの付き合いなんだろう？」

不動産屋が最初にウケの悪い賃貸物件を紹介し、その後で普通の物件を紹介する。すると客は、最初に紹介された物件と比較し普通の物件が魅力的に見えてしまう事があるという……白銀はそれを藤原と伊井野で実行した。

「伊井野ですか……うーん、伊井野はなんというか……見てないと危なっかしいとか、目が離せないとか……そんな感じですかね。」

「なるほどな……」

白銀は、期待していた反応が石上から出ない事にやきもきする。

「……」

（やはり経験者を唆すのは容易じゃないな。……だが、選挙の時の石上の行動を見るに、伊井野に対して全く脈がない訳ではない筈だ。）

「それで、四宮先輩は……」

「っ!？」

（会長が居るから別に僕がどうこう言わなくても……）

「……まあいいか。そういえば、体育祭の備品についてなんですけど……」

「あ、ああ……」

（良くない！なんだ!? 四宮は何なんだ!? 滅茶苦茶気になる所で切らないでくれよ!!）

石上を焚き付け様と恋バナを振った白銀だったが、予想外のカウンターを喰らっていた。

### 〈校門前〉

藤原先輩と四宮先輩と別れ、帰路に着く。私は今日あった事を思い出しながら、歩いている。

あははは、石上くんとか絶対無いですよ。

「ふう……」

特に理由もなく、ホッとした自分を訝しむ……多分、藤原先輩が誰かのモノになるのが嫌だから……だと思う。それ以外に理由なんて思い浮かばないし、きっとそ

う……

とても、優しい子だと思うわ。

「……………」

四宮先輩の言葉を思い出すと、胸の辺りに嫌な気持ちが居座る。それは存在を自覚した瞬間、霧散して消えてしまう。だから、これが何なのかはわからないままだ……

……優しい子だと思うわ。

知ってるもん……石上が優しいのは中等部の頃からだし、委員会の仕事も手伝ってくれてたし、一緒に遊びに行った事だってあるし、それに……

ムカつくんだよ、頑張ってる奴が笑われるのは。

「……………」

鞆を持つ手に力が入る……今思えばあの時から、石上とは良く話す様になった。こばちゃんと3人で一緒に夏祭りに行ったり、一緒に勉強したり、大友さんに勉強を教えたり、麗ちゃんと一緒に高等部の文化祭に行ったりと色々な事をした。パツと顔を上げると、夕焼けが辺り一面を真っ赤に染めている……そういえば、占いに



は夕占というモノもあった筈だ。偶然そこを通った人々の言葉を、神の託宣と考える占い……確か、すれ違う人達から最初に聞こえて来た2つの言葉を占いとするんだっけ？　そこまで考えると、私の耳は無意識に2つの言葉を拾っていた。素直になれば

大丈夫

その言葉の意味を正しく理解する事は、今の私には出来なかった。

## 藤原千花は証明したい

感想ありがとうございます(。ω。)

## 〈生徒会室〉

事の発端は、昼休み返上で生徒会の仕事を処理していた時だ。カロリーバーを喰えながらキーボードを打ち込んでいると、四宮先輩の……

「……石上君、昼食はそれだけなの?」

という言葉に生徒会の視線が集まる。

「え? はい、そうですけど……」

「それだけだと、いつか倒れるわよ? 栄養も偏るでしょうし……」

「確かに、生徒会の業務はそれなりに体力も要る。最低限の栄養だけでは、いつかそのシワ寄せが来るかもしれないぞ?」

「うっ……そう言われると……」

「そうですよ！ ミコちゃん位もりもり食べないとダメですよ！」

「ふ、藤原先輩！ コレは家政婦さんが間違えて作り過ぎちゃっただけで！ 決して私が大食いって訳じゃっ……」

伊井野は保身に走った。

「まあ、それはそれとして……食生活を心配されるなんて、石上くんはダメダメですわねー。」

「……そういう藤原先輩は、自分で作ってるんですか？」

「うぐっ……まあ私もお手伝いさんが作ったお弁当ですけど……」

「藤原先輩、女子力低そうですもんね。」

「……カッチーン！ いいですよ!? そこまで言うなら私達、生徒会女子役員の中で誰が1番女子力が高いかハッキリさせてあげますよ!!」

「え、生徒会女子役員って……」

「ふ、藤原先輩、私達もですか!?」

「当たり前です！ 石上くんに舐められたままで良いんですか!?」

「いや、僕が舐めてるのは藤原先輩だけなんですけど……」

「それ、余計腹立つんですけど!？」

「まあまあ、落ち着け藤原。」

「会長も何部外者みたいな顔してるんですか！ 会長も審査員やってもらいますからね！」

「し、審査員？」

「はい！ 明日……私、かぐやさん、ミコちゃんが会長と石上くんにお弁当を作ってきてます！ それを食べて誰が1番女子力が高かったか判定して下さい！」

「ええー、藤原先輩の手作り弁当ですか……」

「何ですか、その嫌そうな顔は!? 私の手作り弁当ですよ！ 普通の男子なら喜ぶ所です！」

「いや、だって……いきなりそんな事言われても、四宮先輩も困りますよね？」

「……私は構わないわよ、石上君。偶にはこういうったイベントも良いでしょうし……伊井野さんも構わないかしら？」

（会長にお弁当！ 絶対美味しいって言わせてみせるわ!!）

「は、はいっ……頑張ります！」

（石上にお弁当……ど、どうしよう!!）

「石上、折角女性陣がここまで言ってくれてるんだ……有り難く頂こうではないか。」

（四宮の手作り弁当!? 滅茶苦茶食べたい!!）

「……そうですね、明日を楽しみにしてます。」

（胃薬を用意……は流石に失礼か。）

「首を洗って待って下さいよ!」

藤原先輩がビシッと此方を指差し、そう宣言すると同時に昼休みを告げるチャイムが鳴った。

「む、もうこんな時間か……残りは放課後にするでしょう。」

会長のその言葉で、その場は解散となった。

〈生徒会室〉

次の日……生徒会室に集まった僕達は、机の上に並べられた弁当箱を見下ろしていた。

「なんというか……壮観ですね。」

「ああ……態々早起きして作ってくれたかと思うと、こう……くるものがあるな。」  
「最初は私からですよ！ 目ん玉かつ開いて見て下さい！ 先ずは石上くんのからです！」

パカッと藤原先輩が弁当箱を開けると、茶色一色の液体が僅かに揺れていた……

「……弁当にカレーか。結構な変化球だな……」

「そうですね。弁当にカレーを用意する感性は、女子力皆無な気がしますが……」  
「まあカレーならそこまで味でハズレもないし、問題ないだろう。」

「2人共好き勝手に言い過ぎですから！ さっさと食べて下さい！」

「わかりましたよ……あの、藤原先輩？」

カレールーだけが収められた弁当箱を一瞥し、藤原先輩に視線を移す。

「はい？ どうしました？」

ヤベエこの人、全然察してくれない……

「……藤原さん、他にはないんですか？」

見かねた四宮先輩が助け船を出してくれた。

「他？」

「ご飯とか、パンとかあるでしょう？」

「いや、それだけですけど？」

「ええ……」

「ルーだけ!? 正気かお前!? 少しは脇も固めて来いよ!……ほら見ろ! 石上が微妙な顔してんじゃないか!」

「……」

「いやー、会長のお弁当作り終わった時点で時間が殆ど残ってなくて……コンビニ寄って買って来たんですよー。」

「しかもレトルトかよ! っというか、コンビニ寄ったんならせめてご飯かロールパンもついでに買って来てやれよ!」

「もー、ワガママですねぇ……石上くんが普段食べてるカロリーバーで、ディップでもしたら良いんじゃないですか?」

「偏り増すわ！」

「会長、その辺でイイっすよ。」

「石上……」

「そもそも、今回の件は藤原先輩に女子力が無いのを確かめる為のモノですから、それが証明されただけですし……」

「まだです！ 会長に作ったお弁当を見てないでしょ！？ そっちが本命ですから！」  
「まあ……そうか、じゃあ開けるぞ……ほう、コレは肉丼か？ 中々ご飯が進みそっ……」

会長は、茶色一色の肉弁当を箸で突くと動きを止めた。

「……会長？ どうしました？」

「……コレ、肉しか入ってない。」

「ええ……」

「どうです？ 100%肉弁当です！ 男の子はお肉大好きだから嬉しいでしょ？」

「限度があるわ！ コレもう、肉弁当というよりは肉詰めた箱じゃねえか！」

「無駄に金掛かってそうなのがまた……」



「会長は普段からお肉食べれて無さそうだから、氣を利かせてあげました！」

「余計な氣を回すな！ 哀れみじゃねえか！」

「……次は私ですね。」

「最下位は確定したんで氣樂に行けますね。」

「ええ、そうね。さ、どうぞ2人共。」

四宮先輩の弁当箱を会長と覗き込む……凄い色鮮やかな弁当だ。

「おう……凄い美味そうだな。」

「はい、藤原先輩のがアレだった分……感動もひとしおですね。」

「ふふ、是非召し上がって下さい。」

（会長の好物であるカキフライは勿論、好みの味付けとオカズのバランスも完璧よ

！コレで会長も……）

これはっ!? なんて美味くて、俺好みの味付けなんだ！……四宮！ これからは俺だけの為に弁当を作ってくれ!!

「……………」  
「クネクネ」

（そ、そんな……毎日私の作ったお味噌汁が飲みたいだなんて……）

「……かぐやさん？ どうしたんですか？」

「い、いえ、なんでもありませんよ？」

「はぁ……じゃ、最後はミコちゃんですね！」

「は、はい……」

先程から静かにしていた伊井野は、藤原先輩の言葉にピクツと体を震わせると、目を伏せながらおずおずと弁当箱を差し出して来た。

「そ、その……私、普段から家政婦さんにご飯とか作ってもらって……だから、四宮先輩みたいにちゃんとしたお弁当って作れなかったし……分量もミスして1人分しか用意出来なくて……」

申し訳無さそうにそう言う伊井野の手には、複数の絆創膏が貼られていた……僕は膝を曲げ腰を落とすと、伊井野へと視線を合わせた。

「……アレ？ ミコちゃん、私のお弁当はちゃんとしてないの？」

「藤原さん、ちょっと黙って。」

「……嬉しいよ、ありがとな。」

「で、でもっ……」

「……この手を見れば、伊井野がどれだけ頑張ってくれたか大体わかるよ。そんなになるまで頑張って作ってくれた弁当を笑ったり、馬鹿にしたりなんて……僕はしないよ。」

「石上……」カッ

「だから、伊井野の作った弁当……食べさせてくれよ。」

「う、うんっ……じゃあ、はい！」

僕は瞳を潤ませた伊井野から弁当箱を受け取ると、振り返って会長達に声を掛ける。

「じゃあ、食べましょうか？」

「あ、ああ……そうだな。」

（コレで付き合っていないんだもんなあ……）

「……そうね、頂きましょう。」

（この2人……もう付き合ってるって事で良いんじゃないかしら？）

「わーい！ いただきますーす！」

（ごっはん、ごっはん！）

藤原はラブ探偵という肩書きを返上すべきではないだろうか。

30分後……

「……じゃあ結論として、藤原先輩が1番女子力低いって事で良いですか？」

「ああ、異論は無い。」

「2人共！　なんでそんなに上か下かハッキリさせようとするんですか!? 全部美味しかった、皆女子力があるって事で良いじゃないですか!!」

「お前が言い出したんだ。」

「どの口で自分に女子力があるとか言ってるんですか？」

本日の生徒会女子役員女子力決定戦、最下位 藤原千花

ハロウィンを楽しみたい

感想、誤字脱字報告ありがとうございます（・∀・）

〈生徒会室〉

「ハロウィンです!!」

藤原先輩の発言に室内の視線が集まる。藤原先輩の発言でもわかる通り、今日は10月31日……盛った若者がコスプレをして渋谷に繰り出す日だ。

石上はハロウィンに対する認識がかなり歪んでいた。

「……ああ、今日は10月31日か。確かに世間はハロウィンだろうが、俺達には関係ないだろう?」

「そんな事ありません! 秀知院という閉鎖された空間でこそ、世間通りのイベントを楽しむべきです!!」

「だが、別に他の生徒達もハロウィンだからと何かをしていた様子はなかったぞ?

「

「だからこそ！生徒会である私達が率先してイベントを楽しむ事によって他の生徒達にも……あ、私達も楽しんで良いんだ、という空気を作る事になるんです！」

「むっ、確かに……」

（くっ、一理ある……）

「……」

（本当……こういう時の藤原さんは、無駄に弁が立つわね……）

「流石は藤原先輩です！」

「……藤原先輩は、お菓子が食べたいだけなんじゃないですか？」

「石上くん、失礼な事言わないで下さい！イタズラしますよ!?それが嫌ならお

菓子を超越して下さい！」

「結局食べたいんじゃないですか。」

「……それで？藤原、お菓子でも買って来て皆で食べれば良いのか？」

「いえ、どうせならコスプレもしましょう！こんな事もあろうかと、演劇部から色々借りて来てますから！」

「コスプレ……」

「ええー……」

「石上くん、イヤそうにしない！ 1学期の時に、会長もかぐやさんもやってるんですから！」

「え？……そうなんですか？」

「うぐっ……まあ、コスプレと言う程のモノではなかったが……」

「そんな事もありましたね……」

「会長はコレ着けてたんですねー！」キ

「おい、勝手に着けるなよ。」↑白銀in猫耳

「アハハハ、似合ってますよ会長。」

「石上……勘弁してくれよ。何処に需要があるってんだ……」

「お……お……」

（おかわわわわわわわわわわわわわわ!!）

再びの奇跡的相性！  
マリアージュ

「かぐやさんも、ハイッと！」キ

「ち、ちょっと、藤原さん!」↑かぐやin猫耳

「きゃわー! ミコちゃん、かぐやさん可愛いですよね!」

「はい、とても似合ってます!」

「い、伊井野さんまで……」

「ハハハ、四宮……1学期以来の姿だな。」

(やっぱ、かわええええええええええ!!)

再びの奇跡的相性2!!

「……という事でハイ! ミコちゃんには、コレをあげますね!」ギ

「え? な、なんですかコレ?」↑伊井野in犬耳

「!!? ミコちゃん、ワンって言って下さい。」

「ええっ!? ふ、藤原先輩……?」

「ミコちゃん!!」

「は、はい!……わ、ワン?」

「きゃわー!! ミコちゃん可愛い!! 可愛いですよね、かぐやさん!」

「ええ、とても似合ってるわよ。」



（なんとか……なんとかこの可愛い会長の姿を写真に収めないと！）

「い、石上……変じゃない？」

「……」

石上優という人間にはかつて、大友京子の為に泥を被り子安つばめに恋をしたという過去が存在する。大友京子と子安つばめ……どちらも犬系女子とジャンル分けされる存在である。つまり……

「……ああ、伊井野も結構似合ってるな。」

（え、何コレ……可愛いだよ……）

マリアージュ  
奇跡的相性……！！

本人は自覚こそしていないが、石上は猫耳より犬耳派である。以前から……其れこそ前回の人生から、伊井野の事をアホな小型犬と揶揄していた石上であるが……犬耳を着け不安そうな瞳で自分を見上げ、保護欲を掻き立てるその姿は、宛ら道端で足元に擦り寄って来る子犬の如し！結果……伊井野ミコの犬耳姿は、石上の趣味（性癖）をど真ん中ストレートでブチ抜くモノであった！

「……」

（ヤバ……なんかわかんないけど、ヤバ……）

異性の普段と違う姿を見る事によって、意識する様になるのは古今東西、世界中何処でも起こり得る事象である。だが今回の件で、石上優が伊井野ミコを異性として意識する事となるかはまだわからない。だが……

「そっか、似合ってるんだ……」<sup>①</sup>

（石上に似合ってるって言われちゃった……）

「お、おう……」<sup>②</sup>

（そんな目で僕を見ないでくれ!! なんて知らないけど、胸の奥で変な音がするから!）

石上の心に……何かが芽生えたのは確かだった。

「ミコちゃん可愛い、可愛いよおー」<sup>③</sup> ハハハ

「藤原……危ない奴みたいになってるぞ。」

## 〈伊井野邸〉

机に向かいノートにペンを走らせる最中……私の頭の中には目の前の問題文を解こうとする思考とは別の事が浮かんでいた。

「この手を見れば、伊井野がどれだけ頑張ってくれたか大体わかるよ。そんなになるまで頑張って作ってくれた弁当を笑ったり、馬鹿にしたりなんて……僕はしないよ」

私の拙いお弁当を見て、あそこまで言ってくれた石上の言葉を思い出す。

美味しくなかったら残していいから……

そう言った私に、石上は……

そんな事しないって。

そう言って全部食べてくれたのが……堪らなく嬉しかった。

今日、藤原先輩に犬耳を着けられた時も……

……ああ、伊井野も結構似合ってるな。

その時の事を思い出すと、にへっと口元が緩んでしまう。ペンを置き、ぐにぐにと緩んだ頬を指で解しながら……最近、充実していると思う。

でも、ムカつくんだよ……頑張ってる奴が笑われるのは。

そう言っ、石上が助けてくれたあの日から……いろんな事に変化が起きた。友達と言えるのは、こばちゃんしか居なかった私に……麗ちゃんと大友さんという友達が出来た。風紀委員として校則違反を指摘する私は、お世辞にも好かれていない存在だった。でも、荻野と石上が起こした校内放送事件から……敵意の籠った眼で見られる事も随分と減った。それに……

伊井野、よく頑張ったな……偉いぞ。

……気付くと私は、自分の手を頭に乗せて撫でていた。あの時と同じ様に撫でているのに、全然違う。やっぱり自分でやってもダメなのかな……？

「はあ……また、撫でて欲しいなあ。」

どうして、そう思ったかについては……考えないまま、私はペンを持ち直すと目の前の問題文を解き始める。

## 石上優は誤魔化したい

## 〈生徒会室〉

ハロウィンから数日が経過した。僕は今、去年の体育祭記録をパラパラと捲っている所だ。棚の前で立ったまま資料に目を通してしていると、ガチャリと扉の開く音に視線を向ける。

「遅れました。頼まれていた議事録、体育祭実行委員から預かって来ました。」

「おう、伊井野。お疲れさん。」

書類を胸に抱え込んだ伊井野に言葉を返す。

「あれ……石上だけ？」

「藤原先輩は、ついさっき体育祭で使う放送器具の備品チェックに出て行ったよ。問題が無ければ、そのままTG部に顔出しに行くってさ。会長と四宮先輩は、体育倉庫の備品チェック。」

「ふ、ふーん、そうなんだ……」

（え……って事は石上と2人っきり!?)

……

その頃の体育倉庫内……

「ふふ、万が一閉じ込められたら大変ですね。」

「ははは、助けも呼べないだろうしな……」ガチャガチャガチャ……

ガチャ……

「……」

「……」

……

（もう！ 私ったら何考えてるのよ！ どうせ直ぐに先輩達も戻って来るんだからっ……でも、昨日読んだ漫画じゃ……）

だ、ダメだよ……もうすぐ皆来ちゃう……

……関係ないよ。さあ、服を脱いで……着飾らない君を見せてくれ。

男は少女に近付くと、耳元で囁き服に手を伸ばした……

「……」ツァツァツァ

（そ、それでそのままっ……！）

伊井野は少女漫画の愛読者である。

「……伊井野、見せてくれ。」

「えっ!? そ、そんないきなり!? も、もっと手順を踏んでからっ……」

「え、議事録見るのに手順が要んの?」

「議事録? ……あっ!? そ、そうね! 今日は特別に手順は踏まなくて大丈夫よ!!」

「え、あ……そう? じゃあ、ちよっと読ませてもらうから。」

「う、うん。」

（あー! もう! 私の馬鹿!! 石上はそんな人じゃないでしょ!? だ、大体、私と石上はそんな関係じゃないんだし。そんな関係じゃ……）  
ムサシ

「……伊井野、どうかしたか?」

「え? ……う、ううん、何でもない!」

（……なに、今の?）

「ふーん?」

暫し議事録を読み込む……気付くと、結構な時間が経っていた。

「ねえ、石上……白銀会長と四宮先輩、ちよっと遅すぎない?」

「……確かにそうだな。会長達は……離れの体育倉庫に行ってるらしいから、ちょっと様子を見に行つて来るよ。」

「あ、私も行く！ 何かトラブルが起きたかもしれないし……」

「そうだな、じゃあ行こう。」

……

〈体育倉庫前〉

「結構離れた場所にあるのね……」

「ま、此処には普段使いの物は置いてないからな。体育祭でしか使わない様な備品を保管する場所だし……」

「ふーん……あれ？ 石上、コレ……」

伊井野の指差した場所に視線を向けると、ドアのスライド部分に木の枝が挟まっていた。これは、もしかして……

「もしかしたら会長達……コレの所為で出られなくなってるのかも……開けてみよう。」

「う、うん。」



「会長、四宮先輩、大丈……」*サッ*

「

」

ドアを開けると、マットに仰向けで横たわる四宮先輩が居た……会長に押し倒された状態で。

「

（え、なんで会長は四宮先輩を押し倒してんの？ ヤベ、邪魔しちゃった!? あーそれより、伊井野に見られたらマズイかも……っていうか、一時期会長に対する伊井野の目がキツかった原因ってもしかしてコレか!?)

この間、1秒。

「……」*ハッ*

「え？ 石上、なんで閉めちゃったの？ 先輩達居なかった？」

「え？ あー、その……うん、居なかったよ。」

石上は……正直に言った場合に起こる諸々を加味し、嘘を吐いた。

「と、とりあえず、生徒会室に戻るか……会長達も入れ替わりで戻ってるかもしれ

ないし……」

「え、うん……」

「はあ……」

（とんでもない場面を見てしまった……）

### 〈生徒会室〉

30分後……気まずい雰囲気を纏った会長と四宮先輩が戻って来た。

「2人共、何処に行ってたんですか？」

伊井野の質問に2人はビクッと体を震わせる……お願いですから、上手く誤魔化して下さい。

「あ、ああ……すまない、備品のチェックに時間が掛かってな……な？ 四宮。」

「え、ええ……遅れてごめんなさい。」

「いえ、別に謝ってもらう程では……」

「そうか……石上、コレ……伊井野監査も。」

「え？ あ、ありがとうございます？」

会長は2本の缶ジュースを机の上に置いた。会長の意図をよくわかっている伊井野は、頭の上に？を浮かべながらも礼を言い缶を手取る。

「……どもっす。」

（コレ絶対、アレだよな……）

「……石上君、何か欲しい物とかあるかしら？」

（露骨に賄賂で黙らそうとしてる……）

「特に無いっすね……」

「そう……」

「？」

……

「……今日はこれくらいにしておくか。」

備品チェックの書類に記入し終わると今日の生徒会業務は終わりだ。それ程時間も掛からなかった為か未だ日は沈んでおらず、生徒会室は朱色に彩られている。

「私は……今日はコレで。」

「あ、お疲れ様です。私も失礼します。」

未だに余裕が見えない四宮先輩と別れの挨拶を交わす……伊井野も風紀委員業務の終わった大仏と待ち合わせをしているらしく帰って行った。

「……」

「……」

現在、生徒会室には僕と会長だけ……微妙に気まずい雰囲気漂っている。数秒、或いは数分の沈黙を破ったのは会長だった。

「その……な、違うんだよ。」

「え、何がですか？」

「その……見ただろ？」

「会長が四宮先輩を押し倒してた事ですか？」

「押し倒っ……い、いや、そりゃそう見られても仕方ないかもしれんが、アレは……」

「いや、わかってますから……アレから直ぐ戻らずに、30分経ってから来たって事はその……そういう事なんでしょう？」

「そういう事ってどういう事!? 違うから! お前が考えてる様な事はなかったから!!」

「会長……僕には隠さなくても良いんですよ?」

「隠すって何をだよ! 何かやった前提で言うのやめろ!!」

「わかってます、ちゃんとわかってますから。」

「ちょっとマジで待って!? ホントに何もなかったから!!」

必死で弁明をする会長を見ながら思う……あの状況を見られて何もなかったと言うのは、いくらなんでも無理がある……が、会長が無理矢理四宮先輩をどうこうする様な人間ではない事を僕はよく知っている。軽い冗談で、わかってます、ちゃんとわかってますから……と目を伏せながらそう言う僕に詰め寄る会長がちょっと面白くて、こんな対応を取り続けている。

「……っていう事なんだよ! これでわかってくれたよな!」

「はい、わかりました。」（ハッ）」

「仏の顔!」

本日の勝敗、白銀の敗北

後輩に散々イジられた為

最近……普段の学校生活でつい目で追ってしまっている人がいる。生徒会の仕事をしていても、風紀委員の見回りをしていても……気付くと視線を向けたり、無意識にその姿を探してしまふ。

〈フレーフレー赤組！〉

校庭に響き渡る声に振り向くと、応援団が練習をしている光景が視界に入る……私達のクラスからは、麗ちゃんと石上が参加している。

〈心を燃やす、情熱の赤！〉

汗を流しながら、懸命に練習に取り組むその姿から……目が離せない。まるで、石上の周りだけキラキラと光ってるみたいで……私の目は吸い寄せられた様に、その姿を視界に捉え続けている。

「伊井野ちゃん、何してるの？」

「あ、大友さん……」

「あ、石上君だ。応援団の練習かー、凄いね。やる気満々だ！」

「うん……」

「……伊井野ちゃん？」

「なんかね、石上が光って見えるっていうか……キラキラして見えるの……なんでかなって……」

「うん？ それってもしかしたらさ……石上君の事が好きだからじゃないの？」

「え……？」

「ん？ だって、石上君がキラキラして見えてるんでしょう？ 私聞いた事あるよ！ 恋をするとな、好きな人が輝いて見えるんだって！」

「わ、私が石上を？」

「違うの？」

コテンと首を傾げながらそう訊ねる大友さんの言葉に……否定の言葉を紡ぐ事は出来なかった。

「あ……」

（そう……だったんだ。私は、石上の事が……）

そこまで考えて……ストンツと胸の中に何かが収まった気がした。とりあえず、1人になって色々考えたい……私のその願望が叶うのは、暫くしてからだった。何故なら……

「そう……みたい。」

その言葉を聞き、テンションの上がった大友さんを宥めるのに随分と時間が掛かったから。



大友京子はアピらせたい

感想ありがとうございます（・∀・）

〈ファミレス〉

詳しい話を聞きたいと言う大友さんに連れられ、私達は近くファミレスを訪れていた。

「それでそれで？いつから好きなの？」

「えうっ……い、いつからとかはわかんないけど、気付いたら目で追ってて……」

「ふーん？でも、キツカケくらいはあるでしょ？」

「キツカケ……」

伊井野、よく頑張ったな……偉いぞ。

「……」プ。ヤ

石上の事が好きと自覚してから、あの時の事を思い出すと……以前とは違った感

情というか、気恥ずかしさの様なモノを感じてしまう。顔に熱が集まるのを感じた私は、誤魔化す様に大友さんから顔を逸らした。

「その反応……思い当たる節があるんでしょ！」

向かいの席から隣に移動して来た大友さんに……白状しろー、とほっぺをぐにぐにされる。

「あうう……」

「ほらほら、言わないとやめないよー？」*グニグニ*

「い、言うから、言うからやめてえ……！」

……

「……なるほどー、会長選挙の後にそんな事があったんだ……それで、頭ナデナデされて意識しちゃったんだね。」

「う、うん……選挙演説の時も、私が萎縮して何も言えなくなって……騒ぎが大きくなりそうになった時に助けてくれて……」

「あー、凄い音がしたから見てみたら石上君だったからビックリしたよ。伊井野ちゃんの為だったんだね……やっぱり優しいね、石上君。」

「……うん。」

「アタックしないの？」

「ええっ!? で、でもお……」

「私はクラス違うからあんまりだけど……石上君って結構女子と一緒に居るトコ見るよ?」

「た、例えば!?」

「伊井野ちゃん、おさちゃん、おのちゃんの3人の他にも……先輩っぽい人と並んでノート見てたり、中庭で帽子被った女子とゲームしてるトコも見つかるし、あとは……藤原先輩だっけ?」

「う、うん。」

（ふ、藤原先輩!? でも藤原先輩は、石上の事は恋愛対象じゃないって言ってたし……そんな事ない筈……）

「1学期の……夏休みの前くらいだったかなー? 号泣してる藤原先輩と一緒に歩いてたよ。」

「えええっ!?」

（何があったの!?!）

「私が推理するに……もしかしたら、別れ話をしてたんじゃないかな？」

とんだへボ推理である。

「そ、そんな事……」

（……ハッ!? でも聞いた事がある……女子が特定の男子の悪口を言っているのは、他の女子に対する牽制の意味があるって……藤原先輩、石上の悪口結構言ってるし、もしかしたらって事も!）

「……伊井野ちゃん?」ㄉㄉㄉ

「……」

（もしそうなら、この前の歓迎会で藤原先輩が言ってた言葉の意味も違って来る!?

）

……

「石上くんですかー……まあ確かに遠慮なく色々言える仲ですけど……」

（石上くと1番仲が良いのは私なんですから、当然です!）

「傍から見たらお似合いに見えますよ?」

「私と石上くんがですか？」

（当たり前じゃないですか！ 私と石上くんは相性ピッタリなんですから!!）

「ええ。」

「あははは、石上くんとか絶対無いですよ。」

（石上くん、ごめんなさい！ 本気で言ってる訳じゃないんです！）

「先輩の事敬わないし。」

（いつも私を対等な存在として接してくれる。）

「直ぐ正論でボディブローしてくるし。」

（そんな石上くんを受け止められるのは、私だけなんです！）

「罰ゲームは酷い事させて来るし！」

（石上くんが望むなら……もっとハードな罰でも、私は構いません！）

………

「……ッ!?」カ——ッ

（って事なんじゃ!?）

此処に来て、藤原の日頃の発言がとんでもない方向に作用していた。

「伊井野ちゃん？」

「大友さんの言う通りかも……心当たり、凄いある。」

「っ！これは由々しき事態だよ、伊井野ちゃん！石上君が他の女子に取られる前に、早くなんとかしないと！」

「で、でも、どうしたら……」

「アタックしまくるしかないよ！」

「でもアタックって……何をしたらいいのかわかんないし……」

「私に任せて！男子を落とす方法……色々教えてあげる！」

「お、大友さん………！」

大友京子、備考……交際経験無し

〈中庭〉

「お弁当作戦だよー！」フズ

次の日……大友さんと中庭で待ち合わせをした私は、大友さんの開口一番の発言に思わず後退った。

「お弁当……いきなり作って来たら、変に思われないかな？」

「チツチツチ、甘いよ伊井野ちゃん……もう少ししたら、絶好のイベントがあるでしょ？」

大友さんは人差し指を左右に振りながら、片目を睨り自信有り気にそう言った。

「ま、まさか……」

「そう、体育祭だよ!! 体育祭なら、お弁当を作って来てお昼に誘っても全然変じゃないよ!」

「た、確かに……」

「そして、現役JKの手作り弁当だよ! コレに喜ばない男は居ないよ!」

「あの……そこに喜びを見出されるのは、ちょっと抵抗あるんだけど……」

「えー? でも男の人はJKが好きって友達が……」

「多分……それ言ってる年齢層、高校生じゃないと思う。」

「とにかく! 体育祭には、石上君の分のお弁当を作って来る事!」

「う、うん！」

「男は胃袋を掴め作戦、始動だよ！ エイエイオー！」

「お、オー！」

（あれ？ さっきと作戦名が違う……）

「先ずは石上君の好物にフューチャーするよ！」

「……大友さん、それを言うならフイーチャーするだと思……」

前途多難だった。

### 〈体育祭当日〉

体育祭当日、午前の部の最後の競技も終わり……各々が昼食を食べる為、食堂や教室、中庭へと散って行く。僕がコンビニ袋に入ったカロリーバーを取り出そうとしていると、重箱を持った伊井野とその背中を押しながら近付いて来る大友の姿が見えた。



「石上くーん、お疲れー。」

「お、お疲れ……」

「おう、2人共お疲れ……どうしたんだ？」

「い、石上……私、お弁当作って来たんだけど、作り過ぎちゃって……良かったら一緒に食べない？」

「えっ？ 僕と？」

「ホントは私も一緒に食べたいんだけど、先約があってダメなんだー。石上君、伊井野ちゃんをお願いね！」

「……僕で良いのか？ 大仏とか小野寺とか……」

伊井野と仲の良い女子の名前を挙げるが……

「う、うん……こばちゃんは風紀委員の見回り当番で、麗ちゃんも他の友達と食べて……その、ダメ？」

「……そういう事情なら、有り難く頂くよ。」

「じゃー！ そういう事で、お願いねー！」

大友はそう言うと、走って去って行った。走り去る直前に、伊井野に向けて何か

合図をしていた様に見えたけど……気の所為かな？

「じゃあ何処か……木陰にでも行くか？」

「う、うん。」

……11月とはいえ、昼間の日差しはそれなりにある。僕は伊井野と、中庭の木陰になっている場所へと移動して重箱を広げて行く……さあ食べよう、とした所で聞き慣れた声が背後から聞こえて来た。

「わあ、美味しそう！ ミコちゃんの手作り？」

「は、はい！」

いきなりやって来た藤原先輩にも、伊井野は嫌な顔1つせずに対応している。

「ちよっとだけ食べていい？ ちよっとだけ！」

藤原先輩は、人差し指と親指でちよっとだけと形作り、伊井野の弁当を強請った。相変わらず食い意地張ってんな……

「はい、是非食べて下さっ……っ!？」

了承の返事をしようとした伊井野は、藤原先輩の腹部を見ると目を見開いた……まあ、伊井野みたいな真面目な奴からしたら、体操服を捲って腹を出すなんて信じ

られないのかもな。まあ僕からしても、目のやり場に困るんだけど……

「はわわっ……」

（は、腹チラ……こ、これはもう、石上に対する藤原先輩の○ックスアピールなんじゃっ!?!）

伊井野の藤原に対する疑惑が増した。

「……美味しい！ミコちゃん美味しいです！」

「ちよっ……藤原先輩、1人でドカドカ食べないで下さいよ。」

「石上くん……所詮この世は、弱肉強食なんですよ？」

「食い意地張り過ぎじゃないっすか？そもそも、伊井野が用意した弁当なのに……」  
「女の子に向かってなんて事を言うんですか！それに、ちゃんと私のお弁当も分けてあげますから大丈夫です！」

「……良いのか？」

「うん、皆で食べた方が良いでしょう？」

（本当は、石上と2人で食べたかったけど……）

「まあ、伊井野が良いなら……藤原先輩、食べ過ぎると午後の部で動けなくなりま

すよ？」

「うん、大丈夫……」

（はっ！ まさか……藤原先輩は、私と石上を2人っきりにしない様に敢えて此処に来たんじゃ？）

「問題ありません！ 美味しー！」 ゼザゼザ

30分後……

「うぷっ……ご、ご馳走さまでした……」

「だからあれ程、セーブして食べた方が良かったのに……」

「ふ、藤原先輩、大丈夫ですか!？」

「だ、大丈夫です……」

藤原は肥えた。

「……」 ズッー

「ミコちゃん？ どうしたの？」

「あっ……いい、いえ！ 何でもないです!!」

……

### 〈生徒会室〉

「……なんか最近、ミコちゃんに変な目で見られるんですよえ……」

「化けの皮が剥がれたんじゃないんですか？ 今回は早かったですね。」

「人聞きの悪い事を言わないで下さい！ っていうかなんですか、今回はって!？」

「僕的には、あと2ヶ月は掛かると思ってたんですけどね。」

「話聞いてますか、石上くん!？」*サ。サ。サ。*

「藤原先輩、叩くのやめて下さい。」

「……やれやれ、相変わらず賑やかな事だ。」

（石上、2ヶ月って妙に具体的だな……）

「本当ですね。」

（でも、伊井野さんの藤原さんを見る目が変わったのは、少し気になりますね……）  
そんな生徒会室の様子を……僅かに開いた扉から盗み見る少女が居た。

「……！」

（藤原先輩と石上の距離が近い……や、やっぱり藤原先輩は!?）  
伊井野の藤原に対する疑惑が更に増した。

藤原千花は関わりたい

感想ありがとうございます（・∀・）

〈生徒会室〉

体育祭も無事終了し数日が経ったある日、生徒会室には1年生を除いた白銀、かぐや、藤原の3名が陣取っていた。生徒会業務に一区切りつけティータイムを楽しんでいると、藤原が空になったカップを置きながら口を開いた。

「もしかして……ミコちゃんて石上くんの事、好きなんじゃないですか？」

「……」

（藤原……）

「……」

（藤原さん……）

（気付くのが遅い……）

白銀とかぐやがその事実気付いたのは、1ヶ月も前である。

「ど、どうでしょうね……会長？」

「あ、ああ、そうだな……藤原書記、気の所為ではないのか？」

「違います！ 会長とかぐやさんの目は誤魔化しても……このラブ探偵の目は誤魔化せませんよ！」

「そ、そう……」

「ううむ……」

既にその事実気付いている白銀とかぐやがその事について濁しているのには、当然理由がある。それは……

「……」

（藤原さんが関わったら絶対面倒な事になる。）

「……」

（藤原が関わると碌な事にならん。）

恋愛事に関する絶対的な信用の無さである。それもそのはず……この女、絶対に地雷を踏み抜くからという理由で友人の恋バナに混ぜてもらえなかった過去を持



つ。例えそれが無くても、過去に白銀御行と四宮かぐやの恋愛頭脳戦に無自覚な横槍を入れ、或いは邪魔をした事で白銀、かぐや、両名からの恋バナに絡む藤原に対する警戒心は限界突破していた。

「証拠は上がってるんですよ！」*ハッハッ*

「証拠ね……」

「はい！ 体育祭の時、中庭の木陰でミコちゃんの手作り弁当を食べ様としてましたから！」

「ちよつと待て……なんで伊井野監査の手作り弁当って事まで、藤原書記が知ってるんだ？」

「え？ 私も一緒にお弁当食べたからですけど？」

「……藤原さん、それは石上君か伊井野さんに誘われて？」

「いえいえ、石上くんとミコちゃんが中庭の木陰でお弁当を広げてたのを見掛けたので、折角だから一緒に食べました！」

「そう……それは良かったですね。」

（それって多分……）

「そうか……」

（石上の為に作って来た奴なんじゃ……）

「今度は皆で食べましょうね！」

「……ええ、そうね。」

（伊井野さん、絶対石上君と2人っきりで食べたかったでしょうに……）

「ああ、そうだな……」

（藤原……そういうトコだぞ。）

「ってそうじゃありません！ ミコちゃんが石上くんの事が好きなら、私達先輩が上手くいく様にお膳立てしてあげるべきです！」

「藤原さん、余計な事はしない方がいいわ。」

つい先日、後輩に不安と焦りを与え煽ろうとした人間の言葉とは思えない。

「四宮の言う通りだ。仮に……伊井野が石上に好意を抱いていたとしても……こういうのは当人同士の問題だ。俺達がしゃばって事がマイナスに進まないとも限らない。」

つい先日、でしゃばってカウンターを喰らった人間の言葉とは思えない。

「心配無用です！ このラブ探偵チカにお任せあれ！！」

（不安だわ……）

（不安だ……）

〈生徒会室〉

「こんにちは……あれ？ 石上と四宮先輩は不在ですか？」

「ああ、四宮はゴミ出しの後、寄る所があると言って何処かに行ったっきりだな……  
石上はまだ来ていないな。」

「そう……ですか。」

「……」 *ぎゅ*

（イッチャッテ良いですか？）

「……」 *カカカ*

（やめとけて、絶対碌な事になんねえから。）

藤原からのアイコンタクトに白銀は首を振り、否定の意を表したが……

「……………！」「ん、ヤッ—ん」

（自分ではどうにも出来ないから、ラブ探偵頼んだって意味ですね？ 任せて下さい！）

「……………！？」

（藤原お前、絶対勘違いしてるだろ！？ つーか少しは察しろよ！）

片目を瞑りウインクを投げて来た藤原に、白銀は意思疎通が出来ていない事に辟易する。

「……………ミコちゃんは、最近何か悩み事がありますよね？」

「えっ!? ええ、ええと、その……………」

「ズバリ！ 恋の悩みですね!? しかもその相手は石上くん……………違いますか!?」

「はあ……………」

（言いやがった……………本当に人の恋路に首突っ込むの好きだな。）

「えうっ……………い、石上の事は別にその……………違って……………！」  
ㄉㄤㄉㄤ

「ふふーん、ネタは上がってるんですよ！ ミコちゃん、自分に正直になって下さ

い……石上くんの事が好きなんですよ！」

「ふ、藤原先輩!? あまり大きな声で……」ぎゅ

伊井野は不安そうな表情を浮かべ、白銀に視線を送る。

「大丈夫ですよ。会長にはすでに事情を話してますから、味方してくれるそうです！」

「まあ、チカラになれる範囲でな……」

「そ、そうなんですか……頼りになります。」

（石上が尊敬してる白銀会長が味方してくれるなら、何か進展するかも……!）

「ふふーん! そうでしょう、そうでしょう!」

「やれやれ……」

（まあ伊井野は藤原を慕ってるし、同じ生徒会に相談出来る人間が居るのは良い事だろう。あまり男の俺が出張る訳にもいかないしな……）

「ミコちゃん、何でも相談して下さいね?」

「はい、ありがとうございます!」

「……」

「1つ懸念があるとすれば……藤原が口を滑らせて、石上が経験済みって事を言っ  
てしまわないかって事なんだが……」

「なんだかんだで半年以上同じ生徒会で活動して来た仲なので、石上くんの事はそ  
れなりに知ってますからね！」  
「フン」

「流石は藤原先輩です！」

「わ、私だって石上の事は結構知ってるもん！」

「……」

「……まあ、いくら藤原でもそんなデリケートな部分を喋ったりはしないだろう。  
少しは藤原の事も信じて……」

「ミコちゃん、石上くんは経験者ですから気を付けて下さいね！」

「け、経験者!? そうなんですか!？」

「てめえ、藤原あ！ 信じた瞬間裏切りやがったな!!」

「なんですか会長！ いきなり人聞きの悪い事を言わないで下さい！」

「お前、そういうのはデリケートな部分なんだから言っちゃダメだろ……」

「でも知らずに付き合ってからバレルより、始めからバレてた方が絶対良いですよ

！意外と女子もそういうの気にするんですからね？」

「そりゃそうかもしれないが……」

ボソボソと顔を寄せ話し合う白銀と藤原……普段なら風紀委員である伊井野が、2人共近過ぎです！と横槍を入れる場面……だが当の本人はそれどころではなかった！

「<sup>シ</sup>!？」

（い、石上が経験済み!? って事は相手は!?）

伊井野の視線の先には藤原……現在、伊井野ミコの脳内には1つの仮説が出来上がっていた。

（石上と藤原先輩は、1学期に付き合っていたけど夏休み前に破局……それから、お互い先輩と後輩の関係に戻ったけど、藤原先輩には石上に対する未練がまだ残っていて、石上に近い場所に居る女子には牽制をしているって事？ さっき私に石上が経験者って教えたのも……）

「ミコちゃん、石上くんは経験者ですから気を付けて下さいね！」

（私と石上くんは既に愛し合った仲なんです！ ミコちゃんが入り込む隙間なんて

ありません！)

「……………」

(……………って事なんじゃ!?)

なんでも相談して下さいと言っておいて、そんな事を思っているとしたら性悪女にも程がある。

(と、とんでもない事に気付いちゃった……………どうしよう……………)

本人達からすれば悍ましい仮説だが、恋は人を変えるのである……………主に思考力低下的な意味で。

〈フアミレス〉

「へー、石上君って経験済みなんだ……………人は見かけによらないねー。」

「うん、問題はその相手が藤原先輩って事なんだけど……………」

「ミコちゃん、藤原先輩の事尊敬してるみたいだもんね……………ショック？」



「そ、それもあるけど！ 藤原先輩と石上がその……そういう関係だったって事は  
○○したり、○○○を○○で○○したり、○○○してたりなんて事に……!？」  
「わー、知らない単語がポンポン出て来るう……流石伊井野ちゃん。エッチな事に  
貪欲系女子って言われてるだけあるね！」

「」

「あれ？ 伊井野ちゃん？」  
「」

本日の石上……

「つい先程、会長とかぐや様が廊下で愛を囁き合っている所に遭遇しまして……」  
「ナマ先輩……妄想と現実の境目無くしちゃダメっすよ。」

「石上編集！ お、御二人は普段から生徒会でもその様な秘め事をなさっているの  
!？」  
「」

「秘め事って言い方やめてくれませんか？」

（今日もキマってるなあ……）  
ナマモノに捕まっていた。

## 伊井野ミコは気付かない

感想ありがとうございます(。ω。)

---

〈ファミレス〉

「終わった……」

そんな事を口から零しながら……伊井野ミコは卓に突っ伏していた。

「伊井野ちゃん、大丈夫？ 何が終わったの？」

「私の初恋が、かな……」

「何があったの!？」

「実は……」

……

その日は偶々、生徒会室には私1人だった。今日は風紀委員の仕事も無く、クラスメイトで同じ生徒会である石上は担任の先生から雑用を任された為、私だけ一

足早く生徒会室に来る事となった。生徒会室に入ると、いつもなら既に居る筈の先輩達の姿が見当たらない……数瞬後、そういえば2年生は学年集会だという事に思い至った。暫く1人なら勉強でもしていよう……そう思い立った私は、勉強道具を広げ、イヤホンを耳に付け、勉強用に設定したBGMを流しながらノートに解答を書き綴る。

雨の日を連想する環境音BGMから始まり、大好きなラクダの生命力全開の鳴き声BGM……そして、人気声優によるヘイケメンが励ますCD！勉強のモチベーションが上がリ切った所で、只管イケメンに励まされ褒められる事で癒され、ストレス無く勉強が出来る私の完璧な勉強法……まさか、それが仇になるとはこの時の私は露程も思っていなかった。

「こんちゃー……」カチャッ

「あ、石上！」カチャッ

私は石上が入って来たのを見ると、イヤホンを外し立ち上がった。

「ああ可愛い、君は本当にキュートだ……」

「皆君にメロメロだよ……」

「…………え？」

（……アレ？ イヤホンを外してるのに、どうしてまだ癒し声が聞こえるの？）

まさか……私は瞬時に浮かんだ考えを否定したい一心で、手元のスマホに視線を移すと……イヤホンジャックがちゃんと挿さっていないスマホが目についた。声優の励ましボイスはイヤホンのコードを通る事無く、励ましのセリフを生徒会室に響かせていた……

「おおう……」

（完全に忘れてた……コレ今日だったのか。久々に聴いたけど、やっぱり強烈だな……）

「」

…………

「っていう事があってね……」*グズ*

「それで……その後はどうしたの？」

「覚えてないの……どうせ挽回や誤魔化しとかは出来なかっただろうし、もう手遅れ……」

「い、伊井野ちゃん！ 元氣出して！ 大丈夫、傷は浅いよ！」  
致命傷である。

「そもそも……石上が居るのに励ましボイスで癒されるなんて、浮気同然の不貞行為……」

「いや、そこまでじゃないと思うけど……」

そもそも付き合っていないので、浮気ではない。

「石上も……私みたいな女子に好かれてもきつと迷惑な筈……」

「伊井野ちゃん、落ち込み過ぎだってばー。まだわかんないよ？」

「だって……あんなの聴いてたなんて、絶対イタくてヤバイ女って思われた……」  
「んー、そんなにヤバイの？ その励ましボイスって……私は聴いた事ないんだけど。」

「……聴く？」

半端ヤケになっていた私は、大友さんにイヤホンを差し出した。

「うん、聴く聴くー。」スチャッ

大友さんがイヤホンを装着したのを確認すると、私はスマホ画面をタップする……

タップする前にイヤホンジャックがしっかりと挿まっているかを確認してから……この慎重さがどうしてあの時発揮されなかったのかという後悔に苛まれながら、私は再生ボタンをタップした。

「……あ、コレはダメかも。」

「」

### 〈翌日〉

次の日……昨日の生徒会でやらかした伊井野とすれ違った。俯いたまま挨拶だけを済ませた伊井野は、黙ったまま横を通過する。どうやら、落ち込んでいるみたいだ。前回と比較すれば、バレたのが僕だけなんだから最小のキズで済んでいるんだけど、伊井野からすればバレた事自体が問題なのだろう……いや、まあ気持ちはわかるけどな。僕だって前回、教室でラノベ読んでたトコを小野寺に見つかって滅茶苦茶気まずい思いを……あ、ヤバイ、思い出したらまた……と、とにかく、このま

まじやアレだし、ちゃんとフォローしとかないと！

〈生徒会室〉

放課後の生徒会室……会長と藤原先輩は書類の提出をしに職員室に、四宮先輩は弓道部に行っており、またしても生徒会室には僕と伊井野だけだった。事情を知らない先輩達が居ない内に、伊井野のフォローを済ませてしまおう……さっきから伊井野がチラチラと此方を盗み見ているのが視界に入ってきているし……

「伊井野、昨日の事だけどさ……」

「幻滅したよね……いつも風紀が、校則がって言ってた私が……あんなの聴いてたなんて……」

「いや、そんな……大袈裟だろ。」

（そりゃ前は恐怖を感じたけど……）

「でも……」

「こ、高校生にもなれば、そこまで変じゃないと思う……ぞ？」

「ほ、ホント……？ 私、おかしくない？ 石上も、ああいうの聴いたりしてるの？」

「そ、それは……」



（いや流石の僕も、例え死ぬ寸前になったとしても、あーいうCDには縋らないと思うけど……）

「や、やっぱり、私がおかしいんだ……」ぐぐぐ

「よ、よーしよーし！ 伊井野はおかしくないぞー？ 普通だぞー？」

もう勢いで誤魔化すしかないと思い、僕は伊井野の頭をワシヤワシヤと撫でながら宥めまくる。

「ふぁ……ほ、ホントに普通？」

「普通、普通！ 僕の知り合いの中には、実在する同級生のカップリング妄想をノートに書き綴る人とかも居るし！」

「え、やば……」ぎぎ

「……」

（ナマ先輩、伊井野に引かれるレベルなのか……）

「そっか、私……おかしくないんだ……」

（よし、あと一押しだ。何か……）

「……あ！ 声優っぽい感じで褒めたり慰めたりしようか？」

「……次それ言ったら声出して泣くわよ、うえええんって。」

「僕が悪かったから、それは勘弁してくれ。」

〈1年教室前廊下〉

生徒会の仕事も終わり、私は忘れ物を取りに教室へと向かっていた。良かった……と歩きながら私は胸を撫で下ろす。石上といつも通りに話せるようになったし、私の趣味も……変じゃない、普通だって受け入れてくれたし、ワシャワシャって撫でてくれたし……えへへ。もしかしたら、石上も私の事が好きだったりしないかな？ だったらいいなあ……優しくて、困ってたら助けてくれて、私の趣味も受け入れてくれる……そんな人は今後現れないかもしれないし、現れたとしても……きつと、石上を選ぶと思う。私はさっきまで悩んでいたのが嘘の様に、弾む様な足取りで廊下を歩く。放課後の今頃の時間帯は、他の生徒も殆ど見えない為、廊下には私が歩いているだけだ……教室のドアへと差し掛かると、女子2人の話し声に足を止め

る。なんとなく聞き覚えのある声が気になった私は、ソッと教室の中を窺った。教室には机を隔てて向かい合う、こばちゃんと麗ちゃんが居た。

「こ……」

こばちゃん、麗ちゃん、何してるの？ そう話し掛け様とした私は、麗ちゃんの発言に口を噤んだ。

「早くしないと、伊井野に先越されるよ？ 石上と同じ生徒会なんだし。」

……私に先を越される？ それに、石上……？ なんの話だろう……麗ちゃんのその言葉に、こばちゃんがどう返すのか気になった私は、黙って耳を傾けた。

「うーん、でも告白とか急いでするモノじゃないね。それに……」

え、こばちゃんが告白？ 石上に……告白？ あまりの衝撃に、私の頭の中は真っ白になった。

## 伊井野ミコは離れたい

盛り上がっちゃったんならしゃーない。

アレから……どうやって帰ったのか覚えていない。気付くと私は、自宅の玄関に佇んでいた。

「はあ……」

（こぼちゃんが石上の事が好きだったなんて、知らなかった……）

……本当に？

思考に反する言葉が、心の奥から聞こえて来た。私は誤魔化す様にスカートの裾を握った……違う、私は気付いていた。こぼちゃんが石上に、友達以上の感情を抱いていた事を知っていた。知っていて……知らない振りをした。その事実から目を背けて……知らない、気付いていない、わかっていないと、自分を騙し続けて来た。「バカみたい……」

知らない振りをした所で、無かった事になる訳でもないのに……こばちゃんが石上の事を好きなのは、直ぐに気付いた。だって私も、中等部の頃から……石上の事が好きだったから。あの時、石上が助けてくれてから……私は無意識のうちに石上の姿を探し、目で追っていた。私とこばちゃんは、一緒に居る事が殆どだ。だから、私と同じ目で石上の事を見ているこばちゃんを見て……ああ、やっぱりそうなんだと納得すると同時に……その事実から目を背けて蓋をした。

……その事実と向き合う強さを、私は持ち合わせていなかったから。

「石上は、誰か好きな人いるのかな？ もし……」

もし、石上がこばちゃんの事を好きだったら？

「……」

そこまで考えると、私の中でぐちゃぐちゃとした……言い表せない程の負の感情が、嵐の様に暴れ出した。

石上……好き。

大仏……僕もだよ。

「……！」

友達なのに、親友なのにつ……こばちゃんと石上が幸せになるのは良い事なのに、その光景を思い浮かべるだけで……嫌だ、やめてと醜い感情が胸を掻き乱す。

「私、全然良い子じゃない……」

……最近、また伊井野の様子がおかしくなった。どういう事だろう？ 伊井野の癒しボイスやらかし事件については、ちゃんとフォロー出来た筈だし……いや、多分その事が理由じゃない。何故なら……

「ミコちゃん、風紀委員の見回り時間だから行こ？」

「え、あ……う、うん。」  
「んん」

「……ミコちゃん？」

「伊井野ー、どしたん？」

「な、なんでもない！」

「……うん？」

どういう訳か、大仏と小野寺に対しても……よそよそしくなっているからだ。僕に対してだけなら、この前のやらかしが尾を引いてると判断出来るんだけど……

「……伊井野、何かあったのか？」

生徒会室に向かう道すがら、俯きながら隣を歩く伊井野に問い掛ける。

「……何の事？」

「……誤魔化すなよ。最近、なんかおかしいぞ？ 大仏や小野寺に対しても変によそよしいし、何かあったなら……」

「なんでもない！ 大体石上には関係ないんだから、余計な事に首突っ込まないでよ!!」

何かに怯えた様な声色で、伊井野は叫んだ。

……

そこまで口にして……しまったと思った。コレじゃ只の八つ当たりだ……恐る恐る、立ち止まった石上を見上げると……

「……わかったよ。悪かったな、余計な事に首突っ込んだりして。」

「……」

（私、最低だ。石上は心配して聞いてくれただけなのに……八つ当たりみたいな事言ってる……）

「まあでも、困った事があったら言えよな。」

「……うん。」

（どうして……そんなに優しい事を言ってくれるの？ 心配してくれた石上に、酷い事言っちゃったのに……でも石上とは、あんまり仲良くしない方がいいから……だから、コレでいいんだ……）

だってこぼちゃんは……石上の事が好きなんだから、私が仲良くしちゃう……ダメ。そうやって、自分を無理矢理納得させた私は……俯いたまま、生徒会室へと歩いて行く。

……

「……」

（なんか……今日の伊井野は機嫌が悪いというか、無理してる様に見えるな、なんだろう？……あ！もしかして生○か？ 情緒不安定になるって聞くし、キツイ人は本当にキツイらしいからな……じゃあ、しょうがないか。）



口に出さなかった事は褒めるべきだが、察した内容が最悪だった。

「はぁ……」

（石上、黙っちゃったな……あんな言い方して、傷付けちゃったかも……ホント最低……）

「……」

（そうとわかれれば、今日はあまり無理はさせられないな。適当に伊井野の分の仕事も預かるか。）

石上は全然傷付いていなかった。

〈生徒会室〉

「……今日はコレで失礼します。」

ペコッと頭を下げて、生徒会室を出て行く伊井野を見送る。バタンツと扉が閉まるのを確認すると、四宮先輩が此方に向き直る。

「近頃、伊井野さんの様子が少し、おかしく感じるのですが……石上君、何か知りませんか？」

「いえ、僕も理由は分からずじまいで……同じクラスの友達相手にも、妙によそよそしいというか……」

「……石上くんが何かやったんじゃないんですか？」  
「フム」

「……してませんよ、大体何かって何ですか？」

「そうですね……例えば、罰ゲームさせたり、オヤツあげ過ぎちゃったり、その所為で体重が増えちゃったりしたんですよ！　なんて事してくれたんですか!？」

「藤原……滅茶苦茶私怨入ってないか？」

（それ、お前の事じゃん。）

「僕に言われても……っていうか藤原先輩、太ったんですか？」

「そういうのは思っても、口に出しちゃダメなヤツでしょー!」

「まあ、頑張っただイエットに励んで下さい。呉々も激辛ラーメンを食べる傍ら、アイスクリームにも手を出すなんて真似はしない方が良いでしょう。」

「……はい？」

「……？」

（石上って偶に、滅茶苦茶具体的な例出して来るよな……）

「……」

（どうせ痩せるなら、胸から痩せて欲しいモノね……）

---

〈生徒会室〉

「今日から生徒会も暫く試験休みを取る。各自、しっかりと勉強に励んでくれ。」

11月も残り数日までに迫ったある日の生徒会……白銀御行の発言により、生徒会は暫しの試験休みが設けられる事となった。

「わかりました。」

「まー、勉強はしなきゃですからねー。」

「了解っす。」

「ふう……」

(良かった……最近、全然勉強に集中出来てなかったから……)

石上に対する恋心の自覚と、それに伴う慣れないアプローチ、親友大仏こぼちの石上に対する恋慕の発覚。そして……そんな精神的負荷が掛かった状況での、2学期期末テストに向けた睡眠時間を削る勉強……その全てが、伊井野ミコの体力と心を少しずつ消耗させていく。そして……

「あ……これ……？」<sup>アッ</sup>

伊井野ミコは、他の女子と比較しても小柄である。当然、その小さな身体に存在する体力の限界値は常人より遥かに低い。更に最近では、親友と想い人が一緒だったという事実が発覚した事から、伊井野は石上に必要以上に近づくかのように努めていた。つまり……親友と想い人の板挟み状態から抜け出せない伊井野は、身体の疲労以上に精神的疲労が蓄積した状態だったのである。

「っ!? 伊井野!!」<sup>ギョ</sup>

床に倒れそうになった伊井野を慌てて支える。伊井野はグッタリしたまま、僕の腕に身体を預けている……荒い息、紅くなった頬、額に浮かぶ汗、まさか……

「風邪……?」

「風邪？ 石上君、伊井野さんは風邪をひいているの？」

「多分、絶対とは言えないですけど……」

「石上、とりあえず伊井野はソファに寝かせてやれ。藤原はタクシーを！」

「……うっす。」

「は、はい！」

……

伊井野をソファに寝かせ、タクシーが来るのを待つ……何に悩んでるのか知らないけど、体調を崩す程疲労が溜まっていたのか……

「ぢゃんぢゃん……」

苦しそうな呼吸を繰り返す伊井野を見ながら思う……伊井野、お前は何に悩んでるんだよ？ 何か困ってる事があるんじゃないのかよ……

「……タクシーが到着したようだな。石上、伊井野を自宅まで送ってやれ。」

「はい。伊井野、立てるか？」

「ぢゃん……大、丈っ……」

「……伊井野、治ったら好きなだけ罵倒してくれ。」

それだけ言うと、僕は伊井野の足と背中を支えながら持ち上げた。

「っし、じゃあ失礼します。」

僕は会長達の返事も聞かずに、生徒会室を出て行く。出来るだけ早く、だけど伊井野に負担が掛からない様に気を付けながら、タクシーへと乗り込んだ。

## 石上優は傍に居たい

## 〈伊井野邸〉

タクシーで伊井野を家まで送る……流石にこのまま伊井野を1人にするのも心配なので、タクシーから降りるとまた伊井野を抱えて玄関に向かう。さっきも思ってたけど、軽過ぎだろ……普段あんなだけ食ってるのに、何処に消えてるんだか……

「伊井野、悪い。鍵を貸してくれ。」

「う……ん。」

伊井野から鍵を受け取り、家の中へと入る。玄関で伊井野の靴を脱がせて鞆を置き、自室の場所を教えてもらう。家に着いて安心したからか、荒れていた呼吸も先程よりはマシになっている。

「伊井野、着いたぞ。」

〈M i k o〉と書かれたプレートを確認してドアを開く。伊井野の部屋は、良くも悪くも伊井野らしいと言えるモノだった。法律関係の専門書や参考書などが所狭しと並べられている……でも、自室ならある筈のモノが見当たらなかった。

「……………」

……………どうしてベッドが無いんだ？ 伊井野は意外にも、敷布団派だったのか？ 僕は伊井野を抱えたまま訊ねた。

「伊井野、布団は何処に仕舞ってるんだ？ 敷くから教えてくれ。」

「……………」

「……………」

……………無い？ そんな訳……………だが部屋を見渡しても、四方を囲む本棚とデカイ熊のぬいぐるみしか見当たらない。

「じゃあ、伊井野は何処で寝てるんだよ？」

「……………」

僕の問いに、伊井野はヨロヨロとぬいぐるみの方を指差した。

「マジかお前……………却下だそんなもん。」

絶対疲れ取れないだろ……………仕方ない、リビングにあったソファに寝かせるか。僕は伊井野を抱えたまま、部屋を出て……………

「石上待ってえ、あのタオルケットもお……………」



行こうとする寸前、伊井野に甘える様な声で止められた……っていうか、タオルケット？

「あんな薄いタオルケットじゃ寒いだろ？」

「そんな事ないもん……それにコレがないと、良く眠れないの……」

「へー……」

「子供の時からずっと一緒にね……修学旅行にも連れて行くんだあ……」

生気のない瞳で此方を見上げながら、ヤベー事を口走る伊井野と目が合った……

あ、コレはマズイな。早く寝かせてやらないと。

……

「う……ん……」

リビングのソファに伊井野を寝かせると、タオルケットの上から毛布を被せる。はあ、やっと少し落ち着いた。あ、伊井野が本格的に寝る前に聞いておかない……

「伊井野、親御さんに連絡とか……」

「……どっちも、仕事だから。」

「そうか……」

（まいったな……流石に、この状態の伊井野を残して帰るのは……）

「……私は、大丈夫だから。明日になったら……お手伝いさんも、来てくれるし……」

「でも……」

「ここまで送ってくれただけで、充分だから。」

「……」

（全く、コイツは……）

僕を心配させない為に、弱々しく笑う伊井野の頭をクシャッとひと撫ですると……

僕は伊井野を残し家を出た。

……アレ？ 此処……何処だろう？ そもそも私、さっきまで何してたっけ……

？ まるで記憶に霧が掛かった様な違和感を感じた私は、周囲を見渡しながら歩いて行く……

「ニコ。」

「ミコちゃん。」

暫く歩いていると、背後から私を呼ぶ声が聞こえた……この声はっ！私は顔が綻ぶのを隠す事も無く振り向いた。

パパ！ママ！

先程まで思考を埋めていた疑問は、久々に会う両親の姿に吹き飛んだ。パパはいつも仕事に忙しくて、同じ家に住んでいるのに会う事は殆ど無い。ママも紛争地域でワクチンを配る仕事をしてるから、会えるのは一年に数回程度……私はパパとママの下へと駆け寄った。

……え、あれ？

いつまで経っても、パパとママとの距離は縮まらなかった……なんで？パパ、ママ……どうして近付けないの？

「ミコはしっかりしてるから、1人でも大丈夫だろう？」

パパ……なんで、そんな事言うの……？

「ミコちゃんは、1人でも大丈夫よね？」

え、ママ……なんで？そんな事ない……寂しい、寂しいよ……

パパとママは私から目を背けると、何処かへ行ってしまった……

待ってよ……パパ、ママ……

立ち止まり、項垂れる私に今度は前方から声が掛けられた。

「伊井野。」

「伊井野ちゃん。」

麗ちゃん、大友さん！

顔を上げると、中等部からの友達である麗ちゃんと大友さんが視界に映った。2

人の姿を見て、ホッと安心したのも束の間……

「じゃあね。」

「バイバイ。」

それだけ言うと2人は、そのまま振り返る事もなく……私から離れて行く。

ま、待ってよ2人共！お願い、置いて行かないで！

2人を追い掛けて走っても、2人との距離は縮まらない……私は力無くその場に座り込んだ。

なんで……皆、私を置いて行くの？

「ミコちゃん。」

こばちゃん……皆が私を置いて行って……

「ごめんね……私も、もうミコちゃんとは一緒に居られないの。」

え……な、なんで!? こばちゃん!

「じゃあね、ミコちゃん……」

こばちゃん! 待ってよ、お願い!! やだ……置いて行かないで!

……

パパもママも、麗ちゃんも大友さんも……こばちゃんも、皆が私を置いて行ってしまった……

どうして……?

その疑問に答えてくれる人は、もう……

「伊井野。」

その声に、私は振り返った。

伊井野の家を出ると、僕は近くの薬局へと歩みを進めた。とりあえず、栄養ドリンクとスポーツドリンク、ゼリーやプリンといった風邪をひいた時の定番アイテムを買い込むと急いで薬局を出る。伊井野 1 人だったら大変だろうし、絶対無理をしそうだ。期末テストも近いから、もし風邪を拗らせた所為で一位陥落……なんて事になったらどれだけ落ち込むかわからない。僕は両手に持った袋の重さに苦戦しつつ、伊井野の家へと向かった。

### 〈伊井野邸〉

伊井野の家へと戻ると、冷蔵庫に買って来た物を詰め込んだ。とりあえず……今日の分と明日の朝食分くらいはあるだろう。僕は冷蔵庫の扉を開けると、伊井野の様子を見る為にリビングへと足を向けた。

「う……ん……ん……」

眠っている伊井野は、悪夢でも見ているのか……魘され譫言を洩らしている。息を荒げ眉間に皺を寄せ、苦しそうにしている伊井野の姿に思わず歯噛みする。はあ、伊井野のこういう顔は見たくないな。出来る事なら……泣き顔や苦しげな顔じゃな

くて、笑顔で居てほしいけど……

「はあ……ま……置いて……かな……で……！」

苦しげに呟いたその言葉と共に、一粒の雫が伊井野の頬を伝って行く……

「大丈夫、ちゃんと側に居るから。だから、泣かないでくれ……お前に泣かれると困るんだ。」

夢に魘され、不安を抱く子供の様な伊井野の容体が少しでもマシになる様に祈りながら、伊井野の頭を撫でていると……そんな言葉が口から零れていた。

「い……し、がみ……一緒に……」

「ああ、ずっと一緒に居るよ。だから……」

自然と口から出た言葉に、驚く事はなかった。ああ、そうか……僕はいつの間にか、許容量一杯まで頑張ってしまう伊井野が、小さな身体には大き過ぎる正義感を持った伊井野が……むっつりで、大食いで、誰よりも強く在ろうとする……そして、誰よりも弱い伊井野の事が……好きになっていったんだ。

「早く元気になって……笑った顔を見せてくれ。伊井野に、どうしても伝えたい事があるんだ。」

石上、皆が私を置いて行っちゃうの……

「……」

黙って私を見つめる石上に、先程までの事を思い出し慌てて叫ぶ。  
待って、置いてかないで！

「大丈夫、ちゃんと側に居るから。だから、泣かないでくれ……お前に泣かれると困るんだ。」

ほ、ホント？ 石上は私を置いて行かない？ 石上は……ずっと一緒に居てくれる？

「ああ、ずっと一緒に居るよ。だから……」

その言葉の先を聞くよりも早く、私の意識は深く沈んで行った。



「……ん？」

なんだろう？ 何か……夢を見ていた様な気がする。私はソファから起き上がり、周囲を見渡した。リビングは暗く、窓の外も真っ暗だ……とりあえず、今の時間が夜という事がわかった。私は起き上がって、リビングの照明ボタンを押そうとした時……

「んー……」

「ッ!?」どッ

ソファの後ろから声が聞こえて来た。私は不安を振り払う様に、自分の体を抱き締めながら……ゆっくりとソファの後ろを覗き込んだ。

「ん……すう……」

い、石上!? なんで!?……あ、そういえば石上が連れて帰ってくれたんだっけ……？ どうしてまだ居るかなんて、言われなくてもわかる。

「心配して……残ってくれたんだ。」

座り込んだまま眠り続ける石上の姿に、胸の中が暖かくなる。

「……」

眠り続ける石上に、目が釘付けになる。私は……ハグをされるのが好きだ。毎日クマのぬいぐるみを使って眠るのも、お姫様だっこされてるみたいで凄く落ち着くし、ぬいぐるみに体を預けて座ると……後ろからハグをされている様な感覚を味わえるから何度もやってしまう。そして、奇しくも今の石上の体勢は……クマのぬいぐるみに少し似ていた。

「ち、ちよつとだけ……」

眠ったままの石上を起こさない様に気を付けながら……私は石上に背中を向けて座り込み、ゆっくりと体を預けた。

「~~~~っ!!?」<sup>キ</sup>フ

お、思った以上に凄い……石上の体温とか息遣いを直に感じて、私は冷静さを失ってしまった……ううん、もしかしたら始めから冷静じゃなかったのかもしれない。普段の私なら、絶対にこんな事はしないのだから……

「ん、しょっ……」

私は体を預けたまま、石上の腕を自分の体の前に回してハグの体勢を作った。

「ふぁ……」

今まで感じた事のない多幸感に包まれ、私は有頂天になっていた。先程自分でちよっとだけと、言っていたにも関わらず……

「えへへ、次は……」

「……い、伊井野？」

耳元で囁かれたその言葉に、私は声無き悲鳴を上げた。

## 風邪の功名

……なんだこの状況!? 確か伊井野を家に送り届けて、薬局で買い出しを済ませた後、魘される伊井野を看病していた……よな? そうだ……伊井野の体調もマシになって、呼吸も落ち着き始めたから、ソファに凭れて一息ついている内にウトウトして……それだけの筈だ。じゃあ、なんで……

「ふあ……」

僕は伊井野を抱き締めてるんだ!? 足の間にスッポリと収まっている伊井野は、僕の腕をギュツと掴んで離さない……時折モゾモゾと小刻みに動いては、女子特有の甘い匂いに僕の鼻孔が刺激される。

「えへへ、次は……」

「……」

次!? 次って何だよ!? や、ヤバイッ……流石にこれ以上はヤバイ! 僕は少し……ほんの少しの名残惜しさを感じながら、伊井野へと話し掛けた。

「……い、伊井野?」

その瞬間……伊井野は全身で驚きを表現する様に、ビクンツと体を跳ねさせた。

「……い、伊井野？」

耳元で囁かれたその言葉に、一瞬で頭の中が真っ白になった。でも、直ぐに我に返り状況確認に努める……風邪で体調を崩した私を心配して家まで送ってくれ、看病してくれたであろう石上が眠っている隙に、自分の欲求を満たす……は、はわあ  
あああっ!? こ、これは……夜這いと言われても仕方がない行為なんじゃっ!?

……

「へえ、伊井野ってそういう……」

「ち、違うの!? こ、コレは……」

「違う? 何が? 人の寝込みを襲っておいて、随分な言い訳だな?」

「あううつ……違うのお……」

「風紀委員なのに、とんだ欲求不満女だな。」

……

ち、痴女と思われる!?

「~~~~っ!?!? あ、あうっ……い、石上……コレは、その……違うの!!」

私は誤解を解こうと、立ち上がって振り向いた瞬間……くらりと視界が僅かに揺れた。

「あ、あれ……?」フツ

「っ!?! 伊井野!」カッ

倒れそうになった所を石上に支えられる……そうだった。私、風邪ひいてたんだった。フラついた私は……カクンと膝をつき、そのまま石上に体を支えられる。

「はあ、全く……まだ治りきってないんだから、無茶するなよ。」

「う、ごめん……」

「ほら、まだ寝てろって。」

「あ、待って……その前に着替えたい。」

「ああ、制服のままだもんな……でも、1人で大丈夫か?」

「……うん、さっきよりはマシになってるから大丈夫。」

「キツかったら言えよ？ また抱えて行つてやるから。」

「うん……ん？」

（あれ？ そういえば私……石上にお姫様抱っこされたんじゃない……）  
その事実を考えが及んだ途端……カァツと顔が熱くなる。

「はううっ……」

「伊井野？ 大丈夫か？」

「う、うん、大丈夫……大丈夫。」

「……？」

リビングに戻って来た伊井野は……所謂、モコモコパジャマと呼ばれる格好をしていた。なんとなく伊井野に対して抱いていたイメージ通りの姿で、良く似合っている。つい、伊井野のパジャマ姿をジッと見つめていると……

「あ、あんまり見ないでよっ……」

伊井野はパジャマ姿を見られるのが恥ずかしいのか、そう言うのと全身を隠す様に、毛布にくるまってソファに横になった。

「悪かったよ。それより伊井野、食欲はあるか？ 色々買って来てるけど……」

「えっと……」 ぎゅ

「……」

「~~~~っ!？」

キュウ〜っという可愛らしい音が伊井野から聞こえて来た……どうやら、食欲はあるらしい。僕は立ち上がり、冷蔵庫からゼリーとプリンを取り出してリビングへと戻る。

「伊井野、ゼリーとプリンどっちが良い？」

顔の半分を毛布で隠し、此方をジトっと見つめる伊井野へ問い掛ける。伊井野の名誉の為にも、腹の音は聞かなかった事にしておこう。

「あ、そのプリン……」

伊井野の目が、片手に持ったプリンへと釘付けになる。普通サイズのゼリーと違い、プリンはBIGサイズのデカプリンだ。伊井野ならこっちの方が喜ぶかな、と



思って買って来た物だ。

「プリン、プリンが良い！」

「ああ、なんだったら食べさせてやろうか？」

少しだけ元気になった伊井野を揶揄うつもりで、そんな事を口走った。僕としては、バカ！とか、いらぬもん！なんて答えが返って来るもんだと思ってただけど……

「……良いの？」

「ンンッ!？」

伊井野ミコという少女は本来……甘えん坊に分類されるべき人間である。しかし、幼少の頃から両親という最も身近な人間に甘える事が出来ない生活が続き……余計な心配を掛けてはいけない、しっかりしなくてはいけないという強迫観念に囚われ続けた少女は、いつしか……人を頼り、他人に甘える事を避ける様になった。それは……親友である大仏こぼちの前でさえ、泣く事を忌避する程である。そんな伊井野ミコという少女が……風邪により体力的、精神的に弱っているとはいえ、異性である石上優にその様な要求をした事はある種……成長とも、事件とも言えるモ

ノである。それはともかく……

「お、おう……」

え!? 聞き間違いじゃないよな!? 僕の食べさせてやろうかって言葉に飛んで来たのは、予想していたモノと180度違う言葉だった。

「石上……?」

固まった僕の様子を窺う様に、伊井野は毛布から半分程顔を出し呼び掛ける。

「いや、大丈夫……じ、じゃあ、少し体起こせるか?」

「うん。」

「ほら……あーんだ。」

（いやいや、落ち着け。前は……伊井野が腕折った時とか、普通に似た様な事してただろ? 今更コレくらいで……）

「あ、あーん……」

目を瞑り、プリンを待つ伊井野の口へと……プリンを乗せたスプーンを運ぶ。

「んむっ……」

プリンをモグっとスプーンから抜き取る伊井野の姿は、ハムスターの様な小動物

を彷彿とさせる。もきゅもきゅと口を動かし続ける伊井野を見ると……何かこう、  
クるものがあるな。アレ？ 前は何とも思わなかったのに……

石上の性癖が更新された。

「……石上、どうしたの？」

「い、いや……なんでもないよ。ほら、次だ……」

「うん、あー……」

再度、口を開ける伊井野へとプリンを運ぶ。少し目算を誤ってしまい、伊井野の  
口の端からプリンが零れ落ちる。

「っと、悪い。」

直ぐに手元のティッシュでプリンを拭う。その際、伊井野の頬に手が触れた……

「……まだ少し熱いな。」

伊井野の頬にピタッと掌を合わせて、熱を計る。腹一杯食わせて、水分補給も忘  
れずさせて、後は……

「ん……石上の手、冷たくて気持ち良い……」

これからの事を考えていると、伊井野の言葉に思考が中断される……伊井野は頬

に触れた僕の手を両手で押さえる様にして、スリスリと頬を擦り付けている。

「……………!?」

「ご、ごめん！もう大丈夫だから……」

……伊井野はチョロい。そのチョロさは、道端でナンパされたら秒で持って行かれそうになる程だ。その度に僕や大仏、小野寺が目や顔を光らせて連れて行かれるのを阻止する……という事を繰り返して来た。つまり、何が言いたいかというと……油断していると、伊井野を誰かに取られるかもしれない、という事だ。だから……

「……………」

「……………石上？」

頬に手を当てたまま黙り込む僕に、伊井野は首を傾げながら不安気に訊ねる……

「……………伊井野。」

だから、様子見やもつと仲良くなってから……という安全策を取るよりも、僕を……石上優という人間を男として意識させる事が重要だと思った。

「……………離したくないって言ったら、どうする？」

「えっ……………あ……………」

僕の言葉に、伊井野は顔を真っ赤にした直後……哀しい様な、困った様な表情を浮かべた。

……

「……離したくないって言ったら、どうする？」

その言葉に、顔が熱くなるのを感じた。勘違いじゃない、石上なら……きっと私を受け入れてくれる。私、石上の事……そう口にしようとした瞬間、頭の中に浮かんだのは……小等部の頃から、ずっと一緒に居てくれた親友の姿だった……ダメだ、少なくともこぼちゃんと、ちゃんと話をしてからじゃないと。こんな抜け駆けみたいな事、したくない。

私は……石上の手を頬から引き離すと、誤魔化す為の言葉を口にする。

「石上、プリンおかわり！」

……

「……じゃあ、しっかり休めよ？」

玄関で靴を履きながら、石上はそう言った。

「うん、今日はありがと。それと……ごめん。」

「気にすんな、僕が好きでやった事だし。」

「うん、風邪の事もだけど……その、誤魔化しちゃったから……」

「……」

「そ、その……嫌だった訳じゃないの！ただ、その……」

「いや……僕の方こそ、ごめんな。伊井野が体調崩してる時に、あんな事……」

「ううん……ね、石上。全部終わったら……私の話、聞いてくれる？」

「……ああ、ちゃんと聞くよ。」

「……ん。」

……私は石上へと近付くと、目の前へと小指を伸ばした。

「ああ、約束だ。」

石上の小指と私の小指が数秒……絡み合った形で上下に揺れる。お互いに無言で絡ませていた指を離すと……

「じゃあな、おやすみ。」

石上にくしゃっと頭を撫でられた。返事をする間も無く、石上は玄関のドアを開けて出て行った。

「指切り……約束……えへへ。」

昔から……何かある度に、パパやママに指切りの約束を強請って、その度に約束が守られなかった事が哀しくて、泣いたりして……でも、今回はきつと大丈夫。

「ん……」

先程まで石上の小指と絡ませていた私の小指は……まるで、小さな心臓が出来たみたいに……トクントクンと脈打っていた。

「~~~~っ！！！」  
ダダダダダダダッ

伊井野の家を出た僕は、歩いて駅へと向かう。途中からは徐々に歩くスピードを上げ、現在は全力疾走の真っ最中だ。

（耐えた、なんとか耐えたぞ！ 色々ヤバイ場面はあったけど、諸々含めて紳士的な対応は出来てたし、動揺してるのも気付かなかった筈！）

自身の恋心を自覚した直後、座り込んで眠っている所に寄り添っていた少女……

更にはプリンを食べさせたり、自身の手に子犬の様に頬を擦り寄せる行為など……  
思春期真っ只中の男子高校生には我慢を強いられるイベントの連続であった。更に  
は……

……離したくないって言ったら、どうする？

「ぐうっ……！」

（あー!? 僕はなんてキザな事をおおっ!?!? 伊井野引いてないよな? あの  
反応はそういうんじゃないよな!?)

結局……石上は走り続け、駅に着く頃にはバテバテになっていた。

本日の勝敗、石上の敗北

冷静になって思い出すと、どちゃくそキザな事を言っていた事に気付いた為。



## ミコの御心

感想ありがとうございます(。ω。)

---

次の日……多少の体の怠さと微熱が残っていた為、私は学校を休む事となった。食欲はあったから、お手伝いさんが作ってくれた料理を完食し、枕元に石上が買ってきてくれていたスポーツドリンクを備えて横になる。暫くボーっとニュース番組を眺めていると、卓上に置いたスマホがメッセージの存在を伝えて来た……私は起き上がって、スマホ画面に映し出されたメッセージの送り主を確認した。

「こばちゃん……」

へミコちゃん、大丈夫？ 今日、学校終わったらお見舞い行くね。▽

こばちゃんからのメッセージに了承の返事を送ると、ぼふんっとソファに横になる……私は今日、こばちゃんと話をする。話の内容は……石上の事について。

「ちよっとだけ……怖いけど、でも……」

……ああ、ちゃんと聞くよ。

そう言っ、約束をしてくれた石上の優し気な瞳と……絡ませた小指の暖かさを  
思出す。

「……っ！」

私はギュッと手を握り、覚悟を決めて……こばちゃんが来るのを待った。

「え、石上の事が好き？ 知ってたよ？」

「えええっ！！？」ぎぎ

夕方……訪ねて来たこばちゃんを自室に招き入れ、私は意を決して話を持ち出した。放課後の教室で、麗ちゃんと話しているのを聞いてしまった事。その時にこばちゃんが石上の事が好きで、告白しようとしているのを知った事……そして、私も石上の事が好きな事。そこまで言う、こばちゃんは眼鏡の位置を直しながら、呆れ気味にそう言った。

「で、でもっ……私、そんな素振りしてなかったよね!？」

「ミコちゃんが石上を好きになったのって、中等部の頃だよね？ まあ自覚したのは、高等部上がって2学期に入ってからだろうけど……」

「え、えうっ……」

（バレてたー!?)

「まあ、ミコちゃんは真面目だから勉強優先しそうだし、変な部分で鈍いところあるし、あと……むっつりスケベだし。」

「最後！ 最後だけ異議アリ!!」

「正直、いつ気付くのかなー？ とは思ってたよ？ ただ……私は奉心祭で告白するつもりだから、それまでは気付かれない方が良いのかなあ……とは思ってたけど。」

「な、なんかこぼちゃん……軽くない？」

私は想像していたモノと、ほぼ180度違う雰囲気と展開に戸惑いながらそう口にする。

「うーん、だって此処で私達があーだこーだ言い合っても……最終的に誰と付き合うか決めるのは石上でしょ？」

「うっ、それはそうだけど……」

「ミコちゃん……もしかして、私と石上を取り合う事になるとか思ってた？」

「うっ……」*ザッ*

「それが原因で私とケンカしたり？」

「ううっ……」*ザッザッ*

「仲違いするなんて……そんなしょーもない事考えてたの？ だから最近、妙によそよそしかったの？」

「くはっ……」*ニギ*

「まあ、普通はそうなるのかもしれないけど……だけど、ミコちゃんだから。」

「……私だから？」

「うん……私と同じ、石上に助けてもらった女の子だから。それに……ミコちゃんが本当の意味で、頼って甘えられる人がいるとすれば……それは石上だと思ってたから。」

「こばちゃん……」

「私は、石上の事が好きだよ……でもね、ミコちゃんの事も……大好きなの。」

「こ、こばちゃん……」*カハッ*

こばちゃんのその言葉に、視界が滲んでいく。私は唇が震えるのを堪える為、体に力を入れて耐えていると……

「でも、ミコちゃんはチョロくてザコちゃんだからねー。」

「……え？」

「中等部の頃から色んな場所でよくナンパされて、その度に私や小野寺さん、石上がお持ち帰りされるのを防いで来たけど……これからもそうなるなら、愛想尽かされちゃうよ？ だから私は、ミコちゃんが石上に愛想尽かされるのを待ってようかな？」

「そ、そんな事っ……！」

「ふふ、じゃあ油断しないでね？ もし、ミコちゃんが浮気して石上が落ち込んでたら……慰めて奪っちゃうから。よくあるよね？ 浮気されて心が弱った時に優しくされてそのまま……みたいなの？」

「そ、そんなのダメ!!」

「そう？ 私的には結構熱いシチュなんだけど。」

「こぼちゃんの趣味は知らないけど!!」

いつも通りの……こぼちゃんとの遣り取りに、自然と頬が緩む。心の何処かで、もしかしたら……今までの様な関係には戻れないんじゃないかと、不安を感じていたから……

「……ミコちゃん。」

「……うん?」

「頑張ってね。」

「……うん!」

---

### 〈生徒会室〉

「石上くん、ミコちゃんは大丈夫でしたか?」

「あー、そうっすね……少し寝て起きたら食欲もありましたし、明日からは普通に来れるんじゃないですか?」

「そうか、それは何よりだ。」

「ええ、本当に。」

「良かったー！心配してたんですよえ……石上くん、ちゃんとミコちゃんをフォローしてあげましたか？」

僕の言葉に会長達が三者三様の反応を見せる。

「まあ、伊井野を家に送り届けて……親御さんもお手伝いさんも居ないってんで、ついでに買い出しとかはしましたけど。」

「……ん？」

「……え？」

「へ……？」

「アレ？どうしました？」

「い、石上くん……その言い方だと、ミコちゃんと家で2人っきりだったみたい  
な……」

「え、そうですけど？」

「ええええっー！！？　そ、そんなっ……」

「いやだって、風邪ひいた伊井野を家に1人残して帰るとか……」

「うっ……それはそうですけど！ み、ミコちゃんが寝てる隙に変な事したりしてませんよね!？」

「……変な事？ 例えば？」

「例えば……ミコちゃんと同じベッドに入っていつの間にか寝てしまったり、ミコちゃんが寝てるのをいい事に人差し指で唇を触ったり……そういう事です！」

「」

「」

「する訳ないでしょ、そんな事……」

「……アレ？ どこかで聞いた話だな……」

「本当ですか？ ホントーに疚しい事はしてないって断言出来ますか!？」

「藤原先輩は僕をなんだと思ってるんですか？ そんな疚しい事なんて何も……」

……離れたくないって言ったら、どうする？

「……ないですよ？」  
ぎ

（くうっ……今思い出してもイタイ事言った気がする……）



「その反応……吐いて下さい！一体何をしたんですか!？」

「だから、何もしてませんって！」

ギヤイギヤイと詰め寄って来る藤原先輩を躲していると、ポケットのスマホが振動するのを感じた。スマホにはメッセージが届いており、差出人には伊井野の名前が表示されている。片手で藤原先輩をいなしながら、残った片手でスマホ画面をタップしてメッセージ内容を確認する。

「今日、会える?」

僕は伊井野からのメッセージに返事を返すと、挨拶もそこそこに生徒会室を出て行く。何故か、会長と四宮先輩は固まったままだったけど……

〈伊井野邸〉

伊井野は病み上がりの為、何処かで待ち合わせなどはせずに伊井野の家を訪ねる。インターホンを鳴らすと、モコモコパジャマに身を包んだ伊井野に迎えられる。

「あ、石上ごめんね？ 態々来てもらって……」

「気にすんな、病み上がりだろ？」

「うん、ありがとう……石上、こっち来て。」

伊井野に連れられ自室へと案内される。風邪は殆ど完治している様で、伊井野の足取りはしっかりしていた……が、何処か緊張した様子で胸に手を置いて呼吸を整えている。伊井野の話をちゃんと聞くと約束したんだ……どんな話だろうと、しっかりと受け止めよう。

「あ、あのね……そのっ……」

不安を押し殺す様に、言葉に詰まりながら辿々しく言葉を繋いでいく伊井野を見る。守る。

「わ、私っ、石上の事が……好きなの！ だ、だからっ……だから私と……！」  
ヤッ

「……………」

伊井野が縋る様に抱きついて来た。僕は伊井野の肩に手を置いて、少しだけ体を離す。

「あ……」

体が離れた事で悪い結果を連想したのか、伊井野は泣きそうな顔で瞳を揺らす。  
「伊井野……大丈夫だ、ちゃんと側にいるから。だから、泣かないでくれ……お前に泣かれると、困るんだ。」

「え……石上、それって……」

（夢で……石上が言ってくれた言葉……）

「僕も……伊井野が好きだよ。だから、ずっと隣に居て欲しい……僕がずっと守るから。」

僕は伊井野の手を取ると、片膝をつき……視線を合わせた。

石上優が数秒後……恥ずかしい行動を取った事に、然したる狙いがあった訳ではない。ただ……前回の人生と合わせても、自身の想いを告げて受け入れられた事も無ければ……想い人から想いを告げられた事もないのである。一言で言うのなら、現在の石上優は……

「……えー！」

（い、伊井野が僕のことを……好き!? ヤバい……すげえ嬉しい! あ、伊井野にだ

け告白させるなんてダメだよな。僕も……くっ!? ちょっと離れただけでそんな顔しないでくれよ!……ああもう、可愛いかな!!)

冷静にポーカーフェイスを気取ってはいるが、その内面のテンションは天井どころか、天上レベルにまで上がり切っていた!故に……

「……約束する。」

黒歴史確定のキザな行動が実現する事となる。

「あ……」

気付いてたら僕は……伊井野の左手の薬指に口付けをしていた。軽く触れるだけの……先程口にした言葉を生涯守ると誓う為の……大切な、儀式の様な意味を持った誓いの口付け……視線を上げると、顔が真っ赤になった伊井野と目が合った。

「ア…ア……」

「……あ。」

(や、やらかしたあああっ!!!?)

想い人から告白され両思いだった事が判明した石上優!つまり、今ならどんな告白をしても許される可能性大!! 石上のブレーキは度重なる摩擦に磨耗状態……

謂わば理性と羞恥のフェード現象を引き起こしていた!! 一瞬で自身のどちやくそイタイ行動を自覚し、驚愕する石上! しかし、その告白を真正面から受けた伊井野ミコには……

「ア…ア……」

(は、はわあっ!? こ、こんなお姫様を守る騎士みたいな事をしてくれるなんて! はううっ…ど、どうしよう……好きって気持ち溢れてっ……)

どストライクだった。

「い、伊井野、今のはっ……!」

(やべっ……引かれたか!?)

「石上っ……」<sup>ダッ</sup>

「っ?!」

飛びついて来た伊井野を受け止める。伊井野はグリグリと僕の胸板に額を擦り付けると、此方を涙目で見上げる。

「ずっと一緒? ホントに? ずっと一緒に居てくれるの?」

「ああ、ずっと一緒に居る。ずっと隣で伊井野を支えて、守り続けるよ……約束し

たろ？」

「……うん！」

僕と伊井野は時間が許すまで……お互いを抱き締め、寄り添い合い、離れる事はなかった。

## 石と皇女のエピローグ

感想ありがとうございます(。ω。)

伊井野に呼び出された日から……僕と伊井野は、恋人として付き合う事となった。12月に入り、期末テストまで残り数日……急遽生徒会案件が発生した為、伊井野と一緒に生徒会室へと向かう。僕的には、ある程度落ち着いてから……会長達に報告するつもりだった。藤原先輩に教えるのは少し面倒な気もしたけれど……内緒にしているバレたらギャイギャイうるさくなりそうだったし、伊井野の……藤原先輩にだけ教えないのは可哀想、という言葉により期末テストが終わったら皆に伝えるという事になっていたのだが……

〈生徒会室〉

「……ッーッー」 チヂチヂ

「……？」 チヂ

「ア……えへへ。」ガガ

伊井野が此方を見ては、目が合うとハニカミながら小さく手を振って来るもんだから……

「……」

「……」

「……」

秒でバレた。

「あー、その……石上会計と伊井野監査は……付き合っているのか？」

「……はい。あー、別に黙ってるつもりとかは無くてですね……期末テストが終わったら報告するつもりだったんですけど……」

「そうか……変に気を利かせてしまったか？」

「いえ、どうせ遅いか早いかですし……」

「おめでとう、石上君。」

「……あざっす。」

「最近の伊井野監査は、あまり元気が無い様に見えたからな……石上と恋人になっ



たというのなら安心だ。」

「ふふ、そうですね。」

「そう言ってくれるのは嬉しいっすけど……」

「ミコちゃん、ミコちゃん……石上くんとはどこまでイッたの？」

「ど、どこまでって何の話ですか……？」

「だから……石上くんと、エッチな事とかしちゃったんですか？」

「セッ……え、エッチな事なんてしてません！」

「……セ？」ゲス顔

「」

藤原先輩のゲス発言に言葉を失う伊井野……という一連の流れを見ながら口にす  
る。

「……藤原先輩が絶対イジって来るから、躊躇はしましたね。」

「……それに関しては、どうしようもないな。」

「藤原さんは、自分の欲に忠実ですから……」

「ねえねえ、ミコちゃん？ さっきは何を言おうとしたの？」  
ぐぐぐ

「あああうっ……」

〈生徒会室〉

「んむっ…むっ……」*ぐぐぐ*

もぐもぐと小動物の様に、昼飯を頬張る伊井野を眺める……伊井野と付き合い始めて一週間が経過した。その間テスト勉強と一緒にしたり、学生生活を送っている内に気付いた事がある。それは良い事なのか悪い事なのか……最近、伊井野の僕に対する依存度が上がった様な気がするのだ。この前も……

……………

〈期末テスト結果発表掲示板〉

「お、今回も一位だな。」

テスト結果の張り出された掲示板を眺め、隣に佇む伊井野へと話し掛ける。テスト期間中、伊井野は色々集中出来ない要因が重なっていたみたいだから心配してい

たんだ。本人程じゃないにしろ、一位を無事取った事にホッとしていると……

「石上、こっち来て……」*カッ*

「え、伊井野？」

伊井野に袖を引っ張られ、曲がり角へと連れて行かれる。掲示板の前に密集しているからか、周囲に人の気配は無い。

「どうしたんだよ、いきなり……？」

「……私、テストで一位だったよね？」

「ああ、そうだな。」

「そ、その……褒めて？」*ヤッ*

「……」

（えー……）

別に伊井野ミコは、見返りを求めて勉学に打ち込んでいる訳ではない。しかし、明確に石上を意識し出すキッカケとなった……生徒会長選挙後に発生した石上からの頭ナデナデイベント！その時に感じた幸福感や充足感は、2ヶ月近い時間が経過した今でも忘れられないモノであった。更に言えば、石上とは既に恋人同士……

少しくらい甘えてワガママを言っても許される筈と、伊井野ミコは普段ならばブレーキを踏むタイミングでアクセルをベタ踏み！それ故の……この状況であつた。

「……ッ！」<sup>ツツツ</sup>

ソワソワと期待に満ちた眼差しで伊井野は僕を見る……え？どんな感じで褒めたら良いんだ？

「……ダメなの？」

「いや、ダメじゃないけど……良く頑張ったな、いつ……ミコ、偉いぞ。」<sup>ヤッ</sup>

泣きそうな顔で此方を見上げて来る伊井野を抱き締めると、耳元で囁きながら頭を撫で続ける。

「ふぁ……はうう……！」<sup>ヤッ</sup>

蕩けた声を出す伊井野に構わず、30秒程続けていると……ガヤガヤと掲示板を見終わったであろう生徒達の喧騒が近付いて来た。

「……伊井野、そろそろヤバイから……」

こんな所を見られたら、恥ずかしさで死ぬる自信がある……僕は胸に凭れ掛かつ

ている伊井野を離しながら口にする。

「やああ、もつとお……………！」

「……………」

（なんかエロい…………）

「石上……………」カッ

「あ、後でまたしてやるから……………」

（……………ってこのセリフもなんか変な意味があるみたいに聞こえる……………）

「うう……………絶対？」

「あ、ああ……………絶対！」

……………

正直、滅茶苦茶ヤバかった……………あんなの、そこらの男なら襲ってるだろ……………学校でメスの顔なんてしやがって……………

「石上、どうしたの？」モグモグ

「……………なんでもないよ。」

「？」

## 〈伊井野邸〉

今日は伊井野の家へとお邪魔している。伊井野に頼みたい事があると言われ、こうして訪れた訳なんだけど……

「……」ぎゅぎゅ

「伊井野、それで頼みたい事って？」

モジモジと頼み事を口にするのを躊躇している伊井野に話し掛ける。

「その、石上にしか出来ない事があって……」

「……僕に出来る事ならなんでも言ってくれ、チカラになるから。」

「ほ、ホント？」

「ああ、本当だよ。大体、彼女の頼み事を断る彼氏が何処に……」

「え、えへへ……じゃあ、石上にはコレを読んで欲しいの。」

伊井野から渡された冊子の様なモノには……こう書かれていた。

「イケメンが励ますCD セリフ集」

石上は全てを察した。

「ッー」 ヲヲヲ

「いや……あのな、伊井野？」

「じ、じゃあ、早速お願い。」

伊井野はスマホをタップすると、録音画面のスマホを机の上に置いた。僕はヘイケメンが励ますCD セリフ集を捲り中身を確認する。

「いやいやいやっ……こんな歯が浮く様なキザなセリフ言えないって！ しかも録音すんの!？」

つい先日……キザなセリフを吐いた事を後悔しながら、ベッドの上でのたうち回った人間の言葉とは思えない。

「え……」

僕の言葉に、伊井野はショックを受けた様な顔で僕を見た。

「なんでもしてくるって言ったのに……」

「いや、でもな……?」

「嘘ついたの……?」*グズ*

「嘘っていうか……お、おい、泣くなよ……」

（いくら伊井野の頼みでも、こんな恥ずかしいセリフを言うなんて僕にはっ……）

「いじわるっ……!」*グズ*

「ぐっ……」

（僕にはっ……）

……

「えへへ……石上、ありがとう。」

「……喜んでもらえて何よりだよ。」

（泣き顔には勝てなかったよ……）

〈生徒会室〉

「あー……」*グズ*

「……ん? どうした石上? 随分と疲れている様だが……」

「どーせ、夜遅くまでゲームでもしてたんじゃないですか?」



「えーと、伊井野が何回（恥ずかしいセリフを）言っても満足してくれなくて……（喉が）枯れるかと思いましたよ。」

「ぶはっ!? ゲホッ、ゴホッ!」

（何回イッても!）

「ぶひゅーっ!? ゴホッゴホッ! い、石上くん！何言ってるんですか!」

（枯れる程!? ミコちゃん、そこまでっ!）

「か、会長!? 藤原さん!? いきなりどうしたんですか!」

「うわっ!? 藤原先輩何お茶吹いてるんですか、汚いなあ……」

「なんで私だけ!? それに、下品なのはそっちでしょ!!」

「藤原さん、何を言ってるの?……会長、大丈夫ですか?」

「バグミ　！あ、ああ大丈夫だ、四宮。石上……生徒会室とはいえ、発言には気を付けろよ。」

（早過ぎだろ、流石は経験者……）

「え? はあ……わかりました。」

「こんにちは。」カチャ

「み、ミコちゃん！ 石上くんが言ってた事ってホントなの!？」

「え？ 藤原先輩、何の話ですか？」

「そ、そのお……ミコちゃんは何回イッても満足してくれなかったって、さっき石上くんが……」

「えっ……石上!？」

「あー、大丈夫……濁して言ったから。」

濁した結果、とんでもない勘違いをされている。

「……」

（いや石上、全然濁せてなかったぞ……）

「そ、その……詳細は省きますけど、私……そういうのが好きなので……」

「ミコちゃん!？ それどんなカミングアウト!？ っていうか、そういうのってどうなの!？」

「そ、それは言えないんですけど……」

（言えない様な事してるの!？）

「や、やっぱり……この国は淫れてます！ 淫れてますうー!!」

「ふ、藤原、落ち着け！」

「……藤原さん、本当にどうしたの？」

何やら叫びながらアタフタし出した藤原先輩とそれを宥める会長達を見ていると、ポフッと隣に誰かが座って来た……僕は隣へと視線を移す。

「……えへへ。」

幸せそうな笑みを浮かべる伊井野が視界に映る……この笑顔を、ずっと隣で見守り続けたいと思いながら、僕は伊井野の頭を撫でた。

ー完ー

なんとか……なんとか完結まで書く事が出来ました(つДつ)ノフラグ立てた3人を消化出来たので、満足です(。ω。)

あとは、afterを1話書いたら終わりにします。

ここまでお付き合い下さりありがとうございました！

## 皇女の御心after①

感想ありがとうございます（＾▽＾）

---

〈ファミレス〉

「フッフッフ、伊井野ちゃん……覚悟は良い？」

「お、大友さん？ 覚悟って何の事……？」

ファミレスへと連行された私は、現在……大友さんに詰め寄られている。

「石上君とのイチャラブ生活の事に決まってるでしょー？ どんな感じでイチャイチャしてるのか、しっかり吐いてもらうよ？」

「ええっ!? そ、そんな……イチャラブ生活なんてしてないもんっ……」

「ネタは上がってるんだよ？」

「ね、ネタ……？」

「えーとね……」

.....

これは、目撃者のおのっ……R・Oさんからのタレコミです。その日、R・Oさんは昼休み……昼食を食べ終え、中庭を散歩していました。暫く中庭を歩いていると、近くから聞き慣れた声が耳に届いたそうです。

「……？」

なんだろう？　と思い、周囲を見回すと……草木に遮られた茂みの先から声が聞こえて来ます。R・Oさんは、物音を立てない様に気を付けながら……問題の茂みを覗き込みました。すると……

「なんか……人に見られない様に隠れてると、悪い事してるみたい……」

「仕方ないだろ？　教室だと人目があるし……今のうちにして欲しい事があるなら聞くけど？」

どうやら2人は恋人同士の様です。校内ではイチャイチャ出来ないからか、態々こんな所まで来てイチャついていた様です……所謂バカップルです。

「……手。」

「手？」

「そ、その……両手を広げて、おいで……って言って欲しい……かな。」

「……」

「あ、その……や、やっぱりっ……!」

「……おいで。」

「……っ!!」  
ッ

いいっ……その女の子は男子の胸に飛び込むと、それはそれは幸せそうな顔をして、グリグリと男子の胸に額を擦り付けたり、頭を撫でてと懇願したりと、甘えまくっていたそう……最後に、R・Oさんから一言。

「……敷地内であーいう事をするんなら、見られてないか気を付けな。」

……

「ア・ア……」  
ッ

(み、見られてたー!?)

「誰なんだろうねー? この話に出て来る女の子と男子って……?」  
ッ

「あうあうっ……」

「ねーねー、伊井野ちゃん?」  
ッ

「も、もう、許してえっ……………」ﾌﾟﾙﾌﾟﾙ

「えー？　しょうがないなあ…………じゃあ、石上君の事が好きって実感するのってどういう時か教えてくれたらいいよ？」

「ええっ!?　そ、そんな…………恥ずかしい事言えなっ…………」

「えーと、続きまして…………R・Oさんから2つ目のタレコミです。」

「わああっ!?　言う、言うから!　そ、その、ふとした時の優しさとか、褒められたり撫でられたりした時に…………ぎゅーってしたり、されなくなっちゃった時に、甘えさせてくれる所…………かな？」

「そうなんだー？」 いびいび

「あうう…………や、やっぱり、今のはなんでもないの!　忘れてえっ!!」

…………

「…………って伊井野ちゃんが言ってたよ？」

「それ、絶対僕に言ったらダメな奴だろ…………」

へファミレス

「伊井野ちゃん！恋人同士っていうのは、付き合い始めてからが本番なんだよ？コレに色々載ってるから、読んでみて！」

「う、うん……」ニコニコ

最早恒例になりつつある、大友さんとのファミレス談議。私は大友さんから雑誌を受け取ると、パラパラとページを捲り始めた。

「あ……」

ページを捲っていると、あるページで捲っていた指が止まる。そのページには、デカデカとこう書かれていた。

〈デート回数による恋人との進行度〉

「……」

「伊井野ちゃん、どうしたの？」

「その、ちょっとコレが気になっちゃって……」

「えーと、何々……」



1ゝ2回〈恋人繋ぎ〉

3ゝ4回〈キス〉

5ゝ6回〈最後まで……〉

「へー、こんな感じなんだ……」

「……」

「伊井野ちゃんは、石上君とデートの約束とかしてるの？」

「う、うん……今度、動物園に行く予定なの。」

「へー、良いなあ……そういえば、伊井野ちゃん達は今度のデートで何回目なの？」

「まだ一回……っ!？」

「アレ……ちょっと待って？ ええと、中等部の頃……石上と一緒に夏祭り行ったよね？ アレは夏祭りデートと言えるんじゃない？……」

大仏こばちも同行していたので、厳密には違う。

「……」

「それから……高等部の文化祭にも行ったよね？ アレも文化祭デートと言えるし……」

大仏こぼち、小野寺麗の2名も同行していたので、厳密には違う。

「……………」

（そ、それから……この前風邪をひいた時、石上が私の家に来て看病してくれた……あ、あれはもう、お家デートと言えるんじゃない?）

言えない。

（それに、その次の日……石上に家へ来てもらって告白した時、石上……薬指にキスしてた!? じ、じゃあもう、完璧にこの雑誌の通りに進んでるって事になるんじゃない?）

ならない。

（それから、励ましのセリフを録音させてくれた日は何も無かったけど……コレが5回目。）

私はそこまで考えて、もう一度……開いたページを確認する。

5→6回へ最後まで……

（つ、次が6回目って事は……思いつ切り射程内に入ってる!）

「伊井野ちゃん?」

「ど、どうしよう……私、次のデートで最後まで行っちゃうかもっ……」

「わー、ラブラブカップル凄い……」

「で、でも……付き合い始めて1ヶ月も経ってないのに、早過ぎるんじゃない？」

「んー？ 人それぞれじゃない？ それに、クリスマスも近いしリボンを自分に巻いて……プレゼントは私、とかするチャンスだよ！」

「わ、私、そんなエッチな子じゃないもん！」

……

〈生徒会室〉

「くちゅっ！」

「ん？ 四宮、風邪でも引いたか？」

（くしゃみ可愛い……）

「いえ、そんな事はないと思いますけど……」

「エッフェル塔!!」ギ

「ふむ……最近は、特に寒くなって来ているから……気を付けろよ？」

「……ええ、そうですね。」

（会長に心配してもらっちゃった！）

「ダイヤモンド!!」まじ

「……」

（さっきから、何やってんだ藤原コイツ……）

……

「そうと決まれば……伊井野ちゃん！友達に教えてもらったお店があるから、今から行こ！」タツタ

「えっ、あ……ま、待ってえ！」

「早く早く！」タツタ

「あああ……」

〈女性服専門店〉

大友さんに連れて来られたのは、女性向けの下着専門店だった……来店している他の人達は、大人の女性ばかりで……制服で来ている私達は、場違い感が凄い。

「フッフ、名付けて……勝負下着で勝負を決める作戦だよ！……という事で、とりあえずコレとか試着してみる？」

「ち、ちょっと待って!! あるべき場所に布が無いよ!! エッチ過ぎるんじゃない?!!」  
 「そうかなー? じゃあ、コレは?」

「薄い! 薄過ぎて下着としての責務を全く果たせてないよ!!」カァーッ

「まあまあ、とりあえず色々見てみたら?」

「う、うん……」

「じゃ、また後でね!」

(可愛いなあ、伊井野ちゃん。冗談に顔真っ赤にして……流石に高校生でこんなの履いてたら痴女だよー。)

……

「~~~~っ!!」ブ。ル。ッ

(か、買っちゃったー!! こ、こんな破廉恥な……で、でも、大友さんは割と普通みたいない言い方してたし、そこまで変じゃない筈……)

「やっほー! 伊井野ちゃん、どうだっ……」

大友さんは、私が胸に抱えた袋を見ると固まった。

「……え? もしかして、伊井野ちゃん……ホントに買ったの?」

「え……？」

「軽い冗談のつもりだったんだけど……」

「」

「……あ！でも、男子はエッチな女の子が好きって言うし……うん、大丈夫だよ

！」

「」

僅かに身を引きながら、そう言った大友さんを見て……私は言葉を失った。

……

「フフフ……石上君、伊井野ちゃん……かなり気合いの入った下着買ったみたいだよ？」

「……だから、なんで言うの？」

念の為、件の下着が披露される様な事にはならなかった事を……此処に示しておく。

〈生徒会室〉

「こんにちは。あれ……会長1人ですか？」

「2年は今日三者面談だからな、俺は仕事しに寄っただけだ。」

「そうでしたか……」

（進路……か。伊井野は、弁護士か検察官を目指して、レベルの高い大学に行くんだろうな……）

ずっと一緒？ ホントに？ ずっと一緒に居てくれるの？

「……」

「……どうした、石上？」

「……会長、ちょっと聞いて良いですか？」

……

〈白銀家〉

「……」

「どうした、御行？ 進路相談で言った事、後悔してるのか？」

「いや、別にそういうんじゃない。ただ……今日後輩と進路の話になってさ……」  
会長は……好きな人と一緒に居る為に、自分の進路を決めるのを……どう思いますか？

「……アイツはまだ1年なのに、悩んでたみたいだったからさ……」

「……これからの人生を左右する事なんだ、悩んで当然だ。」

「父さんも……悩んだりしたのか？」

「そうだな……俺も母さんと大学で出逢う前は、仲の良い友人達と一緒に起業する夢を語り合ったもんだ……」

「へえ、そうなの……？」

「その友人は、情報処理と経理の能力に長けていてな……俺の持ってる色んな資格を活かして、何でも屋をやる……なんて事を良く、あーだこーだと話し合ったもんだ……」

「……」

「呼ばれれば、何処へでも行って問題解決……デリバリーヘルプ、略してデリへ……」  
「それ、意味違いから二度と使いなよ。」



(真面目に聞いて損した……)

〈中庭〉

会長と話をした次の日、僕は伊井野と一緒に中庭の隅に腰を下ろしていた。

「……伊井野はさ、将来は弁護士か検察官になるのか？」

「え……いきなりどうしたの？」

「あー、いや……昨日、2年は進路相談だっただろ？それで、ちょっと気になつてさ……」

「そっか……うん、まだどっちを目指すかわからないし、何になりたいかもわからないけど……間違いを正せる仕事がしたいなって。」

「そっか……」

「……石上？」

「僕は……将来この仕事に就きたいとか、やりたい事とか特にないんだよ。でも伊

井野は違う、間違いを正す仕事に就きたい……流石だよ。」

「ど、どうしたの……？」

「今はまだ良いけど……僕達も進路について、ちゃんと考えなきゃいけない時が来る。伊井野は……レベルの高い大学の法学部に進学するんだろうな……」

「っ！ い、石上っ……」 ザッ

僕の言葉に伊井野は、不安そうな表情を浮かべて遠慮がちに袖を掴んだ。

会長は……好きな人と一緒に居る為に、自分の進路を決めるのを……どう思いますか？

「だから……」

……別にいいんじゃないか？ 恋人と一緒に進学先を選ぶ……結構な事じゃないか。だがな……どんな選択肢を選ぼうと、自分が後悔する様な選択だけはしないようにするんだぞ。

「だから……僕も伊井野と同じ大学に行ける様に、頑張ってみるよ。」

「え……？」

「流石に学部は違う所になると思うけど……約束したからな。」

「約束……」

「ずっと一緒に居る。ずっと隣で支えて、守り続ける……って約束しただろ？」

「~~~~っ!! 石上い！」ヤッ

感極まったのか、抱き着いて来た伊井野の頭を撫でて落ち着かせる……はあ、伊井野が目指す大学に受かるのは大変だろうな……でも、あと2年間は時間があるし、何より……

「うううー！」グッリグッリ

伊井野と一緒になら、きっと頑張れると思うから。

終わったよー（ハ、）

今だから言える事……今作を書き始めた当初は、原作で石上とつばめ先輩がどうなるかわかっていない状況だったのですが、願掛けの意味も込めて意図的につばめ√を排除したり、龍珠√は最初考えてた展開から大幅に変更したりしました。

龍珠√を書き始めた頃は、龍珠組の敵対勢力が出て来て、最後に石上が漢を見せる展開を考えていたんですが……石上がそれをやると、京都で七味片手に奮闘した会長がバカみたいじゃん……と思ってやめました。(・\_・)

正直な話……どこまで書けるかわからなかったし、大仏√以外は誰√を書くかも決めてなかったので、出すだけ出してそれで以降殆ど出番無しなキャラがいたりも……(つД世)ノ<圭ちゃんゴメン

√によって最低1人は、進行役やお助けキャラの様な人物を設置する事でなんとか無理のないストーリーになったと思います。

大仏こばち編↓小野寺麗

龍珠桃編↓紀かれん、巨瀬エリカ

伊井野ミコ編↓大友京子

って感じですね……何はともあれ、完結させる事が出来て良かったです。ありがとうございました!!

## 皇女の御心 after ②

ミコちゃんだけ after が一個なのもアレなんで……

アンチ!! 英語の「anti」を語源とする「反対・対抗・排斥」などの意味を表す言葉であり、特定の人物名を指して〇〇アンチ……という使い方をする場合もある言葉である。

「ああ! 会長とかぐや様が連れ立って歩いて……尊みが溢れてしまいますわ!!」  
ハッハッハッ

「か、かぐや様の御髪が風で揺れて! かぐやしゃまの髪を撫でる風になりたい……」  
ハッハッ

……この様な度を越した信者がいる反面、どんな人間にもアンチは存在する! 2期連続で生徒会長を務め、文化祭の2日間開催許可をもぎ取った白銀御行とそれを補佐する四宮かぐや……絶大な人気を誇る2人にも、少なからずアンチは存

在している。ではまだ1年生であり、生徒から嫌われ煙たがられやすい風紀委員に所属し、誰が相手でも臆する事なく己の中にある正義を全うする少女なら？

〈生徒会室〉

「石上、備品の貸し出し表は出来てるか？」

「うっす……もうデータはまとめてるんで、後で送ってきますね。」

「ああ、助かる。」

奉心祭が近いという事もあり、生徒会の仕事は山積みだ。体育館ステージの使用許可書の受理、各クラスや部活動の使用時間の割り当てや備品の貸し出しと中々な忙しさだ。四宮先輩や藤原先輩もそれぞれが忙しそうに書類と向き合っている。

「……」かちゃ

扉が開く音に顔を上げると、落ち込んだ様な表情を浮かべた伊井野が入って来た。

「……伊井野監査か、お疲れ。いきなりで悪いんだが……」

「……」

「……伊井野監査？」

「……伊井野さん？」

「ミコちゃん？ どうしたの？」

何の反応も返さない伊井野を……先輩達は怪訝な顔で見つめている。

「……」

「……伊井野？ どうした？」

伊井野はフラフラと此方へ歩み寄ると、僕の隣にぽすつと腰掛け……

「石上 いっ……！」ヤッ

一言そう洩らすと、グリグリと頭を押し付けて僕に抱き付いた。

「ミコちゃん!? 何してるの!?!」

「……あー、またアレか。」

伊井野の背中をポンポンと叩きながらそう言葉を洩らす。

「石上、アレってなんだ？ 今の伊井野と何か関係あるのか？」

「まあ……えーと、伊井野って風紀委員じゃないですか？」

僕は伊井野の頭を撫でながら、首だけを会長に向けて話す。

「ああ、そうだな。」

「で……風紀委員だから当然風紀を乱す生徒には注意したり、学校に関係ない物を

持つて来てる生徒からは没収したりしてる訳です。」

「うむ……」

「まあその時に憎まれ口を叩かれたり、悪口を言われたりする訳で……それで、今はちよつと精神的に参ってる状態なんですよ。」

「なるほど……」

「意外ですね……伊井野さんは、そういったモノには慣れていると思っていたのですが……」

「耐性があつたとしても、キツイモノはキツイだろうしな……」

「ミコちゃん、大丈夫？」

「うゝっ……」*グググ*

「あー、いや……前までは平気だったらしいんですけど……」

「……つまり、平然と出来なくなった理由があるという事か？」

「石上くん、理由って？」

「……」

僕は未だ抱き付いてまま、離れる気配の無い伊井野の頭を撫でながら答える……



正直、自意識過剰みたいな気がするから言いたくないんだけど。

「理由は……僕みたいです。」

「ん？」

「石上君が……」

「理由？」

3人の先輩達は首を傾げて僕の言葉を待つ。

「えーと……今までの伊井野は、かなり気を張って生きてましたし……その反動、みたいなの？」

「……なるほどな。石上という心の抛り所が出来たからこそ、悪意や敵意を受け止める部分が弱くなったという事か。」

「まあ多分、そんな感じだと思います。」

「んー！」  
スリッパ

「ミコちゃんキャワー！ 石上くん、私にも！ 私にも触らせて下さい！」

「藤原、犬じゃないんだから……」

「ミコちゃん、私にも甘えて良いですよ！」

「……う？」ぢぢ」

「ほらほらー。」

「……」うん」

「あれえ!? なんで!?」

「藤原さん、空気を読みなさい。」

「石上が居るのに、態々藤原なんぞに行く訳無いだろ……」

「言い方あ!!」

「あの、僕らちょっと出て良いですか？ このままじゃアレなんで……」

「あ、ああ……気にしなくて良いぞ。」

「じゃあ、ちょっと出ますね……ほら伊井野、こっち。」

「うん……」

……

伊井野を連れて廊下に出た僕は、抱き付いたままの伊井野へと視線を落とす。今まで何回かこういう事があったけど、他人が見てる前でこの状態になったのは初めてだ……大丈夫かコレ？ 日に日にメンタルが弱体化してってない？

「うー、石上い……」

伊井野に呼ばれた為、今までと同じ様に接して元に戻る様に努める。

「……よしよし、伊井野は頑張ってる偉いな。」

「私……偉い？」

「ああ、滅茶苦茶偉いぞ。伊井野が頑張ってる事……僕はちゃんとわかってるから。」

「うん……」

「いつも寝る時間削って勉強してるし、風紀委員の仕事も、生徒会の仕事も真面目にやってみて……伊井野は良い子だな。」

「ううっ!!」ギョッ

「でも無理し過ぎるのはダメだぞ？ 良い子でいるのに疲れたら……偶には悪い子になったって良いんだからな？」

「……うん。」ギョッ

……と、こんな感じだ。最初は数秒程度、頭を撫でて褒めるくらいだったのが、段々と撫でる時間や接触時間が増えて今に至っている……まあ頼られるのは嬉しい

し、可愛いから良しでしょう。

……

「うう、信じて送り出したミコちゃんが……」

「なんだその言い方……」

「はわあ……」

（私も落ち込んでたら、会長が慰めてくれないかしら……）

〈ファミレス〉

「最近、石上君とはどんな感じ？ 上手くいってる？」

「うん、順調だよ。」

「伊井野ちゃん、最近楽しそうだもんねー。」

「うん、最近は御守りもあるし……」

「え？ 御守り？ 何それ、見せて見せてー！」

「……誰にも言わない？」

「大丈夫、絶対言わないよ！」

「そ、それなら……」

伊井野はひらりと、卓上に一枚の紙を開いて置いた。その紙には〈婚姻届〉と記載されており、男性側には恋人である石上の名前が書かれていた。

「婚、姻……届!? ちょっと、ええっ!? 伊井野ちゃん結婚するの!？」

「そ、それはまだだけど！ 石上の名前が書いてあるコレを御守りにしてるだけだから！」

「なーんだ、私びっくりしちゃったよ……でも石上君、よく書いてくれたね？」

「あ、いや、その……石上は書いてる事を知らないんだけどね……」

「え？ どういう事？ もしかして伊井野ちゃん……自分で書いたの？ 流石にそれは……」

「違っ!? ちゃんと石上が署名したもん！」

「……んー？ じゃあなんで、石上君本人が書いてる事知らないの？」

「え、えと……風紀委員のアンケート調査って言って、婚姻届の上にカーボン紙を

重ねてって感じで細工して……」

「」

「あ、あれ？」

「それはダメだよ!? 闇討ちだよ、反則だよ！」

「で、でも御守りにしてるだけだし……それに、石上にも無理し過ぎるくらいなら悪い子になっても良いって言われたし……」

「それ絶対、こういう事しても良いって意味で言ってるじゃないよ!?」

「……フフフ、口は災いの元だね。」

「悪伊井野ちゃんになっちゃった!?」  
ワルイイノ

「えへへ、私悪い子になっちゃった……」

「照れながら言う内容じゃないよ!? それ絶対、石上君に内緒で出したらダメだからね!？」

「……」

「伊井野ちゃん!?」  
「サッ——」

……

「……」

「ん？ 大友、何か用？」

「（ご結婚）おめでとうございます。」>」

「え、何が？ 何がおめでとう？」

「（式には）ちゃんと呼んでね？」

「何が？ 何と呼ばば良いの？」

友人の恋人への依存具合に……一抹の不安を覚えた大友だった。

〈伊井野ミコを裁きたい〉

「あ、あの……皆どうしたの？」

「被告人……ミコちゃん、心の準備は良い？」

「被告人!? こばちゃん、どういう事!?」

「えーと、罪状は……猥褻思考及び猥褻準備罪ってトコかな？」

「麗ちゃん!? 何言ってるの!？」

「伊井野ちゃん、ネタは上がってるんだよ!」

「大友さんまで!？」

12月もあと数日で終わろうとしていたある日、私達4人は奉心祭の打ち上げをする為に集まる事になった。場所は多少騒いでも迷惑が掛からない、という理由で私の家になったんだけど……

「そ、そもそも、なんで私は縛られてるの!? それにネタって何の事!？」

「伊井野ちゃん……カツ丼食べる?」

「え? どっちかと言えば、天井の方が……」

「大友さん、そういうのは無いから。あと伊井野もリクエストしないの。」

「ううっ……じゃあリクエストしないから、コレ解いてよお!」ぐぐぐぐぐぐ

「ダメ。」

「なんでえっ!？」ぎゅーん

「ミコちゃん、本当にわからないの?」

「よく考えてみな。」



「田舎のお母さん泣いてるよ?」

「大友さんはドラマの見過ぎ。」

「ええ……わ、わからないよお……」

「はあ……いいよ。仕方ないから教えてあげる……原因はコレ。」

そう言ってこばちゃんは、つい最近買ったばかりのベッドを指差した。

「へ? な、なんでベッドが原因なの?」

「私があれば……身体壊すからベッド買った方が良くって言っても買わなかったのに……」

「石上と付き合う事になった途端、伊井野はベッドを購入した。伊井野……コレってもう、そういう目的で買ってるって事でしょ?」

「エチエチだね。」

3人の言葉に、一瞬で顔が熱くなる。

「ち、違っ!? 違うの! 皆聞いて!」

「ミコちゃん、普段は風紀を取り締まってる側なのに……」

「昼の風紀は取り締まるけど、夜の風紀は取り締まるつもりは無いって事ね……」

「エチエチだね。」

「だから違うのー！」

「私……コレにツツコミ入れるの嫌だったんだけど、まあ折角だから聞くんだけど  
さ……」

「な、何、麗ちゃん……？」

「……なんでこんなに替えのシートがあるの？」

麗ちゃんは、部屋の隅に積まれた新品のベッドシートを指差した。

「っ!? そ、それは……」  
ダダダ

麗ちゃんの問いに、冷や汗が止まらない。私はなんて答えればいいのかと悩んでいると……

「ミコちゃん、こんなに替えのシートが必要になるくらい……するつもりなの？」

「す、するつもりって何の事？」

「エチエチだね。」

「さっきから、大友さんのソレ何!? そ、そのシートは……期間限定で、ベッド  
を買うとオマケで付いて来ただけで！」

「ミコちゃん、それって何処の店？ レシートは？ ネット通販ならサイト名は？」

「そ、それはあ……」

「……虚偽罪も追加しとこっか？」

「罪状増やさないでえ……」

「それと……ミコちゃん、凄い下着買ったんでしょ？」

「ちよっと興味あるから見せてよ。」

「えっ!？」  
ンム

2人の言葉に、私は勢いよく大友さんへと視線を向けた。

「あれ？ 言っちゃダメだったの？」

「そ、それはそうだよ！ そんな恥ずかしい事！」

「でも石上君にも言っちゃったし、大丈夫かなって思って。」

「」

「うわあ……」

「伊井野……ちよっと同情するわ。」

「なんで言っちゃったのお……」  
ムム

（石上にエッチな下着を買ったのがバレてたなんて……）

私が知ったばかりの事実には打ちのめされているのに……

「……」ゴッゴッ

「まあでも……」

「それとこれとは別だから……」

「とりあえず、下着見せて。」

こぼちゃんと麗ちゃんは容赦が無かった。

「……し、知らないもん！」フッ

（だ、大丈夫……アレは引き出しの1番奥に隠してるから、思いっきり漁らない限り誰にも見つからない筈！）

「あったよ!!」シシッ

「なんで勝手に漁っちゃうの!？」

大友さんは、探し当てた下着を高々に掲げた。

「うーわっ……」

「コレ絶対、そっち系専門の店で買ったよね？」

「エチエチだよね。」↑勧めた張本人

「うううっ!？」

「ミコちゃん……高校生でコレは普通に引かれるんじゃない？」

「私が男なら間違いないく引く。」

「でも男子は、エッチな女の子好きらしいから大丈夫じゃないの？」

「限度があるでしょ……」

「うわーん!? もうやだー!!」

本日の勝敗、伊井野の敗北

結局この日は、最後までイジられた為。

## 皇女の御心after③

今日はバレンタインデーですね（白目）偶々1話分のネタが浮かんだったので、ミコちゃん✓に組み込んでみました。ちなみに終始ミコちゃん視点です。  
面白いと思ったら、感想・評価お願いします。

---

〈伊井野邸〉

「……」トキメキ

ドキドキと高鳴る胸の鼓動とペラペラとページを捲る音だけが……部屋の中を満たす。私は部屋の中心でクマのぬいぐるみに身体を預け、少女漫画を読んでいた。  
「……」ハッ……

少女漫画を読みながら、ふと思う……石上と恋人として付き合う様になってから、そろそろ2ヶ月の時間が経とうとしていた。その間、僅かな時間を利用して一

緒に奉心祭を回ったり、初詣に行ったり、今までは購入を考えもしなかったベッドを購入したりと色々な事があった……い、石上にもベッドで寝ないと身体に悪いって怒られたし、何かあった時の為（意味深）にも必要だと思ったから買っただけで！決してやらしい意味があって買った訳じゃない！そんな事を考えながら漫画を読んでいると、あるページで指が止まった。

……

「なあ○○、オレ達が付き合う様になってそろそろ3ヶ月だろ？もう、我慢しなくて良いよな？」サッ

「ひゃんっ!? ま、待ってよ○○君！わ、私！まだ心の準備がっ……！」

「もう我慢出来ねえんだよ……」キ

「ア……アッ！だ、だめえ……！」ビクッ

……

「……ッ！」「アッアッアッ

そうだ、私も石上と付き合い始めて既に2ヶ月……そろそろそういう事をするのも視野に入れておかなければいけない時期に入っているのだ。世間一般的に高校

生のカップルは、付き合って3ヶ月で初体験を済ませるのが統計的に1番多いと、そういう系の雑誌に書いてあった。つ、つまり……私もそろそろ覚悟を決めておかないといけないって事だ。藤原先輩が言うには石上は経験者らしいから、そういう事をした筈だし……もしかしたら、私の為に我慢してる可能性だってある。石上だって男の人なんだから、抑圧していた欲望がそのうち溢れ出して……

……

「伊井野……もう我慢出来ない」ギョッ

「アッ……やあ……!? い、石上待って!? とりあえず落ち着いてっ……!」ビッ

クッ

「我慢出来ないって言ってるだろ?」キキッ

「だ、だめえっ……!」ビッビッ

……

「~~~~っ!!」トギギッ

こ、こういう事もあるかもしれない!? で、でも寧ろ良い……じゃなくて! い、幾ら石上のお願いで、生徒会の一員として節度ある行動は必要な訳だから……



私がちゃんとしないと！

〈生徒会室〉

「暇だな……」

「そ、そうね……」アッヤアッヤ

今、生徒会には私と石上の2人しか居ない。2年生の先輩達が修学旅行へ行っている為だ。小さい仕事を幾つか終わらせて休憩をしていると、石上がある提案をして来た。

「急ぎの仕事は修学旅行に行く前に会長達が終わらせてくれたし、折角だから偶には羽を伸ばさないと……って事で、伊井野は行きたい所とかしたい事ってないの？」

「へ？ わ、私のしたい事……!？」

「おう、何でもいいぞ」

「何でもっ……そ、そんなの言えない！」

「え、なんで？」

「なんでって……そ、それだったら！石上だって私と何かしたい事とかあるんじゃないの!？」

「遠慮すんなって。伊井野は普段から勉強を頑張ってるし、こういう時くらい好きな事言えって」

「そういう事じゃなくて！む、寧ろ石上の方こそ、私としたい事とか何かあるんじゃないかって聞いているの！」  
「タッタ」

「ちよ、ノートを押し付けて来るなよ……ってというか、何か誘導しようとしてない？伊井野は一体何を言わせたいんだよ？」

「な、ナニって……」

「……？」

「そんなの、そんなのっ……！」

「伊井野？」

「言えないもん！」  
「タッタ」

「ちょ、伊井野!？」

〈伊井野邸〉

2月に入って数日が経過した。先輩達も修学旅行から帰って来て、表面上は今まで通りの日常を送っている……そう、表面上はだ。2月に入った事で、とうとう私と石上の交際期間も3ヶ月目に突入した。つ、つまり、いつ石上とする事になったとしても、不思議では無いって事だ……私はいつそんな雰囲気になっても動揺しない為に、寝る間を惜しんで色々調べたりしている。その証拠に……スマホの検索欄には、そっち方面の単語が色々と並んでいる。

「……………」

(男子高校生の平均……)

何気なく筆箱の中から定規を取り出して、下腹部に当てる……

「……………これくらい?」  
「ㄤ」

あ、でも高校ならまだ伸び代がある可能性もあるって書いてある。だ、だったら……これくらい？

「~~~~っ!!」こ。こ。

ひっ……と小さく息を飲み定規を落とす。こ、これって大丈夫なの!? だってこんなっ……!

「も、もっとちゃんと調べないと!」

そんな事をしながら、夜は更けていった……

……

〈ピンポーン〉

「……誰え？」

次の日……玄関から聞こえて来る呼び鈴に目を覚ました。誰だろう？ 今日休みだし……そこまで考えて、スマホがメッセージの着信を伝えて来た。

〈伊井野ちゃん！ 寝てるのー?〉

〈ミコちゃん、来たよ〉

「……あっ!」

そ、そうだった！今日はこばちゃんと大友さんの3人で、バレンタインのチョコを作る約束をしていたんだった！私は急いで身支度を整えると、玄関に向かい2人を迎え入れた。

「ごめんね!? ちょっと寝坊しちゃって……」

「ううん、気にしなくても大丈夫だよー」

「でもミコちゃんが寝坊なんて珍しいね？」

「あ、あはは、まあね……」

（い、言えない……深夜まで色々調べてた所為で寝坊しちゃったなんて……）

「じゃ、早速チョコ作ろーよ！」

「だね、私達だと時間が掛かるかもしれないし」

「麗ちゃんは来れないんだっけ？」

「うん、何か親戚関係の用事があるんだって」

「そっかあ、残念だね……」

「本当にね……」  
ㄣㄣㄣ

（私1人でミコちゃんと大友さんのお世話をしないとダメなのか……頑張ろ）

.....

(平均値は13・5<sup>センチ</sup>……石上はどれくらいなんだろ？も、もし平均値以上だったら……！)

「……………」<sup>サッ</sup>

「……ミコちゃん？」

「伊井野ちゃん？次は何するの？」

「え、あっ…………ご、ごめん！えーと…………」

2人の声に、私は手元にあるチョコ作りのレシピへと視線を移した。ダメダメ！石上は平均以上なのかとか、こんな時に考えるべきじゃないのだ……次の工程は溶かしたチョコに生クリームを投入し、テンポ良くかき混ぜると書いている。ボウルに視線を向けると既に生クリームが入れられていたので、最初の部分は端折った説明を口にする。

「次は……○ンポ良くかき混ぜるんだって」

「ふむふむ、○ンポ良く……」

「かき混ぜる……」

「……」

「……」

「……」

「「……って、えええええっ!!?!?」」

「ミコちゃん!？」

「伊井野ちゃん!？」

「「何言ってるの!？」」ぎゅーぐ

「あ、違っ!? 言い間違っちゃっただけだから!! ティンポ良く……そ、そう! テウ  
ンポ良く!!」

「まだちょっと変だよ!？」ぎゅーぐ

「ミコちゃんて、本当にアレだよね……」 ㊦

「……」

「って事があったんだよねー」

「いや、ドン引きなんだけど……」 ㊦

「あはは、大丈夫大丈夫……おさちゃんと私もしっかり引いたから!」

「何が大丈夫なの？」

小野寺はドン引きした。

※オマケ話

〈伊井野ミコの闇〉

※時は巻き戻り、3学期最初の生徒会……

新学期になり最初の生徒会……私と石上と一緒に生徒会室に入ると、禿頭姿の藤原先輩と白銀会長が腕を組んでいた。

「え、えええええっ!? 藤原先輩、その頭どうしちゃったんですか!?!」ザッ——

「ミコちゃん……えっとね、私と会長……冬休みから付き合い始めたの」ズザ

「っ!? そ、そうなの……!?」

「そんなハゲヅラ女と付き合う男が居てたまりますか。会長も大変っすね、ハゲ原先輩の悪ふざけに付き合わされて……」



「あ、ああ、まあ……」

（石上は藤原の生態を完璧に熟知してるなあ）

「誰がハゲ原先輩ですか！ 石上くんはレディに対して失礼過ぎますよ!!」

「文句は鏡を見てから言って下さい」

「あーあ、石上くんが何も言わなければミコちゃんは騙せたままだったのに……」  
ハカ

「あ、カツラだったんですね……良かった」ギ

「もしかして……ミコちゃんは私が本気で丸刈りにする様な人間だと思ってます？」  
」

「い、いえっ！ そんな事はっ……」

「やりかねない……というか、やってもおかしくないとは思ってるんじゃないですか？」

「石上くんはシャラップ！」

「そ、それで、何で藤原先輩と白銀会長は……」

「ああ、実はな……」

……

「四宮先輩にドッキリですか……」

「ああ、伊井野は何をすれば四宮が驚くと思う？」

「そうですね……例えば、普段の和やかな空気の中で仕事をしているとします。その時に石上が……何の前触れも無く、私を思い切りビンタするとかどうですか？」

「「なんで!？」」「ぎゅーぐ」

「石上が彼女に手<sup>私</sup>を上げる様な人間だと知ったら、四宮先輩は相当驚くと思うんです！」

「そんなん誰だって驚くに決まってんだろ！」

「実際に手え上げてる時点でドッキリじゃないじゃん！ そんなドッキリ、僕は絶対嫌だからな!!」

「そんなあ……」<sup>シロク</sup>

「そんなあ……じゃねえんだわ！」

「別に私は叩かれても平気なのに……」

「だから謎のDV耐性見せつけて来るのやめろ」

「……」

（もしかして、伊井野監査ってヤバイ子なのか？）

……

「ね、ねえミコちゃん？ ミコちゃんは本気で、石上くんに叩かれないって思ってるんですか？」

「はい、でも石上は優しいから……」ミコ

「た、叩かれないっていうのは例えですよ？ 強引にされたいとか、強氣に来て欲しいとか……そ、そういう感じの意味ですよね!？」

「強引って言うよりは……無理矢理されたいって表現が適切かもしれません」

「む、無理矢理……？」

「はい……アザが出来るくらい強く手を押さえ付けられたり、無理矢理組み伏せられたり……そういうのに対する憧れって、女の子なら皆持つてるんじゃないですか？」ハイトウ

「ア——、ウツシハユノハタカヲチゲ、スネ……」ヒキ

「そうですか……藤原先輩も彼氏が出来たらきつとわかると思います！」フミ

「ベツにワカメクナイデスネ、ハイ……。」ピキ

伊井野のヤバさが周知され始めた。

---

あれ？ 書いた後に思いましたが、これじゃミコちゃんがエロい事しか考えてない闇深いヤベー奴みたいやん……

## 遥か遠き理想像（番外編）

番外編（未来編）です。とある女子と石上の話。

特に○○√という縛りはありません。

√分岐から約1年後……石上は2年生に進級し、生徒会副会長になっています。

……マキちゃんの脳を破壊したくて仕方ない人がいますね（；； 㐂）

私は、秀知院学園中等部に籍を置く3年生。中等部からの外部生という事と、元々あまり人と話すのが得意ではない私自身の内気な性格も相まって……友人と呼べる人は居ない。秀知院は、日本の未来を担う様々な子息令嬢が集う事で有名だ。その所為か、この学園の人間は……家柄、財力、親の社会的地位などで他人を評価する人達ばかり。勿論、そうじゃない人も極少数ではあるけど在籍してはいる。例えば、隣のクラスの元総理大臣の孫娘である藤原萌葉さん。よく白銀さんと一緒に居る所を見るけど……この白銀さん、別に家柄が良い訳でもなければ、お金持ちで

もなく、親が社会的地位が高い訳でもない。でも周囲からの評価はとても高く、男女問わず人気がある……所謂カリスマ性のある人だ。生徒会にも所属していて、先生達からの評判も良い……言ってしまうえば私みたいな人間とは真逆の人間だ。まあ別に、それに関して文句がある訳じゃない。私が言いたいのは、此処では突出した何かの有れば認められ、無ければ見下され、迫害されるという事だ。

夏休みを目前に控えたある日……体育の授業が終わり、着替えようと更衣室のドアノブに手を掛けた時の事だ。

「ねーねー！」

そう呼び掛けられ振り向くと、1人の女子が……僅かに口元を歪めながら私を見ていた。

「な、何か用？」

「いやさー、私ちょっと用事出来ちゃったから……代わりにアレ、片付けといてく

んない?」

「え? それは……」

「じゃ、よろしくねー。」

その人は私の返事を聞く事もなく、更衣室へと入って行った。用具の片付けを押し付けられた私は、はぁ……とため息を1つ吐き、片付けに取り掛かった。次は移動教室だ、急がないと……

……

片付けを終え教室に戻ると、机の横に掛けた鞆から教材を取り出し急いで移動教室へと向かった。なんとかチャイムが鳴る前に移動教室へとたどり着いた私は、息を整えながら指定の席へと着く。私に片付けを押し付けた女子は、私が教室に入ってきたのを一瞥するとニヤリと笑い友人との会話を再開する。

「はぁ……」

高等部に進学すれば、何か変わるのかな……私の思考を邪魔する様に、授業開始のチャイムが鳴り響いた。

……

授業を終えると、お手洗いを済ませて教室へと戻る。教室に近付くにつれて、ガヤガヤと騒がしい雰囲気が大きくなる。

「……………」

なんだろう？ 何かあったのかな？ 教室内は、普段の喧騒とは違った雰囲気が漂っていた。先程私に片付けを押し付けた女子が騒ぎの中心みたいだ。席に座りながら耳を傾けると、どうやら財布が見当たらないらしい……………何処かに忘れて来ただけだろうと、騒ぎから意識を外し次の授業の準備に取り掛かった。教科書とノート、筆箱を並べていると、バンッと机の上に手を置かれる。見上げると……………財布の事で騒いでいた女子と目が合った。

「そういえばさ、1番最後に移動教室に来たのって……………アンタだったよね？」

「……………え？」

「ちよつと鞆の中見せてもらうよ。」

「あ、あの……………」

その女子は、私の返事も聞かずに鞆の中身を机の上へぶち撒けた。教科書やノートが散乱する中、見覚えのない財布が……………転がり出て来た。



「コレ、どういう事？」

「……………!？」

その瞬間、ひゅっと息が止まった。そんな……そんな筈ない！私はそんな事してない！何かの間違いだっ……私は次第に激しくなる心臓の鼓動を抑える様に、胸に手をやりながら叫んだ。

「ま、待って！私は知らない……私じゃない！」

そう叫ぶ私を……クラスの皆は、冷え切った眼で見つめていた。その眼に、恐怖と不安で胸を締め付けられ……思わず後退る。

「違うっ……私は、知らないっ……私は……！」

謔言の様にそう繰り返す私の言葉に……答えてくれる人はいなかった。

その後……生徒指導室に呼び出された私は、2週間の停学を言い渡された……違うのに、誰にも信じてもらえなかった。それは先生も同じだった。何をしてるん

だ、恥を知れ、お前には失望した……そんな言葉に対する私の弁明は、聞き入れられる事はなかった。大量の課題の提出を義務付けられ、懸命にソレを消化した。でも、反省文だけは……一文字も書く事が出来なかった。先生は反省文を提出しない私をこれでもかと叱り、罵倒し、怒鳴り散らした……辛くて、苦しくて、誰にも助けを求められない……そんな日が続き、気付けば学校は夏休みに入っていた。

……

夏休みだからといって、私への罰は終わらない。夏休み期間も、数日おきに呼び出され……反省文を出さない事に対して、叱られ怒鳴られ続けた。

どれだけ私はやってない、ちゃんと調べて欲しいと懇願しても受け入れられる事はなかった……私が外部生だから？ それとも、何の取り柄も後ろ盾も無い人間だから？ 口にする言葉を……信じる価値さえ無い人間だから……？ その言葉を、問い掛ける事は出来なかった……

……

今日も、私は呼び出され説教を受けた。説教が終わると、生徒指導室を出て靴箱へと向かう。夏休みでも、部活や委員会で登校している生徒はそれなりに居り、同

じクラスの人と鉢合わせしたら気まずいから、いつも逃げる様に帰っている。今日もさっさと靴を履き替えると、小走りで校門を目指す……その途中、聞き覚えのある声に足を止めた。

「あははは、今思い出しても笑えるわ。」

……あの人だ。どうやら、誰かと電話中らしい……私は隠れて話の内容に耳を傾けた。

「私がさ……財布が無いって態と騒いでねー。自分の鞄から財布が出て来た時のあの女の顔ったら……」

徐々に早くなる鼓動に耐える私とは正反対に、その女子は楽しそうに電話を続けている。

「……えー？ いや、別に？ ちょっとした憂さ晴らし……みたいなの？ 彼氏に振られて苛立ってたからねー。」

その言葉を聞き、私の頭の中は真っ白になった。

そんなくだらない理由で、私はこんな目に……

どうして、そんな事が出来るの……？

「バカみたい……」

口から溢れた言葉は、あの女子に向けた言葉か、或いは……私自身か。

指定された停学期間とはつくに過ぎた。しかし反省文を出さない私には、夏休みが終わっても登校は許されず……呼び出される事もなくなった。

「……」

一日中部屋に籠り、無意味に時間だけを浪費する日々。テレビをつけて色々な番組を見ても、心は動かなかった。好きだったお笑い番組、ドラマ、歌番組……そのどれもが、私の心を素通りして行く……そんな時だった、あのニュース速報が流れて来たのは……

〈四宮グループの内部抗争決着〉

四宮グループ……四大財閥の1つに数えられる超巨大組織だ。少し前に、支配権争いが始まった記憶がある。確か高等部には……四宮家の令嬢が在籍していると、

クラスメイトが話してるのを聞いた事があった……どうせ暇だからと、暫く触れていなかったパソコンを起動した。

……

「酷い……」

1 番始めに検索にヒットした記事を読む。その内容は、とても同じ日本で起こった事とは思えないモノだった。長男、次男の悪行とそれを咎め様ともしない四宮家当主……正常な人間ならば、反感を覚えるだろう。四宮グループの内部抗争については、公平に書かれている様で当主、長男、次男の書かれ方に……僅かだが敵意を感じた。逆に三男と長女については、その様な書かれ方はされていなかった……まるで、誰かが意図的にその様な書き方をして印象操作をしているみたいに……更に記事を読み進めて行くと、そもそもの内部抗争の原因が明らかになった。

「……」

（嘘……そんな理由で？）

その理由は、四宮家の長女である四宮かぐやの……好きな人と結ばれたいという……ありふれたモノだった。政略結婚の道具にされる事を避ける為に、好きな人

と添い遂げる為に、四宮かぐやは全力で抵抗したのだ。

……私だって同じ女だ。そんな使い方をされるのは嫌だし、同情もする……だけど、相手な四宮グループだ。敵対すれば日本には居られなくなるとまで言われているのに……四宮<sup>彼</sup>かぐや<sup>女</sup>には沢山の味方が居た。クラスメイトが、後輩が、卒業して行った先輩達が……四宮グループと敵対してまで、1人の女の子を支え、手を貸し、助けようとした。その事実には私は、無意識のうちに涙を流しながら……

「いいなあ……」

と震える声で呟いていた。

結果的に……四宮家は三男が継ぐ事になったらしい。長男と次男が支配権争いで消耗した所を長女と協力し、勝ち取った様だ。

四宮かぐやと私……大勢の仲間に助けてもらった人と、誰にも助けてもらえなかった……私。その余りにも違い過ぎる差に、また涙が流れた。

こんな都合の良い物語は、万人に与えられるモノではない。四宮かぐやには与えられ、私には与えられなかった……それだけの話で、私もと期待するのは時間の無駄だ。

「疲れちゃった、な……」

そうして、全てを諦めようとした時……その人は来た。

「……以上が今回の事件の全貌と思ってるんだけど、合ってるかな？」

その人は……誰にも信じてもらえなかった私の言葉を、闇に葬られていた事実と事件の真相を述べると、優し気な笑みを浮かべながら私へと問い掛けた。

「……どうして？」

「うん？」

「だって、誰にも……誰にも信じてもらえなかったのに……」

「……君はあまり、人と話すタイプではないらしいね。」

私はその言葉に小さく頷く。

「でもね、見てる人はちゃんと見てるもんだよ。少し調べるだけで、君がクラスに飾られている花の世話をしている事も、係りの子が提出し忘れた書類を職員室に

持って行ってあげる様な子って事も知る事が出来た……君の事をちゃんと見てる人は居たんだよ。」

「……」

その言葉に、私は堪える様に唇を噛んだ。

「君が窃盗をする様な子ではないという確信を持てば、後は虱潰しに情報を集め、精査し、組み立てれば良い……少し時間は掛かったけどね。」

「……私、何度も知らないって……*やっ*……やってないって言ったのに、誰にも信じてもらえなくて……！ *じゅ*……」

「……」

その人は、ベッドに座ったまま泣きじゃくる私に近付くと……

「よく耐えたね、もう大丈夫だよ。」

そう言って、その人は私の頭を……とても優しい手付きで撫でてくれた。もう我慢しなくていいんだと、苦しまなくてもいいんだと伝えてくれているみたいで……今まで溜め込んでいたモノを吐き出す様に、私は声を上げて泣き続けた。

……



「……どうして、ここまでしてくれましたか？」

少女は泣き腫らした瞳で、僕にそう訊ねた。

「……僕も昔、君みたいに誰にも信じてもらえない、助けてもらえない……そんな状況で耐えていた時があったんだ。今思えば……僕にも悪い部分はあったし、もっと上手く立ち回る事が出来ていればと思ったよ。でも大量の課題を提出して、親と教師の説教を何時間も聞かされ続けて……それでも、反省文だけはどうしても書けなかった。」

君と同じだね……その言葉に、少女は驚いた様に目を見開く。

「そ、それで……？」

「うん……そんな時に、助けてくれた人が居たんだ。」

今でも……その光景は鮮明に覚えている。

突然開いたドア……黄金の飾緒が付いた制服に身を包んだ1人の男。

片手には資料らしき紙束を携え……僕が誰にも話さずに来た秘密を事もなげに問答無用で引き剥がした。

よく耐えたな。

お前は、おかしくなんてない。

暗闇の中で動けなくなっていた僕は……その人に救われたんだ。

「傲慢な言い方をすれば……託されたんだと、僕は思ってる。」

「……託された？」

「……俺に恩を返す必要はない、僕や君みたいな子が居たら助けてやれ……その人なら、きっとそう言うと思うから。」

あの時……会長に掛けられた言葉と、ポンと頭に置かれた掌の感触。それは、時間が巻き戻り……やり直す機会に恵まれ、前とは違う学園生活を送る事になって……いつまでも色褪せる事なく、太陽の様に記憶の中で煌々と輝き続けている。

「明日からは、普通に登校出来るよ。君を陥れた生徒は居ないし、君の言葉を信じずに何の調査もしなかった教師も居ない。」

「……え？」

「……今回の件で、僕以外にも動いてくれた人達が居てね。その内の1人が……この話を聞いて、かなり腹を立てたみたいなんだ。」

「そう、なんですか……」

「うん、だから……もう大丈夫だよ。」

「……」

「……怖い？」

「……はい、ごめんなさい。」

「気にしないで。僕もそうだったから……クラスは違うけど、君の味方になってくれる子はちゃんと居るし、最初は保健室登校でもいいからさ。」

「そ、その……」

「うん。」

「……私、許さないとダメですか？」

「……」

「クラスの皆、私の言葉を見殺しして……冷たい眼と汚い言葉を投げ掛けて来たのに、今更謝まれたとしても……許せないかもしれない。」

「……良いと思うよ、許さなくても。」

「……え？」

「謝るって結局は、自己満足みたいなトコあるし……君が許せないなら、許しても

良いと思えるまで……許さなくてもいいんじゃない？」

「い、良いんですか!？」

「なんだったら、謝られる度に言ってやりなよ……うるせえ、ばーか……ってさ。」

「……ふふ、なんですかそれ？」

「良い言葉でしょ？」

「そう……ですね、良いと思います。」

「よし、じゃあ僕はこれで失礼するよ。」

「はい……あ、あのっ……名前、教えて下さい。」

「……僕の名前は、石上優だよ。また何か困った事があったら相談に乗るし、僕に出来る事ならチカラになるから遠慮なく言って。」

「は、はいっ！」

「それじゃ。」

……

家を出ると、ふう……と一息つく。会長みたいにスマートに出来たかはわからないけれど……なんとかなって良かった。空を見上げると、遠く離れた地へと旅立った

2 人の先輩の姿が思い浮かぶ。

「……今頃、イチャイチャしてんのかな？」

様々な困難を乗り越え、遂に結ばれた2人の今に想いを馳せる。

……僕も、もっと頑張らないとな。

かつての僕を救い、暗闇から引っ張り出してくれた……

遥<sup>白銀</sup>か遠<sup>御行</sup>き理想像に、少しでも近付けるように。

――完――

作者の自己満足しゅーりょーです。(´・`Д´)

なんか、書きたくなった(ω。ω)。



## √ F. 藤の千花編

## 藤原千花は主張したい（番外編）

「私は秀知院学園 2 年、生徒会役員書記の藤原千花です。私は、待遇の改善を要求します！ え？ 何処に不満があるのかわからない？……しらばっくれるのもいい加減にして下さい！ 私は怒ってるんですからね!!」  
「ハハハハ」

……

これは、冬休み明けのある日……生徒会室で起きた石上くんとの遣り取りです。

## 〈生徒会室〉

「……そういえば藤原先輩、冬休みはダイエットを頑張るって言ってましたけど、ダイエットは出来ましたか？」

「ふ、冬は痩せ難い季節なので！ 春になったら、ちゃんと結果が出る筈だから良いんです！」

「……藤原先輩、それ間違ってますよ？」

「え？」

「例えば、此処に40……50<sup>キ</sup>分の水が入った容器があるとしますね？ その水を常に37℃位に保っているのが人間で、保ち続けるにはエネルギーを使います。37℃に保ち続けるのが難しいのは、夏と冬どっちですか？」

「……冬です。」

「つまり……冬だから痩せ難いというのは、藤原先輩の只の怠慢って事です。」

「うわああああん!? 正論責めなんて求めてないんですけど!? っていうか、なんで50<sup>キ</sup>って言い直したの!？」

「え？ だって……」ヤジ

石上くんは、チラリと視線を落とすと……黙って私の腹部を見つめて来ました。「何処見てんですか、コラーツ！ そもそも、石上くんがプリンやらゼリーやらを私に食べさせるから悪いんですよー!？」

「清々しいくらいの責任転嫁ですね。」

……………



「……私の扱い酷くないですか？……え？ そんな事ない？……そんな事あるでしょ!? 他にもネタは上がってるんですよ!!」ニギニギ

〈case1〉

「なんで1番最後なの!? 普通にショックなんですけど!?」

「まあ、藤原先輩みたいなtricksterに教えるのは、全部終わってから決めてたんで……」

「誰がtricksterですか!?」

〈case2〉

「なんで私には付き合ってる事内緒にしてたの!? 会長やかぐやさんには言ってたのに!」

「ちょっと面倒くさかったので。」

（すいません、忘れてました。）

「こらあ! 今絶対思ってる方言ったでしょ!」

〈case3〉

「ぶひゅーっ!? ゴホッゴホッ!? い、石上くん! 何言ってるんですか!?!」

（枯れる程!? ミコちゃん、そこまでっ!?）

「うわっ!? 藤原先輩何お茶吹いてるんですか、汚いなあ……」

「なんで私だけ!? それに、下品なのはそっちでしょ!!」

……………

「もおおお! なんで私の扱いは、こんなにテキトーなんですか!? 私こう見えて……っていうか、見ての通り人気あるんですよ!? 私だって……」

### 〈生徒会室〉

「むにゃむにゃ……私らって……いゃ……ヒロインなんれすよお……」  
「ん。」

「藤原……どんな寝言だよ。」

「もう、藤原さんたら……」

「……藤原先輩、何の悩みもなさそうな顔して寝てますね。」

「ははは、だが偶に羨ましくなるがな……藤原の自由奔放な生き方は。」

「ふふ、確かにそうですね。」

「まあ、確かに……」

「いつだって誰だってえ……<sup>や</sup>……恋したら、ヒロインなんれすう……」<sup>や</sup>。

「——」

……  
To be continued?  
↓  
No

跡を濁してはいけない（戒め）

⋮  
To  
be  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
?  
No  
↓  
Y  
E  
S  
?

藤原千花は贈りたい

藤の千花編です。

チカではなく、センカです（ω。ω）

正気を疑われるであろう藤原√開幕です。

……フジワラッテニンキアッタンダナー。

---

〈生徒会室〉

夏休みが終わり、生徒会室にはいつものメンバーが揃っていた。4人は机の上に広げられたカードとサイコロを使い、とあるゲームに興じている。そう《新ハッピーライフゲーム》である。局面は中盤、石上が結婚マスを踏み結婚相手を選ぶ場面へと進んでいた。

「むふふ、石上くんは誰を選ぶんですかー？」

「んー、じゃあ藤原先輩で。」

「っ!? へ、へー? 石上くんは、私みたいな女子がタイプなんですか? 普段の態度は照れ隠しだったんですか?」  
いはい

「藤原……」

（ここぞとばかりに調子乗るな……）

「藤原さん……」

（隙あらば煽るわね、この子……）

「変な言い方しないで下さい、違いますよ。藤原先輩を選んだのは、金目当てです。」

「」

「藤原先輩と踏んだマスの効果を共有出来るんですから、効率良く金が稼げるでしょう?」

「石上、滅茶苦茶ドライだな……」

（高校生なんだから、もう少し藤原の事を意識しても良いと思うが……）

「……効率は大事よね。」

（ホント、石上君って藤原さんに一切靡かないわね……）

「石上くん！ 愛の無い家庭は、誰も幸せになりませんよ!!」

「いや、ゲームですし……」

「この冷徹人間！ 根暗！ DV男！」

「落ち着け、藤原……次は俺だな。」コッ

「……あ、会長も結婚マスですね。」

「!!」

（か、会長が結婚っ!!）

「結婚相手はこの中から選んで下さい。」

「俺も選択式なのか……」

1、四宮かぐや

2、藤原千花

「少ないな、おいっ!! しかも、藤原は石上と結婚してるから実質……四宮一択じゃないか。」

（し、四宮と結婚!!……石上が藤原をもらってくれて良かった!）

「っ！」

（か、会長と結婚!? 石上君、よくぞ藤原さんをもらってくれたわ!）

最早、不良物件扱いである。

「え? 別に会長は私とも結婚出来ますよ? ただその場合は、会長が石上くんに慰謝料払っての略奪愛になりますけど……」

「無駄にドロドロした感じにするな! ま、まあ不義を働く訳にはいかないよな?」

「え、ええ、石上君は可愛い後輩ですしね。」

「……あれ? 四宮先輩は、男性不信カードを持ってるから結婚出来ないんじゃないですか?」

「」

「」

「あ、でも……既に結婚しているプレイヤーが居れば、カードの効果は無効と書いてますね。」

「コレはハッピーライフゲームですよ? 不幸な人なんて出す筈ないじゃないですかー。」

「そうですね……」



（前やった時は、会長……一瞬で2億近い借金出来てたんだけど……）  
「じゃー、かぐやさんと会長は結婚しましたから、踏んだマスの効果は共有ですからね。」

「ああ、四宮……よろしく頼む。」

（四宮と結婚！）

「ええ、会長も……よろしくお願いします。」

（会長と結婚！）

「次は私ですね……あ、出産マスですね、子供が1人出来ました！」

「えええ……？」  
「」

「何で嫌そうな顔してるんですか！私と石上くんの愛の結晶ですよ!？」

「その言い方は……やめて欲しいですね。」

「こういう！こういう人がDVとか、ネグレクトとかやらかすんですよ!!」

「人聞きの悪い事を言わないで下さい。」

30分後……

「……という訳で、ハッピーライフゲームの勝者はかぐやさんでしたー！どうで

した、皆さん！ TG部が作ったゲームは？」

「ええ、それなりに楽しかったですよ？」

（会長……9人も子供を産ませるなんて、なんて欲張りな人なのかしら。）

「ああ、中々面白かったぞ。」

（全く、9人も子供が出来るなんて……四宮もとんだ欲しがり屋さんだな。）

「とりあえず、イベントの中身とカードの効果に差異があるので、その見直しを徹底する様に下さい。イベント内容は藤原先輩が考えたらしいですが、他の部員の意見も聞くべきです。それと、実在する人間の名前を使うのは、色々問題が生じるので控えて下さい。あと即死マスは、1回休みやスタート地点に戻るなどに変更した方が良いでしょう。以上の点を踏まえた上で、デバッグプレイをキチンとして……」

「はい……ハイ……や……ハイ……」

本日の勝敗、藤原の敗北

ガチのダメ出しをされた為。

〈生徒会室〉

「こんにちはー！」

「どもーっす。」

「あれ？ 石上くんだけ？」

「会長は職員室、四宮先輩は弓道部へ顔出しに行きましたよ。」

「へー、石上くんは何してるんですか？」

「……今月で生徒会の任期も終わるので、 unnecessary書類とデータの処理です。」

「……そう、ですか。」

「……藤原先輩？」

「……なんでもないですよー。」

藤原先輩から何やら気落ちした様な空気が漂って来る。原因は先程僕が口にした、生徒会の任期が終わるという発言の所為だろう。前回の生徒会解散の日……藤原先輩は、生徒会室を出ると同時に涙を流した。藤原先輩にも、僕とはまた違った生徒会に対する想い入れがあったのだろう……普段から騒がしい人が静かだと、調

子狂うな。藤原先輩へと掛ける言葉を思案していると、丁度良い話題が思い浮かんだ。

「会長……明日誕生日らしいですね？」

「ええっ!? 石上くん、それ本当!?」

「はい、9月9日ですよね。」

「明日じゃないですか!」

「だから、それさっき言いましたよ。」

「全然知らなかったんですけど!」

「……1年間同じ生徒会に居て、それってどうなんですか？」

「ま、マズイですよ!? このままじゃ私……滅茶苦茶冷たい人みたいじゃないですか!」

「みたいではなく、正にそうだと思いますよ。」

「ど、どうしましょう……此処でちゃんとしたプレゼントを用意しとかなないと、私の誕生日プレゼントにも影響が……」

「強欲過ぎませんか? 悩みの焦点そこですか?」

「……因みに石上くんは、何か誕生日プレゼントを用意してるんですか？」

「え？ はい。会長は書類仕事も多いので、万年筆を……」

「滅茶苦茶ちゃんとしたヤツ！」

「普段からお世話になってる人なんですから、これくらい当然ですよ。」

「石上くん！ ちょっと付き合って下さい！」  
ト

「え？ どうか行くんですか？」

「会長のプレゼントを買いに行くに決まってるでしょ！」

「なんで僕も……」

「石上くんがちゃんとしたヤツを会長にプレゼントする所為で、私のプレゼントのハードルが上がっちゃってるんですから、責任取ってプレゼント選びに付き合うべきじゃないですか!？」

「えー……」

（ダルう……）

「ないですか!？」

「わかりました、行きますよ……」

「そうと決まれば、早く行きますよ！」<sup>グン</sup>

「はいはい。」

〈ショッピングセンター〉

会長への誕生日プレゼントを探す為、僕と藤原先輩は近場のショッピングセンターへと来ていた。紳士服や男性向けの小物を扱う店舗に入ると、早速会長へ渡すプレゼントの物色を始める。

「あ、石上くん。この定期入れとかどうですか？」

「うーん、発想は悪くないですけど……会長は自転車通学なので、あまり使い道は無いかもしれませんね。」

「むむっ、確かに……うーん、じゃあ何にしましょうかねー。」

藤原先輩は唸りながら、商品棚に並べられた小物を見つめている……まあ、自分で選びたいだろうし、此処なら変な物なんて無いから大丈夫か。

「あっ！コレなんかどうですか？」

「へえ、キーケースですか。良いと思いますよ、値段も手頃でデザインも良いですし……」

「ふふふ、私のセンスが光っちゃいましたね！」

……そのセンスを僕への誕生日プレゼントにも活かして欲しかった。

前回の石上、藤原の誕生日……藤原から石上への誕生日プレゼントは、ブタさんの貯金箱である。

---

〈次の日〉

「会長、コレ誕生日プレゼントです！」

「ほう、知っていてくれたのか？ ありがとう、藤原……有り難く頂くよ。」

「普段からお世話になってる人の誕生日くらい、知ってて当然ですよー。」

「……」  
「……」

（面の皮厚いな、この人……）

藤原を見る石上の眼は冷たかった。

「こんにちは。」チャッ

「こんちゃーす。」

「かぐやさん、見て下さい。今日の私、リボンの位置違うんですよ。」

「ふふ、本当ね」サ。サ。サ。

（ケーキも準備出来てるし、プレゼントも用意した……会長ったら、泣いて喜ぶに  
違いないわ！）

頭脳（内）戦開廷まで、残り30分……



## 藤原千花は問い詰めたい

感想ありがとうございます(。ω。)

17巻のカバー下にある心理テストをやれば、殆どの人間が深層心理では藤原の事が好きなのは明らか……っ！

何回やっても藤原に行き着いてしまう……実は藤原が1番好きだったのでは？と気付くフジワラーが居るとか居ないとか……

次の日の放課後、かぐやと藤原が生徒会室へと向かっていた時の事である。

「……そういえば、昨日の会長の誕生日に扇子を贈ったのですが……」

（ふふ、会長の誕生日を知らない藤原さんに、この情報をリークすれば……）

「扇子ですか、良いですね！ 私は、キーケースを贈りましたよ！」

「っ!？」

（ええっ!？ ど、どういう事!？）

「やっぱり同じ生徒会の仲間ですから、誕生日にプレゼントを贈るのは当然ですよー。」

さらっと自分の誕生日にプレゼントを要求しているあたり、藤原は面の皮が厚かった。

「ふ、藤原さん？ どうして、会長の誕生日を？」

（おかしい……つい先日まで、藤原さんは会長の誕生日を知らなかった筈なのに……会長が自分から教えたとは思えませんし。）

「あー、実は一昨日の放課後に石上くんが教えてくれました……急いで買いに行っただですよ。」

「あら、そうなの……良かったわね。」

（石上くん！なんてタイピングで教えてるの!? くっ、計画の立て直しが必要……いえ、会長次第ですが、まだ修正は出来ます！）

〈生徒会室〉

「こんにちは。」カチャ

「こんにちはー！」

「お、おう。」

（しかし、何故昨日……四宮は1人で俺の誕生日を祝った？ 普通なら藤原や石上を巻き込んで皆で祝う筈だ。事実、藤原と石上は俺の誕生日を知っていてプレゼントまでしてくれた……にも関わらず、四宮は2人が帰るまで動かなかった。つまり、藤原と石上の2人と四宮の間には、俺の誕生日に関する情報共有がされていなかった？）

「あら、会長……それは？」

「ん？ ああ、コレは藤原と石上からの誕生日プレゼントでな……装飾も使い勝手も良いから、とても重宝しているよ。」

（以上の点から察するに、四宮は1人で俺の誕生日を祝いたかったという事か？ しかし、異性の誕生日を2人つきりで祝う……その意味を四宮が理解してないとは思えないし、あの四宮がそんなストレートな行動を取るなんて上手い話は無いだろうし……）

あった。

「えへへー、気に入ってくれたみたいで何よりです！」

「ああ……」ハハハ。

（しかし、四宮はプレゼントを贈りケーキまで用意してくれた……その事実を公にすれば、四宮を追い詰める事が出来るだろう。しかし……四宮の思惑はどうであれ、善意からの行いである事に間違いはない。）

「あ、会長それ……」

「ああ、コレは友人からの贈り物で……」

（ならば、善意に付け込み四宮を追い詰めるのは、あまりにも不義理というモノ。それに誕生日プレゼントにここまでの物を贈り、ケーキまで用意する位だ。四宮が告白して来るのも時間の問題……四宮から貰った事は伏せる、今回はそれでいいだろう。）

「友人……友人、そうですか……ふうん？」

「藤原……？」

（なんだ？ 妙な違和感が……）

白銀の考えは、かぐやの立場に立って考えた場合間違っではない。誰だって異性の誕生日を2人つきりで祝う事には、多少の羞恥心を感じるし、秘密にしたい

モノである。他者の心を思い遣り、善意に付け込む事を良しとしない……白銀御行とはそういう男である。しかし……

「……会長は、かぐやさんの事が好きなんですか？」

それはあくまでも白銀御行の考えであり、信条である。

「っ！！？　　ななな何を馬鹿な事ををっ!？」

「だってそうでしょ! 私と石上くんのプレゼントは誰から貰ったか隠さなかったのに、どうしてかぐやさんからのプレゼントだけ友人からの贈り物……なんて濁した言い方したんですか!？　どうして、その扇子をかぐやさんから貰ったって隠そうとしたんですか!？　かぐやさんの事が好きだから、プレゼントの事は内緒にして2人だけの秘密にしたかったって事なんでしょ!？　誕生日をかぐやさんにだけ教えたのも、かぐやさんにだけ祝って欲しかったからじゃないんですか!？」

藤原の立場からすれば、自分達からのプレゼントの出所は喋ったのに、かぐやからのプレゼントについては誤魔化した……そこには、何かしらの下心があるのではないかと邪推するのは必然！　異性に対しての下心……即ち、好意である。

「……」ニヤッ

（ふふ、会長？もし貴方が私からの贈り物の出所を明らかにしていれば、こんな事にはならなかったんですよ？素直に私から貰ったと言えば、それ以上私の攻めは続かなかった……しかし、会長は扇子の出所を秘密にしようとした。扇子をプレゼントしたのが私だと知っている藤原さんに、その誤魔化し方は悪手。そして、その誤魔化しに隠れた意味を……普段から恋愛事に飢えてる藤原さんが見逃す筈がありません！）

白銀が扇子の出所を喋る確率は50%！白銀はババを引き、かぐやは賭けに勝ったのである。

「最初からかぐやさんの事が好きだって教えてくれてたら、私だって応援したのに！！」

（こ、コレはマズイ!!）

「……なるほど、藤原の言いたい事はわかった。だが、そういう話になるのなら……それは四宮の方だろう？」

「え、どういう意味ですか？」

「四宮は一年前、生徒会名簿を見て俺の誕生日を知ったに過ぎず、俺が自発的に教

えた訳ではない。にも関わらず、昨日四宮は態々藤原と石上が帰るのを待ってから俺にプレゼントを贈った……ケーキまで用意してな。その行動の理由は、さっき藤原が言ったモノだろう。」ン。ン。ン。

「じ、じゃあ……かぐやさんの方が会長の誕生日を1人で祝いたかったって事!」

「そういう事だ。」ン。ン。ン。

「……」

（会長……中々上手い切り返しです。会長、扇子使ってくれてる!でも、会長……そのエピソードは一年も前のモノ、そんな昔の事を覚えてる時点でちゃんと使ってくれてる……うれしい!）

「か、かぐやさん、そうなんですか?」

「」

（あ、あれ……? 何を言えば良いんですか!? 会長、扇子使ってくれてあげがとう?……違う!! 絶対それじゃない!）

「かぐやさん、答えて下さい! もしかして、かぐやさんは会長の事が好きなんですか!」

「え、ええとっ……」*ワワ*

(ど、どうしよう!? このままじゃっ……)

「かぐやさん!!」

「どうしたんですか、藤原先輩……廊下まで声が聞こえてましたよ?」*ぎぎ*

「石上くん、聞いて下さいよ! かぐやさん……会長の誕生日を2人っきりで祝ったんですよ!」

「へえ、そうなんですか?」

「え、ええ、まあ……」

「つという事はですよ!? かぐやさんは会長の事が好きって事じゃないですか!」  
「ええ……誕生日祝うだけで、なんでそうなるんですか?」

「だって、異性の誕生日を2人っきりでなんて……そうとは思えませんか!」

「え……じゃあ藤原先輩は、自分の誕生日に男子がお祝いしたら……あ、この人は私の事好きなんだなって思うんですか? 藤原先輩、ちょっとそれは……自意識過剰とか、自惚れが酷いとか……そういうトコですよ?」

「なんで私を攻撃するの!? でも、かぐやさんが会長の誕生日を祝ったのは事実で



しょ！」

「藤原先輩の考え過ぎですって。」

「そんな事ありません！このラブ探偵の目は誤魔化せ……」

「だいたい、藤原先輩……さっきからギャイギャイ言ってますけど、一昨日まで会長の誕生日知らなかったじゃないですか。」

「ちよっ、石上くん!?」

「藤原マジか、地味にシヨックなんだが……」

「しかも、プレゼントした理由が……自分の誕生日の時に貰うプレゼントに影響が出るからって言ってましたよ?」

「うわ……」  
「ㄆㄆ」

「ええ……」  
「ㄆㄆ」

「なんで石上くんは全部言っちゃうの!?……ち、違いますよ、会長!? そんな強欲的理屈な訳ないじゃないですか! でも会長、私の誕生日プレゼントはちゃんとした物下さいね!」

「欲ダダ漏れじゃねーか、藤原……」

「藤原さん……はしたないわよ。」

（有耶無耶になってくれて助かったわ……）

「もう！ 石上くんのバカ！ ボケナス!! チクリ魔!!!!」

「いや、口止めとかなかったじゃないですか。」

「私の良きに計らうべきでしょー!?!」

「何処の將軍ですか。」

……

「……石上くん、よくやったわ。」キョー

「え？ はあ、どうも？」

本日の勝敗、引き分け

有耶無耶になった為。

## 藤原千花は塞ぎたい

感想ありがとうございます(。ω。)

これからは投稿頻度が落ちますが、少なくとも週に一度は投稿します。A:(、

EJ) /):

〈9月某日〉

その日、生徒会室には1人の少女の悲痛な叫びが響き渡っていた。

へぴしゃアアアアアッ!!

「うへあああああ!!? おへソ取られちゃいますうううっ!!?」

秀知院学園が居を構える東京都には現在……激しい雷雨が降り注いでおり、台風と錯覚する程の大量の雨とけたたましい雷音が轟いていた。

「……相変わらず雷が苦手か。」

「1学期もありましたね、こんな事……」

「怖いっ……怖いですう……」エグエグッ

「帰る頃には止んでるといいが……」

「そうですね……」

「私おへソ隠してるので、かぐやさんまた耳塞いで下さい……」

「……ごめんなさい、藤原さん。私、今から少し弓道部に顔を出しに行かないといけなくて……」

「えええっ!?」ザ——ン

「俺も部活連の会議があるから、そろそろ行かなければならないな。」

「会長も!?」ザ——ン

「じゃあ藤原さん、少し外しますね。」

「俺もそろそろ行くか。」

「え、えええっ!?……か、かぐやさん、会長……ちょっと待っ……!」

〈ゴロゴロ……〉〈ピシヤアアアアッ!!〉

「うえあああああっ!?」ビュッ

……

「うわ、コレ帰る時止んでるかな……」

生徒会室へと向かう道中……窓越しに鳴り響く雷と流れ落ちる雨を見ながらそう言葉を洩らす。最悪、タクシーで帰る事になるだろう……僕はほんの少しウンザリとした気分を感じながら、生徒会室のドアに手を掛けた。

「うう…怖い、怖いですう……！」  
「ハッハッ」

鳴り続く雷の音から少しでも逃げる為、私はソファの後ろに蹲る様に隠れました。両手で耳を塞ぎたいけど……それをするとおへソを守れません。私は仕方なく片手でお腹を隠し、残った方の手で片耳を塞いで耐え続けます……

「ゴロゴロ……」

「ひっ!?」  
「どッ」

大きな雷音が鳴り響く前兆を察知して、思わず体が固まりました。

「ううっ……雷やだあっ……怖いっ……」

へぴシャアアアアッ!!!!」

「うあああああっ!?!」

雷の轟音とそれによって生まれた振動が……私の鼓膜、体、心へと襲い掛かります。恐怖のあまり、ポロポロと流れ出た涙が……スカートを濡らし続けています……

「グッ……ううう……!」

1人だと余計に怖さを感じてしまいます……私は無意識に、まるで助けを求める様に……生徒会の皆の名前を呟いていました。

「かぐやさん、会長お……石上くん……!」

「……藤原先輩、大丈夫ですか?」

その言葉と共に、カポツと頭に何かが被せられました。顔を上げると其処には、少し困った顔をした石上くんが居ました。

「石上くん……?」

「……それ、使って良いですよ。」

石上くんの言葉を聞き、頭にスッと手を伸ばすと被せられた物が何かを確認しま

す。

「コレ……ヘッドホン？」

「仕方ないから貸してあげますよ。雷の音、苦手みたいです……」

「石上くん……！」

普段は見られない……石上くんの優しさに感動している私を余所に、石上くんはスマホを操作してヘッドホンへと音楽を流しました……普段からそういった類のものに触れる機会の無い私でもわかりました。甘ったるく感じる歌声、背筋がゾワゾワする歌詞、テレビの歌番組じゃ殆ど聴く事が無いメロディ、この流れて来る音楽は……

〈萌え萌えきゅんきゅん！〉〈萌え萌えキュンキュン！〉〈あなたのハートに剛速きゅん！〉

「

（アニソンだあああああっ！！？）

「藤原先輩、音量は大丈夫ですか？」

「音量は問題じゃありません！選曲!! どうしてコレをチョイスしたの!!」

「いや、生半可なインパクトじゃ雷の音は誤魔化せないと思って……」

「確かにインパクトは十分でしたけど！ 普通こういう時ってもっとこう……あるでしょ!？」

「藤原先輩はホント、ワガママですね……」

呆れた様な言い方で石上くんは、やれやれと首を振って答えます。

「なんで私が非常識みたいな感じで言うの!？ コレに関しては、石上くんがオカシイでしょ!？」

「……藤原先輩にオカシイって言われると、ちくわに中身のない奴は嫌いだって言われた気分になりますね。」

「どういう意味ですか、こらー!!」

藤原千花は気付かない……石上と話をしているうちに涙は引っ込み、雷の音も気にならなくなっていた事に。

「一応……女子向けのアニソンメドレーとかもありますけど、聴きます?」

「アニソンから離れて下さい!!」ヤッヤッヤッ

本日の勝敗、藤原の勝利



石上とギヤイギヤイやってるうちに雷が止んだ為。

〈生徒会室〉

「十五夜!! 月見するぞー!! フッフー!!」

9月も中旬へと差し掛かり、生徒会解散まで2週間を切った。生徒会メンバーは白銀の提案で業務終了後、屋上での月見を敢行する事と相成った。

〈屋上〉

「おっ餅ー! おっ餅ー!! モッチリモチロン、お餅ー♪」

鍋に丸めた餅を投入しながら、藤原先輩は変な歌を歌っている。その姿を視界に入れながら、僕は先程の藤原先輩の発言を思い出す。

私は花より団子、月よりお餅です!

「色気より食い気か……」

(藤原先輩らしいけど……)

「え？ 石上くん、何か言いました？」

「いえ、何も……」

「ふーん……あ、流れ星！」

「あ、ホントですね。」

「世界が平和になりますように、世界が平和になりますように、世界が……あー！間に合いませんでした……」

「願い事のスケールが大きい……」

「石上くん、私……世界の平和を脅かす魔王になっちゃいました……」

「もしかして、3回言えなかったからですか？ 藤原先輩は精々、下っ端の構成員とかでしょ……魔王とか烏滸がましいです。」

「そんな言い方ある!？」*チャッ*——

「それにですね、魔王っていうのは……人畜無害そうなかよわい少女の様に見えて其の実……内面は鬼みたいに怖い人の事を言うんですよ？」

「……はい？」

僕の言葉に、藤原先輩が？マークを浮かべた頃……ブルブルとポケットの中でス

マホが振動した。取り出して画面を見ると、非通知で電話が掛かって来ている……普段なら非通知で電話が掛かって来ても無視するのだが、その時はそんな気にならず……通話ボタンをタップしていた。

「はい、もしもし？」

〈……石上君。〉

「かつ、かしっ……!？」

電話で聞こえる声は本人ではなく、機械が似た音を作り出していると聞いた事がある……いっそのこと、機械のエラーで偶々この声になっていたら良いのにと、無意味な願望を抱きながら耳へと届く音声に意識を集中する。

〈石上君……今、私の悪口言わなかった？〉

「その様な事あろうはずがございません！」

〈ふーん、じゃあいいや……ごめんね、いきなり電話して。〉

「い、いえ、それはいいんですけど……あの、どうして僕の番号知って……」

〈フフ……秘密。〉ム、ム、ム——

「」

（怖あああっ!? ヤバい、ホントビビった……ついこの前、夏休みにマキ先輩と会う機会が減ったとかで情緒不安定になっててヤバかったのに……え？ 盗聴器とか仕掛けられてないよね？）

「……石上くん、何やってるんですか？」

服を捲ったり、ポケットに手を出し入れしているのを訝しんだ藤原先輩に話し掛けられる。

「いや、盗聴器とか付いてないかなと……」

「……なんで盗聴器？」

本日の勝敗、石上の敗北

暫くの間、盗聴器の存在に疑心暗鬼になっていた為。

## 解散、打ち上げ、再始動

感想ありがとうございます(ω。)

個人的に藤原だけは、ボーボボの世界に行ってもやっていけると思ってる(〃ω。)

〈ファミレス〉

「「カンパニー！」」

会長が木箱に飾緒を仕舞い終わると、コップを掲げて乾杯の音頭をとる。今日で第67期生徒会は、その任期を終えた……今は打ち上げの為、ファミレスで想い出話に花を咲かせている最中だ。

「しかし……俺としては、石上なら任せても大丈夫と思ってたんだがな……」

「そうですね、私もそう思います。」

「そうですよ！もし石上くんが生徒会長に立候補して、奇跡的に当選したら……」

書記としてお手伝いしてあげても良いんですよ？」

「ハハハ、僕には向いてないっすよ。あくまでサポートがメインなんで……」

「……まあ、無理強いする訳にもいかないか。」

「すいません、だけど……」

「ん？」

「あ、いえ……なんでもないです。」

「そうか？」

危なかった……つい、また会長がやるでしょ？ と言う所だった。

「……石上くんがやらないなら、私が立候補して生徒会長になっちゃいますよ？」

「ハハハハハ！」ニ。ニ。ニ。ニ。

藤原先輩の発言に手を叩きながら爆笑する。

「何がおかしいんですか!? ブン殴りますよ!？」

……

数日前……

「かれん……私、出馬してみようと思うの。」ニ。

「エリカ……冗談ですわよね？」

元生徒会のヤベー奴とマスメディア部のヤベー奴、どちらが票を取れるか興味深い所である。

……………

「まあ落ちて着け藤原。無礼講といこうじゃないか、今日で最後だしな。」

「最後……」

「……藤原さん？」

「……藤原？ どうした？」

僅かに顔を曇らせた藤原先輩に、会長は問い掛ける。

「いえ、なんでもないです！ あ、そういえば私……こういうの作って来たんですよ！」

藤原先輩は……何かを誤魔化す様にそう言いながら、トンツと卓上に30センチ四方の画用紙を置いた。

〈第67棋生徒会お疲れ会〉

「ははは、ご苦勞な事だな藤わ……ん？」

「……あら？」

「……藤原先輩、キの漢字が違います。」

「……あっ!？」

「藤原先輩……書記なのにそのミスはヤバくないっすか？ コレホント一生イジリますからね。」

「ま、間違いは誰にだってあるでしょっ!？ それとも石上くんは、現国のテストはいつも100点なんですか!？ 一切の漢字間違いはしない完璧人間なんですか!？」

「少なくとも、小学生レベルのミスはしませんね。」

「もー！ 石上くん、全然後輩感ないんですけど!？」

「後輩感ってなんですか?？」

「後輩らしく、先輩を敬ってる感の事です!？」

「微妙にフワッとした定義だな……」

「石上君は、普通に後輩らしくしていると思いますけど……」

「かぐやさん、騙されたらダメですよ！ 上げて落とす作戦かもしれません!？」

「ええ……」



「いや、上げて落とす意味ないだろ。」

「するにしても、藤原先輩にしかしませんよ。」

「私にもしないで下さい！」ヤッヤッヤッ

そうして時間は過ぎて行つた……

「じゃあ藤原先輩、お疲れ様でした。」

駅で会長と四宮先輩の2人と別れた後、30分もしないうちに藤原先輩の最寄駅に到着した。お疲れ様という労いの言葉に、藤原先輩は黙って此方を見つめている。

「……」

「……藤原先輩？」

「……石上くんは、寂しくないんですか？」

「……どういう意味です？」

「だ、だって、そんなアツサリお疲れ様とか言うし……そりゃ石上くんとは半年く

らしいの付き合いしかなかったですけど、もっとう……」

藤原先輩はモジモジと指をイジリ、少しだけ恨めしそうな眼で此方を見ながらそう洩らした。

「……大丈夫ですよ。」

「え？」

「また、皆で集まる事になると思いますよ……だからさっきのは、また明日って意味です。」

「そう、ですか……そうですね！生徒会がなくなつて、また集まれば良いんですよね！」

「……そうですよ。それに……しんみりするなんて、藤原先輩らしくないですよ？」

「

（……会長が生徒会長に立候補するから、また直ぐに集まる事になるって意味なんだけど……まあいいか。それを言ったとしても、どうして知ってるんだって話になるし……）

「どういう意味ですか！私だってしんみりする事くらいあります!!」

「ああ、今日とか生徒会室出た瞬間号泣してましたもんね。」

「あ、あれはっ……心の汗です!!」

「……どっかで聞いた様なフレーズですね。」

「もう！ 相変わらず石上くんは、上級生に対する礼儀がなってませんね。半年程度じゃ、石上くんを更生させるのは無理だったみたいですね……」

藤原先輩は、やれやれと首を振りながらそう言った。

「人を問題児みたいな言い方しないで下さい。あと、何度も言いますが舐めた態度取ってるのは藤原先輩に対してだけです。」

「だからなんで!? 割と普通に接して来るみゆき君でもここまでじゃないよ!?」

「なんででしょうねえ……」

「もう！ 石上くんのアホ！ 礼儀知らず！ 不良優等生!! もう帰ります!」

「はい、気を付けて。」

くるっと藤原先輩は背を向けて歩き出すと……

「……石上くん!」

「はい?」

直ぐに立ち止まり、此方を振り向いた。

「また明日ね!!」

手を上げてブンブンと振る藤原先輩に……

「はい、また明日。」

と、軽く手を振って返し帰路についた。

### 〈藤原家〉

「ただいま帰りましたー。」

「今日は遅かったね、姉様。」

「生徒会の打ち上げをしてたんですよ。」

「そういえば、今日で生徒会の任期終わりだっけ？　ねえ、姉様……生徒会は楽しかった?」

「もちろんです！　1年があつという間でした！」

「ふーん……？ 私も生徒会入ってるけど、そこまでじゃないなあ……」

「まあ、会長に生徒会にスカウトされた最初の頃は、私に務まるか不安でしたし、仲の悪かった会長とかぐやさんの仲を取り持ちたりと、大変な事もありましたけど……少しすると、会長とかぐやさんも普通に話す様になりましたし、2年生になって会長が石上くんをスカウトして来て……皆でゲームしたりっ…花火……見たり……」

「姉様って、意外と涙脆いんだよねえ。」*サザサザ*

「だって、寂しいですよっ……！」*ヒュヒュ*

「……別に、もう二度と会えなくなる訳でもないのにねえ。」

「それとこれとは別なんですうっ……！」

「ハイハイ。」

後日、白銀から生徒会長に立候補する事を聞き、有頂天になる藤原であった。

## 〈空き教室〉

「……とりあえず、今日はこんな所か。」

「そうですねー。」

「もう少しすれば、色々任せる仕事も増えて来ると思うから……藤原、その時は頼んだぞ。」

「はい、任せて下さい！ まあ……私は応援演説任されないので、今は暇ですしねー。」

「だから悪かったって、拗ねるなよ……もうこんな時間か、そろそろ帰らないといけないな。」

（藤原……よくもまあ自分で自分の事、純院の生徒を取り込める程の人気とカリスマの持ち主って言えるよな。この自信は見習いたい所だが……）

「……みゆき君！」

「ん、どうした藤原？」

「えーと……そ、その、石上くんの事は、誘わないのかなって……」ぎゅぎゅ

「フッ……心配するな、石上には既に話を通してている。今は別件で準備を進めても

らっているから、別行動なだけだ。」

「っ！ そうでしたか、なら良かったです！」い。――

「……」

「みゆき君？ どうしました？」

「……いや、なんでもない。」

（まさか……な。）

## 藤原千花は認めない

感想ありがとうございます(。ω。)

## 〈中庭〉

生徒会長選挙期間に入り、白銀御行陣営として活動し始めてから数日が経過したある日……会長のPR動画に必要な資料もある程度集まったし……あとは編集作業に取り掛かるだけだ。

「うーん……？」

中庭を歩いていると、うーんと唸りながらキョロキョロと周りを見渡して歩く藤原先輩と遭遇した。

「あ、石上くん。」

「藤原先輩、何か探してるんですか？」

「はい、選択授業の課題で身近なモノを被写体に絵を描くっていうのが出たんです



けど、丁度いい被写体が見つからないんですね。」

「へえ、大変ですね……」

「そうなんですよお……はあ、もう石上くんが良いので被写体になってくれますか？」

「妥協を前面に押し出した言い方されて、了承すると思います？」

「もう悩み過ぎて何を描けばいいのかわかんなくなっちゃって……これ以上は面倒臭いし、もう石上くんが良いかなって。」

「少しは憚った言い方をして下さい。はあ、わかりましたよ……パパッと描いて下さいね？」

「任せて下さい！ これでも絵には自信があるんです!!」

……

〈数日前、初の選択美術授業〉

「わー！ 早坂さん、絵上手ですね！」

「それ程でもないし……書記ちゃんも描けたの？ 見せて見せて！」

「……じゃーん!!」  
まぎ

「うーっわ……」

自身を被写体として描かれた早坂はこう思ったそうな……

「ピカソかと思つたし。」

……

「よし！ 出来ました!!」

「……一応、見せてもらつて良いですか？」

「良いですよー……じゃーん！」  
（きん）

「うーっわ……」

（ピカソ感が凄い……）

「えへへー！」  
（いづ）

「……ハハハ。」

（まあいいか……）

楽しそうにスケッチブックを此方に向けて笑う藤原先輩を見た所為か、気付けば僕も釣られて笑みが溢れていた。全く藤原先輩は……でも、この人は悩み無くヘラヘラ笑つてるのが1番らしいよな。

「これはA評価取ったでしょう！」トヤ

「それはないっすね。」

「ええっ!?!」カビ〜

〈秀知院校舎内〉

早朝の登校時、教室を目指して歩いている時の事だ。廊下を歩いていると、目の前に2つの見慣れた後ろ姿が視界に入った。

「会長、藤原先輩、おはざーす。」

僕の軽い挨拶に藤原先輩が勢い良く振り向いた。

「石上くん！ 会長が大変なんです!!」

「……はい？」

近寄って腕を掴みながら藤原先輩は、そんな事を言う。クルッと会長へ視線を移すと、キラッキラッな眼をした会長が視界に飛び込んで来た。

「……おう、石上。」

「会長、教会で呪い解いて来たんですか？」

「いや、元から呪われてねえから。」

「でも、普段の眼光（強）状態じゃないと……やっぱり違和感ありますね。」

「普段の眼がまるで、状態異常みたいな言い方すんな。」

「でも真面目な話、その状態なら滅茶苦茶モテるでしょうね。」

「……マジで？」

「マジっす。普段の威圧感が皆無ですし、モテ期到来っすね。藤原先輩もそう思いませんか？」

「うーん……チェンジで!!」

「おいコラ。」

「まあ藤原先輩は、異性に対する趣味趣向も特殊っぽいですからアテにするだけ無駄でしたか……」

「も!?! 石上くん、もってどういう意味!?!」

「そういう意味です。」

「ギャイギャイギャイギャイ!!」

「なんで急にラリってるんですか?」

「ラリってません!!」~~ギャギャ~~

「……モテ期か。」

(そうか、普段の威圧感が無いのか……あれ? だったら、四宮落とせるんじゃないか?!?)

その為に起こす行動が無駄になる事を……白銀はまだ知らない。

選挙期間に入り1週間が経過した。白銀御行と対抗馬である伊井野ミコの顔合わせも無事終了……場面はとある姉妹の遣り取りへと移行する。

〈藤原家〉

「……それで石上くんが私の事、裏切りボンとか言っただけですよ!? 石上くんは、先輩に対する敬意が一切無い子なんです!!」~~ニギニギ~~

「いや……話聞く限り、実際に姉様裏切ってるし……」

「別に裏切ってません！ ちょっと寝返っただけです!!」

人はそれを裏切りという。

「姉様ってさー、普段から石上先輩の事色々言ってるけど……実は好きだったりして？」 いはい

「は……ハーツ!? なんですかソレ!? ハーツ!? なんですかソレ!!!」 くわっ!  
「ムキになるとか逆に怪しいよー? 意識する様な事の1回や2回あったんじゃないの?」 いはい

「そんな訳っ……」

ニマニマとした笑みを浮かべる妹萌葉の発言に、藤原の脳裏には2つの出来事が浮かび上がっていた。

……

「石上くん……?」

「……それ、使って良いですよ。」

「コレ……ヘッドホン?」

「仕方ないから貸してあげますよ。雷の音、苦手みたいです……」

「石上くん……!」

……

「ぐうつ……ぐすつ、えぐつ……!」*サ。サ。ロ*

「藤原……」

「……藤原先輩。」*サ。ン*

「ううつ……*ズ。ズ*、石上くん……？」

「藤原先輩のそういう……自分の感情に素直な所、僕は好きですよ。」

「ううつ!! こんな時だけ……ひくつ、優しい事言うのズルいですう!」

「……そうっすね、すいません。」

……

「……っないですけど!! ホント、全然! これっぽちもないですけど!!」くあっ

!

「ふーん? ホントかなあ?」*ハハハ*

「当たり前です! 石上くんみたいな不良優等生なんてこっちから願い下げです!

ナイナイナイのカタツムリです!!」

「それを言うのなら、無理無理無理のカタツムリでしょ……でも、嫌よ嫌よも好きの内って言うけどねぇ？」 いざや

「萌葉！」

「キャー、姉様が怒ったー！」

〈生徒会長選挙当日〉

前回とほぼ同じ流れで生徒会長選挙は無事終了……投票集計後、僕と会長は集計結果が張り出された掲示板の前に陣取っていた。因みに……四宮先輩は前回同様胃痛がするらしく、藤原先輩に支えられながら保健室へと向かった。

「……会長、お疲れっす。」と

満足そうに、でも何処かホッとした様な表情を浮かべる会長に拳を突き出しながら劳いの言葉を掛ける。



「ああ、石上もお疲れ。」フツ

拳を突き出す僕を見て、会長もフツと笑みを浮かべながら拳を合わせた。

「石上くん！」フツ

「え？」

振り返ると、両手を上げて此方に向かつて来る藤原先輩が視界に映った。僕は反射的に身を引きながら両手を上げる。

「ハイタータッチ！」ハッ

「っ!？」

石上が身を引いた分、藤原は前のめりになりながらハイタータッチを敢行した。当然前のめりになった分、藤原は石上へ凭れる様な形になる……つまり、かぐやが同じ事をしたとしても、決して当たらない部位が石上の胸板に当たっていた。

「……」

「やった、やったー！勝ちましたよー！……あれ？石上くん、どうしたんですか？」

「……いえ、何でもないです。」

（藤原先輩、パーソナルスペース狭過ぎるんだよね……）

「ふー……でも、会長が舞台に上がった時は心臓が止まるかと思いましたよ。」

「ハハハ、悪い悪い。」

「でも、コレで今まで通り……また皆で生徒会出来ますね！」

「え？」

安心した様にそう言う藤原先輩を見て、ついイタズラ心が湧き……え？ マジで言ってるの？ という顔をして藤原先輩を見る。

「……えっ!? か、会長!? 大丈夫ですよね!? そんな、利用するだけ利用して当選したら用済みでポイッ……みたいな事しませんよね!?」

「大声で誤解される様な事を言うな!……石上も、あまり藤原で遊ぶなよ。」

「はい、気をつけます。」

「もー！ なんで石上くんはそんなにイジワルなの!？」

「すみません、つい……」

「ついじゃないでしょ、ついじゃー！」 ~~サッサッサ~~

本日の勝敗、白銀陣営の勝利

## 藤原千花は救いたい

感想ありがとうございます。(ω。)

## 〈生徒会室〉

会長選挙から1週間が経過した。1週間前……白銀会長に敗北した私は、その日の内に生徒会へとスカウトされ、生徒会役員会計監査として生徒会業務に従事する事となった……とは言っても、会計である石上が作る書類とデータには誤りが殆ど無い為、会計監査としての仕事や負担はあまり無いのが現状だ。

「あれ？ まだ誰も来てないんだ……」*ザザ*

今日は珍しく、私が1番乗りらしい……私は皆が来るまで勉強していようと、机の上に勉強道具を広げてノートにペンを走らせる。暫し集中していると、カサカサという妙に耳障りな音が足元から聞こえ、私は視線を落とした。

「……？」*ザザ*

「じょうじ」*かまち*

※実際には喋ってません

「

.....

「おう、石上。」

「あ、会長、おつです。」

生徒会室に向かう途中、トイレから出て来た会長と鉢合わせた。

「ああ、石上も今から生徒会か？」

「はい、会長もですか？」

「ああ、まだ忙しくなるのは少し先だが……余裕がある内に終わらせられる仕事は終わらせておきたいしな。」

「そうですね、11月には体育祭……それが終われば、文化祭の準備に追われますからね。」

「初めてで大変な事もあるだろうが、石上……頼りにしてるぞ。」

「ハハハ、任せて下さい。」

（一度同じ経験をしてるから、前よりは効率良く準備出来るだろうし。）

会長と話しながら歩き、生徒会室のドア前にたどり着いた頃……

〈ひゃあああっ!!?〉

室内から女子の甲高い叫び声が聞こえて来た。

「この声はっ……」

「伊井野です!」

「伊井野監査、何があった!?!」<sup>サッ</sup>

会長は勢いよくドアを開けると、室内にはソファに両足を上げ膝を抱えた状態で座る伊井野の姿があった。まるで、足が床に触れてはいけないという強迫観念に苛まれている様な雰囲気だ。

「あ、足っ…足元っ……」<sup>どろどろ</sup>

伊井野は震える手で、会長の足元を指差して答える。自然と僕と会長の視線も下へと向く、すると其処には……

「じょうじい!」<sup>おわお</sup>

※喋ってません

「

「げっ!? ゴキブリ!」

「い、石上! 早くなんとかしてよっ!」

「な、なんとかって言ってもな……会長、どうします?」

「ダメだ、後輩達の前で気を失うなんて……無様な姿は晒せない!」

「……ッ!!」ぐちゃ

白銀、自ら舌を噛み意識を保つが……

「石上、伊井野監査が先日没収したファッション雑誌が其処にある……それでぶっ叩け!」

さらっと石上にゴキブリ駆除を押し付けているあたり、白銀は狡かった。

「わかりました! 会長は、死骸の片付けお願いしますね!」

「えっ……」

予想外のセリフが飛んで来た……みたいな顔をする会長から意識をゴキブリへと移す。僕は雑誌を丸めると、壁によじ登るゴキブリと距離を詰め、フッと息を吐いて、僕は雑誌を振り上げた。

「ダメーッ!!」ガハッ

「藤原先輩……!!?」ハ。コ。ー

突然現れた藤原先輩は、叫びながら僕とゴキブリの間に割り込んだ。ゴキブリへと振り下ろす筈の雑誌は、藤原先輩の脳天へと直撃した……

「あいたあっ!!?」

「藤原先輩!?!」

「ゴキブリを庇っただど!?!」

伊井野と会長は信じられないという表情で藤原先輩を見る……勿論、僕も信じられない気持ちで一杯だし、そもそも庇う意味がわからない。

「ちょ、何してるんですか、藤原先輩!?!」

「慈悲深きヒロインとして、目の前で起こる殺生は見逃せません!」

「ゴキブリ庇うヒロインとか聞いた事ねえよ!」

「何アホな事言ってるんですか!?! 藤原先輩、早くどいて下さい!」

「前も言いましたけど、ウルシゴキブリさんは害虫じゃありません、無益な殺生は控えて下さい! ミコちゃんもそう思いますよね!?!」

「ええっ!? で、でも……その……」

流石の伊井野でも、この藤原先輩の言葉には賛同出来ないらしい……まあ、当たり前だけど。

「じょうじいいいっ!!」*フウフウ*

※何度も言いますが喋ってません

「ひゃああああっ!?」

「飛びやがったあああっ!?」

壁に止まっていたゴキブリは、ブーンと羽根を高速で動かして制空権を獲得した。自分達に向かって飛んで来るゴキブリ、という衝撃的な光景を見た伊井野と會長は声を上げて跳び退る。

「石上い! 早くなんとかしてよおっ!」

伊井野から泣きそうな声で叱責が飛んで来る。

「わ、わかった、わかったから、とりあえず口は閉じとけ!」

空いた口にゴキブリが飛び込む光景なんて、死んでも見たくない。

「と!?」



「ッ!?」

僕の言葉の意味を理解したのか、伊井野と会長は口元を手で覆い隠して後退る。

「じょうじいいいいっ!?!?」  
ッ  
!

※喋ってません（多分）

「んむっ!?!」

「ぐっ!?!」

「クソッ！好き勝手に飛び回りやがって……!」

僕は雑誌を丸め、構え直すと……

「やらせません！やらせませんよお!?!」  
ッ

またしても藤原先輩の邪魔が入る。藤原先輩は、背中から両手を回し抱き付いて僕の動きを封じに掛かる。

「ちよっ!?! 藤原先輩、マジでいい加減にして下さい!?!……ッ!?! あと距離感！少しは距離感考えて下さい！」

「藤原は何がしたいんだよ!?!」

「むむうーっ!」

最終的に……藤原先輩が1学期の時と同様、ゴキブリを素手で捕まえて外に逃がす事で……事態は一応の収束を見せた。

「あー、疲れた……」

「うう……ぐっ……」

「何はともあれ、一件落着ですね！」ギョッ

「……藤原先輩、手洗いました？」

「え？ なんですか？」

「……」

（ないわー……）

……

「こんにちは……あら？ 皆さん何かあったんですか？」

「四宮か、いや……」

「別に……」

「うう、怖かった……」ぐっ

「今日も良い事しました！」にー。——

「?」

……

一方その頃、秀知院学園近くの森……

(リボンの少女よ、この恩は……一族総出で必ず返すと約束しよう。)

藤原の所業で最悪なフラグが建ったのだった。

### 〈生徒会室〉

「私のお饅頭を食べた犯人は誰ですか!？」

先日のゴキブリ騒動から数日後……藤原先輩は空になった箱を突き出しながら、机を隔てた僕達を糾弾した。

「私が生徒会室から席を外していた20分の間に、私のお饅頭が何者かに食べられていました。つまり、犯人はその間に生徒会室を訪れた会長、かぐやさん、石上くん、ミコちゃん……この4人の中に居る筈です!」ハハハハハ

机を叩きながら、藤原先輩は探偵じみた発言をする。食べ物の恨みは恐ろしいと言う事か……

「藤原先輩、饅頭くらいでそんな……」

「石上くん……お饅頭の粉が制服の袖に付いてますよ？」

「っ!？」ハッ

藤原先輩の発言に思わず袖を確認した……してしまった。

「……もちろんウソですけど、間抜けは見つかった様ですね？」

「ぐっ!？」カッ

藤原先輩の発言に僕は片膝について項垂れる……というか藤原先輩、I・Qが上がってね？

「……石上君、そんなにバレたくなかったの？」

「違うぞ、四宮。石上は藤原にしてやられたのがショックだったんだろ。」

「ああ、なるほど……」

「……いや、待って下さい。確かに饅頭は食べましたけど、自分の分一個だけです。」

「へえ……じゃあ、他にお饅頭を食べたのは誰ですか？」

「……黙秘します。」

「そうですか……ミコちゃんは知らない？ 私の粒餡饅頭を食べた犯人……」

「え？ あのお饅頭はこしあんの筈……ハッ!?」

「アホかお前は……」

「い、石上だってさっき引っかけたでしょ！」

「……犯人は見つかった様ですね。まさか、風紀委員であるミコちゃんだったなんて……」

「ふ、藤原先輩待って下さい！ 私が食べたお饅頭も一個だけで、藤原先輩の分は食べてません！」

「なるほど……会長、かぐやさん、お饅頭は美味しかったですか？」

「ほう？……何故、俺達2人も饅頭を食べたと？」

「……」

会長は少し挑戦的に、四宮先輩は黙って藤原先輩の言葉を待つ。

「お饅頭には渋めのお茶です。そして……会長とかぐやさんの前にはお茶の入った

湯のみが1つずつ……言い逃れは出来ませんよ!」*ゴゴゴ*

「……ああ、確かに俺も饅頭を1つ食べた。四宮が茶を淹れて勧めてくれてな。」

「……かぐやさん、そうなんですか?」

「……ええ、確かに私がお茶を淹れて会長に食べる様勧めと一緒に食べました。でも、藤原さんは既に1つ食べていたので、問題無いと思ったんですけどね。」

「え?」

「え?」

四宮先輩の言葉に、会長と伊井野は……食ってんじゃん、という表情で藤原先輩を見た……当然僕も見た。

「犯人は全員じゃないですか!! あのお饅頭はTG部で貰って来たモノで、私がオヤツとして食べる為に持って来たんですよ!?!」

「え?」

「は?」

「ええ……」

「うーっわ、すっげえ強欲……」

（全部1人で食べるつもりだったのか……どんだけ食い意地張ってんだ、この人……）  
「なんですか、強欲って!? そもそも、他人のお饅頭勝手に食べたらダメでしょー  
!!」

「それに関してはさーせんでした。」

本日の勝敗、藤原以外の敗北

藤原以外、全員犯人だったから。

## ラブ探偵は連れ回したい

感想ありがとうございます（「A」）

## 〈生徒会室〉

「今月出るへモモちゃんは考えない」の最新刊にDVDが付くらしいんですよ。」

「マジで？」

「はい、番外編2つとアニメ化する際に外された本編1つが同梱版として付くらしいんですけど、その番外編がエロに重きを置いた内容なんですよね。」

「……もしかして、ダークネスか？」

「はい、ダークネスです。まあでも、個人的な事を言わせてもらおうなら……普段からおっぱい所か、パンチラさえ無い漫画なのに、ここぞとばかりに……ひゃっはー！規制緩いからエロい話をアニメ化してやるぜー！……みたいなのはどうかと思うんですよ。そもそも、モモちゃんは考えないにエロを求めている読者はそれ程多



くなく、キャラ同士の掛け合い目当てで読む読者が大多数を占めていて……」

「滅茶苦茶語るな!？」

「まあ本編の方はアニメから外されたとはいえ人気回ですから、コレ1つ入れるだけで硬派を気取っているファンの購買意欲を刺激する効果はあるでしょうし……」

「結構否定的だな……という事は、石上はDVD同梱版は買わないのか。」

「いえ、まあ……最終的には買うんですけど。」

「結局買うのかよ。」

「買ったら会長にもDVD貸してあげますね。」

「……サンキュ。それはそうと……女性陣はどうした？ 四宮は部活と聞いているが……」

「伊井野は風紀委員の当番なので、今日は欠席ですね。藤原先輩は……わかりません。」

「ふむ、まあまだそれ程忙しくもないが……石上、ちょっと探して来てくれ。」

「うっす、じゃあちょっと外しますね。」

……

「……」

「……」

30分後、書類仕事に精を出している会長と机を挟む形で、藤原先輩は無言で佇んでいた……探偵帽子を被って。

「……どうした？」

「ラブ探偵です！」アッギ

「いや、お前じゃなくて石上の方な？」

懐疑的な視線を向ける会長の目には、藤原先輩の後ろに控える僕の姿はとてもアホに映っている事だろう。何故ならば……現在僕の頭の上にはアホと思われる呪いのアイテム、藤原先輩が被っている探偵帽子と同じモノが乗っているのだから。

「助手です!!」アッギ

「何1つ事情がわからん……」

「そうですね、ユウ・H・ワトソンとも呼んであげて下さい！」

「助手ってそういう意味の助手かよ。」

「……」

「藤原、石上の目が死んでるんだが……」

「石上くんの目なんて、大体いつもこんな感じですよ？」

「ついさっきまで生きた目してたわ……石上、なんでそんな事になったんだ？」

「はい、実は……」

……

「ふーん、ふーん♪……あ、石上くん！」

藤原先輩を探しながら廊下を歩いていると、向かいから探偵帽子を被った藤原先輩を発見した……この人、よくまあ恥ずかしがらずにそんな格好が出来るよな……

「やっと見つけた……で、藤原先輩は何やってんですか？」

「ラブ探偵です！」

「なるほど、説明する気ゼロですか。」

「そうですね……恋という迷宮に迷い込んでしまった哀れな仔羊を探している最中……とでも言いましょうか。」  
「フッヤッヤ」

（大して上手くないし……）

「藤原先輩、またそんな事して……ホント、アホですよね。」

「……え？ 石上くん、人のお饅頭勝手に食べておいて……頭高くない？」

「……」

（滅茶苦茶根に持ってる……）

リボンは極黒、器は極小……安定の藤原千花だった。

「いや、ちゃんと謝りましたよね？」

「失ったモノは二度と戻らないんですよ!？」

「まあ……悪いとは思ってますが、そこまで仰々しい言い方しなくても……」

「石上くんが責任持って、皆の分も償うべきじゃないですか!？」

「なんで僕だけ……っていうか、藤原先輩は饅頭くらいで大袈裟なんですよ。食

意地張ってる人は、これだから……」  
ギョッ

「聞こえてますよお!?! んもう許せません！ こうなったら、石上くんにはしっかり責任取ってもらいますからね!!」

「ええー、ダルう……」

「グダグダ言わない！ ほら行きますよ!!」

……

「……という謎理論で連れ回される事になりました。」

「……お疲れ。」

〈昼休み〉

「……という事があつてな。」

次の日の昼休み……白銀御行は同じクラスの風祭、豊崎と共に廊下で壁に凭れ掛かりながら雑談に興じている。普段は眼光鋭く周囲を威圧する生徒会長も、この時ばかりは年相応の顔を級友に見せていた。

「はー、その後輩も大変だな……石上だっけ？」

「良いように振り回されてるんだね。」

「いや、それがそうでもないんだよ……今回はアレだが、普段は藤原に対してキツチリ言いたい事言つて制御も出来ているし……言うならば、対藤原特攻持ちみたいなの。」

「格ゲーかよ、すっかり珍しいな……1年なら藤原に対して気後れの1つもしそうなもんだけど。」

「あ、思い出した。そういえば、風祭って1年の頃……藤原さんの事、ちょっと意識してたよね？」

「いや、そりゃするだろ？ 俺は白銀と同じ外部生だったから、藤原がどういう奴かまだ知らなかった訳だし……放課後は直ぐに帰ってたしな。」

「そういえば、そうだったな……」

「あの頃は、越前さんにしょっちゅう呼び出されてたからなあ……」

「まあ、それはそれとして……その後輩君が居て良かったな。」

「ああ、生徒会でも随分と助けてもらって……」

「いやいや、そういう意味じゃなくて……もしその後輩君が居なきゃ、男1・女3のハーレム生徒会が出来上がって、学園中の男子から顰蹙の嵐だったよ？ 普通に俺も妬むし。」

「わかる。」

「おいおい、そんな理由でスカウトした訳じゃないぞ。」

「ははは、わかってるって。」

「まあハーレムは冗談にしても、生徒会の女子ってレベル高いよね？あの新しく入った風紀委員の伊井野って子も、小さくて可愛いし。」

「豊崎……お前ロリ好きだっけ？」

「あくまでも一般論だよ。」

「ナチュラルに伊井野をロリ扱いするな。」

「俺も年下って趣味じゃないんだよな。」

「わかる、どうせなら同じ年が良いよね。」

「……藤原みたいなか？」

「藤原か……無理だな、多分制御出来ねえ。」

「あー、振り回されそうではあるよね。」

「ただ、向こうから告って来たなら吝かじゃねえけど！」

「「ねーよ。」」

「ラブ探偵です！ここから恋バナの匂いがしますよ？」

「……ども。」

（人前でこの帽子被るのメツチャ恥ずいな……）

3人の会話に急遽、ラブ探偵藤原とその助手である石上が乱入した。

「藤原……まだやってんのか、それ。」

「それで？ 誰が惚れた腫れたなんですか？」 ヲハハ

「いや、そもそもそこまで行つてなくてよ……良い出会いがねーかなって……なあ  
藤原、ダメ元で言うけど女の子紹介してくんねえ？」

「……紹介した女の子からの私の評価が下がりそうだからイヤです！」

「滅茶苦茶突き放すじゃん……」

「辛辣過ぎない？」

「……出会いが欲しいなら縁結びの神様を祀つてる神社に行つて、好みの人に態とぶつかれば勝手に運命感じてくれるんじゃないですか？ どうせ似た様な人間ばかり来てるんですから。」

「色んな人間にケンカ売ってんなコイツ……」

「白銀がスカウトしただけの事はあるね。」

「どういう意味だ。」



## 〈空き教室〉

会長達と別れた後……僕と藤原先輩は、使われていない空き教室を訪れていた。

「……で、なんで空き教室なんですか？ 誰も居ませんよ？」

「ふふふ、実はこの空き教室……昼休みにカップルが密会しているという噂があるんです。」

「はあ……それで？」

「後学の為に、ちょっと見学させてもらおうと思ひまして……」

「普通に覗きじゃないっすか……やめた方が良かったです。」

「嫌な言い方しないで下さい！ コレはあくまでも後学の為で……ラブ探偵には必要なんですよ！ それに……空き教室とはいえ、学園内でイチャコラしてるカップルが悪いので、私に非はありませんし。」  
ふひゅーふひゅー

（責任転嫁……しかも口笛吹けてないし。）

「カップルの密会現場を覗き見るとか、藤原先輩って結構……」

「結構!? 結構……なんですか!?」

「むっつりですよね?」

「そ、そんな訳ないでしょー!? なんでそんな事言っちゃうの!?」

「いやだって、カップルの密会現場を見たいだなんて……よっぽど性に対する興味が  
おありなんだなと。」

「だから違います! 私ほただっ……!?」

「……藤原先輩?」

藤原先輩は、突然黙り込むとバツと廊下の方角を見て固まった。

「……シッ! 誰か来ます、隠れて下さい!」

「隠れろったって、何処に……」

「う……っちです!」グッ

「え、ちょっ……!?」

ボタンという音と共に、藤原先輩に狭い空間……掃除用具ロッカーへと押しやられた。

「藤原先輩何してんですか!？」

「シッ！ 静かにして下さい！……来ました！」

藤原先輩の言葉に息を殺して教室の入り口に視線を送ると……

「……本当に誰も居ないみたいだね。」

「う、うん……」

翼先輩とマキ先輩が入って来た。

「」

（うっわ、普通に知り合いが来た……）

「マキちゃん……」

「つ、翼君……」

2人は周囲を見回し誰も居ない事を確認すると、翼先輩はマキ先輩の肩に手を置きゆっくりと顔を近付ける……

「」

（え、地獄？ 知り合いのラブシーン見せられるとか……あれ？ 藤原先輩妙に大人しいな……）ヤッ

微動だにせず、隙間から外を眺める藤原先輩へと視線を向けると……

「はえー……」ア、サ、ア、サ

（興味津々かよ。まあでも、マキ先輩が幸せそうだなにより……ん？ 廊下の隅に誰か居る？）

ロッカーの隙間から見える範囲のギリギリの場所に、誰かが立っているのが見えた。目を凝らして見ると、それは……

「……」

柏木先輩だった。柏木先輩は、2人がイチャついている姿を黙って見つめている。る。

「」

（アカン）

見てはいけないモノを見てしまった……というか、見たくなかった。キリキリと胃が痛み、背中を冷たい汗が伝って行く。先程までマキ先輩の幸せそうな顔を見て、ちよっとした満足感を感じていた僕だけ……最早、目の前のバカップルのイチャつきなんて気にならなかった……今僕の頭の中を支配しているのは唯1つ……

（バレたらヤバイ。）

……という事だ。このまま息を殺して時が来るのを待つしか、僕に生きる道は……

「……はああっ!? ちゅーした! ちゅーしましたよ!?!」

「っ!? シッー! バレたら消されますよ!?!」

「消されるの!?!」カビ——

……

あれから更に10分程、2人はイチャついた後教室を出て行った。いつの間にか柏木先輩の姿も無くなっており、ホッと胸を撫で下ろす。

「いやー、ドキドキしましたね! ちよつと悪い事してる気分でしたし!」

「確かに（恐怖で）ドキドキしましたね……あと、普通に悪い事してましたからね?」

「えへへ、じゃあ2人だけの秘密ですね!」い。ー

「……そうっすね。」

（まあいっか、バレなかったし……）

## 〈石上家自室〉

帰宅後……制服をベッドに脱ぎ捨て着替えていると、スマホがメッセージの通知を知らせる。通知画面を見ると、送り主の名前は表示されていない……僕のスマホには登録されてないけど、向こうは僕の番号を知っているって事だろうか？ そんな事ある？ と疑問を持ちながらもメッセージ画面を開くと、そこにはこう書かれていた。

〈覗きは駄目だよ？〉

「

バレていた。

白銀と会話していた風祭、豊崎について知らない、覚えてない人への補足……  
風祭豪、財界探偵越前はじめに弟子入りし、数々の難事件を解決して兄との再会

を果たした過去有り。白銀御行と同じ外部生。

豊崎三郎、かつて白銀との成績争いで妨害工作を行ったが、最終的に正々堂々の勝負を挑んだという過去有り。普段は糸目だが、本気を出した時だけ開眼する。

モブにドラマあり過ぎませんかね……

## 藤原萌葉は確かめたい

原作更新1ヶ月も空くとかマジかよ……

〈藤原家〉

「……っていう事があって、私がラブ探偵として助手の石上くんを導いてあげてるんですよ！」

「へー、そうなんだー。」

（うーん……？）

11月に入り、体育祭の準備に追われている秀知院学園……その忙しい最中であっても、藤原は石上を連れ回し縦横無尽に学園内を駆け回っていた。

「それでこの前も、仕方なく石上くんを連れて行ってあげてですね……」

「なるほどー。」

（なーんか……無理矢理一緒に居る理由を作った様に見えるちゃうんだよねえ……お



饅頭食べられたのをコレ幸いと理由にしたみたいなの？」

「それでその後……」

「ねえ姉様、随分楽しそうだね？」

「え、そう見えますか？」

「うん、石上先輩と一緒になのが楽しくて仕方ないって顔してる。」

「そ、そんな訳ないでしょー!? 人の恋愛事情を覗き見るのが楽しいからそう見えるだけです!」

「いや、それはそれでどうなの？」

「石上くんと一緒に行動してるのも、丁度良い助手がいないので仕方なく石上くん  
で我慢してあげてるだけなんですから!」

「ふーん？」

（姉様も素直じゃないなあ、あれだけ楽しそうな顔してて……そうだ!）

……

〈秀知院学園中等部〉

「……千花姉が恋してる？」

「多分だけどねー。まだ絶対って言える程の確信がある訳じゃないから、それを確認する為に考えてる事があってね?」

「ふーん、どうする気なの?」

「今度の放課後、石上先輩のトコ行って見るつもりなんだ。」

「……それで?」

「うん、それで圭ちゃんには姉様をさり気なく誘導して、私達を目撃する様にして欲しいの。」

「それで千花姉の不安を煽ろうって訳? でも年上の男の人と2人つきりって……危なくない?」

「大丈夫、大丈夫。敷地内のベンチとかでちょっとお話するだけのつもりだし、石上先輩が危ないタイプじゃないって事はリサーチ済みだよ。圭ちゃんも高等部の生徒会に行った時、親切にしてもらったって言ってたじゃん。」

「まあ、それはそうだけど……」

「早速、今日の放課後に作戦実行ね!」

「はいはい、わかったよ。」

(いいのかなあ……)

〈中庭〉

あの恐怖のメッセージが届いてから数日……僕は中庭のベンチに1人で腰掛け  
ていた。

(いやもう、柏木先輩ホント怖い……この際覗いてた事がバレてたのは置いとくに  
しても、いつも2人の後をつけているから気付いたのか、僕の行動を常に把握し  
てるから気付いたのかで、大分危機感変わるんだけど……)

どちらにせよ、ヤバい事に変わりはなかった。

(はあ、軽々しく覗きなんてするもんじゃないな。そもそもの話、藤原先輩が変な  
事に興味を持った所為だし……今度からは、むつつりボン先輩って呼ぼう。)

「すいませーん、石上先輩ですよね？」

「え？」

その言葉に伏せていた顔を上げると、中等部の制服を身に纏った少女が此方を窺っていた。

「初めまして、藤原千花の妹……藤原萌葉です。今お時間大丈夫ですか？」

……

〈高等部昇降口〉

「あ、千花姉、萌葉見なかった？」

「あれ、圭ちゃん？……萌葉？見てないけど、どうしたの？」

「いや、こっちに来てる筈なんだけど……」

「そうなの？ そんな事特に言っただけ……」

「あー、校内デートって言ってた様な……」

「デート!? 萌葉がっ!?」

姉様が食い付いてくれないと困るから、校内デートとか言っちゃっていいからね

！

まあ、萌葉がそれで良いなら……

「……うん、そうみたい。」

「ど、何処の馬の骨とっ……！ いけません！ 早過ぎます!!」

（私だってまだデートした事無いのに、妹に先を越されるなんて！）

「えーと……そういえば、中庭に行くみたいなのを言ってた気が……」

「こうしちゃいられません！ 行きますよ、圭ちゃん！」  
グググ

「ち、千花姉っ!？」

〈中庭〉

「……居た！ 居ましたよ!! 圭ちゃんこちに隠れましょう！」

「……千花姉、覗きは良くないよ？」

「覗きじゃありません！ 可愛い妹を姉として心配した故の行動なのでノーカンです！」

「……」

……とか言い訳しながら、隠れて覗くと思うんだよねー。

「そっかー……」

（読まれてるなあ……）

「あんなに楽しげに話してっ……」

「いや、普通だと思うけど……」

（萌葉、こっち見ながらニヤニヤしてる……）

「それで、ココの部分なんですけど……」  
ヌ

「ああ、此処は……」

「あああっ!? あんなにくっついて……」

「うーん……?」

（石上先輩、全然普通だなあ……クラスの男子とか、萌葉と話すだけでもドギマギしてるのに……年上だからかな?）

「……っ!」  
ヤッ

「……千花姉?」

……

「うん、だから此処の書式は……」

「あー、なるほど！ そうすれば良かったんですね！」

いきなり話し掛けられた時はどうしようかと思つたし、藤原先輩の妹で少  
し警戒してたけど……特に問題無く会話は進んでいる。藤原萌葉と名乗ったこの少  
女は生徒会副会長らしく、書類についての質問を僕に聞きに來ただけみたいだ。側  
から見たら良い子に見えるし、生徒会業務に関する質問を態々しに來るなんて、凄  
く真面目だなんて思う。偶に瞳の奥に見え隠れする、得体の知れない感覚に目を瞑  
れば……

「カラー！ 何デレデレしてるんですか!? 石上くんのアホ！ あんぽんたん！ 根  
暗ロリコン!!」

暫し思考に意識を割いていると、此方に罵声を浴びせながら歩いて來る藤原先輩  
が見えた。数歩遅れて後ろには、会長の妹さんも付いて來ている。

「あ、姉様と圭ちゃん、どうしたの？」 いづい

「別に……」

（萌葉楽しそうだなあ……）

「……いきなり來て罵倒って何なんですか？ むつつりボン先輩。」

「誰がむつつりボン!? いや、それより！人の妹と何してるんですか、離れて下さい！」*グイグイ*

「ちよっ!? なんで割り込んで来るんですか、わかりましたよ……」

「えー？ もっと色々教えて欲しい事あったのに……」

「萌葉もです！ 男子との距離感考えて下さい！」

「それを藤原先輩が言いますか……まあ、また何かわからない事があったら……」  
「ガルルルッ！」

藤原先輩は、まるで犬が威嚇する様な声で僕を牽制する。

「……ごめん、他の人に聞いて。」

「少し残念ですけど、わかりました！ 石上先輩、色々教えてくれてありがとうございます。さいました。」

「ああ、気にしない……」

「ガウッガウッ！」

「藤原先輩が狂犬化してるから僕はこれで……」

「はい、ではまたー！」



.....

「ふう……」

（正直……藤原先輩が来てくれて助かったな。話してる最中、妹さんから妙な圧を感じる時があったし……感覚的には柏木先輩に近い感じなんだけど、そこまでヤバイ感じはしなかったから大丈夫か。柏木先輩程ヤバイ人なんて、そうそう居なっ……）

「あら？ こんな所で会うなんて珍しいわね。優は今から帰り？」

背後から掛けられたマキ先輩の声に振り返りながら答える。

「あ、マキ先輩、お疲っ……！」んゝ

（マキ先輩が居るって事はっ!？）

「……」んゝ

「……っかれえええあああつす!!」んゝ

マキ先輩の隣で……黙って笑う柏木先輩が視界に映った瞬間、無意識に僕は腰を直角に曲げて挨拶をしていた。

「なんで体育会系風？」

「ふふ、石上君たら変なの。」

「ハハハ、スイマセン。ツイ……」

（胃が痛い……）

〈藤原家〉

「ふふ……」 いざや

「……萌葉、言いたい事があるならハッキリ言って下さい。」

「えー？ じゃあ遠慮なく……嫉妬しちゃうなんて、姉様可愛いー！」

「あああああっ!? 違うんですよおー!! アレは嫉妬とかじゃなくて、萌葉がっ……  
そう！ 萌葉が悪い男に引つかからない為に行動した故の結果というかつ……」

「ププッ、悪い男って……そんな事思っていない癖に。素直じゃないなあ……でも  
ちゃんと自覚はしたみたいだし、後は自分で頑張ってね姉様。」

「じ、自覚って何の事かわかりませんねえ!?」 ぷひゅーぷひゅー

「またまたー、わかってる癖にー!」

「うあああ! 知りません、知りません!!」

「あははは! 姉様顔真っ赤だよー?」

「ただいまー……アレ? なんか楽しそうだねー、どうしたの?」

「あ、豊姉様! 聞いて聞いてー! なんと、千花姉様が……」

「萌葉ー!」

「えー? 千花ちゃんがどうしたの?」

「それがねー……」

「だから違うんですってばあああっ!!」

本日の勝敗、藤原千花の敗北

この後、姉と妹に散々イジられた為。

## 藤原千花は調べたい

感想ありがとうございます(。ω。)

## 〈藤原家〉

「じゃー、姉様が石上先輩の事が好きって自覚したのは良いとして……」

「違いますうー！ だから私は……ハッ！」

その瞬間、藤原の脳裏には生徒会解散の日……ファミレスで石上とした、ある遣り取りが浮かび上がっていた……

藤原先輩……書記なのにそのミスはヤバくないっすか？ コレホント一生イジリますからね

一生イジりますからね

一生……

「待って萌葉、寧ろ……石上くんの方が私の事を好きなんじゃないですか？」

「何その物凄いい拗らせた発言……」

「ちゃんと理由もあります！ いいですか!？」

一生イジる発言

←

石上くんは私と一生の付き合いになると思ってる

←

私の事が好き

「……って事でしょ!？」

「拗らせてるなあ……」

（なるほど、わかんない。）

「そうと決まれば……先ずは事実確認から行きましょう!」

「え？ 決まっちゃったの？」

### 〈生徒会室〉

「藤原の様子がおかしい？」

11月の目玉イベントである体育祭も無事終わり、秀知院学園は3週間後に控えた奉心祭に向けて動き始めていた。それは生徒会も例外では無く、今は会長と僕の2人が生徒会室に缶詰状態で書類業務に精を出している。

「いや、わかります。藤原先輩はいつもおかしいって言いたいんですね？　それはちゃんとわかってるので、とりあえず話を聞いて下さい。」

「俺はそこまで言っていないぞ……まあ、わかった。とりあえず話を聞こう。」

「はい。最初に違和感を感じたのは、体育祭の時なんですけど……」

……

〈体育祭当日〉

〈続きまして……次は各クラスの代表者による100m走です。代表者の方達は、指定の位置に集まって下さい。〉

校庭にアナウンスが流れる。僕は椅子から立ち上がると、指定の位置へと向かって歩き出した。

「あゝ、もしかして君が石上くん？」

背後から掛けられた声に振り返ると……おっとり系の女性が此方を見ていた。大學生くらいだろうか？　何処と無く、誰かに似ている気がする。

「え、はい。確かに石上は僕ですけど……」

「やっぱりだあ、写真で見た通りだからすぐわかったよお。始めまして、千花

ちゃんのお姉ちゃんの豊実です。千花ちゃんが良く話題にしてるから気になってたんだ。」

「……話題に？ 愚痴とかそういうヤツですか？」

（藤原先輩の姉か、確かに似てる……というか最近、藤原先輩関連の人と良く会うな。）

「うーん、アレは愚痴って言うよりは惚気……」

「姉様！ こんな所で何してるんですか!？」

藤原先輩のお姉さんと話していると、藤原先輩が焦った様な顔で割り込んで来た。

「あー、千花ちゃん。別に変な事は話してないよ？ いつも千花ちゃんが石上くんの事話してるって事くらいしか……」

「十分変な事話してるじゃないですか!？ その話はいいですから！ ほら、石上くんは今から100m走なんですから、邪魔しないで下さい!」

「えー？ もうちょっとお話したかったけど、仕方ないねー。石上くん、100m走頑張ってるね。」

「あ、はい……それじゃあ、失礼します。」



.....

「……っていう事があったんですけど、僕の聞き間違いじゃなかったら惚気って聞こえたんですよ。藤原先輩が僕の話題で愚痴るならともかく、惚気るなんて変だと思ってその時は聞き流したんですけど……」

「……なるほど。だが、それ1つだけでは無いんだろ？ 藤原の様子がおかしいと思っただ理由は。」

「はい、それから数日後の事なんですけど……」

.....

### 〈生徒会室〉

その日は、四宮先輩は部活、伊井野は風紀委員、会長はバイトで生徒会室には僕と藤原先輩だけでした。本来なら会長と四宮先輩が居ない時点で、生徒会は休みですから僕も休んで問題は無かったんですけど……体育祭で使った備品のデータだけでも打ち込んでおこうと思って、立ち寄りしました。因みに藤原先輩は、ただ単に生徒会が休みなのを忘れて来ただけでした。

「……」

パソコンにデータを打ち込んでいると……コトツという音で集中力が途切れました。隣を見ると、藤原先輩がコーヒーカップを机の上に置いていた所でした。

「コーヒーです！ 石上くん、ちょっと休憩しませんか？」

「あざっす、じゃあ……いただきます。」

「はい！ クッキーもありますよー！」

「準備良いですね。」

「も、モチロンです！ 疲れた頭には、やっぱりお菓子ですからね！」 シン

「まあ、そうっすね……藤原先輩は、座らないんですか？」

「す、座りますよ？ 当たり前じゃないですか!? 私を座らせられたら大したモンですよ！」

「……何言ってますか？」

「な、なんでもないですよ!? ふう、今日は暑いですねえ……」 スズ

「肌寒いからコーヒーを淹れてくれたんじゃない？」

（なんで隣?……別にいいけど。）

「そ、そういえばそうでしたねー……」 ザッ

（とりあえず、1つ目はクリアですね！）

「……？」

……人間にはパーソナルスペースというモノが存在する。一般的に男性は前方が広く、左右のスペースが狭いと言われている。（女性は自分を中心とした円形状）その為、男性が女性に隣へ座られた場合を取る行動パターンは2つ……

離れて座り直す↓不快に感じる、警戒している

気にせず座り続ける↓気を許している

という事である。

「……っ！」アッギ

（ふ、ふふーん！ まあ、わかってましたけどね！ 石上くんが私に気を許してるって事は！）

「……」

（この人、なんでドヤ顔してんの？）

「すう…はあ……」

（よし！ 次はアレを試しましょう！）

「……藤原先輩？」

「……か、かぐやさんが淹れてくれる紅茶も美味しいですけど、こんな寒い日はコーヒーも良いものですね！」

「さっき暑いって言ってませんでした？……まあそれに関しては同意見ですけど。」

コッ

（今です！）

「そ、そうですねー！」 コッ

「……？」

「……っー」 ヲツ

「藤原先輩……さっきから何をそわそわしてるんですか？ 滅茶苦茶気になるんですけど……」

（急にドヤ顔したり、チラチラ見て来たりするし……）

「えっ!? 別にそわそわしてないですけど!?」

「いや、滅茶苦茶してるじゃないですか。」

「してません!!」

「いや、でも……」

「もうー！ そわそわしてる本人がそわそわしてないって言ってるんですから、そわそわしてないって事で良いじゃないですか!!」

「ええ……斬新な言い訳。わかった、わかりました。藤原先輩はそわそわしてません。」

「わ、わかれば良いんですよ！ ほらっ！ 早くコーヒー飲んじゃって下さい！」

（……？ 特に変な味もなかったし、イタズラで何かを入れたって訳でもないんだろうけど……まあ、折角淹れてくれたんだしな。）

「ふう……ご馳走様です。」ゴチウサン

「っ!!」

気になる異性との距離感を測る方法に、グラステクニックというモノがある。先ず自分のグラスを相手のグラスの側へ置き、相手がグラスを何処に置くかで自分と相手の心の距離を測るという方法である。もし相手が自分のグラスの近くにグラスを置いたなら、それは自分との心の距離が近い事を表しているのである。

（さっきと同じくらいの場合！ いや、寧ろ……ちょっと近いくらい？……もう！

素直じゃないですね、石上くんは！)

素直じゃないのは藤原自身である。

「えへへへー！」 izzzz

「……藤原先輩？」

(今日は特に表情がコロコロ変わるな……)

「なんでもないですよー！」 izzzz

……

「……っていう事があったんですよ。会長はどう思います？」

「あー、そうだなあ……」

(藤原……石上の事、滅茶苦茶意識してんな。)

白銀は察した。それもその筈、藤原が行なったパーソナルスペースやグラステクニクを利用した恋愛テクニクは、白銀自身が既に四宮かぐやに対して実行済みのモノである。相手があの四宮かぐやである為、満足の行く結果には至らなかったが、話を聞く限り藤原が石上に対して好意を抱いているのは明白であった。

「四宮に聞いて見るのはどうだ？」

「……四宮先輩に？」

「ああ……藤原と1番付き合いが長いのは四宮だし、此処で結論を出すには少し情報が足りないと思はう。」

「確かに……そうですね。」

「今度時間が取れる時にでも聞いて見ると良い。結論を出すのは、それからでもいいだろう。」

「わかりました。とりあえず今度、四宮先輩に相談して見ます。」

「ああ、それが良い。」

〈藤原家〉

「萌葉ー！聞いて聞いてー！」

「姉様、どうしたの？」

「あのね、やっぱり石上くんは私の好きですよ！だってね？隣に座っても離

れませんでしたし、グラスなんて最初の位置より近くに置いたんですよ？ これはもう、そういう事としか思えないですよね！」

「……そっかー、じゃあ両思いだねー。」

「わ、私は違いますけどね!? 石上くんからの一方通行です！」

「……ふーん？」

（そんな些細な事に喜んでる時点で、石上先輩の事が好きって自白してる様なもんなんだけどなあ……そうだ！）

「ま、まあ？ 石上くんがどうしてもって言うなら……」 *ぎゅぎゅ*

「……姉様がそういう感じなら、私が石上先輩を狙っちゃっても問題無いよね？」

「……え？」

「年上って良いよねー！ 優しそうだし、頭も良いって聞くしー？ また今度高等部に行って……」

「だ、ダメです!!……あっ!？」

「……んふふ、ねえ姉様？ 何がダメなの？ ん？」

「そ、それは、そのお……」



「ねーねー、何がダメなのー？」

「あううつ……」

「ただいま……あ、また萌葉ちゃんが千花ちゃんイジメてる。」

「ね、姉様！ そうなんです！ 早く萌葉をなんとかして……」

「私も混ぜて？」

「」

「良いよー！ 聞いてよ豊姉様、あのねー？」

「うああーん!? 味方が全然居ませんー!?」

本日の勝敗、藤原千花の敗北

姉妹間でイジられキャラが定着しつつある為。

## 四宮かぐやは探りたい

感想ありがとうございます(。ω。)

藤原でシリアスは無理な気がして来た……シリアルならワンチャン……

## 〈生徒会室〉

「……藤原さんの様子がおかしい？」

期末テストも終わったある日の放課後……僕は最近の藤原先輩について四宮先輩に相談を持ち掛けた。折角だからと、会長も付き添って話に参加してくれている。

「いや、わかります。藤原先輩はいつもおかしいって言いたいんですよね？ それはちゃんとわかってるので……」

「石上、その件は飛くんだりばしても大丈夫だぞ。」

「……それで石上君、藤原さんが具体的にどういう風におかしいのか説明してくれる？」

「はい、実は……」

（説明中）

「……なるほど、そういった類のモノなら私にも心当たりがあります。」

「え？ 四宮先輩にもですか？」

「四宮、そうなのか？」

「ええ、あれは確か……テスト期間に入っつてすぐの頃だったかしら……」

……

〈生徒会室〉

「失礼しまーす！ 文化祭の出展書類持つて来ました！」

「あら……子安先輩、こんにちは。」

「こんちわっす。」

「うん、こんにちは！ それでね？ うちの今年の出し物は凄いいよ？ なんと、新体操と演劇を混ぜた舞台なの！ 皆練習とか頑張ってるし、ステージの割り振りと  
か良い時間帯にしてね！」

「善処はしますけど……他の出し物との兼ね合いもあるので、約束は出来ません

ね。」

「わあ、シビア！ 優くんもお願いね！」  
ワジャワジャ

「っ!? つ、つばめ先輩！ 子供扱いしないで下さいよ！」

「あはは、ごめんごめっ……」  
ハハハハ

「も、モラル警察です！ 不純異性交遊をする悪い子は逮捕します！」

「あ、藤原さ……え？ 逮捕？」

「つばめ先輩、気にしないで大丈夫なんで……藤原先輩、変な言い掛かりはやめて下さい。」

「問答無用です！……16時35分、石上くんを現行犯逮捕です！」  
バグバグ

「コレが冤罪逮捕か……」

「いーから離れて下さい！」  
ググググ

（……あ！ なるほど、なるほど！ それなら、これ以上邪魔しちゃ悪いかな？）

「ごめん！ 私この後用事あったの思い出しちゃった！ じゃ、またね皆！」  
ニ

タ—ッ

「……つばめ先輩、急にどうしたんすかね？」

「まあ、忙しい人ですし……」

「うー……!」

「……藤原さん、どうかしたの?」

「な、なんでもありません!」

……

「あー、そんな事もありましたね。」

「……」

(藤原、わかりやすい嫉妬の仕方してんな……)

「でも……丁度良かったわ。今日は藤原さんが私の家に泊まりに来る事になっていたので、さり気なく探りを入れておいてあげますね?」

(まさかとは思いましたが……石上君の話を聞いて合点がいました。これは……使えるかもしれませんね。)

「そこまで仰々しい感じにしなくても大丈夫ですよ。ちょっと気になったただけなんです……」

「ふふ、ちゃんとわかってるから大丈夫よ。」

「はい……じゃ、僕はこれで失礼しますね。」

「ああ、お疲れ。」

「ええ、お疲れ様。」

（チャンスね……この藤原さんと石上君の件を上手く利用すれば……！）

……

「石上くーん！」ヤッヤ

「藤原先輩！」ヤッヤ

「アハハハハ！」ハヤハヤ

「……上手く行って良かったな。」

「……ええ、本当に。」

「その……四宮、2人に触発された訳ではないんだが……お、俺と付き合ってくれないか!？」

「……会長がそこまで言うなら構いませんよ。お付き合いしましょう?」

「マジでか!? よっしゃー!!」

「あらあら、そんなに喜んで……お可愛いこと。」

.....

「ふふふ……」

（……コレね！生徒会というグループ内にカップルが出来れば、異性を意識するのは必然！あくまでも藤原さんの恋路を応援した上での副産物だから、会長に計算高い女と思われる可能性もゼロ！完璧な作戦じゃないかしら！）

「フフフ……」

（よし！狙い通り四宮を巻き込む事が出来たぞ。生徒会という決して広くはない交友関係……その中でカップルが出来れば自ずと異性を意識するというモノ！そして、四宮に最も近い異性はこの俺！完璧な作戦じゃないか！）

後輩と級友の恋路をダシに使うあたり、2人は小狡かった。

〈四宮邸〉

「おっ邪魔しまーす！」

「いらっしやい、藤原さん。」

「かぐやさんの家でお泊りなんて、随分久しぶりですねー！」

「ええ、そうね。」

（藤原さんとお泊り……石上君について探りを入れるには、絶好の機会と言えるのだけど……）

「あー！ ハーサカ君、久しぶりですねー！」

「お久しぶりです、千花お嬢様。」

「はわあ、相変わらずのイケメン執事だあ……」

「……」

「……」

（……大丈夫かしら。）

「お嬢様方、此方へ。」

「はいはい。」

「あ、あの……2人はいつも一緒に居ますよね？ 年も近い感じですし、お互いの事を意識したり、ドキドキする時ってあるんですか？」



「もちろんありますよ。」

「やっぱりあるんですか!？」

「ええ、しよっちゆうしてますよ。」

「はわあ、執事とお嬢様……禁断の恋!」

「ちょっと! 何言ってるのよ!？」

「本当の事です。私はかぐや様の言動にいつも倒れそうなくらいドキドキしているのですが?」

「そ、それは私が悪かったけど……藤原さんが変な勘違いしてるから、ちゃんと否定して!」

「……わかりました。千花お嬢様、僕は男性にしか恋愛感情を抱かないので、かぐや様とはそういう関係ではありません。」

「どうえええー!?!?!? そっち!? ハーサカ君で、そっちなんですか!?!」

ㄅㄅ

「状況が悪化してるじゃないの!」

「かぐや様との関係は否定しましたが?」

「これじゃ意味無いでしょう!?!」

そして、夕食後……

「藤原さん、最近少し様子がおかしいみたいでしたけど……何かありましたか？」  
「えっ!? そ、そんな事ないですよ?」

「……本当に?」ぐぐ

「も、もちろんです!」

藤原さんは、私の言葉に目を逸らしながらそう答えた……そう、私にも秘密にするつもりなのね。なら……攻め方を変えますか。

「そういえば最近、石上君はよく女子生徒と一緒に居る所を見掛けますね……誰か付き合ってる人は居るのかしら?」

「い、居ないんじゃないですかね……」

「あら、そうなんですね……なら良かったわ。」

「っ!? か、かぐやさん!? 良かったってどういう事ですか!?!」

「ふふ……秘密です。」

「秘密って……か、かぐやさん! その、石上くんはやめた方が良いでしょう!?!」  
(掛かった。)

「……あら、どうして? とても素直で良い子だと思うけど?」

「アレは猫を被ってるんです！　そ、それに石上くんは、正論でボディーブローを打って来る系男子ですから、かぐやさんとは相性悪いんじゃないかなあって……」

「大丈夫よ、石上くんは私にそんな事しないから、別に問題無いわ。」

「い、いやいや……隙を窺ってるだけですよきつと！　そもそも石上くんは先輩に對する礼儀がなってないですし、他にもっ……」

「……藤原さん、あまり石上君の事を悪く言っては駄目よ？」

「えっ!?　ち、違います！　今のはそういうのじゃっ……!?」

「ふふ、大丈夫よ藤原さん。貴女が石上君に冷たくする分、私が優しくしてあげますから……安心して下さいね？」

「か、かぐやさん!?」*カクダッ*

藤原さんは不安や焦りが絢交ぜになった顔を見ると、荒々しく椅子から立ち上がった……効果観面ね。正直……ここまで動揺するとは思ってませんでした……

「……藤原さん、冗談よ？」

「じ、冗談?……な、なーんだ、冗談だったんですねー！　焦って損しちゃいましたよー。」

「ふふふ、ごめんなさい。でも……どうして藤原さんが焦るの？」

「えあっ!? そ、それは……そう! 石上くんがモテ始めたのかと思って焦っちゃったんですよ! 石上くんはラブ探偵である私の助手なんですから、助手業を疎かにして色恋に現を抜かすなんてダメに決まっています! ま、まあ? かぐやさんの冗談だったので、余計な心配でしたけど!」

「ああそういう事……でも強ち、冗談とも言えないのですけどね。」

「え、どういう事ですか?」

「弓道部の後輩にね、石上君の事を気にしてる子が居るの。」

「ええっ!?!」

「最近、石上君はいつも藤原さんと居るでしょう? だから、2人は付き合ってるんですか? って聞かれるのよね……」

「そ、そうなんですわ……」

「藤原さんは、別に石上君と付き合ってる訳じゃないのよね?」

「あ、当たり前じゃないですか!」

「そ、ならそう伝えておくわ。」

「あ……」

藤原さんは、シュンと顔を下げて落ち込んだ……全く、本当に仕方のない子。

「……藤原さん、私が言えた事じゃないけど……自分の気持ちっていうのは、言葉にしないと伝わらないモノなのよ？」

本当に言えた事ではない。

「かぐやさん……」

「意地やプライドが邪魔するのも、恥ずかしくて勇気が出ないのも……それ自体は別に悪い事じゃないわ。でもね……そうやって行動しないうちに、会っ……氣になつてる人が合コンに行ったり、身近な人にアプローチされたりする羽目になるのよ!？」

思いつきり自分の事だった。

「ううー……」

「石上君の事が好きなら、ちゃんと捕まえておかないと……」

「ええっ!？ か、かぐやさん!？」

「氣付いていないかと思つたの？ 貴女……最近様子がおかしかったわよ？」

「あ、あはは、バレちゃってたんですね……」

「改めて聞くわ……藤原さんは、石上君の事が好きなのね？」

「うっ……」

藤原さんは、一瞬躊躇したものの……小さくコクリと頷いて答えた。

「ふふふ、大人しい藤原さんは珍しいわね。」

「だ、だってっ……なんか、恥ずかしいと言いますか……」

「……藤原さんは、石上君のどういう所を好きになったのか……教えてくれるかしら？」

「えええっ!？」

「あとは好きになったキツカケと、石上君と付き合えたらどういう事をしたいのかも……教えてもらおうかしらね？」

「かぐやさん!? そんなの言える訳っ!？」

「教えてくれないと……弓道部の後輩の子を応援しちゃうかもしれないわね。」

「そ、そんなのずるいですよ!」

「だったら……ね?」

「うあーん!? かぐやさんまでイジワルして来ますー!?」

「……………」

（書記ちゃんが恋かー……）

本日の勝敗、藤原の敗北

かぐやにも勝てなくなりそうなの。

1時間後……

「わ、私だけ恋バナするなんて不公平です！ かぐやさん！……は無いでしょうか、今から会長に電話しちゃいましょう！」

「んー、いいんじゃないですう？」 さでさで

自分ばかり恥ずかしい恋バナを話し続ける事に抵抗を覚えた藤原は、深夜帯にも関わらず白銀へとビデオ通話を試みた。

「会長ー、こんばんはー！」

「あー、会長だぁー……」

〈藤原……と四宮!? どうしたんだ、こんな時間に!?〉

「えへへ、実は会長に聞きたい事が……」

〈ちよつとお兄い、壁薄いんだからもう少し静かにし……〉

「あ、圭ちゃんだー!」

〈千花姉?……とかぐやさん!? ちよつ、これビデオ通話!? もー! 汚い部屋映さないでよ、バカ兄貴!〉

〈……で、なんだ聞きたい事って?〉

「会長は、今恋をしていますか?」

〈は……はー!? 別にしてねーし!?〉

「会長! 嘘はよくありませんよ?」

〈別に嘘なんかじゃっ……〉

〈嘘! 聞いて千花姉! 最近のお兄いはスマホを気にしてばかりで、偶にニヤニヤしながらメッセーシ送ってるの!〉

〈ばっ!? 圭ちゃん、何言っ!?〉



「誰!? 会長は誰に恋して連絡取り合ってるんですか!？」

〈別に恋じゃねえから!〉

〈私知ってます!!〉

〈圭ちゃん!〉

「圭ちゃん! 私が許すから言っちゃって良いよ!」

〈それは……ハーサカっていう人です!〉

「」

〈お兄いはハーサカって人に恋してます!!〉

「」  
「さ」

「……」

「ちよっ、ちよっと洗面所借りますね……!」

藤原は鼻血を出しながら、洗面所へと向かった。

〈洗面所〉

「……えっ!? か、会長がハーサカ君と!? 男同士なのになっ!？」

⌘ 白銀の敗北

BL  
疑惑が浮上した為。

## 石上優は起きれない

評価、誤字脱字報告ありがとうございます。(。ω。)

週明けの月曜日……私は1人、生徒会室へと続く道を歩いています。かぐやさんの家にお泊りしてから……頭の中には、その時の出来事が鮮明に流れて来ます。

石上君の事が好きなら、ちゃんと捕まえておかないと……

「うー……!」

わかってます、それはわかってるんですけど……石上くんが誰かと一緒に居ると邪魔したくなっちゃうし、なんというか……好っ……じ、自覚してから変に意識する様になっちゃいましたし……

「あー、もーっ!!」

ダメダメ! 石上くんの事を考え過ぎたら、また変な感じになっちゃいます! 別の事を考えて気を紛らせなくちゃっ……!!

……ハーサカっていう人です！ お兄いはハーサカって人に恋してます!!

「うっ!? 危なかった……」

また鼻血が出る所でした。まさか……会長とハーサカ君が密に連絡を取り合う蜜な仲だったなんて。会長はハーサカ君に恋してて、ハーサカ君も満更でも無い感じで……お、男同士なのにつ、男同士で!?

「あ……」

鼻に違和感を感じた私は、鼻の根本を急いで摘みました。また鼻血が出てしまった様です。と、とりあえずトイレに行って血を止めないと……

〈女子トイレ〉

「……よし!」<sup>ン。ヤ</sup>

鼻血の止まった私は、鏡の前で軽く頬を叩いて気を引き締めます。とりあえず会長とハーサカ君の件については……見守る事にしましょう! 愛に年の差は関係無いって言いますし、きっと性別も関係ないんでしょう!……少なくとも、会長とハーサカ君にとっては!

其処の関係性は密であるべきではないだろうか。

……会長に内緒にされてた事は不本意ですが、内容が内容だけに仕方ない部分もありますから許してあげましょう！ そのうち同性愛について調べて、さり気なくフォロワーもしてあげるつもりですし！

……そんな気の使われ方をされる白銀の方が不本意である。

それと……石上くんには、今まで通りラブ探偵の活動に付き添ってもらいましょう！ きつとその内、前みたいに恥ずかしがらずに色々出来る様になる筈！ 新たな決意を胸に、私は生徒会室のドアに指を掛けました。

### 〈生徒会室〉

「あー、眠い……」

期末テストが終わった解放感、テスト勉強のストレス、藤原先輩の様子がおかしい事に対するちょっとした悩みなど……それらを解消する為、この休みはゲーム三昧な自堕落生活を送っていた。昨日も日付けが変わる深夜までゲームをしていた

為、強烈な眠気に襲われている。時計を見ると、まだ16時にもなっていない。

「まだ誰も来そうにないし……」

僕はソファに体を預けると……少しの間、仮眠を取る為に目を閉じた。

生徒会室に入ると、ソファに座る石上くんの後ろ姿が見えました。大丈夫、いつも通りに……ふう、と息を吐いて心を落ち着かせます。

「石上くん、こんにちは！」

「……」

意を決して挨拶をするも、返事は返って来ませんでした。もしやと思い回り込むと、石上くんは目を閉じて眠っていました。

「寝てる……」

折角の挨拶が不発に終わり、残念な気持ちになりましたが……石上くんと生徒会室に2人っきりという状況に別の感情が湧き上がって来ます。

「い、石上くん？」

石上くんは、すうすうと規則正しく呼吸を繰り返していて、一向に起きる気配がありません……こんなにじつくりと、石上くんを見るのは初めてかもしれません。私は顔が熱くなり始めた事を誤魔化す様に、石上くんへと語り掛けます。

「お、起きないと……イタズラ、しちゃいますよー？」

「……」

「ほ、ホントにしちやいますよー？」

そういえば……この状況は、少女漫画で読んだ展開に似ています。教室に忘れ物を取りに戻ったヒロインが、教室で居眠りをする片想いの男子を見つけてイタズラをするんです。そしてイタズラをしているうちに……

「……ハッ!？」

気付くと私は、無意識のうちに石上くんに近い付いていました。さっきよりも短くなった2人の距離……石上くんは寝ていますから、私が近付けばその分石上くんと距離は短くなります。

「寝てるから、大丈夫ですよね……」ナグナグ

私は自分にそう言い聞かせて、石上くんの頭へと手を伸ばしました……男子の頭なんて触った事も無い私ですけど、撫でるのは萌葉や圭ちゃんで慣れているので問題ありません。

「……」

（サラサラしてる……ちょっと意外です。）

なんとなく、男子の髪質は女子と違って硬いのかな？ と思ってたんですが……石上くんの髪はサラサラしてて、撫で心地も悪くありません。

「石上くん、いつもお疲れ様です……な、なんちゃってっ……！」

普段はバリバリ生徒会の仕事もしてて、偶にSっ気を発揮して私にイジワルをする石上くんの無防備に寝ている所を見ていると、また無意識に近付いている自分に気がきました。

「……っ！」

そ、そう！ これはゆっくり顔を近付けて、石上くんがいつ起きるかどうかを見極めるチキンレースゲームをしてるだけ！……別にキスとかする訳じゃないからセーフです！



「…………んおっ!?」ダラッ

中腰の姿勢で近付いていた所為でバランスが崩れ、私の体は石上くんの方へと傾きました。

「…………ん!?」サッ

(…………は、はあああっ!!? ほ、ほっぺにちゅーしちゃいました!? ほ、ほっぺだからセーフ!? あっ!? それよりもっ!?)

むにととしたほっぺの感触を唇に感じた直後、我に返った私は、バツと石上くんの様子を急いで確認します……良かった、起きてないみたいです。石上くんの瞼は下りたまま、先程と同じ体勢を維持しています。

(ホッ……良かった、起きてない。)

「…………こ、ここまでですね!」

き、今日は、生徒会はお休みさせてもらいましょう! 正直、石上くんの事を冷静に見れる自信が今の私にはありませんから……! 私はスマホで会長とかぐやさんに休みの意を伝えると、一目散に生徒会室を去りました。

「…………二!」タタッ

（ほっぺ！ほっぺだからセーフです！石上くんだって寝てて気付いてなかったし、私もちゅーするつもりは微塵もなかったのでノーカン!! 実質セーフ寄りのセーフです!!）

.....

ボタンッという音を響かせて、藤原が生徒会室を去った10秒後……

「……………!!???!」ガハッ

（ええええええええっ!!???!?）

アウトだった。

「え、なんで藤原先輩がっ……………!? え、ちょっ……………えええっ!?」

本日の勝敗、石上の負け

この後の生徒会業務に支障が出まくった上、明日も寝不足が確定した為。

## 石上優は考えたい

感想、評価ありがとうございます(。ω。)

放課後……藤原先輩が何かやって来ようとしてたから、直前に起きてカウンターをお見舞いしようと様子を見ている内に、藤原先輩の普段とは違う態度と頭を撫でられた事に動揺して起きるタイミングを逃し、挙げ句の果てに最後は頬に藤原先輩の唇が当たるといふファンタスティックな結果になった……何がなんだかわからない。これは本当に現実か!? これじゃまるで、藤原先輩が僕の事を好きみたいじゃないか!?

## 〈生徒会室〉

衝撃的な体験をした翌日……僕は生徒会室で机を隔てた形で、四宮先輩と向き合っていた。

「石上君、もう体調は大丈夫なの? 昨日は随分と様子がおかしかったみたいでし

たけど……」

「はい、別に体調が悪かった訳でもないんですけど、色々ありまして……」

「そう、それで？ 石上君は何が聞きたいのかしら？」

「藤原先輩の事について少し……」

「ああ、そういえば……お泊りした時の藤原さんについて話してませんでしたね。」  
（さて……どんな展開が望ましいかしら？ お泊りの時の事を全て話せば、藤原さんの石上君に対する好意がバレる……かと言って、普段の態度から石上君が藤原さんを異性として見ていないのは明白。なんとか石上君が藤原さんを意識する様に仕向けたい所ですが……）

「ああ、いえ……その事についてはもういいっていうか……」

「もういい……とはどういう事かしら？」

四宮先輩の言葉に、昨日の出来事が脳内に去来する。藤原先輩に頭を撫でられた事、いつもお疲れ様と労いの言葉を掛けられた事、そして頬に触れた唇の感触……そこまで思い出して、カッと熱くなった顔を逸らしながら答える。

「あ、いや……なんでもないっす。」<sup>ツ。ッ</sup>

「……そう。」

（え、えーっ!? 石上君、何その反応!? 絶対何かあった時の反応じゃない! まさか、藤原さん……既に石上君へ何かしらのアプローチを!?）

「すいません……四宮先輩が態々調べてくれたのに……」

「いえ、気にしないでいいわ。それよりも、お泊りの件ではないのなら何が聞きたいのかしら?」

「あー、変な意味じゃなくてですね……藤原先輩ってどういう男性がタイプなのかなど。」

（藤原先輩があんな事をした理由……自惚れた事を言えば、僕の事が好きだからってのが一番無理がない理由なんだけど、それ以外の理由があるなら早めにハッキリさせておきたい。僕が藤原先輩の好きなタイプに掠ってもないのなら、昨日の行動も別の理由があるって事になるし……）

「藤原さんの好きなタイプ……ね。」

（滅茶苦茶意識してるー!? え、もしかして……昨日石上君の様子がおかしかったのって、藤原さんの所為!? 藤原さん……I・Q3の胸ばかりに栄養が行ってる脳カ

うだとはかり思っていました、中々やるじゃない！)

……

その頃の藤原……

「しかし意外だな、藤原の方から手伝わせて欲しいなんて言うて来るとは……」

「私にも色々あるんですよ……今はとりあえず、問答無用で頭の中がカラッポになる会長のポンコツさはどうしても必要なんです!!」

「馬鹿にしてんのか。」

……

「……そうね、自分と対等に接してくれる人じゃないかしら？」

「……対等に接してくれる？」

「ええ……生まれが良いとその人個人ではなく、その背後にある家柄、経歴、権力に目を奪われる人は多いの。藤原さんには、同性の友人は沢山居ますけど、異性の友人は私が知る限り会長だけ……そして会長を除けば、藤原さんと唯一対等な関係を築いているのは……石上君、貴方だけよ。」

「僕だけ……」

「それにね？ 藤原さん、なんだかんだで石上君に構ってもらってる時が一番楽しそうなもの。」

（これくらいの援護はしてあげなきゃね。）

「そう、ですか……」

「あら？ もしかして、石上君照れてるの？」

「……別に照れてませんけど？」

「ふふ、本当かしら？」

（これは、かなり期待出来るんじゃないかしら？）

……

その頃の藤原……

「今までの地獄特訓が報われるんだ……とかちょっとでも期待した私が馬鹿でした！ あやまれー！ 音楽と全ての表現者と私にあやまれー！！」

「そこまで言うか……」

「でもいい……いいですよ。いい感じに頭の中がカラッポになって来た感じがします……」

「割と元からだろ。」

……

「だ、だって藤原先輩ですよ？ 平気でゲームでズルするし、食い意地張ってて、ゴキブリを素手で掴める系女子の藤原先輩ですよ!？」

「それについては擁護出来ないけど……石上君、貴方が藤原さんに抱いてる感情は、友情？ それとも愛情？ いずれにせよ……貴方がちゃんと考えて答えを出してあげてね？」

「え？」

……

その頃の藤原……

「友情？ 愛情？ 千花参上！ イエア!!」

「だから！ ちゃんと韻を踏めって言ってんだろ!! 真面目にやれ、藤原あ!!」

「会長にそれ言われるの、なんか釈然としないんですけど!？」

……

「気付かないかとも思ったの？ 藤原さんと何かあったのでしょうか?」



「……」

「安心して、追求するつもりはないから。」

「……ありがとうございます。」

「でもね、石上君。これだけは言わせて……」

帰宅後、自室で 1 人……四宮先輩に言われた事を思い出す。

……石上君、自分の気持ちに正直にね。

「自分の気持ちに正直に……か。」

僕は藤原先輩の事をどう思ってるんだろうな……僕は目を閉じると、記憶の糸を手繰り始めた。

石上くん……きもーっ！

「……」

一番最初に思い出したのがコレって……そりゃ赤ちゃんの臭いとか例えた僕も、

今思えば悪かったけどさ……僕は気を取り直して思考を続ける。

皆でやりましょう！ ほら、石上くんも！

ああ、そうだ……藤原先輩が居なきや、あんなに早く生徒会に馴染むなんて出来なかった筈だ。生徒会に入った当初は、助けてくれた会長相手にさえ少し距離があったし、四宮先輩は凄く怖くて……いつか殺されるんじゃないかと怯えていた。会計として任された仕事はキツリ終わらせてはいたけど、最初の頃は生徒会室には打ち合わせ程度でしか寄らずに仕事は持ち帰っていた。

……いい人達って事はわかっていた。女子にストーカー紛いの事をした問題児……そんな噂に惑わされる事も無く、僕を1人の人間として接してくれたのだから……石上くん、ゲームをしましょう！

そう言って藤原先輩は、生徒会室に色んなゲームを持って来ていた。

えへへー！ 次はコレです！

パッと花が咲いた様な笑顔で、真っ直ぐな瞳を向けられた……

年に一度の誕生日は、私だけを特別扱いして欲しいのに！ 石上くんと一緒だったら私だけ特別じゃなくなるでしょ!! バカー！

……恥や外聞さえも投げ捨てて、思った通りに発言し、行動する藤原先輩のそういう所は尊敬出来るけど……

えへへ、石上くん好きだよ。

「くっ!？」

違う！アレは揶揄い目的だから！愛してるゲームで藤原先輩が勝つ為に言っただけだから……とにかく違う！他！他の事を思い出して……

藤原先輩好きっす。

ちゃんと知ってるから心配しなくていいよ。

「……アレが一番ズルかったな。」

暗くなり始めた部屋で、僕の頭の中では前回と今回の……2つの記憶が絢交ぜになって浮かんでは消えていった。

〈中庭〉

「っ！ 藤原先輩……」

数日後の放課後、中庭を歩いている藤原先輩を見掛けた。ここ数日……中々会う機会にも恵まれず、会っても周囲に人が居る状況だったり話し掛ける機会を逃し続けていた僕は、小走りで藤原先輩へと近付いた。

「藤原先輩！」

「あ、石上く……」オ。ウ

「ちよっ、藤原先輩!? 鼻血が出てますけど、大丈夫なんですか!？」

「あ、コレはその、男同士の愛っ……友情を間近で見学する機会にあやかりまして……」

「そうですか……とりあえず、これからは藤ナマ先輩って呼んで良いですか？」

「意味わかんないけど、なんかヤダ！」

「はあ……とりあえず、コレ使って血を止めて下さい。話はそれから……」

僕は溜息を吐きながら、藤原先輩にポケットティッシュを渡した。

「話？ 話って何ですか？」

「あー……まあ後で言います。それより保健室とか行かなくて大丈夫ですか？」

「そこまでじゃないから大丈夫ですよ！でも、ちょっとトイレ行って来ますね！」

「あ、はい。」

10分後……………

「えへへ、やっと止まりました！」

「……気を付けて下さいね。」

「石上くん……それで、話ってなんですか？」

（だ、大丈夫です！会長のポンコツっぷりのお陰で、頭の中は空っぽになってますから変に慌てたりなんてしません！）

「……まだ色々ごちゃごちゃしてて、上手く考えられない事もあるんですけど……」

「？」

「ちゃんと考えて答えを出すので、もう少しだけ待っててもらえますか？」

「よくわかりませんが、わかりました！」

「ハハ、どっちですか……まあ、それだけ言いたかったんです。」

「ふーん……じゃ、生徒会行きましょうか！」

「……そうっすね。」

いつ答えが出るのか……それはわからない。だけど、自分で思っていたよりも早くその答えが出る事になるとは、その時の僕は知る由もなかった。

## 藤原千花は誘いたい

好きな漫画が悉く休載するとか、呪われてるのかな……

## 〈藤原家〉

「姉様、文化祭だよ！」

会長とハーサカ君の愛っ…友情を目の当たりにした日から数日後……自室で寛いでいると、萌葉がそんな事を言いながら部屋に入って来ました。

「萌葉ー？ 文化祭がどうかしたの？」

「寝そべってポテチ食べてる場合じゃないよ、姉様！ 来週の土曜日に中等部で文化祭があるでしょ？ それに石上先輩を誘って、一緒に遊びに来なよ！ デートだよ、デート！」

「……萌葉、何か企んでるでしょ？」

「企んでるなんて……そんな訳ないじゃない！」

「……本当に？」

「別に姉様をイジって遊ぼうとか！」

「……」

「石上先輩が居る事を利用して、姉様を精神的に追い込んで危機感を煽ろうとか！」

「

「……」

「全然考えてないもん！」ツツツ

「絶対考えてるでしょー!? 滅茶苦茶そわそわしてるじゃないですか！ 私をイジって遊んで、石上くんを利用して精神的に追い込もうって考えてるでしょー!! 却下！ 却下です！」

「ふーん……でも本当にいいの？ もしデートに誘わないと……」

「さ……誘わないと？」

「石上先輩に……」

「い、石上くんに？」

「……豊姉様をけしか喚けます！」



「

「それが嫌だったら……わかるよね？」

「うあーん!? 妹が脅迫まがいの事まで言う様になっちゃいましたー!?」

## 〈生徒会室〉

萌葉に背中を押された……というより突き飛ばされた翌日の昼休み、私は生徒会室でお昼ご飯を食べていました。かぐやさんから石上くんが昼休みに仕事をしに来る……という情報を聞いて待っているのです。それもこれも、昨日の萌葉との遣り取りが原因でした……

……

「も、萌葉！ お姉ちゃんを脅すなんて……そんな悪い子に育てた覚えはありませんよ!?」

「そりゃー、私を育てたの姉様じゃないしねー。早速、豊姉様に話を通して……」

「ストーップ!! じ、じゃあ北高! 北高の文化祭は今週末ですよね!? 石上くんを文化祭に誘うならそっちにします!」

(中等部の文化祭なんて行ったら、萌葉にどれだけ冷やかされるかわかりません!)

「あー、北高も結構レベル高いつて聞くよね。」

「そ、そうですね! だから姉様に言うのは無しにして下さいね!」

「まー、姉様がちゃんと誘うなら、私はどっちでも良いから頑張ってね。」

(中等部の文化祭なら、私達の様子を見に行くっていう理由で誘いやすいかなと思っただけど……姉様、ちゃんと誘えるのかなー?)

……

「はあ……萌葉はいつからあんな悪い子になっちゃったんでしょう……」  
ザザ

々

「あれ? 藤原先輩、どうしたんですか?」

「あつ、ええと……忘れ物を取りに来たついでに、お昼を食べて行こうかなと思いまして……」

「へえ、僕は仕事しに來ただけなんで、気にせずに食べて下さい。」

「は、はい……」

「……」 カカタ

「……」 ゼッゼッ

石上くんは向かいの席に座ってノートパソコンを開くと、仕事に取り掛かり始めました。少しの間……石上くんがキーボードを打つ音を聞きながら、お弁当を口に運びます。

「ふー……」

お弁当を食べ終わった頃、石上くんも区切りのいい所まで終わったらしく、溜息を吐きながら背凭れに体を預けました。

「……っ！」

今生徒会室には、私と石上くんの2人……話し掛けるなら今しかありません！  
私は勢いよく顔を上げると、石上くんに話し掛けました。

「あ、あのっ、石上くん！ 明後日の……」

（アレ？ 萌葉や圭ちゃん達が居る中等部の文化祭ならまだしも、他校の文化祭に

誘うのって……)

「はい？ 明後日の……なんですか？」

(め、滅茶苦茶ストレートなデートのお誘いになっちゃいません!?)

「え、ええと……そのお……」ぎぎぎ

「……藤原先輩？」

「……」

(は、恥ずかしいっ……で、でも今誘わないと放課後は他の人も居るから余計に誘いづらいし、そもそも北高の文化祭は明後日だし……うあーん!! かぐやさん助けて下さいいっ!!)

……

その頃のかぐや……

〈2年A組〉

「はあ……」トエーぐ

(あああっ!?! 無意識とはいえ、会長からのデートの誘いを断るなんて……誰でもいいから昨日の放課後まで時間を戻してくれないかしら……)

かぐやは昨日の放課後、白銀からの文化祭デートを流れて断ってしまっていた。

「……」

（……かぐや様のことだから、そんな事考えてるんだろうなあ。）

「ねえ早坂、今日の四宮さん元気くない？」

「ねー！ マジ心配ー☆」

（まあ、完全に自業自得な訳だけど……）

……

「藤原先輩、どうしたんですか？」

「え、ええと……あっ！ ち、調査です!!」

「……調査？」

「はい！ 奉心祭までもう2週間を切ってますよね？ 今年は会長の尽力で2日間開催になりますけど、その分アクシデントが起こる可能性は高くなると思うんですよ！」

「……まあ、そうですね。」

「だ、だから……明後日、北高の文化祭に私と石上くんまで調査に行きましょう！」

「っ!？」

「だ、ダメ……ですか？」

「……」

「……い、石上くん？」

（あわわっ、返事がない……や、やっぱり、いきなり誘ったのはマズかったんじゃない……）

返事が無い事に不安を煽られ、沈んだ顔で石上を見つめる藤原……しかし！デートに誘われた石上本人も、内心は穏やかではなかった！

「っ!？」

（こ、これっ……調査って名目でデートに誘われてるっ!？）

「だ、ダメ……ですか？」

「……」

（デート!? 藤原先輩と!?)

「……い、石上くん？」

藤原先輩は、不安そうな瞳で此方を見つめている……藤原先輩の気持ちはよくわかる。藤原先輩は今、断られたらどうしようという不安に耐えながら……勇気を出して誘ってくれてるんだ。此処で茶化したり、不誠実な返答は出来ない。

「……そうですね、僕も調査には行きたいと思ってたので……行きましようか。」

「ほ、ホントですか!？」

「はい、嘘なんか言いませんよ。」

「じ、じゃあ明後日！北高の校門前で、待ち合わせしましょう!!」

（やった！やりましたよ、萌葉！）

「わかりました、何時集合にします？」

「11時にしましょう！そのままお昼ご飯も文化祭の出店で済ませる感じで！」

「わかりました……楽しみですね。」

「……っ！はい！楽しみです!!」い。――

## 〈生徒会室〉

「こんにちはす。」

放課後……生徒会室を訪れると、既に僕以外の全員が集まっていた。

「全く、男子ってホント……」プツプツ

「……会長、伊井野どうしたんすか？」

「あ、ああ……先程、男子が女子を文化祭デートに誘っている所を取り締まったらしくてな……」

「あ、そういえば、さっき会長の友達の……オールバック先輩も、文化祭デートにガチ勢先輩を誘って断られてましたよ。」

（……風祭はわかるが、ガチ勢先輩？）

「石上、それは見て見ぬ振りしてやってくれ。」

「他にも公衆の面前で異性交遊を持ち掛ける男子が!? ホント最低ね!」

「……別に異性と文化祭に行くくらいは良くないか？」

「ダメ! 不純異性交遊は取り締まり対象よ!」



「……」

（み、ミコちゃんにはバレない様にしないといけません！）

「藤原先輩もそう思いますよね!？」

「ええっ!？ わ、私は……そこまで厳しく取り締まらなくてもいいんじゃないかなあ……と。」

「ま、まさか……藤原先輩も不純異性交遊を!？」

「ええっ!？ ち、違いますよ!？ 私は別にそんなっ……!？」

「……藤原先輩、念の為お聞きしますけど……明後日の予定は何かあるんですか？」

「

「っ!？ え、ええと……ぶ、プライベートな事は、ちょっと……」

「……まさか藤原先輩、明後日の北高文化祭に行ったりっ……!？」

「っ!？」

「男子と待ち合わせしたりしてませんよね!？」

（このままじゃっ……か、斯くなる上は!）

「……ミコちゃん、シーっです!」

「え？ し、シー？」

「はい、この話は此処でお終いです。」

「で、でも藤原先輩！ 私は風紀委員としてっ……」

「……もし、またウルシゴキブリさんが出ても助けてあげませんよ？」

「」

藤原の狡い手が炸裂。  
ダーティープレイ

「もしかしたら、今この瞬間にも……ミコちゃんに飛び掛かろうとするウルシゴキブリさんが、何処かに潜んでるかもしれませんね？」

「ひっ!？」

「……じゃあミコちゃん、この話はコレでお終って事で良いですね？」

「は、はい……」ツルツルッ

「ほっ……」

（ふう……なんとかなりました！）

藤原、週末の文化祭デートの妨害因子を見事に排除する事に成功。そして……

「……藤原さん、伊井野さんに何を言ったんですか？」

「……藤原書記、伊井野監査に何を言った？」

「少し世間話をしました！」

「……」

（藤原先輩、何かエグい事言ってそうだな……）

「怖いっ……ゴキブリ怖いっ……」  
ぐぐぐぐぐ

伊井野のトラウマが再発した。

## 北高文化祭を回りたい

評価ありがとうございます(ω。)

多分、次で終わります。

エタらせてはいけない(戒め)

週末……北高の校門前に着くと、門壁に体を預けて周囲を見渡す……藤原先輩はまだ来てないみたいだ。派手に飾られた校門を多くの人が通り抜けて行く。北高の文化祭は9時開始だから、既に開門してから2時間近く経っているにも関わらず、校門付近は依然として人の流れが多い。藤原先輩と待ち合わせた11時まで残り15分……まあ、時間的には遅過ぎず早過ぎずの時間だと思う。

「石上くーん！」

その声に周囲を見渡すと、此方に駆け寄って来る藤原先輩が見えた。

「遅れてごめんなさい！ 待ちましたか!？」

「いえ、僕も今来た所なんで……」

（……ナチュラルにデートのテンプレ台詞を言ってしまった……）

「ど、どうですか？」

「……どう、とは？」

「だ、だから、その……うーっ！」

藤原先輩は胸の前で指を突き合わせながら、困った様な表情を浮かべて唸っている……幾ら僕でも流石にわかる。藤原先輩は自分の私服についての感想を求めているんだ。気恥ずかしいとか、藤原先輩が相手だからとか、くだらない理由で誤魔化しているものでも……ない。

「その……に、似合ってますよ？」

「っ!? あ、あはは……な、何言ってるんですか、石上くん!!」  
ニギニギ

「……藤原先輩、痛いっす。」

（恥っずい！ 藤原先輩相手だと、また違った恥ずかしさがあるぞコレ！）

「ほらほらっ、早く入りますよ！」

（えへへー、石上くんに似合ってるって言われちゃいました！）

バシバシと背中を叩き続ける藤原先輩に促されながら、校舎内へと入った。

〈校舎内〉

校舎内に入ると早速、各教室でやっている出し物や屋台の看板が視界に入る。秀知院の文化祭を体験した僕でも、圧倒されそうになる熱気と規模だが……奉心祭の方が凄いと思ってしまうのは、僕が秀知院の生徒だからだろうか？

「わー！ 凄い熱気ですなー！」

「っすね……藤原先輩、何処から回りますか？」

「決まってるじゃないですか……気になる所は全部回るんですよ！」

……

〈綿菓子屋台〉

「見て下さい、石上くん！ 綿菓子がこの大きさで50円ですよ！」

「デカイですけど1人で食べ……られますね、藤原先輩なら。」

「どういう意味ですか、カラー！」

……

〈輪投げ屋〉

「ふふふ、TG部のリーサルウェポンとは実は私の事です！ 石上くん、輪投げで勝負しましょう！」

「……いいっすよ。玩具屋次男坊の実力、見せてあげます。」

「じゃあ、負けた方は罰ゲーム有りにしましょう！ 罰ゲームはそうですね……あ！ あの景品の犬耳カチューシャを今日一日付け続けるって事でどうですか!？」

「犬耳って辺りがフラグな気がしますが、別にいいですよ。」

「……フラグ？」

10分後……

「……」

「……」

「藤原先輩、お手。」

「……わん。」

「じゃ、行きましようか……犬原先輩。」

「うあーん!? 全然勝てなかったんですけどー!? 石上くん、チートしましたね!? ずっこい! ずっこいです!!」

「輪投げでどうやってチートするんですか……」

……

〈体育館〉

〈燃え上がるHeat! 声枯らすBeat!!〉

「……っ!」ツツツ

「藤原先輩、何をそわそわしてるんですか?」

「い、いえ、ちょっと……ラッパーの血が騒ぐと言いますか……」

「……お願いですから、舞台に乱入とかやめて下さいね?」

「し、しませんよ?」ツツ

「僕の目を見て言っして下さい。」



文化祭を楽しむ事数時間……ある程度回った僕と藤原先輩は、来場者の休憩用に用意された椅子に腰掛けていた。

「藤原先輩、僕ちょっとトイレ行って来ますね。」

「あ、じゃあ此処で待ってますね。」

「うす、すぐ戻るんで。」

……

「ふう……ん？」

トイレから戻ると、藤原先輩は知らない男と話をしていた。……知り合いだろうか？ 藤原先輩に近付いて、お待たせしましたと声を掛ける。

「あ、石上くん！」

藤原先輩はパツと安心した笑みを浮かべると、駆け寄り僕の背中に隠れた……なるほど、ナンパか。ナンパ男は値踏みする様な視線で僕を見て、フンと鼻を鳴らした。

「へえー？ こんな陰キャ相手じゃつまないんじゃない？ 絶対オレと遊んだ方

が楽しいって！」

「……どうやら、格下とでも認識されたらしい。さり気なく藤原先輩の体の前に腕を伸ばし、ナンパ男からガードする。」

「……見ての通り、先輩は嫌がってるので諦めてくれませんか？」

「先輩？ お前年下かよ……年下じゃエスコートなんて無理無理！ ね？ オレと一緒に戻るうよ？」

「……」

ナンパ男の言葉が聞こえていないとでも言うように、藤原先輩は俯いて無言を貫いている。

「……嫌だそうですよ？」

「お前には聞いてねえんだよ!!」

無視された苛立ちを隠そうともせずに、ナンパ男は声を荒げた……というか、北高の教師や風紀委員は何をしてるんだ？ さっさと来て欲しいんだけど……

「大体、お前みたいな陰キャには釣り合ってねえんだよ！ こんなつまんなさそうな奴と回っても絶対楽しめねえって！」

「……」

（どうするかなあ……他校であんまり問題は起こさない方がいいだろうし……とりあえず、さり気なく藤原先輩だけはなんとか逃がして……）

未だに続くナンパ男の罵詈雑言を聞き流しながら、対策を考えていると……

「この……ボッケナスー!!」

背中から藤原先輩の叫び声が聞こえて来た。

「さつきから石上くんの事、つまんないとか一緒に回っても楽しくないとか好き勝手言って！ 私は楽しいから石上くんと一緒に居るんです！ 私は石上くんの良い所、沢山知ってるもん！ 石上くんの事、何も知らない人が勝手な事言わないで下さい!!……石上くん、行きますよ!!」

「ちよっ……藤原先輩!？」

ガシツと藤原先輩に手を握られ引つ張られる。藤原先輩と僕を避ける様に、周囲の人達は脇に寄って道を開けていく。チャリと後ろを確認すると、ナンパ男は周囲から向けられる視線に気まずさを感じている様な顔で立ち尽くしていた……多分、もう絡んで来る事はないだろう。

「もうっ…………もうー!」ﾌﾟﾝｽｶ

ﾌﾝｽｶ…………という擬音が聞こえて来そうな程、憤っている藤原先輩に腕を引かれながら廊下を足早に歩いて行く。

「…………」

私は楽しいから石上くんと一緒に居るんです!

「…………」

(ああ、良かった…………)

私は石上くんの良い所、沢山知ってるもん!

「…………」

(藤原先輩が前を向いていてくれて…………)

石上くんの事、何も知らない人が勝手な事言わないで下さい!!  
(今の赤くなった顔を見られるのは…………流石に恥ずかしいから。)

〈中庭〉

暫く藤原先輩に手を引かれ歩いていると……気付けば中庭の小さな噴水の前に来ていた。

「……」

「……藤原先輩？」

「ふふーんだ！ 言ってやりましたよ!!」

僕が声を掛けると、藤原先輩は此方を振り返りながら自信満々にそう言い放った。

「……ええ、格好良かったすよ。」

「えへへー！ でも、石上くんも全然怖がってなかったですね？」

「まあ……」

（そりゃあ、もっと怖くてドチャクソやべー人知ってるし……）

……

〈四条邸〉

「……」

「……渚？ どうしたのよ？」

「ううん、なんでもないよ。なんでも、ね。」

「？」

……

「っ!？」<sup>ツァ</sup>

(何故か悪寒が……)

「石上くん？　どうかしましたか？」

「あ、いえ……なんでもないっす。そろそろ、文化祭も閉幕の時間ですね。」

「そうですねー、最近は夜遅くまでやってる文化祭は減って来てるみたいですし……」

「じゃあ、調査はこころ辺で終わりですね……」

「調査……そ、そうですねっ…調査、ですもんね……」<sup>ツギ</sup>

藤原先輩は、一瞬で気落ちした様なテンションになった……僕は間を空けずに言葉が続ける。

「まあ、僕は……デートだと思ってましたけど。」

「っ！　そ、そうですね！　まあ石上くんがそこまで言うならデートって事でも良いですよ!？」

「ははは、じゃあデート扱いでお願いします。」

「仕方ないですねー！」じ。ー

その後、いつもの花が咲いた様な笑顔を浮かべた藤原先輩を家まで送り、帰路に着いた。

……

### 〈自室〉

「はー……参った。」

私は楽しいから石上くんと一緒に居るんです！

私は石上くんの良い所、沢山知ってるもん！

石上くんのこと、何も知らない人が勝手な事言わないで下さい！！

「完全に……落とされた。」

本日の勝敗、石上の敗北。

## 石と藤のエピローグ

感想、評価ありがとうございます(。ω。)

## 〈生徒会室〉

「それでですね？ 石上くんったら、文化祭の調査をデートだと思ってたらしくて……」

「へえ、そうなの……」

「ま、まあ私もデートと言うのは、客かではないので否定はしなかったんですけど……」

「そう……」

「あ、それとですね！ 私が待ち合わせ場所に着いた時に、石上くんが私の服装を見て似合ってるって言うてくれたんですよ！ えへへー、困っちゃいますよねー！」

「……」



（う、羨ましいっ！私だって……会長の誘いを無意識に断らなければ、会長と文  
化祭デートが出来たのに!!）

「えへへー！」<sup>い。</sup>—

「……藤原さん、デートは楽しかった？」

（まあいいわ、だって……）

「はい！めちゃくちゃ楽しかったです!!」

「ふふ、なら良かったわ。」

（こんなに嬉しそうにしているんだもの。）

〈中庭〉

チュンチュンという小鳥の囀りを聞きながら、僕と会長は芝生の上で寝転んでい  
た。

「……マジで？」

「マジです。」

「そうか、石上が藤原の事をなあ……」

空を見上げながら、会長はそう洩らした。会長には藤原先輩と北高の文化祭でデートをした事や藤原先輩との間に起きたあれやこれやを説明している。

「それで、告白はしないのか？」

「告白……」

別に告白は男からするべき……なんて性差別的な考えを持っている訳ではないけど……

「ちょっと……負い目があるというか、なんと言いますか……」

「……負い目？」

「はい……僕が偶々あの時起きていたからこそ、藤原先輩の好意に気付けた訳じゃないですか？ 惚れられているっていう有利な立場、告白しても絶対に傷付く事がない安全圏……短期間とはいえ、そういう場所に身を置いていたのに罪悪感を感じるといえるか……」

「はあ……石上も存外、面倒な事を考えるよな。」

「そうかもしれないっすね……」

「……恋愛は好きになった方が負け、という言葉があるだろう？」

「え？……はい、ありますね。」

「それはある側面に於いては正しいだろう。告白してOKを貰い付き合う事になったとしても、告白したという事実は……無意識に自身の立場が下だと思わせる事もあるかもしれないからな。ただな……先に好きになったという事は、相手よりも早く、相手の良い所を見つけた……そういう見方も出来ると俺は思う。」

「相手より早く、相手の良い所を……」

「ああ、そういった意味では……藤原に軍配が上がる。」

「……」

「先に石上を好きになった藤原の負けとも言えるし、石上の良い所に気付いて先に好きになった藤原の勝ちとも言える。まあ要は……」

会長はそこで一呼吸間を置くと、真上に向けていた顔を少しだけ此方に傾けながら言った。

「引き分けだ。」

「……そんなもんですか。」

「ああ……どちらにせよ、どうするか決めるのは石上だ。話を聞く限りは、両想いだから悪い結果になる事はないだろうしな……自分から告白するもよし、藤原から告白して来るのを待つもよし。個人的には、さっさと告白して藤原を安心させてやれと言いたい所だが……だが石上、これだけは言っておくぞ。」

会長は体を起こして軽く伸びをした……釣られて僕も体を起こす。

「相手から告白させようとすると、自分が思っている以上に時間が掛かるぞ!! 確実に成功する見込みがあるのなら、自分から告白した方が絶対に良い! 告白したら負けとか、告白させたら勝ちとか……そんなしょもないプライドを抱えていると絶対後悔するぞ!」

白銀御行、魂の叫びである。

「わ、わかりました……」

会長から進る庄に思わず答える……会長も苦勞してそうだな。

## 〈生徒会室〉

会長と別れた後、僕は文化祭で使う備品を生徒会室まで運ぶ任を受けた。机に限界まで乗せた備品を落ちない様に気を付けながら、生徒会室に入る。

「あー、重かった……」*チャグ*

「あはは、石上くんはだらしがないですねー！もしかして貧弱さんですかー？」  
生徒会室に入ると、ニマニマとした笑みを浮かべる藤原先輩に迎えられた。

「言ってくれますね……これでも僕、結構鍛えてるんですよ？」

「えー？さっき弱音吐いた人の言葉とは思えませんけど……」

「瞬発力はあるけど、持久力が無いってヤツつすよ。ほら、腹筋だって結構割れますし。」

藤原先輩の貧弱発言を撤回させる為に、シャツを捲って証拠を提示する。前回の習慣というか、名残りでスクワットや腹筋は続けていたから……まあ、他人に見せられる程度には鍛えられている。

「んなっ!? な、な、何してるんですか、石上くん!？」

「……あれ？ 藤原先輩、もしかして照れてるんですか？」

先程までのニマニマ笑いが消え、藤原先輩は慌てて両目を手で塞いだ……隙間から2つの瞳がバッチリ見えてるけど。

「うーっ……！」 ぎゅぎゅ

藤原先輩は、チラチラと僕の顔と腹部へ交互に視線を移している。

「……藤原先輩って、意外とウブですよ。」

「は、はーっ!? 誰がラブ探偵じゃなくてウブ探偵ですか!? 全然そんな事ないですけど!」

「別にそんな事は言ってません……いや、だって腹筋見せたくらいで慌てふためいてますし……男と手を繋いだ事も無いんじゃないですか?」

「……あります! あるに決まってるじゃないですか!」

「……へえ、いつですか?」

「うっ……そ、その……この前の石上くんとので、デートの時に……」

モジモジと指を突き合わせながら、藤原先輩は目線を落としながらそう言った。

「っ!? そ、そうだったんですか……」

(……確かに手握られたわ。あの時が初めてマジか……)

「……」

「……」

なんとなく、気まずい雰囲気が始めた頃……

「い、石上くん……あの時は色々あって、いっぱいいっぱいになっちゃってまして……よく覚えてないんですよ……」

「え？ あ、はあ……」

何が言いたいんだろう……藤原先輩の真意を測りかねていると……

「~~~~っ！ 石上くん！ ハイタッチ！」

藤原先輩はそう言いながら、目の前で両手を広げた。

「え、ええっ!？」

思わず反射的に、藤原先輩と同じポーズを取った。すると……

「えい！」  
やぐ

「藤原先輩!？」

「えへへ……引っ掛かりましたね？」

藤原先輩は頬を僅かに紅潮させながら、にぎにぎと僕の手を握っては緩めを繰り返している。

（この人はホント……）

「あの、藤原先輩……」*さやぎ*

「こんにち……ふ、藤原先輩!? 石上も何してるの!？」

「み、ミコちゃん!? こ、これはそのっ……」

「いや、藤原先輩から誘って来て……」

「石上くん!？」

「誘って!? ふ、藤原先輩……ダメです! ハレンチです! ふしだらです!!」

「み、ミコちゃん、違うんです! 別に変な理由があった訳じゃっ……ちよつと石上くん!? ミコちゃんからの私の評価が下がったらどうしてくれるんですか!？」

「大丈夫です。伊井野が藤原先輩を尊敬しなくなるのは、もうちょい先ですから。」

「いつかは尊敬されなくなるみたいない言い方しないで下さい!」

「付き合ってもない2人がそんな距離感間違ってます! ほらっ、石上もさっさと離れて!」



「……」

個人的には、さっさと告白して藤原を安心させてやれと言いたい所だがな……  
そうだ、プライドとか罪悪感とか……そんな事よりも、何よりも優先するべきモノがあるんじゃないだろうか……

「じゃあ、付き合ってたらいんだな。」

思わずそう言葉を洩らす。幸いにも伊井野には聞こえてなかったみたいだけど……  
「……え？」

藤原先輩には聞こえていたみたいだ。

伊井野は風紀委員の仕事前に、生徒会室に寄っただけらしい。時計を確認した伊井野は慌てて生徒会室を出て行った。扉を閉める直前……

「私が居なくなるからって……へ、変な事しちゃダメよ!? 藤原先輩も気を付けて下さいね!」

という言葉を残し、生徒会室を後にした。

「い、石上くん、さっきのってどういう……」

不安と期待の混ざり合った……そんな瞳で見つめられる。多分、ストレートな言い方で告白すれば問題はない。だけど寝ている所にキスをするという意識するキツカケを作られ、惚れさせられた事が少し……ほんの少しだけ悔しいから、こんな言い方になってしまうのは大目に見て欲しい。

「……藤原先輩、ゲームをしませんか？」

「……ゲーム？」

「はい、先に相手に好きって言わせた方の勝ち……僕が勝ったら、僕の恋人になって下さい。」

ー完ー

最後らへんの遣り取りは書き始めた段階でボンヤリと決めていましたが、それ以外のイベントやシーンは捻り出すのに苦労しました……やっぱり藤原は書くの難し

さあ(、 E』 <):

最後はかなり駆け足気味になりましたが、拙い文章にお付き合い頂きありがとうございます  
ございました。 m(ā:ā:)m

※ a f t e r カウントすんの忘れてた……次で本当に終わりです。

## 藤の千花after①

感想ありがとうございます(ω。)

これにて閉幕！

藤原先輩に告白紛いの勝負を持ち掛けたあの日、僕と藤原先輩は晴れて恋人同士となった。ただ……勝負を持ち掛けた時、藤原先輩なら嬉々として乗って来ると思っていたのに……まさか、あんな返し方をされるとは思わなかった。

……

「はい、先に相手に好きって言わせた方の勝ち……僕が勝ったら、僕の恋人になって下さい。」

その言葉に藤原先輩は動きを止めた。どうやら、言葉の意味を理解するのに手間取っているみたいだ。数秒間の沈黙後、藤原先輩は顔を伏せたまま抱き着いて来た。背中に手を回し、僕の体を精一杯抱き締め、胸板にぐりぐりと顔を埋めて……

「うううーっ……なる！ なりまぜうっ！ 石上ぐんの恋人になりまぜうー！！」  
エグエグッ

「……はい。」

まさか、泣きながら抱き着かれるとは思わなかった。ポンポンと頭を撫でながら、藤原先輩が落ち着くのを待っている……

「グズ……石上くんは、私の事……好きですか　？」

「もちろん……好きですよ。」

「……ドーンだYO!!」

「……………は？」

「引っ掛かりましたね！ 私はまだ好きって言ってないので、好きって言った石上くんの負けです！ ふふふ、詰めが甘いですねー？」

うわぁ、マジかこの人……こんな状況でも勝ち負けに拘るとか……

「藤原先輩……虚勢を張るなら、せめて涙を拭いてから言って下さい。」

「ふーんだ！ 何を言っても勝負は私の勝ちです！ なので……」

藤原先輩は一呼吸間を空けると、パッと顔を上げて此方を指差して宣言した。

「石上くんが私の恋人になるんです！」

「ははは、なんすかそれ……結局同じじゃないですか。まあ、僕の負けなら仕方ないっすね……わかりました、藤原先輩の恋人になります。」

「……えへへ、石上くん！これからよろしくお願いしますね!!」

それは、一瞬で千の花が咲いたと錯覚する程の……輝きに満ちた笑顔だった。

……

まさか、藤原先輩と恋人関係になるとは……去年の四月には全然予想してなかった出来事だ。だけど前回の共通認識というか、変わらないというか……予想通りな事もある。それは、藤原先輩と一緒だと退屈とは掛け離れた学園生活を送る事になるという事だ。

### 〈生徒会室〉

藤原先輩と付き合う事になってから数日が経ったある日、生徒会室で仕事をして

いると……スマホが振動してメッセージの着信を伝えて来た。何気なくタップして内容を確認すると其処には……

へ三女の藤原萌葉でーす！ 姉様とのお付き合ひ、おめでとうございまーす！ 姉様のマル秘写真とか色々送るので、代わりに姉様との面白エピソードなどがあれば是非教えて下さいね！

……という文章が書かれていた。僕の連絡先なんて誰に聞いたんだ？ 少しの疑問を抱きながら、添付されているファイルをタップする。

「ぶはっ!? こ、これは……」

送られて来た画像には、あのデートの日の……犬耳カチューシャを付けた藤原先輩が写っていた。首元に犬用と見られる首輪を着けられた状態で……

「石上くん、どうし……ちょっ!? な、何見てるんですか!?」

「あ、藤原先輩……コレ、先輩の妹さんから送られて来たんですよ。」

「もう！ 萌葉ったら、こんな写真いつの間に撮って……」

「そもそも藤原先輩、なんで首輪なんて着けてるんですか?」

「そ、それは……」

「それは？」

……

〈藤原家〉

「ただいま帰りましたー！」

「あー、姉様おかえ……」

「萌葉？ どうしたの？」

「姉様、ちょっとそのまま動かないでね？」

「え？ 別にいいけど、どうしたの？」

「まあまあ、気にしなくていいから！」

萌葉はそれだけ言うと、小走りで部屋を出て行きました。

「……？」

何がなんだかかわからないまま待っていると……

「お待たせー！」 カズちゃん

「……」

「……」 いやいや



「萌葉、コレはなんですか？」

「見ての通り、ペスの首輪。あ、大丈夫！ちゃんと新品の奴だから！」

「大事なものはそこじゃありません！なんで私に首輪なんて着けるんですか!？」

「だってー、犬には首輪でしょー？」

「誰が犬っ……あ！」ぎ

……

「石上くんが教えてくれなかった所為ですよ!？」というか、私は帰り道もずっと犬耳付けた状態で帰ってたって事ですよね!？滅茶苦茶恥ずかしいんですけど!？なんで教えてくれなかったんですか!？」

「いや……いつまで経っても外さないの、よっぽど気に入ってるんだなと思ってました。」

「そんな訳ないでしょー!？大体あの犬耳カチューシャは、罰ゲームで着けてただけじゃないですか！どーりで帰り道にチラチラ見て来る人が多いと思いましたよ！」

「まあまあ、落ち着いて下さい。別に良いじゃないですか……可愛かったですよ？」

「

「い、石上くん……」

「お前ら……」

「貴方達……」

「イチャつくなら余所でやれ（やりなさい）」

……怒られた。

## 〈生徒会室〉

奉心祭まで残り数日まで迫ったある日、生徒会室には役員全員が集まって仕事に精を出していた。暫くすると……コツン、コツンと立て続けに何か窓に当たる様な音に、生徒会一同の視線が集まる。窓にはカーテンが掛けられている所為で、何が窓に当たっているのか確認出来ない。

「ん？ なんだ……？ 伊井野監査、悪いがカーテンを開けてみてくれ。」

「は、はい。」

会長に促された伊井野は、窓に近付くとシャツとカーテンを横にズラした……カーテンをズラしたにも関わらず、窓から見える光景は夕焼け色では無く……何故か黒く染まっていた。

「……夜？」

そう言つて首を傾げた伊井野の事を……今日程気の毒に思つた事はなかった。伊井野が夜と見間違ふ程窓を黒く染めていたモノ、それは……

「<sup>子供</sup>子孫達よ！ あのリボンの少女こそが、我等一族の救世主である！ さあ、一斉に感謝の意を伝えようではないか!!」

※人語は喋ってません

へギチギチギチギチギチギチギチ

□ □

「」

その悍ましい光景を、誰よりも至近距離で見た伊井野は……

「んぎ

倒れた。

「伊井野さん!？」

「伊井野!? 大丈夫か!？」

「ふ、藤原！ お前だったらっ……」

「うええ、キモー……」 ぎぎ

「お前ホントふざけんなよ!？」

ホント……藤原先輩と一緒にだと退屈しないな。

## 藤の千花 a f t e r ②

次話に投稿していた皇女の御心 a f t e r ②をミコ√に並べ直しました。

奉心祭 1 日目も無事に終わり、今日を乗り切れば自信を持って大成功と言い切る事が出来る奉心祭 2 日目の朝……登校した僕を待ち受けていたのは、学園から 1 つ残らず消えた風船という謎と……

「こ、これは……挑戦状です！ ラブ探偵という好敵手を見つけた怪盗が、私に挑戦状を叩きつけて来たのです!!」  
「ムン」

テンション爆上がりアホな恋人の藤原先輩だった。

「……え？ アレって藤原先輩がやったんじゃないんですか？」

「そんな訳ないでしょー!? そんな愉快犯みたいな事をする程、私は暇じゃないんです！ もしやるとしたら、石上くんにも手伝わせるに決まってるでしょ!!」

「これ以上無い程納得出来る理由ですね。」

「でも……なるほど、昨日は施錠もされてなかったらしいですから、警備員の見回りに気を付けさえすれば誰でも校舎内に忍び込めた……段々と頭が冴えて来ましたよ。つまり！ 怪盗は学園中のハート<sup>心</sup>を盗んだ……そういう事ですね！」

「ホントに頭冴えてますか？」

「私が考えるに、その怪盗は腕毛が生えててワルサーP38を持ってると思うんですけど……」

「藤原先輩の個人的意見は後で聞きます。」

「とにかく！ こうしちゃ居られません、怪盗が残した証拠を集めますよ！」

怪盗を捕まえ様と藤原先輩は奔走し、当然僕も一緒に行動する。大変なのはその後だった……

### 〈魔女の館〉

「占い……面白そうです、入りましょう！」

「まあ、良いですけど……」

カーテンで閉じられた入口を越え受付を済ますと、藤原先輩と用意された席に座る。

「……ようこそ、魔女の館へ。私の事は……魔女とも呼んでくれるかしら？ 念の為、名前の確認をしても良い？」

「藤原千花です！」

「……石上優です。」

（……念の為？）

「ハイハイ、なるほどね……北高の文化祭は楽しかったかしら？ 今日とは2回目の文化祭デートだけど、ちゃんと楽しんでる？」

魔女と名乗ったその人は、ファイルの様なモノを開くとそんな事を言った。

「え？」

「は？」

「付き合い始めて……1ヶ月も経ってないのね。あらあら、今が1番楽しい時期かしら？」

「な、なんで知って……」

「怖っ…なんですか、そのファイル……」

「藤原ちゃんは確か……ちよつと強引な感じで食べられちゃうのが好みなのよね？  
良かったわね貴方、押したらイケるわよ。」

「」

「」

「あ、でもね？ 避妊はしつかりしないと駄目よ？ じゃないと藤原ちゃん……卒業する前にお腹おっきくなっちゃうから。母〇プレイがしたいなら止めないけど……」

「」

「」

（これは酷い……）

……

魔女から最悪なセクハラを受けた僕達は、逃げる様に魔女の館を飛び出した。

「あ、アハハ、酷い目に遭いましたね……？」

「そ、そうですね……」



「……」

「……」

少しの気まづさが漂い続け、お互いに相手から視線を外して歩く……く、空気を！この気まづい空気を変えなくては！

「つ、次は何処に行きましようか？……ってあれ？藤原先輩？」

キヨロキヨロと周りを見渡すも、藤原先輩の姿が無い……

「逸れた……」はぐキョッ

「石上くん、やっと見つけた。」

「あ、貴女は……」

……

〈校舎裏〉

「これ……受け取ってくれないか！」

石上くんと逸れてしまった私は、男子に校舎裏に呼び出されていました。男子の手には、ハート型のプレゼントが乗っています……当然、私の返事は決まっています！

「ごめんなさい、それは受け取れません！ 私の隣にはもう空気が無いんです!!  
……いつか、貴方の隣と心の隙間を埋めてくれる女の子が現れる事を祈ってますよ  
！じゃ、私は行かなきゃいけないので！」

藤原は駆け出すと、振り返る事無く走って行った。校舎裏に1人で残された男子は空を見上げ、太陽光から逃れる様に手を翳すと……

「そうか、僕は寂しかったのか……心に、隙間がある事が……」  
妙な悟り方をしていた。

……

……ふーん！ 告白された事、石上くんと言ったら嫉妬しちゃいますかねー？  
なんだかんだ言って私の事大好きですからねー、石上くんは！

「あ、石上くっ……」

石上くんを見つけた私は、思わず立ち止まりました。

「ちょっと、困りますって！」

「えー？ そんなに嫌がらないでよー。」

石上くんの腕を抱き、猫なで声で甘える……姉様が居たから。

「姉様!! 何してるんですか!?!」

「あゝ、千花ちゃんだ。ちょっと石上くん到校舎を案内してもらおうと思って……」

「案内も何も、姉様は此処の卒業生なんだから案内なんて要らないでしょー!?!」

「そうなんですか!?!」

「あゝあ、バレちゃった。」

「石上くんもです! 鼻の下なんて伸ばしてないで離れて下さい!!」

「伸ばしてません!」

「あはは、修羅場だ。」

「姉様!」

「はあ……」

「(この人も相当癖のあるタイプだな……)」

……

「……萌葉ちゃん、あんなので良かったの?」

「うん! ありがとう、豊姉様!」

「(もし石上先輩が豊姉様に寝取られたら……姉様、どんな顔するのかなあ……)」

カッ、カッ

藤原家三女、藤原萌葉……若干サイコパス。

奉心祭が成功を収めた次の日の午後、生徒会には伊井野ミコを除いた4人が集まっていた。

〈生徒会室〉

「はい、かぐやちゃんオヤツだよー。」

「……っ！……っ！」ポグゼ

四宮先輩かぐやちゃんは、差し出した棒状のお菓子に齧り付くと黙々と咀嚼していく。はい、癒される……

「……ッ」フゥルッ

「……藤原先輩？ どうしたんですか？」

「石上くん……浮気者ー!!」

「は？」

「私の事はまだ藤原先輩呼びなのに、かぐやさんは名前呼びするなんて……バカ！  
アホ！ 石上くんの遊び人!!」*ゴシゴシ*

バシバシと藤原先輩に頭を叩かれる……何処に嫉妬してるんだ、この人は……

「うああーん!! 浮気されましたー!! 所詮私は2番目の女なんだー!!」

「……」*ダッダッ*

「かぐやさん……ぐすつ、そうですよね。かぐやさんにとっては私が1番ですもんね……」

「さんばん」*ム*

「」

「……」

（無慈悲過ぎる……）

「……」

（まあ前の時も3番だったし……）

「……あああー！ うああーん!!」

「ギャン泣き!? 石上、なんとかしろ!」

「だ、大丈夫です、藤原先輩は僕にとってはオンリーワンですから! オーシヨシヨシヨ……」

「動物みたいなあやし方すんな。」

……

「……どうだ、藤原の様子は?」

「大丈夫です、ちゃんと寝かしつけて来ました。」

「赤ん坊かアイツは。」

12月24日……今日はクリスマススイブである。街はイルミネーションで彩られ、街中ですれ違う人々は各々が大切な人と過ごす為……急ぎ足で恋人の下へと走り、或いは共に歩みを進めて行く……一部の例外を除いては。

〈藤原家〉

「……まず聞こうか、これはなんだ？」

「かどまつりーです。」

「……」

「……藤原先輩、何ですかそれ？」

「藤原先輩じゃありません。私はなまはげサンタです。」

「……」

「……萌葉が被ってるのは？」

「圭ちゃん、これはししまトナカイだよ！」

「……」

「何年か前に、豊姉様が色々改造しちゃったんだよねー。」ヌギ

「買い換えるのも勿体ないので、そのまま使ってるんですよえ。」ヌギ

「良かった、本当に良かった……！ 変な宗教感を持った特殊な家庭じゃなくて……」

石上の立場的には死活問題だった。

「皆、お待たせ。ご飯出来たよ？」

（ウチのクリパってホントに変わってる……っていかキモいんだよねえ。）↑諸

悪の根源

「わーい、食べよ食べよ。」

普段は友達の家で過ごす姉様まで、今日は家で過ごすらしい……それもこれも、萌葉があんな事を言わなければ……

……

「姉様ー、クリスマスイブの日にさ……石上先輩連れて来てよ。」

「えっ!？」

「ねー? いいでしょー?」

「い、いやあ、それはちょっと……」

「ふーん? なら仕方ないね……むふっ♪」

萌葉の妖しげな笑みを見て、嫌な予感が沸々と湧き上がって来ました……絶対仕方ないなんて思っていない!

「も、萌葉?」

「すうっ……」

萌葉は椅子から立ち上がると、大きく息を吸い込んで……



「父様ー！ 母様ー！ 大ニュース、大ニュース！ 姉様に彼氏が出来っ…んぐうつ  
!？」

「ちよ待あああ!? 萌葉！ シッ！ シッー！」

「ぷはっ、じゃあ……わかってるよね？」

「」

「あ、豊姉様も誘っておくから！ 楽しいクリスマスイブになりそうだね、姉様！」  
「」

………

「ねーねー石上くん、はいアーン。」

「そ、そんなのやらなくていいですから……」

「姉様！ 何してるんですか！ あと近付き過ぎです!!」

「あぁっ……恋人が奪られると思って焦る姉様見てると、なんかゾクゾクしちゃう  
よねえ……豊姉様が居てくれて良かったあ。」  
「ゾクゾク」

「萌葉、アンタね……」

「……」

（この子……本当に要注意人物ね。）

「あゝあ、フラれちゃったあ……」

「ふふーんだ！ 石上くんがそんな誘惑に引っかかる訳ないじゃないですか！ だって石上くんは、私にメロメロですもんねー？」

「ハハハ、ウケる。」

「ウケられた……（・ω・）」

……

「……あれ？ 石上くん、かぐやさんと会長は？」

「さっき2人で外に出て行きましたけど……」

「こんな寒い日に……呼んで来ましょうか？」

「その前に……藤原先輩、ちょっと良いですか？」

「へ？ 何ですか？」

藤原先輩は？ マークを浮かべて僕の言葉を待っている……会長と四宮先輩は外、藤原姉妹はボードゲームの準備中……渡すなら今しかない。

「……コレ、クリスマスプレゼントです。大したモノじゃないんですけど……」

「えっ!? い、良いんですか!?」

「良いですけど、ガッカリしないで下さいよ。」

「わー! 嬉しいです!! 初めて男の人からプレゼント貰いましたよ!」

藤原先輩は、包装紙を剥がすと中身を取り出して掌に乗せた。

「これは……ミサンガ、ですか? ピンク色で可愛いですね!」

「利き手に着けて下さい。」

「……っしょ、えへへー! どうですか、似合ってます?」

「ええ、似合ってますよ。」

「えへへ……えへへへー♪ 石上くん、これからもよろしくお願いしますね!」

顔のニヤケが治らないままの藤原先輩へ答える。

「はい、此方こそよろしく願います。」

ピンク色のミサンガの意味は……藤原先輩が気付くまで黙っておくか。

## 藤の千花after③

お久しぶりです（・ω・）

〈生徒会室〉

「じ、じゃあ……いきますよ!？」

「は、はい!!」

3学期に入って数日が経ったある日の放課後、僕と藤原先輩は……夕陽が射し込む生徒会室で向かい合っていた。お互いが気まずそうに顔を逸らし、少しずつ2人の距離が縮んで行く……

「……」シッ

「……」ピッ

「……ゴッ」シッ……

「ッ！お、おりゃー!!」ゴッ

「ぐはっ  
!？」

藤原先輩との距離が徐々に近付き、ゼロになろうとした瞬間……僕は顎に走った衝撃に仰け反り倒れ込むと、痛みと共に転げ回る羽目になった。

「……?」

「あ……ごめんなさい」

「もうやだこの人お！ 的確に顎を狙って来る！」

「わ、わざとじゃない!? 不可抗力……そ、そう! 不可抗力です!!」

「不可抗力です!!……じゃねーんですわ! 何処の世界に自分の彼氏にヘッドバツトブチかます女が居るんですか!? 一回ならまだしも、何回頭突きすれば気が済むんですか!」

「あ、あんなに鼻息荒く近付かれたら、誰だって怖いに決まってるじゃないですか！」

「鼻息なんて荒くしてねーんですわ！」

「でも生唾は飲んでましたよね!? あれもちよつと怖かったんですけど!?」

「それに関してはすいません!!」

僕と藤原先輩が付き合う様になって、1ヵ月という時間が過ぎた。1ヵ月という時間は厄介だ……何故なら1ヵ月という時間が経つと、殆どのカップルが初キスを済ませてしまっているからだ。僕自身は別に焦る必要は無いと思ってる（別にヘタれているとかじゃない）が、藤原先輩はそうは思っていなかったのだ……

「……」

「……」

更には藤原先輩相手だと、そういう雰囲気になりづらいという理由もある。僕自身も今までふざけ合って来た相手である、藤原先輩との恋人としての距離感……というモノを未だに計りかねていた。

「今日の所は帰りましょうか……」

「はい……」

結局……僕達は手を繋ぐ程度のスキンシップしか出来ないまま、1ヵ月の時間が経過していた。

〈藤原家〉

「えー!? 姉様ったら、まだ出来てないの!?」

「うぐっ……だ、だって仕方ないでしょ!? いざその時になると、緊張とか怖いのが先に来ちゃうんですもん!」

「姉様のヘタレー」

「ヘタツ!? そ、そもその話! 私は全然気にしてなかったのに、萌葉が変に焦る様な事を言うからでしょ!?」

「えー、私の所為なの?」

「だってそうでしょー!?」

……………

数日前……

「ねー姉様、ちょっと聞きたいんだけど……」

「んー、なんですかあ?」  
「ロロロ」

「姉様が石上先輩と付き合う事になって1ヵ月くらい経ったよね? って事は、も

うキスとかしたの？」

「キッ!? ど、どうですかねー? そういふのは人に言うモノじゃないですから……」

「あー……その反応でわかつちゃったから、もう言わなくてもいいや……」こぶ……

「ちょっと萌葉! なんですかその感じは!? 付き合って1ヵ月なら、まだキスしてないくらい普通ですから!」

「えー? でも1ヵ月経ってもキスをしなかったカップルは、1ヵ月でキスをしたカップルに比べて破局率が数倍高くなるって雑誌に書いてあったよ?」

「ええっ!?」さーぐ

……

「あんな事言われたら焦るに決まってるでしょ!」

「ごめんね、ヘタ姉様……」

「誰がヘタ姉様!?」さっぺーぐ

萌葉は少し前から……まるで新しいオモチャを手に入れたみたいに、私を揶揄う様になってしまいました。酷い時には姉様と協力して私をイジって来るその姿に、将来が心配になってしまう程です……このまま舐められっぱなしで良い訳がありません



せん！わかりました、やってやりますよ！！そう思い立った私は外出用の服に着替えると、財布とスマホだけを持って部屋を出て行きます。

「あれ？ 姉様、何処か行くの？」

「ちよつと気合入れて来ます！」ハッ

「……気合？」

次の日の放課後……僕は中庭で仰向けになり、茜色の空を見上げていた。暫くボーっとしていると、隣で同じ様に空を見上げている会長から声が掛かる。

「石上、それで相談というのは？ 藤原が怒ってたのとか何か関係あるのか？」

「はい、実はさっき……」

……

〈生徒会室〉

「石上くん！ 今日こそはやりますよ！」

「そ、そんなに気合を入れなくても良いんじゃないか？ 急いては事を仕損ずると言いますし……」

（また頭突きされるのもアレだし……）

「わ……私は石上くんの彼女なんです！ いつまでも怖いって理由で、好きな人とキスも出来ないなんて私は嫌です！」

「藤原先輩……」

「……」

「……わかりました。じゃあ……しますよ？」

（彼女にここまで言われてしないなんて男らしくないよな。此処は男らしく、僕の方から……）

「はい、どうぞ！」ヤッ

藤原先輩は力強く目を瞑り、スカートの端を両手で掴むと、直立不動で僕の動きを待つ。僕は藤原先輩の前まで歩み寄ると、スウと呼吸を整える。覚悟を決めろ、石上優。恋人らしく、男らしく……僕なら出来る筈だ。

「……」

(僕なら……)

「……」

「……………」

「……石上くん？」

「藤原先輩、ちょっと聞きたいんですけど……昨日の晩御飯は何を食べました？」

「気合のラーメンです!!」

「アンタ正気ですか!? どーりでなんかニンニク臭いなぁと思いましたよ! んなニンニク臭い口にキスなんて出来る訳ないでしょーが!」

「に、ニンニク臭いって、乙女に向かってなんて事を言うんですか!?!」  
「じゃー聞きますけどね!? 藤原先輩は僕がニンニク食った口でキスしようつつても受け入れられるって言うんですか!?!」

「出来る訳ないでしょー!? 石上くんはもうちょっとデリカシーってモノを学ばべきです! 乙女の唇を何だと思ってるんですか!?!」

「頭おかしいこの人」

……………

「……って事があつたんです」

「あー、だから藤原は怒ってたのか……」

（四宮と伊井野を連れて行った所為で、今日の生徒会は休みにする事になってしまったが……なるほどな、石上達には石上達の悩みがあるという事か）

「コレって僕が悪いんですか？ 会長はどう思います？」

「うーむ、それは流石に藤原に非がある気がするな。キスの時に相手の口からニンク臭がするのは、俺もちよつと勘弁してほしいと言うか……」

「そうっすよね!? 餃子やラーメン食う度に、そんな時の事を思い出す羽目になる僕の気持ちも考えるべきっすよね!？」

「そ、そうだな……」

（藤原さあ……）

〈ファミレス〉

「それで、何の説明も無いまま此処まで連れて来られた訳ですけど……藤原さん、石上君と何かあったんですか？」

「はい、実はさっき石上くんが……あ、先に注文しておきましょう！」  
 ぐ

「お待たせしました。ご注文を承ります」  
 ぐ

「私はティラミスとカフェモカをお願いします！」

「私は……ショートケーキとダージリンを」

「えと、じゃあ私は……」

……

「お待たせしました。ティラミスとカフェモカ、ショートケーキとダージリン……最後に、牛井大盛りの紅生姜限界乗せになります」  
 コア、コア、コアッ

「わあ、来ましたねー！ 美味しいデザートと楽しいお喋り……これこそが女子会の醍醐味ってやつですよね！」

「1人だけ部活帰りみたいな人居ますけど……」

「こ、これはっ……今日は家政婦さんが来ない日なので、此処で晩御飯を食べて行くだけで！ 別に毎日こんなに食べてる訳じゃっ……！」

嘘である。確かに家政婦さんは来ないが作り置きはあるし、何なら帰った後も晩御飯を食らうつもりの大食漢である。

「そ、そんな事より！ 藤原先輩、石上と何かあったんですか？」

「あ、そうなんです！ 2人共聞いて下さいよ！ 石上くんったら、酷いんですから！」

……………

「藤原さん……………」

「藤原先輩……………」

「え、何ですかこの感じ？ まるで私に非があるみたいな空気ですけど……………」

「みたいでは無く、貴女が悪いわよ」

「えっ!？」

「わ、私も四宮先輩の意見に賛成と言うか……………」

「ミコちゃんも!? 何でですか!？」  
「ちび——ん」

「そ、それは……………」

「……………ふふ♪」

かぐやは僅かに微笑みながら、伊井野へと詰め寄る藤原の姿を眺める。それは、中等部の頃から親交を続けて来た親友の……普段は見られない一面を見た事により生じた感情か、はたまた……

「……」アッギ

（それにしても……藤原さんも案外子供なのね。石上君と付き合い始めて1ヵ月も経つの、まだキスの1つも出来ていないなんて……私なんて、既に会長と17回もキスをしてるっていうのに♪）

しょうもないマウント精神による感情か。

「……」アッギ

（そもその話、会長とお付き合いが始まる前からキスを済ませていた私と比べる事自体が可哀想な事なのよね……ごめんなさい、藤原さん）

かぐやは此処ぞとばかりに調子に乗った。

「藤原先輩の気持ちもわかりますけど、最低限のエチケットは必要かと……し、四宮先輩もそう思いますよね？」

「ええ、伊井野さんの言う通り……!?」

（え？でも待って？もし私も、会長とキスする時に似た様な事を言われたら……）

……

「会長……」ㄴㄴ

「四宮……ぐっ!?」ㄴㄴ

「か、会長？なんで身を引いて……」

「四宮、お前……昨日何食べたか知らないが、滅茶苦茶ニンニク臭いぞ？流石にそんなニンニク臭がする口にキスは出来ない……スマン」

「」

……

「石上君はなんて酷い子なの!!」くわっ！

「えええっ!? 私そんな事言ってませんよ!?」

「嫁入り前の乙女にそんな事を言うなんて、あまりに酷い！鬼畜の所業よ！人格を疑うわ!!」

「そうですよね!? 石上くんが悪いですよね!？」

「ええ、勿論よ！石上君には、私からもよく言っておいてあげるわ!」



「かぐやさーんー」タギッ、アッ

「……ごめんなさい、藤原さん。ニンニク臭いからちょっと離れて頂戴」

「

「ええ……」

〈生徒会室〉

次の日の放課後……生徒会室にて、僕は藤原先輩が来るのを1人で待っていた。会長達は少し遅れてから来る手筈になっている。

まあ何はともあれ、藤原とはちゃんと仲直りしておけ。明日の生徒会には、少し遅れて行く事にする。四宮と伊井野にもそう伝えておくから、2人でちゃんと話し合うといい。

「……」

そう会長から言われたからじゃないし、そもそも別に仲違いをした訳でも無いけ

ど……藤原先輩とちゃんと話し合う必要があるのは、僕もわかっている。そうして  
いると、生徒会室のドアが遠慮がちに開かれ、そっと藤原先輩が顔を覗かせた。

「藤原先輩、どもっす」

「あ、はい。」

「その……昨日はすいませんでした。折角藤原先輩が勇気を出して、前日から気合  
まで入れてくれたのに……」

「い、いえ、私の方こそごめんなさい。萌葉に変に煽られて焦ってたからって、い  
きなりあんな……」

「……別に焦らなくても良いんじゃないですか？」

「え？」

「周りには周りの……僕達には僕達のペースってモノがあるんですから、他のカッ  
プルが僕達より進んでるからって焦らなくても良いと思いますよ？」

「で、でも、男の人ってそういうのが無いとダメって、雑誌に書いてましたし……  
1ヵ月経ってキスしてなかったら、破局率だって高くなるって……!」

「恋人のいる男全員がそうとは限りませんよ。それに……藤原先輩と一緒にだと、退

屈しませんからね」

「へ？」

「退屈しないって言うか……まあ、その……毎日が楽しいですから、そこに関して  
は……僕に不満は無いので、心配しなくてもいいです」

「う……うわぁーん！ 石上ぐーん！」

その言葉を聞いた藤原先輩は、両手を広げながら第一歩を踏み出した。すると……

「あっ!?」 ヲウッ

「ッ！」

藤原先輩が躓き体勢を崩す。目を見開いて口を開けた驚き顔が徐々に近付き、ス  
ロー再生の様にゆっくりと動く。受け止め様と僅かに腰を落とした事で、向かって  
来る藤原先輩と視線の高さが重なる……

「ッ！」

「ッ！」

その瞬間、藤原先輩と目が合った。多分、僕達は同じ事を考えていたと思う。こ  
の展開はラブコメでよくある……ヒロインが転んだ拍子に主人公とキスをしてしま

うヤツだ。その証拠に、戸惑った顔をした藤原先輩の表情が覚悟を決めた表情へと変化した。

自分達のペースでと言った手前、こんな事で初キスを済ませてしまつて良いのか？ という疑問も勿論ある。だけど、僕達の様に次のステップへ進むのに苦労しているカップルは、これくらいの偶然や勢いが無くてはダメなのかもしれない。そう考えている間にも、藤原先輩との距離は縮まって行く。そして、僕と藤原先輩の距離がゼロになり……

「ぐえっ!？」ゴウッ

「ごはっ!？」ゴウッ

頭と頭がぶつかる鈍い音がすると同時に、僕と藤原先輩は揃いも揃って床を転がり回る事となった。

「~~~~っー!？」ゴウッゴウッ

「痛つつう……! ちよつともう勘弁して下さいよ! 藤原先輩は何がしたいんですか!？」

「わ、私の所為じゃないでしょー!? 石上くんが上手い具合に受け止めてくれない

「のが悪いんじゃないですか！　っていうか、男子ならこれくらいちゃんと受け止めて下さい！」

「はー!? そういうの性差別って言うんですよ!? そもそもこの話、元を辿れば藤原先輩が！」

「それを言うなら石上くんだって！」

「―――」キヤキヤキヤキヤ

「……」カササ

「……」カササ

「……情事？」ちゅ…

完！

石上にとって、藤原√が1番退屈せずに破茶滅茶な日常を送り続ける√だと思っています。しかし、マジで難産でした……本当は2人の誕生日に投稿しようと思っていたら、ここまで遅くなってしまった（――；）

最初は冬休みに藤原家を訪問する石上の話を書くつもりだったんですが、5000文字書いた上でストーリーが起伏無く進んでしまった為、新しいネタで最初から

書き直す羽目に……

藤原√の③を投稿してしまったので、残りの√も③までは投稿します。いつになるかは未定ですが、気長にお待ちください（・ω・）



○○√after?

3期キター(√)。来年4月か、待ち遠しい……

年が明け数ヶ月……季節は桜舞い散る4月となり、秀知院に身を置く学生達は1つ上の学年へと進級する時期である。ある者は、進級した事をキツカケにより一層勉強や部活動に力を入れ……またある者は、今年こそは恋人を作るのだと決心する。そしてまたある者は……

〈生徒会室〉

「会長って……大っばいと小っばいだと、どっちが好きですか？」

「石上……いきなりどうした？」

2年に進級して数日後……生徒会室でミドジャンをパラパラと捲っていると、グラビアのページで手が止まった。今は女性陣も居ないし、折角だから男同士の内緒話に講じようと会長に話題を振る。まあ、会長がなんて答えるか予想はつくけど。

「いえ、ただのボーイズトークです。会長の事だから小っぱい派なんでしょうけど、一応聞いておこうかなと思ってまして。」

「え、待って。なんで俺を小っぱい派って決め付けんの？ 違うかもしれないじゃん？」

「違うんですか？」

「違っ…わねえけど！ え、何？ 俺そんな小っぱい派に見える？ そんな雰囲気醸し出してる？」

「まあ多少…マニアックな性癖を持ってそうなイメージはありますね。」

「」

……

〈3年A組〉

「……ぎ！」

（小っぱい派の何が悪い！ 控えめな胸が好きで何が悪い！ 大は小を兼ねるなんて言うが、胸の大きさにまでソレを持ち出して来る奴はどっち付かずの中途半端な人間に他ならない。それに比べれば、小さい胸が好きと言い切れる俺は少なくとも中

途半端な人間ではない！　そもそも俺は小さい胸だから四宮が好きなのではなく、四宮だから小さい胸が好きなのであって……」

白銀はめちやくちや憤慨していた。

「御行、深刻な顔してるけど何かあった？」

「体調でも悪いの？」

「帝、田沼……ちよっと内密の話があるんだが、構わないか？」

「ん？　ああ……」

「大丈夫だけど……」

〈階段踊り場〉

「あれ、翼先輩に帝先輩？　どうしたんですか？」

「なんか会長に話があるから来いって言われたんだけど……石上君も？」

「はい、なんか急に呼び出されて……」

「……同じ生徒会である石上も同席させるなんて、それだけ重要な内容って事か？」

）

「まさか、四宮本家の人間が何か仕掛けて!？」

「お前達……大っきいおっぱいと小さいおっぱい、どっちが好きだ？」ヤミ

「クソしようもねえ内容だったわ。」

「真面目な話だ！ちゃんと答えろ！」

「いや、どの角度から見てもこの話は真面目じゃねえよ。」

「会長はなんでそんな事が聞きたいの？」

「だって石上が……小っぱい好きはマニアックとか言うから！田沼も言ってやれ、石上は貧乳<sup>俺達</sup>好きを嘲笑ってるんだぞ！」

「ええ……」

（会長、根に持ってたのか……しかもサラッとマキ先輩を小っぱい認定してるし。）  
「ええ……まあ確かにマキちゃんと付き合ってる以上、僕は小っぱい派って事になるけど……」

「だよな!?別に貧乳好きはマニアックじゃないよな!?」ヤミ

「そ、そうだね……」

「帝、お前は!?」

「いきなりそんな事聞かれてもな……」

「まあ、帝先輩はね……」

「彼女居ないしね……」

「ぶん殴んぞ。」

……

「つまり！ 俺にとってのおっぱいの魅力っていうのは、張りや大きさじゃなくて柔らかさなんだよ！ お前らが貧乳好きなのと同じ様に、俺もおっぱいの柔らかさにだけは妥協出来ないって話！」

「……」  
「ㇿㇿ」

（うわっ……）

「うわっ……」  
「ㇿㇿ」

「うわって顔すんな、お前が言わせたんだ！ 石上に至っては口に出してんじゃねえ!!」

「帝君って熟女好きだったんだね……」

「まあ、会長は会長でアレな部分がありますから、類友と言いますか……」

「だから！ 別にマニアックじゃねえって!!」

「……」

（よく考えたら、俺以外彼女持ちじゃん。彼女持ちに囲まれてオッパイ談義とか拷問かよ……）

「会長、僕はわかるよ。胸が小さいと感度良いつて言うしね……マキちゃんもそうだったし。」

「いや、姉のベッド事情聞きたくねえ……」

「サラッとしてもない情報をねじ込んで来ないで下さい。」

（神っちゃったかー……）

「ほう……」

（……そうか、胸が小さいと感度良いのか……だったら四宮も……!?）

# 〈数日後の四宮邸〉

「……という女性の胸についての話題で男子4人、大盛り上がりだったらしいで

すよ？ 御行くんもかぐやと付き合い始めて4ヶ月だし、そろそろみたいな話を赤裸々に……」

「うううっ……」ぎぎぎ

「あー、そういう……」

「へえ、そうなんだ……ねえ早坂さん、ちなみになんだけど……」

「……ウチの優君はどんな話をしてたのかな？」

「巨乳とは母性と包容力の象徴であり、バブみを感じてオギヤりたいなどと……」

「ふうん、殺そ♡」

「優も中々キモい事言うわね……」

「帝様は垂れ乳が好きだそうですよ。」

「いや、弟の性癖聞きたくねえ……」

「ちなみに、会長は貧乳好き。」

「あらあら……」

「これはこれは……」

「ううっ……」  
ぎゅぎゅ

「ち、ちなみに、翼君は何か言ってなかった？」

「……此処で口にするのは、憚られます。」

「え……どういう事？」

「……」

「あっ……（察し）」



「眞妃様には後ほど、文章にしてお伝えしますので……」

「そ、そうねっ……そうして頂戴！」

「？」

「……」

「そ、それでっ……眞妃さんと柏木さんに聞きたい事があつて……2人は、お付き合いが始まってから結構長いですよね？」

「そうね、私はそろそろ1年になるわ。渚も優と付き合い始めて……半年くらい？」

「うーん……そうとも言えるし、違うとも言えちゃうなあ……私と優君は、ちょっと特殊な始まり方だったから……」

「特殊……？」

「……うん。」

To be continued?  
 ↓  
 No!

カチヤツ……

To be continued?  
 ↓  
 No!

「……」スツ

ザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクザク

√が開通しました。

.....  
To be continued.  
「.....」ニゴ..  
カチヤ、ハ、タツ.....

√ X  
 ・ 柏鬼ビヤツキの角折り

---

√によつてはこの4人が揃つてボーイズトークする事もあるだろうなと思ひ、  
 じゃあ誰の√ならこうなるかな……つて考えたら柏木√しか思ひ浮かびませんでし

た。なんやかんやあったけど、石上は柏鬼を浄化する事に成功した√みたいなの……  
まあ1話限りのオマケ話とでも思ってくれれば……

※反響により、√X・柏鬼の角折り、11月投稿予定



## √ X. 柏鬼の角折り編

石上優は逃げられない

章タイトルの読み方は、159話に追加文と共に記載しています。

多分10〜15話予定、なんとか今年中には完結させたい……

少なくとも、週に1話は投稿します……したい……出来たらいいな……

石上がどうなっても一切の責任は負いません。

夏休みが終わり、秀知院は2学期に入った。2学期の1つの目玉である生徒会長選挙に向けて準備に勤しむある日の午後……

へシャリ……シャリ……

僕は特別棟に居を構える調理室に居た。洗い物をする為に備えられた洗面台、それぞれの台に付属する3つのコンロに業務用の冷蔵庫……普段は利用する機会す

らない調理室が、今の僕には処刑台にも匹敵する場所になっている……ような気がする。

へシャリ……シャリ……

椅子に座り窓の外を眺め、いい天気だな……と現実逃避に意識を向けていると、耳障りな音に意識を戻される。

へシャリ……シャリ……

……当然僕が現実逃避しているのには、理由がある。

「……ゴクッ」

緊張のあまり、ゴクッと喉が鳴り冷や汗が背中を伝って行くのを感じた。だけど、それも仕方ないと思う。何故なら……

「……うん、もうちょっとかな？」

へシャリ……シャリ……

この教室には、砥石で包丁を研ぎ続ける柏木先輩と僕の2人しか居ないのだから……

（何がもうちょっとなんですかって聞きたい様な、聞きたくない様な……）



「て、手慣れますね……」

「うん、料理は得意だから……魚料理とかも、魚を捌く所からやってるんだよ？」

「そ、そうなんですか、凄いですね……」

（なんで魚料理を例に出したんですか？ 僕これから捌かれちゃうんですか？）

「ふふ、三枚おろしが一番得意だね……？」

「す、凄いなあ……で、でも、態々手作りなんてしなくても……」

（それってお前も魚同様三枚に下ろしてやるよっていう隠語ですか？ 僕これから、捌かれて三枚に下ろされちゃうんですか？）

「ふふふ……」

（あ、逃げよ……）

「あ、あー！ そういえば僕、生徒会の用事があったんです！」

「今はもう生徒会は解散してるよね？」

「そ、その……来る生徒会長選挙についての大事な話し合いがありました！」

「ふーん？ じゃあ、私もついて行って良い？」

（うそやん……）

「いえいえっ……柏木先輩の貴重な時間を浪費させる訳には……」

「……」

（あ、ダメだこれ……）

「いえ……何でもありません。やっぱり此処にいます……」

「良いの？ 選挙の用事があるんだよね？」

「よく考えたら藤原先輩相手だったので、別に良いです……」

「……藤原さん相手だったら良いの？ でも良かった……私と石上君は恋人なんだから、手料理くらいは振る舞わせてね？」

「……はい。」

キラリと包丁が光を反射して、柏木先輩の顔が怪しく光る……これ以上の拒否は出来ない。

「……ふふ。」

恋人なんだから……そう、現在の僕と柏木先輩の関係を表すなら恋人同士という事になる。少なくとも表向きは……

キッカケは、2学期に入って1週間が過ぎた頃……

「石上君、言ったよね？もし眞妃が私から離れたりしたら、責任取ってくれるって。」

そう言いながら、目を見開き近付いて来る柏木先輩を必死に宥めた日から数日後の事だった……

### 〈中庭〉

その日の昼休み、僕は中庭を歩いていた。すると……

「それでね？この間のデートで……」

ベンチに座ってこれでもかと惚気るマキ先輩と……

「ふふ、眞妃ったら……」

マキ先輩にこれでもかと惚気られる柏木先輩が居た。

「……」  
「ㄹㄹ」

僕は2人に気付かれるよりも疾く、物陰に身を隠した。何故かはわからない……

けど、見つかりたくないと思ってしまった僕は、息を殺して2人の会話に耳を傾ける。

「……それでね、それでね！」サジ

「へえ、そうなんだ……」ズ

マキ先輩が柏木先輩から目を逸らした瞬間、柏木先輩の瞳からスッと光が消えた……

「」

（見てはいけないモノを見てしまった……）

まるで……覗いてはいけない深淵を覗いてしまった様な気分を味わいながら、僕は2人の様子を観察し続ける。

「……」

（い、いやっ……でも前回では立場が逆だったんだから、実質プラマイ0になってセーフに……）

「……」ズ

「」

(……なりませんよねー。)

そんな都合の良い考えは、柏木先輩の表情を見た瞬間に霧散した。光を失った瞳で虚空を見つめる柏木先輩には、そんな希望を持つ事すら烏滸がましい気がしてしまう。

「」

(やば過ぎる、前回のマキ先輩と比べても比較出来ないレベルでっ……)

だが、僕は気付くべきだった。此方が深淵を覗く時、深淵もまた此方を覗いているという事を……

「……それでね？」

「うんうん、それで？」

マキ先輩は惚気るのに夢中で、柏木先輩の様子には気付いていないみたいだ……いや、違う。柏木先輩が気付かれない様に立ち回っているというべきか……その証拠に柏木先輩の瞳から光が消えるのは、決まってマキ先輩が柏木先輩から目を離れた時だけだ。

「……」シィ

マキ先輩がそっぽを向いた瞬間、柏木先輩は始めから気付いていたとでも言う様に一直線に僕の方を見た。光の失われた瞳の柏木先輩と目が合い、胸の辺りがキュッと締め付けられ息が止まった。

「

……死ぬ程怖い、今まで見たどんなホラー映画よりも怖い。僕は後退りながら、その場を離れた……

……

「石上君、昼休みに隠れて見てたよね？」

「

そして放課後に捕まった。

「すっ……すいませんでしたあ!! 決して! 決して盗み見するつもりは無くてもすねっ……」

「……真妃、最近凄く楽しそうなんだよね。」

慌てる僕の言葉を聞き流し、柏木先輩は俯いたままポツリと言葉を洩らす。

「……や、やっぱり嫌ですか？」

「まあ思う所はあるけど、眞妃は幸せそうにしてるし……今更私がとやかく言っても、しょうがないでしょ？」

「え、ええ……と……」

否定すればいいのか肯定すればいいのかわからないまま、曖昧な態度で柏木先輩の言葉を待つ。

「眞妃がね……すっごく幸せそうに惚気話をして来るんだけど……恋人が居る事ってそんなにイイモノなのかな？」

「それは……そうなんじゃないですか？」

「でも、私にはわからない。だって私には……恋人が居ないから。」

柏木先輩は、ゆっくりと顔を上げて僕を視界に収めると……

「だからさ、石上君……私と付き合ってよ。」

そんな事を口走った。

「……え？」

「……聞こえなかった？ 私と付き合ってたって言ってるの。」

「な、なんでそんな……」

「だって、私は知らないしわからないから……恋人が居る良さとか、あんなに楽しそうに話をする気持ちとか……そういうのを知る為には、実際に恋人を作るのが手っ取り早いでしょ？ だから……ね？」

「え、えーと……そういうのは良くないんじゃないかなあって、僕は思うんですけど……」

「……」

「か、柏木先輩？」

「……」

「あ、あの……？」

「……」

「」

目を見開き、黙って此方を凝視する柏木先輩に……

「此方こそよろしく願います!!」

僕の心はポツキリと折れた。

……



「……じゃあ、明日からよろしくね？」

「はい……」

いや、断るとか無理……そんな事が許される雰囲気じゃなかった。僕の返事を聞くと、背を向け歩いて行く柏木先輩を見送る……何の因果か、明日から柏木先輩と僕は恋人同士という事になってしまった。

「なんでこんな事に……」

思わず天を仰いでそう呟くも、答えは降りては来ない……

「とりあえず……」

……帰ったら遺書を書く所から始めてみよう。

## 石上優は拒否出来ない

感想、評価ありがとうございます。(。▽。)

柏木√滅茶苦茶好評でビックリしてますわ……

……そもそもの話、何をすれば柏木先輩は満足するんだろう？

「うーん……」

今日から僕と柏木先輩は恋人同士という事らしいけど、彼女が居た事がない僕には柏木先輩が何をすれば満足するのか？という条件がわからない……柏木先輩は、恋人が居る良さを知りたいと言っていた。だけど、本来恋人になる条件はお互いが相手に好意を持っている事が最低条件だ。そう考えると、そもそもの前提条件が破綻している気がする……とかしかしてる。

「まあ、元々の関係も薄かったしなあ……」

そして、前回の僕と柏木先輩の関係性を一言で表すなら……友達の友達、会えば

挨拶をする先輩と後輩……といった程度の薄いモノだった。文化祭の日、何故か柏木先輩の方から友達になって欲しいと言われてOKした事もあったけど……今思えば、大して知りもしない男子が自分の知らない所でマキ先輩と仲良くしてるのが気に食わなかったんだろうか？

「そういう意味じゃ、前と比べると今の方が濃い関係ではあるのか。前の柏木先輩は……」

暫し薄れ気味の記憶を探ってみるが……

「……」

ダメだ……マキ先輩の脳を破壊し続けてたって事と、翼先輩と仲たったって事しか思い出せない。

「あ……そういえば、ボランティア部に入ってたっけ？」

まあそれも翼先輩と一緒に立ち上げたモノらしいから、今回は当然秀知院学園にボランティア部なる物は存在しない。

「はあ、一体どうなるんだろう……」

願わくば、平和な学園生活が続く事を願うばかりだ。

## 〈生徒会室〉

平和な学園生活への願い……それは1日と持たずに瓦解する事になる。

「そういえば石上、ボランティア部に入るんだってな？ 石上がボランティアに興味があるなんて知らなかったよ。」

「……………え？」

会長のその言葉にゾワリと背筋が震えた……何か、僕の知らない所で何かが動いている……

「な、なんの話……ですか？」

「ん、違うのか？ 昼休みに柏木から申請を受けてな……石上も了承済みだと言うから、確認後に承認すると言ってあったんだが……」

「僕それ知らない……」

「え？ なんだった？」

「あの、僕はそんな話聞いてなっ……」

（……待てよ？ もし断ったりしたら……）

……

「石上君……自分に出来る事なら責任取ってなんでもしてくれるって言ったのに、口先だけだったんだね……」

「い、いや、別にそういうつもりはっ……」

「私みたいな女には、その場凌ぎで適当な事言っておけば大丈夫だろう……とか、そんな事を考えてたんでしょう？」

「ち、違います、そんな事思ってます！ 誤解なんです!!」

「嘘しか吐けない口なら……いないよね？」

柏木先輩は、チヨキチヨキと鋏を動かしながら僕に近付くと……

「……動かないでね？」  
ズ

「か、柏木先輩!？」

「大丈夫、ちゃんと後で縫ってあげるから……」

「待っ……!？」

デヨギン！……！

……

「カダカダ」

（いやいや、考え過ぎだって……柏木先輩はそんな人じゃないって……）

「……石上、大丈夫か？ 柏木から何も聞いて無いのなら断っておくが……」

「ま、待って下さい！」

（考える、何か……！）

困惑顔で僕からの返答を待つ会長を見て閃く。

「そ、そうだ……もう9月半ばですよ!! それは問題無いんですか!?!」

「ん、そうだな……まだ俺達生徒会が活動しているし、ギリギリだがこれくらいなら俺の裁量でどうとでも出来る。まあ流石に生徒会解散後に申請をされていたら、断らざるを得なかったがな。」

「そ、そうですか……」

（打つ手無し……）

「どうした石上、やっぱり何か問題でもあるのか？」

「いえ、設部の方向でお願いします……」

なんだろう……知らない内に外堀を埋められるこの感じ、すっごい怖い……

「……今日はここまでにしておくか。」

「それじゃ、また明日ー！」<sup>ン、ン、ン</sup>

「僕も……お先に失礼します。」

「ああ、お疲れ。」

「お疲れ様。」

会長と四宮先輩を残し、一足先に生徒会室を出る。藤原先輩は何か急ぎの用事であるのか、走って廊下を移動している。

「はあ……」

徐々に小さくなって行く藤原先輩の背中を見ながら溜息を吐く。柏木先輩の策略で、知らない内にボランティア部に入る事が決まってしまった……別に部活動に入

るのが嫌な訳じゃないし、ボランティアという内容に文句がある訳でもない。前回のボランティア部も、がつつりボランティア活動に精を出していた訳でもなかっただろうし、問題があるとするなら……

「石上君、お疲れ様。」

「っ!？」とどカ

校舎の陰から飛んで来た言葉に、ビクッと体が強張り足が止まる。

「び、びっくりさせないで下さいよ……」

（全然気配を感じなかった……）

「ふふ、ごめんね。それより聞いた？ ボランティア部の事。」

「は、はい……」

「実は私、ボランティアにちょっと興味があってね？ 石上君と付き合う事になったし、折角だから部員にもなってもらおうと思ったの。」

「で、でも、先に言うくらい……」

「ごめんね、事後承諾になっちゃって。思い付いて直ぐに実行しちゃったから……でも、付き合ってるんだから、学園内にプライベート空間があった方が良いでしょう」



？」

「そ、そうですね……」

（プライベート空間……密室……拘束……監禁……逃げ場無し……）

「これからは、2人つきりになる機会が増えるね？」

「ハハハ……そ、そうですね……」

（ヤダ怖い……）

「恋人が居る良さ、ちゃんと教えてね？」

「ガンバリマス……」

〈翌日〉

「つ、付き合ってる!? 優と渚が!？」

「ええ、まあ……」

（表向きは……）

……フリとはいえ一緒に居る機会が増えるのだから、柏木先輩と親しい一部の先輩方には報告するべき……という事になり、まずはマキ先輩に報告する事にした。マキ先輩は目を見開いて驚くが、直ぐに気を取り直して訊ねて来る。

「はわあ、優と渚がねえ………で！どっちから告白したの!？」

「……僕からです。」

昨日の帰り道に、ある程度の設定は柏木先輩と話し合って決めている。少なくとも、僕からボロを出す訳にはいかない……！

「もうっー！優ったら、なんだかんだ言って意識してたんじゃないの！素直じゃないだからー！」

「ハハハ……」

「……」

マキ先輩は、このこのーと言いながら僕の脇を肘で突いて来る……そして、その状況を柏木先輩が眼を見開いてガン見して来る……

「ヤメテクダサイ、シンデシマイマス……」

「幸せ過ぎて死んじゃうって事？もー！アツアツじゃないのよ！」  
「んんん」

シ

「もう、眞妃ったら……」

「ハハハ……」

「1学期の頃なんか、私が渚との仲を取り持ってあげようかって言っても、勘弁してくれとか言ってたのに……人は変わるモノね。」

「」

（考え得る限り最悪のタイミングでバラされた。）

「へえ……石上君、そんな事言ってたの？」

「確か他にも……」

「あ、あー！ マキ先輩、翼先輩が来てますよ！ これから何処か行くんじゃないですか!？」

「あ、もうそんな時間？ じゃあ、そろそろ行くわね。2人共、近い内にお祝いでもしましょ。」

「うん。またね、眞妃。」

「ハハハ……お構いなく。」

（危なかった……）

走り去って行くマキ先輩を見送りながら、僕はマキ先輩の話を誤魔化した事に安堵し……

「勘弁してくれ……ね。そこまで嫌がられてとは思わなかったなあ……」

「」

（あ、現在進行形でヤバイ状況じゃん。）

本日の勝敗、石上の敗北

この後、柏木を鎮める事にかなりの苦勞を要した為。

## 四糸帝は知りたくない

感想、評価ありがとうございます。(。▽。)

## 〈都内某所〉

9月も中盤に差し掛かったある日の休日……僕はとある豪邸の前に佇んでいた。土地代や物価の高い東京で、これだけ大きな豪邸を建て所有している人はそう居ないだろう……僕は確認の意味を込めて、表札に視線を向けた。

## 《四糸》

四糸と表記されている表札を見て、マキ先輩の姿が浮かび上がる。

(そういえば、マキ先輩って凄い人なんだよな……今はもう翼先輩に完落ちしたチヨロインみたいになってるから忘れ気味だけど……)

「石上君、そろそろ入ろっか。」

豪邸を見上げていると、隣からの声に視線を移す。

「あ、すいません、つい……」

「眞妃の家、大っきいでしょ？」

「はい、凄いですね……」

今日は、マキ先輩の家へ招待されている。それというのも先日、柏木先輩と付き合っている事を伝えた所……マキ先輩に、ささやかなお祝いをしようと云われ今日その日を迎えた訳である。

「お、お邪魔します。」

「良く来たわね！」

「2人共待ってたよ。」

巨大な門を通り玄関を抜けると、豪華絢爛な雰囲気と3人の人間から出迎いを受ける。マキ先輩、翼先輩、そして……

「へえ……姉貴が翼君以外の男をウチに招待するなんて珍しいな。」

俺の名前は四条帝。公立校に籍を置く、四条真妃の双子の弟だ。口が悪く機嫌が悪い時や用がある時は、後ろから蹴りを入れて来るなどの行いを日常的にして来る姉貴だが、数ヶ月前……その暴虐無人な姉貴に彼氏が出来た。去年の秋頃から色々とおプローチを続けていたらしく、5月のGWを過ぎたある日……告白し、OKを貰えたらしい。相手は昔から知ってる翼君だった……翼君だったら大丈夫かと安心した反面、一足早く大人へ近付いた姉に一抹の寂しさを感じたりもした。

「ええと、1年の石上優です……はじめまして。」

石上優……この名前は、姉貴や翼君との会話でよく出て来る名前だ。かつては姉貴の恋路をサポートし、現在でも翼君の相談に乗っているらしい……

「ああ、俺は四条帝。姉貴の双子の弟な、よろしく。」

お互い名乗り合うと、石上はジッと俺の顔を見つめて来る。

「ん？俺の顔になんか付いてる？」

「あ、いえ……」

（マキ先輩の弟か……じゃあこの人も、人知れず叶わぬ片思いに耐え続けてたりするんだらうか？ 良い人そうなのに、可哀想……）

石上は四条帝に対してかつての四条眞妃の姿を重ね合わせるといふ、失礼極まりない事を考えていた。

「なあ、姉貴……なんでこの石上クンは、すげえ哀れんだ目で俺を見て来んの？」  
「気にしないでいいわ。私も優と出会ってすぐの頃は、よくこんな目を向けられたものよ……懐かしいわね。」*ぐぐぐ*……

「それは懐かしむ様なモンじゃねえだろ。」

「……帝君、久しぶりだね？」

「うおっ!? な、渚ちゃん……」

先程まで気配を消していた……かつての幼馴染、柏木渚に声を掛けられ思わず吃る。渚ちゃんとは中等部まではそれなりに会って話す事もあったけど……俺が公立校に行ってから、姉貴に誘われてウチに遊びに来た時くらいしか会わなくなっていたし、最近は全然会っていない。

「私は結構来てるのに、帝君とは最近会わないよね？ 部活動が忙しい所為かな？」

「う、うん、そうそう……部活が忙しくてさ！」

（渚ちゃん……去年くらいからちょっと様子がおかしいんだよね。姉貴が翼君と



付き合い出した辺りから更に圧が凄くなつててすっげえ怖いし、この前だつて……」

……

某日、四条邸……

（うーん、渚ちゃん……姉貴と2人の時は普通なんだよな。翼君が居る時だけ普段と雰囲気が違う様な気がっ……!?)

「……え、ウソ、マジで？」

……ある考えが浮かんだ俺は、渚ちゃんが1人の時を見計らつて訊ねた。もし俺が考えてる通りなら、然りげ無く姉貴に伝えて翼君と渚ちゃんがブッキングしない様にすれば良いだけだしな……

「渚ちゃん、ちょっと良い？」

「うん、良いけど……どうしたの？」

「嫌だつたら全然答えなくても良いんだけどさ、渚ちゃんて……翼君の事好きだつたりする？」

「……は？」

「あ、すいません。なんでもないです、失礼しました。」

……

「……」

（あの時に身に染みてわかった。なんか知らんがヤバイ事になると……）

「アレ？ 帝君、この前会った時暇だって……ングッ!?」

「翼君、シー！ シー！……そ、それよりも！ 今日は何の集まりなの？」

「今日はね、ちょっとした祝い事で集まったの。」

「祝い事？ なんの？」

「帝……アンタ、驚くわよ？ 渚と優はね……なんと付き合ってるのよ！」

「マジで!?!」

（渚ちゃんと付き合うとか、メンタル化け物か？）

挨拶を手早く済ませると、マキ先輩主導でリビングへと案内される。リビングに移動すると、丸テーブルの机上に様々な菓子類が並べられている。

「普段から会ってるのに、こういう場面だと新鮮に感じますね。」

「そう？ ま、普段と変わらない顔ぶれだけどね……1人を除いては。」

「まあ、帝君はね……」

「学校違うからね。」

「迫害!？」*チャビュン*」

「えーと、四条先輩は……」

「帝で良いつて、姉貴の事も下の名前で呼んでるしな。」

「うす……帝先輩。」

（中等部までとはいえ、柏木先輩とは幼馴染らしい。幼馴染、幼馴染か……）

「よろしくな、石上くん。」

（高校が別れた事で、渚ちゃんとは会う機会もめっきり減った……久々に再会したら、渚ちゃんには年下の彼氏が出来ていた……）

一見……気になる女子に、自分が知らない男の知り合いが居た事に嫉妬をしてい  
る……様に見える2人の脳内だが……

「……」

（コレ……上手い具合に誘導したら、帝先輩が柏木先輩と付き合う様に出来るんじゃないっ……!? 恋人が居る良さを教えるなら、別に僕じゃなくても良い訳だし……何より幼馴染だし！）

ラノベを愛読している石上からすれば、幼馴染同士はお互いに惹かれ合って当然という認識！そして陰キャな自分よりも、柏木渚が執心している四条真妃とDN Aレベルで同じ存在である四条帝ならワンチャンあるのでは？と石上は期待する！

「……」

（最近の渚ちゃんは、より一層威圧感が増してたから怖くて仕方なかったけど……彼氏がいるなら、何かあってもまずは全部そっちに行くからもう怖がらなくてもいいんじゃない？……なら、石上くんには頑張って渚ちゃんを繋ぎ止めてもらわないと……）

対する帝も、最近の柏木渚の様子がおかしい事は既に承知済み。特にここ最近、向かい合うだけで原因不明の動悸に襲われる始末！そんなヤベー幼馴染から気を逸らしてくれる存在として、石上の登場は有り難かった。要は……水面下で爆

弾の押し付け合いが行われ様としていた！

……

「渚ちゃん落とすなんて、やるじゃん石上クン。やー、羨ましいわー。」

（そのまま繋ぎ止めててくれ。そして、あわよくばずっと渚ちゃんの捌け口になっててくれ……いや、割とマジで。）

「いやー僕にはもったいないくらいですよー。」

（帝先輩がアタックしてくれるなら直ぐに身を引くんで。だから帝先輩、柏木先輩にアタックしてくれても良いんですよ？っていうかして下さい、幼馴染でしょ！）

「……」

「……」

「「アハハハハ。」」

「帝君……石上君と仲良く出来そうで良かったね、マキちゃん。」

「うん……まあ心配はしてなかったけどね。相性は悪くないとは思ってたし。」

「……」

「あ、僕ちょっとトイレに……」

「奥曲がって右よ。」

「はい、お借りしますね。」カチャッ

……

「はぁ……」

（上手い具合に誘導しようと思ったけど無理だコレ……学校違う時点で接点の差があり過ぎるし、上手く躲されてる気が……）

「石上君。」

「っ!? か、柏木先輩、どうしたんですか？」

「今から言うのは独り言なんだけど……」

「……ゴクッ」

「……逃げないでね？」

「」

.....

「

（見てはいけないモノを見てしまった……あんな恋人同士の会話じゃねえよ。捕食者と被食者のソレじゃねえか……なんか事情がありそうな雰囲気だけど、俺には関係ないし……とりあえず、見つかる前に逃げっ……）

「……帝君。」

「うおっ!? な、渚ちゃん……どうしたの?」

（はっ!? さっきまで彼処に居たのに、いつの間に!?）

「何も見てないよね?」

「ミテマセーン……」

（……余計な事すんのやめよ。）

本日の勝敗、帝の敗北

知りたくもない事実を知ってしまった為。

―ある少女の独白―

ああ、寒い……夏の暑さはまだ続いているのに、偶に一瞬だけゾツとする様な寒さを感じる時がある。

原因はわかってる、親友の隣に居られる時間が減ったから……

でも、その親友は……私が隣に居なくても、幸せそうに笑っている。

……どうして？ 私じゃ駄目なの？ その問いを投げ掛ける事さえ出来ずに、今



日も私は仮面を被る。

この寒さを消し去る方法を……

今の私は、まだ知らない……

## 柏木渚は教えたい

感想ありがとうございます（・ω・）

様々なイベントが催される2学期だが、9月は特筆すべきイベントは存在しない。月末に現生徒会の任期が終わるのを除けば、あとは9月中旬に行われる実力テストくらいだろうけど、それだってイベントと呼べる程歓迎されている訳でもない。実力テストか……前は四宮先輩に助けってもらって、留年を回避したんだよね……と懐かしい記憶が甦る。

「ま、今回は留年の心配をするは必要ないし、楽な気分で居られるな。」  
と、思ってたのに……

〈ボランティア部〉

「そういえば、もうすぐ実力テストがあるけど……石上君はちゃんと勉強してる？」

「

ボランティア部を訪れると、既に入室していた柏木先輩からそんな事を聞かれた。「まあ、それなりに……ただ生徒会の仕事もあるので、そこまでちゃんと勉強してる訳じゃないですけど。」

「ふうん……それなら一緒に勉強しよっか？ 解らない所があったら教えてあげられるし。」

「い、いえいえ！ そこまで柏木先輩に面倒は掛けられませんよ！」

勉強を教えてもらえるのは有り難いけど、そこまで柏木先輩にお世話になるのは心苦しい……決して2人っきりで勉強するのは怖いから嫌だとか、そういうんじゃない。

「……」

「ハハハハ……」

「……」

「……あの？」

「……」

「」

「……」

「お世話になります!!」

（これはもう……脅迫なのでは？）

……

### 〈図書室〉

柏木先輩に脅さっ……勉強を教えてあげると言われた次の日の放課後、僕と柏木先輩は図書室を訪れていた。前回は成績の悪かった僕に四宮先輩が勉強を教えてくれたけど、今回は柏木先輩がその立場に居る……まあ前みたいに留年の危機とかそういう問題が無い分、そこまで気負う理由は無いから楽ではある……怖いけど。

「石上君は、1学期の期末テストは学年何位だったの？」

「ええと、確か40位くらいだったと思います。」

「へえ……じゃあ、平均点は80点くらい？」

「ああ、大体それくらいでしたね。」

「ふうん、じゃあ今回は……平均90点を目指してみない？」

「え？」

「だって、折角教えるんだもん……前より良い成績取って欲しいじゃない？ それに、目標は高い方が良いでしょう？」

「……」

「ね？」

「……ハイ。」

たった今、気負う理由が出来てしまった……コレ、もし平均90点以上取れなかったら……

……

「平均89点……目標に届かなかったね？」

「で、でも殆ど変わらなっ……」

「ふふ、私があれば勉強を教えてあげたのにね……」

「せ、先輩？」

「石上君……覚悟は良い？」

「」

……

「石上君、頑張ろうね？」

「ハイ……」

（死ぬ気で頑張ろ。）

### 〈図書室〉

テストで平均90点という目標を立てられた僕は、今日も隣に柏木先輩を携え図書室でテスト勉強に勤しんでいる……とは言っても、柏木先輩に僕が一方的に勉強を教えてもらってるだけなんだけど……

「この問題は引っ掛かりやすいんだけど……」

問題集に視線を落としながら言葉が続ける柏木先輩を盗み見つつ、問題の説明に耳を傾ける。

「……」

（普通に教えてくれてる……）

……どんな恐怖政治的教え方をされるんだろう、という予想に反して丁寧にわかりやすい説明を柏木先輩はしてくれている。問題集に視線を落としながら注意点を述べる柏木先輩からは、普段の威圧感は全くと言っていい程感じなかった。僕がビビり過ぎていただけなのかもな、と柏木先輩への認識について考えを改めていると……

「あら、渚さんと石上会計……2人仲良くテスト勉強ですか？」

「渚ちゃんが私達以外とテスト勉強するなんて珍しいねー？」

ナマ先輩とガチ勢先輩がやって来た。既にこの2人にも柏木先輩との事は報告済みなんだけど、柏木先輩は自分が満足した後の事とか考えてないのだろうか……知り合い同士が別れるって普通に気まずいと思うんだけど……

「うん……石上君がどうしても教えて欲しいって言うから。」

「えっ!？」

「……そうだよね？」

「ハイ、ソノトオリデス……」

「あらあら、石上会計は意外と甘えん坊なんですかね？」

「いや、別にそういう訳じゃ……」

「照れなくてもよろしいですわよ?」

あらあら、うふふ……とでも言いたげな顔をするナマ先輩にイジられる。

「まさか、マキに続いて渚ちゃんにも彼氏が出来るなんてね……マキなんてさっきも中庭で彼氏君とイチヤコラしてたし……アレが所謂メスの顔って奴なのね!」

「へえ、そうなんだ……」

「」

（ガチ勢先輩、どんだけ濃度の高いガソリン追加してんですかああ!?）

「眞妃さんのあんな姿、普段は見られませんからとても貴重でしたわ。」

（……ハッ！ かぐや様は普段は会長にしか見せない表情をうっかり他者に見せてしまい、会長はその事実を知り嫉妬のあまり……!）

「そっか……」

「……」

（お願いですから、これ以上刺激しないで……）

頼むからこれ以上柏木先輩の精神を掻き乱さないでくれと祈っていると……



「……渚ちゃんてさ、昔からマキに頼っててベツタリなところあったじゃない？ だから最近ちょっと様子がおかしかったのは、マキに彼氏が出来たのがショックだったのかなーって思ってたんだけど、私の勘違いだったみたいね！」

……というのを射過ぎている発言をガチ勢先輩は若干のドヤ顔で言い放った。

「ふふ……エリカったら、そんな事思ってたの？」

「ハハハ……」

（ドンピシャ。）

「ふふふ、あんまり2人の邪魔をしてはいけませんわね。エリカ、行きますわよ。」  
（引き立て役である第三者を作る事でストーリーに深みが出る……コレですわ！  
忘れない内にノートに書き綴りませんと！）

「じゃあまたね、渚ちゃん、会計君。」

「うん、またね。」

「うす……」

「……」

「……」

2人が出て行くのを見送ると、また静寂が押し寄せる……周りを見渡すと、既に他の生徒も退室しており、図書室には僕達2人だけが残されていた。

「様子がおかしい……か。フフ、気付かれてたんだね……」

「……」

（あああ……なんか不穏なオーラが漂ってる雰囲気グヒシヒシとっ……！）

〈テスト当日〉

「……」

テスト当日の朝……僕は少しでも解答を頭に詰め込む為に、時間ギリギリまで教科書を捲り問題集を解き続けている。

「石上ー、今回はいつもより頑張ってるね？」

その声に顔を上げると、壁に凭れながらこっちを見る小野寺と目が合った。

「ああ、小野寺……ちょっと、テストで平均90点以上取らなきゃいけない理由が

出来ちゃって……」

「へー？　なんでかは知らないけど、最後の追い込みって事？　でもあんまり頑張り過ぎると、ケアレスミスとかするかもよ？」

「ミス……」

あれだけ柏木先輩が自分の時間を削って勉強を教えてくれたのにミス……？

……

「石上君、どうしてこんなミスしたの？」

「も、申し訳ございませんでしたあっ!!」

「このミスが無ければ、平均90点以上取れてたのにね……」

「で、でもっ！　結構頑張って勉強したと……」

「残念だけど、目標に足らなかった分は……」

「……ゴクッ」

「石上君の体で償ってもらおうかな？　とりあえず、1点につき1本で許してアゲル……」  
「ちよやちよや」

「」

……

「し、死にたくないっ……絶対、絶対頑張らないとっ……！」ガクガク

「追い込み方やバくない？」

テストから数日後……渡された5枚の答案用紙を片手に握り締めて、僕は空き教室へと飛び込んだ。

「はあ、はあ……暫く此処で時間を潰そう……」

床に座り込み荒れた息を整える。テストの答案が全て返って来た僕は、直ぐに平均点を割り出した……そして、教室を飛び出した。理由はただ1つ……

「今日はとりあえず、柏木先輩に会わない様にしないと……」

僕は手元にある5つの数字を計算し、平均点を割り出すが……駄目だ、何回計算し直しても平均が90点を越えてない。

「最悪だ……」

そもそも一教科で10点の点数底上げとか、そんな簡単な話じゃなかった……今まで平均30点取ってた人間が40点取るのと、80点取ってた人間が90点取る難易度は同じじゃ無い訳だし！

「そもそも平均点を10点上げるって事は、トータル50点上げるって事なんだから難しいに決まってるよな……」

そこら辺の事情は柏木渚も十分わかっている筈である。では、何故石上が逃げているかと言うと……

「はあ、怖いから会いたくない……」  
単にビビっているだけだった。

「あ、石上君。こんな所に居たんだね？」カウッ

「っ!？」

「こんな所で何してたの？」

「ひ、1人隠れんぼです……」

「……それ楽しい？」

「いえ、あんまり……」

「そ。ところで石上君、テスト返って来てるよね？ どうだったの？」

「……此方になります。」

観念した僕は、答案用紙を柏木先輩へと差し出した。

「……」

柏木先輩は答案用紙を受け取ると、黙ったままペラペラとゆっくり点数を見比べている。ああ、今平均点を割り出されている……

「……うん、良く頑張ったね。」

「……え？ あ、あれ？」

「うん？ どうしたの？」

「いや、怒らないのかなって……柏木先輩の決めた目標に届かなかった訳ですし……」  
「……石上君はちゃんとテスト勉強を頑張ってたのに、怒ったりなんてしないよ。それとも頑張ってた？ 手を抜いたの？ だとしたら……」

「滅茶苦茶頑張りました!!」

「ふふ、だったらそれで良いじゃない……ね？」

「……うす。」

どうやら少し、柏木先輩の事を誤解してたみたいだ。思ってたよりも、意外と優し……

「それに……」

「え？」

「まだ中間テストもあるし、期末テストだってあるもんね？」

「」

（それって、少なくとも期末テストまでは解放されないって事じゃ……）

柏木渚への認識を改めたと同時に、一抹の不安を覚える石上だった。

今回は原作 6 巻の実力テストの話ですが、他√にて記載されている中間テストとは別物と思って頂いて結構です。

2 学期限定でテスト事情を記載しますと……

9 月中旬↓実力テスト

10 月下旬↓中間テスト

12月上旬↓期末テスト

というつもりで書いてる……筈です。過去の自分がちゃんと書いてる事を願う……



柏木渚は見逃さない

感想ありがとうございます(。▽。)

〈生徒会〉

「学外で行うボランティア活動の申請？」

「はい……これが申請書です。」

会長へ1枚の書類を差し出しながら答える。つい先日……生徒会長の椅子を勝ち取ったばかりなのに、会長には様々な仕事が無いで来ている。会長の仕事を増やす事に多少の引け目を感じてはいるが、コレに関してはしょうがない……

「石上君、コレお願いね？」

……と柏木先輩からお願いされては出さない訳にはいかない。断るとかは無理……いや、別に怖いとは思ってないけど。

「……なるほど、特に記入漏れや不備も無い。受理しておこう。」

「お願いします。」

「……ボランティア部創設の申請を受けた時は、まさか石上と柏木が付き合っているなんて知らなかったからな……順調に付き合いは続いている様で何よりだ。」

「ハハハ、だったら良いんですけどね……」

「なんだ、何か問題でもあるのか？　そういう時は誰かに話すだけでも違うらしいからな、話してみると良い……俺で力になれるかはわからんがな。」

「問題……無い事もないんですが……」

……

### 〈中庭〉

選挙期間中のある日の昼休み、中庭を歩いていた時の事……

「……君。」

「……キ……ちゃん。」

「……ん？」

何処からか、微かな話し声が聞こえて来た。周囲を見渡すと、丁度人の背丈と同じくらいの高さのある茂みが目に映る。

「……」

物音を立てない様に気を付けながら、僕は茂みの中を覗き込んだ。

「マキちゃん……」オ。オ。オ。

「……っ！」ギョッ

翼先輩は、マキ先輩の頭をポンポンと撫で続けている……なるほど、此処なら周囲の人間は覗き込まないと中の様子が見えないから、イチヤつくには絶好の場所って事か……

「翼君……」ヤッーッ

「マキちゃん……」ヤッ

「……」

（マキ先輩、本当に良かったですね……）

幸せそうに抱き合う2人から目を逸らし、後ろへと下がろうと一歩引いた瞬間……

「……ッ!？」

ゾッする様な悪寒を感じた……なんだ？ マキ先輩も翼先輩もこっちには気付いてないし、仮に気付かれたとしてもこんな悪寒を感じる事なんて……

「……」

そこまで考えて、違和感に気付く……いや、多分始めから気付いていたんだと思う。怖いから、怖過ぎるから……その事から目を逸らしたいから、態と気付かないフリをしていたんだ……だって、2人の背後にある草木の隙間から……見慣れた瞳が僕を凝視していたから。

「……」

「」

（中庭でレイドボスみたいな人とエンカウントイベント入っちゃった……）

僕はそのまま後ろへ身を引くと、マキ先輩達を囲っている草木を迂回して柏木先輩と合流した。正直言って……走って逃げたいけど、追いかけられるのもそれはそれで怖いし、逃げ切ったとしても後が怖いからしょうがない……

「……石上君、覗きなんて感心しないよ？」

「すいません……」

（先輩も覗いてたじゃないですか……）

「……何か言いたい事でもあるの？」

「……いえ、ありません。」

「ふーん……石上君、私が覗いてた事……言い触らしたりしないよね？ もし喋ったなら……」

「い、言いません!! 絶対言いません!!」

「……本当？」

「本当です!!」

「……そっか、良かったあ。」ヒュー

柏木先輩はそう言っって安心した様な笑みを浮かべると、大きな石を……捨てた。

「」

……

「……すいません。何があったかは……脅されているので言えません……」

「脅っ!？」

「はあ……身から出た錆とはいえ、なんでこんな事につ……!」ヤッ

僕はグシャグシャと髪を掻き乱すと、ダンッと拳を机に叩きつけた。

「石上!?! 本当に何があった!?!」

「なんと言うか……見てはいけないモノを見てしまったと言うか、知ってはいけない事を知ってしまったと言いますか……ハハハ、まあ脅されているのでそれとも言えないですね……」

「今の所俺に入って来た情報ゼロなんだが!？」

# 〈生徒会室〉

「こんちゃーっす。」カチャ

「あ、石上くん。」

放課後になり生徒会室を訪れると、藤原先輩がソファに座っているだけだった。普段は会長か四宮先輩、どちらか1人は居る筈なんだけど……なんとなく気になった僕は、藤原先輩に訊ねた。

「藤原先輩だけですか？」

「会長は職員室、かぐやさんは弓道部に寄ってから来るそうですよ。石上くん、ミ

「コちゃんは？」

「そうですか、伊井野は風紀委員の見回りが終わってから来るって言ってましたよ。」

「ふむふむ、しかしミコちゃんは将来有望ですよね！なんて言っただって、私を副会長に任命しようとする程の慧眼の持ち主ですしね！」

「それを言うなら節穴でしょ。」

「はー!? そんな訳無いでしょー!? 仮にかぐやさんが副会長じゃなかったら、1 番副会長に相応しいのはこの私ですよ!？」

「ハハハハハ!!」ハハハハハハハハハハ

「何も面白い事言っていないんですけど!？」

「……といういつもの遣り取りを藤原先輩としていると、背中から扉の開く音が聞こえた。」

「お邪魔します。」カヂヤッ

「っ!? か、柏木先輩……どうしたんですか?」

「柏木さん、生徒会に何か用事ですか?」

「うん、ちょっとボランティア部の事で白銀君に用があって……それより藤原さん、どうしたの？ 随分騒いでみたいだけど……」

「あ、そうなんです！ 柏木さん、聞いて下さいよー！ 石上くんが私をイジメるんです!!」

「……石上君？」

藤原先輩の言葉に、柏木先輩は責める様な眼で僕を見た。

「いやいやいやいや！ 藤原先輩が適当言ってるだけですから！ ハハハ、やだなあ  
藤原先輩は！」

「……っ！」

（コレは……普段の仕返しをするチャンス!?!）

「藤原先輩、柏木先輩を巻き込むのは卑怯ですよ!?! 何考えてるんですか！」

「……っ！」 い。ー

「ッ!?!」

（碌でも無い事考えてる顔!?!）

「柏木さん、聞いて下さい！ 石上くんはいつもいつも私を先輩扱いしませんし、



直ぐに（正論で）殴って来るDV男なんですよ！」

「……石上君、そんな事してるの？」

「ウソに決まってるじゃないですか！ 騙されちゃあいけません!!」

「罰ゲームと称して私を辱めて来ますし！」

「……石上君？」

「やってません!!」

「えーと、あとは………柏木さんの事も色々愚痴ってました！」

「てめえ藤原<sup>リ</sup>先<sup>ボ</sup>輩<sup>ン</sup>女<sup>女</sup>あ!! 越えちゃいけないライン考えろや！」

「ふふーんだ！ 普段から先輩を敬わない石上くんが悪いんですからね！ 日頃の行いに対する罰ですよーだ！」

「くっ……」

（このアホリボン先輩は……）

「石上君、今の本当？」

「いやいやいや！ そんな訳無いじゃないですか！ ホラリボン先輩がテキトー言ってるだけですよ!!」

「ホラリボン!?」さざー

藤原先輩は、バツと手を挙げて宣誓する様に息を吸うと……

「……思い出しました! 石上くん、柏木さんじゃ満足出来ないって言って(た様な気がして来)ましたよ!」

最悪なホラを吹いた。

「はあああっ!!!?」

「……ふーん?」

「いや、マジで違いますからね!? 藤原先輩が勝手に……ああもう! 黙りやがれ、このホラ吹き女があ!」んん

「こんにち……」ちやざ

「むぐぐうっ!?」

「これ以上声を出すんじゃないやねえ!! (僕が) どうなっても良いんですか、ああん!?」  
(い、石上が藤原先輩を襲ってる!?)

「……っ!」んん

藤原先輩の口をガムテープで塞ぐと、生徒会室がシンと静まり返った。

「石上君、何か弁明はある？」

「……」ハッ

……

「お、四宮は今から生徒会か？」

「ええ、会長もですか？」

「ああ、少し用があつて遅れてしまつてな……四宮もか？」

「はい、弓道部の用で少々遅れてしまいました。藤原さん達はもう集まつてるでしょうね。」

「藤原が居るなら遊んでそうだがな……」

「ふふ、そうかもしれないね。」

「スマン、遅くなつた……!？」  
サッ

「こんにちっ……!？」

「むぐぐうんっ！」

「んぐぐう……」

「石上君、そんなんじゃ誤魔化されてあげないからね？」

「どういう状況だコレ……」

「何をしてるの貴方達は……」

本日の勝敗、石上の敗北

藤原のホラにより被害を受けた為。

「藤原先輩!!」ガッ

「んぐぐうっ!!」

「んぐぐ……」

「ってあれえ!?!」ガッーッ

伊井野の敗北

新しい環境にまだ慣れていなかった為。

柏木渚はイジメたい

感想ありがとうございます（・ω・）

書き溜め無くなりました……が、週一ペースはなんとか維持します  
解き放て妄想力

---

〈駅前広場〉

「石上君、今日はよろしくね？」

「……うす。」

10月も終わりに近付き、肌寒さを感じ始めたある日の午後……僕と柏木先輩は制服に身を包み、駅前の噴水広場で募金箱を持って佇んでいた。今日はボランティア部の学外活動として、募金活動に精を出す事になる。

「募金活動にご協力お願いしますーす！」

「ぼ、募金活動にご協力お願いします……」

柏木先輩の周囲への呼び掛けを同じ言葉で追いかける……こういう募金と呼び掛ける光景は偶に街中で見掛けるけど、いざ自分がやるとなると……妙な気まずさというか、気恥ずかしさを感じてしまう所為で声が尻すぼみになってしまう。

「……石上君、恥ずかしい？」

「うっ……まあ、少しだけ……」

「ダメだよ、恥ずかしがっちゃ。別に悪い事してる訳じゃないんだから……ね？」

「……はい。」

「あの子達みたいにな、元氣良くな？」

「「募金活動にご協力お願いしますーす！」」

柏木先輩が視線を送る先には、小学生グループが横並びで元氣よく募金活動に精を出している。

「……やってみます。」

……折角此処まで来たんだ、恥ずかしがって時間を無駄にする訳にもいかないよな。

「募金活動にご協力お願いしますーす！」

……

「お姉ちゃん、またねー！」

「うん、またねー。」

元氣良く手を振り続ける子供達に柏木先輩も手を振って応える……ボランティア活動が終わり、職員に募金箱を預けると深く息を吐いた。思っていた以上に慣れない事をした所為で氣疲れしていたみたいだ……子供達が見えなくなると、柏木先輩は此方に向き直る。

「石上君、どうだった？」

「とりあえず……疲れました。」

「うん、慣れてないとそうなるよね。それに、最初は恥ずかしくて声も小さかったし……」

「うっ、すみません……」

「ふふ、まあ追々慣れてくれれば……」

「ねえねえ、君高校生だよ？ 募金活動なんてしてて偉いね。」

柏木先輩と話していると、theチャラ男の様な風貌の男に話し掛けられた……と

は言っても、男は僕に一瞥さえくれずに柏木先輩を見つめている事から、話し掛けられてるのは柏木先輩だけだとわかる。

「え？ はあ、どうも……」

流石の柏木先輩もいきなり話掛けられて面食らった様で、困惑顔で返す事しか出来てない。

「ね、ね！ 今からどっか遊び行かない？ ボランティアだけじゃツマンナイでしょ？ 俺色々遊べる場所知ってるし……」

「……ごめんなさい、色々片付けとかしないといけないので……」

「いやいや、もう終わってるでしょ？ 見てたから知ってるよ。」

「それは……」

「……」

（コイツ、何処かで隠れて見てたのか……タチが悪いな。）

「それでも片付け終わってないって言うならさ、残りはソイツに任して俺らだけ楽しもうよ……ねー！」

「あ!?! ち、ちよつとやめつ……!?!」



ナンパ男は柏木先輩の腕を掴むと、下卑た笑みを浮かべ見下した様な眼で僕を見た。

「ちょっと！嫌がってるじゃないですか！」

「……………うるせえな！」

「っ！」

ドンツと手で胸を突かれ、少しよろけるが直ぐに体勢を立て直す。

「石上君……………」

「ほら、こんなヘタレなんか放っておいてさ！」

「…………っ！」

……………どうする？人を呼ぶか？もしくは説得？あんまりグダグダ考えてる時間

は…………

「おらっ、早く来いよ!!」*グッ*

「……………あっ!？」

男は我慢の限界らしく、柏木先輩の腕を強く引っ張って連れて行こうとする…………

ああもう！正直、この手は使いたくはなかったけど…………

「すう……」

僕は精一杯息を吸い込むと……

「お巡りさあああん……!」

力の限り叫び声を上げた。募金活動で声出しをしていたお陰で、声は裏返る事もなく周囲に拡がった。男としての誇りをかなぐり捨てた価値はあったらしく……

「はあっ!? お前、それは卑怯っ……!」

男は激しく動揺し始めた……周りをみると周囲の人々もガヤガヤと騒つき出し、ナンパ男に視線が集まり出す。

「やだー、今時ナンパとか……」

「しかも無理矢理っぽくない?」

「えー、警察呼ぶ?」

「いや、ちよっ!? コレは違っ!」

「……先輩! 今です、逃げますよ!」  
ぎゅ

「あっ……ええっ!」

……

「はあ、はあっ……ふー、此処まで来れば…大丈夫ですよね……」

「はあ…はあ……ふっ…くっ……！」

人目から逃れる様に走り回った僕達は、建物の陰へと入った。暫く壁に背を預けて息を整えていると、柏木先輩は膝を付き顔を伏せて肩を震わせ始めた。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

「ふ、ふふふっ……」

「……先輩？」

「あははははは!!」

「ど、どうしたんですか!?! なんで笑って……」

一瞬……気でもヤッてしまったのかと本気で心配したが、続く言葉を聞き違うとわかった。

「だ、だって、あんなっ……あんなカッコ悪い遣り方で助けられるなんて、思っ  
なくて……んふふふっ……！」

「か、カッコ悪いって……」

（自覚があっても人から言われると、地味にショックだなコレ……）

柏木先輩の指摘に、カッと顔が熱くなる。でも仕方ない……カッコ悪い遣り方だったなんて、僕が1番わかっているし……柏木先輩が本当に付き合っている恋人だったなら、もう少しカッコ良さを重視したマシな方法が浮かんだのかもしれないけど……いや、結局同じ事しそうだな。

「ふふふ……ご、ごめっ……んふふっ、ダメ、お腹痛いっ……！」

「はぁ……別に良いですよ、好きなだけ笑って下さい。」

「ご、ごめんねっ？ だって……あははは！」

「……」

（滅茶苦茶ツボってる……）

いや、良いんだ。僕のちっぽけなプライドを捨てて柏木先輩を助けられたのなら本望だ。それに……

「んふふふっ………！」

その報酬として、柏木先輩の……何にも取り繕っていない笑顔を見る事が出来たんだから。

………

「はー、おかしかった……石上君、笑っちゃってごめんね？」

10分程で笑いも収まった様で、柏木先輩はよろよると立ち上がるとそう言って微笑んだ。

「別に気にしてませんよ……でも、さっきの事は忘れて下さい。」

「ふふ……ごめん、それは無理かも。多分、帰ったらまた思い出して笑っちゃうと思う。」

「ええ……酷い。」

「大丈夫、誰にも言わないから……じゃ、今日はもう帰ろっか？」

「……そうですね。」

……

〈柏木家〉

「ふふふ……」

今日一日の出来事を思い出していると、自然と笑みが零れた……初めての学外のボランティア活動、声出しを恥ずかしがっていた石上君、いきなり男の人に話し掛けられて腕を掴まれて、それで……

お巡りさあああん……!!

……先輩！今です、逃げますよ！

「……ふふ、変な子。」

〈ボランティア部〉

「石上君、どうかな？」

「……この前食べさせてもらった時もありましたけど、凄く美味しいです。」

「そっか、なら良かったかな？」

僕の言葉に、柏木先輩は僅かに微笑みながらそう答えた。最近……柏木先輩とは、ボランティア活動や学園内でも何かと一緒に居る機会が増えている。今日なんて、この前の御礼と言って態々僕の分のお弁当まで作って来てくれたし、フリとは言え恋人らしく振る舞って来る柏木先輩に僕自身も戸惑いを感じなくなって来ている。なんだかんだで普段の物腰は柔らかいし……最近では慣れて来たのか、柏木先輩

をあまり怖いとは思わなくなつて……

「……石上君で、お人好しだよね？」

「え、そうですか？」

柏木先輩に話し掛けられた為、一旦思考を中断して答える。

「うん、お人好し……と言うよりは、警戒心が無いっていうのかな？」

「いや、そんな事は無いですよ？」

（つい最近まで、滅茶苦茶先輩の事警戒してたんですけど……）

「だって……なんの疑いも無く、私のお弁当食べたでしょ？」

「」

「何が入ってるかもわからないのに……」

「そんな段階から警戒してなきゃいけないんですか!? っていうか何か入れたんですか!？」

「話が変わるけど、毒って怖いよね……」

「それ本当に話変わってますか!? っていうか唐突に毒の話題振られるのも、それはそれで怖いんですけど!？」

「……」ぢぢ

「なんで無言で時計見るんですか!? 効果待ち!? 何かの効果待ちですか!?」

「……10……9……8……」

「カウントダウン!?!」

「……ふふ、なーんちゃって。ごめんごめん、冗談だよ。石上君があんまり慌てるから、面白くってつい……ね。」

「そ、そうですか……そうですね……」

「でもショックだなあ……あんなに慌ててたって事は、石上君は私がそんな事をする女だと思ってる事に……」

「全然! これっぽっちも思ってますん!!」

「そう? ふふ……でもちよつと面白かったから、またイジワルしちゃうかも?」

「お、お手柔らかにお願いします……」

訂正、やっぱりまだちよつと怖いわこの人……

……

「……クスッ」



(石上君、可愛かったなあ。あんなに慌てふためいて、もっとイジワルしなくなっちゃうなあ……)

---

ーある少女の独白ー

……どうしてかな？ 最近、あのゾツとする様な寒さを感じる機会が減った気がする。

親友の隣には、相変わらず私以外の人間が居座っているのに……

私<sup>が</sup>其処に居られる機会が、増えた訳じゃない筈なのに……

あの寒さはやって来ない……

その理由を知るのは、もう少し先……

## 柏木渚は問い詰めたい

感想ありがとうございます（・ω・）

「石上君……どうして怒ってるかわかる？」

まさか……僕がこのセリフを言われる日が来ようとは、夢にも思わなかった。いやホント……まさか偽りの恋人関係である柏木先輩から言われるとは欠片程も思っ  
てなかった。

「ねえ……どうして怒ってるかわかる？」

「ええと……」

（やべっ……全然わかんない。）

……どうして怒ってるかわかる？ それは、全ての女性が普段は隠している攻撃性を曝け出す魔のワード!! 過去……幾千の男達がこの問いに答えられず、無様に撃沈して逝った。女性が何に怒っているのか？ を正確に読み取らなければ、男性

は非常にマズイ立場に立たされる事となる。なんとも理不尽な目に遭っている石上ではあるが……

「……」

（落ち着け、僕ならわかる筈だ。ウミガメのスープ問題と思って……）

「……わからないの？」

「いや、そんな……」

（……先週のアレか？ それとも先々週のヤツか？ もしくは先月の……）

心当たり自体は山程あった。

（ダメだー！ 情報が少な過ぎてわかんねー！）

「どっ……何の事ですか？」

「今、どれの事って言おうとしなかった？」

「ハハハ、マサカマサカ……」

「あのね、石上君……私、本当は全部知ってるの。でもね、どうせなら石上君の口から聞きたいなって思ってた……」

「っ!？」

（ぜ、全部!? 何その怒ってる理由が複数あるみたいな言い方! え? ちょっと待てよ、柏木先輩がここまで言ってる程の内容で事だから……）

かつて無い程の思考スピードに、石上の脳細胞が悲鳴を上げる!

「心当たり……あるよね?」

「も、もしかして……」

……

# 〈中庭〉

「渚の苦手なモノ? そんなのが知りたいの?」

「ええまあ、苦手というか弱点というか……とにかく、それに近い感じのヤツがあれば教えて欲しいなあと思ひまして……」

10月に入り、生徒会長選挙が来週に迫ったある日の放課後……僕はマキ先輩に中庭へ来てもらい、柏木先輩について探りを入れていた。理由はただ一つ、自衛の為だ。仮に柏木先輩が虫が苦手だとすれば、虫の玩具を懷に忍ばせていれば有事の際に役に立つ筈だ……いや、無いと思うけどね? 有事の際とか、流石にそういう展開は無いと思うけど……一応彼氏って立場がある以上、苦手なモノや嫌いなモノ

は把握しとくべきと思っただけだし？

「でも苦手なモノねえ……あの子って、見た目はお淑やかで大人しい雰囲気出して  
るけど、結構強かなのよね。」

「わかります。」

「少し前に、昔から私の後ろを付いて来てたって言ったでしょ？」

「あ、はい。確か……習い事とかも一緒だったんですよね？」

「そ、だからあの子……私が出来る事は大抵出来る様になるのよ。だから、苦手な  
事って意外と無いと思うわよ？」

（それって殆どなんでも出来るって事じゃ……）

「……ち、ちなみに虫が嫌いとか、そういうのは無いんですか？」

「特別嫌いっていうのは無いと思うわ。」

「雷がダメとか……」

「無いわね。」

「幽霊がダメとか……」

「無いわ。」

「そ、そうですか……」

マキ先輩の言葉にがつくりと肩を落とす。そりゃそうだ、そんな都合の良い苦手分野がある訳無いよな……強いて言うなら、前回の翼先輩が言ってたゲームが弱いくらいなもんだろうけど、初心者 게임을ボコボコにしても虚しいし、後が怖いから絶対やらないけど……

「……今更だけど、普通は好きなモノの事を聞くもんじゃ無いの？」

「あ、すいません、聞き間違えました。」

「あれだけ聞いておいて!？」

……

「……あの時の事、マキ先輩から聞いたんですか!？」

「はあ……」

（溜め息!? 嘘だろ、違うの!?)

「じ、じゃあ、もしかして……」

……

〈生徒会室〉

今日はあまくちで読書中……

「あーあ！僕もこんなキュンキュンする恋愛がしたかったなー！」

「……ん？石上、柏木との恋愛はキュンキュンしないのか？」

「（恐怖で胸の辺りが）ヒュンヒュンならしてまずけどね！」

「なんだそりゃ……」

……

「……って会長と話してるトコ聞いてました!？」

「ふーん、そんな事があったんだあ……」

「」

（はい、やらかしたー！）

石上、自ら落ちる穴を掘る愚行！男女間のこういった駆け引きに於いては、女性に圧倒的なアドバンテージがある事を失念！この様な場合……余計な事は喋らずとにかく謝り続け、謝罪の合間に情報収集しつつ答えを導き出すのが最適解である。それが出来ないのなら、最初から沈黙を守るべきなのである。

「実はね……本当は怒って無いんだよ？ただ、こう言えば男の人は秘密にしてる



事とかバラしてくれるって聞いたから。」

「それは狡くないですか？」

……どうして怒ってるかわかる？ そんな事を言われれば、例え心当たりが無くても自分が何かしたのかと疑心暗鬼に陥るのは必定！ 心理学で言うところのバーナム効果である。

「とりあえず……さっき言った事、全部説明してくれる？」

「あの……違うんです。」

「あと、他の秘密にしてる事も、この際だから全部聞いちゃおうかな？ 実はね、藤原さんがこんなのを貸してくれて……」

ドンッと目の前に置かれたのは、前回……生徒会メンバーで合コンゲームをする際に藤原先輩が持参した……嘘発見機だった。

「そ、それって……」

「石上君は誤解して欲しくないんだよね？ だったら誤解されない為に、ちゃんと全部話さなきゃね？」

「」

30分後……

「……うん、なるほどね。一応聞いておくけど、もう私に隠してる事とか無いよね？」

「はい、もうありません！」

〈ビー!!〉

「……」

「……」

本日の勝敗、石上の敗北

柏木渚に対する隠し事がほぼ無くなった。

暦は11月……秀知院は2週間後に控えた体育祭に向け、徐々に準備を始めて行く。競技の参加者振り分け、競技に使用する備品の確認、そして紅と白にそれぞれ応援団が設立された。

## 〈1年教室前〉

「……」

（……誰だよ1番最初に男子と女子の制服交換するっていう概念作り出した陽キャは……2回目だろうがなんだろうが、女子から制服借りるとか難易度ベリーハードなんだけど……）

「石上、どしたー？」

応援団の会議後……教室前で項垂れて恨み言を考えると、同じ応援団の小野寺に話し掛けられた。

「ああ、小野寺……いや、女子の制服借りるって地味にハードル高いなと思って……」

「あー、なるほどね……」

「はあ、マジでどうしよう……」

「……私と交換する？」

「……え？」

「だーかーら、私の制服貸してあげようかって言ってるの。」

「え……でも、僕みたいな奴に貸すとか気持ち悪くない？」

「自分の事卑下し過ぎでしょ……別に私は、石上にそこまでの嫌悪感とかないし。」

「……マ？」

「マ。」

「じ、じゃあ……貸して下さい？」

「いいよ、その代わり石上も学ラン貸してよ？」

「ああ！ちゃんと新品をクリーニングしてから渡すよ！」

「いや、そこまでしなくて良いから。」

「ねえ、2人共……何の話してるの？」

「あ、柏木先輩。」

（もういきなり話し掛けられても驚かなくなってきたな……）

「っ!? か、柏木先輩!？」

「小野寺さん、久しぶりだね？……それで、何の話をしてたの？」

「え、ええと、それは……」

（小野寺の様子が……？）

「えーとですね、体育祭の応援団で女子の制服が必要で……それで、小野寺と交換

しようかって話をしてたんですよ。」

「……石上君、どうして私に聞かないの?」

柏木先輩の事が全く浮かばなかったと言えば嘘になるけど……表向きは彼氏彼女の関係とはいえ、そこまで先輩に頼るのは流石に気が咎めた。それに同じ応援団の小野寺と貸し借り出来るなら、それで良いと思ってたし……

「あー、でも小野寺が貸してくれるって言うてくれたので、大丈夫ですよ?」

「……ねえ、小野寺さん。貴女……本当にそんな事言ったの?」

「え!? わ、私!? 私は、その……」

「言ったの?」

「え、ええと……」

この時小野寺の脳内には……半年前の水族館で体験した、ある恐怖体験がフラッシュバックしていた!

尾行する時はもう少し上手にね

「ねえ……言ったの?」

「言ってません!」

「あれっ!？」

「ふうん、じゃあ石上君……制服は私が貸してあげるからそのつもりでね？ 一応サイズが合うか確かめたいから、明日替えの制服持って来るね。」

「あ、はい……ありがとうございます。」

「じゃあ、また明日ね。」

柏木先輩は、それだけ言うと言って行った。前は四宮先輩で今回は柏木先輩か、つくづく先輩の制服に縁があるというか……チラリと隣に視線を向けると、小野寺は黙って俯いていた。

「……」

「……小野寺？」

「……もうダメ無理。絶対目につけられた……ちょっ怖かったんだけど……」  
カカッ

「っ!？」

本日の勝敗、小野寺の敗北

忘れていた恐怖を思い出した為。



## 柏木渚は威嚇したい

感想ありがとうございます（▽。）

## 〈ボランティア部〉

次の日の放課後、僕は応援団の練習前に柏木先輩から制服を受け取る為、ボランティア部を訪れた。

「はい、石上君。」

「先輩、態々ありがとうございます。」

柏木先輩から制服の入った紙袋を受け取る……良い人だ。普通は男子に制服貸すなんて抵抗ある筈なのに、自分から貸すなんて言い出してくれて……多分、自分から恋人同士のフリをしようと言った責任感から制服を貸すと言ってくれてるんだろうけど、僕からすれば柏木先輩が責任を感じる必要は無いんだよね。責任を感じて、その責務を全うするべきは僕なんだから……とりあえずは、柏木先輩に恋人が



居る良さって奴を知ってもらう事が当面の責務になる訳だけど。

「ううん、気にしないで。それよりサイズは合うかな？ 石上君は結構痩せ形だし、入るとは思うんだけど……」

「多分、大丈夫だと思いますよ。」

（四宮先輩の制服がギリ入ったんだし。）

「……」

「……？」

「え、着ないの？」

「え!?! もしかして今着るんですか!?!」

「だって今着とかなないと、サイズが合ってるかわからないじゃない。」

「そ、それはそうですけど……」

「後ろ向いててあげるし、恥ずかしいなら外に出てるけど?」

「あー……じゃあ、わかりました。着替えるんでアッチ向いててもらって良いですか?」

「うん、いいよ。」

「……」

（これで僕は四宮先輩と柏木先輩、2人の前で本人の制服に袖を通したという事になるのか……あー、なんか目覚めそうー。）

僕は手早く制服を脱ぐと、せっせと柏木先輩の制服に身を包んだ。

「……もう良いっすよ。」

「……ふふ、意外と似合ってるね?」

「もう、やめて下さいよ……」  
ヌッ

「……」

襟と袖の部分を外しながら答えると、柏木先輩は黙ってその様子を見つめて来る。

「あれ?先輩どうしました?やっぱり似合ってたとか?」

「ううん、そうじゃなくて……普通、男子はその部分を取り外せるって知らないと思うんだけど、石上君はどうして知ってるのかなって思ってた。」

「」

（アカン）

石上突然のピンチ! 柏木渚の指摘した通り、男子は女子の制服の襟と袖の部分

が着脱可能だと知る機会は殆ど無い！ それを知る人間が居るとするならば……女子が制服を脱ぐ所を見た事がある人間か、或いは……

「石上君、もしかして……女子の制服を着るのは初めてじゃない……なんて言わないよね？」

……実際に女子の制服に袖を通した経験がある人間だけである！

「そ、それは……」

（ヤバイヤバイヤバイ!! このままじゃ僕は、普通なら着る機会の無い女子の制服を着た経験があるとしてもない変態って事に!!）

「そっか……否定しないんだね。でもね、石上君……流石にそれは……」

「そ、そんな訳ないじゃないですか!? 変な勘違いしちゃって、ヤダなあ先輩は！」

「それなら、どうして知ってたの？」

「は、外してる所を見た事があるだけですよ！」

「……」

「……あれ？」

石上は気付いていない。先程も言った通り、女子の制服の襟と袖の部分が着脱可

能だと知る人間は……女子が制服を脱ぐ所を見た事がある人間か、実際に女子の制服を着た経験がある人間である。石上は先程、女子の制服を着た経験は無いと否定している。つまり、今現在石上に残された言い分は……自分は女子が制服を脱ぐ所を見た事がある人間だという事である！

「……誰の？」

「え？」

「誰の脱いでる所を見たの？」

「脱っ!? なんでそんな話になるんですか!?」

「わからないの？ 女の子が制服の襟と袖を外す時はね……制服を脱ぐ時しか無いんだよ？」

「」

（今日の僕の失言ヤバくね？）

……

「それでどう？ 腕周りとか平気？」

なんとか先輩の説得に成功した僕は現在、制服の着心地の感想を求められている。

最近は失言をしてしまっても、動揺せずに対処出来る様になっている気がする。慣れたという事か、或いは……先輩の笑った所を見た事が影響しているんだろうな。

「ああ、腕周りは意外と大丈夫っす。」

「そっか、なら良かった……」

「ただ、腕周りはいいんですけど……腰周りがちょっと余裕あり過ぎて違和感ありますね。」

「……」

「普段はベルトで締めてるんで、仕方ないのかも……って先輩、どうかしましたか？」

「腰周りが余裕あり過ぎ……ね。石上君、それは私が太ってるって言いたいの？」

「」

（これは僕が悪い。）

本日の勝敗、石上の敗北

自分でも引くレベルで失言しまくった為。

## 〈校庭〉

「よし！今日の練習はここまで、各自水分補給を忘れない様に！」

応援団の練習後、団長の締め言葉で校庭に集まっていた団員達は解散となった。

「ふー、結構疲れたな……」

「……石上、ちょっといい？」

「ん？別にいいけど……」

小野寺は地面の小石を蹴りながら、何かを言い出すタイミングを計っている様だった。10秒程そうしていると、意を決した様に顔を上げた。

「えーと……もし違うなら、違うって言って欲しいんだけどさ……」

「ん？」

「石上って柏木先輩と……」

「石上君、お疲れ様。」

「ひっ!?!」と『タッ』

小野寺の言葉を待っていると、それを遮るタイミングで後ろから柏木先輩が話し掛けて来た。

「あ、先輩どうしたんですか？」

「うん、一緒に帰ろうと思って待ってたの。待ってるから着替えて来たら？」

「あ、そうなんですか……じゃあ、ちよっと着替えて来ます。あ、そういえば小野寺、さっき何を聞こうとしてたんだ？」

（一緒に帰ろうって、柏木先輩から誘われたのなんて初めてだな……珍しい事もあ  
るものだ。）

（……もう引き下がれない！）

「あ、あのさ！ 石上と柏木先輩って……」

「うん、付き合ってるよ？」

「えっ!?」

「えっ!?」

（柏木先輩!? 小野寺にまでそれ言っちゃって大丈夫なんですか!?）

「って、なんで石上<sup>アンタ</sup>も驚いてんの!?」  
ハッ

「い、いや、色々事情があって……」

「事情って何っ……」

「小野寺さん？」

「はい！」

小野寺はビクツと背筋を伸ばして返事をした……ん？もしかして、小野寺も柏木先輩を怖がってたりするんだろうか？

「……言い触らしたら駄目だからね？」

「はい、絶対言いません！」

「あ、完璧ビビってんな。」

「石上君、何か言った？」

「いえ、なんでも無いっす……じゃあ小野寺、お疲れ。」

「う、うん、おつー……」

「またね、小野寺さん。」

「お疲れ様でした！」

「……」



(……周りから見たら、僕もこんな感じだったのだろうか……)

「石上君、行こっか。」

「……そうですね。」

(慣れるもんなんだなあ……)

……

「ウソでしょ、よりによって柏木先輩となんて……大仏さんに何て言えばっ……」

……言い触らしたら駄目だからね？

「……」

……言い触らしたら

「……ゴクッ」

……駄目だからね？

「……い、言えない。でもっ……うううっ！」

友情と恐怖の間で揺れ動く小野寺だった。

……

「珍しいですね、先輩が一緒に帰ろうなんて……」

「……嫌だった？」

「別にそういう訳じゃないですよ。」

「ふーん……じゃあさ、こういう事しても大丈夫だよね？」

言うが早いか、柏木先輩は僕の掌に自分の手を重ねて絡ませた。

「っ!? ち、ちよつと待って下さい！ 流石にコレは……！」

「恋人同士は、帰り道に手を繋いで帰るんでしょ？ 眞妃にも良く自慢されてたから興味があつたの。」

「うっ、そういう事なら……」

元を辿ればそもそもの目的は、柏木先輩に恋人が居る良さを教えるって事だからな……柏木先輩がやりたいって言うなら断るべきじゃない……けど、握った手の柔らかさにドギマギしてしまう。

「ふふ、手を繋いだくらいでオドオドしてたらカッコ悪いよ？ まあ、石上君の1番カッコ悪い所はもう見てるけど……」

「お願いですから、あの時の事は忘れて下さい……」

「ダメ。言い触らしたりはしないけど、忘れてはあげない。」

「酷い……」

「もつと普段から堂々としてたら良いんじゃないかな？ それなら、少しはカッコ良くなるかもしれないよ？」

「つまり、今の僕はドチャクソカッコ悪いと……」

「ふふ、そこまでは言わないけどね……もつと自信持って欲しいなって。」

「自信……」

（そういえば、会長にも言われたっけ……）

お前はもう誰が見たって立派だ、胸を張れ。

「……そうですね、頑張ってみます。」

一方その頃……

……

〈音楽室〉

〈どっこいしょーどっこいしょー〉

「どっこいしょーどっこいしょー！」

「ドゥッ  
ドゥッ  
ドゥッ」

へソーランソーラン

「ソーランソーラン！」

「アッアッ」

「……ハッ!!」

「」

「良い仕上がりだろ？」

自身の壊滅的な踊りに劣等感も感じずに胸を張る白銀と……

「うそつきい!!」

地獄街道まっしぐらの藤原が居たそうなの。

柏木渚は誓いたい

感想ありがとうございます（。▽。）

体育祭当日……柏木先輩の制服が入った紙袋を足元に置き、スマホをイジりながら自分が参加する競技の順番を待つ。今回は四宮先輩から制服を借りていないので、ガチ勢先輩に絡まれる事も無いから一安心だ。

……………

その頃のエリカ……

「ハアツハアツ……このカメラの容量全部使って、かぐや様の御姿を収めてみせるわ！」ハツハツハツ

記憶容量256GBが火を吹こうとしていた。

「えーと、かぐや様のお席は……!?!」

「えへへー出来ましたよ、かぐやさん！」

「ありがとう、藤原さん。」

「

（ポ!!）

※ポ!!ポニーテール

……

「……という感じでエリカったら随分と興奮していきまして、粗相をしないかとても心配で……」

「やらかす未来しか見えないわね……」

「かつ、かれっ、かれっ……!」 ヽヽヽヽ

「エリカ!? どうしましたの!？」

「か、かぐっ……ポ!!」 ヽヽヽヽ

「まあ! かぐや様がポニーテールを!？」

「ポッ! ポッ!!」

「はいはい、エリカもポニテにしますのね。」

「もうダメそうね。」

.....

「親父……なんで居るんだよ、来るなんて言ってなかったじゃん……」

「え？ 暇だったから。」

「……」

（この職業不定！）

「まあそんな邪険にするな。体育祭の応援に来るなんてのは、親の数少ない楽しみなんだよ……お前も親になればわかる。」

「さっき暇だから来たって言ってなかった？ 大体、そう言う割に中<sup>圭ちゃん</sup>等部の体育祭には行かなかったじゃん。」

「行っ<sup>ナ</sup>ていいか聞いた<sup>マ</sup>ら、これでもかという程嫌がられてな……普段は見られない等身大の生<sup>ナ</sup>の中<sup>マ</sup>学<sup>チ</sup>生<sup>ユ</sup>圭ちゃんを見れる良い機会だと思ったんだが……」

「そんな発言する父親とか嫌がられて当然だろ。」

プログラムは順調に進み、現在は2年生の借り物競走へと移行している。コレが終われば昼休憩を挟んだ後、応援合戦が行われる事となる。お題に四苦八苦する先輩方をボーっと眺めていると……

「石上君、一緒に来てくれる？」

小走りで近付いて来た柏木先輩に声を掛けられた。

「え、僕紅組なんですけど良いんですか？ というか、お題の内容は？」

「うん、コレなんだけど……」

開かれた紙には、こう書かれていた。

〈いつも一緒に居る人〉

「……本当に僕で良いんですか？ そのお題ならマキ先輩の方が……」

「マキちゃん、大丈夫？ 早くない？」

「うん、大丈夫！ ちゃんと付いて行くから！」

そう提案しようとした僕の目の前をマキ先輩と翼先輩が手を繋いで走り抜けて行った。

「……」



その2人の背中を……柏木先輩は只々ジッと見つめている。

「……」

（多分……今までならこういうイベントは、マキ先輩と一緒にだったんだよな。マキ先輩が翼先輩と付き合う事になったから、一緒に居る機会は減ってしまっただったら！）

僕は意を決して柏木先輩へと手を伸ばすと……

「……」ギョッ

「……石上君？」

柏木先輩の手を引いて進む様に促す。手を振り払われる覚悟もしていたけど、柏木先輩は手を引かれるまま……僕の後をついて来てくれている。

「早く行かないと、マキ先輩紅組に負けちゃいますよ？」

「……うん、そうだね。」ギョッ

掌から伝わる体温と弱々しくも握り返して来た事を確認すると、徐々にペースを上げて行く。半分程進んだ所で、後ろから柏木先輩の声が掛かる。

「石上君……全校生徒の前で手なんか握って、恥ずかしくないの？」

「……堂々としてたらいジって来る人なんて居ませんからね。それに、先輩が言ったんですよ？ もっと堂々と、自信を持てって。」

「ふーん……流石、駅前で大声で叫んだ事がある子は言う事が違うね？ オレ」  
「……ふふ。」

「……ホント勘弁してください。それ言われる度にメンタルゴリゴリ削られていく感じがして、本気で黒歴史になりそうなんです……お願いですから、早いトコ忘れて下さい。」

「残念だけど、忘れるのは無理かなあ。」

「先輩って意外と……」

「うん？」

「いえ、なんでもありません。」

今の僕には……これくらいの事しか出来ない。でも、少しでも……柏木先輩が寂しそうな顔をしない為に尽力出来ればと思う。それは多分、この人の取り繕ってない笑顔をまた見たいと思っているからだ……この時初めて気付いた。

へパーンッ

目の前でゴールテープが走り切られ、ピストルの乾いた音が校庭に響く。2年の借り物競走は、翼先輩を連れたマキ先輩が1位、僕を連れた柏木先輩は2位という結果に終わった。

「はあ……はあ……負けちゃったね。」

「はあ……すいません、僕が何も聞かずにさっさと走ってたら……」

「ううん、石上君の所為じゃないよ。それに……」

「……はい？」

（黙って手を握ってくれた所は、ちょっと……ほんのちょっとだけカッコ良かった……かな？）

「……ううん、なんでもない。」

……

「はー、疲れたわ。」

「あらあら、眞妃さんたら……お題は何でしたの？ 大体の予想は出来すが……」  
いざいざ

「べ、別になんだって良いでしょ!?!……私の事より、その子はどうしたのよ？」

「……いつもの発作ですわ。」

「か、かぐや様と同じ白組……かぐや様と同じ、ポッ……ポッ！」

※ポッポニーテール

「はいはいエリカ、落ち着いて下さいな。かぐや様のお写真を撮るのでしょうか？」

「ポッ！ポッ！」

「ええ……ポニーテール姿のかぐや様は、大変麗しいですわね？」

「ポ！」

「あら、失言でしたわ。かぐや様はポニーテール姿も大変麗しいですわね。」

「……ポ？」

「ええ、エリカもとても似合ってますわ。」

「……なんでかれんとエリカはソレで、会話が成立してんのよ。」

体育祭は紅組の勝利で幕を閉じた。紅組の優勝を祝う為に赤色の風船が解き放た

れ、空に舞って行くのを黙って眺める……

「……」

（こんな事思っちゃダメなんだろうけど、風船の形がどう見てもアレなんだよな。こんな事思ってるのは、僕だけなんだろうけど……）

……

その他の男子……

「……」

（今気付いたけど、どう見てもコレ……）

「……」

（アレだ……）

「……」

（アレにしか見えねえ。）

「……」

（アレだなあ……）

それっぽいモノがなんでもアレに見えてしまうのは、男の性<sup>サガ</sup>である。

……

「石上君、足速かったんだね。」

空に舞う無数の風船を卑猥物に見立てていると、隣を歩く柏木先輩に話し掛けられた……女子が隣に居るのに考える内容じゃないかと、考えを改めながら答える。

「まあ陸上やってみましたからね……逃げ足に定評もあつたくらいですし。」

「そういえば……1学期の頃は、私からもよく逃げてたよね？」

「うっ……その節はすいませんでした。」

「ふふ……別に怒ってる訳じゃないから、気にしないで良いよ。でも……石上君に本気で逃げられたら、私じゃ絶対に追いつけないね……」

「逃げませんよ。」

「え……?」

「先輩からは、もう逃げたりしませんから。」

「そっか……うん、じゃあ約束してくれる？」

柏木先輩はそう言う……小指を曲げ、僕の目の前へと差し出した。

「……はい、約束です。」

絡ませた小指から伝わる熱と、弱々しくも握り返して来る感触……夕陽に照らされ、僅かに微笑みを浮かべるその表情を僕は……指が解かれるまで、只々見つめていた。この約束だけは、守ってみせると誓いながら……

だから……この約束を破る日が来るとは、この時の僕は想像もしていなかった。2週間後……僕は先輩の前から逃げ出し、結果的に約束を破る事になってしまうの

だ。

―ある少女の独白―

あの子の優しさを利用して……

あの子の言葉に甘えてしまった……

だから私は、その瞬間まで気付けなかった……



私の発した言葉のひとつひとつが、あの子を傷付けて……

泣かせてしまう事になるなんて……

## 柏木渚は認めない

感想ありがとうございます（・ω・）

その日は偶々……移動教室から帰る途中に1年生の教室の近くを通ったから、なんとなく……本当になんとなくあの子が居る教室を覗くだけのつもりで、私は立ち止まって教室の中へと視線を向けた。

「……で、当日になって団長が女物の下着も履くべきかな？とか言い出しちゃって……」

「いや、それは流石にアウトだろ。」

石上君は、入り口近くの壁に凭れ掛かったまま……小野寺さんとの会話を楽しんでいた。団長という言葉から、応援団の話題で盛り上がっているのがわかる。

「……」

楽しそうに談笑する石上君を見ると、胸の辺りがほんの少しだけ騒ついた。

よくわからない……嫌な気分、モヤモヤするといった漠然とした感情に苛まれていると……

「あれ？ 渚ちゃん、どうしたの？」

後ろから聞き慣れた声が聞こえて来た。振り返ると、かれんとエリカが不思議そうな顔で私の様子を窺っている。

「何か気になるモノでもありませんか？」

僅かに騒ついた心を鎮めながら、私はなんでもない風を装って答える。

「……ううん、なんでもないの。」

「ふーん？……あ、会計君に何か用事？」

「でしたら、話し掛けなくていいんですの？」

「……うん、今は特に用事も無いし。」

「でも、女子と話してるけど良いの？ 会計君で、女子の友達多いみたいだし……浮気は男の甲斐性なんて言葉もあるらしいよ？」

「……」

（何故エリカは、恋愛に関してポンコツな癖して余計な助言を……）

「もう、浮気だなんて……友達と話してるだけじゃない。」

「渚ちゃん……恋愛は奪い合いなんだよ!？」

「そ、そうなんだ……」

（エリカったら……最近恋愛漫画を読んだからか、変にそっち方面の知識が豊富になった所為で物知り顔で助言してますわね……）

「お相手は……小野寺さんですわね。」

「渚ちゃん、本当に話し掛けなくていいの？」

「うん、ホントに大丈夫。だって小野寺さんには……もうわからせてるし。」

「え？ 渚ちゃん、今何て言ったの？」

「ううん、何でもないの。」

……

小野寺と話していると、何処からか視線を感じた。振り返って見ると、3人の先輩方が此方に視線を向けながら何か喋っていた。その中には柏木先輩の姿もあり、何か用でもあるのかと思った僕は、小野寺との会話を切り上げて3人に話し掛けた。

「3人揃ってどうしたんですか？」

「会計君……浮気は良くないよ！」くあっ！

「この人どうしたんですか？」

「まあ、軽い早とちりと言いますか……」

「なんですかそれ？　というか、柏木先輩からも何か言って下さっ……」

「……ぐぐ……うう……」

先輩に話を振ろうとすると、先輩は顔を両手で覆い隠し泣いている様な声を出した。

「え、ちょっと……せ、先輩？」

「渚ちゃん!？」

「だ、大丈夫ですよ？」

「ぐぐ、私の初めては石上君だったのに……」

「先輩!?　いきなり何言ってるんですか!?　そもそも初めてって何の話ですか!?　身に覚えが無いんですけど!？」

「会計君、味噌粉った……じゃなかった、見損なったよ!」くわっ！

「い、いやっ、本当に知らないと言うか身に覚えが無いんですけど!？」

「ふ、2人共、落ち着いて下さい！ エリカ、先ずは石上会計の言い分を聞くべきですわ！」

「かれん……」

「ナマッ……紀先輩！」

（助かった、普段から妄想ばかりしてるナマモノ先輩じゃなかったんだ……これからは、ナマ先輩とか呼ばずにちゃんと紀先輩って呼ぼう。）

「そしてその言い分を校内新聞に載せた上で、大衆に判断して頂きましょう。石上会計は渚さんの初めてを奪っておきながら……知らない、身に覚えが無いんだと責任逃れをしていると。」

「それ実質処刑ですよね!？」ちびっく

「会計君、言いたい事があるならちゃんと言って!」くあっ!

「ちなみに……その発言は詳細に記録させて頂きますので、慎重な発言をお勧めしますわ!」くわっ!

「コレ裁判か何かですか!？」

「さあ！ 渚ちゃんを傷物にした言い訳を……」

「話して頂きますわ！」

ヤバい気がする……本当に知らないんだから話しようが無いんだけど、そんな事を言っても普段から妄想しかして無い様な人と、四宮先輩フリークのヤベエ2人を納得させる事が出来るとは思えない。

「き、傷物なんてそんな事……」

「ㄗ……」

「っ!？」

柏木先輩が顔を覆う手の隙間から、口角が上がっているのが見えた。コレは間違いない……嘘泣きだ。いつもの僕に対するイジリというか、イジワル的なヤツだ。嘘泣きとかエグい事を……くっ、どうすれば……!? そう悩んだのはほんの一瞬で、僕は柏木先輩の手を掴むと……

「先輩、とりあえずこっちに來て下さい！」

「あっ……」

「あ！ 會計君が渚<sup>被</sup>ちゃん<sup>告</sup>を連れて逃げた!？」

「逃げるなんて……やはり何か、後ろめたい事をしている自覚が!？」

「さっきから滅茶苦茶人聞き悪いんですけど!? 自分の身を守りたいだけです!」

「追えー!」

「逃がしませんわ!」

数テンポ遅れて、ナマ先輩とガチ勢先輩は僕達2人の後を追って来る。

「んふふっ……あはははは!」

「ちよつと先輩! これ後でちゃんと誤解解いてくれるんですよ!? 校内新聞で公開処刑なんて、シャレにならないんですけど!？」

「ふふふ、ごめんね? まさか、あんなに取り乱すとは思ってなくて……石上君にちよつとイジワルしようと思って言っただけだったんだけど、まさかあの2人も信じちゃうなんて……んふふっ!」

「笑い事じゃないんですけど!？」

……

なんとか2人を撒く事に成功した僕は、壁に寄り掛かり息を整える。

「はあー……ホント、後でちゃんと2人には説明しといて下さいよ?」



「うん、それはちゃんとしとく。ごめんね、石上君……怒ってる？」

「……別に怒ってませんよ。それに……」

「……それに？」

「いえ、その……」

最近では柏木先輩にイジられたり、こうやって一緒に行動する事を楽しいと感じる様になったなんて……恥ずかしくてとても言えないな。

「……先輩が笑ってくれるんなら、取り乱した甲斐があるってモノですよ。」

「……」

結局恥ずかしい事を言っている事には、全然気付いていない石上だった。

---

〈保健室〉

「じゃあ私は会議に出なくちゃいけないから、ゆっくり休んでね？」

「はい……」

保健医の先生は、私が布団に潜り込んだのを確認すると、会議があると言って保健室を出て行った。しん、と静まり返った部屋で1人で寒さと腹部の痛みに耐えながら、後悔の念に苛まれる。

「ふ…失敗、したなあ……」

……今日は朝からお腹が痛かったから、痛み止めの薬を飲んで登校した。いつもなら痛みが引く時間になっても、痛みは治らないまま時間は過ぎ……私は2限目の授業が終わって直ぐに、念の為持つて来ていた痛み止めの薬へと手を伸ばした。短時間に続けて摂取するのは、あんまり良く無い事はわかってたけど……早くこの痛みから解放されたくて、私は錠剤を水で流し込んだ。

「寒い……」

ブルブルと震える身体を摩り、自分を抱きしめる様な体勢を取りベッドの中で丸まる。お腹の痛みはマシになったけど、薬の副作用なのか……体温が下がって悪寒が止まらなくなってしまった私は、保健室を訪ねてこうしてベッドで横になっていく。

「ハア…ハア……」

目を閉じて痛みと寒さに耐えていると、私はいつの間にか意識を手放していた。

……

……なんだろう？ 暖かくて、安心する……誰かに手を握られている感覚に、僅かに意識が覚醒する。だけど、コレが夢なのか現実なのかを判断する意識は曖昧で……私は確かめる為に握られている手を握り返した。

「うわ……」

力の入らない身体に鞭を打ち、必死でその手の感触を確かめ様と力を込めると……その手は優しくギュッと握り返してくれた。まるで……大丈夫、安心してと言われているみたいで……夢か現実か、それさえもわからない意識の中で、優しく手を包まれる感覚と安心感に……私の意識は深く沈んで行った。

「ヌク……ヌク……」

眠りに落ちるその瞬間まで感じていた、ギュッと包み込まれた手の感触……この暖かさを、この手を握られる感触を、この安心感を、私は何処かで……

……

「……………」

「渚、大丈夫？」

「眞妃？もしかして……ずっと握っててくれたの？」

寝ている所を見られた気恥ずかしさと、態々お見舞いに来てくれた事に頬が緩むのを感じながら……私は起き上がって眞妃に訊ねた。

「……ずっと？私はさっき来たばかりよ。体温を確かめ様と思って手を握ったら、丁度渚が目を覚ましたの。」

「……え？」

「何よ？どうかした？」

「う、ううん、なんでもない……」

（じゃあ、アレは……夢だったの？）

「そ。かれんとエリカも心配してわよ、後でお見舞いに行くって言ってたし。」

「……あの2人にも心配掛けちゃったね。」

私は先程まで感じていた暖かさと安心感の理由を探る様に、掌を見下ろしながらそう呟いた。確かにこの手に感じた、暖かさと安心感……眞妃じゃないなら一体誰が……

「心配してたのは、その2人だけじゃないわよ。」

「え？」

「さっきまで居ただけだね……居るでしょ？ 1番渚を心配する男子が。」

その言葉に、1人の男の子が脳裏に過った。

「あの子、休み時間に此処に来て……それから教室にも戻らずにずっと居たんですって。保健医の先生に戻る様に言われて、私と入れ替わりで出て行っちゃったんだけど……」

「そう……なんだ。」

壁に掛けられた時計を見ると、私が此処に来てから既に1時間以上が経過していた。誰かから私の事を聞いて、あの子はお見舞いに来てくれていたんだ。じゃあ、アレはやっぱり夢じゃなくて……

「……………」

「渚、貴女……顔が紅いわよ？ まだ本調子じゃないのなら、寝てなさい。」

「う、うん、そうするっ……………」

私は眞妃から顔を隠す様に、布団を頭から被って横になった。

「じゃ、また後でね？」

「うん……」

有り得ない……眞妃が握っていてくれたと勘違いする程、私はあの子の存在に安心したって事なの？

「そんな訳無い……」

だって、私にとっての1番は……眞妃なんだから。

「そんな事、ある訳無い……」

布団の中で呟いた言葉は、その意味とは裏腹に……とても弱々しく消えていった。

柏木渚は耐えられない

感想ありがとうございます(。▽。)

キツカケは、ただの八つ当たりだった……私を怖がってる男の子を傍に置いて、イジワルしたかっただけの筈なのに……

「先輩、おはようございます。」

そう言って挨拶をしてくる男の子からは、以前まで感じていた筈の私に対する緊張や警戒の雰囲気は消えていた。

「……うん、おはよう。」

私は少しの戸惑いを感じながら返事をする。

「最近、また寒くなって来ましたね。」

「うん、もう12月だもんね。」

少し前までの彼なら、自分から話題を振るなんて事はしなかった。挨拶くらいはして来るけど、私の不興を買うのを避ける様に発言は少なめで……まあ、そうなるくらい怖がらせたのは私だから、何も文句は無かったんだけど……

「風邪引かない様に気を付けて下さいね？」

「……うん、石上君もね。」

いつからだろう……目の前の男の子が私を怖がらなくなったのは……

「じゃあ、また放課後に。」

「ん、またね。」

いつからだろう……その些細な事実、胸の奥が暖くなる様になったのは……

「……」

いつからだろう……あの子に逢う時間を、待ち遠しく感じる様になったのは……

「違う、そんな筈無い……」

でも私は……その事実から、今も目を逸らしたままにいる。



## 〈中庭〉

「最近の渚は楽しそうね。」

「……そう見える？」

昼休み……中庭のベンチに腰掛けて眞妃と話をしていると、そんな事を言われた。眞妃は髪の毛先をイジりながら、言葉を続ける。

「ええ、少し前までは何処か影のある雰囲気が漂ってたけど、最近はそうでもなさそうだし……優のお陰かしら？」

「それは……」

「なんだか……私と居る時より楽しそうで、少し妬けちゃうわ。」

「え？」

眞妃のその言葉に、心が満たされて行く……ああ、眞妃も私と同じ様に思ってくれてたんだと、嬉しく感じたのも束の間……

「……なんてね。冗談よ、そんな事で妬いたりしないわよ。」

「え……」

「じゃ、そろそろ行くわ。また後でね。」

「あ……」

眞妃の去って行く背中を見つめていると、ギュッと胸が締め付けられた。

「なんで……」

私にとっての1番は……眞妃。それは変わらない、でも眞妃にとってはもう……  
そうじゃ無いんだ。

放課後……昼休みの一件で気落ちした心を奮い立たせ、私はボランティア部の予算について聞く為に、生徒会室に向かっていた。今はとにかく、考える暇も無い程の忙しさを求めている。それは、昼休みの事から目を逸らす為……

「石上君は……もう部室に居る頃かな？ 急がないと……！」

おそらくは、もう部室で待っているであろう男の子の姿を思い浮かべながら、私は生徒会室の扉に手を掛け……

へそうなの！翼君はすっごい優しくて……」

室内から聞こえて来た声に、扉を開け様とする手が止まった。私がこの声を聞き間違えるなんて事は有り得ないから、間違いなく声の主は……

「……眞妃？」

私は物音が鳴らない様に気を付けながら、僅かに開いた隙間から中の様子を窺った。

「……それで、この前は付き合って半年記念だったんだけどね？」

生徒会室には、眞妃と四宮さんだけで……2人はソファに腰掛けて話をしていた。

「その日の翼君は、凄い強引で……」

「……」

眞妃の惚気話を四宮さんは黙って聞いている。

「い、所謂……フ、フレンチキスっていうの？そういう感じのをされちゃって……」

眞妃と四宮さん……あの2人は、とてもよく似ていると思う。昔の……周囲の人間を自らの実力で黙らせていた眞妃と、氷のかぐや姫と呼ばれ孤立し、それでも

結果を出し続けていた四宮さん。最近の柔らかい印象を受ける様になった所もすっかりで、人を好きになる事の影響に随分と驚いた記憶がある。

「それでね……！」

楽しそうに、嬉しそうに、そして……少しだけ恥ずかしそうに、眞妃は田沼君との思い出を四宮さんに話している。つい最近まで、眞妃の惚気話を聞く相手は私だったのに……

「……」

私は眞妃から聞かされる惚気話を喜んで聞いていた訳じゃない。出来る事なら、聞きたくないと思った事も当然ある。だけど……眞妃の傍に居られるのなら仕方がないと、我慢して心が騒ぐのを抑え付けていた。でも、その惚気話を聞く立場さえ……

「私の居場所、無くなっちゃった……な。」

彼氏が出来て眞妃の隣には居られなくなった……

眞妃の惚気話を聞く役目も、四宮さんが代わりになっていた……

じゃあ、私の居場所は……何処にあるの？

.....

生徒会室から逃げる様に立ち去った私は、ボランティア部へと向かった。途中、白銀君とすれ違った気がしたけど……今の私には、ボランティア部の予算についての興味も……冷静な思考をする余裕も無かった。

「あ、先輩、お疲れ様です。」

「うん、待たせてごめんね……」

「……あの、大丈夫ですか？もしかして、体調悪かったです？」

「……ううん、大丈夫。」

「なんかあったら言って下さいね。」

「……うん、ありがとう。」

石上<sup>この子</sup>君は、優しい……人の感情に機敏で、他人を思い遣る事が出来るタイプの人間だ。そういえば随分前に、泣いている女の子と飼い犬の動画を見た事があった。その動画は、泣いている女の子を飼い犬が慰めている内容で、女の子が泣き止むまでその犬は側を離れずに寄り添うという内容だった。

「……」

（石上君で、ちょっと犬っぽいのかな？）

「先輩？ どうしました？」

石上君の頭に、ひょこっと犬耳が生えた姿を幻視する。

（ふふ……）

「ううん、なんでもないの。」

その姿を思い浮かべると、少しだけ気分が楽になった。

「……先輩、コレ見て下さい。」

石上君はパスッと5枚の紙を机の上へと広げた。その紙は期末のテスト用紙で、赤字で書かれた点数はどれも……90点以上を記録していた。

「コレって……」

「先輩との約束、やっと果たせましたよ。」

……すっかり忘れていた。只々困らせた、怖がらせたという不純な動機で、私は3ヶ月前に……テスト平均90点という課題をこの子に科していた。9月の実力テストでは、惜しくも目標には届かなかったけど……

「いやー、人間やれば出来るもんですね！」

この子はそれ以降も、忘れずに日々の勉強に励んでいたらしい。約束と石上君は言っただけ……私が一方的に言っただけの、口約束にもならない言い掛かりに近いモノだったのに……

「凄い……頑張ったんだね。」

それでもこの子は、私が勝手に設定した点数を目指して……並々ならぬ努力をし続けたんだ。その事実が胸が満たされる……3ヶ月前、今の関係が始まった時には、想像もしていなかった……私の中で、この子の存在がここまで大きくなるなんて……

「はい、滅茶苦茶頑張りました。それで……先輩に聞いて欲しい事がありました……」

「うん、なあに？」

そう思っていたのも束の間……

「先輩と僕の……この関係を終わりにしたいんです。」

その言葉を聞いて、私の辛うじて保たれていた心のバランスが……この時崩れた。

「え……あ……」

グラグラと視界が揺らぎ、身体の力が抜けて行く様な感覚に必死に耐える。

眞妃に彼氏が出来て、隣には居られなくなった……

惚気話を聞く立場も、四宮さんになっていた……

今の私に残されたのは、石上君の恋人という立場だけ……でも、その立場居場所さえ無くなってしまったら？ そう考えた時……言い表せ無い程の不安に、私の心は覆われてしまった。

「……先輩？ 大丈夫ですか？」

「……うん、大丈夫。それより、石上君にお願いがあるんだけど……」

私は平静を装ってそう答える……この時の私は、石上君が言った言葉の本当の意味も、自分自身の気持ちも……何もかもわかっていなかった。

「お願い……ですか？」

「うん……お願い。」

この時……ちゃんと話の続きを聞いていれば、この子を傷付ける事はなかったのに……



そして柏木渚は目を閉じた

シリアスは早めに終わらせたい……早ければ明日も投稿します(・ω・)

あとシリアス書いた反動と本誌読んで思い付いたんで、伊井野ミコafter  
②に(伊井野ミコを裁きたい)を追加しています。

お暇ならお読み下さい(・ω・) 5' <::

……気付いたら惹かれていた。恋人のフリをして欲しいという柏木先輩の願いを  
聞き入れ、3ヶ月が経ち……その間、色々な事があった。

柏木先輩とボランティア部を設立した。

図書室でテスト勉強を一緒にした。

マキ先輩の家へ一緒に招待された。

学外のボランティア活動に一緒に参加した。

お弁当を作ってもらった。

体育祭の競技で一緒に走った。

そして……保健室で辛そうに息を荒げて眠る姿を見て、気付けば僕は……布団からはみ出していた、その小さな手を握っていた。ヒンヤリと冷たくなっているその手を少しでも温めたくて、辛さに耐える表情を少しでも和らげたくて……僕は両手でソッと先輩の手を包み込んでいた。

僕の起こした行動で……結果的に柏木先輩は傷付き、本来なら付き合う筈だった翼先輩と付き合う事無く日々を過ごしている。仲の良い恋人になる筈だった2人の未来を奪った僕は、最も重い大罪を犯したと言える。だから……先輩が僕をどれだけ恨んで、罵り、傷付けたとしても……其処を責めるのはお門違いだと思っているし、僕がその傷付いた心を癒せばいいと……勝手に自惚れていた。

僕にそんな資格がある訳じゃ無いのに……

だからこそ、形だけの恋人同士という関係を変えたいと思った。偽物の恋人なんかじゃ無く、本物の恋人になりたいと願った……

僕の自惚れかもしれないけど、柏木先輩も僕の事を憎からず思ってくれている様な気がしている。最近の先輩は、僕に対しても笑顔を見せてくれる事が多くなって

いるし、よく笑う様になった。先輩と約束した……テスト平均90点以上という目標を達成した事も、更に自信を持つキッカケになった。だから、テストの結果を見せた後に、今の偽物の関係を解消して、その後で本物の関係を築いて行きたいと思っていた……

「先輩と僕の……この関係を終わりにしたいんです。」

そう告げた直後……先輩は何も聞いていなかった様な顔で、お願いがあると言ってきた。なんて返したらいいのか答えに困っていると、先輩に制服の袖を引っ張られる。

「ついて来て……」

それだけ言うと、先輩は此方を振り返る事も無く廊下を歩いて行く……

「あの……先輩？」

「……」

先輩は黙ったまま、廊下を進み続け……ある部屋の前で立ち止まった。

「……入って。」

先輩にそう促され、足を踏み入れたのは保健室だった。保健室特有の臭いが鼻を掠め、無人の空間に僅かに緊張感が増した。

「あの、どうして保健室に……」

「石上君……」ヤッヒ

「っ!？」

先輩は俯いたまま、その柔らかな身体を預けて来た……女子特有の微かな甘い匂い、密着した際に感じた柔らかな感触に……現状を理解しようとする思考が乱される。

「せ、先輩っ!？」

（え、どういう事!？もしかして先輩……僕の事!？）

そんな都合の良い考えが浮かんだのも束の間……

「ㄉㄤ……」

「えっ、ちょっ!？」

妖しい笑みを浮かべる先輩に、ぐいっと身体を引かれバランスを崩した。幸い、先輩の背後にはベッドがあるから、怪我をする事は無さそうだと……場違いな事を考えながら、僕と先輩の身体は傾いて行った。

「……」

「……」

ボフンツと布団が跳ね、ギイツとベッドの軋む音が耳に届いただけで……お互いの無事を確認する言葉も、此処まで連れて来られた理由を訊ねる事も、それを話す事も無く……僕と先輩は見つめ合ったまま動けないでいる。

「先輩……」

……ベッドへと引き寄せられ、先輩を押し倒した形になってしまったが、不思議と動揺はしなかった。先輩が何を考えてこんな行動を取ったのかはわからないし、どうしてこんな事になっているのかもわからない……だけど、純粋な想いから起こした行動じゃない事だけは……

「石上君……」

そう言って僕を見上げて来るその瞳を見れば……直ぐにわかった。普段の澄んだ

瞳とは違う、その澱んだ瞳に……僕は映っていなかったから。

「好きにして、いいよ……」

先輩はそれだけ言うのと、スッと目を閉じた……静まり返った室内に、僕と先輩の小さな呼吸音だけが流れている。いいよ、とは……つまり、そういう意味なのだろう。

「先輩、それってどういう……」

僅かに残った冷静な部分が、その言葉の意味を求めた。もしかしたら、僕が求めている理由を言ってくれるんじゃないかという期待を込めて……

「テストで頑張ったご褒美……あげる。」

だけど、そうはならなかった。ご褒美……その言葉を聞き、一気に心が冷えて行くのを感じた。

「ご褒美……そう、ですか。」

（ハハハ、ご褒美か……そうだよな、告白して付き合うって流れが全てじゃないよな。身体の関係から始まって付き合う事だってある訳だし。折角先輩の方から言ってくれてるんだ……先輩は今フリーなんだから、後ろめたさを感じる必要も無

い……)

そこまで考えて……僕はもう、自分を抑える事が出来なかった。

私と石上君の関係は……そもその始まり方が歪だった。私のワガママで始まった、偽りの恋人関係。それも、石上君に対する嫌がらせが目的のくだらない理由……

……柏木先輩、どうしました？

それでも彼は、私の隣に居続けた。知らない、関係ないと、私の提案を拒否する事も出来た筈だし、石上君にはその権利があった。でも……

……先輩！今です、逃げますよ！

その権利を行使する事無く、私の手を引いて駆け出した後ろ姿に……

早く行かないと、マキ先輩紅組に負けちゃいますよ？

先を促しながら、私の手を握るその感触に……

体調を崩して眠る私の手を、優しく握り続けてくれたその暖かさに……私の心は

酷く掻き乱された。

先輩と僕の……この関係を終わりにしたいんです。

そして……もう一緒には居られないだと、真っ直ぐに私を見つめて言ったその言葉に……私の頭の中は、グチャグチャになってしまった。だからだと思う……

「好きにして、いいよ……」

そんな発言をしてしまったのは……その時の私には自分の居場所を、石上君の傍に居る理由を無くさない事が何よりも大事だったから……だからご褒美と称して、好きにしていよいよ……身体を許す発言をした。そんな事を言われて喜ぶ様な男の子じゃ無いと、私は知ってた筈なのに……

「……………」

「……………」

ぽたぽたと落ちて来る水滴が、私の頬を伝ってシーツを濡らしていく。石上君の……私を見下ろす2つの瞳から、止めどなく溢れる涙を見つめながら……私は問い掛けた。

「石上君……泣いてるの？」



「……!!」

涙を流している事に、今気付いた様な顔で石上君は私から顔を逸らした。

「……どうして？」

「先輩こそ……どうしてっ……こんな事をするんですか……？」

「……言ったでしょ、ご褒美だって。」

「そう、ですか……」

「うん……」

「最近、先輩と少しは仲良くなれたのになって思っていました。もしかしたら……なんて事も考えてました。でも、僕の勘違いだったんですね……！」

「……え？」

「先輩はっ……僕の事が好きだから、そんな事を言った訳じゃ無いんですよ……！」

「それは……」

「ご褒美だとか、テストを頑張ったからとかっ……そんなっ、そんなくだらない理由で、簡単に身体を許せるって言うんですか！」

「……」

その言葉に、私は何も答えなかった……違う、答える事が出来なかったんだ。今の……グチャグチャと乱れた思考と心では、自分の気持ちを理解する事なんて出来なかったから……石上君は私を見下ろしたまま、涙を流し続けている。

「否定してくれないんですね……だったら、僕の事を好きでも無いのに……こんな事しないで下さい！好きでも無い男に……身体なんて許さないで下さいよ！そんな事をされても……全然嬉しくありません!!」

「!!?」

その叫びに、ビクッと身体が強張った。

「……怒鳴ってすいません、帰ります。」

力無くそう零して、石上君はベッドから下りて私に背を向けた。私はこの段階になって初めて……自分の言動が1人の男の子の心を深く傷付けてしまったのだと気付いた。

「あ、待っ……」

部屋を出て行くその背中に、無意識に手を伸ばすも……何も言えないまま、扉は

閉ざされてしまった。

「……」

1人残された保健室、先日の暖かさを感じた時とは違い……私の心は冷え切っていた。

「私、何やってるんだろう……」

## 四条眞妃は戒めたい

感想ありがとうございます（▽。▽）

## 〈中庭〉

あれから数日が経過した。その間、ボランティア部に行く事も……柏木先輩と会う事も無く時間は過ぎて行った。元々学年が違うから、どちらかが会おうとしなければ、秀知院の広い敷地内で会う機会は激減する……つまり、そういう事だ。僕も……柏木先輩も……お互いに会うつもりは無く、会わない様になっているって事だ。

「アー……」

久々に気分がダウンーに入った所為で、何もやる気が起きない……やり直す機会に恵まれてからは、ここまで精神的に参る事は無かった。元々陰気な性格をしてる事もあり、前はよく落ち込んだり、死にたくなったりしていたけど、ここまでの

精神的ダメージは……

「……」

じゃあ、なんで僕と寝ようとしてるんですか……

……好きになってくれてありがとうの気持ち？

「……」

甦って来た記憶に、心が荒んで行くのを感じた……

「ははっ、僕はまだ引きずってるのか……」

奇しくも……あの時の僕と柏木先輩は、前回の僕とつばめ先輩を踏襲する様な状況だった。だからだと思う、一瞬で感情が昂ってしまったのは……

僕を見上げる顔も……

横たわる柔らかそうな身体も……

僕を見ていない澱んだ瞳も……

様々な要素が、あの時と重なって見えてしまった。後悔してもし切れない程の……苦い体験。僕だって全く考えなかった訳じゃない。もしあの時、つばめ先輩と身体だけでも繋がっていたら……別の結末もあったんじゃないかって。でもやっぱり僕

は……ちゃんと付き合って、心が繋がってからしたかった。でも……そうはならなかった。

「僕は何を自惚れてたんだ……」

そして今度は柏木先輩だ。好かれているかもしれないと自惚れて、勝手に傷付いて……馬鹿みたいだ。

「……」

それに……もし何かが原因で、柏木先輩が前回の記憶を取り戻す様な事があれば……僕は殺されるかもしれない。だから、柏木先輩と一緒に居続けるなんて事は……するべきじゃ無いんだと心の何処かで思っていた。でも……

「それでも……」

一緒に居たいと思ってしまったんだ……

「……」

「随分と凹んでるわね？」

「……マキ先輩？ どうしたんですか？」

「ちよっと話があってね……」

「……話？」

「渚と何かあったんでしょ？……話しなさい、余す事無く全部。」

「……」

そう言つて僕の言葉を待つ顔には、誤魔化す事は許さないという強い意志が宿つていた。最近の僕達の様子を見て、何かに気付いてしまったんだろう……観念した僕は、ポツポツと事のあらましを話し始めた。

……

「そう、そういう事だったのね……」

全てを話し終えると、マキ先輩はポツリとそう洩らした。マキ先輩の表情からは、何を考へているかは上手く読めなかったけど、これだけはハッキリしておきたかった。

「……言つておきますけど、柏木先輩は何も悪くありません。僕が勝手に自惚れて、勝手に凹んでるだけなんですから……」

「はあ、優も割と面倒くさい性格してるわね。」

「え、マキ先輩よりですか？」

「……」ん。ぢゅ」

「痛っ!？」

「……話はわかったわ。とりあえずは、いつも通り過ごさない。」

「いつも通り……」

「生徒会は奉心祭の準備で忙しいんでしょう？ 忙しいなら少しは気も紛れるわよ……ほらほら、さっさと行く。」ん。ぢゅ。ぢゅ」

「わ、わかりましたよ……」

マキ先輩に促され、少し早いが生徒会室へと向かった。

「……」

その後ろで……何かを考えているマキ先輩には、気付く事はなかった。

あれから数日、石上君とは会えない日が続いている……うん、違う。私が逃げてるから、会えないだけ……何処かで見掛けても、その度に逃げる様に隠れてしま



う……まあ例え逃げなかったとしても、何を言えいいのかすらわからない私がか  
会った所で……また傷付けてしまうに決まってる。そうやって、逃げる言い訳ば  
かり考えている私の所へ……あの子は来た。

「……渚、ちょっといいかしら？」

「真妃……」

「優から聞いたわよ。」

「そう……」

その言葉を聞いても、別に驚きはしなかった……真妃に聞かれれば、私も全部話  
したと思う。要は石上君に先に聞いただけの話だし、もう……どうでもいいとい  
う気さえしていた。

「一応、貴女にも確認させてもらおうかしら？」

「……うん、いいよ。なんでも聞いて。」

それから真妃は、ひとつひとつ……念入りに確認を入れて来た。私から石上君に  
形だけの恋人関係を持ち掛けた事から始まり……保健室で私がしてしまった事まで  
抜かり無く確かめた。

「なるほどね……渚、顔を上げなさい。」

「……」

失望、されちゃったかな……話が始まってから逸らしていた目で、眞妃の姿を捉えた瞬間……

「っ!？」

パンッ……と乾いた音が響いた。ジンジンとした頬の痛み、眞妃の振り切った右手。そして……私を睨み付ける2つの瞳。

「ま、眞……妃？」

「……それで？ 優を傷付けて、泣かせて満足？ 貴女……それであの子が喜ぶと本気で思ってたの？ そんな事をして、あの子を繋ぎ止められると本気で思ってたの？」

「ッ！」

1 番後悔していた事を指摘され、一瞬言葉に詰まった……

「そんな……そんな事っ、眞妃に言われなくてもわかってるよっ！」

「貴女、わかっててそんな事をしたの？」

「ち、違う！ 私はっ、私はただっ……」

「貴女の考えは知らないわ……理由は如何であれ、結果的にあの子を深く傷付けた……それが全てじゃない？」

「!!」

その言葉に、私の身体から力が抜けていく……そんな事は眞妃に言われなくてもわかってる。石上君<sup>あの子</sup>の泣いた顔も、悲痛な叫びも、瞳から流れ出す涙も、その全てがどうしようも無い程、頭に焼き付いてるんだから……

「眞妃には……眞妃には関係ないじゃない！」

違う、こんな事が言いたいんじゃないのにつ……その思いに反する様に、口から出る言葉は止まってはくれない。

「彼氏なんか作って……今までずっと一緒に居たのは私なのに！ 眞妃の1番は私だったのに！」

「……」

眞妃は腕を組んだまま、黙って私の言葉を聞いている。

「彼氏が出来た途端、会う機会だって減っちゃうし……惚気話だって、私じゃな

くて四宮さんに話しちゃうし……私に彼氏が出来たってなっても、全然寂しがつてくれないし……もう私は、眞妃の1番じゃ無いの……？」

「渚、貴女……バツカじゃないの？」

「……え？」

「貴女に彼氏が出来たくらいで私が寂しがる？ はあ……そんな訳ないでしょ、馬鹿な事言ってるじゃないわよ。」

「どうしてそんな事を言うの!? なんで寂しがつてくれないの……？ 眞妃にとって私は……そんなにどうでもいい存在だったの!？」

「呆れた……貴女、それ本気で言ってるの？ 私が寂しがらないのは、貴女に恋人が出来たくらいで私達の関係は変わらないっていう確信があるから。それに、嫉妬や不安なんてある訳ないじゃない……優が相手なら、私には何の文句もないわよ。」  
そう言つて、眞妃は自信ありげに笑つた。

「それと……1番じゃ無いの、だっけ？ 今でも貴女は私の1番大切な親友よ。」

「……彼氏が1番じゃ無いの？」

「翼君は1番大切な恋人よ。」

「え……？」

「かれんも、エリカも、優も……皆、1番大切な友達よ。」

「な、何を言ってる……」

「別にいいじゃない、1番が何人居たって。」

「……!?」

1番が何人居たって良い……真妃のその言葉に、私は衝撃を受けた。

「別に大切な人の数に制限が掛かってる訳じゃないんだし、好きにやれば良いのよ。」

「好きに……」

そっか、そんな事で良かったんだ……

「……真妃は、欲張りだね。」

「ええ、そうよ。私は自分にとって大切なモノは決して手放したりしないわ。でも渚、貴女は違うのかしら？」

「私は……」

「優と一緒に居て、少しも楽しくなかった？ このままだと、もう一緒には居られ

なくなるわよ？ それでも良いの？」

「……」

眞妃の言葉に、石上君と過ごした3ヶ月の記憶が駆け巡る……そんな事は、聞かれなくてもわかり切っていた……

「楽しかった、嬉しかったよ……！ もっとつ、もっと石上君と一緒にっ……！」  
そこまで口にすると……私の視界がユラユラと歪んで、涙が溢れて来た。

「はぁ……普段は立ち回りとか上手いのね。器用な癖に、不器用過ぎるのよ。」

「ま、眞妃ちゃん……私、どうしたらっ……」

「……逢いに行きなさい。逢って、謝って……貴女が本当はどう思ってるか、ちゃんと言葉にしてあげなさい。」

「で、でも……私の所為で泣かせちゃったし、もしそれで嫌われてたらっ……」  
「……ウジウジする暇があるならさっさと行きなさい!!」  
「んぐんぐ」

「は、はい！」

眞妃に怒鳴られ、背中を叩かれた私は……つい反射的に返事をして、そのまま駆け出した。

……

「ふう……後は自分でどうにかするでしょ。でも……」

ま、真妃ちゃん……私、どうしたらっ……

（昔の渚を思い出しちゃったわ。メソメソする渚なんて久しぶりに見たわね、それはそうと……）

「渚……あの子感情が昂ると、偶に突拍子も無い事をやらかす時があるんだけど……大丈夫よね？」

## 石と柏のエピローグ

柏の花言葉……独立、愛は永遠に。

## 〈生徒会室〉

マキ先輩と別れると、真っ直ぐに生徒会室へと向かう。室内には誰一人居らず、辺りはシンと静まり返っている。

「まあ今は、1人の方がいいのかな……」

独り言をポツリと零し、僕は書類に手を伸ばした。

「……」

30分程書類処理に時間を費やした後顔を上げる……珍しく全員遅れている様だ。伊井野は風紀委員の仕事で遅れる事も珍しくは無いけど、普段なら居る筈の会長や四宮先輩の姿も無い……藤原先輩はどうせ遊んでるんだろうけど。

「……」 かちゃッ



ソツと生徒会室の扉が開かれ、入って来た人物を見て一瞬息が止まった。

「柏木、先輩……」

「石上君……」

僅かに目を腫らし、泣いた様な跡が残った顔で……柏木先輩は真っ直ぐに僕を見つめている。

「……何か用ですか？ 会長や四宮先輩ならまだ来てませんか……」

気まずさと気恥ずかしさを誤魔化す為に、若干素っ気ない言い方になってしまった。怒鳴ってしまった事や、情け無く泣いてしまった事も影響しているんだろうなと、僕は何処か他人事の様に……自分の言動を分析していた。

「そ、その……」

「……」

「ごめんなさい!!」

「……え？」

先輩はそう言うと同時に、勢いよく頭を下げた。

「イジワルしてごめんなさい、八つ当たりしてごめんなさい……」

「せ、先輩……?」

「泣かせて……ごめんなさい!!」

泣いてしまった事を面と向かって謝罪され、カッと顔が熱くなると同時に思わず後退る。

「そ、その事は……」スッ

「ま、待って!」ギョ

勢いよく先輩に抱き付かれ、後ろへと体勢が傾いた。

「ちよっ!」

真後ろのソファに足が当たった所為でバランスを崩し、僕と先輩はそのまま倒れ込んだ。

「うっ!」ギョ

「きゃっ!」

「……だ、大丈夫ですか?」

「ごめんなさい……」

先輩は僕の胸に顔を埋めたまま、謝り続けている。

「……もういいですよ。」

「良くない……良くないよ。」

「……」

「ごめんなさい……もう石上君と一緒に居られなくなるって思ったら私っ……！  
あんな事……石上君にしか言わない！ 誰でもいいなんて思ってた……！」

……そうか、そうだったなら……先輩だけに謝らせる訳にはいかないな。

「僕も……すいませんでした。」

「どうして……石上君が謝るの？」

「先輩から逃げないって約束したのに……」

「違う！ 私がっ……私があんな事言っただけから！」

「僕も……紛らわしい言い方をしたのが悪かったです。さっさと言いたい事全部  
言っていれば、こんな事にはなってなかったかもしれないのに……」

「全部……？ 石上君は、何を言おうとしたの？」

「あの後……僕と偽物の恋人じゃなくて、本物の恋人になって下さいって……言おうとしたんです。」

「……」

「テストで先輩との約束を果たせて……少しは格好良い所も見せられたのかなって、自惚れてたんですけど……」

「……自惚れなんかじゃ無い、石上君はカッコ良いよ。」

「ははは、そうなら嬉しいっすね……」

「ちゃんと本当だから。じゃあ……私達、本当は両想いだったんだね……」

「みたいですね、僕が不安にさせたから……」

「ううん、違うよ。私が……」

「はは……僕達、謝ってばかりですね。」

「……うん。」

「先輩……1つだけ約束してくれますか？」

「……約束？」

「……はい。もし先輩が僕に対して、不安や不満を感じる様になって……その事に悲しんだり、怒りを覚える様な事があったら……隠さずに僕に言って下さい。」

「石上君……」

「1人で耐えたり、我慢したりしないで下さい。」

「我慢しないで……いいの？」

……この時の柏木渚の心情は、とても一言では言い表わす事が出来ない様な状態だった。

四条真妃と本音で話し合い、そんな訳が無いと否定し続けていた石上優への想いを自覚し、両思いが発覚……更にその本人から我慢する必要は無いと許しを得たのである。

「……はい、良いですよ。ちゃんと受け止めますから……」

「じゃあ、石上君……」

それでも、今の柏木渚の状態を一言で表すのなら……

「両思いの男女が2人つきりになったら……何をするとと思う？」

感情が昂り過ぎて、れっ!<sup>やか</sup>をする<sup>す</sup>一歩手前である。

「え!? ええと……は、ハグとか?」

「……ふふ、いいよ。石上君は照れ屋さんだし、私はお姉さんだからね……」

「……か、柏木先輩?」

近付いて来る柏木先輩の瞳から逃げる様に、僕は反射的に目を瞑った。

〈生徒会室前〉

「やれやれ、随分と遅れてしまったな……」

担任教師と奉心祭についての話をしていた俺は、普段より遅れて生徒会室へと向かっていた。

「スマン、遅れっ……」ガチャ

そして俺は……扉を開けた事を後悔した。

……

「……………」

目の前から洩れ聞こえる小さな吐息に、時間の感覚が狂わされる。1分、或いは5分、もしかしたら10秒も経ってなかったのかもしれない。口を塞がれる感覚が消えると、僕はゆっくりと目を開けた……

「せ、先輩……」

「ハッ……カッ……」

柏木先輩は息を整えながら、ゆっくりと体を起き上がらせた。

「えっ……いい、今!? キッ……」

「ふ……ふふふ……」

動揺する僕を見下ろしながら……柏木先輩は、ゾクリとする様な妖し気な笑みを浮かべた。

「か、柏木先輩………ッ——」

「ッッ……チェッ……ッッ……」

先程の触れるだけのキスとは違い、はむはむと啄む様なキスに……一気に身体が熱くなっていく。

「ッ……ッ………！」

「せ……ッ……先輩　!?　ちょ、ッ……待っ………　!?」

「」ハッ

微かに扉の音が聞こえた気がしたけど、今の僕にソレを確かめる余裕は微塵も無

かった。ドンドン熱くなる身体と、なんとか先輩を落ち着かせなければという思考が混ざり合う。

「ア……ふふ、私……眞妃の気持ち、わかつちやったかも。」

「え……？」

「私、キス……ハマっちゃうかも。」

「せ、先輩！とりあえず落ち着きましょう！冷静になってっ……」

「私はちゃんと冷静だよ？それより……」

未だ戸惑いの消えない僕をジッと見つめて、柏木先輩は呟いた……

「石上君は違うの？気持ち良いのは……私だけ？」

「い、いやっ、そんな事無いですけど……」

「じゃあ……もっと、しょ？」

「ち、ちょっと待っ……んむうっ!？」



〈生徒会室前〉

「」

(石上い!? 何やってんの!? っていうか何!? ヤッてんの!? 思わず閉めちゃったけど、コレどうすればっ……)

「あ、会長じゃないですかー!」

「藤原あああ! 来るなあああ!!」

「な、なんですか、小声で叫んだりして……早く入りましょうよー?」

「ち、ちょっと待て! 今どうすれば良いか考えてるからっ……」

「んー?」  
「ソロ」  
「カチャッ」

……

「んっ…むっ……」

「チュッ…ソッ……」

「」  
「ハッ」

……

「……どうだった?」

「はああっああ!? ヤッてる! 会長! ヤッちゃってますよ!」

「だから! どうすれば良いか考えてるって言ってるじゃん!」

「は、入ってやめる様に言うしかないんじゃない?」

「さ、流石にそれは気まずいと言うか……最悪、終わるのを待つとか考えたんだが……」

「私は嫌ですよ!? 出所不明の体液が染み付いたソファに座るなんて!」

「そんな俺も嫌だわ! っていうか体液とか言うなよ、変に生々しくなるだろ!」

「わ、私、急用が出来たので帰りますね……」

「お前ふざけんなよ!? あんなデカイ爆弾の処理、俺1人にやらせる気か!」

「い、いいですか会長? 私は帰る、会長は残る……つまり、挟み撃ちの形になるんです。」

「お前が帰る形にしかなくてない!」

「あの……2人共、何をしてるんですか?」

「し、四宮……」

「か、かぐやさん……」

「どうして入らないんですか？」

「じ、実はその、バル○ン焚いててな……」

「そ、それで今、部屋の中では番を見つけた蝶が子孫を残そうとしてまして……」  
「それってバル○ン焚いてちゃ駄目なんじゃ……」

「藤原あ！　なんでバル○ン焚いてるつつてんのに、蝶が子孫を残してるとか生々しい言い方すんだよ!？」

「あわわわっ……部屋の中の光景を思い出して、つい言っちゃいました!」  
「フッフ」

「？」

「すいません、遅れまっ……って皆さん、何をやってるんですか？」

「い、伊井野……」

（や、やべーよ……風紀にうるさい伊井野にアレが見つかったら……）

「み、ミコちゃん……」

「……？　皆さんが入らないなら、私が先に入りますね。」  
「さぎ……」

「み、ミコちゃん、ストープッ!」

「ちょっと待て伊井野!……アレだから!　とにかくアレだから!!」

「はあ？　白銀会長まで一体何を騒いでるんですか？　早く入って仕事しますよ!」

カチャッ

「ち、ちょっと待っ……」

……

扉の辺りが妙に騒がしくなってきたのを感じた……なんだ？ 僕は何を忘れてる？ 唇の柔らかい感触と、肌当たる吐息……更には身体に感じる心地良い重みに、頭がボーッとしてしまい思考が鈍る。

「文化祭まで時間無いんですから、遊んでる暇はっ……！」

その声に視線を向けると、扉を開けた伊井野と目が合い……そしてその瞬間、全てを理解した。

「ハッ」

「あ……これは、その……」

忘れていた、此処は……

「ア……ア……」クルクル

「い、伊井野？」

生徒会室だった。

「き、騎乗い……」

「待て、違う。そんな事やってないから！」

「や、ヤッて……」

「変換するな！」

「……藤原さん、騎乗位って何ですか？」

「ぐえっ!?……へいSir〇騎乗位で検索。」

「おいバカやめろ。」

伊井野に続いて、四宮先輩、藤原先輩、会長が次々に生徒会室へと入って来た事で、一気に騒がしくなった。見られた……滅茶苦茶恥ずかしい。ま、まあとにかく、これだけ人の目があれば先輩も自重して……

「石上君、ちゃんとこっち見て。」

「え、あのっ……そ、それより、見られてますよ?」

「そんな事より……気持ち良かった?」

「は、はい!それはもう!だ、だから、とりあえず落ち着きましょう!……ね!」  
(これ以上は色々ヤバイ、何がヤバイかはアレだけど……とにかくヤバイ!)

「そっかあ、気持ち良かったなら……もっとしても良いよね？」

「……？」

柏木先輩の言葉に、一瞬思考が止まった。……え？ もっとしても良いってどういう意味だっけ？

「ソ…ソハツ……チユツ…ソソ…」

「むううっ  
!?  
:  
んむ  
!？」

そんな考えは、次の瞬間には弾け飛んでいた。

「チユルツ…・ザン…・ンムツ…

「ん  
っ  
!？」

(し、舌が入っ……!?)



「はえー……」

（眞妃さんの言ってた通り、ディープキスは普通の事なのね……）

〈秀知院敷地内〉

「ふふ、怒られちゃったね？」

「笑い事じゃないです……」

「皆凄い剣幕だったもんね。」

「はい、明日から凄い気まずいです……」

そう言いながら僕は、あの子の一幕を思い出していた……

……

「い、石上！生徒会室で何してっ……!!？」

「石上くんのスケベ！非常識正論男!!」

「ま、まあ、そういう事は学校では……ちよつと、な。」

「おさしみ……」

「そ、その、今日は生徒会休ませて下さい！」

「あ……」

僕はそう言い残すと、先輩の手を取り生徒会室を飛び出したのだった。

……

「石上君、怒られちゃうかな？」

「うん、どうでしょうね。でも……」

「……？」

「先輩と、ちゃんと分かり合えたので……それは良かったかなって。」

「そっか……うん、私も良かったかな。」

「これから……よろしくお願いしますね？」

「うん、こちらこそよろしくね……ひゃっ!？」

びゅうっと強い風が吹き、全身を冷やしていく。僕の火照った身体を冷やすには、丁度良いかもしれないけど……

「……先輩、寒くないですか？」

「うん、平気。だって……」



「君の隣は……暖かいから。」  
↓完↓

なんとか…なんとか終わらせられた。(´・ω・´)  
「      」  
至らない所もありましたが、ここまで読んで下さりありがとうございました！  
出来るだけ早く、a f t e rも投稿したいと思います。(´・ω・´)

## 柏鬼の角折り a f t e r ①

感想ありがとうございます（・ω・）

とりあえずはコレで終わりです……また思い付いたら a f t e r 書きます。

---

〈1年B組〉

「うーっ……」ぐー

「……」

（伊井野からの視線が痛い……）

生徒会室で柏木先輩とキスしてる所を見られた所為か、ここ最近伊井野からよく見られている……風紀委員の伊井野からすれば怒って当然なんだろうけど、だってたらなんで注意もせずに見て来るだけなのか謎だ。

「ミコちゃん、どうしたの？」

「さっきから石上の事見てるけど、何かあんの？」

「こばちゃん、麗ちゃん……そ、そのお……」

「何かあるなら相談乗るよ?」

「話せば楽になる事もあるし言ってみなよ。」

「う、うん、実は……」  
 ぐいぐい

伊井野は口元を隠すと、大仏と小野寺にしか聞こえない声量で話し始めた。

「……」

（まあいくら伊井野でも、ある事ない事吹聴したりはしないだろう……）

「せ、生徒会室で……セッ!？」

「伊井野、ちょっとストップ。」  
 カッ

一方その頃……

〈2年B組〉

「柏木さん！今の会長は壁にぶち当たってる真っ最中なんですよ!？」  
 先ずは信じてあげる!!別の道を示すのはそれからです!そんなやり方じゃ、会長は簡単に楽な方へ流れる様な子になっちゃうんですよ!？」

「なんかウチのお母さんみたいな事言い出した……そこまで言うなら、藤原さんが

教えてあげたら良いじゃない。私は子供の教育方針とかよくわからないし……」

「生徒会室で石上くんと子供作ろうとしてた癖に……」オッ

「何か言いました!?!」

### 〈中庭〉

生徒会室で起きた一幕から数日が経過した。その後の僕と先輩はと言うと……

「石上君、はい……あーん。」

「あ、あの、先輩！ こういうのは流石に恥ずかしいんですけど……」

「石上君は……こういうのは、嫌？」

「いえ、嫌とかじゃなくてですね……」

「だったら……させてくれると嬉しいな。」

「うっ……わかりました、お願いします。」

上目遣いで懇願して来る先輩を拒否出来る筈も無く、僕は大人しく口を開けた。

「うん♪ はい、あーん……」

「あー……んむっ。」

「……美味しい？」

「……はい、滅茶苦茶美味いです。」

……と、こんな感じになっている。どうやら……僕の我慢しなくていい、という言葉が先輩の琴線に触れた様で、付き合う前とは比べ物にならない程の状態になっている。何というか……こんな感じで女の人に尽くされるのは初めてだから、戸惑いの方が大きい訳だけど……

「ふふ、良かったあ。」

にこやかに笑ってくれる柏木先輩を見れば、そんな事は些細なモノだと心底思う。先輩と本当の意味で恋人関係になった次の日から、先輩は僕の方のお弁当も作って来てくれる様になった。

「じゃあ今度は、石上君が食べさせて？」

先輩はそう言うと、控えめに口を開けて目を閉じた。

「……ッ！」

あーんと目を瞑り口を開けて待つ先輩を見ると、小さく心臓が跳ねた。

「せ、先輩、あーん……」

「ふふ……ふふ、美味しいね？」

「そ、そうですねっ……」

（なんかエロい……）

あの日は自室に帰り冷静さを取り戻した瞬間、先輩の諸々の感触を思い出してしまい、悶々とベッドの上をのたうち回ったのは記憶に新しい……

「じゃあ、次は石上君の番ね。」

「……はい。」

（コレ、平凡な男子高校生には生殺しに近いな。）

……

「ご馳走様でした。」

「うん、お粗末様。」

「……」

「……」

昼食を食べ終わると……少しの間、僕と先輩は無言になった。こういう時は、男が何か話題を提供するべきなんだろうけど……

「ま、まだ昼休みが終わるまで時間ありますね……どうしましょうか？」  
変に意識してしまい、話題の提供なんて高度な事は言えなかった。

「石上君は……どうしたい？」

「えっ!？」

艶かしい雰囲気を漂わせ、先輩は僕の手に自分の手を重ねながら問い掛ける……  
正に妖艶という言葉がピッタリなその姿に、先程よりも心臓が高鳴る。

「え、ええと、ですね……」

「うん、なあに？」

「……ぼ、僕っ、飲み物買って来ます！」ギョッ

「あ……」

妖しい雰囲気になえられなくなった僕は、堪らずその場から離脱した。

「……ッー」ギョッギョッ

（落ち着け、学校では色々マズイから落ち着け！ いや、何がとは言えないけど落



ち着け僕っていうか、もう1人の僕！)

……

「ㄝ……石上君は可愛いなあ♪」

(でも、ちょっとイジワルし過ぎちゃったかな?)

中庭のベンチに残された私は、先程の石上君の様子を思い出して悦に入っていた。すると……

「あ……ど、どうも。」

「こんにちは、伊井野さん。」

中庭を通り掛かった伊井野さんに挨拶をする。伊井野さんは生徒会室の一件を見ているからか、微妙に気まずそうな雰囲気をしている。

「伊井野さんは、風紀委員の見回り? 大変だね?」

「い、いえ、そんな事はないです……そ、それよりも、石上は……」

「石上君? 今は飲み物を買に行ってくれてるよ。」

「そ、そうですか……」

伊井野さんの纏う雰囲気、少しだけ警戒心が上がる。これは……ちょっとだ

け、牽制しておいた方が良いかもしれない。

「……石上君で、意外と積極的なんだよね。」

「えっ!? せ、積極的!?」

「やっぱり男の子だからかな?」

「えうっ…そ、それって……!」

「いっぱい(あーん)してくれたから、お腹いっぱいになっちゃったし……」  
キ

「お、お腹いっぱい!? それってどういう……」

「……づ、どういう意味だと思う?」

私は意味深にお腹を摩りながら笑い掛ける。とりあえずはコレくらいにしておこうと、此方に走って来る石上君を見ながら思った。

……

「おう、伊井野。どうかしたか?」

「う、ううん、なんでもない……」

スツと伊井野の視線が、柏木先輩の腹部へと向いた……うん? 何か様子がおか

しいな……伊井野は僕と先輩を交互に見つめて来る。

「……石上君、あんなに沢山食べさせて来るんだもん。困っちゃった……」

「いや、先輩が（あーん）してって言うからじゃないっすか。」

「た、沢山して……や、やっぱり！ い、石上！ 学校でえ、エッチな事するとか何考えてんの!？」

「お前が何考えてんの!？ 学校でなんてする訳ないだろ！」

「だ、だって柏木先輩がお腹いっぱい（意味深）とか、沢山食べさせて来る（意味深）とか言うし……ほ、本当にしてないの？」

「してねえわ！ 伊井野は先輩の言葉に満腹以外の意味があると思ってんの!？」

「だ、だってお腹いっぱいなんて意味深な言葉、そういう意味としか……」

「何処が意味深!？ それに、そういう意味って何が!？ 風紀委員が風紀を乱す様な事言うなっていうも言ってるだろ！」

（伊井野の奴、変な事言って意識させるなよ！ こっちは死ぬ気で耐えてんのに……）

「だ、だってえ……」

「……石上君、行こっか？」 ヤッポ

「え？ あ、はい……じゃあな、伊井野。」

「あ、うーっ……」

何か言いたげな伊井野を残して中庭を出ると、先輩に訊ねる。

「先輩……なんで伊井野の前で、あんな紛らわしい言い方したんですか？」

「他の女の子に対する牽制……かな？」

「牽制って……僕にはそんな心配しなくても良いんじゃないですか？」

だって僕ですよ？ という意味を込めて言う。

「……うん、そうだね。石上君は浮気なんてしないもんね？」

「ははは、勿論ですよ。」

〈ボランティア部〉

そして、その日の放課後……僕はボランティア部の椅子に座った状態で縛り付けられていた。

「……」

「……」

……なんて事は無い。生徒会室に演し物についての話をしに来ていたつばめ先輩に頭を撫でられている所を、偶々生徒会室を訪れた柏木先輩に見られてしまい、そのままボランティア部へと連行されただけだ……いや、なんて事有るなコレ。

「石上君……子安先輩とはどういう関係なの？」

「お、応援団の関係でちよつと……」

「ちよつと？ ちよつとって何？ そういう事は、はっきり言わないとわからないよ？」

「ちよつとだけ話す様になっただけで、別に変な関係じゃありません！」

「ふーん……でも、頭撫でられてたよね？」

「あ、アレは何というか……つばめ先輩流のスキンシップ？ みたい……」

「へえ……知り合って2ヶ月くらいしか経ってないのに、名前で呼んでるんだ？ 私の事は、まだ名字呼びなのにな……」

「せ、先輩……怒ってます？」

「別に？ そんな風に見える？」

「……」

（そういう風にしか見えない……）

「石上君で、意外とプレイボーイ？」

「違います！ いやホント、全然そんな気は一切無いです！ 信じて下さい!!」

「浮気は男の甲斐性って言葉もあるらしいよね？」

「僕はそんな甲斐性持ってないですから！ ちなみにですけど……先輩にとっては、何をしたら浮気になるんですか？」

「……それ、ギリギリの境目を狙うつもりで聞いてる？」

「違います!!」ツバツバ

先輩の言葉に全力で首を左右に振る。恋人は些細な勘違いがキツカケで別れる事もあるという……先輩にこんな事で勘違いされては堪らないので全力で否定する。

「ふーん……見てたけどさ、ちょっと距離が近いかな？ とは思ったんだけど……」

「い、いや、言う程近くなっ……」

「あと……石上君、私以外の女の子の手も握ったんだよね？」

「え、なんですかそれ!？」

「藤原さんが言ってたの。つい最近、石上君が女の子の手を握ってたって……」

「つい最近……もしかして、腕相撲の事言ってます!? あれはそんなじゃ無いですから!」

（っていうか藤原先輩、何紛らわしい言い方してくれてんの!? 腕相撲で負けた腹いせ!?)

「石上君は……私っていう彼女が居る自覚がないんだよね? あつたらもつと他の女の子との距離感に気を付けてる筈だよね?」

「え、あのっ、すいませっ……」

「別に謝って欲しい訳じゃないの。石上君が周りの人に……アイツは彼女が居るのに他の女の子との距離感に気を付ける事もしない人間なんだな……とか思われて欲しくないから言ってるの。……ね? 君の為を思って言ってるんだよ? わかる? ねえ、わかってくれるよね? ね? わかる……わかるよね?」

「」

……

## 〈部室前〉

「……」↑覗きに來た藤原

(うわっ、湿度高っ……)

……

「……ごめんね、私って凄く嫉妬深いみたいなの。」ヤッヤン

「いえ、気にしないで下さい。嫉妬されるなんて、男からしたら嬉しいモノですし……それはそうと、今鍵締めました?」

「そう言ってくれると嬉しいな……うん、また邪魔が入ったら嫌だから。」

「そ、それってどういう……」

「フ、わからないの?」

「せ、先輩?何をっ……」

「大丈夫、ちゃんとわからせてあげるから……」

「」

(あ、僕が大丈夫じゃ無くなる奴だコレ……)

……



〈生徒会室〉

「……」ガチャッ

「あら、おかえりなさい。どうでした？ 藤原さんの考え過ぎだったでしょう？」

「……とりあえず、湿度が凄かったですね。」

「……湿度？」

本日の勝敗、石上の敗北

わからせられた結果、生徒会を欠席する事になってしまった為。

## 柏鬼の角折りafter②

感想ありがとうございます（▽。）

石上が神った事を匂わせる描写がありますが、それが受け入れられない人はこの話は無視して下さい。言ってしまうえば、石上が石神になってます。あと、帝が微妙にキャラ崩壊してます。

コレで本当に終わりです。

へ柏木渚は見せつけたい

「わーっ！ サ克蘭ボのゼリーだ！」

冬休みが終わり、3学期が始まった。生徒会長選挙に体育祭、更には文化祭と忙しかった2学期とは違い、3学期のイベントは1月下旬に予定されている2年の修学旅行くらいだ。だから最近の生徒会は仕事に追われる事も無く、余裕のある雰囲気漂っている。今日は、柏木先輩が校長からの頂き物を生徒会室へと持って

来てくれている。

「校長先生から皆さんへって……」

「わーい！ 皆で食べましょう！」

「先輩もどうぞ。」

「……」

「……先輩？」

「……」  
「ミ——」

「……な、渚先輩？」

「うん、じゃあ私も頂こうかな♪」

「オヤオヤ、見せつけてくれますねー？ なんか熱っつい！ 暖房無いのに熱っついですよ！」

「ぐっ……」

「藤原、ウザ絡みしてやるなよ……」

「はいはい、わかりましたよ……とここで皆さん、サクランボの茎を口の中で結べますか？」

「……茎？ ああ……結べるとキスが上手っていうアレか。」

「……藤原先輩は、なんで彼氏も居ないのに無謀な勝負を仕掛けるんですか？」

「はー!? じゃあ石上くんは私よりも早く結べるって言うんですか!? はーはー、そうですねえ？ 彼女持ちですもんね!? 彼氏も居ない私より遅いなんて、そんな事ある訳無いですよねー!?」

「またわかりやすい挑発を……石上がそんな挑発に乗る訳……」

「逃げるなら止めませんよ？ 柏木<sup>彼女</sup>さんの前でキャンキャン逃げ帰っても恥ずかしく無いのなら！」

「やってやらあ！ このリボン女あ！」

「乗るのかよ。」

「では、同時に食べますよ！……はい！」<sup>ぐっ</sup>

「吠え面かいても知りませんからね！」<sup>ぎゅっ</sup>

「……私もやろうかな？」<sup>ぐ</sup>

「やれやれ、騒がしい事だ。大体、サクラランボの茎とキスの上手さに相関性なんて無っ……」

「あつ、結べました。」

「……ん、僕もっすね。」

「」

（絶対あるやん……）

「えっ、もう!？」

「早っ!? 2人共早過ぎです!」

「んで、言い出しっぺの藤原は出来たのか?」

「……………?」  
ぎぎぎぎ

「出来てねえな、これ。」

「フッ……藤原先輩は自信満々に話振っておいて、全然なんですね?」

「あー! 石上くん、今見下しましたね!? 今日舌のグリップ力が悪いだけです  
!」

「舌のグリップ力とか初めて聞いたぞ。」

「はあ……私も全然出来る気がしません。どうすれば良いんでしょう……」

「伊井野さんは、<sup>上手な人</sup>柏木さんに教えてもらったらかしら?」

「あ、そうですね……」*ムッ*

「……ん？」

袖を引かれる感覚に振り向くと、伊井野と視線がぶつかった。

「ねえ石上、私に上手なキスの仕方……教えて？」

「」

「伊井野さん、聞くの石上君<sup>そっち</sup>じゃないわよ。」

「……み、見ーちゃったあ、見ーちゃった！ 石上くんの浮気現場を目撃しましたよ！ 柏木さん、コレどうします!？」

「藤原、ここぞとばかりに……」

「藤原さん、変に煽らないの。」

「……優君、こっち来て。」

「へ？ な、渚先輩、藤原先輩の妄言なんて信じてませんよね？」

「いいから……ね？」

「……はい。」

「伊井野さん、ちゃんと見ててね？」

「へ?」

「……先輩?」

先輩はスッと僕の首に両腕を回すと、目を閉じて顔を近付けて来っ……

「ムッ…チュッ……ロ…ンチュッ……」

「ンンッ!?…ン、ンム……」

突然のキスに驚き逃れ様とするも、首に手を回されてガッチリ固定されている為逃げられない……こうなってしまうと先輩は止まらない為、諦めて受け入れる事にする。

「チュル…ンッ……ン、ハッ……伊井野さん、上手なキスの仕方……わかった

?

「  
「  
「  
「

先輩のその言葉に返事が出来る人間は居なかった。

本日の勝敗、柏木と石上の勝利  
経験の差を見せつけた。

○○√ a f t e r ? の続き……

「……っていうのが、私と優君の馴れ初めなの。」

「そう、そんな事が……」

「はい、真妃は私と優君が付き合って半年って言うてくれたけど……本当の意味で付き合う事になったのは、12月に入ってからだったんです。」

「12月……柏木さん、具体的にはいつ頃？」

「ええと、その……生徒会室で優君とキスしてる所を見られた日……です。」

「っ！ 愛さん、聞きました!? 付き合うと同時におきデきィきーきプみキスみをしてる人も居るのよ？ 散々私の事、異常性欲者とか色々言ってくれたけど、私は至って普通に常って事がわかったでしょう!!」



「いや、絶対少数派だから!!」

「はあ……」

（これだから、ディープキス未経験の生娘は……）

「今滅茶苦茶失礼な事考えてるよね？ ぶっ叩いて、常識を説いてあげよっか？」

「……」

（つ、付き合う事になって直ぐにディープキス!? 早い！ 早いわ!!）

「……」

（異常性欲者……）

「……！ 生娘愛さんの相手をしてる場合じゃなかったわ。」

「本気で引っ叩くよ？」

「そ、それで、眞妃さんと柏木さんには……その、どういった流れで最後まで行っ  
たのかお聞きしたくて……」

「ねえ無視？」

「え、ええとっ……ふ、普通よ、普通！ 偶々そういう雰囲気になっちゃって……  
付き合い始めて1年近く経ってたし、そろそろかなって……」

「な、なるほど、付き合った期間は大事ですね。」

「うーん、私はそういう雰囲気になる様に誘導したかなあ……」

「ゆ、誘導!? 柏木さん、それはどの様に!？」

「……バレンタインデーの時に、ホワイトデーのお返しは飴をリクエストしたんです。」

「……!」 アハハ

「……!」 アハハ

「……」 アハ……

「優君は何で飴をリクエストしたか、わかってなかったんだと思うけど……コレくらの可愛い瓶に、沢山入った飴をプレゼントしてくれてね?」

「……」 アハハハハ

「……」 アハハハハ

「……」 アハハハハ

「それで2人っきりになった時に、その飴を食べるんだけど……優君とキスをしてながら、舌で少しずつ溶かして食べるの♪」

「アハハ…… 5つ目くらいで、優君が我慢出来なくなってそのまま……って感じかな？ どうでした？ 少しは参考に……ってあれ？」

「」  
「」  
「」

「真妃ー？ 四宮さーん？ 早坂さーん？」アハハ

本日の勝敗、柏木渚の1人勝ち

レベルが段<sup>ダ</sup>違<sup>ン</sup>い<sup>チ</sup>だった為。

時間は少し巻き戻る……

## 〈階段踊り場〉

「つていうか、なんで俺には彼女が居ないんだよ!? 自分で言うのもアレだけど、俺結構優良物件だと思うんだけど!？」

「本当にアレだな……」

「……そういうのを自分で言っちゃう所じゃ無いですか？」

「うるせえぞ、彼女持ち共！」

「でも本当、なんで居ないんだろうね？」

「翼君、マジなトーンで返すのやめて……」

「女子を紹介出来るのなら、紹介してやりたいがな……」

「将来的に垂れそうな人でも良いなら、1人紹介出来ますけど……」

「ううむ、しかし藤原はなあ……」

「家柄的には大丈夫でも、結局は本人の気持ちが一番大事だしねえ……」

「誰も将来的に垂れそうな人が藤原先輩とは言ってませんよ。」

「藤原千花か……いやあ、無理だろ。姫様の親友って時点で難易度跳ね上がるわ。

はあ、彼女欲しい……あー！青春してえなあ！」

「まあまあ、帝先輩落ち着いて下さい。もし僕が、おぼっ…熟女と知り合う事になつたら、ちゃんと紹介してあげますから。」

「此奴こいつホント、一回シバこうかな……」

「み、帝君、落ち着いて……」

「……ん？ ちょっと待って？ 石上お前……渚ちゃんと付き合ってるんだよな？」

「え？ はあ、そうですね……」

「えっ、じゃあお前……あのおっぱい、ぐにゅんぐにゅんしたの？」

「っ！」「んゝゝ

「っ！」「んゝゝ

帝先輩のその言葉に、会長と翼先輩が勢いよく此方に振り向いた。

「まあまあまあ……僕の話はいいじゃないですか。それより、明日の天気の話をしてみましょう。」

「いや、その反応絶対ヤッてんじゃん!! 揉みしだいてんじゃん!!」

「帝！ 揉みしだくとか生々しい言い方するな！」

「そ、そうだよ、帝君！」

「石上も何か言っ……!!」

（ちよっと待てよ？もしかして、アレってそういう意味があったのか？）

……

〈某日、生徒会室〉

「ふう……」

「どうした石上、何か悩み事か？」

「いえ、何と言いますか……世界の在り方について考えてただけです。」

「え、なんて？」

「……この世界に人類が生まれ落ちてから、現代に至るまで……多くの人達が愛を捧げ、想いを繋いで来たからこそ今の僕達が居るんだと……」

「お、おう……？」

「僕は世界の一部であり、世界は僕の一部だったんだなって……」

「……なるほど？」

（なんか悟った事言い出した……）

「例えば……戦国時代にはその時代の僕が居たし、室町、鎌倉、平安にも、その時

代の僕が居た……そうやって命を繋いで来たんです。」

「……」

「マザーテレサの言った、永遠の命ってこの事だったんだなって……」

「それ言ったの手塚治虫だろ。」

……

「……」

（なんか達観した事言ってるなと思ったら、そういう事だったのか……）

「帝先輩、とりあえず落ち着きましょう。」

「前から!? 後ろから!? どっち!?」

「……」

「……」

帝先輩だけじゃ無く、会長と翼先輩も固唾を飲んで僕の言葉を待っている。無言の圧力に屈した僕は、ついポロツと……

「……両方。」  
ツツツ

「いやあああっ!? 爛れてるうっ!!」  
トッゴッ

「ぐっほおーっ!?」

「石上ー!？」

「石上君ー!？」

本日の勝敗、帝の敗北

色々な面で、年下に先を越された為。



# 柏鬼の角折りafter③

お久です(・ω・)

ダークネス要素有りですが、全年齢対象な筈です。

GWを目前に控えたある日の午後、とある教室で密着している2人の男女が居た。

それは……

「~~~~~」ガッガッ

「……」

鼻歌混じりに後ろから抱き着き、頭を撫で続けている渚先輩と……されるがままの僕。早いモノで……昨年の12月に渚先輩と付き合う事になってから、来月で半年を迎えるという時期になっていた。

「あの……先輩？」

「ん、なあに?」ギョッ

「その、僕の頭なんか撫でて楽しいですか？」

「うん♪」

「あ、そうすか……」

そう断言されてしまったのは、やめて下さいとは言えない……いや、別に嫌な訳じゃ無い。寧ろ嬉しいくらいなんだけど……

「~~~~♪」カカカ

「……」

（猫のマーキングみたいだな……）

あの日……渚先輩と一線を越えてから、こんな感じのスキンシップが増えた気がする。女性は一線を越えると、男性よりも愛が深まる傾向にあると何かで読んだ記憶がある。渚先輩が学内学外に関わらず、隙あらばこういったスキンシップをして来る様になったのも、当たり前前の事なのかもしれないけど……今日みたいに生徒会に行く直前まで、こんな感じのスキンシップをするのは控えてほしいと思う。

「ん~~~~♪」ガッガッ

「……」

何故かと言えば……伊井野に凄い目で見られるからだ。伊井野は随分と鼻が効くらしく、僕の身体から渚先輩の匂いをするのを嗅ぎつけると変な勘違いをした挙句、滅茶苦茶怒って来るのだ。そういう事もあり生徒会のある日は控えてくれないかと、渚先輩に懇願したのだが……

ふふ、ダーメ♪だって……それが狙いだもん♪

と、あっさり断られた。これでも3学期の頃と比べると随分マシ……というか、柔らかくなった方だと思う。3学期は2年の修学旅行というイベントがあったのだが、側に居なかった渚先輩が……僕が生徒会室で伊井野とした会話の内容を何故か把握していたり、スマホにダウンロードした覚えの無いアプリが入っていたり……（削除したら、それはそれで問題が起こりそうなので放置してる）その頃から比べると、最近の渚先輩の言動は柔らかくなったと思うのも当然だろう。

「先輩、そろそろ……」

「うん、また後でね？」ギョッ

「……はい、また後で」

まあ機嫌が良い分には何も問題は無いので、別に良いかと樂觀的に過ごす。数日

後、あんな事になるとはこの時の僕は想像もしていなかった訳だけど……

5月に入り数日……世間はGW期間という事もあり、普段の連休よりも盛り上がりを見せていた。当然、秀知院に籍を置く僕達もGWの恩恵を受けている訳なのだが……

「すいませんでした！」  
「……」

僕は自室の床に頭を打ち付け、彼女渚先輩に向かって全力の土下座を披露していた。何故こんな状況になっているのか？その理由はただ一つ、僕の油断が招いたのだ……

……

〈石上家〉

「どうぞ、入って下さい」

「うん、お邪魔します」

GW初日、僕は渚先輩を自宅へと招いていた。両親がGW期間中は旅行に行くという話を渚先輩にした所、その間の食事を世話をしてくれると言ってくれたのだ。最初は断ったのだが……僕1人だと栄養が偏るなどの理由から押し切られてしまった。「ふーん、結構片付いてるんだね」

とりあえず自室に案内すると、先輩は意外そうに部屋を見渡しながらそう言った。その反応に……部屋の掃除を頑張った甲斐があったと、内心安堵する。

「イメージと違いました？」

「うん、少し……男の子の部屋って、もっと散らかってるモノだって思ってたから」「ははは、それは偏見ですよ」

（いやいやいや……初めて彼女を部屋に招くのに、掃除しない男なんている訳ないし）

「ふふ、みたいだね？」ヤッヰ

渚先輩は妖しく微笑みながら、ベッドへと腰を下ろす。ベッドの軋む音と、自分の部屋に彼女が居るという状況に……小さく心臓が跳ねる。

「……………」

「優君？ どうしたの？」

「い、いえ！ 何か飲み物持って来ますね！」

先輩を部屋に残し、階下へ降りて2人分の飲み物を用意する。普段は学校で会っている時間が多いし、自室に彼女が居るという見慣れない状況に妙に緊張してしまう……先輩とやる事はやっていても、緊張する時は緊張するモノなんだと、1人納得する。

「お待たせしました」サッザ

「……」

「先輩？ どうし……」

ドアを開け2人分の飲み物をテーブルに置こうと視線を落とすと、其処には……部屋を出る前には置いていなかったモノがあった。それは半年前……駐車場に落ちていたのを秘密裏に拾って持ち帰り、誰にも見つからない様に隠していたモノ……

「優君、これは何かな？」

「」

エ○本だった。

.....

やらかした……前回は拾えなかった事に未練があつたとはいえ、持ち帰るなんて馬鹿な真似するんじゃないかった！

「あーあ、シヨックだなあ……優君が私に隠れて、こんな物を買つてたなんて」

「……買つてません」

殆ど意味なんて無いだろうけど、一応は事実に沿つた否定をしておく。僕は件の本を買つてはいない、拾つただけだ。捨てられていたゴミを拾つたのだから、寧ろボランティア部の部員として当然の行いをしただけなのだ。拾つた場所は小学校の通学路にもなっているから、子供に悪影響のあるモノは排除しなきゃいけないなあという善意の行動であつて……決して！決して下心があつて拾つた訳じゃない！！

「ふうん？　じゃあ、その事は見逃してあげてもいいけど……ねえ優君、私の氣の所為かな？　この本に出てくる女の子、生徒会の人達に似てる氣がするんだけど？」

「……ツクサナゲ」

「でも……このリボンした子とか、藤原さんに似てると思わない？」

渚先輩はペラペラとページを捲ると、その場面を広げて見せて来た……認めてし

まえばどうなるかわからないので、全力で否定する。

「いやいやいやいや！ 藤原先輩はこんな賢そうな顔なんてしてませんて！」

「他にも、この子は伊井野さんに似て……」

「ません！ 先輩の気の所為です!!」

「……」

「……」

「じゃあ、最後に聞くけど……どうして四宮さん似の女の子のページだけ、切り抜いてファイリングしてるの？」

「」

ここまで過去の自分の行動を呪った事はなかった。確かに……僕は四宮先輩に似たキャラのページを切り抜いてファイリングした。だけど、それは四宮先輩似のキャラが1番好みだったから……なんて理由ではない。僕の趣味では無いけど、会長の趣味にはハマってそうだったから、会長に渡すつもりでファイリングしたんだ。だけど、ページを切り抜いてファイルにまとめた所で……

（いや、友達からエ○本の切り抜きしたファイル貰うって何？……気持ち悪っ!?!）



冷静になって考えてみると、滅茶苦茶気色の悪い行動をしようとしていた事に気付いたのだ。仮に帝先輩が同じ事をして来たら、僕なら間違いないドン引きする。そんな事情も有り……会長に渡す事も出来ず、かと言って捨てる事も出来ずに仕方なく保管していたまま今に至る……という事なのだ。

「優君は……本当は四宮さんみたいな女の子がタイプなの？」ハヤイトウ

そんな事を考えていると……渚先輩が光を失った瞳で、僕を見下ろしながら問い掛けて来た。この誤解は早々に解かなくてはいけない！僕は反射的に否定の言葉を口にする。

「ち、違います！いや、マジで！なんだったら、四宮先輩は1番タイプじゃ無いレベルです!! 全く何とも思ってますし、ピクリともしません!!」

「……それはそれで失礼じゃない？」

「信じて下さい！本当に他意は無いんです！」

「うん、もういいよ」

「し、信じてくれるんですか？」

「ううん、そうじゃなくてね……優君が私以外の女の子に、興奮出来ない様にすれ

ば良いだけだから」

「え？」

目の前には、妖艶な笑みを浮かべる渚先輩が……

「優君……」ヤッ

「せ、先輩？」

「私しか見られない様にしてあげるから」

「……」

家族は旅行に出掛けていて不在、GW期間中に誰かが訪ねて来る予定も無し。そ

んな状況で先輩と2人っきり……!? や、ヤバイヤバイヤバイ！先輩は完全にス  
イッチが入ってるし、理由が理由だけに逆らえないこの状況……

「覚悟してね？」ヤッ

「……」!?」

もしかして、コレって結構ヤバッ……

⋮

⋮  
⋮  
⋮  
⋮

⋮  
⋮  
⋮  
⋮  
⋮  
⋮

「ア—

---

GW明け初日……

「渚ちゃん、おはよー！」

「渚さん、おはようございます」

「あ、2人共おはよう」カカ

「あれ？渚ちゃん、シャンプー変えた？」

「え？あ……うん、そうなの。ちよつと気分を変えようかなって思って……」

「ふーん？」

「……？」

（あら？この香り……何処かで？）

.....

〈2年A組〉

「

連休が明け……力が入らない身体になんとか鞭を打ち教室に入ると、崩れる様  
机へと突っ伏す。GW期間中の5日間……僕は只々墮落した生活を送る羽目になっ  
た。渚先輩は最初から泊まるつもりだったらしく、マキ先輩やナマ先輩達の家  
に泊まると偽装工作をしてから僕の家に来たらしかった。

だから、このGW期間中はずっと一緒だからね？

渚先輩は妖艶な雰囲気を感じながら、そう言って僕の身体に触れた……5日間  
という時間は、他者には短く感じるかもしれないが……僕にはとても長く感じた。  
それこそ、一生分の……!? その時の光景が浮かびそうになるのを目を強く閉じて  
振り払う……~~ば~~無理、もう渚先輩以外のお婿に行けない身体にされた。ちよ~~や~~  
怖かったんだけど……

「あ、石上おはー……って、どしたんお前？」

「おう……」~~グッ~~

頭上から降って来た小野寺の声に、顔を上げて返事をする……ダメだ、声にも力が入らない。

「ちよっ!? なんでもそんなにやつれてんの!？」

「……カヂ、カヂ……」カヂカヂ

「声小っさ……」カヂカヂ

そして、朝の挨拶をしに近付いて来た伊井野が石上から漂って来る匂いに気付く……

「ア……ア……」ア……

脳が破壊された様な表情を浮かべるのは……10分後の事である。

完！

何がとは言いませんが、この√が1番早く○○が出来る√でしょうね。まあ、何がと言いませんが……

あと、この√のミコちゃんはインド行きそう……  
可哀想なのは可愛いからね、仕方ないね（√。√。）

## ○○√プロローグ

……家が金持ちだとか、生まれつき才能があるとか関係ない。動くべき時に動けるか、それが出来る人間は……たとえ泥にまみれても、綺麗だ

俺にはお前に告らせるより、お前と付き合うより、切実で重要な願いがあるそれは……お前とずっと一緒にいる事だ

わかるか、四宮……これが俺の気持ちだ

自分とは違い、才能、家柄、頭脳、全てに恵まれた少女に……恋をした男がいた

---

大勢で歩く時……列から離れて歩く人がいると、ちらりと振り向く横顔が好き。心配になる位眠そうな目元とか、難題にぶつかった時のひきつり笑いか、嫌味な位実直で、地味に負けず嫌い……人は頑張れば、何にでもなれるって思わせてくれる姿が好き……前に進もうとする会長が好き



私は……あなたにずっと側に居て欲しくて、あなたに告白してもらいたい  
あなたが私に告白してくれれば……成功率100%なのは間違いないのに  
……これが私の気持ちです

自分とは違い、誠実で他者に優しく出来る男に……恋をした少女がいた

俺は……とつくに恋に落ちていた

好きよ……私は、白銀御行が好き

俺はお前から告<sup>もといめ</sup>られて、初めて対等だと思える気がする

もし告白なんてして拒まれたら、きっと今の関係は壊れてしまう

だから俺は告らせたい

だから私は告らせたい

人を好きになり

「貴方が好き。」

## 告白し

「私と恋人になって……」

## 結ばれる

それはとても素晴らしい事だと誰もが言う

だが……それに振り回され続ける人間は、たまったものではないのも事実である。

---

「早坂!! 今すぐ来て!!」ガッ

「早坂すぐ来て!!」ハッ

「早坂!! すぐ来て!!」ズハッ

「いい加減にして下さい!!」キハッ

早坂愛……四宮かぐやの近侍<sup>ヴァレット</sup>として仕える、四宮家の使用人である。

四宮かぐやにとっての早坂愛は、信頼出来る近侍<sup>ヴァレット</sup>であり、姉の様な存在であり、対等な関係になる事を願っている少女である。

四宮家にとっての早坂愛は、使用人であり、影に徹するべき存在であり、利用価値のある小娘である。

物事には必ず二面性があり、どちらも早坂愛を表す言葉としては正しく、それ故に早坂愛の持つ二面性は常人よりも複雑なモノとなった。

しかし、自らの意思で歩む人生に於いて……その様な言葉の羅列は、些細なモノである。誰もが自身が歩む人生の主役であり……我儘を言い、願ひ、想う権利がある。それは、早坂愛とて例外では無く……

「私もしたい青春っぽい事！」

我儘を言う権利がある

「私も欲しい！ 男友達！」

願う権利がある

「一度位、私もあれ位誰かを好きに……」

想う権利がある

早坂愛もまた、ヒロイン主役なのである!!

N  
e  
x  
t  
√  
I  
・  
愛の真影



……  
需要ありますかね？  
（震え声）

---



## √ I. 愛の真影編

早坂愛は食べさせたい

真影とは、本当の姿という意味です。

石上と早坂の関係性について説明をする……

石上↓早坂 かぐやのお付きで、本来はクールな性格という事を承知している。理由はわからないが死ぬ程カラオケが嫌いという事と、最新機器に滅茶苦茶詳しいという事は前回の関わりから知っている。

早坂↓石上 自分の変装を数秒で見破られた事実にも未だに納得出来ない部分があるが、主であるかぐやに喫茶店の無料券を渡すなど、白銀との関係を後押しする様な行動を取っているのです、その部分に関しての警戒はしていない。変装を見破られた夏休みの一件以来、*ニギハヤヒ*に呼び出し鬱憤を晴らすのに付き合わせている。

これがわかっていれば、多分大丈夫……

多くの感想ありがとうございます。あまりに凄まじい反響にビックリしてます

（震え声）

個人的には、早坂には藤原が居るから……みたいな派閥に反対されると思ってました。藤原押し付けられる早坂の気持ち考えた事あんの？ 派閥には賛成されると思ってきましたが、ここまでとは……

#### 〈四宮邸〉

未だ残暑が続き寝辛さを感じる 9 月の深夜……

「ぢゅ……ん……ん……」

とある少女は、奇妙な夢に魘されていた！

……

ああ、コレは夢だと直感する。かぐや様の寝室<sup>いっもの場所</sup>で私はかぐや様と、理想のデートプランについて話し合っていた。過去にこんな会話をした記憶は無い為、多分私

の脳が創り出した架空の記憶なのだろう……私は全体を見通す位置で、夢の中の従者<sup>私とかぐや様</sup>と主を只々眺めていた。

「私の脳内シミュレーションでは完璧なんです。」

そう言って夢の中の私は、横浜デートをかぐや様へと進言していた……我ながら完璧なデートプランだ。かぐや様もさぞや感謝してくれるだろう、そう確信しつつ2人の会話を眺めていると……

「えっ……つまり妄想って事？」

「別に妄想とかじゃ……」

「いつもこういう事考えてるの？ そのノートもしかして全部……？ 趣味でやってるの？」

かぐや様はとんでも無く失礼な言い分で、矢継ぎ早に私の提案を否定していた。「だから、そういうのじゃないんですって！ ただ時々、彼氏が出来た時のシミュレーションをして楽しんでるだけで！」

「それは妄想とは違うの？ 貴女もしかして、本家の方と何かあったの？ 悩みがあるなら、ちゃんと聞くから話して頂戴……」

……本気で心配してる様な顔で訊ねて来る辺り、滅茶苦茶イラッとした。部外者として眺めている私がここまでイラッとしているのだから、夢の中の私当事者の苛立ちは相当なモノだろう。

「そっちが私好みのデートを言えって言ったんですよね!?」なのにそれを妄想扱いってなんです!? 百歩譲ってこれが妄想だとして何の問題があるんですか!? 実際使えるデートプランを提供してるんですから、頭を垂れて感謝するべきでは!?」

案の定、夢の中の私はキレていた。

「ご、ごめんなさい……」

かぐや様が謝ると……夢の終わりを告げる様に、周囲の光景が徐々に消えて無くなっていった。

……

「……っ!」ガハッ

サユサユと、小鳥の囀りが窓越しに聞こえて来る……どうやらアラームが

鳴る前に目が覚めた様だ。住み始めて10年が経過した……見慣れた部屋を一瞥すると、徐々に頭が覚醒して来る。

「んーっ！はぁ……」

私は上半身だけ起き上がらせると、グーッと両腕を伸ばして身体を解した後息を吐き出した。

「なんだろう……何か、物凄く腹立たしい夢を見ていた様な気がする……」

先程まで見ていた夢に若干の心残りはあったが、時間の無い私は日課のルーティーンへと取り掛かる。シャワーを浴び、歯を磨き、コンタクトを装着し、メイクと髪の毛のセットが終わると、四宮家使用人の姿が眼前に映し出される。

「……」

鏡に映る自分をジッと見つめる……この姿が本当の私だ。秀知院学園高等部に籍を置く早坂愛は……かぐや様のサポートが円滑に行える様に創り上げた偽物の存在。本当の私は四宮家使用人であり、四宮黄光にかぐや様の情報を流している裏切り者だ。

「はぁ……」

長年抱え続けているその秘密に、ズンッと胸が重くなる。

「……っ！ハッ」

氣落ちし始めた心を、頬を叩き奮い立たせる。私の役職はかぐや様の近侍ツアレットであつて、秀知院生では無いのだ。本家の人間が一言……学校を辞めろと言えば拒否権の無い私は、翌日には退学申請を済ませているだろう。只々……淡々と任務を遂行する機械の様になるしか無い。それだけが、早坂愛私に与えられた存在理由レソンドールなのだから……

「……よし！」

だから、この時の私は……想像もしていなかった。かぐや様の近侍ツアレットとして生きて来た私の生活が、激変する未来が待っているとは……

## 〈四宮邸厨房〉

登校前……かぐや様に厨房へと呼び出された私は、自分の目を疑った。

「どうでしょう、特別に発注して作ってもらったケーキです。会長、ケーキ食べたがってる感じでしたから、とっても喜ぶに違いないわ♪」



「……」

「苺は糖度が17の物を買ひ付けてですね。あつ、このスポンジにも秘密があつて……」

「……」

（重い、超引く、超恥ずかしい……私の主人はもう駄目かもしれない……）

「どうかしたの、早坂？」

「あ、いえ……かぐや様が良いなら、私は特に口出しをしません……」

「何よ、齒切れが悪いわねー。」

「はあ、昔はこんなにあホじゃなかったのに……」

「アホ!？」

私の言葉にムツとするかぐや様を尻目に、ウェディングケーキを見上げる……  
ウェディング<sup>こ</sup>ケーキ<sup>な</sup>をプレゼントしてしまえば、一発でかぐや様の気持ち<sup>物</sup>がバレて  
しまう。そう懸念を抱いた私だったが……

「会長は何処から食べるのかしら？ 出来る事なら私が食べさせてあげたいわ♪」  
そう言ってケーキを見上げるかぐや<sup>ア</sup>様<sup>ホ</sup>を一瞥し、その懸念を放棄する。恋をする  
と人はアホになる……そして、アホならば何を言っても無駄だと結論を出し、私は

黙っている事にした。

〈中庭〉

次の日……私は中庭の隅に配置されたベンチに、最近交流を持つ様になった会計君を呼び出していた。此処のベンチは、周りに生えた草木が周囲の目から隠してくれる為、他人に見られなく無い交流を行う場所として役に立つ。別に……会計君と話してる所を見られるのが恥ずかしいとか、会計君に問題があるという事ではない。普段の私はギャル系の少女として過ごしている為、会計君との接点が存在しないのだ。男女が隠れて会っている事が周囲にバレてしまえば、それだけ学園内で動き辛くなってしまう行動も制限されてしまう。

「……」

緩やかに草木を揺らす風が吹き、私は数秒間目を閉じた。私は基本的に、自ら進んで異性と交流を持ったりはしない。アイルランド人のクォーターという外見は、

それだけで異性の視線を無駄に惹きつけてしまうから……

「会計君……か。」

彼は恐ろしく察しが良い。今まで誰にも見破られた事が無かった私の変装を、友達と話してる所を見た事があるという理由だけで看破した。警戒するに越した事は無い。

「アハ……」

もし彼にかぐや様のお付きという事がバレてしまえば、同世代の情報に詳しい人間を狙って交流を持っている事も、態と成績は普通より少し下になる様に調整している事も、全てが無駄になってしまう。

「すいません、遅れました。」

その言葉をトリガーに、私は仮面を装着した。

……

「会計君で、ケーキ好き？」

「へ？ まあ、人並みには好きですけど……」

「良かったー☆丁度、残飯しょっ……余ったケーキを食べてくれる人を探してたん

だー☆」

「今、残飯処理って言おうとしました？」

「アハハ、会計君てばマジ受けるー！」

「滅茶苦茶雑な誤魔化し方しますね……まあ良いですけど。コレ、本当に食べて良いんですか？」

「うん、いいよー！ バイト先でケーキのお裾分けを貰ったんだけど、私だけじゃ食べ切れ無いから食べてくれそうな人に分けて回ってるだけだし。」

「へえ……それなら、会長達にもお裾分けすれば良いんじゃないっ……」

「それはダメ。」カッ

「あ、はい。」

「ほらほら、ちゃっちゃんと食べるし！」

「じゃあ、頂きます。」

「召し上がれー☆」

（あの会長なら、かぐや様が渡したケーキと同じ物って事に気付くかもしれない……  
いっその事、かぐや様から貰ったと言って会長が気付く様に仕向ける手もあるけ

ど、それをするとは間違いなく面倒な事になる……主に私が。）

……

「ふう、ご馳走様でした。美味しかったです。」

「ケーキならまだ余ってるから、もっと食べたかったら言ってねー？……具体的に、在庫が特大ホール2つ分くらいあるから！」

「お裾分けのレベル越えてませんか？」

本日の勝敗、早坂の勝利

残飯処理人員の確保に成功した為。

## 早坂愛は語りたい

感想、評価ありがとうございます（・ω・）

## 〈中庭〉

「うーん……」

会長の誕生日から数日後……僕は唸りながら、ポチポチとスマホで検索ページを捲り続けていた。理由は昨日の夜、翼先輩からある相談をされたからだ。

「やっぱり無難なトコになっちゃうな……」

「会計君、どうしたし？？」

中庭のベンチに座り頭を悩ませていると、通り掛かった早坂先輩に話し掛けられた。

「何か悩みがあるなら聞いてあげるよ？ とりあえず、ケーキ食べながら話そっか

☆」

「そのケーキ、まだ無くならないんですか？」

……

渡されたケーキを完食すると、早坂先輩へと向き直る。まあ、そこまで深刻な悩みという訳では無いけど……都合が良いと言うべきか、周囲に人気は無く落ち着いて話しをする事が出来る。

「……えーとですね、翼先輩<sup>友達</sup>に恋人と行くデート先は何処が良いか相談されてまして……結構色んな所行ってて、候補が少なくなってきたからって。」

「へー？　それで、会計君は何て答えたの？」

「それが……まだ答えられてないんですよ。僕は無難にデイズ○ーかなって思ってるんですけど……」

「……全然ダメ！　論外だし!!」くわっ！

「え、マジすか？」

「デートにデイズ○ーは鬼門って有名な話だよ？　デイズ○ーはアトラクションの待ち時間が平気で30分は超えるから、その間は会話を途切れさせないスキルが必须要になるし、それが出来なかった所為で気まずい感じになったカップルが別れるな

んてよくある話だし！」

「そ、そうなんですか……」

「そもそも……ディズ〇ーは恋人の仲を深める場所じゃなくて、純粋にディズ〇ーを楽しむ場所だし！ イチャイチャする暇があつたら、世界観を楽しむ事に全力を注ぐべきだと思ふな私!!」

「……もしかして、早坂先輩ってディズ〇ーにうるさいタイプですか？」

「はー？ 全然そんな事無いし！ そもそも、ディズ〇ーは一回行けば殆どの人がリピーターになってるんだよ？ ディズ〇ーのリピーター率は90%を超えててね？ これはディズ〇ーを訪れた人の殆どが、その世界観に魅了されたって事を裏付けてると思うの！ ディズ〇ーなんて子供しか楽しめないとか言う人も居るけど、ディズ〇ーの入り口近くにはカフェがあって、ミッ〇ー型のパンやサンドウィッチ、チーズケーキがあるんだけど、天気が良い日はテラス席でのんびりしながらシンデレ〇城を眺める……なんて大人な楽しみ方も出来るの！ ちなみにシーの私のオススメは、ソアリ〇、ビッグバ〇ドビート、マゼラ〇ズの最強コンボ。どれも外れがなくて誰でも楽しめるから、絶対一度は試して欲しい！ 他にも……」



「……」

（うるさい……）

滅茶苦茶うるさかった。

30分後……

「他にもデイズ〇ーには、リピーターを楽しませる工夫が至る所にあつて、例えば……」

「は、早坂先輩！先輩の言いたい事は、よくわかりましたから……つまり、デイズ〇ーは恋人同士が行くべき場所じゃ無いて事ですよね？」

終わる気配の無い早坂先輩のデイズ〇ー論を止めるべく、僕は無理矢理話を終わらせに掛かった。

「全然違うし！」くわっ！

「ええ、嘘お……」

「私が言いたいのはね！年間パスポートも持っていない人同士が行っても、絶対楽しめないって事！」  
ム

「」

当然の様に取り出された年間パスポートに、石上は戦慄した。

「な、なるほど、よくわかりました……じゃあ、僕はこれで……」

「まだ話は終わってないし！」

「

本日の勝敗、石上の敗北

デイズ〇ーに関する知識が無駄に増えた為。

生徒会解散まで残り少なくなつて来たある日……僕は中庭の人気の無い場所へ呼び出されていた。

「ねえ、会計君……私の事、女としてどう思う？」

「

（なんて答えても、角が立ちそうな質問来た……）

つい先日……バツティングセンターで荒ぶる早坂先輩に呼び出された身として

は、返答に困る質問を投げ掛けられる。

「と、とてもっ、魅力的だと思いますよ?」

「ふーん、例えばどんな所が?」

「え、ええと……日本人離れした色素の薄い肌とか、太陽みたいにキラキラした髪とか、アクアマリンの様な綺麗な瞳とかですかね……」

テンパっている所為で、割と気持ち悪い事を言ってしまった石上だったが……

「会計君、見る目ある!! そうだよね!? 別に私に魅力が無い訳じゃないよね!? その話、私は1日で落とせるなんて一言も言っていないのに、たかが数時間でモノに出来なかったからってあそこまで嬉しそうにする事無いよね!」

「は、はい、その通りだと思います!」

(よくわかんないけど、とりあえず肯定しとこ。)

白銀にフラれた事で自信の欠けた早坂は、ヨイショされる事に飢えていた為気付かなかった。

〈マスメディア部〉

「ではこれより、緊急会議を始めます！」

「紀ちゃん、顔怖いよ？ どうしたし〜？」

「ごめんね、早坂さん。かれんが早坂さんを呼ぶって聞かなくて……」

「アハハ、気にしないで〜。」

「そうですわよ、エリカ。貴重な情報を共有するのは当然の事ですから！」くあつ  
！

「貴重な情報って……何があったし？」

「実は……とんでもない情報を入手してしまいました。あの白銀会長が……フィリス女学院の生徒と2人つきりでカフェに居たとっ……！」

「へ〜……」

張本人を前に話している。

「既にツテを使い、髪型などの特徴から候補を絞りましたが、該当者は存在しませんでしたわ。」

「やり過ぎじゃない？」

（……この情報網は脅威だ。あの件からまだ数日しか経っていないのに、この子は既にフィリス女学院には該当者が居ないという事実を突き止めている。この情報索敵能力には、用心しなくては……）

「早坂さん、見て見てー。ゾウが暴れるこの動画が凄くてー。」

「わー、凄ーいー！」

（巨瀬<sup>こ</sup>さんは大丈夫そう。）

「2人共！ちゃんと聞いてまして!？」

「そうは言っても……会長は高等部からの編入なんだし、小中学校時代の親しい知り合いが居てもおかしくないんじゃない？」

「かぐや様以上に親しい関係の方が居る筈無いでしょう!？」くわっ！

「偏見でモノを言われても……」

「普通に彼女かもしれないしねー。」

「有り得ません！有り得ませんわ！」  
ぐぐぐ

「遠目から見ても綺麗な人だったし、あんな子が彼女だったら十分自慢出来ると思

うけど……」

「巨瀬ちゃん、良い事言う〜〜〜！」サレサレ

「何処が良い事ですの!？」

「当人同士の問題なんだから、私達がとやかく言うべきじゃ無いんじゃない？」

「巨瀬ちゃん、ホント良い事言う〜！」

「だ、だって……もしそうなら、私は彼女が居る殿方に他の女性とのカップリングを強制して騒ぎ立てていた異常妄想者という事に……」

「まんまその通りって感じるけどね。」

「ぐふっ……」ハッ

「あ、倒れたし。巨瀬ちゃん、どうする?」

「……放って置いて大丈夫じゃない? かれんてば、偶に何言ってるかわかんない時があるから。」

「……偶にかなあ?」

「くうう……も、もし辿り着いた先が、私の望むカッ真プリング実じゃ無かったとしたら、もう筆を折るしか……無いんですのね……」

「ほら、今も何言ってるかわかんない。」

「アハハ、紀ちゃん面白〜い！」

（紀この子さんには、わざと道化を演じているという可能性もまだ残っている。だとしたら相当な曲者だ、警戒しなくては……）

曲者くせものでは無く、異常妄想者ナマモノである。

……

「結局、紀ちゃんは何が不満なの〜？」

「だって……会長のかぐや様への愛は絶対だと思っていましたので……」

「……」

ごめん……

俺、好きな人がいるから

「まあ、それは間違ってると思うけど……」

「っ!?! もしかして……早坂さんも会長×かぐや様派ですよ!?!」

「えっ……いや、んー……?」

ほれ見た事ですか！

やっぱり会長は手強いでしょう？

早坂に落とすなんて……

「んゝゝゝっ！」「ふゝ」

早坂の中には、未だにかぐやに對するわだかまりが残っていた。

「別にそういう訳じゃっ……」

日本人離れした色素の薄い肌とか

太陽みたいキラキラした髪とか

アクアマリンの様な綺麗な瞳とかですかね

（……まあいっか。）

「そだねー☆」

「まあ！やはり早坂さんも此方側ですね？これからはいより一層、よろしくお願いしますわね！」

「う、うん、よろしく……」

本日の勝敗、かれんの勝利

白×かぐ話で盛り上がる同士が出来た。



伏せ字の所為で読みづらかったら申し訳ないです。著作権とかよくわからないので、念の為伏せ字を使わせてもらいます。（――；）

## 早坂愛は探りたい

感想ありがとうございます。(V。)

## 〈四宮邸〉

「ふう……」キーン

全ての仕事を終わらせた私は、シャワー浴び終わるとベッドに身を投げ出した。最近はずだでさえ激務である四宮家使用人の仕事に加え、かぐや様の我儘の相手や会長さんに対する工作活動、果ては対象F書記ちゃんの対処など息つく暇も無い日が続いていた。

「……」

そんな日々の中にも、少しでもストレスを発散出来る瞬間がある。私は少しでも硬くなった掌を撫でながら、その瞬間を思い出した。

……

「お、お疲れ様です……」

「来たんなら早く打つし！」

「あ、はい。」グッ、グッ

「全然ダメだし！ 男ならもっと豪快に行けし！」

「手厳しい!？」

……

奇妙な関係だと思う……あの日、勢いで会計君と連絡先を交換した私は、ストレスが溜まると彼をバッティングセンターへと呼び出す様になった。精々が週に一度、バッティングセンターで一緒にバットを振る……そんな奇妙な関係が会計君との間に出来上がっていた。

その関係の発端は、夏休みのある日……かぐや様とのくだらない言い争いが発展し、私が会計君を落とせるかどうかの勝負を始めたのがキッカケだった。

あっ……ご、ごめんなさい！

今まで誰にも見せた事が無い変装で趣向を凝らし、偶然を装い会計君と同じ商品に手を伸ばして会話へと繋げた。更にゲームの話題を振り警戒心を解くと、店舗に

備えられたゲームブースへと誘い込んだ。私の演技は完璧だ、自分の計画通りに事が運んでいる……そう確信した私に、彼は言ったのだ。

……あの、間違ってたらすいません。

早坂……先輩ですよね？

彼は出会って数分で、私の変装を見破り名前まで言い当てた。動揺しつつも立て直しを図ろうとする私を制して、彼は次の行き先にバッテリーセンターを指定した。

……今思えば、女子との遊び場にバッテリーセンターを指定するなんて変わった子だ。打撃に自信があるのかと思えば、腰の入っていないヘボスイングで空振りを量産していたし。まさか、私のストレス解消がバッテリーセンター通いと知っていた訳では無いんだろうけど……でも、こんな風に誰かと一緒に遊んだ事はなかったから、ほんの少しだけ気が紛れた……

「……」

でも、私個人の感情は関係ない。私は四宮家の使用人で、かぐや様の近侍なのだから……利用出来るモノは全て利用しなくてはいけないのだ。

## 〈中庭〉

いつもの様に隅っこのベンチに会計君を誘い出すと、私は以前から気になっていた疑問を口にした。

「ねー、会計君でさあ……紀ちゃんとよく話してるよね？」

「紀ちゃん？……あ、ナマ先輩の事ですね。確かに話してますけど……」

「もしかして、紀ちゃんの名前忘れてた？」

「いえ、そういう訳では……普段はナマ先輩呼びなので、咄嗟にはわからなかっただけです。」

「……そもそもの話さ、なんで紀ちゃんの事ナマ先輩って呼んでるの？」

「ナマ（モノ）先輩なので……」

「いや、そんな当たり前みたいな感じで言われても……もしかして、紀ちゃんが普段持ち歩いてるノートが関係してたりする？」

「っ!？」

何気ない風を装い、1番の懸念事項を会計君へと問い掛けた。彼はノートという言葉を見た瞬間、目を見開いて固まった……確定だ。この反応……彼はあのノートに何が書かれているか知っているのだ。

「あのノートの事、気になってたんだよね……何が書かれてるか、知ってたら教えてくれない？」

早坂愛の最も優先するべき行動は、主人である四宮かぐやの害となる可能性の芽を摘む事である。例えば自分の愚痴を聞いてくれ、バツ<sup>ス</sup>テイ<sup>レ</sup>ン<sup>ス</sup>グ<sup>解</sup>セン<sup>消</sup>ターに付き合ってくれる存在だったとしても、其処を曲げる事が許され無いのは、早坂愛に与えられた使命と責任感故である。

「そ、それは……」

「ねえねえ、お願いだからさ☆」

（もし会計君が……紀さんと共謀してかぐや様の情報を収集し、良からぬ事に利用しようとするのなら……この関係も切り捨てないといけない。でも仕方がない、それが私の存在意義なんだから。）

早坂の勘違いがシリアスに向かっていた。

「私ちょっと心配なんだあ……紀ちんてば、いつも四宮さんとか会長さんが近くに居る時に限ってノートに何かを書き込んでるんだよね。」

「……」

（会長達の妄想ネタを書き込んでるんですよ、とは流石に言いづらい……）

言いづらい所の話ではない。

「何書いてるんだろー？ って気になっちゃって……会計君は知ってるんだよね？」

……

その日は偶々普段とは違うルートで教室に向かっていると、隅に配置されたベンチに座る早坂さんと石上編集が視界に入りました。

「あら、珍しい組み合わせですわね……はっ!? もしや、密会なのでは!？」

私は足音を立てない様に気を付けながら、近くの茂みに腰を下ろしました。

「……っ！」

（こんな人気の無い所で、何を話していますの？）

湧き出す好奇心を押し留め、私は2人の会話に耳を傾けました……別に覗きや

盗み聞きなどと言う悪趣味がある訳ではありません。もし2人が甘い遣り取りをしていたのなら……会長×かぐや様のシチュ漫画に転用するだけですから！

十分悪趣味だった。

「私ちよつと心配なんだあ……紀ちんてば、いつも四宮さんが近くに居る時に限ってノートに何かを書き込んでるんだよね。」

「」

（……え？ 心配って何がですの？ まさか頭？ 私、頭を心配されてます？……ハッ!? 違う、そんな事より!!）

「何書いてるんだろー? って気になっちゃって……会計君は知ってるんだよね?」

「」

（はうあぁっ!? 早坂さんたら、石上編集に何て事を聞いてますのー!? も、もし、会長とかぐや様の妄想カプシチュを漫画にしているなんて事がバレたら……!）

うーわっ、紀ちんて同級生で妄想する激ヤバ妄想女だったんだ……拡散してバズっちゃおう☆

「」



（い、いけませんわー!? 石上編集、お願いですから誤魔化して下さい!! 会長とかぐや様の妄想カプシチュ漫画の事を隠してくれるのなら、ある程度の汚名は被りますから!!）

.....

興味深々……といった感じで、早坂先輩は僕の言葉を待っている……コレは難問だ。ナマ先輩の性癖を暴露する訳にはいかない……けど、早坂先輩を納得させるだけの事も言わなくてはいけないのだから。

「あ、あー……アレはですね……」

「うん、アレは？」

「ええと……」

……嘘を吐く時は、少しの真実を混ぜるとバレ難いという説がある。元々、嘘を吐く事が得意では無い石上である。その説自体は知っていても、適度な嘘と真実の配分というモノを熟知してはいなかった。

「も、妄想ポエム……みたいなの？」

「……妄想ポエム？」

石上はよりにもよって、妄想という真実を混ぜた嘘をついた。

「は、はいっ……自分に彼氏が出来た時を妄想して、その瞬間の気持ちをポエムとしてノートに書き綴ってるらしいですよ……？」

（……あれ？　なんか、ナマ先輩がやべえポエマー女みたいな人物像になって来た様な気が……）

「そうだったんだ……あ、だから会計君の事を石上編集って呼んでるの？」

「そ、そうなんですよー！　偶々ノートの中身を見ちゃって……それから感想とかアドバイスを求められる様になっただけなんです！」

（すいません、ナマ先輩！　でも同級生<sup>ナ</sup>に<sup>マ</sup>対する妄想<sup>モ</sup>がバレるくらいなら、妄想ポエム書いてるって言った方がまだダメージは少ない筈なんです!!）

どちらにせよ、やべー奴である事に変わりは無い。

「へー、そうだったんだあ……」

（うーわっ、紀さんでそういう……）

早坂のかれんに対する警戒度は下がったが、同時に人としての評価も下がった。

……

「

「あ、かれん。こんな所で何してるの？」

「

「ん？ かれーん？」ツツツ

本日の勝敗、かれんの敗北

激ヤバ妄想女の汚名は回避したが、妄想ポエマー女の汚名を被る事になった為。

## 早坂愛は話したい

感想ありがとうございます（・ω・）

## 〈中庭〉

生徒会が解散し選挙期間に入った事で、早坂には少しばかりの自由時間が出来ていた。かぐやが弓道部に参加している時間を利用し、早坂は石上にある愚痴をぶち撒ける……

「ハハハ、インターネットが壊れたとか……この現代社会に、そんな化石みたいな事を言う人が居るんですね。」

「ねー！ ホントそう思う！」

主である四宮かぐやの失態をぼかして伝える早坂。但しあくまで友達の失敗談の様に話す事には注意しつつ、石上からの賛同を得る事で僅かではあるが主に対する日頃の鬱憤を晴らしていた。

「田舎の駄菓子屋やつてるお爺ちゃんとか、そんな感じの事言いそうですよね。」  
聞き手に徹する石上も……まさか、尊敬している四宮かぐやにそんなアホな部分があるとは思わず、普通にデイスっていた。

「メッチャわかるー！ 他にもね？ T w i t t e ○ ア ク 禁 に さ れ た と か バ カ み た い に 騒 い だ り、夏休みに遊びの誘いを自分からはせずに相手任せにしたり、不甲斐無い自分が悪いのに私に八つ当たりして来たりするんだよ!？」

「なんか……面倒臭そうな人ですね、その人。遊びたいなら、自分から誘えばいいじゃないですか。待ってるだけの人間にチャンスはやって来ませんし、自分の不甲斐無さを他人の所為にするのは狭量という他ありませんね。」

「会計君、良い事言うー！」

何はともあれ、早坂愛にとって……石上優との時間は、少なからざる意味を持つ様になっていた。

## 〈中庭〉

「石上編集……ちょっとよろしいでしょうか？」

「え？ あ、大丈夫ですけど……」

何やら気落ちした雰囲気醸し出すナマ先輩に、中庭のベンチに座る様促される。2人揃って腰を落とすと、ナマ先輩はポツポツと話し始めた……

10分後……

「石上編集、ありがとうございます！ これで次回作のネタには困りませんわ！」  
ぎゅ、ぎゅ

テンションの上がったナマ先輩は、それだけ言うのと走って去って行った。そのままナマ先輩の後ろ姿を眺めていると、後ろから声を掛けられた。

「会計君、ヤホー。」

「あ、早坂先輩。どもっす。」

「紀ちゃんと何話してたの？ ポエム？」

（早坂先輩の口から、ナチュラルにポエムという単語が出て来る様になってしまった……）

「え、ええとですね……」

僕は先程までしていたナマ先輩との遣り取りを思い出した。

……

「実は…… A組の描いた展示品の中に、物凄く上手なかぐや様の絵画が展示されていて……私、美の表現者としての自信を無くしてしまいましたの。」

「……よくもまあ、自分で自分の事を美の表現者と言えますね。」

「最初は負けてなるものですかと、ペアの方そっちのけでかぐや様を描き続けましたが、結局は思う様な絵にはなりませんでした……ああ！私、かぐや様に申し訳が無くてっ……！！」

「ナマ先輩とペアを組まれた人には、申し訳無いと思わないんですか？」

「それからというものの、今の自分に足りないモノは何なのか……模索する日々が続いていますの。」

「良識と自制心でしょうね。」

「最悪……誰が描いたかを突き止めて、絵の描き方を御教授願おうかと思ってまして……」

「……アレ描いたの会長ですよ？」

「言ってー!? 早くー! それをーっ!」ヤギー!

「都合の良い所しか聞いてない……」

……

（念の為黙っておいた方がいいかな……）

「……そうですね、ポエムです。」

「紀ちんて、結構アレなんだね……」

「わ、悪い人じゃないですよ？」

（ナマ先輩の評価下がってそう……ナマ先輩、いつか誤解が解けると良いですね。）  
誤解の原因を作ったのは、石上である。

「そういえば……話は変わりますけど、早坂先輩って美術の授業は藤原先輩と組  
だったんですね。」

「え、なんで知ってるの?」

「あれ? 見てないんですか? 藤原先輩の描いた絵が抽象絵画として、会長の描  
いた絵の隣に展示されてましたよ? 会長の描いた絵と並べると、必然的に比較さ



れる事になるので少し気の毒ですよ。」

「それ……絵を描いた書記ちゃんより、被写体が1番ダメージ受けてる気がするんだけどお……」

生徒会選挙から数日が経ったある日……生徒会室に向かう途中、風紀委員の見回りをしている伊井野と大仏を見掛けた。2人はどうやら、服装違反の生徒を注意している途中らしい……

「今日はタピりたい気分ですわ〜！」

「りよ〜！」

「2人共どうしちゃったんですか!？」

「明らかに風紀を守れてない……」

その服装違反の生徒は、何故かギャル仕様になっているナマ先輩とガチ勢先輩だった。伊井野と大仏は、普段とは違う2人の様子に明らかに困惑している。面

倒臭そうだから隠れていよう……そう思い、曲がり角に隠れて4人を観察していると……

「会計君、どうしたし？」

後ろから早坂先輩に話し掛けられた。

「……アレを見て下さい。」

「ん？」

僕は隠れたまま、視線の先で話している4人を指差した。

「伊井野さ……ミコミコ〜♪」カキ

「ミコミコ!？」

「今日もテンションアゲアゲ？」カキ

「面倒な人達を捕まえちゃったなあ……」

早坂先輩は乗り出していた身を引くと、壁に凭れ掛かり一言呟いた。

「わあ、絶対面倒臭いやつ……」

「僕もそう思ったんで、とりあえず隠れてるんですよ。」

「OK、把握したし。」

厄介事から隠れている僕達に気付く事も無く、4人の会話は続いている。

……

「ぱりぴですわ〜♪」

「いえーい！」

「こぼちゃん！本当にこの2人どうしちゃったの!？」

「いつもおかしい人達だけど、今日は特におかしいね……誰かの影響受けちゃった感じかなあ？」

……

「確かに……影響受けてますね。」やぶ

「え？アレって私の影響なの？」

「所謂双子コーデ……いや、早坂先輩入れて三つ子コーデってトコですか。」

「私を巻き込むなし！」

……

「バカみたいな格好と喋り方して……秀知院の生徒として、恥ずかしくないんですか!？」

「実はとても恥ずかしい……」フ。ル。フ。ル

「早坂さんの凄さがよくわかりますわ……」フ。ル。フ。ル

「恥ずかしいならやめればいいのに……」

……

「ははは、先輩言われてますよ？」

「……会計君、今度ケツバットね。」

「え」

……

「ミコちゃん、そろそろ……」

「ハッ!? 私達は風紀委員の見回りがあるので失礼します!」

「ああ! もう少しだけ、生徒会室の会長とかぐや様のご様子をっ……!!」

「もう少しだけ、かぐや様の日常をっ……!!」

「知りません! こばちゃん、行こ!」タタタ

「うん。先輩方、奇行は程々をお願いします。」タタ

「逃げられましたわあ……」アタタ

「はあ……生徒会室のかぐや様を知るチャンスだったのに……ってあれ？」  
アキ

「……じゃ僕、これから生徒会なんで。」

「ハイホーイ。」  
アキ

「……」

「……」

「あ、紀ちゃんと巨瀬ちゃん、今日はなんかキメキメだね？ どうしたし？」

「いえ、そんな事より……」

「うん、早坂さんて会計君と仲良かったんだね？」

「みたいですよわねー？」

「あはは、別にそういう訳じゃ無いし。」

「あ、そうなんだ。」

「エリカはチョロ過ぎですよ!? そんな訳無いでしょう！ 普段から男性の方と関  
わりの無い早坂さんです、何かあるに決まっていますわ！」  
アキ

（そして、その何かの内容が会長×かぐや様シチュに転用出来るかどうか是非知り

たいですわ！）

かれんは創作活動に貪欲だった。

「何かってなんだし？」

「そんなの決まってるでしょう!? 会長とかぐや様の様に、激甘な遣り取りやふれあいがあったんじゃないですか!? 早坂さん、白状した方がよろしいですわよ！」  
ハハハ

激甘な遣り取りもふれあいも、かれんの妄想である。

「もー、紀ちんてば冗談はポエムだけにするし！」

「

「……ポエム？」

「あ、私この後用事あったんだった！ 2人共、またねー！」タタタ

「

「ねえかれん、ポエムって何？」

「

「かれーん？ ポエムって何の事ー？」 エサエサ

本日の勝敗、かれんの敗北

とんでもないクロスカウンターを喰らった為。

新生徒会が発足し、1週間が経過した。毎日の様に生徒会室で繰り広げられるイベントは枚挙に暇がない。つい先日、生徒会室では大人気少女漫画である今日あま旋風が巻き起こった。その威力は、普段は一切漫画を読まない四宮かぐやに……

ああーっ！ 私もこんな恋がしたいわー！

とまで言わしめ、感動の涙を流させた程である。

「……っ！」  
タタタ

そして……此処にも1人、今日あまにハマりまくった少女が居た。

私、巨瀬エリカ！ 秀知院学園に通うごくごく普通の高校2年生！ この学園には、四宮かぐや様っていう天女様が居て、私は毎日親友のかれんとかぐや様の美しさについて語り合ってるの。今日もかぐや様の尊さをかれんと共有しようと探して

いるんだけど……

「エリカ、おはようございます。」

「かれん？　なんか今日、雰囲気おかしくない？」

「その言葉、そっくりそのままお返ししますわ……あら石上会計、おはようございます。」

「あ、おはようございます……」

「あ、会計君、おはよう。」ヤミザ

「す……ん？　なんか……今日のガチ勢先輩、いつもと雰囲気違うんですか？」

「もう！　何よガチ勢先輩って！　私には巨瀬エリカっていうちゃんとした名前があるんだからね！」

（でも……私の事をそう呼ぶのって、会計君だけなんだよね……会計君、もしかして私の事!?!）

少女漫画に毒された思考は、石上を巻き込み明後日の方向へ向かおうとしていたが……

「もしかして……先輩まで頭ナマ先輩になっちゃったんですか？」



石上には通じなかった。

「石上会計、刺しますわよ？」

「さーせん。」

「頭？ ナマ？ それってどういう意味なの？」

「わかりやすく言うんですね、類義語に頭藤原先輩という言葉があります。」

「それ絶対良い意味じゃ無いじゃん！」くあっ！

「あ、元に戻りましたわね。」

「それで……なんで、ナマ先輩みたいになってたんですか？」

「……石上会計には、普段の私があんな風に見えてるんですの？」

「実は、今日あまっっていう少女漫画を読んでテンション上がっちゃって……」

「ああ、そういう……僕も読みましたよ。アレ、面白いですよね。」

「そうなの！ もうメチャクチャ感動しちゃって！」

「わかります。タイトル回収した時のシーンとか特に感動しましたし……」

「確かに、あのシーンにはうるっとしましたわ！」

……

石上達3人が今日あまについて語り合っている一方、それを隠れて眺めている少女が1人……

「……」カカカ

(……私も今日あま漫画読んだばかりだし、ギャルだから混ざってもおかしくないよね？ 語ってもおかしくないよね？)

本日の勝敗、早坂の勝利☆

混ざって語れた為♪

石上優は聞けない

感想ありがとうございます（・ω・）

3期は4月8日24時からですね（。▽。）

〈四宮邸〉

「……かぐや様、この惨状はどういう事ですか？」

使用人としての仕事を終わらせてかぐや様の寝室を訪れると、部屋は酷く散らかっていた……私は部屋を散らかした張本人に、理由を問い質す。

「無いの……」

「はい？」

「……ベルマークが無いの！」

詳しく話を聞くと、伊井野<sup>監査</sup>さんの提案でベルマークを各自集める事になったらし

い。最初は監査ちゃんの提案を否定したかぐや様だったが、書記ちゃんや会長さん

から慈善活動の精神性について説かれ、落ちた自身の評価を挽回する為にベルマークを探していたという事らしい。

「なるほど、それでベルマークですか。まあ四宮邸にあるのは海外製品ばかりですからね、仕方ないですよ。」

「うううっ、一体どうすれば……このままじゃ、また会長の私に対する評価が落ちて……」

「そんな事じゃ落ちないと思いますが……まあ会長さんみたいな一般家庭には、それこそ山程あるでしょうが……あっ。」

「どうかしたの、早坂？」

「いえ、少々思い当たる所が……」

会長さんの様に、ベルマークが家にあっても不思議じゃない一般家庭……ふと一人の人間に思い当たった。私はスマホを取り出すと、トーク画面を開きメッセージを送つ……ろうとした所で思い止まる。メッセージを送ろうとした相手は、かぐや様と同じ生徒会に所属している男子だ。生徒会でベルマークが話題に出て直ぐに私がベルマークが欲しいなどと言ってしまえば、かぐや様と私の関係性に気付かれる

かもしれない……私はスマホの電源を切ると、かぐや様を自室へと案内した。

……

部屋に入ると、少し埃を被った箱を取り出して開ける。……小等部時代の宝物ボックスだ。玩具の指輪やネックレスを隅に転がすと、へれんらくちよう」と表記されたノートを取り出した。

「……早坂、それは？」

「子供の頃の宝物ボックスです。」

暫し思い出に耽る様にじっとノートを見つめる……仕事で忙しい母が寂しがり屋な私に残してくれていた書き置き。これがあったから、母とあまり会えなくても悲しくはなかった……小さい頃の子供らしい思い出話、それをかぐや様に話しながらハサミを手取る。

「この連絡帳にもベルマークは付いています。10冊程あるので10点には……」

「駄目よ、宝物なんでしょ……？ そんな思い出の品にハサミを入れる事なんて出来ないわ……」

「……」

全くかぐや様は……普段は私の予定や考えなんて考慮しないのに、こういう時はちゃんと私の心情を慮ってくれる。

「……構いません。かぐや様は私にとって、主人である前に妹みたいなモノなんですから……姉に遠慮なんていりません。」

「は、早坂……」カハッ

チヨキチヨキとベルマーク部分を切り取ると、封筒に入れてかぐや様へと渡す。

「あ、ありがとう、早坂……」

「……良かったですね、これで会長さんの役に立てますよ。」

「ほ、本当!? これで会長から、使えない女だ……とか言われずに済む!？」

「だから、会長さんはそういう事言わないでしょ。そもその話、かぐや様はそんな事を言う人を好きになったんですか? 違いますよね?」

「べ、別に好きとかじゃ無いから!」くわっ!

「……」

「わ、私はただ……副会長として、他の役員よりも結果を求められる立場に居るから焦ってただけで……もう、早坂ったら! 藤原さんみたいな事言わないでよ

！」

「……は？」と。ギョ

普段から藤原<sup>対象</sup>に煮湯を飲まされている早坂である。例えそれが無かったとしても、態々幼い頃の思い出が詰まったノートにハサミまで入れたのに、藤原<sup>IQ3</sup>と同列扱いをされるのは噴飯ものであり腹立たしい事この上無いのである。

「全く、馬鹿な事ばかり言っていて……」

「……失礼しました。そうですね、例えかぐや様が会長さんの事を好きだったとしても……向こうもそうだとはい限りませんからね。」

「な、何を言ってるの？ 貴女の告白を断った時に会長も言ってたじゃない！ 好きな人がいるって！」

「ええ、確かに言っていましたね。」

ごめん……

俺、好きな人がいるから。

「それがかぐや様だとは……一言も言っていないでしたけど。」

「」

「でも別に問題ありませんよね？ かぐや様は副会長として会長さんの期待に応えたいだけですもんね？ 副会長として支えたいとは思っていても、恋人として支えたい訳じゃ無いんですよ？ まあその役目は、かぐや様よりも気立てが良くて優しい女性が担う事になるんでしょうけど……」

「……なんでそんな事を言うの？」じわっ

「あーはいはい、もう言いませんから。はあ……泣くくらいなら、好きじゃないとか言わなきゃいいの……」

本日の勝敗、早坂の負け

なんだかんだで、かぐやには甘かった為。

### 〈生徒会室〉

生徒会長選挙から1週間が経過した。来月になれば体育祭に向けた準備が本格化するし、それが終われば期末テストや奉心祭の準備に追われる事になる。だが、



今の僕が抱えている懸念事項は別にあつた。それは……

「四宮先輩、体調は大丈夫ですか？」

「え？ ええ、特に問題無いけど……どうして？」

「あーいえ、問題無いならいいです。」

「？」

「……」

（四宮先輩が生徒会室で倒れる事になるの……そろそろだった様な気がするんだよなあ。具体的な日付けは覚えてないけど、時期的にそろそろだった様な気が……）

数日後の放課後……そう懸念していた通り、四宮先輩は倒れて病院へと運ばれた。

……

四宮先輩が病院へと運ばれた次の日……僕はある事について頭を悩ませていた。

それは……

「早坂先輩に聞ければなあ……」

早坂先輩は四宮先輩のお付きらしいから、四宮先輩が本当に大丈夫かどうかを知っている筈だ。でも、聞いてしまったら……なんで早坂先輩が四宮先輩のお付き

だって事を僕が知ってるんだって話になってしまいうし、もし聞いて早坂先輩に気味悪がられたら……そう思うと中々行動に移す勇気が出ない。

「……」

聞くべきか、聞かざるべきかに頭を悩ませながら歩いていると、ベンチに腰掛けて話すナマ先輩とガチ勢先輩を見掛けた。2人は此方には気付いていない様子で、話を続けている。

「うう、かぐや様が無事で良かった……」*グズグズ*

「登校前にかぐや様の回復祈願をした甲斐がありましたわね。」*サザンサザン*

「無力な私達には、祈る事しか出来ないから……」

「私……初めて賽銭箱に財布の中身を全部ぶち撒ける光景を目の当たりにしましたわ。」

「そう言うかれんだって、滅茶苦茶真剣に祈ってたじゃない！」

「当然です！もしかぐや様に何かあれば、会長の闇堕ちは必至……私はハッピーエンド以外は解釈違いなんです！」くあっ！

「でも、どういう理由で倒れたんだろ……もしかして、持病の病気があったりする

んじゃ……」

心配無い、綺麗で健康な心臓をしている。

「私達が気を揉んでも仕方ありませんわ。それに、どんな困難があろうとも……かぐや様には会長が付いていますから！」

（この困難を機に、2人の距離感もより一層縮まる事になるでしょうし！）  
それが原因で運ばれている。

「……」

（この人達って2人っきりだとこんな会話をしてたのか、発言を戒めるツツコミ役が居ないからボケとボケがセッションしてる様にしか見えない……）

酷い言われ様である。

「あ、会計君！」

「あら、石上会計。」

「どもっす、四宮先輩の話ですか？」

「あら、聞いてましたのね。ええ、とても心配して……登校前にエリカと一緒にかぐや様の回復祈願もしましたし、大丈夫とは思ってるんですけど……」

「かぐや様が登校されてなかったら、明日もやるつもりだったしね。」

「……お詣りするくらいなら、お見舞いに行けば良いんじゃない？」

「お見舞い!? したいに決まってるでしょ! 行きたいに決まってるでしょ!?! でもっ……! かぐや様を見ると尊さが溢れ出しちゃって、頭がぐわんぐわんするの

!!」

「……ガチ勢先輩って、もしかしてそっちの方なんですか?」

「そっち?」

「あー……いや、なんでもないです。」

「石上会計は考え過ぎですわ。エリカは別に、かぐや様に対して恋慕の情がある訳では……」

無い、と言い切ろうとしたかれんだったが……

……

〈1学期某日〉

「ご覧になって!」

「白銀会長とかぐや様ですわ!……ああ、会長にだったら私……」

「私のかぐや様でも……」<sup>サ。</sup>

「

(……え?)

私のかぐや様でも……

私のかぐや様でも……

私のかぐや様でも……

「……え?」

……

「いや、んー?……無いとは言いませんが、概ね大丈夫ですので!」  
普段から隣で見ている巨瀬<sup>かぐやガチ勢</sup>エリカの言動を思い出した為、踏み止まった。

「そこは言い切って欲しかったですね……」

「何の話かわからないけど……とりあえず、エアかぐや様と一緒に居ても平気になつたら考えるわ!」

「なんですか、エア四宮先輩って?」

「ほら、此処に居るでしょ?」

そう言うとかチ勢先輩は、何も無い隣の空間を両手で覆う様に動かし始めた。これは……救急車を呼ばないとダメか？

「はわあっ!? す、すみません、かぐや様……私ったら、幻だからってつい馴れ馴れしく……」

「救急車呼びますね。」

「私が救急隊員に説明する羽目になりますので、それだけはやめて下さい！」

数日後、四宮邸……

「……で、どうして逃げ出しちゃったんですか？」

「私だって逃げたくて逃げてる訳じゃないのよ！ でも……っ!! 会長の顔を見ると、体育倉庫の件を思い出しちゃって……頭がぐわんぐわんするの!!」

「あー……」

「……多分脳の病気よ、血栓とか出来たらどうしよう……」

「心臓病の次は頭の病気ですか。まあ、図らずも正解に近付いてはいますが……」  
かぐやがルーティーンを獲得する……3日前の出来事である。

## 早坂愛は解消したい

感想ありがとうございます（▽。▽。）

「はあ、やっと終わった……」

秋の目玉イベントである体育祭も無事に終わったある日の午後……振り分けられた場所の掃除が終わり教室に戻る途中だった私は、両手にアイスクリームを持って佇む巨瀬さんを見掛けた。

「あれ？ 巨瀬ちゃん、何してんの？」

「あ、早坂さん。かれんがアイスクリーム食べたいって言うから買って来たのに、ゴミ捨てから全然戻って来ないの。」

「へー、何してるんだらうね？」

……

〈校舎裏〉



「ゴミ捨て完了ですわ！」ハッハッ

私はクラスから持つて来たゴミ袋をゴミ捨て場に投げ入れると、パンパンと手を叩いて埃を払います。

「エリカに頼んだアイスクリーム、楽しみですわ！ はぁ……それはそうと、今日はあまり会長とかぐや様をお見掛けしませんでしたわね……」

私はエリカの所に戻ろうと踵を返すと……

「四宮って綺麗だよな。」

「」

（っ！！?!?!?!）

1枚の窓を隔てた廊下を、会長とかぐや様が並んで歩いている光景が目には飛び込んで来ました。あまつさえ、私の妄想の様なセリフを会長がかぐや様に仰っている場面を見て私は……いえ大丈夫、わかってますわ。きつとただの聞き間違いでしょう。私ったらエリカにも散々言われていますのに、現実と妄想の区別くらいはつけないてはいけませんわね……

「皆が言ってる事だ、四宮は美人だって。」

「っ！！！！」

(言<sup>現</sup>つて<sup>実</sup>る!!)

.....

「このままじゃ溶けちゃうから、早坂さんにあげる。」

「え、いいの？ ありがとー！ 丁度甘い物食べたかったんだよね。」

「じゃあ私、かれんを探しに行くね。」

「うん、ありがとね。」<sup>エラッ</sup>

溶ける前にさっさと食べてしまおう、そう思い口を開けた時……

「早坂！ 早坂！」<sup>タタッ</sup>

「え？」

「ねえねえねえねえねえ!!」<sup>タタッ</sup>

「」<sup>ハッ</sup>

駆け寄って来たかぐや様に抱き付かれ、その衝撃でアイスクリームが頬へとへばり付いた。

「……」

「早坂！ 今日は何の日だと思う？」

かぐや様は目の前の惨状を一切気にする事無く、嬉しそうにそう聞いて来た……

「知らないです……何の日なんですか？」

「今日はね……とっても良い日なのよ！」

「そうですか、私にとってもそうだったら良かったのに……」

……

「はあ……やっと終わった。ゴミ捨て場、地味に遠いんだよな……」

ゴミ捨ての面倒臭さを愚痴りながら歩いていると、前方からスキップをしながらやってくる女子生徒が見えた。いや、アレは……

「~~~~♪」

それは上機嫌な様子で、鼻歌を歌いながらスキップをする四宮先輩だった。

「あら、石上君。ゴミ捨ての帰り？ お疲れ様。」

「四宮先輩、お疲れっす。なんか機嫌良さそうですね、何か良い事でもあったんですか？」

「……石上君、今日が何の日かわかる？」

「え、なんかの記念日ですか？」

「今日はね……とっても良い日なのよ！」

「……はい？」

「ふふ♪石上君また後でね！」

四宮先輩は軽やかなステップを踏みながら、校舎へと戻って行った……良い事があつたのならないか、そう思い直して振り返ると……

「……」

「……うわっ、早坂先輩!? 口がチョコ塗れですけど、どうしたんですか!？」

「……会計君、今日が何の日かわかる？」

「え……と、とっても良い日ですか？」

「……それ、本気で言ってる？」

「すいません、絶対違いますよね!ち、ちなみに、何の日か聞いても……?」

「……今日はね、ストレス解消の日なの……付き合ってくれるよね?」  
「フギギ

「い、行きまーす!」

瞳孔が開いた眼で、早坂先輩は口元を拭いながら淡々とそう言った……間違い無

い、滅茶苦茶ストレスが溜まっている……僕は何処に付き合うのかを確認する事さえせずに了承する。聞かなくてもわかる……こうなった状態の早坂先輩が行く場所は1つしか無いのだから。

〈バツテイングセンター〉

「……ヒタスラ！」ギョー、ギョー、

「……」

「……ヒタスラ！」ギョー、ギョー、

「……」

(只管無言で打ちまくってる……よくわからないけど、滅茶苦茶大変そう……)

本日の勝敗、早坂の負け

かぐやにとっては良い日だったが、早坂にとってはそうじゃなかった為。

〈カラオケ店〉

「それでは、交流会の方を始めさせて頂きます！今日は飲んで歌って無礼講でいきましょー!!」

「「イエーイ!!」」

幹事の挨拶を皮切りに、ワイワイとした雰囲気が漂う部屋に……私は居た。

「……」  
「……」

（なんで私がこんな目に……それもこれも、かぐや様があんな事を言い出さなければ……）

私は不機嫌な雰囲気隠す事もせず、どうしてこんな所に来る羽目になったのかを思い出した……

……

〈2年教室前〉

「白銀、今日は生徒会もバイトも無いんだろ？カラオケ行かね？」

かぐや様と教室に残っていると、その前を会長とその友人2名が話しながら通り過ぎて行く。どうやら普段は忙しい会長を遊びに誘っているらしいが、会話の中に出た交流会という単語が引っ掛かった。多分アレは……

「まあ、いつも誘いを断ってばかりだから……いいよ。」

「よしてきた！」

「何時にどこ？」

「4時に駅前のカラパラ。」

会長達は扉越しに聞き耳を立てられているとも知らずに、そのまま通り過ぎて行った。

「……かぐや様、いいんですか？」

「偶の休みに、友達と遊ぶのを憚る理由なんてありませんよ。」

どうやらかぐや様は、交流会の意味に気付いていないみたいだ。その証拠に……私は束縛しない女ですし、とかトンチンカンな事を言っている。いや、絶対束縛しますよね？ 私はその言葉を飲み込む代わりに、交流会について教えてあげる事にした。

「あれ多分合コンですよ？」

「絶対止めなきゃじゃない!! 合コンってアレでしょ!! 男女が番を求め<sup>つがい</sup>て乳繰り合う盛り場の事でしょう!!」

（偏見が凄い……）

「うーん……説明が面倒なので補足や訂正はしません、そうです。」

「そんな集まりに会長が……」

「まあ本人は気付いてないっぽいですけど。」

「ああっ……！ い、一体どうしたら!?」

「……」

（まあ会長の事だから、例え他校の女子に言い寄られたとしても毅然とした態度で接しそうだけど……なんてったって、私をフツたくらいなんだし！）

早坂の中には、未だに白銀に対するわだかまりが残っていた。

「かぐや様も、お目付け役として参加して来たらどうですか？」

「イヤよ！ そんな性欲にまみれた男の群れに私を放り込むって言うの!? この薄情者!!」

「……そうですね、すみません。」

この案は無しか……まあかぐや様をその様な集まりに参加させたと本家の人間に知られたら、近侍<sup>私</sup>の責任問題になってしまう……



「あ、何も私が直接行く必要も無いのよね。」ぐぐ

かぐや様はそう言うと、私をじっと見つめて来た。……あ、絶対面倒な事になるやつだコレ。

……

「はあ……」

（ちゃんと訂正しておけば良かった……こんな性欲にまみれた男の群れに私を来させるなんて……かぐや様の薄情者！こうなったら……）

「なんか暗いね、どうしたのー？ 友達が急に来れなくなったとか？」

「別に……どうだっていいでしょ。」

馴れ馴れしく話し掛けて来る会長の友人に答えながら作戦を練る。会長は私に直ぐに気付いた様で、居心地が悪そうにしている。

「ハーサカさん……だよな？」

「あっ、白銀と知り合いなの？ なあ白銀、紹介してくれよ！」

「いや、知り合いついていうか何というか……」

「はあ……言えばいいじゃん、昔こっぴどくつった女だって。」

「」

「えっ!? あ、ああ、そういう……白銀、俺あっち行くわ……」

「っ!?」

私の発言によって、気まずい空気が立ち込める……居た堪れなくなった会長の友人は、気まずさを隠す事も無くそそくさと逃げ出した。

「ごめん……やっぱり気まずいよね、フった女が居る会なんて。でも……」ヤム

セ

（とりあえず、ゴリゴリに罪悪感を感じてもらってさっさと帰ってもらおう。……っていうか、会長さんが合コンになんて来なければ、私も今日の放課後はフリーだったのに！　そもその話……本気じゃなかったとはいえ、私の告白に対して即答で断るなんて失礼過ぎるんじゃないの？　本当に会長この人って女子に人気あるの？　私だったら、もっと別の……）

早坂の口撃に私情が挟まり始めた。

「私も君の傍にいるの……つらいよ。」ムッ

（私の愚痴をちゃんと聞いてくれたり、ストレス解消に文句も言わずに付き合っ

くれる人とか……)

「……ッ」*ググ*

(心が……心が痛い!!)

「すぐくつらいよ……ッ」*ググ*

(私の事をちゃんとわかってくれる人とか……)

「ごめん……」*ググググ*

「あーつらい……ッ」*グ*

(私はそういう人を好きになると思うから、私をフったからって調子に乗らないで欲しいんだけど!)

早坂の口撃の内訳が10:0で私情になった。

「ホントごめん……」*ググググ*

(俺は……俺はなんて事をっ……)

本日の勝敗、白銀の敗北

ゴリゴリに罪悪感を感じた為。

## 早坂愛は撮りたい

感想ありがとうございます（・ω・）

---

その日は珍しく生徒会は休みだった。会長にバイトの予定が無かったら、遊びに誘おうと思っていたんだけど……会長は他校の生徒との交流会に参加するらしい。他校の生徒との交流会……何故か合コンみたいな印象を受ける言葉だけど、会長がそんな集まりに行くとは思えないし、普通に真面目な感じの会なんだろうな。

紛<sup>まじ</sup>う事なき合コンである。

早く家に帰っても勉強かゲームくらいしかやる事が無いし、折角だからゲームショップや本屋でも行くかと無理矢理予定を立てた僕は街へと繰り出した。

……

「……………ん、もうこんな時間か。」

スマホで時間を確認すると、随分と時間が経っていた様だ。ゲームショップ巡り

が終わり、古本屋で何か掘り出し物でもないかと立ち読みを繰り返していたら、外はもう真っ暗だった。もうそろそろ帰るか……：そう思いスマホをポケットに仕舞おうとすると、スマホがメッセージの着信を伝えて来た。

「……?」

メッセージの送り主は早坂先輩、そしてその本文は……

〈助けて〉

そのメッセージと共に送られて来たのは、早坂先輩の居場所を示す位置情報だけだった。僕は素早く手に持っていた本を棚に戻すと、タクシーを拾って急いでその場所へと向かった。

……

「早坂先輩！ 大丈夫ですか!？」

「か、会計君……」

早坂先輩はカラオケ屋の前に配置されているベンチに座り込んでおり、一目見てわかる程憔悴し切っていた。

「大丈夫ですか!? 一体何が……」

「なまこがっ……なまこの内臓が……」ハッハッ

「ん？ え……はい？」

「耳…壊れ……なまこ……」ハッハッ

「……本当に大丈夫ですか？」

「ううっ…もう帰る……」

「ええ……あ、じゃあ送って行きます。」

「うん……」

なまこの内臓という謎の言葉を繰り返す早坂に肩を貸し、タクシーへと乗り込んだ。後部座席に早坂先輩を寝かせて助手席に座ると、タクシーはゆっくりと速度を上げていく。ふとバックミラーに視線を向けると、先程のカラオケ店が見えた……僕は何か故か、そのカラオケ店から目が離せなかった……

〈カラオケ店〉

〈~~~~~♪〉

「……ん？ なんて白銀<sup>アイツ</sup>は1人で歌ってんの？」

「さあ？」

.....

〈四宮邸〉

「早坂、随分と遅かったじゃない？」

「色々あったんです……」*ツツ*

「……どうしてそんなに疲れ果てた顔をしているの？ ちゃんと他の女から会長をガード出来たんでしょうね？」

「……ご心配無く、私が身体を張<sup>使</sup>って合コンから抜け出させましたから……」

「え？ 身体を使って……？ は、早坂！ 貴女、会長と何しっ……」

「会長、滅茶苦茶下手くそでした……」

「何が!? 何が下手だったの!?」

「下手なのに、声は凄<sup>ア</sup>く大きくて……」

「アレ!? アレって何の事!?」

「私、（耳が）壊れちゃうかと思いました……」

「壊れっ!?」

「すみません、かぐや様……今日はもうこれで休ませて頂きます……」*END*

「ち、ちょっと早坂!? 下手って何の話なの!? アレって何!? ……ねえ! 早坂ったら!!」

本日の勝敗、かぐやの敗北

次の日に詳細な説明を受けるまで、悶々とした時間を過ごす事になった為。

数日後……未だ脳内にこびり付いたなまこ不快な残響の内臓に頭を悩まされていると……

「はあ、ホント酷い目に遭ったし。カラオケなんてもう絶対……ん?」

ピコンという電子音がポケットから聞こえて来た。私はスマホのトーク画面を開くとメッセージを確認する。その相手は……

〈マスメディア部〉

「緊急会議ですわ!」

「……今度はどうしたし?」

「つい先日、会長が合コンに参加されたという情報を入手しました。しかも! 会



長はその合コンで……女子と2人で抜け出したらしいんです!!」

「へえー……」

更に頭を悩ませる事になりそうだと早坂は思った。

「あ……そういえば昨日、風祭君達が自慢しに来てたね?」

「……ええ、エリカの言いたい事はわかってますわ……会長を合コンに参加させた大罪人の処遇は、後程決めますので!」くわっ!

「いや、別にそういうつもりで話題にした訳じゃなかったんだけど……」

「あと……コレは未確認の情報ですが、その女性は会長と2人で合コンを抜け出した後、何故か居合わせた石上会計にお持ち帰りされたとか……」

「別にお持ち帰りなんてされてないし!」くわっ!

「……どうして、早坂さんが怒るんです?」

「あ……ほ、ほらっ、会計君はそんなタイプじゃ無いし? みたいな?」

「まあ確かに……どちらかと言えば、件の女性くだんが石上会計を誑かした可能性の方が高いですわね……」

「それも無いんじゃないかなあ……」

「私もそう思う……」

「なんでもその女性はい前、会長にこっぴどくつられたとの事。会長の事が忘れられなかった……という気持ちもわからなくはないですが、だからと言ってしつこく付き纏って良い理由にはなりません!! しかも、再度会長につられて直ぐに石上会計に走るなんてとんだ尻軽女ですわ!」

「……」

「つられてしまったのだって、そういった内面を会長に見透かされていたからでしょうし……そもそもの話、会長×かぐや様の尊さに勝てる訳が……」

「……」  
「わー」

「は、早ひやかひゃん? なんへほっへを……?」

「別に?」  
「別に」

〈中庭〉

「ふぁっ……」

「先輩、寝不足ですか？」

昼休み……中庭を通り掛かると、ベンチに座って眠そうに欠伸をする早坂先輩を見掛けた。

「あー、見られちゃったね……うん、昨日紀ちゃんと巨瀬ちゃんの2人とラインしてたんだけど、いつまで経ってもかぐや様かぐや様、会長会長って……」

「うーわっ、それは面倒っ……大変でしたね。」

「あはは、本音漏れてるし。まあでも、人間関係ってこういう些細なやり取りが大事だしね。」

「僕だったら、スタンプ1個でテキストに終わらせちゃいそうです。」

「あはは、会計君酷い！」

まんまその対応をしている。

「相手するのが面倒なら、botを使うという手もありますけどね……」

「bot？」

「特定の言葉に反応して、設定した言葉をコメントしてくれる機能みたいなモノで

す。例えば、ガチ勢先輩の場合は四宮先輩かぐや様って単語が出たら、botが同意する言葉で自動で返信する様にしておけば良いんじゃないですか？早坂先輩ならへわかるゝ！ゝって感じで……あの2人ならそういう知識は薄そうですし、騙されてくれそつ……」

「会計君！」ガッパ

「すいません！流石に先輩達の事、蔑ろにし過ぎですよ！今言った事は忘れっ……」

「そのbotについて詳しく教えて！」

「ええ……」

「……私って、こう見えてメチャクチャ忙しいんだよね。あんな常軌を逸したどうでもいい長文に付き合う程暇じゃないし。」

「ついさっき、人間関係はこういう些細なやり取りが大事だとか言ってませんでした？」

……

同日深夜……

へこんばんわ、早坂さん！今日もかぐや様は天界から降り立った天女の如き麗しさだったわ！そして、そんなかぐや様を見るだけで私は幸せな気持ちでいっぱいになるの！それでちょっと調べてみたんだけど、この幸せな気持ちは幸せホルモンと呼ばれているオキシトシンが関係してゐるらしいの！ただ其処に存在してゐるだけで周囲の人間を幸せにするなんて、かぐや様はなんて尊くて素晴らしい方なんだと再認識したと同時に、オキシトシンなんて呼び名じゃなくてカグヤサマトウトシンと呼ぶべきと強く思ったの！その筋の権力者に伝<sup>つて</sup>があれば、そう呼ぶ様に働き掛けるんだけど……早坂さんはどう思う？ゝ

へメツチャわかるゝ！ゝ

へ早坂さんもそう思ってくれてたなんて感激だわ！やっぱりかぐや様の魅力は、他者を惹きつける優雅な何処だと思ふの！あ、かぐや様の魅力が優雅な何処しか無いって意味じゃなくてね？かぐや様の魅力的な何処なんてそれこそ無数にあると思ふし、私達が魅力的だと思つて見てゐる部分は、かぐや様のほんの一部でしか無いと思ふの。私だつてかぐや様の魅力を日々発見する毎日を過ごしてゐるんだもの、かぐや様の魅力的な何処を上げていけばキリが無い……そもその話、かぐや様の

魅力は文章だけでは伝え切れないわ！この前も……〈

「……」

本日の勝敗、早坂の敗北

自分で返信をする必要はなくなったが、通知がうるさ過ぎて結局眠れない夜を過ごす羽目になった為。

# 〈四宮邸〉

「早坂見て！この写真、生徒会の皆で撮ったの！」

かぐや様はそう言うと、新しく買ったばかりのスマホを取り出した。画面には生徒会のメンバー全員が映っており、その中心で屈託無く笑う少女には……かつて、

氷のかぐや姫と揶揄されていた面影は微塵も存在しなかった。

「……良い写真ですね。」

「ふふ、そうでしょう？ 他にもね？ これはさっきの写真の後、藤原さんが女子3人の手でハートを作ろうって言った時の写真で……」

かぐや様は嬉しそうに、その時の説明を加えながら順番に写真を見せてくれた。携帯電話が壊れた所為で、中のデータが消失した事を知ったかぐや様は酷く落ち込んでいたけれど……次々と画面に映し出される写真を見れば、他の生徒会メンバーが保存していた写真を貰ったとわかる。かぐや様が大切にしていた思い出は、他の人達にとっても同じだったという事だ。

「それでこれは、体育祭の時の石上君。応援合戦が終わったばかりだから、私の制服を着たままなの。藤原さんも可愛いって言いながら、ゴメン。ゴメン写真を撮ってたわ。」

「……」

写真を指差し思い出を語るかぐや様を見ながら、ただ漠然と……いいなと思った。

……

## 〈中庭〉

「え？ 写真ですか？」

「そ、イ○スタにデコった写真をアップしようと思ってね。会計君の顔はボカしとくから、協力してくれない？」

「僕で良いんですか？ もっと被写体に向いた人が居るんじゃない……」

「そんな難しく考えないで大丈夫！ じゃ、撮るよ？」

「え、ちよつ、早っ……!!？」

「イエーイ！」うやうや

……

## 〈四宮邸〉

「ふう……」

使用人としての仕事が終わリ自室に引き上げた私は、スマホの写真アルバムに収められた……一枚の写真を表示する。

「……アッ。」

昼休み、イ○スタにデコった写真を載せると嘘をつき、会計君と撮った写真を眺



める。中庭を背景に私と会計君が映っているその写真は、自撮り写真だった所為で2人の距離が微妙に近い印象を受ける。私の隣に映る男の子は、少し緊張しているのか表情が固い……かぐや様が見せてくれた写真でも笑顔の写真は少なかったから、多分苦手なんだと思う……写真を撮る速さに戸惑っていた姿を思い出し、自然と笑みが溢れる。

「……」

初めて撮った、男の子と写った写真……でも、1つだけ気に入らない所があった。

「はあ……」キョッ

ただ、写真の中の私だけが……少しだけ気に入らなかった。それは学園内で生活する際に使用している、演<sup>壇</sup>じている私の姿だったから……

「いつか……」

私もかぐや様みたいに、心から笑える日が来るのだろうか……そんな事を望める資格がある筈が無いのに、その日を夢想しながら……私の意識は深く沈んで行った。

早坂愛は逆らえない

感想ありがとうございます（・ω・）

## へッティングセンター

「フツ　ー……ツツ　ー」カキーン カキーン

11月も終わりに近付き始めたある日……私は待ち人が来るのを快音を響かせながら待っていた。既に待ち人である会計君には、メッセージを送って呼び出している。そろそろ来る筈だけど……

「早坂先輩、今日も飛ばしてますね。」

「あ、会計君やっとなたし。」

「遅れてすいません。結構待ちましたか？」

「んー……まだ3ゲームくらいしかしてないから、そんなに待ってないよ？」

「それなら良かったです。それで、今日はどんな事が原因でストレスが溜まったた

んですか?」

「……………」

(……………あれ?)

「……………先輩?」

ん? あれ? 今日は紀さんや巨瀬さんに捕まってしょうもない話をされた訳でも無いし、かぐや様に無理難題を押し付けられた訳でも無いし、書記ちゃんに任務の妨害をされた訳でも無い……

「……………」

にも関わらず会計君を呼び出したって事は……

「……………!!?」

私は普通に……………ストレス関係無く、会計君と遊ぼうとしてたって事……………?

「……………先輩? どうかしましたか?」

「……………なんでも無いし! ほらほら、今日はホームラン3回打つまで帰さないよ!」

「ハードルが地味に高い!」

「わかってるなら、さっさと打つし!」

「お、オス！」

先程浮かんだ考えから目を逸らし、ホームランを打とうと四苦八苦する男の子を横目で見つめる。私に聞きたい事や確認したい事もある筈なのに、会計君は何も聞いて来ない。

「……」

会計君と会ったあの日、どうして変装をして話し掛けたのか、どうして学校と違うキャラを演じていたのか……彼は何も聞いては来ない。私自身も……会計君のその氣遣いに今まで甘えて来た。文句も言わずに愚痴を聞いてくれて、ストレス発散に付き合ってくれる年下の男の子。そんな彼と関わる内に、私自身も彼との時間を心から楽しむ様になっていた。それはまるで……

「友達、みたい……」

そう言っって良いのなら、そう思っって良いのなら……この子会計君が私の初めて出来た、  
男友達……

いいかい、今日からお前の主人はかぐやだ。言う事をよく聞くように。そして……  
かぐやの信頼を勝ち取り、一挙一動を報告しろ。

かぐやの起こした失敗

興味を示したもの

何をされたら嫌がるか

友人関係

苦手なもの

大事なもの

好きな人

分  
か  
る  
な  
？

失  
い  
た  
く  
な  
い  
も  
の

「……」

10年前の記憶に、自分の罪を自覚させられる……わかってる。私はそんな事を望める立場でも、そんな事が赦される人間でもないんだから……

「……！……」  
「……」

私は鬱屈とした気持ちから目を逸らす様に、無心でバットを振り続けた。



「はー、スッキリしたあ……」

「満足しましたか？」

「ん、まあね……」

ボールを打ちまくり、ストレスを解消し終えた早坂先輩が振り返りながら微笑む。

「じゃ、会計君……帰ろっか。」

いつものギャル仕様では無く、かと言って夏休みに変装していた早坂先輩とも違う。鬱憤を発散して、少し気が緩んだ所為だと思ふけど……帰りを促すこの瞬間、いつもと違う演じていない早坂先輩を見られる事が……少しだけ嬉しかったりする。

「……」

だけど……今日の表情は、今まで見たどの表情とも違っていた。上手く言えないけど、何かに耐えている様な……それがバレない様に取り繕っている様な……そんな雰囲気を感じた。

「……早坂先輩、何かありました？」

「え？ 何かって何だし？」

なんでもない様にギャル口調で答える早坂先輩を見て、それ以上の追及を止める。しつこく聞いても躲されるだろうし、何よりも……僕は早坂先輩に内心を話して貰える程の人間なのか……それがわからなかったから。

「いえ、なんでもないっす。」

愚痴やストレス発散に付き合う関係……僕個人の認識で言えば、それは友人関係と呼んで良いと思う。早坂先輩が僕の事をどう思ってるか、それはわからないけど……そう言っただけなら、そう思っただけなら……早坂先輩と僕は友達だ。だから、これだけは言っておこうと思った。

「ただ……何か悩みがあるなら聞きますからね。」

「……えー？ 悩みなんて別に無いよ？ 会計君たら、いきなりどうしたし？」

「……何となく、早坂先輩が悩んでる気がしたので……」

「……」

「僕の気の所為なら、それで良いんですけどね。」

「そーそ、気の所為だし！ ま、でも折角だから……もし悩み事が出来たら、その時は頼らせてもらおうかな？」

「任せて下さい。こう見えて、会長の相談に乗った事もあるんですよ？」  
「あはは、会計君頼もしい〜！」

会計君と出会い、バッテリーセンターへ呼び出したり愚痴を聞いてもらう度に、私の中で彼の存在が確かなモノになっていく。だけど私は、彼が尊敬しているかぐや様<sup>あの子</sup>を裏切り続けている……私は彼が関わるべき人間じゃ無い……それがわかっていても、彼との時間は居心地が良くて……離れなければいけないのに、切り捨てなければいけないのに……もう少し、あとちょっとだけと自分を誤魔化して、現実から目を背けて来た。平穏な生活が終わるのは、いつだって突然なのに……

仕事を終え自室で寛いていると、ベッドの上に置いていたスマホから着信音が鳴り響いた。

非通知と表示されているスマホ画面を確認すると、私は浅く息を吸って呼吸を整える……この時間帯、私のスマホに非通知で連絡をして来る人間なんて、四宮本家の人間しかない。

「あゝ、俺だ。」

「?！」

スマホ越しに聞こえて来た声に……心臓が慄いた。現四宮家の頂点に君臨する四宮雁庵亡き後……跡取りの最有力派閥と称され、次代の四宮家を担うと目される男、四宮黄光……私の本当の雇い主。

へまあ、そう身構えるな。いつもの定時報告は良い、それよりも……」

「……」

身体が硬直し、小さく喉が鳴った。黄光様自らが直接私に連絡をして来る事なんて、今まで一度も無かった事だ。突然の状況に、心臓の鼓動が早まる……ダメだ、落ち着け、動揺している事を悟られるなど、私は出来る限り冷静になる様に努める。へははは、そんなに緊張するな。軽い雑談でもしようかと思つてな。〳

「……そうでしたか。それで、どの様な事を……」

へいやな、お前は使用人としての仕事もしているし、かぐやのサポートも任せているので、年相応の青春を送れているか心配していたんだ。〵

「……」

有り得ないと思った。四宮家の……それも直系の人間である黄光様が、そんな並みの心配をするなんて事ある筈が無い……警戒心が警報を鳴らし、理性が早く話を終わらせると叫び続ける。

「御配慮頂いて恐縮です。ですが、私には……」

へだが、無用な心配だったみたいだな。〵

「え……？」 〵〵

得体の知れない怪物に、背中を撫でられた様な感覚を覚え……背筋が震えた。

「最近青春しているみたいで何よりだ……年下の男とニ、グングン、ヤダ——」

とは、色気は無いが青春そのものじゃないか？」

「っ!？」

その言葉に……足から力が抜けて蹣跚めいた。壁に何とか手をついて体勢を維持するも……

「……どうした早坂？ 電話越しに動揺の空気が漂って来たぞ？ それではまるで……」

「……ハッ……ハッ……」

心臓の鼓動が早まり、呼吸が浅くなる。私は無駄だとわかっていても、胸に手を取り動揺を抑え付け様と努力する。

「誰にもバレたくなかった秘密がバレたみたいじゃないか？」

「……」

喉を鷲掴みにされた様な息苦しさに襲われ、嫌な汗が背中を伝って行った……

「……別に深い意味は無い。ただな……自分の役目を違えるんじゃないぞ？」

「……はい、勿論です。黄光様から与えられた役目は、しっかりと果たしますっ……！」

へそうか……ははは、わかってるならそれで良い。では……引き続き頼んだぞ。接続が切られた音が耳に響くと、無意識に止めていた呼吸が再開する。

「ハッ…ハッ…ハッ……ハッ…ハッ……」

呼吸が落ち着いて来ると、少しずつ心臓の鼓動も落ち着きを取り戻し始める。あの電話は脅しだ、自分の役目を忘れるなという……もし私が満足に役目を果たせなければ、悪意の矛先があの子へ向く事になるのだろう。

「ここまで……かな。」

……あの子を巻き込む訳にはいかない。あの子との時間は、私が四宮家の使用人だという事を忘れさせてくれる……とても得難い宝物の様な時間だった。でもそれも……もう終わらせる時が来たんだ。

「……ッ」

現実とは思いつりにはいかない……そんな事は分かり切っていた。いつか来るその瞬間が、来ただけの事……頭では理解しているその事実が、どうしようも無い程

に……私の心に突き刺さっていた。



四宮家使用人、早坂愛の素行調査について……

1ヶ月の調査の結果……早坂愛は黄光様からの連絡後、件の男子生徒と一切の接触を絶った事を確認。

学内の素行調査については、Adolphe Pescarolo氏に学園の敷地内に設置されている監視カメラの映像提出を要請すると同時に、聞き取り調査を経て学園内でも接触が無い事を確認。

引き続き調査を行うか否か、判断求む。

## ―早坂愛に関する報告書について―

調査任務ご苦労。早坂愛の調査は打ち切り、〇〇県に居を構える四宮系列会社〇〇に向かう事。此処一年間の経理報告書に齟齬が生じている為、原因究明の捜査をする事が決定した。経営者、若しくはソレに連なる者が着服している可能性がある為、社員として潜入し着服の証拠を掴む事。

尚、期限は6ヶ月とする。

## 早坂愛は守りたい

感想ありがとうございます（「A」）

---

### 〈四宮邸〉

「は、早坂！ 会長から勉強捗ってるかってメッセージが！ な、なんてお返事したら!？」

「落ち着いて下さい、かぐや様。先ずは、それなりに捗っていると送って会話を繋げて下さい。」

「わ、わかったわー！」

「……どうです、既読は付きましたか？」

「そ、そんな直ぐには……あ！ 既読が付いたわ！ ふふ、会長ったら直ぐに既読を付けるなんて、そんなに私からのメッセージが楽しみだったのね！」

「……」

早坂<sup>私</sup>愛は四宮かぐやが可愛い

早坂!! すぐ来て!!

……なんでそんな事を言うの?

今日はね……とっても良い日なのよ!

ち、ちよつと早坂!? 下手って何の話なの!? アレって何!? ……ねえ! 早坂った  
ら!!

プライドが高く不器用で……頭が良いのに頭が悪い

そんなこの子を守ってあげたいと、心から思ってる

四宮の人間たるもの、人を頼ってはいけません

人を使い、人を操り、必要であれば切り捨てなければなりません

気持ちを表情に出してはいけません

礼儀作法の笑みならば兎も角……怒りや悲しみを顔に出してはなりません

泣くなど以ての外です

幼少の頃から、私とかぐや様はそう教育されて育てられて来た。辛くて、苦しくて、メソメソと泣く私とは正反対に……かぐや様は淡々とその教えを吸収して行つた。かぐや様は大概の事は1人で出来てしまうし、私の役目はあくまでサポートに過ぎない。でも……

……

「本日より、身の回りのお世話をさせて頂きます。早坂愛です、よろしくお願い致

します。」

「嬉しいわ！ そうだったら良いのにつてずっと思つてたの！」

「……」

「赤ん坊の頃、私達は一緒に育つたのよ？ 覚えてる？」

「いえ……」

「私はずっと覚えていたわ。よろしくね、早坂。」

「……」

そう笑い掛けてくれたかぐや様を…… 1人で頑張らせる訳にはいかないと思つた。だから私は、必死に教育係の教えを吸収して一人前と言われる程の能力を身に付けた。その事実が……どれだけかぐや様の力になっていたかは、わからないけど……

「……」

「……ご立派です、かぐや様。」

「馬鹿を言わないで。溺れていたのは新聞社局長の娘……恩を売るのは後々得かもしれない、私は私の為に動いただけよ。」

「それでも……あの場で動いたのは、かぐや様だけなのですから。」

……

1年前、高等部に入学して間も無い頃……かぐや様は敷地内にある沼に誤って落ちた新聞社局長の娘を、身体がドブに塗れる事も厭わず助けた事があった。恩を売る為、自分の得になる可能性があったから、そう言つて泥を拭う姿を見て……いつの日か、この子の不器用な優しさが報われる事を願つた。

……

その数ヶ月後、かぐや様が生徒会に入つて1ヵ月が経つた頃……

「……」

「……かぐや様!? リボンなんか付けてどうしたんですか!?!」

「ちよつとした、気分転換のつもりだったんだけど……上手くないわね。」

急に書記ちゃんみたいなりボンを頭に付けたかぐや様を見て、少し驚いたけど……直ぐにかぐや様の意図を理解した私は、リボンを結び直した。

「じゃあ……こういうのとか如何ですか?」

「これで良いわ。私はこういった事には疎いから……早坂、慣れるまで結ぶのお願い

い出来る？」

「……かしこまりました。」

……

何でも1人で出来るかぐや様から、初めて頼られた瞬間だった。その時から、毎朝かぐや様の髪を結ぶのが私の日課になった。成績は全国でもトップクラス、数々の分野で表彰され続けた孤高の天才……そんなかぐや様でも出来ない事やわからない事があるんだと安心したし、頼られる事が嬉しくて、主従関係を越えた発言もする様になった。

かぐや様との大切な思い出が私を長年支えてくれた

だから私は、かぐ<sup>こ</sup>や<sup>の</sup>様<sup>子</sup>を守りたい



たとえ……他の何を犠牲にする事になったとしても

……

「早坂？ どうしたの？」

「……いえ、何でもありませんよ。」

早坂<sup>私</sup>愛は会計君と居ると楽しい

今、残飯処理って言おうとしました？

ええ、嘘お……

ははは、早坂先輩言われてますよ？

え、ちよっ、早っ……!!?

文句も言わず、私の愚痴やストレス解消に付き合ってくれる年下の男の子……

そんな彼との関係が続く事を心から求めていた

ここ数日……会う事を避けていた男の子の姿を思い浮かべる。そういえば……長  
い秀知院生活の中で、後輩と呼べる程親しくなったのはあの子だけだった。それは  
当然と言えば当然で、私の学園生活はかぐや様のサポートが最優先事項……だから

親しくなる前に距離を取り、関係を絶った人間は沢山居た。

.....

「……ふんっ！」  
「グッ、スカッ」

「全然腰が入ってないし！」

転々と転がるボールを一瞥すると、会計君は不思議そうにバットを掲げて見上げた。

「……？」

「コラー！ バットの所為にすんなし！」

.....

「フッ……」

バットを振る事に慣れていないから……最初の頃は全然打てていなかったし、ボールに当たらないのをバットの所為にしていた事思い出し、思わず笑みが溢れた。でも最近は慣れて来たみたいで、スイングも結構様になって来ていた。この前も……

.....

「……はっー」カ—、キス

「あ、惜しい……」

「見ました!? もう少しでホームランでしたよ!」

「うんうん、ちゃんと見てたよー! ホームラン写真撮るのも近いし!」

「今日中に打って見せますから、期待してて下さい!」

……

そう言つて喜ぶ姿は年相応で……あの子のそんな部分を見られる事が嬉しかったし、諦めていた青春を送れている様な気さえして……楽しかった。だからこそ、そんな青春を送らせてくれた会計君を思い出した時の最後の顔が……恐怖や苦痛で歪んだ顔になるなんて、私には耐えられ無い。でも……此処で終わりにすれば、まだ耐えられる。

「終わらせないとね……」

正義感からあいつた事件を起こす人間は、いずれ本物の悪人と対峙した時に潰されるでしょう。

「……」

私があの子の事を調べて、そう評価した通りに……このままだと彼は、四宮<sup>悪</sup>黄光<sup>人</sup>に潰されてしまう。

「そんなの……」

ダメに決まってる……そんな事は許容出来ない。だから、もう終わりにしなければいけない。

〈昨夜未明……〇〇区にあるマンションの一室で、家族と見られる男女3名の遺体が発見されました。警察は事件性が見られない事から、一家心中の可能性を視野に捜査を進めており……〉

何気なく見たニュース番組で流れる、一家心中や自殺の記事……もしかしたら、その事件の中には四宮家が手を下した事で起きたモノが紛れているのかもしれない。もし私が黄光様の命に背き、利用価値が無いと判断されてしまえば……今度、私の名前がニュースに載る事になるかもしれない。大好きなママも、私の巻き添えになってしまうかもしれない。だから私は、そんな目に遭わない様……かぐや様に対する罪悪感から目を背けて、黄光様にかぐや様の情報を流し続けて来た。

もし黄光様の脅しの標的が、かぐや様ならまだ対抗手段はあった。幾ら黄光様で

かぐや様

も身内に対しては非人道的な対応は取らない筈だし、何より黄光様にとってかぐや様は利用価値がある。でも会計君あの子は違う。黄光様にとってあの子は、私を脅して立場を再認識させる道具でしか無い。私が自分の立場を忘れて役目から逃げれば、一言或いは指先一つで彼は今まで通りの学園生活を送る事が出来なくなってしまう。

今の私が……黄光様に対して持っている交渉材料では、1人しか守れない。彼を守るのにソレを使ってしまうば……かぐや様を守れない。かぐや様が政略結婚を強要されない為に……いつか、四宮家の呪縛から解放される為に……こんな段階で交渉材料切り札を使う訳にはいかない。かぐや様の未来か会計君の身の安全か……以前の私なら、迷う事すらしなかった。だけど今の私は……少しだけ迷い、躊躇している。

「……」

それでも……答えは決まっている

会計君と過ごした……短いながらも何気ない日常を私は一生忘れない

その思い出を胸に……私は決意する

彼との関係を終わらせる決意を……

四宮家使用人と会計君の関係は……早坂愛<sup>私</sup>の未練が原因で出来ていただけなんだ

から

……僅かに震える手でスマホを操り、最後のメッセージを送る。

〈もう私と関わらないで〉



「……」

送信ボタンをタップし、思わず天井を見上げた……彼には友達が多いし、私の事なんて直ぐに忘れてくれるだろう……それに私は、いきなりこんな言葉を送ってしまう様な女だ。仲良くしても、得が無いと判断してくれるかもしれない。

「……」ヤム

こんな言葉を送って……傷付けてしまうかもしれない。怒らせてしまうかもしれないし、嫌われてしまうかもしれない……でも、それは仕方がない事。

「ごめんね、今までありがとう……」

揺れる視界をそのままに、私は会計君のアカウントを拒否設定にして電源を落とした。後は学園内で会計君と会わない様にすれば、私の事なんか忘れてくれる筈だ。これでもう……

「大丈夫……」ヤム

そう……大丈夫。私は耐える事には慣れている……こんなモノ、かぐや様を騙して裏切り続けた10年間に比べたら、何でもない……

「……」

彼と出会う、少し前の状態に戻るだけ……それだけの事なのに、どうして私はこんなにも……

## 早坂愛は捨て去りたい

感想ありがとうございます（・ω・）

次話は土曜日に投稿します。

---

最初に感じたのは、小さな違和感だった。いつもの様に生徒会室を訪れ、生徒会業務に従事していた時に……ふと思ったのがキツカケだった。

「……」

（今日は、早坂先輩に会わなかったな……）

小さな違和感とは言っても、そこまで変という程でも無い。同じ秀知院生とはいえ、学年が違えば会わない日も普通にあるし、今までだってこういう日が無かった訳じゃない。今日は偶々そういう日だったと……この時はそう思っていた。それから数日続けて、早坂先輩と会わない日が続くまでは……

## 〈中庭〉

放課後になると、僕は早坂先輩といつも座って話していたベンチに向かっていった。軽い気持ちで、運が良ければ会えるかと思っていたら……

「……あ！」

遠目からだだが、向かっているベンチに3人の女子生徒が座っているのが見えた。僕の勘違いじゃ無ければ、いつもの3人が揃って雑談をしている筈だ……僕は小走りで其処へと向かった。

……

「あら、石上会計。走ってどうしたんですの？」

「……あれ？ 早坂先輩は？」

「あら？ さっきまで居ましたのに……」

「あ、ホントだ……急用とか？ 早坂さん、バイトが忙しいっていつも言ってたし……」

「そうですか……」

まるで……僕が此処に来るのを察知して、急いで離れた様な……そんなタイミングだった。そんな訳が無いと頭では否定しても、嫌な感覚が胸の中に広がり、いつまでも居座っていた。

……

「もしかして……避けられてる？」

その考えに至ったのは、早坂先輩と会わなくなつて3日が経過した頃だった。メッセージを送つても、返信も無ければ既読も付かない……最初はテスト勉強やお付きの仕事が忙しい所為かと思つていたけど、ここまで会わないのは流石におかしい。避けられているという考えに行き当たるのも、当然と言えば当然だ。先輩と最後に会ったのは、バッテリーングセンターに呼ばれたあの時……少し悩んでいる様な雰囲気だったけど、何か関係があったりするのか？ とにかく、先輩と会わないと何もわからない。そう考えを巡らせていた時に、スマホがメッセージを受信する音が響いた。

「これは……」

次の日……僕は学園中を走り回る事になった。昨日のメッセージ以降、連絡の取れなくなった早坂先輩を探して問い質す為だ。いきなりブロックと着信拒否までされては、流石に納得出来ない。だけど、ここまで苦戦するとは思わなかった……

〈朝のHR前〉

「早坂先輩！」

「ッー」  
「ッッ

「ちよっ、早っ!？」

HR前の人でこった返す廊下を、早坂先輩は器用に躲しながら走って行った……

「早坂先輩……」

〈昼休み〉

「……………」

「ハッ……ハッ……やっと捕まえましたよ。」

昼休み……早坂先輩を廊下の行き止まりへと追い込んだ僕は、徐々に近付いて行く。昼食を食べる為に中庭や教室に人口が集中するのを狙って、早坂先輩を捕まえ様と試みた。思っていた通り廊下の人の出入りは朝と比べるとずっと少なかったし、障害物無しの直線勝負なら僕に分がある。

「早坂先輩、話があります。」

「……私には無いの。」カウ

早坂先輩はそれだけ言って窓を全開にすると、次の瞬間……窓際に足を掛けて跳躍した。

「ちよっ!?! 此处2階!!」

直ぐに身を乗り出して下を覗き込む……早坂先輩は信じられない様な身のこなしで器用に壁を蹴って着地を決めると、そのまま此方を振り返る事も無く走り去って行った……

「に、忍者かよ……」カウ

早坂先輩に怪我が無かった事と、ちゃんと話が出来なかった事実が合わさり思わず脱力する。はあ、ダメだ……捕まえられない所か、話さえ聞いてくれない。どう

すれば良い？ どうすれば、早坂先輩を捕まえられる？

「……………あ！」

暫く思考を巡らせていると、妙案が浮かび上がる。この方法なら、確実に早坂先輩を捕まえて話をする事が出来る筈だ。僕は早速、準備に取り掛かった。

### 〈放課後〉

放課後……会計君が生徒会室に向かったのを確認した私は、いつもの2人の他愛のない会話に付き合っていた。紀さんはどうしてそういう思考になったのかはわからないけど、会長のラップを全校生徒に披露する企画を立てていると言った……ホント無理、絶対正気じゃ無い、常軌を逸していると思ったので、全力で否定して聞いた。会長の話題が終わり一安心していると、巨瀬さんが言った。

「ねえ早坂さん……最近会計君と話してる所見てないけど、ケンカでもしてるの？」

「



「校内で石上會計から逃げ回っていたと聞きましたけど……何かされたとかではないんですね？」

「……別にそういう訳じゃないよ？ なんでも無いから気にしないで大丈夫だし！」

「そっか、じゃあ……」*ぎぎ*

「こうしても問題ありませんわね……」*ぎぎ*

「え？ 2人共なんで腕を掴ん……っ!？」

そこまで言っただけで気が付いた。會計君がゆっくりと此方へ歩いて来ている事に……

「き、紀ちゃん、巨瀬ちゃん！ とりあえず離してくんない!？」

「ごめんなさい、早坂さん……」

「私達にも事情があるの……」

「じ、事情って何だし!？」

「……」

「……」

……

数時間前……

「つまり……早坂さんを誘い出し、捕まえる手伝いを私達にして欲しいと？」

「はい。話をしようにも、僕を見るなり逃げられてしまうので……」

「会計君の事は信用してるけど、早坂さんが意図的に避けてるなら何か理由があるんだろうし……」

「私も……エリカと同意見ですわ。石上会計が良からぬ事をした……とは思っていませんが、早坂さんを無理に捕まえるのは良くないかと……」

「……勿論タダでは言いません。」

「んまっ！ 石上会計！ 私達はその程度の甘言で意見を変える様な、安い女じゃありませんわよ！」くわっ！

「かれんの言う通りよ！ あまり私達の事を見くびらないでよね！」くあっ！

……

「……っ!!」ハハハッ

！

（石上編集が知っている、会長とかぐや様のエモい話……大変興味深いですわ！）

「……っ!!」ハハハッ

！

（生徒会室のかぐや様のご様子と、好きな紅茶の銘柄……知りたい！ 絶対知りた

い!!)

「絶対コレ2人共買収されてるしい……」

「早坂さん！何か行き違いがあるのなら、ちゃんと話し合わないとダメですわよ！」

「困った事があつたら私達も相談に乗るからね！」

「しかも滅茶苦茶白々しいし……そのセリフは買収されてない状態で聞きたかったかなあ……」

2人の拘束から抜け出せないでいると……目の前には、ずっと避けて来た張本人が立っていた。

「……先輩方、協力ありがとうございます。お礼はまた後日……早坂先輩、こっちです。」ヤッペ

「……うん。」

会計君に手を引かれて歩き出す。前に行く会計君の顔は見えないけれど……握られた手とその背中からは、絶対に逃がさないという強い意志を感じた。

## 〈屋上〉

「会計君さあ……紀ちゃん達を買収するのは、流石にやり過ぎじゃない？」

「……早坂先輩が逃げなきゃ、態々ここまでしませんでしたよ。」

「それは、まあ……ね。」

「早坂先輩……なんで僕を避けるんですか？」

「……」

いきなり核心を突かれ、思わず言葉に詰まる。

「もしかして……知らないうちに、先輩に嫌われる様な事をしてたんですか？」

「……」

違う、そんな事無い。君はそんな事をする様な子じゃ無い事を……私はよく知っている。君が気遣いが出来て、他人を思い遣れる優しい男の子だって。

「違うなら理由を教えて下さい。何か悩みがあるなら……言って下さいよ。あの時言ってくれた言葉は嘘だったんですか？僕はまだ……悩みを打ち明けられる程、

信用されてないんですか？ 僕と早坂先輩は……友達じゃないんですか？」

友達……そう言えたら、どんなに良いだろう……でも、私の返事は決まってる。

「……気持ちの悪い勘違いをしないで。ちょっと一緒に遊んだくらいで……友達だとか信用だとか、勝手な事を言わないで。私は君の事なんて、なんとも思っていない。」ヤッ

「……」

その言葉に傷付いた様な表情を浮かべる男の子を私は睨み続ける。ああ、違うのに……本当はこんな事、冗談でも言いたく無いのに。でも仕方がない。もし黄光様がこの子を標的にしてしまったら、私なんかじゃどう足掻いても……守る事なんて出来ないのだから。

「私と君はただの他人、それ以上でも以下でも無いの。だから……」

だからこそ、私は選び続ける。たとえ嫌われてでも、彼との関係を此処で終わらせる選択肢を……

「これからは学園内で見掛けても……馴れ馴れしく話し掛けて来ないで！」

「早坂、先輩……」

この世界は悪意に満ちており、都合の良いハッピーエンドに恵まれる人間は極々少数である。数ヶ月先の未来から逆行して来たという特異性を持つていたとしても、あくまでも石上優という人間は……何の権力も持たない、ただの学生でしかない。

「……」

たとえ此处で、2人の道が別れたとしても……

お互いの心に、消えない傷が残ったとしても……

いつかは時間が解決する

各々が自分なりに気持ちの落とし所を見つけ……

学生時代の苦い思い出として

数年後、或いは数十年後に……

そんな事もあったなと、追憶し黄昏れる……

「……じゃあね。」

しかし、それは……

「ふざけないで下さい!!」



此  
処  
で  
終  
わ  
れ  
ば  
の  
話

## 石上優は捨てさせない

感想ありがとうございます。

いよいよ3期放送ですね、間に合って良かった……

---

屋上から出て行くこうとする早坂先輩の手を掴むと、思わず叫んだ。一方的に好き勝手言って、もう話し掛けて来ないでと言われたくらいで簡単に引き下がる程……僕は聞き分けが良くない。

「……離して。」

「嫌です。」

「離して！」

「絶対に嫌です！」

「私の言った言葉が聞こえなかったの!? 私と君はただの他人で、それ以上でも以下でも無いって！」

「だったら……そんなに泣きそうな顔で言わないで下さいよ!! セリフと表情が全然噛み合っていないし、今まで見た中で1番下手クソな演技してますからね!」

「なっ!?!」

「ぶっちゃけ滑稽以外の何者でも無いです!」

「ひ、人の気も知らないでっ……」

「だから! それを教えて下さいよ! 先輩がどういう理由で僕を避けてるのか……それを教えてくれるまで、絶対に離しませんから!」

「……」

「……!」ヤッ

握られた手に視線を向ける……私はかぐや様の近侍として、ボディーガードも兼任している。並の男子高校生程度、組み伏せ様と思えばいつでも出来る。だけど、強い意志と決意の宿った彼の瞳を見て……そんな事をして無駄だと悟った。

「いいよ……そこまで言うなら、本当の私を教えてあげる。」

……

早坂先輩はそう言うと、ポツポツと語り始めた。自分が四宮家の使用人で、四宮

先輩の近侍である事。四宮先輩と関わりのある人間は調査し、随時本家へ報告している事……

前回の僕では知り得なかった事も多く、その事実のひとつひとつが……到底一般的では無い事ばかりで面食らったと同時に……知らなかった事、足りなかった情報徐徐に集まり形を成していく。

「黄光様にかくや様の情報を流す……それと引き換えに早坂愛は次代の権力者の庇護を得る……そういう取引をしていたの。フ、幻滅したでしょ？君が友達だと思っていた女は、君が尊敬する四宮先輩を裏切り続ける……自分の事しか考えていない性悪女だったんだよ？」

「……」

「それだけじゃない。君は黄光様に目をつけられてしまった……あの人のっては、中小企業の1つや2つ潰すなんて訳ないの……もうわかったでしょ？私と関わっちゃダメだって。」

「……早坂先輩が話してた友達の愚痴って、四宮先輩の事だったんですね……なんか納得出来ました。だったら、裏切るつもりは最初から無いんじゃないですか？」

「どうして……そう思うの？」

「いや、だって……その話愚痴をしてる時の早坂先輩が、なんだかんだで1番楽しそうだったので。本気で四宮先輩を裏切るつもりだったら、あんな顔して愚痴れませんかよ。」

「……」

「それと、早坂先輩は自分の事を性悪女と言っていましたね。だったら……どうして僕と距離を取ろうとしたんですか？」

「……え？」

「僕の事なんて、知らないどうなっても構わないと……使いつけてるつもりで、変わらずに愚痴やストレス発散に付き合わせ続ける事も出来たんじゃないですか？」

「そ、そんな事……！」

「出来なかったんですよね？ 僕の事……守ろうとしてくれたんですよね？」

「ち、違う……」

「違います。早坂先輩は四宮先輩を裏切るつもりも無いし、自分の事しか考えてない性悪女でも無いって事です。」

「どうして!? どうしてわかってくれないの!? これ以上私に関わったら、本当に……」

「それでも、僕は早坂先輩と関わる事を辞めません……辞めたくありません。」

「辞めたくないって……ただの学生の君に何が出来るの!? 何のチカラも持たない、ただの学生の君に!!」

「確かに僕は……何のチカラもありません。権力も財力もカリスマ性も無い、ただの学生です。」

「だったら……!」

「だけど、友達が困ってたら助けたいです。」

「!!」

「だから……僕も早坂先輩と一緒に頑張らせてくれませんか? 実際にどうすればいいかなんてまだ全然わかりませんが、2人なら何か良い考えが浮かぶかもしれません……どんな小さな事でも、僕は先輩の役に立ちたいです。」

「どうして、そこまで……」

「……此処で先輩との関係が切れたら、きっと後悔すると思うんです。先輩の居な

い高校生活を過ごして、大学に進学して、就職して……ある日、今日の事を思い出した時……今日の選択を後悔する瞬間が絶対に来ると思います。僕はもう……自分の選択で後悔したくないんです。」

「……」

「……」

僕の言葉に、早坂先輩は黙って俯き続けている。お互いの間に沈黙が流れ、肌寒い風が吹く音だけが屋上に響いている……

「バカ……」

「え？」

「バカバカバカ!! 私がっ……私が怖いのは1つだけだったのに……! どうして!? どうしてそんな事を言うの!?!」

「早坂先輩……」

「私だけじゃ、君を守り切れないのに……」

「その気持ちは嬉しいです。でも、僕だって早坂先輩に傷付いて欲しくないし、酷い目に遭って欲しくないし……1人で頑張って欲しくないです。」

「……………」

「僕にだって……………何かしら役に立つ事が出来ると思います。だから、先輩が1人で頑張る必要は無いんじゃないですか？」

「……………」

「先輩が一言……………助けて、チカラを貸してと手を伸ばせば、その手を取ってくれる人も居るんじゃないですか？」

「そんな人……………」

「少なくとも、1人は此処に居ますよ。」

僕はそう言って、早坂先輩へと手を伸ばした。

「本気……………なの？」

「はい、勿論です！一緒に……………汚い大人を出し抜いてやりましょう！」

「……………」

……………

私は今まで……………他人を前にして、演技以外で泣いた事が無い。幼少の頃、一緒に厳しい教育を受けていたかぐや様を除けば……………私の泣いた所を見た事があるのは、



ママしか居ない。当然だ……他人に弱さを見せればつけ込まれる。だから耐えて、耐えて、耐え続けて来た……

「あ……」

（ダメだ……）

ママに会えなくて寂しい時も、かぐや様への罪悪感に耐えられなくなった時も……私は自室で1人涙を流し続けていた。だけど、もう……

「あぁっ……」

（もう、ダメだ……）

喉の奥が熱くなり、その熱が瞳へと伝わると……視界が揺らぎ始めた。私は伸ばされた手を両手で包み込み、震える声で懇願した。

「お願いっ……助けて……！」

「はい！ 勿論です!!」

その言葉を聞いて、私の我慢は限界を超えてしまった。瞳から流れる涙を止めようと、どれだけ手で拭いても……涙は止まってはくれない。

「……よく頑張りましたね、先輩は偉いです。」

「……え？」

私がどれだけ完璧な仕事をして、どれだけ本家の意向に従っても、それは周囲の人間にとっては当然の事で……だから労ってもらった事なんて、今まで一度だってなかった。

その労いの言葉と共に、ポンと頭を撫でられる感覚に……また涙が溢れて来た。

「……わ、私……偉くなんか……」

「いいえ、誰が何と言おうと……早坂先輩は頑張りました。凄く偉いです。でも……これからは頑張り過ぎないで下さい。それでも頑張ると言うのなら、僕も一緒にです……僕も先輩のチカラになれる様に頑張りますから。」

そう言う目目の前の男の子は、穏やかな表情を浮かべながら……私が泣き止むまで、優しい言葉を掛け続けてくれた。

……

私と会計君は暫し無言になる……私は濡れた瞳を乾かそうとパタパタと手で顔を扇ぎ、会計君は視線を外して待ってくれている。瞳がある程度乾くと……私は泣いてしまった気恥ずかしさを隠す様に、会計君へと話し掛ける。

「でも……本当に良いの？　ここまでの事が全部演技で、本当の私は四宮家から抜け出す為に君を誑かして利用しようとする性悪女かもしれないんだよ？」

「ははは、まだ言いますか。もしそうなら、僕の人を見る目が無かったってだけですからね……潔く、先輩に利用されますよ。」

「その言い方は、狡いと思う……」

「まあ……先輩相手なら、通用すると思って言ってますからね。」

「……いじわる。」

「僕なんて、気持ち悪いとか勘違いすんとか……割とメンタル扱られる事言われたんですけど？」

「うっ……ご、ごめん……」

「……別に怒ってませんよ。とりあえず、これからについての話をしましょう。」

「……うん。」

## 〈四宮邸〉

その日の深夜……私は使用人の仕事を終わらせると、直ぐに自室へと引き上げた。そして、着替えもせずに宝物ボックスへと手を伸ばす……

「……」

私は積まれた連絡帳を手にとると、最後に使った連絡帳を取り出しパラパラとページを捲り続ける……

「あ……」

指が止まったのは、最後に書き込まれたページ……私は更に一度ページを捲ると、白紙の部分へとペンを伸ばした。

「……」

今日の日付を書き込み、そのままペンを走らせる。何を書くかは考えていない。ただ……今の気持ちをそのまま書き映したい気分だった。何も取り繕わず、今の気持ちのままに……

ママへ

私は今日初めて、ママ以外の人と本音で話しました。言いたくも無い事を言って傷付けて、謝って、泣く所も見られました。でも、男の子の友達が出来ました。一緒に頑張ってくれると言って……よく頑張ったと慰めてくれました。その子はとても優しくて、正義感があつて、思い遣りのある、年下の男の子です。いつか……ママにも紹介出来たら良いなつて思つてます。

「……」

そこまで書いて、これじゃ好きな人を紹介しているみたいだと気付いた。別にママに見せるつもりで書いた訳では無いけれど……なんとなく恥ずかしくなつた私は、素早くノートを閉じるとまた元の場所へと戻して封をした。

「あ……」

宝物ボックスを片付けて部屋を見渡すと、いつも同じ部屋の風景が……キラキラと光っている様に見えた。それはきつと、会計君という本音を出せる友達が出来たから……

「ううん、友達なら……」

会計君って呼ぶんじゃなくて……優君って呼ぶ所から始めてみよう。

愛の真影  
親愛編完

愛の真影  
完

愛の真影  
親愛編完



Next stage. 愛の真影 真愛編

早坂愛というキャラが1番、本当の意味で友達になるのが難しいキャラなのではないか? と思うこういう展開にしました。ここまでが早坂愛と親しくなるまでの物語って感じでしょうかね。少し間を空けてから、真愛編も投稿したいと思います。多分そこまで長くはならない……はず。早坂愛が部分的にチョロ坂愛になる予定はありますが……エタる事だけはしませんが、それまでお待ち下さいA:(、

「  
」  
:

## 早坂愛は戯れたい

感想ありがとうございます（▽。）

あの日から、私と優君の関係は続いている……あれから私達は、2人で話し合っ  
て色々な事を決めた。学園の外では暫く会わない様にするという事と、学園内では  
他の人が居る時以外は、2人で居る所は見られ無い様にするというモノだ……黄光  
様の眼となっている存在が学園内に居るとは限らないけれど、優君の為にもやれる  
対策はしておきたい。念の為、周囲に人が居る時は不干涉を徹底する……だけど、  
優君と学園内ですれ違う時くらいは、何かしたい。だから、彼と私の間だけで通じ  
るサインを決めた。それは……

「今度団長が応援団の皆でカラオケ行こうってさ。石上も来るでしょ？」

「ああ、参加させてもらうよ。」さや

「早坂ー、帰りクレープ屋寄って行こうよ！ 凄くイ○スタ映えするクレープ屋見

つけたんだよねー。」

「いいよ、楽しみだし！」<sup>ス</sup>

お互いがすれ違う瞬間に私は髪留めのシュシュを、優君は首に掛けたヘッドホンを触るというモノだ。初めて出来た男友達との……2人の間でだけ伝わる秘密のサインに、少しだけドキドキしたりもした。

……

今日も私達は誰にも見られない様に、人目の無い中庭の一角で落ち合って話をしていた。

「へー、そんな事もしてたんですか……」

「うん、他にも……ちょっとした任務で、深夜の生徒会室に忍び込んだ事だってあるんだよ？」

「え!? でも深夜の学校って警備システムとかあるんじゃない……」

「生徒会の警備システムはOB会が設置したモノで、赤外線センサーや体重感圧で時間帯によっては警備会社に連絡が行く様になってるんだけど、監視カメラはプライバシーの観点から顔認証登録されてない人物の入退室のみを記録する様に設定さ

れてるの。だからハッキングで特定の時間帯は機能しない様に設定し直せば、簡単に忍び込めるって訳。ハッキングに対する防衛システムも旧式のヤツだから、私ならさくっと突破出来ちゃうしね。」フツッ

「

(すげえ……)

……

10分程、私の仕事について話していると……優君が神妙な顔付きで訊ねて来た。

「先輩は……全部終わったら、どうしたいとかあるんですか？」

「……全部終わったら？」

「はい。目標が有るのと無いとじゃ、結果にも影響が出ると思うんですよ。四宮家の使用人を辞める事になったら、自由な時間も出来そうです……何かやりたい事とか無いのかなって。」

「自由な時間……」

そんな事、今まで考えた事もなかった。でも優君の言う通り……私自身も四宮家の支配下から逃れるのが最終的な目標だから、その後の事を考えておくのは決して

無駄では無い。だけど、いきなりそんな事を聞かれても……っ！ やりたい事が浮かばない代わりに、私の頭に浮かんだのは……

「もし、そうだったら……今度は優君にメイドとして雇ってもらおうかな？」

「メイド!? そ、それはっ……」

「フ、何焦ってるの？ 冗談だよ、冗談♪」

「な、なんだ冗談ですか……」

（弄ばれた……）

「んー？ もしかして期待しちゃった？ 男の子ってメイドとか好きみたいだしねー  
？」「ギリギリ」

「ちよ、突っつかないで下さいよ……別に僕は、メイドとか興味無いですから……  
！」

「……ふーん？」

「な、なんですか？」

「……優様、襟が乱れていますよ。」

私は瞬時に仕事モードへと切り替えると、優君の襟に手を伸ばして丁寧に正した。

「んーっ!?」ぎんぎん

その瞬間……優君は両手で顔を覆って勢い良く俯くと、よくわからない叫び声を上げた。

「プッ…あははは！ 滅茶苦茶効いてるし！」

「それはズルいですってえー！」

「ご主人様呼びとどっちが好み？」

「お願いですから、趣向を探らないで下さい……あ！ 僕そろそろ生徒会行かなきゃなので！」

「うん、またねー。」カカカ

去って行く優君の背中を見つめながら思う……こうやって何も気にする事無く優君と話が出来るだけで、こんなにも楽な気持ちになれるなんて知らなかった。それと同時に……私の冗談に焦る優君を見ていると、今までにはなかった感情が私の中に芽生えたのを感じた。

「……うー！」んー！

（……年下の男の子を揶揄うのって、凄く楽しい事なんだ！）

早坂は間違った解釈をした。

次の日の昼休み……私は昨日と同様、人目を避けた場所で優君と今後について話し合っていた。

「頻繁にハッキングすると、その分リスクも上がっちゃうし……」

「いっその事……迷惑系 Y o u T u O e r とかを唆して、本家に突撃してもらうとか……」  
「ガッパッパ」

「ッ！」

「っ!？」

すると、後ろの茂みから草木を揺らす物音が聞こえて来た。身体が硬直し、優君と視線がぶつかる……私は意を決し、茂みへと声を掛けた。

「……誰？」

「……ッ」

「……」カギ

茂みの中から出て来たモノ、それは……

「イヤ？」

「ッ！」ズザ

その姿と鳴き声を聞いた瞬間……私は無意識に後ろへと飛び退いていた。

「なんだ猫か……」ギ

（この状況とセリフで本当に猫だったのって、逆に珍しい気がするけど……）

「ジャ……」ヌル

「おー、人懐っこい……先輩？ どうしました？」

「いや、その……」

「もしかして……先輩って猫が苦手だったりします？」

「苦手って言うか……嫌い。」

「嫌い!? えー、猫嫌いの入ってホントに居るんですね……あ、もしかしてアレル

ギーですか？」

「アレルギーとかじゃ無いけど……昔、四宮家の敷地内に紛れ込んだ猫を触ろう



としたら、引っ搔かれて凄く痛くて怖い思いをしたの。それからかな、猫が嫌いになったのは……」

「……」

（割と可愛い理由だった……）

「わかってくれた？」

「……アレルギーじゃ無いのなら、ちょっと触ってみませんか？」

「だから、猫は嫌いだって……」

「……早坂先輩を引っ搔いた猫は、偶々気性が荒い猫だったのかもしれませんが、近くに自分の子供が居たから警戒していただけかもしれませんよ？ 僕が抑えておくので、ちょっと触ってみませんか？」

「……」

「本気で嫌なら、無理にとは言いませんけど。」

「優君がそこまで言うなら……でも手を近付けた所で、わぁ！ とかしない？」

「流石にそんな小学生みたいな事しませんよ。ただ、猫の上から触ろうとするんじゃないくて、下から掌を向ける感じで触ってあげて下さい。」

「う、うん……」

「じゃ、ちょっとお前は大人しくしててくれよ？」

「いゃ？」

優君は猫を抱き抱えると、片手で前足を隠して此方へと向けた。私は意を決して、そっと右手を猫へと近付ける……猫は近付いて来る私の右手を、興味深そうに凝視している。

「……ッ」

猫の鼻先まで近付けて手が止まった。幼い頃の痛くて怖い記憶が脳裏を過る……

「いゃ…… っ」 めめ

緊張する私には我関せず……といった風に、猫は私の指先に鼻を近付けて匂いを嗅いで来た。

「いゃ…… っ……ッ……」 ろ。ろ。ろ。

「……ッ……ッ……」

次の瞬間、突如指先を舐められた。まるで毛繕いをする様に、猫は私の指を舐め続けている。その姿と感触に……今まで味わった事の無い、名状し難い感情が私の

心を埋め尽くした。

「~~~~っ!!?」ヤン

「大丈夫そうですね、次は撫でて見ますか?」

「うん……」

撫でる力が強くない様に気を付けながら、私は猫の頭を優しく手で往復させる。

「チア……ゴロゴロ……」

「っ!?! な、なんかゴロゴロ言ってるけど、大丈夫なの?」

「嬉しかったりすると、喉を鳴らすらしいですよ? 実際リラックスしてる顔しますし。」

「そう、なんだ……」

「……どうですか、猫って可愛いでしょ?」

「……うん、そうかも。」ハナ

数日前の不安を感じていた時には、想像もしていなかった穏やかな時間に……自然と頬が緩んだ。

「きゃ……きゃ……」 ウィウト

「……アハハ」

……猫嫌いだった私が猫に触れて、猫を可愛いと思う時が来るなんて……優君と関わりなければ、絶対に知る事が出来なかった事だ。その事実にまた頬が緩み、ほんのりと胸の中が暖かくなった。

放課後……生徒会までの僅かな時間を利用し、いつもの場所へと向かう。既に早坂先輩は来ているらしく、茂みの中から人の気配がしている……可能性は低いが、別人が居る可能性も有り得るので、念の為足音に気を付けながら茂みの中を覗き込んだ。

「……」 ヲッ

……

「きゃ……」

「ワッ、また来たの？」

「……」

「いや　？……いや——　？」ススッ

「うん？……にゃー？」

「チヤッ……ニヤッ　！」

「ワッ、にゃーん♪」

「カッ……」

（これは可愛い……）

……猫と戯れながら、猫語で会話する早坂先輩という光景を目の当たりにし、思わずニヤける。これは可愛すぎるわ……なんだったら動画を撮りたいくらい……流石にそれはダメだろうけど。

「ニヤッ……」ススッ

「ワッ、ママだよー　？」サザサザ

「ニヤッ……」ワッワッ

（ま、ママって……滅茶苦茶母性感じちゃってるっ……だ、駄目だ！　まだ笑うなっ……堪えるんだ!!　し、しか

し……)

「チア……」ウハウハ

「よしよし……」チアチア

「……」

……もっと眺めていたい欲求に駆られたけど、あんまり待ち合わせに遅れても早坂先輩に悪い。僕は名残惜しい気持ちを感じつつ、後ろへと下がった。

(とりあえず、少し離れるか……足音立てながら近付けば、早坂先輩も気付いてくれっ……) ゾッゾッ

「あ……」

その瞬間、足元からベキツという音が響いた。どうやら、気付かずに小枝を踏んでしまったみたいだ。僕は恐る恐る顔を上げると……

「~~~~っ!!?」

顔を真っ赤にして、パクパクと口を動かす早坂先輩と目が合った。まあ……誰も居ないと思って猫とニャーニャー会話してる現場を他人に見られたら……黒歴史確定だな、うん。

「い、いつからっ……」

先輩は真つ赤な顔でそう訊ねて来た。あ、これは最初からです……とか言っちゃうと、更に恥ずかしくなってしまうヤツだ。僕はなんとか話を誤魔化そうと、別の話題を振った。

「え、えーと……早坂先輩、猫語話せるなんて中々バイリンガルですね？」

「」

絶句する先輩を見て……振る話題選択をミスった事に気付いた。

「……ッ！」「フ。ル。ッ。」

「せ、先輩？」

先輩は、俯いたまま肩を震わせている。やばい、覗き見してた事を怒られるかも……

「変顔しろし……」

「ん？ え？……へ、変顔？」

「いいから！ 変顔しろし!!」

「は、はい!!」

先輩の剣幕に押され、変顔を作った瞬間……目の前からシャッター音が聞こえて来た。先輩は僕の変顔が表示されたスマホ画面を此方へと向けると……

「も、もしさっきの事誰かに喋ったら、この写真名前付きでイ○スタに上げるからね!？」

「……さっきの事？ 早坂先輩が猫と猫語でにゃーにゃー会話した挙句、母性に目覚めてた黒歴史の事ですか？」*ヤッ*—

「態々全部言うなし!!」*ニギニギ*

「痛あっ!？」

本日の勝敗、両者引き分け

早坂は恥ずかしい所を見られ、石上は変顔写真を撮られた為。

……

「あ、そういえば……猫にはまたたびと思って持って来たんですけど、猫が酔うってどんな感じなんですかね？」

「……ウチの子を酔わせてどうするつもり？」

「ウチの子って……」



やっぱり早坂の負け  
猫の可愛さに完落ちした為。

## 藤原千花は応援したい

感想ありがとうございます（▽。）

期末テストも無事終わり、残されたイベントは奉心祭のみとなった秀知院学園……とは言い期末テストは終了したばかり。久々に週末は羽を伸ばそうと、休日の予定を友人と話し合う秀知院生達。それは、生徒会役員も例外では無く……

## 〈中庭〉

テスト明けの放課後……僕はいつもの様に、誰にも見つからない中庭の隅で早坂先輩と駄弁っていた。テスト明けという事もあり、今日は生徒会の仕事も無いので時間に余裕はある……とは言っても、2人で何処かへ遊びに行く訳にはいかないのだ、此処が僕と先輩のお決まりの場所になっていた。暫く他愛の無い話をしていくと……

「あ、ちょっとめんどい。」グーグー

先輩はスマホを取り出してポチポチと操作した後、小さな溜め息を吐いた。

「はあ、また面倒な……」

「何かあったんですか？」

「うん……今日の夜、書記ちゃんが泊まりに来る事になったみたい。」

「へー……ん？　もしかして、藤原先輩が泊まりに来るのって初めてだったりします？」

「え？　何回か泊まりに来てるけど、どうして？」

「いや、藤原先輩は早坂先輩が四宮先輩のお付きって知らないみたいですけど……何回か泊まりに来てるんなら、その時に鉢合わせして知ってもおかしくないのになと思って……」

「ああ、そういう事。私、書記ちゃんが来てる時は男装してるから鉢合わせしても大丈夫なの。」

「男装!?　えー、そこまでしてるんですか……っていうか、男装ってバレないもんなんですわね。」

「意外とね。優君相手なら、多分通用しないと思うけど……私の演技って凄い滑稽

らしいから！」

「もしかして……この前言った事、根に持ってます？」

「別に？」 グリグリ

「……」

（コレ絶対根に持ってるな……）

# 〈四宮邸〉

「……でね！ 最近、男子達が怪しいの！」

「なるほどお……」

「……」 ヲ。ヲ。チ

その日の夜……恋話に講じるかぐや様と書記ちゃんとの傍らで、私は優君とメッセーじの遣り取りをしたり、一緒に撮った写真を眺めたりしていた。

「最近の石上くんは、昼休みとか放課後に1人で何処かへ行ってるみたいなの！」

誰かと逢い引きしてるんじゃないかと思ってるんですけど……何処に行ってるのかも、誰と逢ってるかもわからないんですよえ……」

「大変ねえ……」*グハグハ*

「……」*ギョ、ズッ*

「会長も誰かに恋してそうですけど、誰かがわからないんですよえ。」

「ですねえ……」*フワフワ*

「あ……」*ギョ。ロッ*

「あ、ハーサカ君、スマホ落としまっ……!!」

少し写真を拡大しようと指で操作した時に、誤ってスマホを落としてしまった。私が拾うよりも早く、書記ちゃんがスマホへと手を伸ばす。

「ええっ!?! な、なんで石上くんの写真が!?!」

「あっ! そ、それは違うんです!」*ンッ*

（危なかった……優君をアップにしたからバレて無いみたいだけど、優君の隣には私も写ってるし、あまり長い時間見られる訳にはいかない。）

（っ!?! は、ハーサカ君のこの過剰な反応……さっきまで嬉しそうにスマホを眺め

ていた表情……そのスマホ画面には、石上くんの写真……更には、ハーサカ君の男性にしか恋愛感情を抱かない発言！ま、まさか、これって……これって……！

「……!? せ、洗面所行って来ます……」

「……はあ、危なかった。」

「はれえ？ 早坂あ、藤原さんはあ……？」

「書記ちゃんなら、お手洗いに行ってますよ。かぐや様もそろそろお休みになって下さい。」

「うん、やすむう……」

……

「かぐやさん、お待たせしま……ってアレ？」

「……」

「あちゃー、かぐやさん寝ちゃってますね。もっと恋バナとかしたかったですけど……」

「……千花お嬢様も、そろそろお休みになってはいかがでしょう？ テスト明けとはいえ、夜更かしをしてお身体に障ります。この通り、かぐや様も眠ってしまい

ましたし……」

「……」

「千花お嬢様？」

「ハーサカ君は、男の人が好きなんですよね？」

「はい、勿論です。」

（そ、そんな当然みたい……！）

「じ、じゃあ！ 今、好きな人とか……居たりするんですか!？」

「好きな人……ですか？ あまりそういった話題には、馴染みがないのですが……」

「じゃあ質問を変えます!! 一緒に居るだけで楽しいと思ったり、会う時間が待ち遠しく感じたり……そういう人は居ないんですか!？」

「そんな事を言われても……」

それはズルいですってえー！

「……」

……どうですか、猫って可愛いでしょ？

「……」

よく頑張りましたね、先輩は偉いです

「……………」

何故かはわからない……だけど、その記憶を思い出した瞬間……カッと顔が熱くなるのを感じた。

「い、居ませんよ、そんな人……」フム

「っ!？」

(居る人の反応!?)

「も、もう良いでしょう？ 千花お嬢様も、そろそろお休みになって下さい。」

「こ、これって……そういう事？」ヤン

……何やら妙な勘違いをしていそうな書記ちゃんをかぐや様の隣に押し付ける  
と、私は直ぐに自室へと引き上げた。随分とハーサカと優君の<sup>私</sup>関係について、興味  
がありそうだったけど……

「ふあっ……」

私自身も眠気を感じ始めた為、先程までの思考を隅に追いやる。まあ男装した  
状態で優君と会ってる所を見られでもない限り、今日限りの興味で終わる筈だ



と……この時はそう思っていた。

数日後……

〈秀知院学園校舎裏〉

「ハア……ハア……」

「いい感じです……このラップなら、きっと会長の想いは伝えられると思います！」

「ああ……ありがとな、藤原。」

「最初は会長のラップを聞かされる人が気の毒で仕方なかったですけど、コレなら問題ないですね！」

「言葉を選べ。」

「早速相手の人に連絡しましょう！」 さきさき

「ああ、挑戦状を叩きつけてやる！」 と。ッ

「……！」*ウツク*

「急で悪いんだが、明日とか時間作れるか？……ハーサカに大事な話がある。」

「えっ!？」

（会長が想いを届けたい相手って、ハーサカ君なの!？）

〈学校終わって4時とかなら……〉

「ああ、それで良い……じゃあ、芝公園で待ってる。」*と。*

「か、会長！もしかして、電話の相手ってかぐやさんの所のハーサカくっ……!？」

「なんだ、知ってたのか？まあ、そうだ……四宮には内緒で頼む。俺とハーサカはほら……一応男と女な訳だし。」

「男と女!? え、じゃあどっち!? 一体どっちが女（側）なんですか!？」

「そんなもんハーサカに決まってるだろ。」

「決まってるんだ!? じゃあ会長は、ハーサカ君の事を1人の女として見てるって事ですか!？」

「それはそうだろ。」

「それはそうなんだ!？」*カッ—ン*

.....

「……と言う訳で、会長さんにお呼ばれされちゃったので、明日の放課後はお暇を頂きますね。」

（……電話越しに書記ちゃんの声も聞こえて来たから、用心の為に男装して行きま  
すか。）

「」コッコッコッ

妙な圧を感じて振り返ると、かぐや様が凄まじい圧を発しながら私を凝視していた。はあ……かぐや様がさっさと会長さんに告白して付き合っていれば、こんな事で嫉妬する事も無いのに……

「かぐや様、大丈夫ですから安心して下さい。仮に会長さんが告白して来たとしても……ちゃんと振りますから。」

「早坂は会長の何処が不満なの！」くわっ！

「振って良いのか悪いのか、どっちなんすか。」

「だ、だって……もし会長が早坂に告白して振られてしまったら、きっと傷付いてっ……」

「……傷心状態の会長さんなら、簡単に落ちるかもしれませんよ？」

「そ、それは流石に会長が可哀想というか……」

「そうですか……残念です。個人的には、これ以上無いってレベルでこっ酷く振るのも、吝かではなかったのですが……」

「早坂は会長に何か恨みでもあるの!?」*チャビーン*

………

〈藤原邸〉

「……ん？」

（あれ？ でもハーサカ君は石上くんの写真を持ってたんですから、気持ち自体は石上くん寄りな筈……つ、つまり、会長と石上くんがハーサカ君を取り合う泥沼展開になる可能性もある!? ど、どうしたら良いんでしょう!? ハーサカ君の気持ちに大事にするべきか、会長の頑張りを応援するべきか……うわぁーん！ 悩まし過ぎますー!?）

本日の勝敗、藤原の敗北

加速する勘違いに、終始悩まされてしまった為。



## 早坂愛は叫びたい

週が明けて数日、僕は早坂先輩にいつもの場所へと呼び出されていた。草木を掻き分けて進むと、執事服の人物に迎えられた。

「……」

その人物は、黙って此方を見つめている。まるで、僕が何かを言うのを待っている様に……その姿を見て、僕は無意識に問い掛けていた。

「……早坂先輩？」

「やっぱり……優君にはわかるんだ。」

聞き慣れた声でそう言われ、目の前の人物が早坂先輩だと確信する。その姿はかなり完成度が高く、見た目だけで見破るのは簡単では無いと悟った。なるほど、これは藤原先輩も騙されるわ……

「おぉー、これは……」

「ふふ、どう？びっくりした？」

早坂先輩は嬉しそうにそう言うと、クルクルと回ってその姿を見せつける。

「思ってた以上に完成度の高い男装で驚きました。確かにこのレベルの変装なら、簡単にはバレないでしょうね。」

僕は不躰にならない程度に、男装姿の早坂先輩に視線を送る。

「で、呼び出した理由なんだけど……優君、芝公園まで一緒に来てくれない？」

「え？　なんかあるんですか？」

「今から芝公園で会長さんと待ち合わせなんだけど、書記ちゃんも居ると思うから、優君には書記ちゃんが変な事をしようとしたら止める役目をお願いしたいの。」

「それは別に良いですけど……」

「男装してても油断は出来ないんだよね……書記ちゃんに女だとバレたらダメ、早坂愛とバレたらダメ、かぐや様のお付きとバレたらダメって感じだし……バレたら色々な面で不都合があるから、絶対にバレる訳にはいかないし。」

「何という縛りプレイ……芝公園って事は秀知院の敷地外ですけど、僕も一緒に居て大丈夫なんですか？」

「それは大丈夫。もし四宮家の密偵に見られたとしても、生徒会のメンバーが3人も居ればそういう集まりだと認識する筈だよ。それに……」

（絶対かぐや様も覗きに來る筈だし。）

「それに……何ですか？」

「ううん、何でも無い。あ、皆の前では、私の事はハーサカ君で呼んでね？」

「ハーサカ君で……正体隠す気ありますか？」

（すっげえ安直……）

「こ、これでも、優君以外にはバレて無いし！」

「だったら良いですけど……」

……

〈芝公園〉

「来たか、ハーサカ……」

「御行君……」

「っ!？」

（石上くんも來てる!? もうコレ、今日どっちか選ぶ事になるんじゃない!?）

「……?」

（藤原先輩がすげえガン見してくる……）



「っていうか、何その格好……」

ですよ。」

「本当に大変な仕事だな……あと、何で石上まで居るんだ？ お前ら交流あったのか？」

「……そうですね。優君には、対藤原さん対策で来てもらいました。」

「……そうか。」

（優君……か。）

⋮  
ん  
? ]

（あの木の陰に隠れてるのって、四宮先輩じゃ？）

! — 4 !

(ちよつと早坂、会長と距離近過ぎじゃない!?)

「会長とハーサカ君、いちゃいちゃしてるう……どっち!? ハーサカ君は石上くんと会長、どっちを選ぶんですか」

「キツキツト、!?」

「それで、今日はどういった御用向きですか？」

「ハ、サカにちよつと俺のラッフを聞いて欲しくてな。」

「なるほど、会長のラップを僕が聞く……え、なんで……？ み、耳栓していいですか？」カダカダ

「ダメです、しっかり聞いてあげて下さい！ 会長は不器用ながらも、歌にハーサカ君への想いを込めて届けようとしてるんです！」

「ちよっ、ちよっと待って！ さっきからなんですか!?」ニギ

「四宮!？」

「歌で想いを伝えるだなんて……そんなのまるで、平安時代の告白じゃないですか！」

「なんか凄いゴチャついて来ましたね……それと、ラップ？ よくわかりませんが、コレって僕も居て良いんですか？ 僕は外してた方が良いんじゃない……」

「待って、1人にしないで。」サギ

「え、先っ…ハーサカ君？」

「私だけじゃきつと耐えられない……お願いだから、一緒に居て。」

「ええ……これから始まる事って、そんな大事なんですか？」

「はわあ、手繋いでる……や、やっぱり、石上くんとハーサカ君はそういう関係なんだ……」アサアサ

「優君……一応聞いておくけど、なまこの経験は？」

「なまこの経験は!? 何ですかそれ!?」

「そっか……優君は、なまこられた事の無い人間なんだね……」

「なまこられたって何ですか!? 動詞!?」

「……ごめんね。私が君を巻き込まなければ……なまこられる事も無い、平穏な一生を終える事が出来たのに……」

「何1つわからない……」

「もういい藤原! ミュージックスターだ!」

「CHECK!」ニッ

「CHECKじゃねえんですわ。」

「MC御行ここに登場!! 刻むぜ印! 響け咆哮! 俺がレペゼン秀知院ポンコツオンの修理品!」

「まさかの切り込み隊長。」

……

「私は知りたい男同士禁断の行為! 応援すべき? 止めるべき?」

「藤原さんは何を言ってるの!？」

「藤原先輩、TPOって知ってます?」

……

数分後……藤原先輩のパートが終わると、何故かラップ合戦に参戦した四宮先輩が早坂先輩をラップで挑発し、その挑発に乗った早坂先輩がラップをするというカオスな状況になっていた。正直、自分で言ってる意味がわからない……

「……」

(え、もしかしてコレ……僕も歌わないとダメな流れ? 流石にそれはちょっと……)

「心を吐き出す 私のテキサス 貴女が知らない私を知ってる 心の吐露? 心の

友!!」<sup>グッ</sup>

「えっ?」

もし早坂先輩みたいに挑発されたらどうしようと、場違いな事を考えていると、ラップを歌う早坂先輩に腕を引かれ手を握られる。先輩は此方を見る事も無く、歌い続けている。

「私もちゃんと考えてるもん! だけどかぐや様には教えてあげない! でも1つ

だけ教えてあげる！ 私もいるもん……男友達!!」

「早坂……」

「……………」

「……………」

力強く握って来た早坂先輩の手を無言で握り返す。なんとなくだけど……早坂先輩が普段から四宮先輩に対して溜め込んでいる気持ちを吐き出す事が出来た瞬間に見えた。此処に来た当初は、ラップとか藤原先輩とか意味わかんない事もあったけど……言いたい事を言い切った様に、清々しい表情を浮かべる早坂先輩を見て……此処に来た意味はあったんだと思った。それはともかく……

「はわあ、ハーサカ君の本命は石上くんなんだ……」ア、サ、サ、

「……………イエスマイメン。」

（そうか、ハーサカは本当の自分を出せる相手を見つけたのか……まさか、その相手が石上とは思わなかったがな。）

「MC御行……………」

「本当になんの……………」

「……」

（僕が歌う流れにならなくて良かった……）

（会長……自分はハーサカ君に選ばれなかったのに、拳を合わせて応援の意を示すなんて……）

「グズ……とても良いモノを見せてもらいました。そうですよね、愛に性別なんて関係ありませんよね！ハーサカ君、私も応援してますからね!!」  
 ☆☆☆

「え？あ、はい……ありがとうございます？」

「藤原先輩、鼻血出てますよ。」

（さっきから何言ってるんだ、この人……）

……

「会長、きっと良い事ありますよ。」  
 ☆☆☆

「何だその哀れんだ目は。」

本日の勝敗、白銀の敗北

暫くの間、藤原から哀れみの視線を向けられる事になった為。

……

〈四宮邸〉

私もちゃんと考えてるもん！

「……」

私もいるもん男友達!!

(あんな大声で叫ぶ早坂なんて、初めて見たわね……それはそうと、石上君が男友達……ね。)

「それで……早坂？ 貴女、石上君とはどういう関係なの？ 男友達とか言っていたけど……本当にそれだけかしら？」

「……秘密です。」

「秘密って……っ！ ま、まさか、早坂っ……貴女、石上君とっ……!!」

「ですから、秘密です。どうしても知りたいと言うのでしたら……」

「……」

「かぐや様が会長さんに告白して付き合う事が出来たら……教えてあげても構いませんよ？」

「ち、ちよっと早坂!? そんな事で誤魔化せると思ってっ……」

「私の事よりも、会長さんの事は良いんですか？」

「え、会長？ どういう事？」

「会長さん……あの感じだと、書記ちゃんと結構長い期間一緒に居たと思うのですが……」

「っ!? ……早坂！ またそうやって不安を煽ろうたってそうはっ……」

「……かぐや様がそうやって何もしない隙に、2人だけの思い出とか作ってたりしてるんでしょうか？ かぐや様が何もしない隙に……」

「は、早坂!!」

かぐやの敗北

従者の煽りで先程までの疑問が吹き飛んだ為。

次話から、徐々に恋愛的な動きを入れていきます



多分この√だけやな、あのキャラが出るのは……

## 早坂愛は気付かれたい

感想、評価ありがとうございます。(。▽。)

〈都内某所〉

「早坂、早くして！ 売り切れてたらどうするの！」

「そんな直ぐには売り切れませんよ。」

先を急かすかぐや様にそう答え、私はとある店の前で立ち止まった。ピンク色に塗装された派手な外装を一瞥し、放たれる煌びやかな光をその身に受けながら……私は女性下着専門店へと足を踏み入れた。

「はあ……」

事の発端は昼休み、かぐや様が偶々立ち聞きした女子生徒2人の会話が原因だった……

……

〈中庭〉

「ねー、ちょっと聞いてよ！ コレ着けてるだけで、彼氏がメロメロになっちゃってさー！」

「っ!?」ちや

「あ、もしかしてそれって、最近人気の？」

「こそ、男を魅了する魅惑の悩殺ブラ！」

「っ!?」

（悩殺ブラ!? 今時ってそんなものもあるの!?）

「いいなー、私が買いに行った時は売り切れてたから、買えてないんだよねえ……」

「じゃあ、今度一緒に買いに行こうよ！ 私ももう一着欲しいし！」

「あ、良いねー！ 行こう、行こう！」

「……っ！」

（男を魅了する魅惑の悩殺ブラ……コレよ!!）

……

かぐや様から話を聞きネットで調べると、この店が新しく入荷した悩殺ブラを展

示するらしい……その情報を掴んだ私とかぐや様は、学校が終わると直ぐにタクシーに飛び乗って此処まで来た……という訳だ。

「はあ……態々放課後の貴重な時間を利用しなくても、ネットで注文すれば直ぐ届くのに……」

「早坂！早く!!」

「はいはい、わかりました。」  
「ヤ」

（かぐや様が今すぐ欲しいだなんて子供みたいな事を言わなければ、少しは優君と会う時間もあったのに……）

……

その頃の石上……

「い、石上編集は……同性愛について、どう思ってたして!？」

「ナマ先輩……ナマモノで同性愛に手を出したら、二度と戻って来れなくなりますよ。」

……

「かぐや様と同じ日にお泊まり会をしたんだけど、これは実質……かぐや様とお泊

まりをしたと言っても過言じゃないよね!? ね!?

「過言ですなー。」

やべー奴らの相手をしていた。

かぐや様と悩殺ブラを搜索していると、あるブラが私の興味を引いた。私はそのブラを持つと、かぐや様へと話し掛ける。

「かぐや様、かぐや様。」

「何よ? 目当ての物は見つかったの?」

「見て下さい、書記ちゃんサイズ……」ニギハヤ

「っ!!!?!」

「コレ、凄いですよねえ……スイカのボールネットくらいありますよ。」ヒキヒキ

「す、スイカ……」

「因みに、コレが監査ちゃんサイズです。」ニギ

「えっ!? そ、そうなの!？」

(……え? 伊井野さん大きくない? もしかして、生徒会の中で私が1番……)

「えーと、かぐや様のサイズは……」*サッピン*

「態々探す必要があるかしら? っていうか、貴女は知ってるでしょ?」*サッピン*

「そうでしたね、すみません。」

「もう! バカな事やってないで、早く目当てのモノを探して!」

「怒りました?」

「怒ってない!」

……

「ねえ早坂……やっぱり会長も、胸が大きい方が好みなのかしら……」

「まあ……男性は生物学的に、本能で胸が大きい方を好むと言われてますからね。」

「うっ、やっぱり……」

「でも会長さんは、胸の大きさを優劣を決める様な人じゃないと思いますけどね。多分、好きになった人のサイズがそのまま好みになるタイプかと。」

「ほ、本当？ 本当にそう思う!? べ、別に私は、そこまで気にしてる訳じゃ無いけどね？ ただ会長には、見た目に惑わされる様な価値観を持つてもらいたく無いと思ってるだけであ……！」

「はい、勿論です。かぐや様みたいなペチャでも、きっと愛してくれますよ。」

「」

「……あ、ありましたよ。かぐや様、念の為試着して来て下さい。」

「カ、シツル……」

（ペチャ……）

「かぐや様、サイズはちゃんと合ってますか？」

「カ、ツル……」

（ペチャ……）

「買われるのなら、レジに持って行きますが？」

「カ、カ……」

（ペチャ……）

「では私は会計を済ませて来ますので、着替えて待っていて下さい。」

「か、マッダラ……」

（ペチャ……）

かぐや様からブラを受け取ると、私は会計をしにレジへと向かった。その途中、悩殺ブラを展示している棚が目に入った。人気というのは本当らしく……展示棚には既に一着しか残っておらず、完売するのも時間の問題なのがわかった。

「悩殺ブラか……」<sup>ズ</sup>

無意識にブラのサイズを確認すると、私のサイズとピッタリ一致していた。その事実が最後の後押しとなり、私はブラを手にとるとそのままレジへと向かった。

……

〈四宮邸〉

帰宅後……かぐや様は素早く袋からブラを取り出すと、ウキウキ顔で眺めている。「コレで会長を悩殺出来るのねっ！ ふふ、会長が悩殺される姿……楽しみだわ！」  
「……かぐや様、1つ確認しておきたい事があるのですが？」

「ええ、何？」

「先程かぐや様は、その悩殺ブラで会長を悩殺すると言っていました……実際に



見せつけて、性的に誘惑するという事で間違いないですか？」

「あ……」

かぐや様はそう指摘されて、初めてその考えに至ったという表情で固まった。

「はあ……本当にかぐや様は、情け無い程ポンコツになられて……」

「ポ、ポンコツ!？」

「悩殺ブラなんですから、実際に見せないと効果が無いなんてわかりきってるじゃないですか……もしかして、本当に着けているだけで会長を悩殺出来ると思ってたんですか？ 多分そのブラは、勝負下着の一種だと……」

「つ、着けてるだけで悩殺出来るもん！ 私くらいになると、態々見せなくても悩殺出来るんだもん！」

「やばいフェロモンでも出るんですか？」

「もう！ そんな事言うなら、早坂には貸してあげないから!!」

「かぐや様……その心遣いは大変嬉しいのですが、私がかぐや様のブラを身に着けるのはサイズ的に無理があるかと。」

「」

本日の勝敗、かぐやの敗北

折角、悩殺ブラを買ったのにお蔵入りする事になるし、従者の遠慮の無い発言に精神的ダメージを食らうなど、踏んだり蹴ったりだった為。

次の日……

「この最新機種が気になって……」ヤジ

「あー、わかります。僕もちょっと機種変しようか迷ってて……」

「でもこの機種の方が機能自体は上だから、どうしようか迷ってるんだよね……」

ヤジ

「……あの、僕の顔に何か付いてます?」

「んーん、何でもないから気にしないで?」

（まあ、わかってたけどね……念の為着けて来ただけで、本気で着けただけで魅力が上がるか思ってた訳じゃ無いし……）

「そうですか……あの、先輩？ 何か怒ってます？」

「別にー！ ㇾㇾー」

（……っていうか優君は私の変装を見破ったり、普段から細かい事に気付いたりしてるんだから、今回も気付くべきじゃないの？ あ、早坂先輩、今日は何か色っぽいですね？ みたいな！）

「……？」

石上は理不尽な怒りを向けられた。

……

「そういえば……2年は進路相談があったんですよ？ 早坂先輩はどんな感じだったんですか？」

「とりあえず、転職希望は出しといた。」

「転職希望で……」

「優君も来年は進路相談だけど、何か将来的な希望とかあったりする？」

「え、僕ですか？ そうですね……進路に関しては、特に展望がある訳じゃ無いんですけど……」

私が優君にこの話題を振ったのに、大した理由があった訳ではない。会話の流れで何気なく振った、ありきたりな質問のつもりだった。でも……

「来年は……また早坂先輩と遊びに行ける様になってたら良いな、とは思ってます。」

「……え？」

「早坂先輩が何にも気兼ねなく過ごせる様になってたら、色々な所へ遊びに行きたいじゃないですか。ニンゲンも良いですけど……早坂先輩は最新

機器に詳しいですから、大手家電量販店やPC専門店、ジャンク店巡りなんて面白そうじゃないですか？」

優君はなんでも無い様に……そう答えるのが当たり前の様な表情でそう言った。「来年が無理なら再来年……それが無理だったら、更に次の年に必ず遊びに行きましよう。」

「……」

トクンと心臓が跳ねて、カッと顔が熱くなった……そんな事を言ってくれるなんて、思っていなかったから……優君は今年だけじゃなく、来年も再来年も……私の

側に居てくれるつもりなんだ。私が四宮家から解放されるまで、一緒に頑張ってくれるつもりなんだ……その考えに至った瞬間、胸の奥からよくわからない感情が込み上げて来た。

「……………」

この感情に従っては何だか直感で理解した私は、話を逸らす話題を口にする。  
「……もう、優君てば気が早いよ？ それより知ってる？ 再来年の次って、明明後年て言うんだって。」

「へー、そうなんですか？ 僕はてっきり、再々来年とかと思ってました。」

「まあ、あまり使う機会なんてないからねー。」

……………

「あ、僕そろそろ生徒会なんで……」

「うん、またね。」とどろ

優君が去って行くのを見送り、周囲に誰も居ない事を確認すると……

「……………！　ッー！　ハハハッ」

私は顔を伏せると、両膝を抱えてパタパタと足先を跳ねさせる。何故かはわから

ないけど、胸の辺りがムズムズする……優君を揶揄った時に感じた感覚とは、また別のむず痒さ……嬉しいとか、恥ずかしいとか、そんな感情が混ざり合った……

「サギ」

「誰っ!？」

「……サギ！」

「なんだ、君か……今の見た？」

「サギ……？」

「……誰にも言わないでね？」サギサギ

「サギ！」

「ふふ、ありがとね。はあ、熱い……」ニ。タ。タ。タ。

「サギ？」

初めて感じる不思議な感情に……暫くの間、私の顔の熱は取れないままだった。

## 早坂愛はわからない

感想ありがとうございます(。▽。)

---

奉心祭まで残り2週間を切ったある日の放課後、私は最近増えた密会仲間と共に優君が来るのを待っていた。

「優君、遅いねー？」*ぶぶぶ*

「いー？」

暫く猫ちゃんと話しながら待っていると、ガサガサと誰かが近付いて来る音が聞こえて来た。

「すいません、遅れました。」*さき*

「あ、優く……っ!?」

その声に振り返ると……微かな香水の香りが、優君の身体から漂って来た。彼は香水をつける習慣なんて無い筈だ。つまり……ここまで匂いが身体に残る程、誰

かと密着していたという事だ……態々私と会う前に？

「……ッ！」フッ

「先輩？ どうしました？」

「それはこっちのセリフだし……優君、此処に来る前に誰かと会ってたでしょ？」

「え？ いや、特には……」

「……ふーん？」

（嘔吐くんだ………ふーん！）

「せ、先輩……？」

「じゃあ、コレはどういう事？」

私は猫ちゃんを持ち上げると、優君へと徐々に近付けていく。すると……

「……ハッ !!」ハッ

「え？」

「……知らないの？ 猫は柑橘系の匂いが嫌いなんだよ？ だから優君が付けてる香水の匂いを嗅いで嫌がったの。それで……そんなに匂いが身体に残る程、誰と密着してたの？」



「なるほど……って密着!? そんなのじゃありませんよ! これはですね……」

……

〈昼休み〉

「伊井野ちゃん、今からお昼?」

「あ、大友さん……うん、委員会でちょっと遅れちゃって……ん?」  
みみ

「そっかー……って、どうしたの?」

「大友さん、もしかして香水付けてる?」

「うん、よくわかったね! 良い匂いでしょ? 最近流行ってるんだー!」  
き

「……凄く言い難いんだけど、校則違反だよ?」

「……」

「……」

「……ん? 2人共どうしたんだ?」

「っ! 石上君、パス!」  
みみ

「え?……うわっ!」  
みみ

「あ」

「あ」

「何か掛かった……大友、何これ？」

「香水なんだけど、ちょっと蓋が緩んでたんだね……石上君、ごめんね？」

「そんなに掛かった訳じゃ無いからいいけど……僕に渡してどうするつもりだったんだよ？」

「香水は校則違反って言われちゃったから、走って逃げてもらおうかなって。」

「往生際悪いな……」

「大友さん、悪いけどコレは没収させてね。放課後になったら返せるから……」

伊井野は友達から没収するのに多少の居心地の悪さがあるのか、申し訳なさそうにしている。

「あはは、気にしなくて良いよ！次はわからない様に付けるから！」

「そっちじゃないだろ。」

「あの……そもそもの話、香水を付ける事自体が違反なんだけど……」

……

「……って事があっただけなんですけどね。」

「……もうっ、優君たら紛らわしいでしょ！」オ

（はぁ、焦って損しっ……ん？）

「え？ はぁ……すいません？」

「……」

（どうして私が焦るの？）

「先輩？ どうかしましたか？」

「……ううん、なんでも無いよ。それより、この前ネット見てたらこんなのがあつて……」

……

「……あ、そろそろ行かないと。」

暫く話していると、優君がスマホを見ながら立ち上がった。多分、時間を確認したんだろうけど、おかしいな？ 今日生徒会は無い筈なのに……

「うん？ 今日生徒会休みだったよね？ 何か用事でもあるの？」

「あ、はい。応援団の皆で、奉心祭に向けた決起集会をする事になってまして、今からカラオケ屋に集まる事になってるんですよ。」

「ふーん……」

「そういう訳なので、今日はこれで失礼しますね。早坂先輩、また明日っす。」  
々々

「……ッー！」<sup>フ。ダ</sup>——

（ふーん！ そりゃ確かに……私以外の人と遊びに行くのは、本家の人間に対する良いカモフラージュになるって言った事もあるけど……それでももうちょっと残念そうにするとか、後ろ髪引かれる感を出すべきじゃ無いの!？）

石上はまたしても、理不尽な怒りを向けられた。

〈マスメディア部〉

「……それで早坂さん、石上会計とは仲直り出来まして？」

次の日の放課後……私は紀さんと巨瀬さんに、優君との事について訊ねられていた。買収されていた事はアレだけど……この2人が居なければ、優君と本音で話

し合う事も出来なかったので感謝している。

「あはは、まあね。元々喧嘩してた訳でもないんだけど……その事で2人には、ちょっとしたお願いがあるんだけど……」

「お願い？」

「早坂さん、お願いって？」

「その……会計君との事、他の人には内緒にして欲しいんだよね。」

「なるほど……そういう事ですのね。」<sup>477</sup>

（早坂さんも女の子ですものね。）

「……任せて早坂さん！ 会計君との事は、かぐや様に誓って内緒にするから！」  
「紀ちゃん、何か変な事考えてない？ でも……2人共良いの？ 理由も聞かないでそんな……」

「実は、同じ事を石上会計からお願いされてますの。彼方は少しお願いの仕方と  
言いますか、内容がアレでしたけども……」

「あー、うん。そういえばそうだったね……」

「……？」

……

数日前……

「ナマ先輩、ガチ勢先輩、先日はご協力ありがとうございました。」

「いえいえ、此方も会長さんとかぐや様のエモいお話を知る事が出来たので、お互い様ですわ。」

「私とかぐや様の生徒会室の様子や、好きな紅茶の銘柄を知れて凄く助かったわ！」

（助かった……？）

「なら良かったです。それで……追加でお願いしたい事がありまして……」

「お願いしたい事？」

「って何？」

「僕と早坂先輩は確かに和解しました。だけど、暫くの間（表向き）は2人で会わない様にするつもりなので……2人には、その事に関してノータッチでお願いしたいんです。勿論……先輩方が一緒にいる場合は、普通にしてもらって構いません。」

「なるほど……つまり、石上会計と早坂さんが2人で会う事は無いけれど、その

事に関して興味を持つ事も調べる事もして欲しくないし、お2人の事を言い触らす事もしないで欲しいと……そういう事ですわね？」

「はい、お願いします。」

「……石上会計がそこまで言うのです、何か理由があるのでしょう？」

「……はい。」

「わかりましたわ……石上会計の言う通りに致しましょう。」

「私もいいよ！」

「2人共、ありがとうございます。」

「良かった……これならエグい手を使わずに済みそうだ……」

「」

「」

「あ、すいません、口が滑りました。」

「ち、ちなみに……もしお二人の事について言い触らしてしまった場合、どうするつもりでして？」

「……僕も命懸けですからね。もしナマ先輩が口を滑らせた事が原因で僕に何か

あった場合、ナマ先輩の秘密を秀知院のネット掲示板で拡散する手配くらいはする  
かもしれません。」

「

「……いや、冗談ですよ？先輩達の事は信用していますから、そんな心配は無用  
でしょうし。」

「そ、そうですねー！石上会計したら、本当に冗談がお上手でっ……」  
「ダッ」

「……っていうか、かれんは会計君に何の秘密がバレてるの？」

「ひ、秘密は秘密ですわ……」

「えー、気になる……まあ、かれんはそっかしいからね！私は会計君に秘密や  
弱味がバレる程ドジじゃ無いし。」

「ガチ勢先輩の場合は……僕に何かがあってその原因が、ガチ先輩が口を滑らせた  
事だった場合、四宮先輩に諸々の事を記した手紙が送られる様に手配する……とか  
ですかね。四宮先輩は口の軽い人が大嫌いらしいですから、もしガチ勢先輩がそん  
な人だってわかったら……」



「

.....

「……………」カクブル

（ぜ、絶対に石上編集と早坂さんの事を言い触らしたりなんてしませんわ！ も、もし、会長とかぐや様のカプシチュ漫画を描いてるなんて事が周囲にバレたら……死!?)

「……………」カクブル

（ぜ、絶対に口を滑らさない様に気を付けないと！ も、もし、会計君に何かあったら、かぐや様に嫌われてっ……死!）

「えー……2人共どうしたし？」

「な、なんでもありませんわ！……ただ、石上会計が言っていた事が少々気になっ  
てまして……」

「ゆっ……会計君は……なんて言ってたの？」

「……命懸けなんだと、言っていましたわ。」

「あー、そういえば言ってたね？」

「……ッー」

命懸け……優君が言ったというその言葉に、息が詰まった。優君は本気で私なんかの為に、それこそ命を懸けるつもりで……

「……ッ」

突然……ギュツと心臓を締め付けられる様な痛みに襲われた。その痛みに合わせる様に、心臓の鼓動も徐々に速くなって行く……

「優君……」ギョッ

痛い、苦しい、切ない……様々な感情が浮かび上がっては消えて行く……この痛みは何？この苦しみは何？この気持ちは……何？わからない、怖い、苦しい……

「カッ…痛ッ……」カッ

「は、早坂さん!？」

「大丈夫!？」

「ハ、ハッ…ハッ……」

ガクンと膝から力が抜けてそのまま座り込んでしまった……わからない、私の身体は一体どうしちゃったの？その疑問に対する答えを得られ無いまま、私は痛み

が治まるのを只々待っていた……

〈四宮邸自室〉

「結局……アレはなんだったの？」

アレから座り込んでしまった私の身体は、5分程すると落ち着きを取り戻した。あの2人には、余計な心配を掛けてしまったけれど……立ちくらみという事にして誤魔化した。私自身……どうしてああなったのか、わからないから仕方ないし……  
……命懸けなんだと、言っていましたわ

「……」

あの時の事を思い出し、また心臓が小さく跳ねた。

「……」  
サササ

私は気を紛らわそうと、スマホを操って優君と撮った写真を表示する……今までだったら写真を撮った時の優君の反応を思い出して、ホッとしてたり口元が緩んだり

するの……

「……………」

この時は何故か……ホツとする事が出来なかった。だけど……その理由を知る事になるのは、それから直ぐの事だった。

## 早坂愛は気付かない

感想ありがとうございます（・ω・）

---

奉心祭に向けて、学園内が活気付き始めたある日の午後……私はマスメディア部に居た。廊下で紀さんに見つかるや否や、腕を引かれて此処まで連れて来られたからだ。うーん……最近はこちらと寝不足気味だから、余計な疲労とかは溜めたくないんだけど……部室に入ると、巨瀬さんが椅子に座って何やら呟いていた。

「文化祭……A組はコスプレ喫茶……か、かぐや様が何をお召しになられても、尊さで私きつと死ぬわ……!!」ハェー、ハェー――

「エリカったら、ずっとあんな調子で……一体どうすればいいのか、とても困ってまして……」

「……もう文化祭休んじゃえば?」

「文化祭休んだら後悔で死んじゃう!!」くわっ！

「何か、正気を保てる良い方法はないでしょうか……」

「そもそもの話、普段から正気を保ててるかどうかが疑わしい気がするけどね……」

「はあ……せめてかぐや様が何を着られるか分かれば、なんとかイメトレ出来るんだけど……」

「うーん……残念だけど、まだそこまでは決まっていんだよね。」

「クリスマスも近いですし、サンタコスとかありそうですわ！そして会長はこう言いますの……四宮がサンタの格好をするだけで、素敵なプレゼントになると……」

♡「……」

「あははは、いくら会長でもそんなハズいセリフ言わないでしょ！」  
言ってる。

「早坂さんもまだ着る衣装決めてないなら、今此处で色々着てみない？」

「なんで!？」

「衣装は色々揃ってますわ！」  
「……」

「だからなんで!？」

「以前の反省を踏まえて、常備していますの。」

「何の反省だし!?」

.....

結局2人の口車に乗せられた私は、次々と差し出される衣装に袖を通し続けた……

「早坂さん、可愛いー!」

「とっても素敵ですわ! これならA組のコスプレ喫茶は、繁盛する事間違いないですわね!」

「そうかなあ……」

「うんうん! 会計君だって、コスプレした早坂さんを見れば可愛いとか言うに決まってるわ!」

「っ!」

(エリカ!?)

「……ほ、ホント?」アザ

「ホント、ホント! 気になるんだったら、写真撮って会計君に送ってみれば?」

「……お、送るかはわからないけど、折角だから写真は撮っておこうかな?」

「あ、だったら私が撮りますわ。早坂さん、スマホを貸して下さいます?」

「……うん、お願い。」<sup>ス</sup>

紀さんにスマホを渡すと、一步引いて全身が写る様に調整する……こういうコスプレをするのは初めてだから、記念に撮ろうと思っただけで……別に優君に見て欲しいとか、そういうつもりじゃ……

早坂先輩、滅茶苦茶似合ってますね

凄く可愛いです

「……<sup>ス</sup>!?」<sup>ツ</sup><sup>ブ</sup><sup>ン</sup>

私ったら何を考えてるの!? 私は必死に頭を振って、浮かび上がった考えを振り払った。

「早坂さん、どうしたの?」

「な、なんでもないし……」

「じゃあ、撮りますわよー?」

(……生徒会室で会長にコスプレを披露するかぐや様。数々のコスプレを披露した後、かぐや様はどのコスプレが良かったか訊ねます。その問い掛けに会長は、甲乙付け難いが……やはり1番は普段の四宮の姿だな。四宮はありのままの姿が1番



綺麗だ……会長は言いながら、スマホで普段の制服姿のかぐや様を写真に収める……コレですわ!! 帰ったら直ぐにこのシチュを形にしませんと!!) ㍿—— !

「……紀ちゃん? どうしたし?」

「……かれーん?」

「……ッー!」 ㍿㍿㍿、㍿㍿㍿

(まさか、コスプレというありきたりなキーワードから、ここまでの神ネタが浮かび上がるとは……自分で自分が恐ろしいですわ!)

確かに恐ろしい。

「かれんたら、また何か変な事考えてる……」

「あー……」

(ポエムでも浮かんで来たのかなあ……)

……

「じゃ、私用事あるから行くね。」

「ええ、また明日。」

「早坂さん、またねー!」

部室を出て行く早坂さんを見送ると、私はエリカへと向き直り問い掛けます。

「それで、エリカ？ 先程の早坂さんとの遣り取りで石上会計を話題に出したのは……何か意味がありました？」

「意味？ いや、早坂さんて会計君が1番仲良い男子っぽいから言ってみたんだけど……」

「はあ、要は何も考えていなかったと……エリカ、此処だけの話ですけど……多分、早坂さんは石上会計の事を意識していますわ。」

「え、そうなの!? だったら、私達が色々フォローしてあげた方が良くない？」

「……良いですか、エリカ？ 恋愛というのは、部外者が関わりを持つ事で拗れる事が往々にしてあるのです！」 ~~サササ~~

……私はペンを手に取ると、ホワイトボードへと描き込んで行きます。先ずは神カップリングである会長とかぐや様を……次いで、早坂さんと石上編集の姿を……

「そうなの？」

「そうなのです！ 私達が一切関わらなくても、会長とかぐや様は上手くやれているでしょう？ つまりはそういう事です！」 ~~サササ~~

言う程上手くやれていない。

「仮に石上会計と早坂さんがそうだったとしても、私達が余計な気を回す事が必ずしもプラスになるとは限らないのですわ！」~~モヤモヤ~~

私は恋愛ポンコツお味噌のエリカでもわかる様に、絵を使って説明を試みます。これなら幾ら恋愛に関してポンコツなエリカでも、しっかりと理解する事が出来……  
「……ねえ、かれん。なんか……会長とかぐや様の絵だけ描き慣れてる感出てない？」

「  
かれんは墓穴を掘った。」

私はマスメディア部を出ると、廊下の隅に身を隠してスマホを操作する。スマホ画面には、私のコスプレ姿が次々と表示されて行く。

「……」~~スッスッ~~

うんうん！ 会計君だってコスプレした早坂さんを見れば、可愛いとか言うに決まってるわ！

「……ッ」

早坂先輩、滅茶苦茶似合ってますね

凄く可愛いです

「ッ！」「ブッブッ」

またしても浮かび上がって来た考えを頭を振って散らす。もうっ……幾ら優君でも、そんな恥ずかしいセリフを言う訳がっ……

……よく頑張りましたね、先輩は偉いです

僕も先輩のチカラになれる様に頑張りますから

「くっ……!!」

(メチャクチャ言いそうだし！)

あの日……涙を流す私に彼が掛けてくれた言葉が脳内でリフレインする。更に……来年が無理なら再来年……それが無理だったら、更に次の年に……必ず遊びに行きましよう

つい先日のも思い出してしまい、益々身体の熱は上がって行く……何？ 本当に何なの？

「はあ、さっさと優君の所に行っ……ってあれ？」

（そもその話……何て言ってコスプレ写真を見せれば良いの？）

……

### 〈中庭〉

「こんなモノ……かな？」

私は自身の格好を見下ろしながら、そう口にする。制服をしつかりと着直して、黒髪のウィッグを付け、カラコンをしている今の私は、何処からどう見てもかぐや様に見えるだろう。

「……」

周囲に気を配り、足音を立てない様に細心の注意をしながら、茂みに座る優君の背中を視認する。私がかぐや様に変装しているのは、ちゃんとした理由がある。かぐや様の変装なら、優君相手でも数秒程度なら騙せる自信があるからだ……夏休みにあった花火大会の一件で、本家の人間を騙し通した実績もあるし！ そう決心し

て、私は優君へと話し掛けた。

「あら、石上君。こんな所で何をしているの？」

「早坂先輩、何してんすか？」

（早っ!）

「っ!? よ、よくわかったね? この変装、結構自信あったんだけど……」

「いや、流石にわかりますよ……早坂先輩の事なんですから。」

「え……?」

「多分……どんな変装してても、早坂先輩の事ならわかる自信がありますよ。」

「わ、私の事なら……?」  
「アッ、ヤッ」

「まただ……また心臓が跳ねた。当初の予定なら……優君に私の変装を見せた流れで、マスメディア部で撮ったコスプレ写真を見せるつもりだったのに……」

「……先輩? どうしましたか?」

「そ、その……」  
「フッ、フッ、ハッ」

優君は私の様子を心配そうに伺って来る。わからない……優君を見ると、心臓が強く脈打つし、呼吸が浅くなるし、頭がボーっとするし、身体が熱くなる……

「な、なんでもないの！……ごめん！私、今日はもう帰るね！」

「え？ 先ばっ……」

「優君、また明日ね！」々々

「あっ、ちょっと待っ……!？」

背中越しに聞こえて来る静止の声を聞き流し、私は走ってその場を去った。

……

「ハッ……カッ……ふう……」

ウィッグとカラコンを外し、問題無い程度まで制服を着崩していつもの姿に戻ると、私は中庭を歩いて心を落ち着かせる。

いや、流石にわかりますよ……早坂先輩の事なんですから

多分……どんな変装してても、早坂先輩の事ならわかる自信がありますよ

「~~~~っ！！？」ヤッ

脈打つ心臓を抑える為、胸に手を置きながら歩く。おかしい、ちょっと走ったくらいでここまで苦しくなるなんて……心なしか先程よりも身体の熱が上がっている気がするし、呼吸も浅い気がする。

「ハァ……ハァ……」

ヨロヨロと移動して、人気の無い所を目指す。とりあえず、生徒会が終わるまで何処かで休んで……

「ちゃ……」

胸を締め付けられる様な痛みに……ガクンと膝が折れ、そのまま座り込んでしまった。

「早坂さん!? 大丈夫ですよ!」

「きゅっ、救急車!? 救急車呼ばなきゃ!」

その声に顔を上げると、紀さんと巨瀬さんが慌てて此方に駆け寄って来る光景が目に入った。続いて、救急車という言葉に理性が反応する。

「待って、救急車はっ……やめて……!」

(ダメだ……救急車なんて呼べたら、四宮家にも話が行ってしまう。どんな理由でこうなってるかわからない以上、弱味になる行動は控えないと……)

「早坂さん!? どうしてです!」

「お願いっ……!」



「で、でもっ……」

「び、病院にはタクシーで行くからっ……」

「……エリカ、救急車では無くタクシーを！」

「え？ う、うん……！」とッ

「ありがとう……」

その後、付き添いを希望する2人を宥めてタクシーに乗り込んだ私は、1人で病院へと向かった。

「ハア……ハア……」

呼吸を整えながら考える……私の身体に起きた異変は、四宮家に対する弱味となり得るのか……これが原因で、優君の足を引っ張る事になってしまわないか……病院へと向かう車中で、それだけが気掛かりだった。

## 早坂愛は耐えられない

感想ありがとうございます（・ω・）

### 〈診察室〉

「うん、恋の病だね。」

「」

「恋煩いによる睡眠時間の減少、意識している相手が近くに居る事で起きる許容量を超えたドキドキ、それによって起こる体温上昇と心臓の脈速……まあ君の場合、使用人の仕事で体力が落ちていた事も多少は関係してるけど……結論は恋の病だね？」

「え、死にたい……」

「医者の前でなんて事を言うんだい……でもこの前のお嬢さんといい、今の若い子もちゃんと青春してる様で安心したよ。」

「先生、今は青春アオハルって言うんですよ。」

「死にたい……」

「安心しなさい、私はこの症例は初めてじゃ無いからね……慣れたモノだよ。」

「マジ最悪……」フ。ゥ。ゥ。

（嘘だ、そんな訳無い！ だって……だってもしそうなら、私はかぐや様と同じレベルのアホって事になって……!?!）

「……幸運にも病室は空いているから、念の為少し休んでから帰りなさい。」

（違う、私はかぐや様みたいにアホじゃ無い!）

「……待って下さい！ 何か見落としが無いか、もっとちゃんと調べて下さい!!」

「確実に四宮よのお嬢さん前と同じ展開になると思うから、お勧めは出来ないね？」

「」

「……認めたくない気持ちも少しはわかるけどね。でもね、たとえ……四宮家の使用人という稀有な仕事をしていても、人である以上恋に落ちるのは避けられない事なんだよ?」

「ば、馬鹿な事を言わないで下さい！ 私は幼い頃から今まで、四宮家の使用人と

して滅私奉公と過ごして来たんですよ!？ 今更仲の良い男の子が出来たくらいでそんなっ……」

「幼い頃からね……なら、今までその子以外に仲の良い男の子とかは居たのかい？」

「それはっ……居ませんでしたけど……」

「じゃあ、遅めの初恋だね。」

「だ、だからって……今まで我慢だって出来てたのに、なんで急に……」

「自分で我慢って言っちゃってるしね……まあ、その子に対する気持ちのキャパシティが限界を超えてしまった事で、抑えられていた感情が噴き出したって所だろうね。因みに、その子の写真とかあったりしないのかい？」

「一応、ありますけど……」

「……四宮のお嬢さんもそうだけど、なんで君達は好きな男子の変顔写真を見せるんだい？」

……

「なるほど……四宮のお嬢さんとは、また違ったタイプが好きなんだね？ 同じ理

由で病院に來たから、そこら辺も一緒だと思っただけ……」

「人の好みは千差万別ですからね。」

「ち、違いますっ……私はそんなっ……！」

目の前の医師から突き付けられる事実、イヤイヤと頭を振って否定する。私が  
アホと同じだなんて、絶対に認めたく無いっ……！！  
かぐや様

「……いいかい？ 人を好きになる事は決して恥ずかしい事では無いんだよ？ 若いんだから、怖がらずに一步踏み出して……」

「その踏み出した一步の所為で、17の時に子供出来たんですよ？」

「何で今言っちゃうかな……ええと、何処まで話したっけ？……うん、避妊はちゃんとしなさい。」

「そんな話はしてません！」

「年下の男の子ねえ……普段は大人しい子が、いざって時に見せるギャップにやられたりするのよねえ……年下でも男らしい部分があるって事を見たり聞いたりして、意識し始めちゃったり……」

「……」

隣で佇んでいた看護婦さんの言葉に、核心を突かれた様な気がした……その言葉通りの事を、私は体験したばかりだったから……

「貴女もその口だったりする？」

「べ、別に私は……」

「……まあ良いわ。とりあえず、病室に行きましようか？ 貴女は少し、横になった方が良いわ。」

「……わかりました。」

案内された病室のベッドで横になった私は、かぐや様に病院で少し休んでから帰宅するというメッセージを送る。当然ながら恋の病と宣告された事は伏せるしか無いので、軽度の過労という事にして……数分後、かぐや様からメッセージが返って来た。

へこちの事はなんとかするから、ゆっくり休んでから帰って来なさい。〽

「……」サ。サ。サ。

謝罪と御礼の言葉を送り、スマホの電源を切る。はあ……今日は確か、〇〇会社社長の奥様が来邸される予定だった筈だ。特別気難しい人では無いので、私が居なくても上手く対応出来ると思うけど。とりあえずは、救急車で運ばれなかった事に安堵する。もし救急車で運ばれていたら……四宮家は当然として、かぐや様にも連絡が行ってしまう所だった。もし、かぐや様に今回の事がバレたら……

へえ？ 早坂、貴女……散々私に好き勝手言ってた癖に、石上君が好き過ぎて倒れるなんて……お可愛いこと。

「……」ぐ。

かぐや様にマウントを取られる様になる事だけは、絶対に阻止しないと……

「もう、どうしてこんな事に……」

うん、恋の病だね

「……」！「サァァァ」

つい先程、先生から言われた言葉が頭の中で響いた……私は恥ずかしい気持ちを誤魔化す様に、頭から布団を被って潜り込んだ。目を瞑ると、ここ最近の記憶が

次々と浮かんでは消えて行く……

来年が無理なら再来年……それが無理だったら、更に次の年に……必ず遊びに行きましよう

……命懸けなんだと、言っていましたわ

多分……どんな変装してても、早坂先輩の事ならわかる自信がありますよ

「……ぎ！」

（違う違う違う！ アレは多分そういうのじゃ無いから！ 優君は別にそういうつもりで言った訳じゃ無いんだから、私が変に穿った受け取り方をしたら、それこそ……）

……よく頑張りましたね、先輩は偉いです

「~~~~っ!」ん。ハイ。タ

熱くなった顔とムズムズする感覚から意識を逸らす為に、布団の中で足をバタつかせていると……病室の外に人の気配を感じた。私は布団の隙間から、病室の入り口をこっそり伺う。

「此処よ。今は休んでるから、静かにね？」カヂヤッ



「はい、ありがとうございます。」

「ッ！」「どッッ」

直後にドアが開けられると、2人の人間が入って来た。1人は此処まで案内してくれた看護婦さん、もう1人は……

「っ!？」

(ゆ、優君!?! どうして此处に!?!)

薄目を開けて視線を向けると……心配そうな表情を浮かべて、私の様子を伺う優君の姿が見えた。

「早坂先輩……」

優君はそう零すと、黙って私を見つめて来る。

「……」

(心配、させちゃったのかな……)

「……じゃあ、私は仕事に戻るわね。」

「あ、はい。ありがとうございました。」

「……」  
「……」

「あの……?」

看護婦さんは病室を見渡すと、優君をジッと見つめている。その様子を見て、何か嫌な予感がした。

「実はね、こっちの病室は看護師の見回り頻度が少ないの……だから、次の見回りが来るのが3時間は後なんだけど……2人つきりだからって、変な事をしちゃダメよ?」

「は?」

「」

早坂の嫌な予感が当たった。

「いや、しませんよ……」

「その上、この病室ってVIP向けの構造をしてるらしくて……詳しくは知らないけど、耐震性と防音性に優れてるらしいのよ。だから、どんなに嬌<sup>声</sup>を出しても大丈夫だし……」

「今、声のニュアンス変じゃなかったですか?」

「どれだけベッドが揺れても、外には伝わらないのよね……」

「いや、だから！ 何もしませんって!!」

「おまけに、この付近で患者さんが入ってる病室は此処以外無い。つまり……見舞い客が間違っって入って来る事も無いし、どれだけ騒いでも簡単にはバレ無いけど……絶対に変な事しちゃダメよ?」

「この人しつけれ!!」

「男の子なら財布の中に1つは入れてるだろうから、心配はしてないけど……TPOは考えてね?」

「財布に1つって何の話ですか!? あとTPO云々に関しては、ブーメランですかね!?!」

「じゃ、頑張ってるね?」ニヤ

「何を頑張れと……って、言いたい事だけ言って出て行くし……」

「……」

（優君には悪いけど、寝た振りでやり過ぎさせてもらおう……今の精神状態で優君とまともな会話が出来るとも思えないし……）

この時の私が選んだ選択が正解だったのか、私にはわからない。何故なら……

「早坂先輩……」ㄹㄹ

「ㄱ!?!」ㄷㄹㄱㄱ

布団からはみ出ていた左手を両手で包まれる……優君の手の感触に身体が僅かに震えたけど、それ以上の反応が起こるのを理性で抑え付ける。

「……ㄱ!?!」

（ゆ、優君!?!もしかして、看護婦さんに唆されたからって何かするつもりじゃっ……）  
「ナマ先輩達に、早坂先輩の事を聞いて来たんです。それと、早坂先輩を診断した先生から聞きました……軽い過労だって。確かに、最近の先輩は様子がおかしい事もありましたけど、疲れが溜まっていた事が原因だったんですね……」

「……」

（そっか、紀さん達が優君に伝えちゃったのか……余計な心配を掛けたくなかったから、黙ってるつもりだったんだけど……）

「先輩は……過労で倒れる程、何かを頑張ってたんですね……」

別にそういう訳では無い。

「……」

（優君にも心配掛けちゃったな……明日にでも、大丈夫って事をちゃんと伝えないと……）

「確かに、僕は頼り無いのかもしれませんが。早坂先輩みたいにハッキングが出来る訳でもないし、変装だって出来ません。だけど……」

「……ッ」ムッ

（違う、そんな事ない……私は別に、優君を頼り無いと思った事なんて……）

恋の病で倒れたという真実を知る早坂とは違い、石上は自身が見聞きした断片的な情報を繋ぎ合わせる事でしか推論を導き出す事が出来ない。自分達の目の前で倒れたというマスメディア部員の情報、診察をした医師から聞いた過労という情報、そして……早坂愛と自身の前に聳え立つ、四宮家という絶対的な壁の存在……それらを繋ぎ合わせた結果、早坂の思考以上に石上の脳内には、シリアス的な考えが次々と浮かんでは消えて行っている状態であった。

「僕は先輩の為なら……命だって懸けてみせます。だから、1人で抱え込まないで下さい。1人で頑張り過ぎないで下さい……あの時に交わした、先輩と一緒に頑張るって約束を……果たさせて下さい。お願いですから……」ヤッヒ

対する早坂も、なまじ寝ている振りをしてしまった為……石上の口から次々と出て来る言葉をノーガードで受ける羽目に陥る。誠実であり、真摯であり、青臭くもあり、そして何よりも……小っ恥ずかしいセリフの数々に早坂は……

「~~~~!!」アッザッザッ

（ゆ、優君、お願いだから待って!? こ、これ以上は、寝てる振りも限界になっちゃっ……!!）

限界寸前であつた。

「早坂先輩、僕は……」ヤッヒ

「~~~~!!」

（も、もう限かつ……）

「失礼しますわ。」ゴッゴッ、カッザッ

「早坂さん、大丈夫？」

「!!？」

（紀さんと巨瀬さん!!）

「あ、先輩達もお見舞いに来たんですね？」キッ

「ええ、目の前で倒れる所を見てしまいましたし、早坂さんの事が心配で……」

「会計君、お医者さんから何か聞いてる？」

「はい、軽い過労らしいです。此処で少し休んで大丈夫なら、帰っても良いみたいです。」

「そっか、良かったあ……」

「本当ですわね……」

「……僕はそろそろ帰りますね。先輩方、あとはお願いします。もし早坂先輩が起きたら、お大事にと伝えといて下さい。」

「うん、任せて！」

「必ず伝えておきますわ。」

「……お願いします。」

「……」

（あ、危なかった……）

本日の勝敗、早坂の負け

世界の名医でも治せない病に罹ってしまった為。





## 早坂愛は実現したい

感想、評価、誤字脱字報告ありがとうございます（・ω・）

---

「ねーねー、ママー？」

私の傍らには、まだ小学校に上がったばかりの小さな女の子が居た。その子は2つの瞳をキラキラと輝かせながら、私を見上げている。

「うん？ なぁに？」

「ママはどうしてパパと結婚したのー？」

「うん……そうね、ママがまだ子供の頃の話なんだけど……」

「子供の頃って、今のゆあくらい？」

「うーん、もうちょっとお姉さんだったかな？ 私が高校生の時だったから……あと10回、優愛に誕生日が来たら同じになるわね。」

「こーこーせい！ 大人だ！」

「ふふ、その時のママはね？ 凄い嘘吐きだったの。色んな人の前で、嘘の自分を作って過ごしてた……そんな時に、1つ年下の男の子に出会ったの。それが……」

「パパだ！」

「うん、正解。それで、パパ相手にも嘘の自分を作って接してたんだけど……何故かパパにはバレバレだったの。」

「パパすごい！」

「うん……だから、パパとは会わない様にしようとしたんだけど……捕まって怒られちゃったの。」

「……パパ、怖かった？」

「……ううん。あの時パパがママを捕まえて怒ってくれたから……ママもパパにだけは、嘘を吐かない事に決めて……それから少しずつだけど、パパ以外の人にも本当の自分を見せられる様になったの。」

「ふーん……？」

「ふふ、まだちょっと優愛には難しいかもね？」

よくわかって無さそうな表情を浮かべる子供の頭に手を置いて、優しく撫でる……

あの時の事は、それこそ昨日の事に思い出す事が出来る。

だけど、友達が困ってたら助けたいです

……よく頑張りましたね、先輩は偉いです

僕も先輩のチカラになれる様に頑張りますから

「……この話の続きは、優愛がもう少し大きくなってからね？」

「えー!? ゆあもっとお話し聞きたーい！」

「ダーメ♪」

「……何の話？ 随分と盛り上がってるみたいだけど……」

背後から掛けられた声に振り返ると……口の前に指を立てながら答える。

「……内緒♪」

「ないしょー！」

「ええ？ 気になるなあ……」

「内緒だもんねー？」

「ねー！……あ！ とっとり鳥の助の映画が始まっちゃう！ パパ、ママ早くー！

」タタッ

元氣良く走りながら、テレビの前に向かう娘の姿を見て……自然と笑みが零れた。

「ふふ」

「……どうかした？」

「ううん、幸せだなんて思っ……優君、これからもよろしくね？」

「……こちらこそ、これからもよろしく。」

ギョッと握られた手から伝わって来る温もりを感じながら……これからも幸せな日々が続いて行くのだと思った。

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

 $\langle \tau_0 \tau_1 \tau_2 \tau_3 \rangle$ 

!

१.१.१.१.१

!

「朝……」

枕元で鳴り響くアラームを止めると……私は意識を覚醒させようと、身体を起こすと小さく伸びをした。

「ふあっ……今日は平日だから、朝ご飯作った後に優君と優愛のお弁当も作らないと……っ!？」カハッ

そこまで口にして気付いた。そうだ……此処は四宮邸の自室で、私はまだ高校生

で、当然結婚なんてしてないから子供だっていなくて……つ、つまり、私がさっきまで見ていた光景は……!!

「~~~~っ!!!?」フ。ワ。ワ。ワ。ハ。ハ。ハ。ハ。

早坂愛……先程まで見ていた夢と寝惚けていた事が原因で、とんでもなく恥ずかしい勘違いをした事に気付き撃沈。

「はあ……まさか、あんな夢を見ちゃうなんて思わなかった……」

あの後、ベッドの上で悶絶した私は……仕事の時間が差し迫っていた事もあって、顔と身体の火照りが治まるのを待つ事も無く仕事をする羽目になった。毎朝のルーティンは何故か普段通りに出来ないし、顔が紅いまま朝の仕事に出たから、他の使用人と顔を合わせる度に体調を心配されるし、一部の使用人からは仕事を代わるから今日は登校時間まで休めとか言われるし、顔が紅い理由なんて言える訳ないし、あれだけ幸せだったのに……それが夢だとわかってちょっと悲しかったし、

マジ最悪……

「昨日は昨日で、あんな事になるし……」

僕は先輩の為なら……命だって懸けてみせます

「……………」

頭を振って昨日の出来事を脳内から追い出す。これじゃあ、まるで私も……かぐや様みたいなポンコツになっちゃったみたいじゃない！ まあ私は、かぐや様と違って救急車で運ばれた訳じゃ無いから、かぐや様と同じレベルって事にはならないだろうけど！ それに、夢に関してだって……

……………

今日も私は、いつもの様にかぐや様の登校に同行していた。秀知院に向かう車中で、帰宅後の予定を話し合った後……まだ時間が残っている事に気付いた私は、かぐや様にある事を訊ねた。

「そういえば……かぐや様って会長さんが出て来る夢とか、見た事あるんですか？」

「

「早坂……突然何を言い出すの？」

「いえ、ちょっとした興味で他意はありません。」

嘘である。この女……今朝見たばかりの夢に動揺すると同時に、それでも自分がかぐや<sup>ッホ</sup>よりはマシである筈だという願望の下、質問を投げ掛けている。

「会長さんと付き合う様になったり、デートしたり、結婚する夢とか見てないんですか？」

（かぐや様、信じてますからね……）

「そ、そんなの……」

もし、かぐやが白銀との情念に駆られた夢を見ていないのなら……それは、自分がかぐやよりもヤバイ領域にいる事の証左となってしまう。恋をした事で、アホでポンコツな面倒臭い恋愛脳となってしまった主よりも、自分はマトモな人間だという証明が欲しいが為に……この話題を振った早坂であった。果たして、その結果は……

「あ、ある訳無いでしょ!?! そんなっ……2人っきりで花火大会に行ったり、クリスマスと一緒に過ごしたり、9人の子供に囲まれながら幸せな家庭を築く夢なんて……み、見る訳無いでしょ!?!?」

「……流石です、かぐや様。」ぎ

（かぐや様も見た事あるんだ、良かった……）

かぐやよりヤバイ領域にはいないが、同レベルである事が確定したので言う程良くない。

「何が流石!？」

「いえ、何でもありません。」

……

まあ、かぐや様と同じ体験をしてるっていうのは、ちょっと納得出来ない部分はあるけど……

「……」

早坂先輩、僕は……

あの時、優君は何を言おうとしてたのかな？ 優君は……私の事、どう思ってるのかな……

「あ……」

そういえば……10月に入って直ぐの頃に、私の事を女としてどう思ってるか、優



君に聞いた事があった筈だ……あの時は、会長さんに振られた所為で（まあ、本気で告白した訳じゃなかったけど！）ちょっとだけ自信に欠けていた事もあって、サラッと聞けたんだっけ？ あの時は確か……

え、ええと……日本人離れした色素の薄い肌とか、太陽みたいにキラキラした髪とか、アクアマリンの様な綺麗な瞳とかですかね

「……ふふ♪」

……少なくとも、10月の時点で良い印象は持ってもらっていたらしい。綺麗な言葉、高校生の男の子が異性に対して簡単に言えるモノでは無い筈だし……それに、優君は来年も再来年も私と一緒に居てくれると言ってくれた……

「……ッ！」「ヤッ」

優君の事を考えていると……自然と胸の中が暖かくなって来る。

「優君……」

会いたい、話したい、触れ合いたい。そして、出来る事なら……恋人として、優君の隣に居たい。だけど、優君は1年で私は2年……彼と学年が違う以上、一緒に秀知院学園で過ごせる時間は、残り1年と数ヶ月しか無い。その残された時間

を後悔しない為には……優君に告白して、受け入れてもらわないといけない。

「でも……」

そんな感情が湧き上がると同時に、私の中の冷静な部分が歯止めを掛ける。仮に優君との事が上手くいったとしても、私がかぐや様より早く幸せになるなんて事が許されるのかという思考が……優君に告白して運良く受け入れてもらう事になったとしても、せめてかぐや様が会長さんと付き合ってからじゃないと駄目だ。かぐや様が……会長さんと……

「……………」

いや、寧ろ……かぐや様の近侍として、更には姉として、恋愛のノウハウを教える為に私が先に優君と恋人になるべきじゃないの？

早坂は秒で意見を変えた。

「っ！」

そうと決まれば、私の取る行動は1つだ。優君に告白してOKを貰える様、只管頑張るだけだ。私はかぐや様と違って、恥ずかしいとかしょうもない理由で告白する事に躊躇したりしないし、何より……夢で見た幸せな光景を実現させる為に！私

は新たな気持ちを胸に、優君との待ち合わせ場所へと向かった。

---

〈中庭〉

「ん、まだ来てないんだ……」サッ

「ハヤ！」

草木を掻き分けていつもの場所へと顔を覗かせると……優君の代わりに猫ちゃんに出迎えられた。

「あ、君が1番？」

「イヤ！」

「そっか、良い子だねー？」ナグナグ

「ナグ…ゴロゴロ」

「ふふふ」ナグナグ

……………

「ちょっと遅れたな……」

放課後、僕はいつもの場所へと小走りで向かっていた。文化祭まで2週間を切った事もあり、放課後に行われるクラス内の役割分担や買い出しの割り振り等、話し合いに時間が掛かる様になって来た。ある程度の話し合いが完了すると、生徒会を言い訳に切り上げて早坂先輩との待ち合わせ場所へと向かう。

「……」

いつもの場所へと向かう途中、昨日の出来事が脳裏を過った……ナマ先輩からの連絡で早坂先輩が倒れた事を聞いた僕は、急いで病院へと向かった。そして、診察をした医師から軽度の過労だと教えてもらったのだ。早坂先輩の病室に案内されている間、看護婦さんにチラチラと見られていた様な気がしたけど、それは良い。それよりも、僕の中には1つの懸念が浮かび上がっていた。

「本当に……過労なんだよな？」

早坂先輩との待ち合わせ場所へと向かう中、それだけが気掛かりだった。

……

「早坂先輩、早いっすね。」ガサッ

「あ、優くっ……?」トクッ

(……あれ? なんか、変……?)

「……先輩? どうかしましたか?」

「え? ええとっ……」アッアッアッ

(何か、何か言わなきゃっ……で、でも、優君がっ…優君がっ……!)

「……あの?」

「そ、そのっ……」アッアッアッ

(す、凄くキラキラしててカッコ良く見える……! え、なんで? 昨日まで普通に見えてたのに……サラサラの髪も、心配そうに私を見て来る瞳も、ちょっと見上げないといけない身長差にも、全部に緊張しちゃう様になってるっ……!?)

早坂愛には、白銀御行にアプローチし告白した経験がある……とは言っても、それは作られたキャラクターを演じ、虚偽の告白をしたに過ぎない。等身大の早坂愛として告白をした事はおろか、異性を好きになった事すら無かったのである。つまり、今この瞬間こそが……早坂愛が石上優に対する恋心を自覚してから、初めて相対する瞬間なのである。

「先輩……何かありましたよね？」

「な、何かってなんだし？」アッヤッ

「誤魔化さないで下さいよ、さっきから様子がおかしいじゃないですか！もしかして、病院で何か言われたんですか!？」

「ち、違っ……っていうか近いっ……！」アッヤッヤッ

「今なんて言ったんですか!？ちゃんとやってくれないと、わかりません！早坂先輩が倒れた理由って……本当に過労なんですか？」

「っ!？」ヤッヤッ

優君の鋭い指摘に、思わず身体が強張った。

「やっぱり違うんですね……本当は、何か重い病気だったりするんですか？」

「べ、別にそういう訳じゃっ……」

「だったら……どうしてさっきから、誤魔化そうとするんですか？本当は……過労以外の病名を言われて、それを隠そうとしてるんじゃないんですか？」

確かに言われている。

「そ、それはっ……」ヌグ

(あ、あまり近くに居るのはマズっ……)

「どうして逃げるんですか？ 僕にも言えない事なんですか!? 早坂先輩、お願いですから本当の事を言っ下さいー!」*サッ*

さり気無く距離を取ろうとした事を見抜かれ、優君に両肩を掴まれた。ま、マズい、本当にマズい！ 私がかぐや様みたいにルーティーンを獲得していないし、こんな精神状態でまともな対応なんてっ……

「ううっ……」*ブッザッザッ*

(ど、どうすれば……段々と顔と身体が熱くなって来てっ……!? これ以上顔が紅くなったりしたら、私の気持ちもバレちゃうんじゃ……!?)

「っ!? 早坂先輩……顔が真っ赤ですけど、本当に大丈夫なんですか!? ……って熱っ!? やっぱり何かあるんじゃないっ……」*アッ*

「ひうっ!」*ビッ*

(んん!? ゆ、優君の手が!? それに、さっきより近っ……!?)

「ちよっ!? へ、変な声出さないで下さいよ!」

「だ、だって……」

（可愛っ……って違う、そうじゃない！ こんな時に何考えてるんだ僕は！ 早坂先輩、体調が悪そうだけど……やっぱり、何か別の病気に罹っててそれを隠そうとしてるんじゃない?!）

「……お願いですから本当の事を教えて下さい。僕は先輩のチカラになりたいだけなんです！」

「うう……」

「早坂先輩！」

「ううっ……！」

……早坂愛は四宮かぐやの近侍である。かぐやと共に幼少の頃から厳しい教えを受け続けて来た早坂だが、当然その教えの中には窮地に陥った時の対処法も存在する。しかし、其処は四宮家……物事の基本的な解決策が、脅迫、暴力、金がスタンダードな嫌な家である。つまり……

「あっ……!!」  
「ッ」

追い詰められた早坂が咄嗟に取る行動も、それに準じたモノとなってしまうのは必定！ 早坂は瞬時にポケットへ手を伸ばすと、取り出したスプレーを石上の顔面



へ向けて放射した。

「あれ、なんかデジャブっ……zzz」ハッ

「ハッ…ハッ……あ　　！ゆ、優君!？」

「……zzz」

「」

本日の勝敗、両者敗北

石上は意識を刈り取られ、早坂はいざ自分が恋をしたと自覚すると、全然上手く立ち回れない事が判明した為。

## 早坂愛は謝りたい

感想、評価ありがとうございます（・ω・）

## 〈翌日〉

「はあ、やっちゃった……」

次の日になっても……私は昨日の行動を引きずったままだった。幾ら緊張で訳がわからなくなってたとは言え……好きな人に催眠スプレーを吹き掛けるなんて、かぐや様でもやらない様な事をして……私のバカ。

かぐやは背負い投げをしている。

「優君、怒ってないといいけど……」

（一応、昨日のうちにLIOEで謝ったし大丈夫だよな？ 放課後になったら、ちゃんと謝るつもりだし。それに……悪い事だけじゃ無くて、ちょっとだけ良い事もあったし……）

……

「ゆ、優君？」 ヅッ

「…… Z Z Z」

「……」

眠り続ける優君の横に陣取ってジッと寝顔を見つめる……催眠スプレーの効き目は体質や体調にも左右される為個人差はあるが、1時間〜2時間は眠ったままの筈だ。その事実が……私の身体を動かした。

「……ッ」 ヅッ

私は優君の頭を少しだけ持ち上げると、地面と優君の頭の間に自身の膝を差し込んだ。別に変な事をしようとしてるんじゃないや無くて……このままにしておいて、優君が身体を痛めたら申し訳ないし……

「ズゅ…ズゅ……」

「……」 ヅッ

規則正しい呼吸音を聴きながら……優君の頭へと手を伸ばし、ゆっくりと撫でる。

「……」 ナズィナズィ

私の嘘をあっさりと見抜いた、年下の男の子。本当の私を知っても、変わらずに接し続けてくれる男友達。私の身体を心配して、私を助ける為に命懸けで頑張ろうとしてくれている……私の好きな人。

「いつか……伝えたいな。」

精一杯の感謝と、私の気持ちを……

「スカ……スカ……」

「……」ガザガザ

……よく頑張りましたね、先輩は偉いです

僕も先輩のチカラになれる様に頑張りますから

「年下なのにカッコイイとか……ズルいし。」シシシ

「うう……zzzz」

「……ふふ♪」ガザガザ

……一見良い雰囲気のように見えるが、催眠スプレーによる加害者と被害者である。

……

「うん……優君が寝てる状態なら普通に平気だったし、少しずつ慣れて行けば……」

「……居た！ 早坂さん、お願い助けて！」

「もう、エリカったら……」

「……巨瀬ちゃんに紀ちゃん？ 一体どうしたし？」

「実は……」

……

〈マスメディア部〉

「文化祭直前の特集ですか？」

「そ、目ぼしい所の意気込みとかね。この前2人が作った文実の記事も好評だったみたいだし……頼まれてくれる？」

「はいっ!!」

……

「……って部長に頼まれちゃって、いよいよ本当にかぐや様を見て倒れてる場合じゃなくなってきたのっ！ 助けて早坂さん!!」

「ウチの事、ドラ○もんか何かだと思ってない？」

「お願い！ かぐや様を前にして緊張しない方法が知りたいの！ かぐや様の目の

前で倒れるなんて失態、絶対にする訳にはいかないし……」

「うーん、そう言われても……」

「そうだ！ 早坂さんは会計君が好きなんだよね？ ドキドキして倒れそうな時とかどうしてるの？」

「」

「」

（エリカー！?）

「こ、巨瀬ちんてば、何言ってるし!？」

「え、違うの？ 早坂さんは会計君の事を意識してるってかれんが言ってたんだけど……」

「……紀ちん？」

「」

（エリカー！? 情報漏洩にも程がありますわよ!？）

「ふふん、私も色々勉強してるんだよ？ 意識してるって事は、好きって事なんですよ？」

「べ、別に……」

巨瀬さんの言葉を否定するのは簡単だ。私は今まで数百、或いは数千の嘘を吐いて生きて来た人間だ。だけど……例え嘘だったとしても、別に優君の事は好きじゃない、という言葉の口にする事は出来なかった。その嘘だけは……吐きたくなかった。

「……」

「早坂さん？ どうしたの？」

「そ、それよりもエリカ！ 早坂さんに聞きたい事があるのでしよう!!」

（此処で誤魔化しておかないと、私にも被害が来そうな気がしますわぁ……）

私が何も言えずに居ると、紀さんが話題の転換をしてくれた……まあ、そもそもその原因は、紀さんが余計な事を巨瀬さんに言ったのが原因なんだけど……

「あ、そうだった！ あのね、前に早坂さんが言ってたルーティーンってヤツを教えて欲しいの！」

「……ルーティーン？ 教えたからって必ず出来る様になるとは限らないけど、それでも良いの？」

「うん、お願い！ 3年生と一緒に過ごせる最後の文化祭だもん、出来る備えはしておきたいの！ 私達、正直かなり不安がられてると思うから……」

「自覚あったんだね。」

「エリカに倒れられたら、取材どころではなくなりますし……早坂さん、私からもお願いします。」

「別に良いけど……紀ちゃんは大丈夫なの？」

「ふふ、心配は無用ですわ……私は日々の妄想で鍛えてますので！」イメトレ セミ

「それは人として大丈夫なの？」

「勿論です。余程の事でも無い限り、倒れたりなんてしませんわ！」ツツ

「根本が大丈夫じゃないのよ、あの子……」

「……巨瀬ちゃんもね。」



「……」

「……」

その日の放課後……私は優君と中庭で向かい合っていた。理由は単純で、昨日の件を謝りたかったから。一応は昨日の夜にLIOEで謝って許してはもらったけど……ちゃんと謝っておきたかったので、態々優君に足を運んでもらったのだ。

「優君、昨日はごめんね……」

「いえ、僕の方こそ昨日はその……すいませんでした。強引に色々聞き出そうとして……」

「ううん、私もその……そ、それより、優君は大丈夫？どこか痛めてない？」

「それは大丈夫ですけど、まさか催眠スプレーを吹っ掛けられるとは思ってませんでしたね……」

「うっ、本当にごめんね……優君は心配してくれてたのに、私ったら……」  
ぐぐ

「いえ……僕も少し強引過ぎましたから、お互い様って事で。」

「……うん、ありがとう。優君は心配してくれたけど、本当に変な病気とか……そういうのじゃ無いから、それは心配しないで。」

「それなら、良かったです。でも過労で倒れたんですから、無理はしないで下さいね？」

「……うん、ありがとう。」

「あ……そういえば、早坂先輩が前に言っていた機種を実際に見に行っただけですけど……」

「……へえ、どうだった？ 良い感じ？」

お互いに謝り合った後、優君は気まずい雰囲気にならない様な話題を振ってくれた……こうやって隣に座って話をしているだけで、私の中の何かが満たされていくのを感じる。昨日は色々な要素が重なった所為で、凄く動揺してしまったけど……冷静になってみれば、私はかぐや様と違って好きな人<sup>優君</sup>と2人つきりになる機会が多いんだから、その分アピールする時間が増える事を喜ぶべきだと気付いた。まだちょっとだけ、優君を見ているとドキドキしちゃうけど……この胸の高鳴りも、優君に対する気持ちの表れだと思いと心地良く感じる。

「……ふふ♪」

「……先輩？ どうしましたか？」

「ううん、なんでもない♪」

「……？」

〈四宮邸〉

その日の夜……仕事を終わらせてかぐや様の部屋を訪れると、ベッドに突っ伏したまま動かないかぐや様が視界に入った。はあ……また会長さん関連で何かやらかしてしまったのだろう。私はベッド脇まで近付くと、かぐや様に話し掛けた。

「それで、かぐや様……今度は一体何をやらかしたんですか？」

「やらかした前提で聞かないで……」

「それは失礼しました。では、ベッドに突っ伏している理由を聞かせて頂けますか？」

「実は……」

……

「あ~~~~あ……かぐや様、やっちゃいましたね。これで暫くは、会長からデートに誘われる……なんて事は無いでしょうね。だってズバツと断っちゃったんですから。はあ、なんて勿体無い……」

「し、仕方ないでしょ!?! あんな風にサラツと誘って来るなんて思ってなかったんだもの! 脳が理解するのに時間が掛かっちゃったの!!」

「まあ確かに、普段の会長さんなら考えられない行動ですよ……何か心境の変化でもあったんでしょうか?」

「そ、それはわからないけど……とにかく早坂! どうにかして時間を巻き戻す方法を探して!」

「私ドラ○もんじゃ無いのでちよつと……ただ、私から言える事は一つです。会長さんは勇気を出してかぐや様をデートに誘ってくれたんです。次はかぐや様から誘ってあげるのが、誠意ある行動というモノではないでしょうか。」

「私から……」

「……かぐや様、時間は有限です。残った学園生活を無意味に過ごしたく無いのなら、妙なプライドに固執して後悔する事だけはしないで下さい。」

（かぐや様は私と違って……好きな人と堂々と会う事も、遊びに行く事だって出来るんですから……）

「わ、わかってるわよっ……」

「まあ、かぐや様みたいなヘタレ系お嬢様には無理かもしれませんが……」

「誰がヘタレ系お嬢様よ！ 別に会長をデート視察に誘うくらい出来るに決まってるでしょ！」

「デートの事を視察と言い換えている辺り、ヘタレ要素が抜け切れてませんけどね。」

「は、早坂!!」

「あー、はいはい。」

（これだけ煽っておけば、かぐや様でも勢いでデートに誘うくらいは出来る筈……）  
……

〈次の日〉

「は、早坂あ……石上君に会長とのデート取られちゃったあ……」

「え、なんで……？」

本日の勝敗、かぐやの敗北

白銀を文化祭デートに誘えなかった為。

## 石上優は仕掛けたい①

感想、評価ありがとうございます(。▽。)

---

### 〈四宮邸〉

「早坂！ 私が石上君の代わりに、会長と文化祭の視察に行ける方法を今すぐ考えて！」

「普通に頼めば良いんじゃないですか？」

「何を言ってるのよ！ そんな事を石上君に頼んだら、私が会長と視察に行きたいから頼んでると思われるじゃない！」

「正にその通りなのでは？」

「全然違うから！ 会長が最初に私を誘ったって事は、文化祭の視察に行くメンバーは本来私と会長だった筈でしょう!? 私はただ、本来進む筈だった未来に修正

したいだけだから！」

「随分と仰々しい言い方をしてますけど、その立場を捨てたのはかぐや様ですからね？」

「もう！ そんなイジワル言う暇があるなら、早く良い案を出して！ 文化祭の日に石上君に急用が出来て、尚且つ石上君から私に視察を代わって欲しいって連絡が来て、でも私は石上君に頼まれて仕方無く応じてあげるってスタンスになる感じの案を！」

「しれっと要求が多い……無いですよ、そんな都合の良い展開になる様な案なんて。」

「早坂は石上君と友達なんでしょう!? だったらこう……いい感じに誘導したり出来ないの!？」

「1番重要な所がふわっとしてますね、面倒な部分は私に丸投げですか……」

いつも通りのかぐや様による無理難題、流石に今回ばかりは対応の仕様がなくてこの時は思っていた。でも……



〈北校前〉

「か、会長っ……………今日は、その……………」

「あ、ああ、石上から話は聞いている……………じ、じゃあ、そろそろ入るか？」

「え、ええ、そうですねっ……………！」

「……………」

「……………」

私と優君は、北校の校門前で話す会長さんとかぐや様を隠れて眺めていた。会長さんは言動に動揺が滲み出ているし……………対するかぐや様も、僅かに顔を紅くして俯いている。

「……………！」<sup>トヤ</sup>

「こんなもんですわ……………みたいな顔しないの。」<sup>ム</sup>

「<sup>ウ</sup>!?……………でも、上手くいきそうじゃないですか？」

「……………うん、そうかもね。」

かぐや様は俯きつつも、ピッタリと会長さんの隣を歩いている……その姿を見つめながら、優君へと言葉を返す。事の発端は昨日、優君のある発言から始まった。

……

〈中庭〉

「早坂先輩、ちょっと聞きたい事っていうか確認したい事があるんですけど……」

「ん、なに？」

かぐや様に無理難題を言われた次の日……いつもの様に中庭の人気の無い場所に座って優君と話をしていると、神秘的な面持ちで優君が訊ねて来た。

「四宮先輩って会長の事、好きなんですよね？」

「」

「……早坂先輩？」

「……」

（これは、どう答えるのが正しいんだろう……私自身に関する事で優君には嘘を吐きたくないけど、かぐや様の事に関しては別問題だし……うーん、でも優君は1学期の頃からかぐや様と会長さんにコーヒーの無料券をあげたりして、2人っき

りになる機会を意図的に作ろうとした所があった……優君の察しの良さを考慮したら、かぐや様の会長さんに対する好意はバレていると思って間違い無いと思うけど……念の為、確認はしておかないと。」

「あの……どうかしましたか？」

「……ええと、どうしてそう思ったの？」

「いや、だって……四宮先輩の好みのタイプって、ドンピシャで会長みたいですし……」

「……具体的には？」

「自信家だけど優しく、眼付きの鋭い頭の良い人ですよ？ あと、路地裏で隠れて泣いてる女の子を見つけ出す事が出来る人。」

「うーわっ……」

（かぐや様……優君に会長好きさんの事全部バレてますけど、大丈夫なんですかね……）

「あ、もしかして逆ですか？ 好みのタイプが会長なんじゃなくて、会長が好きだから……そのまま会長が好みのタイプになったパターンですか？」

（これは、誤魔化しても意味ないかな……でも優君なら、言い触らしたりはしない

だろうし大丈夫……っていうか、ここまでドンピシャでバレてるかぐや様の方に問題があるし！」

「う、うん、まあ……でも、よくわかったね？」

「まあ、今までの言動とか……そう判断出来る要因が結構ありましたし、そうなんだろうなって。」

「そっか……」

「それで、その事に関してちょっとした提案があるんですけど……聞いてくれませんか？」

「……提案って？」

「北校文化祭の視察……四宮先輩に代わってもらおうと思ってるんですけど、どう思います？」

「え!? 良いの!？」

その言葉に、思わず優君へと詰め寄って訊ねる。

「は、はい。今回は四宮先輩に譲りますよ。」

「……今回は？」

「あーいえ、こっちの話です。」

「そう……でも本当に良いの？ 優君も会長さんと遊びたかったんじゃ……」

「僕の事は気にしないで下さい。それに、こういうのやってみたかったんですよ。」

石上優 presents in 北校文化祭……みたいな？」

「ふふ、何それ？」

「それで、四宮先輩に連絡するタイミングなんですけど……当日で大丈夫ですか？」

「

「うん、それは大丈夫だけど……会長さんには、何て言うつもりなの？」

「まあ普通に……どうしても外せない用事が出来たから、代わりに四宮先輩が行きますって感じで。」

「……うん、変に凝った設定にするとバレやすいから、それで良いかもね。」

「でも、いきなりそんな事頼んだら四宮先輩に警戒されちゃいませんか？」

「其処は私が上手く誤魔化すから大丈夫。」

「じゃあ、そっちは早坂先輩に任せますね？……ちなみに、早坂先輩が会長達のデートをプロデュースするなら、どんなデートにしますか？」

「え、私？」

「はい、今回は文化祭デートになりますけど、早坂先輩だったらどんなデートにするのかなって。」

「私だったら……」

優君のその言葉に、記憶の中に埋まっている……いつか実行しようと思っていたデートプランが浮かび上がった。

「……私は横浜デートが良いと思う。」

「横浜デートですか、良いっすね。具体的にどんな感じにするつもりなんですか？」

「……まずは桜木町駅で待ち合わせて、汽船道を通りハンマーヘッドのハングリータイガーでランチ。ワールドポーターズで映画を観た後、コスモワールドで遊んでからカップヌードルミュージアムでオリジナルカップヌードル作り……！」

「……」

（滅茶苦茶詰め込んで来る……この時点で4〜5時間は経ってそう……っていうか、このデートプラン何処かで……？）

「それが終わったら、人力車で中華街に移動して脱出ゲーム。中華ディナー、クルージング……そして、赤レンガ倉庫でスケート！」サヤ

早坂のテンションが上がって来た。

「……んん？」

（なんだっけ？ このアスリートしか完遂出来無さそうな分刻みのギチギチデートプラン………あ！）

「そして夜！ 港の見える丘公園はイチャついてるカップルが多い！ かぐや様と会長さんは雰囲気当てられ、キスでフィニッシュ!!……優君！ このデートプランどう思っ……」

「キスする為にメッチャ歩く人だ!!」

「」

「あ……」

「ふーん……そういう事言うんだ？」

「あ、いえっ……違うんです。間違えたと言いますか、何と言いますか……」

（あのデートプランで早坂先輩案だったのか……）

「間違って本音の方を出しちゃったって事？」

「そ、そういう事でもなくてですね……」

「……私のデートプラン、そんなに駄目だった？」

「い、いえ、そんな事は……」

「怒らないから、問題点があるなら言ってみて。」

「あの……この話やめませんか？」

「言わないと怒るし……」フ。ッ――

「ええ……」

「怒るし！」くわっ！

「わ、わかりました、言いますよ！ ええと……休日の横浜は混雑してるので、坂先輩が言った様なプラン通りにはなりませんよ？ それに行きたい所全部入れちゃってる所為で、完遂しようとしたら分刻みのギチギチデートプランになりますけど……多分、早坂先輩って横浜行った事無いですよね？」

「……」

「それに中華街から港の見える丘公園で、それなりに距離ありますよ？ 時間掛け



て歩いてキススポットまで行くって、滅茶苦茶キスがしたいって欲求が透けて見えますし……そんな下心が相手にバレたら、絶対恥ずかしい思いをする羽目に……」

「……ッ」ツルツルッ

「あっ!? す、すみません! 別に先輩のデートプランを馬鹿にしているとかじゃ無くてですね!」

「……いもん……」

「え?」

「絶対楽しいもん! 優君も実際に行けば楽しめる筈だし、かぐや様も絶対満足してくれる筈だもん!」

「はい、すみません。そうですよね、言い過ぎました。その通りだと思います。」

暫くの間、優君に宥められて平静を取り戻した私は、ビシッと優君を指差して宣言する。

「……遊びに行ける様になったら、絶対横浜に遊びに行くからね! 私のプランは間違っていないって証明してあげるから!」

「あ、はい。その時はお手柔らかに……」

「……」

「……」

「……？」

（なんか……）

「……？」

（凄い約束をした様な気が……）

最後にキスをする事が組み込まれた、デートプラン完遂の約束をした事には気付かない2人だった。

---

〈四宮邸〉

「……全く、仕方がないわね。ええ、構わないわ。それじゃ、私は準備があるから切るわね。」と。

「……」

「……」

「……？」

「……は、早坂あ!? こんな事って本当にあるの!? 本当に文化祭当日に石上君に急用が出来て、私に代わって欲しいって連絡が来たわよ!?」

「ヨカッタデスネ。」

「ど、どうでしょう!? 余りにもいきなりだったから、心の準備が……!」  
タタタ

「……かぐや様、よろしいのですか? 会長さんとの待ち合わせまで1時間を切っていますか……」

「あああっ!? 私ったら部屋着のままじゃない!? な、何を着て行けば良いのかしら!?」

「いや……念の為とか言って、昨日の夜に2時間掛けて着て行く服装を見繕ってたじゃないですか。とりあえず、タクシーは呼んでおきますから、かぐや様は早く着替えて下さい。」

「そ、そうねっ……!」タタタ

「……はあ、本当にかぐや様は突発的な出来事に弱いんだから……あ、私もそろそろ準備しないと。」

石上優は仕掛けたい②に続く……

---

長くなり過ぎたので分割にしました。次話は日曜日に投稿すると思います。

## 石上優は仕掛けたい②

感想、評価ありがとうございます。(V。)

そんな訳で、今日はこうしてかぐや様の文化祭デートを見守る事となったのだ。ちなみに……今の私は、対書記ちゃん用の男装に身を包んでいる。優君と一緒に行動する事になるので、四宮家に対しても必要な備えだし、何より……これならナンパをされる心配も無い。優君もプリムが広めの帽子を被り伊達メガネを付けているので、パツと見では優君とわからない筈だ。

「やっぱり……会長と四宮先輩が並んで歩くと、かなり目立ちますね。」

「ま、片方は学ランだしね。」

前を歩く2人とすれ違った人間は、3人に1人は振り返ったりチラチラと視線を送っている。学ラン姿の会長さんもその要因だろうけど、振り返る人間の殆どは

かぐや様を見ている……まあ、それも仕方の無い事だ。かぐや様は中身はアレだけど、人目を引く容姿をしているし……中身は本当にアレだけど。

大体1～2クラス分程距離を取って監視しているので、会長さんが私達に気付く事は無い筈だ。かぐや様も会長さんとの文化祭デートという事実には、周りを気にする余裕は無いみたいだし……

「早坂先輩、コレ要ります？」

「え？」

2人の動向に気を配っていると……優君から目の前に何かを差し出された。私は直ぐに焦点を合わせて何かを確認する。

「あ、コレ……」

「……滅茶苦茶似てますよね？先輩さえ良かったら貰って下さい。」

それは中庭でよく見掛ける、あの猫ちゃんそっくりのキーホルダーだった。私は手のひらにソレを乗せると、優君へと訊ねる。

「……良いの？」

「はい、四宮先輩の事が心配なのもわかりますけど……折角来たんですから、僕達

も文化祭を見て回りませんか？」

「え、でも……」

「四宮先輩なら大丈夫です。会長が付いてますから、ナンパとかもされないでしょうし。」

「それは、そうかもだけど……」

「……少しだけです。会長達と鉢合わせしない様に気を付ければ、少しは見えて回れると思うんです。このキーホルダーを売ってた出店、コレ以外にも色々あったんで見に行きませんか？」

「……」

優君の言う通り、かぐや様には会長さんが付いているから大丈夫だし、少しくらいなら優君と文化祭を見て回っても問題無いだろう……私は先程手渡された猫ちゃんキーホルダーを大切に仕舞うと、優君へと向き直った。

「もう……少しだけだよ？」

「はい！」

それから、私と優君は2人で出店を見て回った。目立たない様に、周囲に気を配る事には気を付けていたけど……それらの事を忘れそうになってしまう程、私は優君との文化祭を楽しんだ。

「あ……この猫ちゃんキーホルダーって色違いのもあるんだね？」

「あ、本当ですね。折角ですから、僕も買っておきます。」

「ふふ、お揃いだね？」

「ははは、そうっすね。」

「……」

（あれ？これって……）

「……」

（恋人同士がよくしてる、ペアキーホルダーというモノなんじゃ……？）

「……！」

その事実に関心した瞬間、カッと顔が熱くなった。私は動揺している事を悟られ



ない様、すぐに別の話を振った。

「……つ、次は何処行こっか？」

「そ、そうですねっ……何か軽く食べられる物でも買いに行きましようか！」

僅かに上擦った声で返事が来た。もしかして、優君も同じ事を考えてたのかな？  
だったら、良いな……

「先輩、あっちに綿菓子がありますよ。」

「へえ、綿菓子か……普段食べる機会なんて無いし、折角だから食べようかな？」

「じゃ、行きましょう。」

……

「わあ、この綿菓子大きいね？」

「ははは、これで50円ですからね……儲け度外視の如何にも高校生らしい値段設定です。」

「誰目線なの？」

ちびちびと綿菓子を頬張りながら、隣を歩く優君へと視線を向ける。周囲の人からは、帽子が邪魔で顔が見え辛いだろうけど……隣を歩く私には、その優しい気な空

気を纏った顔がハッキリと見えている。

「ね、ねえ優君……」

「ん、どうしました？」

「……」

「先輩？」

「ゆ、優君も食べる？」

スツと優君の前に綿菓子を差し出して問い掛ける。

「え、いっ……良いんですか!? だってコレ、関節的にお互いの口が当たる事に……」

「ち、ちょっと！ そういうのは、思っても口に出すモノじゃないでしょ！」

「す、すいません！ じ、じゃあ……頂きます。」

「……うん。」

「……ん、美味いっす。」

「そっか、なら良かったかな……」

「……」

「……」

私は優君から視線を外して、黙って綿菓子を見つめる。優君も恥ずかしさに耐えられなくなったのか、そっぽを向いてしまった。暫くお互いに無言で歩いていると、優君が沈黙を破った。

「……次は何処行きましょうか？」

「んー、そうだね……」

次の行き先に悩んでいると、目の前を横切った2人から気になる会話が聞こえて来た……

「気の所為かもしれないけど、さっき白銀っぽい奴見たんだよな……」

「へえ、服装は？ 学ランなら100%白銀だけど。」

「チラっとしか見えなかったから、学ランなのか黒い服なのかわかんなかったんだよ。」

「へー、白銀だとしたら文化祭の視察とか？」

「あー、有り得るな。」

良く見るとその2人は、会長さんを合コンに誘った友人達だった。今思えば……この2人が会長さんを合コンに誘わなければ、私が酷い目に遭う事もなかったの

だ。その事に気付くと、恨みがましい視線が無意識に2人へと向かう。

「……」

「先輩？ どうかしましたか？」

「ううん、何でもっ……」

無いと答え様とした時、またしても2人の会話が耳に届いた。

「ん？ アレって白銀じゃね？」

「……っ！」

その言葉に視線を先へと向けると、僅かに会長さんの後ろ姿が見えた。隣を歩くかぐや様は、他の来場者の陰に隠れていて気付かれていないが、このままでは時間の問題だろう。

「え、マジで白銀居るの？ 誰かと一緒？」

「んー……？ こっからじゃよく見えねえな、近付いて確かめてみようぜ！」

「優君！ 其処の空き教室のドア、開けておいて！」

「え？ わかりました……」  
「サッ」

「っ！」

私はすかさずポケットからスプレー缶を取り出すと、背後から手を回して2人の顔へと噴射した。

「……ッ！ッ！」シューシュー――

「おーい、白がっ……Z Z Z」ニギッ

「え？ 風祭、いきなりどうしっ……Z Z Z」ニギッ

倒れる2人を壁に凭れ掛からせて、そのまま壁沿いの空き教室へと引っ張り込んだ。咄嗟の対応にしては、中々の手際だったと自画自賛しておく。

「これで良しと……」ハニギッ

「」

（なんて容赦の無い……）

「……！」ツツッ

「いや、こんなもんですわって顔されても……」

「とりあえず……1時間は起きない筈だから、このまま此処に置いておこっか？」

「……そうですね。」

（身をもって知ってます……）

「はぁ、危なかった……」ザッ

かぐや様の障害を排除した事に安堵し、軽く伸びをして空き教室を出る。

「すいません、ちょっと気を抜き過ぎましたね。」

「ううん、気にしないで。結果的に間に合ったし、私も遊び過ぎちゃったしね。ただ、ここからはまた監視に戻らないとね。」

「……そうっすね。」

数時間後……私は優君と一緒に、空き教室から外を眺めていた。並んで校門から出て行く、かぐや様と会長さんの後ろ姿を見送ると……私は優君へと向き直る。

「優君、今日はありがとね。」

「いえ、此方こそっす。」

「でも、優君も物好きだよね……態々休日潰してまで、あの2人の恋路をサポートするなんて。」

「普段から会長と四宮先輩にはお世話になってるので、恩返しみたいなモノです。」

「ふーん……?」

「……っていうのは、建前です。あの2人なら……僕が何かしなくても、そのうち付き合う事になるでしょうし。」

「え? だったらどうして?」

「少し前に……早坂先輩は、自分の事しか考えてないって言った事がありましたよね?」

「え? うん、言ったけど……」

「僕も……自分の事しか考えてないんですよ。今回、会長と四宮先輩の文化祭デートをお膳立てしたのは……それを利用して、早坂先輩と遊びたかったからです。」

「……え?」

「自分で言った《いつか》が待てなくて……会長と四宮先輩の2人を利用する事で、ほんの少しでも早坂先輩と遊ぶ時間を作りたかった……それが、僕が今回の件に関わった本当の理由なんですよ。」

「……」

「早坂先輩はどうでした？ 少しは楽しんでもらえたのなら、僕としては嬉しいんですけど……」

少しだけ自信無さ気に、私の答えを待つ優君を見て……色々な感情が湧き上がって来るのを感じた。私は必要以上に声に感情が乗らない様子を付けながら、言葉を紡ぐ。

「……楽しかったよ、本当に楽しかった。」

「……それなら良かったです。」

夕日が私達の居る教室を紅色に染める。これなら、例え顔が紅くなっても気付かれない筈だ……ホッと息を吐く優君を見つめながら、私は言葉を続ける。

「優君は……優しいよね。」

「え？」

「今回の事もそうだけど……私が嬉しいって思う事を言ってくれるし、私がして欲しいって事をしてくれるけど……どうして、そこまで私の為に色々してくれるの……？」

心臓が強く脈打つのに耐えながら、私は優君へと言葉を投げ掛ける。もしかした



ら……なんて期待を抱かずにはいられない程、優君の行動や言葉には……そういう意味が含まれている気がしたから。

「……」

「……」

私は優君の言葉を黙って待つ……10秒程すると、優君が小さく息を吸ったのがわかった。

「……早坂先輩、奉心祭で先輩の時間を少しでも僕にください。先輩に……言葉にして伝えたい事があります。」

「……!!? そ、それって……!!?」

「……そろそろ帰りましょうか。」

「え、あ……そ、そうだねっ……!」

四宮家の事があるから、優君と一緒に帰る事は出来なかったけど……この時だけは、その事が少しだけ有り難かった。

## 〈四宮邸自室〉

「はぁ……」キョッ

その日の深夜……かぐや様の惚気話を聞き終えた私は、1つ息を吐くとベッドに身を投げた。

「今日は本当に色んな事があったなぁ……」

かぐや様と会長さんの文化祭デートを見守って、私もちよつとだけ優君と文化祭を回って、邪魔者を排除して、そして……

……早坂先輩、奉心祭で先輩の時間を少しでも僕にください

「……ッ」

先輩に……言葉にして伝えたい事があります

「~~~~~っ!!」ハッ。ハッ。ハッ。

結局その日は……顔の火照りが治らなかったので、中々寝付く事が出来なかった。

## 早坂愛は頑張りたい

感想ありがとうございます。(V。)

週が明け……奉心祭の準備に使える時間も、残りはあと僅か。全学年がクラスや部活の出し物の準備に追われているが、それは私も例外では無く……

### 〈2年A組〉

「案外難しい、ふわふわカプチーノの作り方！ミルクジャグに牛乳を入れて、スチームで泡を立てます！この時ピッチャーを斜めにして、対流を作り泡を潰すのがコツです。こうすれば、ラテアートも綺麗に出来まーす！……はい、完成！」  
私は出来上がったふわふわカプチーノを厨房担当のクラスメイト達に見せる。私達2年A組は奉心祭でコスプレ喫茶を営む為、こうしてカプチーノの作り方を教えているのだ。

「わー！早坂メツチャ上手じゃん！」

「結構難しそうなのに、愛ちゃんがやると簡単に見えるんだよね……あ、また失敗しちゃった。」

「バイトで慣れてるからね。」

「うーん、全体の成功率は半分くらいかあ……ね、ふわふわカプチーノの値段っていくらだったけ？」

「えーと、一杯700円だね。」

「700円か……じゃ、値段上げよっか！」

「え、なんで上げるし？」

「だってさあ……これだけ苦労して難しいの作ったのに、700円ってちょっと納得出来無くない？ 完璧に作れるのは早坂と四宮さんだけど、ずっと2人を働かせる訳にはいかないし。」

「それは確かにねえ……じゃあ、作った人の苦労度によって値段変える感じにしちゃう？」

「それ採用！」とゞゞ

「ええ……メニューの値段表記とかどうするし？」

「それは時価って書いとけば良くない？ 最終的に寄付とか経費にすれば、どれだけ利益が出ても大丈夫って生徒会の子が言ってたよ？」

「それはそうかも知れど、時価って書いてる商品を頼むお客さんがいるのかなあ……」  
「ま、他にもメニューはあるし、ちょっとしたお遊び感覚で入れとこうよ！ 皆聞こえたー？ ふわふわカプチーノを注文した人には、レジ係が作った人を確認してレジ精算って事でオケ丸ー？」

「『オケ丸水産！ー！ー！』」

「……」

（ま、別にいっか……）

そんな訳で……私とかぐや様のクラスも、着実に奉心祭の準備が進んでいるのだった。

〈中庭〉

その日の放課後、私は中庭を1人で歩いていた。私のクラスはある程度余裕を持って奉心祭に臨めるけど、優君はクラスの出し物や生徒会の仕事に加え文実の仕事で多忙な為、授業が終わるとそのまま生徒会室に直行するらしい。私は時間に余裕がある為、猫ちゃんに会いに行こうとしていると……ベンチに座って項垂れる2人の女子生徒を見掛けた。

「か、会長とかぐや様が北校で文化祭デートをしていたなんて……どうしてっ……どうして私はその場に居なかったんですのっ……!!」

「かぐや様の私服姿、見たかった……」

「……」

（相変わらず情報が早いし、出来る事なら関わり合いになりたくないけど……）

「……あら、早坂さん？」

「……2人共どうしたしゅ？」

（あー、見つかったちゃった……）

……

「実は、会長とかぐや様が北校の文化祭に行かれたという情報を入手しまして……」

「かぐや様の私服姿、見たかった……」

「うん、そんな気はしてたー。」

「あぁっ……一体どんな仲睦まじい遣り取りがあったのでしょうか？ それを考えるだけで私は……！！」

「奉心祭が近いから、普通に視察じゃないの？」

「かぐや様の私服姿、見たかった……」

「そんな事はありませんわ！ どうやら文化祭の視察には、本来会長と石上会計が行く手筈になっていたらしいのですが、それが当日になり石上会計は急遽行けなくなってしまったらしいんですの！ そして、石上会計の代わりにかぐや様と呼ばれたと！」

「……それがどうしたし？」

「かぐや様の私服姿、見たかった……」

「わかりませんの!? そんな都合良く石上会計に急用が出来るなんて考え難いですわ。きっと会長が何らかの策略を用いて、かぐや様との文化祭デートを実現させたに違いありませんわ！」

「そうかなー……」

（それは会長さんじゃなくて、優君の策略なんだけどなあ……）

「かぐや様の私服姿、見たかった……」

「……巨瀬ちゃんは放って置いて大丈夫なの？」

「そのうち復活しますから大丈夫ですわ。それで話を戻しますが……普段からお忙しい方々ですもの。文化祭の視察という仕事を隠れ蓑にして、ほんの少しでも人つきりで逢う時間を作りたかったに違いありませんわ！」

「……」

「そして、文化祭の終わり際に会長は言いますの！ 四宮、お互い忙しいのは重々承知だが……奉心祭、四宮の時間を少しでも俺に取れないか？ 改めて四宮に、言葉にして伝えたい事がある……と。」  
※

紀さんの発言を聞き、数日前……北校の文化祭で、優君に言われた言葉が脳裏を過った。

「……」

会長と四宮先輩の2人を利用する事で、ほんの少しでも早坂先輩と遊ぶ時間を



作りたかった……それが、僕が今回の件に関わった本当の理由なんですよ

「……」*ん*…

早坂先輩、奉心祭で先輩の時間を少しだけ僕にください。先輩に……言葉にして伝えたい事があります

「はああああっ……」*んんん*

「……あらあら？ 早坂さんたら、そんなに照れられて……意外と初々しい所がありますのね？ うふふ、お可愛い事ですわね♪」

「そうだけどお、そうじゃなくてえっ……」*んんんんん*

「もう、かれんたら……早坂さんを困らせないの。ごめんね、早坂さん。」*んん*

「あ、あはは……気にしないで。」

（あ、復活した。）

「先程まで……かぐや様の私服姿が見られなかったという理由で、安心してた人と言われたくはありませんわね……」

「確かに、かれんの言う通り……かぐや様の私服姿が見られなかった事で、私はショックを受けたわ。だけどね、私氣付いたの……」

「……氣付いたって何にです？」

「もし私が北校の文化祭に行つて、かぐや様の私服姿を拝見していたら……あまりの尊さと氣高さに、きつと倒れてた筈よ。だから私が倒れる事で、かぐや様の休日を潰す可能性が少しでもあるのなら……か、かぐや様の……ズ……私服姿を見る事が出来なくても……さ……し、仕方な……！」

「エリカ……成長しましたわね。」*ヤダヤダ*

「え？ これって成長してるの？」

#### 〈四宮邸〉

その日の夜……仕事を終えた私は、かぐや様の部屋を訪れた。かぐや様は私の入室を確認すると、開口一番何かが描かれたノートを広げて言った。

「ねえ早坂！ こういう柄のハンカチを何処かで探して来て欲しいの！ 明日までに！！」

「しれつと要求がエグい。ある筈無いですよ、そんな局所的ニーズに応えたハンカチなんて……発注して作っただいいんじゃないですか？」

「……それじゃ当日、間に合わないかもしれないでしょ！」

「……これって奉心伝説のやつですよ？ ハートを贈ると永遠の愛がどうのっていう……」

「……」

「これを贈るって事は告白同然の行為ですけど……やっと自分の気持ちを伝える覚悟が出来たんですか？ まあ北校の文化祭から帰って来たと思ったら、あれだけ惚気話をして来るんですから、会長さんの事が好きじゃないって言うのは流石に無理が……」

「好きよ……」

「……え？」

「私は白銀御行が好き……教えて早坂、この気持ちをどう処理すればいいの？ 私、なんか変なの……」

「そう、ですか……かぐや様が会長さんの事を好きだと自覚されたのなら……答え

は簡単です。好きなら素直に告白すれば良いんです。」

「こ、告白……」

「プライドを抱えて苦しみ続けるか、告ってとっと楽になるか……ついに選ぶ時が来たのです。」

「で、でも！ 会長に告白出来たとしても、もし会長が私の事を好きじゃ無かったらっ……」

「……かぐや様は、それで会長さんの事を諦め切れるんですか？ 一度振られたくらいで諦められる程度の……ちっけな想いなんですか？」

「そ、それはっ……」

「……私は違いますよ。たとえ……言葉にして伝えたいと言っていた事が、私の望む言葉じゃ無かったとしても……それだけで私は諦めたりはしません。向こうが言ってくれないのなら……私から伝えるつもりです。だから、かぐや様も頑張ってお下さい……私も頑張りますから。」

「……え？ ん？ 私から伝えるつもり？ 私も頑張る？ ねえ早坂……それってどういう事？」

「いえ、その……私も奉心祭で、男の子からお誘いを受けてまして……」  
ぎゅ

「」

〈文化祭前日〉

「ふう、なんとか間に合ったな……」

いよいよ日付は、奉心祭前日まで来た……ギリギリだけど、なんとか目当てのモノを手に入れる事が出来た。人によっては、縁起が悪いと思われるかもしれないけれど……既に覚悟は決めている。

この気持ちを言葉にして……早坂先輩に伝えるんだ

……

「いよいよ……か。」

俺にとつては、今年の文化祭が最後……去年は上手く立ち回る事が出来なかったが、今年は違う。全ての準備は抜かり無く整った……四宮から告白して来るのなら、それで良い。

四宮が告白して来なければ……俺から告る

……

「私は……会長の事が好き。」

……言葉にして口に出すと、幾分緊張が和らいだ気がした。会長の事を意識する様になってから、幾重にも策を弄して来たけれど……結局、それが答えに結び付く事はなかった。

会長、貴方の事が好きだと伝えたら……私達の関係はどうなるの？

……

「……」

北校の文化祭……私と遊ぶ時間を確保する為に行動してくれた。言葉にして伝えたい事があると、真っ直ぐに私の目を見て言ってくれた。本当の私を見つけてくれて、私の為に命を懸けると言ってくれた。いつも優しい顔で笑いかけてくれた。その行動が、その思い遣りが、その表情のひとつひとつが……私にとっては初めての事だけで、ドキドキしっぱなしだった。でもね、優君……

私にだって、言葉にして伝えたい事があるんだよ？

それぞれの文化祭が始まる



## 早坂愛は見せ付けたい

感想、評価ありがとうございます（・ω・）

---

奉心祭当日、見上げた空は未だ闇色を纏っている。早朝5時過ぎ、私は制服に身を包んで秀知院の門を潜っていた。今日のかぐや様も奉心祭の前準備で早めに登校する為、私も使用人としての仕事は免除されている。クラスや学年、在籍する部活動や委員会も異なる生徒達が最後の仕上げに精を出す。12月の早朝にも関わらず……秀知院学園はかつて無い程、活気に満ち溢れていた。

〈中庭〉

「優君、おはよ。」

「あ、おはようございまっ……!!?」

「どう？ 似合ってるかな？」

「そ、その格好はっ……!!」

「……ふふ♪」

慌てる優君を見て、私はイタズラが成功した事に満足する。文化祭が始まるとお互いに忙しくなってしまうので、それまでに時間に余裕があれば中庭で会おうという提案を優君にしていた。なんとか時間調整に成功した私は、メイド服を身に纏い優君との待ち合わせ場所である此処まで来た……という訳だ。今日は学園中を様々な格好をした生徒が行き来している為、私がメイド服を着ていても悪目立ちはいさしな筈だし、何より……優君にもこの姿を見てもらいたかったから。

「……似合っていない？」

「い、いやっ……滅茶苦茶似合ってますよ！流石は本職と言いますか、何と云いますか……」

「そう？良かった♪」  
カハハ

優君の言葉に気を良くした私は、スカートの端を持って左右に身体を振ってみる。  
「……っ！」

僅かに両目を見開いて、優君は私を見つめている。フッと視線を外したと思え

ば、遠慮気味にチラチラと視線を向けて来る所が可愛い。

「優君、どうしたの？」アッ、トッ

（ふふ、少しはドキドキしてくれたかな？）

「え、えーと……」

ドギマギする優君を見て、私は自分のアピールが上手くいった事を確信する。思った通り、優君も男の子だからこういうのが好きなんだ……だとしたら、コレが効く筈だ。

「おはようございます、ご主人様。」

今回は優様ではなく、ご主人様呼びを試してみた。この前の優君の反応的に、ご主人様呼びでも効果がある筈だ。ちょっと恥ずかしいけど……数少ないアピールチャンスなのだから、無駄にはしたくない。私の思惑通り、優君には効果があった様で……

「ぐうっ!？」

優君は胸に手を当てると、うめき声を上げた。

「……ふふ♪ドキドキしちゃった？」

優君が恥ずかしがっている所を見てみると、むず痒さを感じると同時に、段々と楽しくなつて来た。私は優君より年上だし、余裕のあるお姉さんみたいに振る舞えば……

「それはそうですよ！ だって、その……早坂先輩のメイド姿、滅茶苦茶可愛いので……正直、凄く緊張してます!!」

「へ……ええっ!？」

（か、可愛い!? しかも、滅茶苦茶!?）

早坂の余裕のあるお姉さんタイムが終わった。

「あ！ 別に普段の早坂先輩が可愛くないって意味じゃないですよ!? 普段の早坂先輩も勿論可愛いと思つてますから！ 誰も居ないと油断して猫と猫語で話しちゃう所も、機嫌が悪くなるとほっぺを膨らませてアピールして来る所も可愛いと思つてますし、周りの人には作つたキャラで接してるのに僕に對しては素の性格で接してくれる所とか滅茶苦茶嬉しいと思つてます！ 他にも……」

「ゆ、優君！ わかつたから！ もう十分だから！」

早坂は好きな人に手放しで褒められる……という事に慣れていなかった。

早坂先輩と別れると、また忙しい時間がやって来た。早坂先輩と会う時間を捻出する為に、かなりの仕事を消化したにも関わらず……持ち場に戻ると、新しい仕事が始まり込んで来ていた。

「石上、何度も悪いな。」

「いえ、気にしないで良いですよ。備品は使い終わったら、僕か他の文実委員に返して下さい。」

「おう、ありがとな！」

「じゃ、僕は戻りますね。」

団長と備品についての打ち合わせを済ませ、文実の本部に戻ろうとしていると……

「はぁ……」

（早坂には頑張ったと言われたけど……実際問題、会長に告白して振られてしまったら……きっと立ち直る事なんて出来ないわ。人は告白する勇気を何処から持って

来ているの?」

溜め息を吐きながら、とぼとぼと歩く四宮先輩を見掛けた。丁度良かった……僕は四宮先輩の元へ駆け寄り話し掛けた。

「おはようす、四宮先輩。」

「あら、石上君……おはよう。」

「四宮先輩、コレあげます。」

僕はポケットに忍ばせていたある物を取り出すと、四宮先輩へ差し出した。

「これは……指輪?」

「……え? 石上君でそうなの?」

「はい、それを……」

「ええと……石上君は頭も良くて、生徒会の仕事も出来る良い子だけど、貴方にはもっとお似合いの子が居ると思うわ。例えば……」

「僕が傷付かない様な言葉を選んでくれているトコ悪いんですけど、違いますからね? これは、そうですね……御守りみたいなモノだと思って下さい。」

「……御守り?」

「はい、それは小指に嵌めて下さい。」

「小指に？」

「小指の指輪は、恋の成就を願うモノらしいです。あの時のお返しです、貰って下さい。」

（あの時……先輩に背中を押してもらえた事がどれほど心強かったか、今の先輩にはわからないでしょうけど……本当に感謝してるんですよ。）

「……あの時のお返し？ それって何の事……いえ、それよりも石上君、貴方……」（もしかして、全部わかって……）

「四宮先輩、お互い……頑張りましょうね。」

「……ええ、そうね。」

（可愛い後輩にここまでされたんじゃない、いつまでも怖がっている訳にはいかないわね……）

……

「あれー？ 早坂ったら、何処行ってたの？」

「ごめん、ごめん。ちょっと衣装でキツイトコがあったから、直してたんだー。」

「なーんだ、そういう事ね……何処で道草食ってるのかと思っちゃったよー。」

「あはは、ごめーん。」

「……？」

「どうしたし？ ウチの顔に何か付いてる？」

「んー？ 早坂さ、何か顔紅くない？」

「っ!? そ、そんな事無いし！」

「えー？ でも……」

〈皆さん、お待たせしました！〉

「あ！ ほら、始まるし！ 教室戻るよ！」タタタ

「あ、待ってー！」タタタ

〈それでは……待ちに待った秀知院学園文化祭、奉心祭のスタートです！〉

〈2年A組コスプレ喫茶〉



時間は経過し、昼過ぎ……私が働くコスプレ喫茶は、開店時から多忙を極めていた。

「愛ちゃん、新規のお客さん入るからテーブル片付けといて！それが終わったら、注文お願い！」

「かしこまりました。」

かぐや様がシフトに入る時間は既に終わっており、今は自由時間の為外に出ている。私は開店時から昼食休憩を除いた今まで、シフトに入り続けている。私が多めにシフトに入れば、その分かぐや様がシフトに入る時間が減って自由な時間を確保出来るし、これだけ働いているのだから急に優君に呼び出されたとしても抜け出し易い筈だ……かぐや様みたいな目に遭わなければ。

……………

「間違いない、これは……恋の味だ!!」

「」

「愛する者により美味しい紅茶を飲んで欲しい！その為に日々調整を加え続けた並々ならぬ愛の味！」

「おう、四宮。」

「か、会長!？」

「そう、これはたった1人の為に洗練された一杯！回りくどく純粋な愛情表現！未だ実らぬ片思いの味！カップ一杯に愛がいっぱい！今日は本当に来て良かった!!」

「ん？何やら騒がしいが……」

「き、気にしないで下さい！」

「……君の恋が実る事を心から祈っているよ……可愛らしい大正娘さん。」い  
「帰ってえ!!」

……

「……」

かぐや様は中年のお客様に絡まれていたけれど……こういうのも日頃の行いなのかもしれない。もっと早く素直になっていれば、あんな目に遭ったとしても焦る必要も無かったのだから……

「お待たせしました、ご注文を承ります。」

まあ、私はかぐや様とは違って日頃の行いも問題無いので、妙な中年に絡まれる事も無っ……

「……久しぶりだね、使用人のお嬢さん。じゃあ、私はコーヒーを頂こうかな。」

「」

「先生、このお店のおすすめはふわふわカプチーノらしいですよ？」

（時価って書いてるけど……何かしら？）

「じゃあ、それにしようか。」

「な、なにを……してるんですか？」 *さき*

「アフターケアは医療の基本だからね……っていうのは冗談だよ。偶々近くで医師学会があつてね……折角だから寄ってみようって話になったんだよ。」

「そ、そうですか……」

「まあ折角だから、アドバイスはしておこうかな。大事な事だからよく聞くんだよ？ 恋の病の特効薬、それはね………愛だよ。」

「帰って下さい！」

………

「お、お待たせ致しました……こちらがご注文の、ふわふわカプチーノになります。」  
す。」  
す。」

（動揺し過ぎて、変に時間掛かっちゃった……）

「ああ、ありがとう。」

「それでは、失礼します。」  
す。」

……私はこれ以上余計な事を言われる前に、早足でテーブルから離れた。

「ふう……この雰囲気、昔を思い出すよ。」

「高二で彼女を孕ませた思い出ですか？」

「いや、もっとほのぼのした思い出だよ。私の学生生活ってそれだけじゃなかったからね？　そこだけクローズアップされても困るからね？　あと、孕ませたって言い方はやめようか？」

「滅茶苦茶気にしてますね。」

……

「……そろそろ行こうか。お嬢さん、お会計。」

「はい！　ふわふわカプチーノ、2杯で3000円になります！」

「高くない？」

「ちゃーんとメニュー表に、ふわふわカプチーノは時価って書いてありますよー？」

「

え」

「先生、ご馳走様です。」

「え」

「はい、ありがとうございましたー！」

「はあ、疲れた……」

（やっと帰ってくれた……）

「愛ちゃん、お疲れ様！ 働きっぱなしで疲れたでしょ？ 今日はまだ抜けて大丈夫だよ！」

「もう、マジ疲れたしー！」

（疲れてるのは、別の理由だけど……）

メイド服から制服に着替えると、校内を適当に見て回る。教室や部室を利用した出店、文化部の出張イベント、運動部の備品を利用したミニゲームなど皆が文化祭を楽しんでいる。

「……サッカー部の出し物、マジで自信作だから楽しみにしてていいぜ！」

「たっくんと一緒なら、何処でも楽しいよ♡」

「……」

すれ違ったカップルへ無意識に視線が向く……羨ましい限りだ。堂々と腕を組んで並んで歩くなんて、今の私には絶対に出来ない事……って違う、そうじゃない。普通に四宮家のゴタゴタが無ければ出来るみたいに思ってたけど、私と優君はまだそういう事が出来る関係じゃない。大体、優君の伝えたいと言っていた言葉が告白だとも限らないし……まあ、優君から告白されなかったら、私からするつもりだけど……そもそも、優君はいつ私を呼び出すつもりなんだろう？ やっぱり文化祭<sup>明</sup>2日目<sup>日</sup>？ でも……今日告白すれば、明日は恋人同士として文化祭と一緒に回るってパターンも……って優君と一緒に居る所は見られたらダメなんだった。

「はあ……」

ダメだ……これじゃ、かぐや様の事をバカに出来ない。かぐや様には、さっさと告白すれば良いのにと偉そうな事を言った事もあるけれど……いざ自分がその立場になると気後れしてしまう事に気付いた。

「むう……」

優君ったら、こんなに私を悩ませて……大体、優君もズルいし！ あんなに思わせ振りの言い方されたら、意識するに決まってるのに！

石上は理不尽な怒りを向けられた。

「もう……」

後で知った事だけ……この時悩んでいたのは私だけじゃなくて、優君もだったらしい。その事を教えてもらったのは、それから直ぐの事だった……

## 石上優は回りたい

感想ありがとうございます(∇。∇)

## 〈校庭〉

「1年生は先に休憩入ってー！」

「はーい。」

つばめ先輩の一声で、僕達1年は休憩を取る事となった。とりあえずは、文実の仕事も一区切りしたけど……だからと言って、自由に動ける訳では無い。本音を言えば、早坂先輩を誘って一緒に文化祭を回りたいけど……外部の人間が大勢入って来ているこの状況、万が一でも早坂先輩と一緒に居る所を見られたらマズい。早坂先輩も言っていた様に、四宮家の密偵には細心の注意をする必要がある。

「あ、団長？ つばめだけど……」

スマホ片手に仕事をするつばめ先輩に視線を送る。皮肉なモノだな……前回は自



由に動ける立場に居たのに、つばめ先輩（好き）を誘う勇気が出なかった。今回は誘う勇氣はあるのに、早坂先輩（好き）と一緒に行動する事が出来ない……本当、儘（まま）ならないもんだな。

……

早坂先輩の様子を見に行こうと、2年A組の教室へと向かう。遠くから眺めるくらいなら大丈夫だろうと思っていたら……コスプレ喫茶は大盛況の様で、廊下には順番待ちの長い列が出来ていた。待っている客の殆どが男性で、コスプレをした女子高生に接客をされたいという軽薄な欲求が透けて見える。

「はあ……」

……早坂先輩に告白するにしても、この文化祭中に全く接触が無いままでは効果が薄い。明日は当然として、今日もなんとか一緒に居る事が出来れば良いんだけど……いつもの場所で待ち合わせしても日常感が拭えない。なんとか一緒に文化祭を回る方法はないものかと、頭を悩ませながら歩いていると……前方から見知った2人が歩いて来るのが見えた。

「うううっ……！」ギョッ

「よしよし、怖くないからねー？」*チヂチヂ*

「2人共どうしたんですか？」

「あ、石上君。マキちゃんとお化け屋敷に行って来たんだけど、よっぽど怖かったみたいで……」

「あー、それは多分うちのホラーハウスですね。結構良い出来だったでしょう？」  
「うん、迫力があって面白かったよ！ まあ、マキちゃんには刺激が強過ぎたみたいけど……」*ナヂナヂ*

「うううっ……*グッス*……」*ヤェ*

「……マキ先輩、大丈夫ですか？」

（ヒロインムーブしてるなあ……）

「べ、別にっ……怖くて泣いてる訳じゃないからっ……*グッス*……」*ヤェ*  
「あ、はい。」

（虚勢を張る余裕はあるのか……）

「あはは……そういう事だから、ちょっとマキちゃんを落ち着かせて来るね？」  
「そうっすね、それが良いと思います。」

へ1年A・B組ホラーハウス

マキ先輩達と別れると、そのまま自分のクラスの様子を見に行く。それなりに好評のようで、出口から退場する人達は満足気に感想を言い合っている。

「はい、終わりです。おつでしたー。」ガザ

「こ、こわっ…こわかった…」ガダガダ

「すごく、良く出来てましたわね……」ガダガダ

「……お前の所為で新しい扉開いたわ。」

「ようこそ、此方側へ。」

出て来たのはナマ先輩とガチ勢先輩……と、北校の文化祭で早坂先輩から催眠スプレーを吹っ掛けられていた2人だった。どうやら4人で文化祭を回っているらしく、ホラーハウスの感想を言い合っている。

「お2人は如何でした？ ぜひ記事用に感想を……」

「まあ、アレだ……ちょっとドキドキしたわ。」

「男子でも十分怖いって事ね！ 豊崎君は？」

「何と言うか……耳が幸福だったかな……」

「まあ、なんて趣味の悪い……」

段々と遠ざかって行く4人の会話を聞いていると、ある考えが浮かんた。この方法なら上手く行けば早坂先輩と一緒にホラーハウスを体験する事が出来るけど、早坂先輩が怖いのが平気って前提じゃないとダメだ。

「とりあえず、聞いてみるか……」

……

「ホラーハウス……優君のクラスの？」

早坂先輩に連絡すると、今日のシフトは終わったのでブラついていたらしかった。人気の無い所で落ち合うと、早坂先輩をホラーハウスに誘った。

「はい、早坂先輩と一緒に体験出来る方法があるんですよ。先輩がホラーが大丈夫ならですけど。」

「うん、割と平気。」

「あ、それなら良かったです。」

（女子は怖いのが好きな人が多いらしいけど……早坂先輩もそうなのかな？）

「1番怖いのは、生きてる人間だしね……」

「思ってた理由と違うなあ……」

「それで、どうやったら一緒に体験出来るの？ ホラーハウスのシステムの難しそうなんだけど……」

「ああ、それはですね……」

……

〈ロッカー内〉

「い、意外と狭いね……？」

「そ、そうっすね……」

30分後……僕は早坂先輩と2人で、ホラーハウスのロッカーの中に入っていた。この考えが閃いた瞬間は良い妙案が浮かんだと思ったんだけど、予想以上に密着してしまっている……もしかしたら、僕はやらかしてしまったのではないだろうか？

「あ……い、ごめんね？」 ギョ

「いえ、気にしないで下さい……！」

バランスを崩した早坂先輩に凭れ掛かられる……僕は別に、疚しい考えがあつてホラーハウスに誘つた訳では無い。前回はつばめ先輩と入る事は無かったので、2人で入った時の具体的な密着度なんて知らないままだったし……

「でも……優君、よくこんな事考えついたね？」

「偶々ですけどね……」

僕達1年A・B組の共同制作、立体音響ホラーハウスへチヨキ子の教室……配置されたロッカー内に、ヘッドホンとアイマスクを身に付けて体験するタイプのお化け屋敷だ。ロッカーの数は2クラス分を使用する為6個と多く、最大で12人の人間が同時に体験出来る仕様となっている……とは言え、全くの知らない他人と狭いロッカーに閉じ込められる訳では無く、受付の人間が待機客の様子を観察して適宜締め切るという方法が取られている。ロッカーの数は6個、他人同士では1つのロッカーに入れられる事は無い。そして、前回と違い男女で別けられてもいない……この事実が、僕にある妙案を浮かばせる事となった。

## 〈ホラーハウス内〉

「……」カサカサ

僕はホラーハウス内に入ると、隠れて様子を伺う。ロッカーからは、男女の叫び声が聞こえている。

「はい、終わりでーす。」カサカサ

小野寺がロッカーの扉を開けて、終了を宣言する。僕はロッカーから全員が出るのを黙って待つ……全員がロッカーから出たのを確認すると、小野寺が出口へと誘導する。

「……っ！」カサカサ

僕はすかさず……ロッカーの1つに使用禁止の張り紙を貼り、念の為開けられ無い様に細工をして抜け出した。先程まで使えていたロッカーが使用禁止になっていれば、小野寺が不審に思うだろうが……小野寺はシフト交代の時間になっており、交代する人間も既にスタンバっているので、小野寺が戻って来る事は無い。

「ふう……」

僕は小さく息を吐くと、次の段階へと進む。これでホラー体験が出来るのは、実質5組となった。しかし受付の人間はロッカーが1つだけ使用禁止になっている事を知らないのも、当然6組の客を招き入れる……つまり、客側の数が多くなってしまう訳だ。此処まで連れて来てしまった手前、待ってもらおう訳にもいかず……案内人は頭を悩ませている。

「うーん、どうしよう……」

「じゃ、ウチは他の人と一緒でも良いよー!」

その6組の中に入っていた早坂先輩が声を上げる。当然、僕もその6組の中に入っているが……早坂先輩とは他人の振りをして別個の客として振る舞っているの、無関心を装っている。

「え、良いんですか? でも……」

「良いって、良いって! んー……じゃあ、其処の君で良いや! 早く入ろー!」  
グッ

「え、ちょっと……!?!」



立候補した女子生徒に無理矢理引っ張られる……という体<sup>てい</sup>で、2人でロッカー

へ入る。案内人はA組の生徒で、殆ど面識が無いのも幸いした。これなら、不審に思われる事も無いだろう……斯くして、様々な工作や策略を駆使して、僕と早坂先輩は一緒にホラーハウスを体験するに至ったのだった。

……

〈ロッカー内〉

「でも……すいませんでした。まさか、2人で入ったらこんなに狭くなるとは思っ  
てなくて……」

「う、ううん、気にしなくて良いよ?」

（優君の心臓、凄くドキドキしてる……わ、私の音は聞こえてないよね?）

「そうですか……あの、体勢キツかったら、そのまま凭れてても大丈夫ですの……  
!」

「……もしかして、やらしい事考えてる?」

「考えてません!」

「……ふふ♪冗談だから、そんなに慌てなくても良いのに……私は別に、ちょっと

くらいなら考えてても怒らないよ?」

「勘弁して下さい……」

（誘った当初は考えてなかったのは事実だけど、ここまで密着する事になると流石に……）

「……いいよ。私と一緒に行動する為に、色々考えてくれたんだし……今日は勘弁してあげる。」

「……あざっす。」

僕も、早坂先輩も……どちらもヘッドホンとアイマスクを身に付ける事無く、会話を続けていた。それは多分、勿体無いと思ったからだ。折角こんなに近くに居るのに、ホラー体験他の事に気を取られる事が……

「終わりました、出口は此方です。」

「もー、ちょー怖かったし!」

「……」

扉が開けられ、案内人に出口へと促される。早坂先輩は、扉が開けられた瞬間にギャルモードへと戻った。名残惜しいな……此処を出れば、早坂先輩と一緒に行動

する事は出来なくなる……本当に、名残惜しいと思う。早坂先輩ともっと一緒に居たい、もっと話したい、もっと……触れ合いたい。湧き上がる想いは、徐々に僕の心を埋め尽くしていった……

### 〈中庭〉

17時になり、文化祭1日目が終了した。前回は1日目が終わると直ぐに生徒会室に向かっていたが、今回は中庭で早坂先輩が来るのを待っている。結局、あれから早坂先輩と一緒に居られる事はなかったので、残念と言う他ない。それでも、僅かな時間を一緒に過ごせた事は嬉しかったし、まだ明日がある。やっぱり、告白するなら明日だな。それなりに考えてる事もあるし……

「あ、もう来てたんだ。」*カキ*

「あ、お疲れっす。」

早坂先輩と合流し、お互いに今日の出来事などを話題に話す。僕は文実の仕事中

に起きたハプニングやアクシデントを……早坂先輩は、コスプレ喫茶に来た変わった客の話や自由時間に出会ったナマ先輩達の話聞かせてくれた。

「ははは、そんな事があったんですか？ まあ、楽しめたみたいで何よりです。」

「うん……」

「……先輩？ どうかしめましたか？」

「……確かに楽しかったよ。コスプレ喫茶の接客も楽しかったし、紀ちゃんが見せてくれたバルーンアートも凄かったし……優君が私と一緒に遊べる様に、色々考えてくれたのも嬉しかった。」

「……」

「でもね……やっぱり少しは考えちゃうんだ。四宮家の密偵の事も、周りの人達の事も、何も気にする事なく……最初から優君と一緒に文化祭を回る事が出来たら、どれだけ楽しかったのかなって……あはは、無理だってわかってるんだけどね……」

「……ッ」ギョッ

そう寂しそうに語る早坂先輩を見て……ギリギリまで抑え込めていた感情が噴き出した気がした。気付くと僕は、無意識に早坂先輩の手を握っていた。

「ゆ、優君？ どうしたの？」

「……」

少し動揺した様な声色で、早坂先輩はそう聞いて来た……けど、この時の僕にはその言葉は届いていなかったし、冷静ですら無かったんだと思う。もし、この時の僕が冷静だったなら……

「早坂先輩……好きです。」

うっかり本音を口に出す事もなかったのだから。

## 早坂愛は受け入れたい

感想、評価ありがとうございます（・ω・）

---

「早坂先輩……好きです。」

……そう口に出してから、しまったと思った。直ぐに口を手で塞ぐも、既にやらかした後では意味が無い。本来の予定では、明日もなんとか一緒に過ごした後、キャンプファイヤーを人の居なくなつた校舎内から眺めつつ早坂先輩に告白するつもりだった。だけど……

「でもね……やっぱり少しは考えちゃうんだ。四宮家の密偵の事も、周りの人達のことも、何も気にする事なく……最初から優君と一緒に文化祭を回る事が出来たら、どれだけ楽しかったのかなって……あはは、無理だってわかってるんだけどね……」

「……………」

そう言いながら、寂しそうに力無く笑う早坂先輩を見て……予定とか計画とか、そんな些細な事は頭の中から吹き飛んでしまった。そんな寂しそうな顔をされて……何も言わないなんて事は、僕には出来なかった。だけど……こんなロマンチックの欠片も無い、うっかり口に出してしまった告白言葉を早坂先輩が喜ぶとは思えない。そう思いつつも、握った手の先を目で辿ると……

「ア…ア……」ア。ア。ア。

真っ赤な顔をして、プルプルと身体を震わせながら此方を見る早坂先輩が視界に映っ……ん!? も、もしかして、そこまで悪くない感じだったりする!? やってしまったという後悔が、早坂先輩の反応を見た瞬間に消え去り……代わりに手応えという名の高揚感が湧き上がる。第一ここまで口にしてしまったのだから、今更誤魔化すつもりも無い。僕は高揚感に身を任せ、そのまま言葉を吐き続ける。

「早坂先輩、好きです！ 大好きです！ 必ず先輩を幸せにしてみせます！ 四宮家にだって負けません！ 絶対に先輩を1人にしないって約束します！」

「え、あ…その……」

「……もし早坂先輩がこの告白を断っても、僕が先輩を助けないという気持ちに変

わりはありません。早坂先輩が四宮家から解放されるまで、一緒に戦いますから遠慮はしないで下さい。だけど……先輩が側に居てくれるなら、僕はどんな事にだって立ち向かって見せます。だから……」

一呼吸間を空けて、心を落ち着かせると……万感の想いを込めて、最後の言葉を紡いだ。

「早坂先輩……僕の恋人になって下さい。」

最初は聞き間違いだと思った。だって、あまりにも自然に言われたから……

「早坂先輩……好きです。」

そう言った直後……目の前の男の子は、しまったという顔をして口を手で塞いだ。その反応を見て、私が先程耳にした言葉は……聞き間違いなんかじゃ無くて、正真正銘の告白だったんだと気付いた。そして、言葉の意味を理解した瞬間全身がカッと熱くなった。次いで、動揺する私に向けて放たれる言葉の数々……嬉しい、



恥ずかしい、良かった、私も優君の事……様々な言葉が浮かんで来ては、心臓の鼓動を速めて行く。胸の辺りがムズムズして、恥ずかしくて、叫び出したくなって、でも嬉しくて……

「え、あ……その……」

優君の告白に答えたいのに、上手く言葉が出て来ない……そんな不甲斐ない私に、優君は逃げ道さえ作ってくれた。私が優君の告白を断ってしまっても、私が四宮家から解放されるまで……一緒に戦ってくれろと。私の側に……居てくれろと。

「早坂先輩……僕の恋人になって下さい。」

真剣な瞳で、真っ直ぐな想いを言葉に乗せてそう言ってくれた優君を見て……初めて、優君と出会った日の事を思い出した。かぐや様との言い合いが発展した所為で、優君にちょっとした掛ける事になったあの日……私と優君の関係が始まった。

「……………」

優君と出会う前の私に言っても、絶対に信じないだろうな……好きな人が出来たよって……

「わ、私……」

その人の事を考えるだけで……胸がドキドキして、顔が熱くなって、好きって気持ち溢れて止まらなくなっちゃう人が出来たんだよって……

「私も……」

……優君の為を思うなら、この告白は断らないといけない。私と近い存在になれば、今以上に危険な立場に身を置く事になってしまふから……だけど、優君はきっと私を諦めない。この先どんな事があったとしても……優君は変わらずに私の側に居てくれて、一緒に頑張ってくれるという確信めいた予感がある。だから……

「……………」

真っ直ぐに私を見つめたまま……返事を待つ優君の手を握り返して答える。

「私も……優君が大好きだよ。だからお願い、私を優君の恋人にして下さい。」

……………

「……………」

「……………」

お互いに告白し合った僕と早坂先輩は、手を握ったままの状態から動けないで居た。まるで、伝え切れない想いを……その掌から伝え様としているみたいで、離す

事が出来ない。

「そ、その……」

「は、はい……」

「こ、恋人って事で……良いんだよね？」

「は、はい！ 僕と早坂先輩は恋人です！」

「うん、そっか……」 ヤッヒ

「……」 ギョッ

握り返して来る掌の暖かさを感じながら、僕の心の中は歓喜に満ちていた。そして……滅茶苦茶嬉しいと思うと同時に、深く安堵もしている。早坂先輩は優しいから……僕の身を案じて断って来る可能性も考えてはいたけど、受け入れてもらえて良かった。先程まで感じていた緊張が和らいだ影響か、何気ない話題が口から出る。「早坂先輩は……彼氏が出来たらしたい事と違って、あったりしないんですか？」

「したい事？」

「はい。もしあるんだったら、僕に出来る事ならなんでも言って下さい。」

「……」

「直ぐに浮かばないなら、別に大丈夫ですよ。考えが浮かんだ時に言ってもらえれば良いですし……」

僕達は大手を振って遊んだり、逢ったり出来ない立場だ。だから少しでも、早坂先輩に喜んでもらえたらと提案した事だったけど……そんな直ぐには浮かばない様だった。まあ、僕もいきなりそんな事を言われたら悩むだろうし……

「……ん！」

早坂先輩は握っていた手を離すと、両手を広げて何やらアピールをし始める。

「……先輩？」

「ん！」

「ええと、その体勢は……」

早坂先輩は僕の問いには答えずに、両手を広げたまま此方を凝視している……ものの凄く真っ赤な顔で。

「い、良いんですか？」

「んー！」

その瞳からは……恥ずかしいんだから早くして！ という言葉が読み取れた。僕

は意を決して、早坂先輩に近付くと……

「じ、じゃあ、失礼します……」

広げられた両手の間に身体を入れ、そのまま背中へと手を伸ばして抱き寄せた。

「……」

「……」

なんだろう、この何とも言えない感覚。上手く言語化出来ないけど、早坂先輩を守りたいとか、幸せにしたいって部分に特大の火がついた様な気がする。

「……」

「……」

暫く抱き合っていると、背中に回されていた手の感覚が無くなった。早坂先輩に追従する形で、僕も背中から手を離す。

「つ、次は優君の番だよ！ 優君は私にしたい事とか、して欲しい事は無いの？」

「……」

「……優君？」

「まあ、あるんですけど……引きませんか？ 本当になってくれますか？」

「痛くない事なら……」

「そんなんじゃないやありませんから！ その……早坂先輩が髪を解いた所が見たい……です。」

「……髪を？ そんなので良いの？」

「はい、お願いします。」

「……こう？」<sup>ゴキ</sup>

「……」

早坂先輩がシュシュに手を伸ばして髪を解くと、サイドテールにしていた髪が重力に従い落ちた。

「ど、どう？」

「……」

初めて見る、髪を下ろした早坂先輩は……返事を忘れる程、見惚れる存在だった。……おかしいな？ 僕は別に髪フェチって訳でも無いんだけど……これがギャップ萌えてやつか？

「ち、ちよつとは何か言ってよ！ 黙ってられると、恥ずかしくなっちゃうでしょ

！」「ハッ」

「すみません！」

怒られた。

〈四宮邸〉

「~~~~♪」

奉心祭初日、私と優君は晴れて恋人同士となった。その事實は、際限無く私の心を満たして行く。普段は事務的に済ましている使用人の仕事にも、不思議と張りが出ている気がする……今だって鼻歌を口ずさみながら、かぐや様の制服にアイロンがけをしているくらいだ。

「早坂、貴女……随分と機嫌が良さそうだけど、何か良い事でもあったの？」

かぐや様は眉間に皺を寄せて、訝しげな視線を私に向けながらそう言った。

「良い事ですか、そうですね……男の子から告白されて、私に恋人が出来た事で

しょうか。」

「はあ、そんな事で喜んでたの？ 恋人が出来たくらいでそんなに喜ぶなんて、早坂も案外子供……って恋人？ 早坂に恋人！！？ 大事じゃない……？」

「心の底から信じられる人と恋人になるって、こんなにも心満たされる事だったんですね……」

「なんか悟った事言ってる！？ は、早坂、相手は誰！？ 何処の馬の骨と……！」

「……優君です。」

「優君って……石上君の事！？ ちょ、ええっ！？ それって、私の知ってる石上君よね！？」

「それはそうですよ。」

「え、ええええ、早坂ったらいつの間に……」

「まあまあ、私の事は良いじゃないですか。かぐや様は、会長さんと何か進展はあったんですか？」

「……」

「無かったんですね。」



「だって……しょうがないじゃない！ クラスの出し物は忙しくなるし、変な中年には絡まれるし、会長は私に告白して来ない所かコスプレ喫茶のシフトが終わっても私を文化祭デートに誘いに来ないし！」

「後半はかぐや様次第な気がしますけどね……それより、大丈夫なんですか？ 文化祭も明日で終わりです。文化祭という非日常イベントだからこそ、告白もしやすい部分があると思うのですが……」

「わ、わかってるわ……それはわかってるの！ だけどやっぱり恥ずかしいし、何より……怖いわ。」

「……かぐや様が勇気を出せば、その先には会長さんとの幸せな学園生活が待っているんですよ？」

「それはそうだけど……ねえ早坂、早坂はどんな感じで、石上君から告白されたの？」

「気持ちを抑えられなかったって言ってましたね。ついポロッと思ってた事が出ちゃったって……」

「そう、そういうモノなのね……」

「……大丈夫ですよ。文化祭は明日もありますから、明日頑張れば良いんです。」

「ええ、わかってるわ。明日こそは、会長と……」

「……かぐや様、明日も早いですからそろそろお休みになって下さい。」

「……ええ、そうね。」

### 〈自室〉

かぐや様の部屋を出ると、直ぐ様自室へと引き上げる。自室に入ると、直ぐにパソコンを起動させる。

「……優君、私も頑張るからね。」

優君と恋人になったとはいえ、浮かれている暇は無い。寧ろ優君という大切な存在を守る為に、四宮家の弱みを握らなくては……今の私が四宮家に対して持っている交渉材料は1つだけ。かぐや様、優君、私の3人分が必要なので、あと2つ四宮家の弱みを見つけないければ……そして、現在の私に対する調査状況がどうなっ

いるのか……それを知る為には、四宮本家のサーバーに侵入しなければならない。

「すう……はあ……」

私は呼吸を整えると……手慣れた手付きで、四宮本家のサーバーへと潜り込んだ……

---

ー報告書ー

四宮家使用人、早坂愛の素行調査について……

1ヶ月の調査の結果……早坂愛は黄光様からの連絡後、件の男子生徒と一切の接触を絶った事を確認。

学内の素行調査については、Adolphe Pescarolo氏に学園の敷地内に設置されている監視カメラの映像提出を要請すると同時に、聞き取り調査を

経て学園内でも接触が無い事を確認。

引き続き調査を行うか否か、判断求む。

「……」

調査員から四宮家への報告書をじっくりと読む。一見何の変哲も無い、早坂愛私に  
関する一ヶ月の調査報告書だ。だけど……

「まさか……改竄されてる？」

言葉にすると、より確信に近付いている気がした。余りにもわかりづらく、巧妙  
に偽造されてはいるけれど……確かに改竄されている。一体どうして……

「いや……それよりも、この改竄式って……」

それは……身に覚えのある改竄式だった。私はこの改竄方法を知っている。で  
も、まさか……

〈チカチカ　　！〉〈チカチカ　　！〉

「……」ビッパ

スマホが机の上で振動し、思わず身体が反応する。私はスマホを手にとると、メッセージが来た事を表すメールアイコンをタップした。

「こ、これって……!!」

## 石と愛のエピローグ

感想、評価ありがとうございます。(。▽。)

愛の真影、これにて完結です！

---

奉心祭最終日は、早朝から慌ただしい空気が漂っていた。なんでも……怪盗からの犯行声明文が見つかり、学園中に飾られていたハート形の風船が消失したとか。そういえば……前回もそんな事があったかと、記憶を探りながら目的地へと向かう。

「まだ来てないか……」

いつもの場所にきて周囲を見渡すが、早坂先輩の姿はまだなかった。早朝に態々此処まで来たのは……昨日の深夜、早坂先輩から朝イチで会って話したい事があると連絡があったからだ。

「……」

会って話したい事か……わ、別れ話じゃないよな？ 冷静になって考えたら、やっぱりなんか違うなーってなって、次の日に別れるカップルも居るってネットに書いてあったし……

石上はイマイチ自分に自信が持てなかった。

「も、もしそうだったら……」

私も……優君が大好きだよ。だからお願い、私を優君の恋人にして下さい。

「まあ……流石にそれは無いか。」

僕は自信家じゃ無いから、あまり自分に対する自信は持てないけど……昨日早坂先輩が言ってくれた言葉と、早坂先輩に対する気持ちだけは……揺るがない自信がある。

「……」

昨日の放課後、僕と早坂先輩は恋人同士になった。ロマンの欠片も無い、ポロツと出てしまった僕の告白を……早坂先輩はとても喜んでくれた。だけど、それで満足してはいけない。早坂先輩と一緒に回れそうな出し物は、既にリサーチ済みだけど……数はそれ程多くない。オカ研の占い、天文部のプラネタリウム等……暗幕で

室内が暗く、人通りの少ない場所に位置する出し物なら、出入りに気を付けさえすれば一緒に回れる筈だ。

「……」サッ

「あ、早坂先輩っ……………!？」

「優君っ……………!」サッ

背後からの物音に呼び掛けると……………振り向く暇も無く、早坂先輩に背中から抱き締められた。

「な、何かあったんですか?……………まさか、四宮家の密偵関係で何か問題が起きて……………!？」

「半分正解……………かな。」

「……………半分？」

「うん、実は昨日……………」

早坂先輩は、抱き着いたまま……………ポツポツと昨日の出来事を語り始めた。

……………

〈四宮邸自室〉



「こ、これって……!」

緊張しながらメールを開くと、差出人はママからだった。そして、其処に書かれていた文章に私は衝撃を受けた。

このメールは愛がある条件を満たした場合に限り、愛のスマホに自動送信される様設定されています。色々言いたい事もあるけれど……先ずは正人さんの言葉をそのまま記載します。

……愛がこのメールを読んでいるという事は、既に四宮本家のサーバーに侵入し、報告書が改竄されている事に気付いただろう。察しの通り、報告書は私が書き換えた。既に愛とその周辺を調査していた調査員は、架空の任務で東京を離れているから心配しなくて良い。

「やっぱり、パパが報告書の改竄をしたんだ……だけど、そんな事がもしバレたら……」

私は焦る気持ちを抑えながら、慎重にメッセージをスクロールして続きを読み進める……

愛が心配しなくても……改竄が露呈し、我々が被害に遭う事は無いから安心なさい。それに早坂家が忠誠を誓っているのは、黄光様では無く雁庵様だ。主人でも無い人間に、義理を通す道理は無い。

「パパ……」

何より……愛娘に余計な手出しをされて黙っていられる筈もない。半年間は絶対に露呈しない様に偽装した。それまでに……四宮家に対する交渉材料を手に入れなさい。

……という事よ。ちなみに……私もパパと同意見。可愛い愛娘に脅迫なんて舐めた真似されたんだから、これくらいの意趣返しは当然でしょ？

「パパ……ママ……」

安堵の感情が膨れ上がり、潤み始めた瞳を拭いながらスクロールを続ける。如何やらまだ文章は残っているらしく、下へ下へと画面を動かして行くと……

それはそれとして……とても優しくて、正義感があって、思い遣りのある年下の

男の子は、一体いつになったらママに紹介してくれるの？

「

「……ッ！」「ヤッ——」

（ママってば、勝手に日記読むとか性格悪いし！）

「は、早坂先輩……苦しっ……！」

「あ！……、ごめんね？」

「い、いえ……話を纏めると、半年間は四宮家の密偵に気を付けなくても大丈夫って事ですか？」

「うん、そういう事みたい。」

「そっか……良かったですね。」

（常に密偵を警戒し続けるのも、相当なストレスになってただろうし……本当に良かった。）

「うん……優君のお陰。」

「え？ 僕は何もしてませんよ？」

「ううん、そんな事無いよ。だって……もし優君が居なかったら、私はこんなに早く四宮家のサーバーに侵入しなかった筈だもん……」

「……」

「あの時……優君が私を諦めないでくれたから、私は今こうして優君と一緒に居られるし、優君が側に居てくれたから……四宮家に対する交渉材料を手に入れる為に、行動する事が出来たの。」

「早坂先輩……」

「私1人だけだったら、今も動けないままだった。学園ではギャルの早坂愛、それ以外では四宮家使用人の早坂愛として……優君と出会う前の、自分を偽り続ける日々を過ごしてたと思う。優君と離れる事を選んだ、自分の選択を後悔しながら……」

「……」

「だからね……優君、私を諦めないでくれてありがとう。私の側に居てくれてあり

がとう。私を支えてくれてありがとう。私を好きになってくれて……ありがとう。」  
ヤッ

「……………」

「……大好きだよ。」

……………

せめてコレを渡す時くらいは、ロマンチックな雰囲気だと思っていた。奉心祭最終日、闇夜に灯されるキャンプファイヤーを早坂先輩と眺め、場が温まった所でコレを渡す瞬間を夢想していた。だけど……

「……大好きだよ。」

早坂先輩の心の籠った言葉を聞いて、雰囲気だとかタイミングだとか……そんなモノは些細な事だと気付いた。伝えたい想いがあるのなら、直ぐに言葉にして伝えるべきなんだ。僕はポケットから2つのキーホルダーを取り出すと、早坂先輩へと向き直る。

「早坂先輩、コレ……もらってくれますか？」

「え……？」

それはハーフハートと呼ばれるデザインで、1つのハートを真ん中から分割したモノだ。それぞれの真ん中部分には磁石が付いていて、近付けると磁石がくっついてハートの形になる代物だ。僕はその内の1つを手にとると、言葉を続ける。「奉心祭では……ハートの贈り物をする、永遠の愛がもたらされるって話、知ってますよね？」

「う、うん……」アザミ

「僕は……絶対に先輩を1人にはしません。先輩が寂しい思いをしなくても良い様に、先輩が辛い思いをしなくても良い様に……ずっと側に居て守り続けます。先輩が笑って過ごせて、心から幸せだと思える様に……僕の生涯を懸けて、早坂先輩を幸せにする事を誓います。これは……その証です。」

「あ……」

先輩の掌にキーホルダーを乗せると、黙って反応を待つ……

「ほ、本当に良いの……？」

「……早坂先輩が貰ってくれないと困ります。」

「で、でも！これじゃ、まるで……」

(ぶ、プロポーズみたいで……)

「僕は生涯、早坂先輩以外の人にコレを渡すつもりはありません……貴女だけです。」

「わ、私だけ？」

「はい。早坂先輩<sup>ハ</sup>が欠けたままじゃ、永遠の愛にはなりません。貴女が側に居てくれて初めて、このキーホルダーは永遠の愛という意味を持つんです。」

「……」

「……」

「もし……優君が他の人を好きになって、コレを返してって来ても絶対に返してあげないよ？」

「はい、ずっと持ってた下さい。」

「優君の事、自慢だってしちゃうからね？」

「はい、遠慮なくして下さい。」

「ま、ママにだって紹介しちゃうからね!？」

「ガツカリされない様に、頑張ります。」

「~~~~!!」ヤッ

「!!」

「もう……離してあげないからね。」

「はい、僕も離れたくないですから。」

「優君……」

「先輩……」

抱き付いたまま顔を上げた早坂先輩と目が合った。上気した頬、僅かに潤んだ瞳、そして、早坂先輩との距離が徐々に小さくなって行く……

「……………」

「っ!？」

残された距離が10センチを切った頃、早坂先輩はそっと目を閉じて動きを止めた……つまりは、そういう事なのだろう。此処でヘタレてはいけない！僕は一瞬で覚悟を決めると、早坂先輩との距離を詰め……

へさて！とうとうやって来ましたが、奉心祭最終日！やり残した事がない様、皆さん精一杯楽しんで下さい!!」



「ッ!?」どッ

「ッ!?」どッ

敷地内に響き渡るつばめ先輩のアナウンスに、先程まで詰めていた早坂先輩との距離が元に戻る。

「あ、あはは……そろそろ戻ろっか?」

（わ、私ったら、今何をしようとお……!?）

「そ、そうですね……」

（タイミングー!）

〈2年A組コスプレ喫茶〉

「愛ちゃん上がっていいよー!」

「いえーい!」

「かぐや様のシフトも、これで終わりです! お疲れ様でしたー!」

「はぁ、やっと終わりですか……」

「かぐやちゃん、どうしたし？ ほらほら元気出して！ アゲてけ、アゲてけー♪」  
「私にまで非日常感を演出しないで。」

………

〈休憩室〉

「はぁ、本当に接客業も大変ね……」

（……会長のバルーンアートのシフト時間まで残り30分……丁度良い時間ね。）

「……」

「早坂？ どうしたの？」

「……！」  
「ㇿー」

（優君のすっごく優しい所とか、告白してくれた時のカッコイイ所とか誰かに聞いて欲しい……！）

早坂は恋人が出来たばかりの人間が陥る、お決まりのテンションになっていた。

「……早坂？」

早坂正人の機転により四宮家の監視から逃れたとはいえ、早坂愛が四宮家の使用

人であり、四宮かぐやの近侍である事実に変わりは無い。テストは意図的に順位を落とし、常に目立たない様になっている早坂愛にとって、石上優と恋人関係という事実はイタズラに吹聴するべきモノでは無い。だが……

「……」 ヲフン

（……ってダメダメ！ そりゃ出来る事なら自慢したいけど……私が目立っちゃうと、かぐや様のサポートに不都合な事が今後あるかもしれないし。でも優君の彼女って自慢したいし、優君のカッコイイ所とか言いた……いい？）

私はメイド服を脱ぎながら考える。何かが閃きそうな……そんな予感を感じたからだ。そして、その閃きは直ぐにやって来た。

「……ッ！」

（そうだ、かぐや様に聞いてもらおう。恋人<sup>私と優君</sup>同士の遣り取りを教えてあげれば、告白する事に気後れしてるかぐや様の背中を押す事にも繋がるし！）

早坂は大義名分を掲げた。

「……早坂？ さっきからどうしたの？」

「……」

これはあくまでも、かぐや様の背中を押す事が目的だ。幾らなんでも、独り身のかぐや様に恋人自慢をするなんて……そんなかわいそうな事は流石にしない。私にだって、それくらいの分別はあるのだ。

かぐや主の事を独り身呼ばわりする辺り、早坂に近侍としての分別はついていなかった。

「かぐや様、かぐや様。」タッ

「な、何よ早坂？」

早坂による惚気話が始まった。

……

「それで私も感極まっちゃって、つい目を閉じてしまって……って、かぐや様どうかしましたか？」

「早坂、貴女……最近ちょっと緩み過ぎてるんじゃない!? 恋愛に現<sup>うつ</sup>を抜かす事が絶対に悪いとは言わないけれど、もう少し自重する事を覚えるべきなんじゃないの!?」

（私が会長に告白されなくて悶々としてるのに、早坂は石上君から告白されて付き合う事になって、そんなにイチャイチャしてるなんて……ズルい!!）

かぐやは他人の幸せを妬むタイプだった。

「あ、僻みですか？」

早坂はナチュラルに煽った。

「は…はーっ!? べ、別に羨ましいとか全然思っていないから！ そんな事で浮かれるなんて、早坂ったら本当に子供よね！ あーあー！ はしたない!! もう早坂なんて、私の事は気にせずに好きなだけ石上君とイチチャイチャすれば良いんじゃないの!？」

「……しますけど？」

「え？」

「だから、イチチャイチャしますけど？」

「なっ!？」

「一緒に歩く時は、恋人繋ぎしたり……」

「っ!？」

「2人っきりの時は、ハグしたり……」

「っ!?!？」

「ぶ、プロポーズもされちゃったり……!？」

「

「……ッ！」「アッ」

（勝った……）

早坂からかぐやへの下剋上が達成された。

「……い……」

「……？」

「ずーるーいー！ずーるーいー！！私だって会長と文化祭デートしたいし、告白だってされたいのになんて早坂だけ……っ！」「ハッハッ」

「はいはい、ちょっとやり過ぎましたね。ほらほら、会長さんのシフト時間になりましたよ？」

「早坂のイジワルう……」

「はいはい、イジワルされなくなったら、さっさと会長さんに告白して来て下さい。そしたら、もうイジワルなんてしませんよ。」

「ううー！」

「じゃ、頑張ってください。」

「わ、わかってるわよ……！」

かぐや様を見送ると、優君との待ち合わせ場所へと向かう……パパのお陰で、私には半年間の自由な時間が与えられた。その時間内に、四宮家に対する交渉材料を手に入れるのが、私の当面の目標だ。

「……」

でもそれと同時に……この与えられた時間を使って、学園生活を精一杯楽しみたいとも思っている。私がこんなに前向きで、幸せな気持ちを持てる様になるなんて……以前の嘘ばかり吐いていた私なら、絶対に有り得なかった事だ。でも……

「……お待ちせ。」

「あ、早坂先輩、疲れ様です。それじゃ、行きましょうか？」ヤッヒ

「……うんー」ヤッヒ

優君が側に居てくれる限り、この気持ちは決して嘘にはならないと……私は知っ

ているから。

―完―

---

ここまで読んで頂きありがとうございました！

afterは思い付いたら投稿したいと思います。



## 愛の真影 after ①

感想、評価ありがとうございます！（。▽。）

いやあ、3期最終回は完璧な終わり方でしたね。

マジで神回でした。かぐやの……秒？ がカットされたのは残念でしたが、新作アニメが4期か映画なら導入部分でやってくれると信じて待ちますか。

---

もう……離してあげないからね

はい、僕も離れたくないですから

わかるか、四宮……これが俺の気持ちだ

これが私の気持ちです

それぞれが胸に秘めていた想いを吐露し、心の距離を縮めたその日の夜……

〈四宮邸〉

「会長がね……スタンフォード大を私に受けろって、アメリカまで一緒に来いって言うのよ?」

「!!」

「ホント無茶苦茶よね……でも、顔を赤くして言う会長がお可愛くて……思わずOKしちゃったの。」

「そ、それで……どうしたんですか？」

「……思わずキッスしちゃった！」

「っ！！？ き、キスって、あのキスですか!？」

「そうよ、好きな人にするあのキスよ！」

「そ、そうですか……こ、後学の為に聞いておきたいのですが、キスって……実際どうでした？」

早坂は興味津々だった。

「なんか……すごかった！」

「なんかすごいんだ……」アッザアッザ

「早坂知ってる？ 初キッスがレモン味っていうのは、嘘なのよ？」

「え、そうなんですか？」

「会長はちょっと前にアメリカンドッグを食べてたから、少しケチャップの味がしたわ。」

「味……？キスって味がするんですか？」

「それはそうでしょう？口とは何かを食べる所なんですから。」

「それはまあ、でも……んん？」

「でも少し手間取っちゃったわ。唇を合わせる所までは簡単なのですが、その後が大変で……」

「その後!?ち、ちょっと待って下さい!キスは唇を合わせる所がゴールで、その先なんて無いんです!!かぐや様は一体何をしたんですか!？」

「あらあら……早坂は私より早く恋人が出来た癖に、何も知らないのね?世の中にはね、好きな人にだけする特別なキスがあるのよ?おさしみって言うんだけど、こうやって……唇を合わせた後に、舌をれってするのが恋人同士の作法なのよ?」

「」

「あらあら、早坂はそんな事も知らなかったのね……ふふ、お可愛いこと♡」

「あ……」プ。ル。ル

「……?」

「あほー!？」

「あほー！ー!?」

「あほー！ー!?」

「あほー！ー!?」

「あほー！ー!?」

四宮邸に早坂の叫び声が響き渡った。

かぐや様のやらかしが判明した次の日……文化祭を理由に免除されていた使用人の仕事も、今日から通常勤務へと戻る。5時のアラームで目を覚ますと、シャワーを浴び、歯を磨き、コンタクトを装着し、メイクと髪セットを済ませ、メイド服に袖を通した所で動きを止める……以前の私なら、直ぐに部屋を出て仕事を始めていたけれど……

「……」  
「オッ、ハッ、ハッ」

私はベッドに腰掛けると、スマホを頭上に掲げてポーズを取った。インカメラで

綺麗に撮れているかを確認しつつ、シャッターボタンをタップする。

「……」カ。カ。カ。

「おはよ、優君。朝のお仕事行って来るね。」

まだ朝の6時だから、迷惑じゃないかな……と心配になったけど、コレは優君からお願ひされた事だ。使用人の仕事で早起きしている事を優君に話したら……自分もその時間に起きるから、連絡して欲しいと言ってくれたのだ。

「……」

優君へのメッセージと先程撮った写真を一緒に送り、優君からの返信を待つ……数秒で既読が付き、メッセージが返って来る。

「早坂先輩、おはようございます。朝から先輩の可愛い姿が見れて滅茶苦茶嬉しいです。仕事が大事なのわかりますけど……あまり無理し過ぎない様、気を付けて下さいね？」

「……!!」ハ。カ。カ。カ。

（か、可愛いって！しかも滅茶苦茶嬉しいって!! 無理しない様になって心配もしてくれるし……もう！優君ったら！）

早坂のモチベーションが爆上がりした。

……

「かぐや様、失礼します。」カチャ

使用人の仕事を終わらせると、かぐや様を起こしに部屋へと入る。昨夜……自身  
のやらかしを自覚したかぐや様は、随分と動揺していたけれど……既に誤魔化しも  
効かない段階になってしまっているのです、今更慌ててもしょうがないと割り切る事  
が出来ただろうか……

「かぐや様、朝ですよ……ん？」ン、ん

扉を閉めながらかぐや様へと声を掛けると、既にかぐや様はベッドから起き上  
がっていた……珍しい事もあるモノだ。いつものかぐや様なら、私が起こすまで  
ぐっすり眠っている筈なのに……

「……？」

（まあ、いっか……）

余計な手間が省けたと考えを改めて制服を手にとると、かぐや様へと話し掛ける。

「かぐや様、着替えをお持ちしまし……」

「はやちゃか、おはよ！」

「」

早坂にとって地獄の午前が幕を開けた。

### 〈中庭〉

「」  
「グッダリ」

「なんか……今までで1番疲れてません？」

「うん、色々忙しい事が重なっちゃって……」

地獄の様な時間を通り切った私は……中庭のベンチに腰掛けると、隣に座る優君へ凭れ掛かっていた。数時間前……私はかぐや様を起こす為に、かぐや様の部屋を訪れた。私が起こす前に起床するという、いつもと違う行動を取るかぐや様……この時点で気付くべきだった。

「はやちゃか、おはよ！」



私を待ち受けていたのは……その言動に一切の知性を感じ取る事が出来ないかぐや様だった。過去に数回……ある条件を満たした時だけ、かぐや様は夢の中に理性と知性を置いて来たかのような振る舞いをする事があった。睡眠不足と精神バランスが絶妙な化学反応を起こした時、突如として現れる最強クラスに面倒臭いかぐや様……

「はやちゃか、はやちゃか！」*グググ*

「どうしたんですか、かぐや様？ お願いですから、今日は大人しくして……」

「かいちよーのところに来てくる！」*てってって*

「」

登校するなり……会長さんのクラスへ行こうとするかぐや様を止めるのは、本当に大変だった。

「えー、じゃあこの問題を四宮さん……」

「えーと、えーとお……」

「はいはいはい！ 先生、ウチ解るし!!」

「あ、そう？ じゃあ早坂さん、解いて下さい。」

「……？」

かぐや様が授業で当てられそうになる度に、必死に手を上げて問題に答えたり……  
「文化祭、どのかぐや様も最高に麗しかったわ……っていつまでも浮かれてちゃダメ！ しっかり切り替えないと！ そう、かぐや様の様にピシッと……」

「……♪」てってって

「ピシッ……と……な、何か今、宇宙規模に愛らしいお姿のかぐや様が見えた様な気がっ……も、もっと近くで確認しないと！」  
「フッザッザッ

「巨瀬ちゃん、やっほー！ 今日も寒いねー！」  
「キッ

「あ、早坂さん！ ついさっき、宇宙規模に愛らしいかぐや様がお見えになって……」  
「キッ

「えー？ いつも通りだしー？」  
「キッ

「いや、でも今……」  
「キッ

「気の所為だから……ね？」  
「ガッ、ゴッ、ゴッ

「あ、圧が凄い……」

巨瀬さんの追求を力技で有耶無耶にしたり……

「つ、疲れた……かぐや様は生徒会に行かれたし、後の事は優君にお願いして……」

「はやさかさん、おはなちちよ！」

「勘弁してえ!!」

かぐや様の真似をする巨瀬さんに話し掛けられたりと、本当に大変で忙しい時間だった。

……

「って感じで……」

「それは……大変でしたね。」

「……私頑張ってるよね？」

「滅茶苦茶頑張ってますね。」

「じ、じゃあさ、この前みたいに……」

「……この前？」

「その……」

こんな事は優君にしか頼めない……けど、私の方が年上でお姉さんなのにこんな事を頼んで引かれないか心配だし、面と向かってお願いするのは……幾ら何でも恥

ずかしい。

「だ、だからっ……」

私は気付いてもらいたい一心で……優君の肩に頭を乗せて、身を預ける。

「んん？……」

（あ、そういう事か。）

「……」

「よく頑張りましたね、先輩は偉いです。」ヤッヤッ

「……！」ヤッ

優君は……あの時と同じ言葉を言いながら、私の頭を撫でてくれた。どうしよう……私の方が年上でお姉さんなのに、こんな事思っちゃいけないのに……

早坂愛はマザコンである。石上優と出会うまでは、母親以外の人間に弱みを見せる事は疎か、甘える事すら出来なかったのである。石上優と交友を持ち、四宮黄光の件を乗り越えた事により……早坂愛は初めて、母親以外の人間に弱みを見せて本音を話す事が出来る様になったのである。

「……ッ！」ヤッ

（優君に甘えるの癖になりそう……）

「……好きなだけ甘えてくれて良いですからね。」

「え？」

その言葉に顔を上げると……とても優しく、慈しむ様な雰囲気を纏った優君と目が合った。

「い、嫌じゃ無いの？ 私の方が年上なのに……」

「年上だからとか関係ありませんよ。それに、彼女に甘えられて嬉しくない男なんて居ませんよ。先輩さえ良かったら、好きなだけ甘えて下さい。」

「もう、優君たら……そんな事言ったら、本当に好きなだけ甘えちゃうよ？」

「ははは、ドンと来いです。」

「じ、じゃあ……」 ヤッヒ

「……」 ナブナブ

「ゆ、優君っ……」

「先輩……」

「……」

「……」

「……………!!」ア、ギ、ギ、ギ、

「」

「」

「あら？ 私の事は気にしなくて大丈夫ですわよ？ さあ、早く続きを……………！」ン

フ、フ、フ

（はあぁー！ まさか……………まさか、かぐ<sup>推</sup>や様<sup>カ</sup>と会長<sup>ブ</sup>がキスする所を拝見する幸運に恵まれるなんて思いませんでしたわ！ ですが、あの時の光景を差異無く描き切る為には……………他の人のキスする所を見せて頂いて、見識を深める必要があります！ それがまさか、こんな良いタイミングで早くもその機会がやって来ようとは！ 最早これは、あのシーンを早く描けという天界からの思し召しと思えませんか！）  
かれんは創作活動に貪欲だった。

「き、紀ちゃん!? 何してるし!？」

「覗きですか……………」

（なんか邪な事考えてそう……………）

「んま!? 失敬ですわね! 中庭で堂々とイチャイチャしておきながら、覗きだなんて心外ですわ!」

「うっ……」

「それは、まあ……」

「それで……続きはしませんか?」

「する訳が無い……」

「き、紀ちんったら何言ってるし! あ、優君! そろそろ生徒会に行く時間じゃないの!」

「そ、そうでした! じゃあ、行つて来ますね!」

「うん、またね!」

これ以上の追求を紀さんからされる前に、強引に優君をこの場から離脱させる。後は、私が何とか上手く誤魔化す事が出来れば……

「え、えーと……」

「早坂さんたら、案外甘えん坊なんですのね?」

「き、紀ちん! その、さっきのは……!」

（なんとかっ、なんとか誤魔化さないとっ……）

「ふふ、良かったですわね？」

「え？」

「石上会計と一緒に居る時の早坂さんは、とても幸せそうなお顔をしていましたわ。好きな人が居て、恋人が出来るというのは……とても幸せな事なのでしょうね。早坂さん、おめでとうございます。友人として祝福致しますわ！」

「紀ちゃん……」

（そう、だよね……）

優君との遣り取りを見られてしまった事に、一瞬ヒヤッとしたけど……紀さんの言葉に思い直す。

そうだ……私は既に知っている。紀さんや巨瀬さんは、信頼するに足る人間なの

だと



先輩が一言……助けて、チカラを貸してと手を伸ばせば、その手を取ってくれる人も居るんじゃないですか？

「……」

優君の言葉が……私に勇気を与えてくれる。

手<sup>手を伸ばし</sup>を伸ばし、  
信<sup>その手を取ってくれる</sup>頼し、信<sup>その手を取ってくれる</sup>頼される関係……その為には、最初の一步がとても大切で……

「……」

（私から手を伸ばせば……）

「早坂さん？　どうかされまして？」

その一步は私から踏み出さないといけない

「ね、紀ちゃん……」

（きっと、紀さんなら応えてくれる。）

「はい？」

でも……不安は無い

「紀ちゃんが良ければなんだけどさ……」

（先ずは、私が信頼される様に……）

「はぁ……？」

だって、私には優君が居るから……心から信頼出来る、大切な人が側に居るから

「今度……」

（紀さんの心に寄り添おう……）

「……？」

人を信じる事の大切さを……

「紀ちんの書いたポエム……読ませてくれる？」

優君が教えてくれたから

「

かれんにとって地獄の午後が幕を開けた。  
今日の勝敗、かれんの敗北

澄んだ瞳をした早坂からの追求を躲すという、高難易度ミッションが急遽発生した為。

## 愛の真影after②

感想、評価ありがとうございます！

やはり15巻を映画化来ましたね！

---

## 〈生徒会室〉

早坂先輩に見送られ、生徒会室へと向かう。早坂先輩の話だと、如何やら今日の四宮先輩は普段と違うらしい……多分アレだろうかと、前回の様子を思い浮かべながら扉を開いた。

「こんにちはす。」ヂヂヂ

「っ！ いしがみくん、おはよ！」てってって

「四宮先輩、おはようございます。」ヂヂヂ

「石上……少しは今の四宮に疑問を抱け。石上<sup>お前</sup>の適応力どうなってるんだ。」

「きゃわわー！ かぐやちゃんてば、もふもふでふわふわー！ 家に飾りたーい！」  
ギョッ、グニョニョ

「……………」ハ。ッ

「あいたっ!？」

「……」

「もー、叩いちゃめーっでしょ！」ギョッ

「うーん……………」やっぱり貧乳の人って、巨乳の人に対して何かしら思う所があるんですかね？」

「貧乳言ったるな。」

……………

「こんにちは。」カチヤッ

「ああ伊井野か、お疲れ。」

「うゆ……………」ウツ

「……………」四宮先輩、どうかされたんですか？」

「ああいや……………」大丈夫だ、問題無い。」

「四宮先輩、随分と眠そうですね……」

「まあ文化祭の疲れとか残ってるだろうしな。藤原の過剰な可愛がりが原因な気もするが……」

「今日は大した仕事ありませんし……寝かせといてあげましょう。基本的に、寝てたら無害らしいので……」フツ

「ああ、そうだな。」

（無害？）

ソファで横になる四宮先輩に毛布を掛けながら……僕は早坂先輩が言っていた言葉  
葉を思い出していた。

……

「とりあえず……元気に遊ばせるかお腹いっぱいにすればオネム無害になると思っ  
たら、後はよろしくね？」

「四宮先輩は小学生か何かですか？」

「うとうとし始めたなら、子守唄とか背中ポンポンとかして落ち着かせてあげてね。  
一度寝たら、中々起きない筈だから。」



「幼稚園児ですか？」

……

「……」

（早坂先輩……この状態の四宮先輩をフォローするのに、相当苦勞したんだろうなあ……）

「ねえねえ石上くん、クリスマスイブの日って暇？ その日ウチ来ない？」  
ぎゅ

「……勘違いさせる気満々な所悪いですが、引っ掛かりませんからね。クリスマスパーティーに誘うつもりなら、普通に誘って下さい。」

「石上、今のでよくわかったな。」

（騙す気満々の藤原相手にここまで淡然と出来るんだから、大したモノだな。）

「もー！ 石上くんてば、全然可愛くないんですけど！ えーえー！ そうですよ、クリスマスパーティーのお誘いですよ！ 生徒会の皆で集まってワイワイするんですよ、文句あるんですか!？」

「何でキレてるんだよ。」

「会長も来ますよね？ かぐやさんは来るって言ってますよ！……そうですねー？」

「うーん……」

「ほら！」アッ

「いや、魔されてるだけじゃねえか。」

「ふ、藤原先輩！ その……私は友達からクリスマスパーティーに誘われて……」

「僕も、彼女いるんでパスで。」

「ええっ!? 石上って彼女居たの!？」

「ああ、奉心祭の時にちよつとね。」

「そ、そうなんだ……」

「え、彼女なの？ 彼氏じゃなくて？」

「何言ってるんだ。」

「ぶ」

「藤原先輩は頭沸いてんですか？……伊井野もそんな目で見て来るな、違うから。いつもの藤原先輩の妄言だから。」

「そ、そうだよね……！」アッアッアッ

「……ハッ！」

（そっか！ 石上くんとハーサカ君の関係は、言ってしまうえば秘するべき関係！ あまり大っぴらに吹聴する訳にはいかないって事ですネ！）

「……藤原先輩？」

「……そういう事なら仕方ないですね。石上くん、私はちゃんとわかってますからね！」サッ

（よく考えたらハーサカ君は女側なんですから、彼女と言っても差し支えないですよネ！）

「はあ、そうですか……」

（よくわかんないけど、アホ面してるから絶対わかってなさそう……）

その日の夜、とある少女は頭を悩ませていた！

「はぁ……なんとか遣り過ごす事が出来ましたが、明日からどうすれば良いのでしょうか……」

私は手元にあるノートに視線を落とし、思考を巡らせ続けます。理由は単純で、今日の早坂さんの発言に対する対応策を捻り出そうと躍起になっている所なのです。しかし、理由が理由だけに有効な対応策が思い浮かばないまま……時間だけが過ぎてしまっています。

「も、もう、ポエムノートを偽造するしか!? で、ですが……歩み寄ろうとしてくれている早坂さんに、嘘を吐くというのも……」

紀ちんの書いたポエム……読ませてくれる?

「む、無理ですわ……! あんな澄んだ瞳で微笑み掛けて来る早坂さんに嘘を吐くなんて、出来る筈がありませんわ!!」

早坂さんが此方側なら何も問題は無いのですが、その判断を下すには情報が足りなさ過ぎますし……

「いっその事、早坂さんを此方側に引き込む事が出来れば良いのですが……たとえば引き込む事が出来なくても、理解を得る事が出来れば或いは!」

その希望的観測とは裏腹に、私の脳内には……最悪の状況が浮かんでは消えて行きます。

うわぁ……紀ちんてば、同級生で妄想するヤバイ人だったんだ……秀知院のネット掲示板に書き込んでバズっちゃおう☆

ノートの写真撮って〜！ イン〇タとT w i t〇erに画像上げて〜！ 紀ちんの写真も一緒に載せて〜！……はい！ バズる3種の神器の出来上がり〜！

「」

（アカンですわ）

い、いえいえ！ 早坂さんはそんな人じゃありませんわよ!? ありませんけど……とりあえずのピンチは脱しましたし、早坂さんと2人つきりにならない様にすれば暫くは大丈夫……ですわよね？ エリカが一緒では心許ないですが、事情を知っている石上編集が一緒に居ればヤバイ事態にはならない筈……！

かれんは問題を先送りにした。

……

〈四宮邸〉

「……」

その日の夜……私はかぐや様の制服にアイロンを掛けながら、今日の出来事を思い出していた。紀さんは私の発言に一頻り動揺する様子を見せた後、急用があると言って去って行ってしまった。まあいきなりあんな事を言われても紀さんも困っただろうし、仕方ないと思う。今度は……優君と一緒に居る時にお願ひしてみようかな？ 優君から聞いてるから大丈夫だよって。それなら紀さんも、気を許して話してくれるかも……

かれんは全然ピンチを脱していなかった。

「早坂、ちゃんと聞いているの？」

「……ええ、聞いてますよ。」

先程までの思考から意識を逸らし、目の前で不貞腐れている主へと視線を向ける。午前中の面倒臭い状態から元に戻ったと思ったら、帰って来るなり会長さんは意気地が無いだの、手を繋いでくれなかっただのと愚痴を聞く羽目になっている。今は会長さんのヘタレ話から派生して、優君の話になっている。

「全く……石上君くらいよ。年下なのに、私に対して一切の気後れもせずに接して

来る様な子は。」

「意識してるかはわかりませんが……優君には、その人の本質を見抜く能力がありますからね。」

「あら、惚気かしら？」

「別にそういうつもりでは……」

「本当かしら？ まあいいわ……私に気安く接して来た事は、指輪に免じて許してあげるわ。」

「指輪？ かぐや様、指輪って何の事ですか？」

「あら、言わなかったかしら？ 文化祭の初日に貰ったのよ……石上君からね。」

「は？」

……

「……ん？ 早坂先輩からメッセ来てる？」

へうわきものー！！

「!？」

この後滅茶苦茶弁明した。

次の日……僕は中庭のベンチに座り、早坂先輩からの尋問を受けていた。

「優君、本当に本当に……かぐや様の事は、何とも思っていないんだよね？」

「思ってます！ いや、マジで。」

「そ、それでも！ 彼女より先に指輪渡すとか良い気しないし！」

「でも小指！ 小指に嵌めるヤツですから！ 勿論、早坂先輩には薬指に嵌める指輪をプレゼントするつもりです！」

「だったら良いけど……」

「いやホント、信じて下さい。」

「信じるよ、信じてるけど……」んん

「へ、先輩？」へんはい

「……優君の優しい所は大好きだけど、あまり私以外の女の子に優しくし過ぎてると……好き度下げちゃうからね？」んん



「……すいません。」

早坂先輩の言う通り、男の僕が女の四宮先輩に指輪を贈るという行為は些か迂闊過ぎた気がする……単なるお返しのもりだったんだけど、早坂先輩の立場からすれば良い気はしないだろうなと反省する。

「……」

「……」

早坂先輩は、むにむにと僕の頬を押したり引いたりし続けている……罰とかお仕置きのもりだろうか？ それなら、先輩の気が済むまで受けるのも吝かでは……  
「ねえ、かれん……共通の友達が結婚する時って、どっちの友達枠で結婚式に呼ばれるモノなの？」

「そうですね……昔は男友達は新郎側、女友達は新婦側だったらしいのですが、近年ではそこまでキッチリ分けたりはしないそうですね？」

「へー、そうなんだ！」

「」

「」

「早坂さん、式には呼んでね！」

「記念写真は是非私達に！」

「こ、巨瀬ちゃんたら何言ってるし!？」

「そ、そうですよ、何言ってるんですか！」

「え？ するんでしょ？ 途中からしか聞こえなかったけど……会計君が早坂さんに薬指に嵌める指輪をプレゼントするって言ってたでしょ？ もうそれって、プロポーズじゃん！」

「仲睦まじいですわねー。」

「あ……」

「あ……」

ガチ勢先輩のその指摘に、先程した発言が脳裏に蘇った……

でも小指！ 小指に嵌めるヤツですから！ 勿論、早坂先輩には薬指に嵌める指輪をプレゼントするつもりです！

……どストレートなプロポーズしてたわ。これ以上無いってレベルの発言してたわ……あれ？ でも早坂先輩も受け入れてくれる感じだった様な……

「……」ぢ

「はああああっ……!!」ㄥㄥㄥ

隣に座る早坂先輩に視線を向けると、真っ赤な顔を両手で隠しながら俯いていた……

「……ふーん、ふーん、ふふーん♪あれ？皆で集まって何してるんですか？」

「っ!？」

（げっ!？ 藤原先輩!？）

「あ、藤原さん！カップルがプロポーズしてるだけだから気にしないで！」

「」

（エリカー！!？）

「」

（ガチ勢先輩！!？）

「え、プロポーズ!？学園内でプロポーズするなんて、一体誰っ……」

「あ……」

「」

最悪だ……ガチ勢先輩を止める暇は無かったし、その直後に藤原先輩と目が合ってしまった。藤原先輩は、僕と俯く早坂先輩を交互にガン見している。コレを誤魔化すのは、中々骨が折れそうだ……そう考えながら、藤原先輩の反応を待っている……

「えっ!? は、早坂さんが石上くんの恋人なんですか!? ちょ、じゃあハーサカ君は!? めくるめく男の子同士の友情（意味深）は!?!?」  
「ぎゅー」

……なんか思ってた反応と違った。

本日の勝敗、藤原の敗北

男の子同士の友情（意味深）が存在しない事実であると気付いた為。

これで完全に終わりですね。いやー思った以上に長くなった気がします。早坂✓を書き始めた時は、四宮雲鷹が早坂愛の父親なのではないか? という考えがあっ

たので、3話か4話くらいまでそのつもりで居たら本編で普通に父親出て来てシリ阿斯展開を考え直す羽目になったのも、今では良い思い出です。

その場合は修学旅行まで話を引っ張るつもりでしたが、なんとか奉心祭辺りで終わらせる事が出来て助かりました。』

もう書けないとは思いますが……万が一何か浮かんだら、また投稿します。万が一浮かんだらね、万が一ね……。』。〇〇ここまでお付き合いして頂きありがとうございます！

## 愛の真影 after ③

お久しぶりです（・ω・）

感想、評価ドシドシお願いします。

---

## 〈中庭〉

「ほーら、こっちだよー♪」カカカ

「いやー！ いやー！ 」ハ。ハ。ハ。

草木に囲まれ、一般の生徒なら到底気付く事の無い空間で、私は猫じゃらしを片手に猫ちゃんと戯れていた。日付は奉心祭から1ヵ月が経ち、秀知院は3学期を迎えている。

「ニヤァー」コ。ロ。

「うん？ お腹撫でてほしいの？」サグサグ

「サググ」

奉心祭のあの日……優君と恋人になり、四宮家の監視に対しても多少の時間的余裕が出来た事で、私は色々と吹っ切れる事が出来た。秀知院生の早坂愛という仮面は被り続ける必要はあるけれど、校舎内では人目を気にせずに優君と過ごしている。かぐや様も会長さんとは色々ありながらも、上手くいっている様だし……優君と出会ってから全てが良い方に向かっているみたいで、なんだが無性に嬉しくなってくる。

「……優君<sup>ババ</sup>遅いねー?」<sup>ババ</sup>ナヅナヅ

「イヤ?」

「……ふふ♪」

（……なんてね。でも、パパか……もしかしたら、あの夢が正夢になる可能性だってあるんだよね? 子供は女の子で、名前は優愛……）<sup>ヤ</sup>

「……」REC

「」

「あ、どうぞ続けて下さい」

「優君……いつから見えたの?」

「パパ遅いねーって所からですかね……」

「っ！っ！っ！」サ。サ。サ。サ。

「覗き見るつもりはありませんでしたが、それはそれとして永久保存版にします。誠にありがとうございました」

「消ーしーてー！」サ。サ。サ。サ。

「それだけはお断りします」

こんな感じの日々を過ごせる事が……優君が側に居る事が、とても幸せだと感じる。でも、全く悩みが無いのかと言われると、無いとは言いい切れないんだけど……

#### 〈四宮邸〉

「それでね？ 会長ったら我慢の限界だって言って、何回も何回も唇が溶けちゃうんじゃないかってくらいキスしてくれて……あそこまで求められたら、私もお返ししないとでしょ？ だから、その後も……」



「へー、フザデスね……」

かぐや様が会長さんと恋人関係になってから、今まで愚痴や文句に充てていた時間が、濃度の濃い惚気話へと変化した。始めのうちは、それなりに祝う気持ちを持ちながら聞いていたのだが、こうも続くと辟易してしまう。ただでさえ、私はまだ……

「そういえば、早坂の方はどうなの？」

「え!? わ、私ですか？」

「ええ、私ばかり話を聞いてもらうのも申し訳ないわよね？ ねえ早坂……石上君とのキスは、どんな感じだったの？」

「そ、それはっ……」

「あら？ あらあら？ 貴女もしかして、まだ石上君とキス出来てない……なんて事は無いわよね？」

「ッ！」と。カッ

「ふふ、そんな事無いわよね？ だって……早坂が石上君と付き合う事になった日は、私と会長よりも早かったと記憶してるのだけど……」

「ッー」どッッ

「まさか……普段から恋愛事に関して色々なアドバイスをしていた癖に、未だに年下の恋人とキスする事も出来ずに日々悶々としているなんて……そんな事、ある筈ないわよね？」ッッ

かぐやは此処ぞとばかりに調子に乗っていた。

「くうっ！わ、私はっ……」

（元はと言え、かぐや様の所為で……）

「ええ、私は？」

「私は……私はかぐや様みたいに初キスで自分からディープキスをする程、淫らな性根をしておりますので!!」くわっ！

「誰が淫らな性根よ！」くわっ！

「はあ……」

私は中庭に設置されているベンチにぼすんと腰掛けると、小さく溜め息を吐いた。昨夜のかぐや様との遣り取りが、頭の中をぐるぐると回っているが……それよりも、奥の方にこびり付いてしまっている言葉が1番の悩みの種だ。それは……早坂愛には、1つの懸念があった……

あらあら……早坂は私より早く恋人が出来た癖に、何も知らないのね？ 世の中にはね、好きな人にだけする特別なキスがあるのよ？ おさしみって言うんだけど、こうやって……唇を合わせた後に、舌をれてするのが恋人同士の作法なのよ？

こうやって……唇を合わせた後に、舌をれてするのが恋人同士の作法なのよ？  
舌をれてするのが恋人同士の作法なのよ？

「……」

（絶対無いと思うけど……もし優君とキスする時に、かぐや様みたいに舞い上がったかった所為で、深い方をやっちゃったらどうしよう……）

そう、早坂愛の懸念とはこの事であった。かぐやと早坂は幼い頃から共に教育を

受け、姉妹の様に育って来た。同じ環境で育てられた人間は、自然と趣味や嗜好も似通ったモノになる。その証拠に、両者はどちらも同じ病を患い、病院へと運ばれている。早坂愛の懸念……それは石上との初キス時に、深い方おさしみをしてしまわないかというモノであった。

「はあ……」

（誰かと試す事が出来たら……でも優君以外の男となんて絶対嫌だから、念の為に試すとしたら必然的に女の子相手になるんだけど、秘密にしてもらわないと困るし……かぐや様は秘密にしてくれるだろうけど論外。うーん……何処かに人に助けを求めても普段から奇行ばかりしてる所為で、周りの人に何言っても信じてもらえないオオカミ少年みたいな子が近くに居れば良いんだけど、そんな条件を満たした都合の良い女の子なんている訳なっ……）

「あ、早坂さん何してるんですか？」

「……」

「早坂さん？」

「ねえ書記ちゃん……今暇してる？」

「ゴリゴリに暇してます〜♪」

「じゃ、ちょっと此処に座ってくれる？」

「はい、それで何か用っ……」

「……ッ！」  
「ハハッ」

「早坂さん!？」

藤原、突然のピンチ。

……

「は、早坂さん!?! いきなりどうしたんですか!?! い、言っておきますけど、私は至ってノーマルでしてっ……!！」

「お願いわかって! かぐや様<sup>あの子</sup>みたいな失敗をする訳にはいかないの!!……私なら大丈夫! ちゃんと野良犬<sup>そっち側</sup>に噛まれたって思えるから!」

「なんで私が野良犬!?! 今まさに噛まれそうになってるの、この私なんですけど!?!」  
「かぐや〜」

「書記ちゃんにはわかるの!?! 自分はもう初キスを済ませてるからって、少しでも時間があればあのキスは良かった! このキスも良かったと、常にマウントを取ら

れ続ける私の気持ちが！しかも特大の爆弾まで私に植え付けて、その所為で気後れしてしまう私の気持ちも少しは汲むべきじゃない!?」ザッ

「し、知りませんし何の話をしてるんですか!? っていうか、絶対私は無関係ですよね!?」ギタハタ

「お願いだから余計な抵抗しないで！一瞬！一瞬ちょっと触れるだけだから！私だって別に心の底から書記ちゃんになりたいとか思ってる訳じゃないんだから、書記ちゃんも我慢して！」

「もって何ですか、もって!? そんな嫌々するみたいない言い方されてOKする訳ないですよね!？」

「お願いだから、私の為に犠牲になって！」ググッ

「ううう!? ま、負けませんよお!!」カッッ

「ギャ !?」トタッ

「カ…カ…ふふふ、私腕力には結構自信があるんですよ ? そう簡単に

思い通りになると思ったら……」ザッ

「……」

「……かしや？」ぢぢ

「ふ、藤原さんが早坂さんを押し倒してる、とんでもない写真が撮れてしまったわ……！」 ヅツツ

「」

「こ、巨瀬ちゃん!？」

「早坂さん、すぐ助けるから安心して!……藤原さん! 今すぐ早坂さんを解放して!」

「解放!? ちょっと!? 巨瀬さん、これはそういうのじゃないですよ!？」

「何が違うのよ! あんなに息を荒くして早坂さんを押さえ付けておいて……いくら私が相手だからって、今更言い訳が出来ると思わないで!」 くわっ!

「い、言い訳とかじゃなくてっ……」 ヅツツ

「藤原さん……別にね、私は同性愛を否定してる訳じゃないのよ? ただ、早坂さんには会計君という彼氏が居るの。だから……」

「ちょ待あああっ!? 何か凄い誤解されてるんですけど!? 違いますからね!? この状況は早坂さんに襲われたからこうなってるだけですからね!？」

「吐くならもっとマシな嘘を吐いて！」

「は、早坂さん、そうですね!? この状況は早坂さんが襲って来たからこうなっちゃってるだけですよね!?」

「……」

「……は、早坂さん？」

「巨瀬ちゃん……助けて！」カレカレ

「早坂さああん!!?」ガビーン

「任せて早坂さん！私が欲に負けた藤原さんから助けてみせるわ!! そして、この不祥事を生徒会に報告し、藤原さんの魔の手からかぐや様のお身体も守ってみせるわ！」ヤリッ

「1つの誤解がとんでもない事態に発展しそうなんですけど!?」サビーン

「そして事が終わった後、かぐや様はこう言うの！これからは藤原さんじゃなくて、貴女に私の隣に居てほしいわって！そ、そんな事をかぐや様に言われたら私……！」ハッハッ

「滅茶苦茶私欲入ってません!?」ガビーン



「……」

（よく考えたら……かぐや様が異常なだけで、私はやらかさない可能性の方がずっと高いんだから、変に意識しなければ多分大丈夫……だよな？　いくら女の子が相手でも、初めてはやっぱり……）

この様に初キスに苦悩していた早坂だが……この後、修学旅行で起こるある出来事がキッカケで初キスをする事になるのは……また別の話である。

完！

「オマケ話」四宮<sup>氷</sup>かぐや<sup>や</sup>三度目の敗北

「待ってたわよ、石上君」

12月24日の昼頃、四宮先輩から呼び出しが掛かった。前回同様、クリスマスプレゼントの買い出しに付き合わせるつもりなのだろう。既に僕自身、早坂先輩へのプレゼント候補をいくつか考えているが、四宮先輩の意見も取り入れて考えたいと思っていたので都合だ。

「クリスマスパーティー用のプレゼントと、会長へのプレゼントを買うんですよね？ だったら、こっちの方に良い店が……」

「んんんー!? な、何を言ってるのかしら!? 私はクリスマスパーティー用のプ

レゼントを買いに來ただけで、別に会長のプレゼントをかうだなんて一言もつ……」

「じゃ、買わないんですか？」

「……」

「まあ時間も限られてますし、この話はここまでにしてプレゼントを選びましょうか？」

「そ、そうね、そうしましょうっ……それで参考までに聞くのだけど、石上君はどういうモノを贈るつもりなの？」

「僕ですか？ そうですね、今の所は猫関連の何かを考えてます。猫のぬいぐるみとか、猫耳付きの部屋着とかそういうモノを……」

「……ッ！」ハッ

（全く……仕方ないわね。まあ石上君は早坂と付き合い始めてまだ日が浅いでしょうから、早坂が猫嫌いなのを知らなくても仕方ないわね。ここは1番付き合いの長い私が教えてあげなくちゃ……）ハッ

※注 かぐやは早坂が石上に自身の境遇や立場についてブチ撒けてる事を知りません。

「四宮先輩？」

「少しいいかしら石上君？ 貴方は知らないでしょうけど、早坂は猫が大嫌いなものだから……」

「ああ、嫌いだったんですね。今はもう猫嫌いは克服して、逆に大好きになってますけど……」

「っ!? そ、そんな筈っ……」

「証拠見ます？」

僕はスマホを取り出すと、猫と戯れている早坂先輩の写真を画面に表示して差し出した。

「」

「……四宮先輩？」

「石上君、念の為言っておくけど……早坂と1番付き合いが長いのは私なんだから、その所を勘違いしない様にしてほしいわね。そもそも私と早坂は、幼等部の頃からの……」  

「……」

（四宮先輩……付き合ってた年月の長さでマウント取って来る、クソ面倒臭い元カレみたいな事言い出して来たな……）

〈オマケ話〉早坂愛は手作れない

「優君、ごめんね？」

「え？ 何がですか？」

2月某日……2年生の修学旅行という、本来は関わる事が無い筈のイベントに僕が関わる事になったのは記憶に新しいが、それによって生じた騒々しさも、徐々に沈静化していったある日の午後……早坂先輩と校舎内を歩いていると、突然謝罪をされた。謝られる心当たりがなかった為、反射的に聞き返す。

「その、バレンタインのチョコ……手作りはちょっと出来そうにないから……」

「あ、そうなんです。でも謝ってもらう程の事でもないっすよ。色々ありましたし、一人暮らしも大変でしょうしね」

「ううん、そういうのは大丈夫なんだけど……ちょっと、チョコ作りにはトラウマがあつてね……」

「トラウマ？」

「うん……去年の今頃だったかな？ かぐやが会長に手作りチョコ作るってなって、オカルト研究部からレシピを貰ったんだけど……」

「はぁ……」

「取り返しのつかない過ちを犯しちゃって……あぁっ！ 水35ℓ、炭素20kg、アンモニア4ℓ、石灰1.5kg、リン800g、塩分250g、硝石100g、イオウ80g、フッ素7.5g、鉄5g、ケイ素3g、その他少量の15の元素……チョコを作るには材料がおかし過ぎるって、この時点で気付いていればあんな事にはならなかったのに……！」

「人体錬成でもしたんですか？」

……

⋮

[illegible]

訳「男女の営み以外で命を生み出そうなぞ、  
烏滸がましいとは思わんかね？」

by キューハ"リアカチンモ

これで全√after③まで投稿終了です。

ここまでお読み頂きありがとうございます！

完全にネタはすっからかんなので、コレにて完結という事でε(・\_・)△(・\_・)∇(・\_・)



# 石上優はやり直す

---

著者 石神

発行日 2023 年 10 月 7 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/234169/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---